山陽新幹線関係
埋蔵文化財調査報告

春日市大字上白水字門田・辻田所在門田遺跡谷地区の調査

第 11 集

1 9 7 9

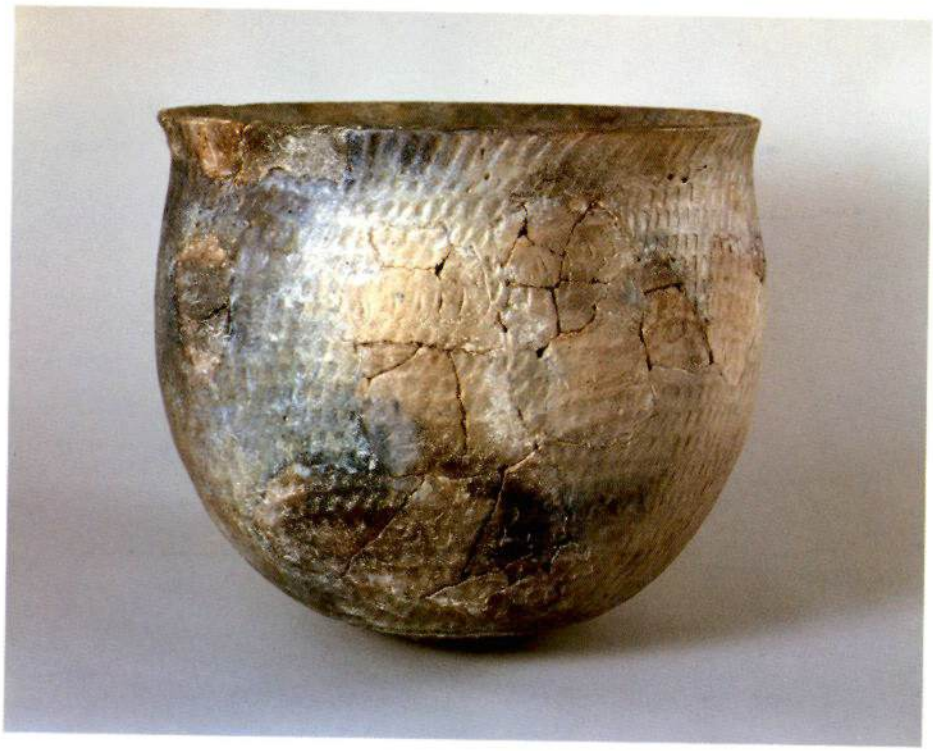
福 岡 県 教 育 委 員 会

山陽新幹線関係
埋蔵文化財調査報告

春日市大字上白水字門田・辻田所在

門田遺跡谷地区の調査

第 11 集



爪形文土器（上：¼，下：⅓）

序

この報告書は，福岡県教育委員会が日本国有鉄道の委託を受けて昭和46年度から実施している山陽新幹線建設路線内および博多総合車輛基地内の埋蔵文化財発掘調査の記録の一部であります。

今回の報告は，春日市大字上白水所在門田遺跡谷地区の調査報告を内容とするもので，「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第11集として公刊することになりました。

発掘調査の記録としては欠して満足のゆくものではありませんが，本報告書が文化財保護の一助となり，学術・研究にも活用いただければ、望外の喜びとするものであります。

なお，調査に対して御協力いただいた地元の方々をはじめ，関係各位の御援助と御配慮により本書を発刊することができましたことを，心から感謝申し上げます。

昭和54年3月31日

福岡県教育委員会
教育長　浦　山　太　郎

例　　言

1. 本書は，昭和47年７月14日から昭和49年６月３日までに福岡県教育委員会が，日本国有鉄道下関工事局から委託されて，山陽新幹線建設のため破壊される埋蔵文化財を発掘調査した11冊目の報告書である。

2. 本書の執筆分担は次のとおりである。

Ⅰ……井上裕弘
Ⅱ……井上裕弘
Ⅲ……木下修
Ⅳ－１……井上裕弘
Ⅳ－２……井上裕弘・木下修
小池史哲・荒武麗子
Ⅳ－３～５……井上裕弘・木下修
Ⅳ－６……木下修
Ⅴ－１……井上裕弘
Ⅴ－２……井上裕弘・木下修
Ⅵ－１・２……井上裕弘
Ⅵ－３……井上裕弘・木下修
小池史哲
Ⅶ－１……安田喜憲
Ⅶ－２……粉川昭平
Ⅶ－３……松本勗・林弘也
Ⅷ……井上裕弘

3. 本遺跡の花粉分析・執筆には広島大学安田喜憲助手，種子同定・執筆には大阪市立大学理学部粉川昭平教授，木材同定・執筆には九州大学農学部松本勗教授・林弘也助手の協力を得た。

4. 掲載の写真の撮影，実測図の作成および製図は，図版目次・挿図目次に示すとおりである。遺物写真撮影は九州歴史資料館石丸洋・岡紀久夫氏の協力を得た。なお，巻頭図版カラーは石丸洋氏の撮影による。
5. 本書の編集は，井上裕弘があたった。

本　文　目　次

門田遺跡・谷地区の調査

Ⅰ　調査の経過……1

Ⅱ　遺跡の概要……7

1. 遺　　構……7
2. 層位と遺物……7

Ⅲ　先土器・縄文草創期の遺物……11

1. 出土状態……11
2. 出土石器……12
3. 爪形文土器……23

Ⅳ　縄文・弥生時代の遺構と遺物……29

1. V字溝……29
2. 大溝Ⅰ……29
3. 大溝Ⅱ……104
4. 旧河川状遺構……107
5. ドングリ貯蔵穴……108
6. 包含層出土の石器……123

Ⅴ　古墳時代の遺構と遺物……125

1. 溝状遺構……125
2. 包含層出土の遺物……125

Ⅵ　歴史時代の遺構と遺物……136

1. 溝状遺構……136
2. 竪穴状遺構……136
3. 包含層出土の遺物……141

Ⅶ　自然科学系の調査……149

1. 門田遺跡谷地区花粉分析結果報告…… 149
2. 春日市大字上白水門田遺跡谷地区出土の種子類…… 155
3. 門田遺跡谷地区から出土した木材片の樹種名について…… 159

Ⅷ おわりに…… 162

図　版　目　次

本文対照頁

図版 1　(1)　伐採後の門田遺跡全景航空写真　西から（井上裕弘撮影）……1
　　(2)　谷地区全景航空写真　東から（井上撮影）……1
　2　（上）谷地区の予備調査全景（井上撮影）……1
　　（下）谷開口部で検出された大溝Ⅰ（井上撮影）……1
　3　(1)　Ｇ８区東西トレンチ（予備調査）全景（井上撮影）……1
　　(2)　検出されたＶ字溝（井上撮影）……1
　4　(1)　Ｇ９区の大溝Ⅰ内流木出土状況　1（予備調査）（井上撮影）……1
　　(2)　Ｇ９区の大溝Ⅰ内流木出土状況　2（予備調査）（井上撮影）……1
　5　(1)　Ｇ９区の大溝Ⅰ内流木出土状況　3（予備調査）（井上撮影）……1
　　(2)　夜臼式土器出土状態（井上撮影）……1
　6　(1)　Ｇ９区東西トレンチ全景（予備調査）（井上撮影）……1
　　(2)　G10区で屈曲する大溝Ⅰ（予備調査）（井上撮影）……1
　7　(1)　谷頭地区トレンチ全景　東から（井上撮影）……7
　　(2)　谷中央部・開口部トレンチ全景　西から（井上撮影）……7
　8　(1)　Ｄ９区西壁土層断面全景（井上撮影）……7
　　(2)　Ｄ９区の西壁土層断面近景（井上撮影）……7
　9　(1)　谷頭調査地区全景　南から（井上撮影）……8
　　(2)　谷頭調査地区全景　西から（井上撮影）……8
　10　(1)　谷開口部調査地区全景　南から（井上撮影）……8
　　(2)　谷開口部調査地区全景　北から（井上撮影）……8
　11　(1)　谷中央部調査地区全景　西から（井上撮影）……8
　　(2)　谷中央部で検出された大溝Ⅰ　東から（井上撮影）……8
　12　(1)　出土ナイフ形石器・尖頭状石器（岡紀久夫撮影）……12
　　(2)　出土台形様石器・台形石器（岡撮影）……14
　13　(1)　出土細石刃核（岡撮影）……16
　　(2)　出土掻器・彫器・石核（岡撮影）……21
　14　(1)　爪形文土器出土状態（木下修撮影）……23
　　(2)　爪形文土器底部出土状態（木下撮影）……23

15 (1) 爪形文土器（岡撮影）……23
(2) 爪形文土器　1（岡撮影）……23
16 爪形文土器　1　口縁部・胴部・底部（岡撮影）……23
17 (1) 爪形文土器　2（岡撮影）……25
(2) 爪形文土器　2　胴部（岡撮影）……25
18 （上）V字溝全景　北から（井上撮影）……29
（下）V字溝内土器出土状態（井上撮影）……29
19 (1) 谷頭調査地区航空写真　南から（井上撮影）……29
(2) 谷頭調査地区航空写真　東から（井上撮影）……29
20 (1) 谷頭地区の大溝Ⅰ内土器・流木出土状況（井上撮影）……30
(2) 谷頭地区大溝Ⅰ内土器集積状態　1（井上撮影）……30
21 (1) 谷頭地区大溝Ⅰ内土器集積状態　2（井上撮影）……30
(2) 谷頭地区大溝Ⅰ内土器集積状態　3（井上撮影）……30
22 (1) 谷頭地区大溝Ⅰ内土器・流木出土状態（井上撮影）……30
(2) 谷頭地区大溝Ⅰ内土器・木器・流木出土状態（井上撮影）……30
23 (1) 谷中央部調査区全景　東から（井上撮影）……30
(2) 谷中央部で検出された大溝Ⅰ（井上撮影）……30
24 (1) 谷中央部大溝Ⅰ内土器出土状態　1（井上撮影）……30
(2) 谷中央部大溝Ⅰ内土器出土状態　2（井上撮影）……30
25 (1) 谷中央部大溝Ⅰ内土器出土状態　3（井上撮影）……30
(2) 谷中央部で検出された大溝Ⅱと土器出土状態（井上撮影）……104
26 (1) 谷開口部（G10区）大溝Ⅰと流木出土状態（井上撮影）……30
(2) 大溝Ⅰ内流木出土状態（井上撮影）……30
27 (1) 大溝Ⅰ内木器（平鍬？）出土状態　1（井上撮影）……31
(2) 大溝Ⅰ内木器（平鍬？）出土状態　2（井上撮影）……31
28 (1) 大溝Ⅰ内木器（三又鍬）出土状態　3（井上撮影）……31
(2) 大溝Ⅰ内木器（二又鍬）出土状態　4（井上撮影）……31
29 (1) 大溝Ⅰ内木器（二又鍬）出土状態　5（井上撮影）……31
(2) 大溝Ⅰ内木器（三又鍬）出土状態　6（井上撮影）……31
30 (1) 大溝Ⅰ内出土の竪臼と土器集積状態（井上撮影）……31
(2) 大溝Ⅰ内木器（竪臼）出土状態　7（井上撮影）……31
31 (1) 大溝Ⅰ内木器（玉杓子）出土状態　8（井上撮影）……31
(2) 大溝Ⅰ内木器（有孔板状製品）出土状態　9（井上撮影）……31

32 (1) 櫛目状土器・曾畑式土器（岡撮影）……31
(2) 縄文晩期土器（岡撮影）……32
33 (1) 縄文晩期土器（岡撮影）……32
(2) 弥生前期土器（岡撮影）……64
34 出土石鏃（岡撮影）……36
35 (1) 出土尖頭状石器・石鏃（岡撮影）……38
(2) 出土石鏃（岡撮影）……38
36 (1) 出土石鏃（岡撮影）……42
(2) 出土石匙・削器（岡撮影）……44
37 (1) 出土削器・掻器（岡撮影）……45
(2) 出土石斧　1（岡撮影）……46
38 (1) 出土石斧　2（岡撮影）……46
(2) 出土石斧　3（岡撮影）……48
39 (1) 出土石庖丁（岡撮影）……51
(2) 石庖丁製作工程　1～4（岡撮影）……51
40 (1) 出土磨石・敲石・凹石・石皿状石製品（岡撮影）……53
(2) 出土砥石　1（岡撮影）……55
41 (1) 出土砥石　2（岡撮影）……55
(2) 出土土製品・石製品（岡撮影）……55
42 (1) 出土紡錘車（岡撮影）……55
(2) 出土磨製利器・ほか（岡撮影）……61
43 (1) 出土鋳型・有孔石製品・管玉・銅鏃（岡撮影）……62
(2) 出土石錐・土錐・ほか（岡撮影）……53
44 弥生前期土器（岡撮影）……62
45 弥生中期土器　1（岡撮影）……66
46 弥生中期土器　2（岡撮影）……68
47 弥生後期土器　1（岡撮影）……72
48 弥生後期土器　2（岡撮影）……75
49 弥生後期土器　3（岡撮影）……75
50 弥生後期土器　4（岡撮影）……78
51 弥生後期土器　5（岡撮影）……78
52 弥生後期土器　6（岡撮影）……87
53 弥生後期土器　7（岡撮影）……90

54　弥生後期土器　8（岡撮影）……90
55　弥生後期土器　9（岡撮影）……92
56　弥生後期土器　10（岡撮影）……95
57　出土木製品　1（岡撮影）……97
58　出土木製品　2（岡撮影）……100
59　出土木製品　3（岡撮影）……101
60　(1)　1号旧河川状遺構（井上撮影）……107
　　(2)　3号旧河川状遺構土層断面（南壁）（井上撮影）……108
61　(1)　1号ドングリ貯蔵穴（井上撮影）……108
　　(2)　2号ドングリ貯蔵穴（井上撮影）……112
62　(1)　3号ドングリ貯蔵穴（井上撮影）……112
　　(2)　3号ドングリ貯蔵穴内イチイガシ出土状態（井上撮影）……112
63　(1)　3・4号ドングリ貯蔵穴（井上撮影）……112
　　(2)　4号ドングリ貯蔵穴（井上撮影）……112
64　(1)　6号ドングリ貯蔵穴（井上撮影）……115
　　(2)　6号ドングリ貯蔵穴内脚付槽（未製品）出土状態（井上撮影）……115
65　(1)　8・7・10・11号ドングリ貯蔵穴群（井上撮影）……115
　　(2)　8・7号ドングリ貯蔵穴（井上撮影）……115
66　(1)　7号ドングリ貯蔵穴（井上撮影）……115
　　(2)　7号ドングリ貯蔵穴内土器出土状態（井上撮影）……116
67　(1)　7号ドングリ貯蔵穴全景（井上撮影）……116
　　(2)　完掘後の7号ドングリ貯蔵穴（井上撮影）……116
68　(1)　7号ドングリ貯蔵穴壁面に付着した植物繊維（井上撮影）……116
　　(2)　8号ドングリ貯蔵穴内堆積土と土器出土状態（井上撮影）……118
69　(1)　8号ドングリ貯蔵穴（井上撮影）……118
　　(2)　完掘後の8号ドングリ貯蔵穴（井上撮影）……118
70　(1)　9号ドングリ貯蔵穴（井上撮影）……119
　　(2)　完掘後の9号ドングリ貯蔵穴（井上撮影）……119
71　(1)　10・11号ドングリ貯蔵穴（井上撮影）……121
　　(2)　10号ドングリ貯蔵穴（井上撮影）……121
72　(1)　10号ドングリ貯蔵穴内イチイガシ出土状態（井上撮影）……121
　　(2)　完掘後の10号ドングリ貯蔵穴（井上撮影）……121
73　(1)　11号ドングリ貯蔵穴（井上撮影）……121

(2) 完掘後の11号ドングリ貯蔵穴（井上撮影）……121
74 ドングリ貯蔵穴出土土器（岡撮影）……77
75 ドングリ貯蔵穴出土木製品（岡撮影）……114
76 （上）古墳時代の溝状遺構（井上撮影）……125
（下）平安時代の竪穴状遺構（井上撮影）……136
77 包含層出土土師器　1（岡撮影）……125
78 包含層出土土師器　2（岡撮影）……127
79 (1) 包含層出土土師器　3（岡撮影）……130
(2) 包含層出土須恵器（岡撮影）……132
80 竪穴状遺構出土土器　1（岡撮影）……137
81 竪穴状遺構出土土器　2（岡撮影）……140
82 包含層出土瓦（岡撮影）……141
83 (1) 包含層出土陶器・土師器（岡撮影）……144
(2) 包含層出土磁器（岡撮影）……144
84 包含層出土木製品（岡撮影）……147
85 谷地区の花粉顕微鏡写真　1（安田喜憲撮影）……149
86 谷地区の花粉顕微鏡写真　2（安田撮影）……150
87 谷地区出土種子（粉川昭平撮影）……155
88 谷地区出土木材顕微鏡写真　1（松本勗・林弘也撮影）……159
89 谷地区出土木材顕微鏡写真　2（松本・林撮影）……159
90 谷地区出土木材顕微鏡写真　3（松本・林撮影）……159
91 谷地区出土木材顕微鏡写真　4（松本・林撮影）……159
92 谷地区出土木材顕微鏡写真　5（松本・林撮影）……160
93 谷地区出土木材顕微鏡写真　6（松本・林撮影）……160
94 谷地区出土木材顕微鏡写真　7（松本・林撮影）……160
95 谷地区出土木材顕微鏡写真　8（松本・林撮影）……160
96 谷地区出土木材顕微鏡写真　9（松本・林撮影）……160

挿　図　目　次

第 1 図　山陽新幹線の路線と博多車輛基地の位置（佐々木隆彦作成）……6
第 2 図　山陽新幹線関係主要遺跡分布図（木下修作成）……折込み
第 3 図　山陽新幹線博多車輛基地付近地形図及び遺跡分布図
（日本国有鉄道原図　木下作成）……折込み
第 4 図　門田遺跡調査地区全図（1/5,000）（日本国有鉄道原図　井上裕弘作成）……折込み
第 5 図　谷地区遺構配置図
（柳田康雄・井上・木下・小池史哲他実測，河鍋洋子製図）……8
第 6 図　谷地区トレンチ設定図（柳田・井上・木下・小池他実測，河鍋製図）……9
第 7 図　土層と遺物の対応関係図（井上作成）……10
第 8 図　ナイフ形石器実測図（木下・織笠昭・松村明子実測，木下製図）……13
第 9 図　尖頭状石器・台形様石器実測図（木下・織笠・松村実測，木下製図）……15
第 10 図　台形様石器・台形石器実測図（木下・織笠・松村実測，木下製図）……17
第 11 図　細石刃核実測図　1（木下・織笠・松村実測，木下製図）……18
第 12 図　細石刃核実測図　2（木下・織笠・松村実測，木下製図）……19
第 13 図　細石刃実測図（木下・栗島義明実測，木下製図）……20
第 14 図　削器・彫器・石核実測図（木下・織笠・松村・栗島実測，木下製図）……22
第 15 図　爪形文土器実測図　1（木下実測，製図）……24
第 16 図　爪形文土器実測図　2（木下実測，製図）……折込み
第 17 図　V字溝土層断面図（渡辺和子実測，河鍋製図）……29
第 18 図　大溝Ⅰ・Ⅱ土層断面図（三津井知廣・高田弘信実測，河鍋製図）……折込み
第 19 図　縄文土器実測図　1（荒武麗子実測，製図）……31
第 20 図　縄文土器実測図　2（荒武実測，製図）……33
第 21 図　縄文土器実測図　3（荒武実測，製図）……34
第 22 図　尖頭状石器実測図（木下実測，製図）……39
第 23 図　石鏃実測図　1（木下・荒武実測，木下製図）……40
第 24 図　石鏃実測図　2（木下・荒武実測，木下製図）……41
第 25 図　石匙・削器実測図（木下実測，製図）……43
第 26 図　削器・掻器実測図（木下実測，製図）……44
第 27 図　石斧実測図　1（木下実測，製図）……46

第 28 図　石斧実測図　2（木下実測，製図）……47
第 29 図　石斧実測図　3（木下実測，製図）……49
第 30 図　石斧実測図　4（木下実測，製図）……50
第 31 図　石庖丁実測図（木下実測，製図）……52
第 32 図　石錐実測図（木下実測，製図）……53
第 33 図　磨石・敲石・凹石・石皿状石器実測図（木下実測，製図）……54
第 34 図　砥石実測図　1（木下実測，製図）……56
第 35 図　砥石実測図　2（木下実測，製図）……57
第 36 図　石錘実測図（木下実測，製図）……58
第 37 図　紡錘車実測図（木下実測，製図）……59
第 38 図　土製円盤・石製円盤・土製品実測図（木下実測，製図）……60
第 39 図　磨製利器・その他の石器実測図（木下実測，製図）……61
第 40 図　その他の石器・銅鏃実測図（木下・井上実測，木下製図）……62
第 41 図　前期弥生式土器実測図　1（荒武実測，井上製図）……63
第 42 図　前期弥生式土器実測図　2（井上実測，井上製図）……64
第 43 図　前期弥生式土器実測図　3（荒武実測，井上製図）……65
第 44 図　中期弥生式土器実測図　1（荒武実測，井上製図）……67
第 45 図　中期弥生式土器実測図　2（荒武実測，井上製図）……68
第 46 図　中期弥生式土器実測図　3（荒武実測，井上製図）……69
第 47 図　中期弥生式土器実測図　4（荒武実測，井上製図）……70
第 48 図　中期弥生式土器実測図　5（荒武実測，井上製図）……71
第 49 図　後期弥生式土器実測図　1（井上実測，製図）……73
第 50 図　後期弥生式土器実測図　2（井上実測，製図）……74
第 51 図　後期弥生式土器実測図　3（井上実測，製図）……76
第 52 図　後期弥生式土器実測図　4（井上実測，製図）……77
第 53 図　後期弥生式土器実測図　5（井上実測，製図）……79
第 54 図　後期弥生式土器実測図　6（井上実測，製図）……80
第 55 図　後期弥生式土器実測図　7（井上実測，製図）……81
第 56 図　後期弥生式土器実測図　8（井上実測，製図）……82
第 57 図　後期弥生式土器実測図　9（井上実測，製図）……83
第 58 図　後期弥生式土器実測図　10（井上実測，製図）……84
第 59 図　後期弥生式土器実測図　11（井上実測，製図）……86
第 60 図　後期弥生式土器実測図　12（荒武実測，井上製図）……87

第 61 図　後期弥生式土器実測図　13（井上実測，製図）……88
第 62 図　後期弥生式土器実測図　14（荒武実測，井上製図）……89
第 63 図　後期弥生式土器実測図　15（荒武実測，井上製図）……91
第 64 図　後期弥生式土器実測図　16（荒武実測，井上製図）……92
第 65 図　後期弥生式土器実測図　17（荒武実測，井上製図）……93
第 66 図　後期弥生式土器実測図　18（荒武実測，井上製図）……94
第 67 図　後期弥生式土器実測図　19（荒武実測，井上製図）……95
第 68 図　後期弥生式土器実測図　20（荒武実測，井上製図）……96
第 69 図　後期弥生式土器実測図　21（荒武実測，井上製図）……98
第 70 図　木製品実測図　1（小池史哲実測，製図）……99
第 71 図　木製品実測図　2（小池実測，製図）……100
第 72 図　木製鏃類の計測区分（小池作成）……100
第 73 図　木製品実測図　3（小池実測，製図）……102
第 74 図　木製品実測図　4（小池実測，製図）……103
第 75 図　A群ドングリ貯蔵穴遺構配置図
（井上・石田広美・桑田和義実測，河鍋製図）……109
第 76 図　1～3号ドングリ貯蔵穴実測図（高田弘信実測，白水千賀子製図）……110
第 77 図　ドングリ貯蔵穴出土土器実測図　1（井上実測，製図）……111
第 78 図　4～6号ドングリ貯蔵穴実測図（高田実測，白水製図）……113
第 79 図　ドングリ貯蔵穴出土木製品実測図（小池実測，製図）……114
第 80 図　B群ドングリ貯蔵穴実測図（丸山康晴・三津井・高田実測，河鍋製図）……116
第 81 図　7号ドングリ貯蔵穴実測図（高田実測，白水製図）……117
第 82 図　8号ドングリ貯蔵穴実測図（丸山実測，白水製図）……118
第 83 図　ドングリ貯蔵穴出土土器実測図　2（井上実測，製図）……119
第 84 図　9号ドングリ貯蔵穴実測図（三津井知廣実測，白水製図）……120
第 85 図　ドングリ貯蔵穴出土石器実測図（木下実測，製図）……120
第 86 図　10・11号ドングリ貯蔵穴実測図（高田実測，白水製図）……122
第 87 図　土師器実測図　1（井上実測，製図）……126
第 88 図　土師器実測図　2（井上実測，製図）……128
第 89 図　土師器実測図　3（井上実測，製図）……129
第 90 図　土師器実測図　4（井上実測，製図）……131
第 91 図　須恵器実測図　1（井上実測，製図）……133
第 92 図　須恵器実測図　2（井上実測，製図）……134

第 93 図　埴輪実測図（井上実測，製図）……135
第 94 図　土製品・石製品実測図（木下実測，製図）……136
第 95 図　竪穴状遺構実測図（三津井実測，河鍋製図）……137
第 96 図　竪穴状遺構出土土器実測図　1（井上実測，製図）……138
第 97 図　竪穴状遺構出土土器実測図　2（井上実測，製図）……139
第 98 図　軒丸瓦実測図（井上実測，製図）……141
第 99 図　丸瓦・平瓦拓影　1（村上和美手拓）……142
第 100 図　丸瓦・平瓦拓影　2（村上手拓）……143
第 101 図　陶器・土師器・土師質土器・瓦質土器実測図（井上実測，製図）……145
第 102 図　磁器実測図（井上実測，製図）……146
第 103 図　石鍋実測図（木下実測，製図）……147
第 104 図　木製品実測図（小池実測，製図）……148
第 105 図　花粉分析試料採取位置図（安田喜憲作成）……150
第 106 図　谷地区花粉ダイアグラム（安田作成）……151
第 107 図　木製品竪臼出土状態（井上撮影）……161
第 108 図　ドングリ貯蔵穴断面模式図（井上作成）……164

表　目　次

表　1　山陽新幹線関係遺跡一覧表（井上裕弘作成）……折込み
表　2　先土器時代石器一覧表（木下修作成）……16
表　3　出土石器・土製品一覧表（木下作成）……37
表　4　石鏃形態一覧表（木下作成）……38
表　5　紡錘車一覧表（木下作成）……58
表　6　木製鍬類計測表（小池史哲作成）……101
表　7　土器計測表（井上作成）……140
表　8　谷地区堆積物花粉分析表（安田喜憲作成）……152
表　9　谷地区出土材一覧表（松本勗・林弘也作成）……160
表　10　ドングリ貯蔵穴出土の種子・木材一覧表（井上作成）……165

付　図　目　次

付 図 1　門田遺跡遺構配置図（柳田康雄・井上裕弘・木下修・佐々木隆彦・小池史哲・櫻井康治・肥山正秀・池辺元明・渡辺和子・桑田和義・高田一弘・市川富久・藤瀬禎博・石田広美・三津井知廣・丸山康晴・川村博・井上和人・小林義孝・高田弘信実測，高田製図）

付 図 2　谷地区遺構配置図（井上・木下・小池・櫻井・肥山・桑田・高田・市川・藤瀬・石田・三津井・丸山・小田雅文・森田徹，高田製図）

付 図 3　谷地区旧地形図（井上・小池・石田・三津井・高田実測，高田製図）

付 図 4　Ｃ９，Ｅ８～10，Ｇ８～10区南北トレンチ西壁土層断面図（井上・木下・櫻井・石田・桑田・渡辺・三津井・高田実測，河鍋洋子製図）

付 図 5　Ｃ９～Ｆ９区東西トレンチ土層断面図（石田・桑田・渡辺・三津井・高田実測，河鍋製図）

付 図 6　Ｈ９区東西トレンチ南壁，Ｈ８～10区南北トレンチ西壁土層断面図（三津井・森田・高田実測，河鍋製図）

門田遺跡・谷地区の調査

I 調査の経過

門田遺跡は，第19地点から第27地点におよぶ南北の２つに分れた舌状台地とその間の谷部の低地から構成された遺跡で，本報告書に掲載するのは谷地区の低地から検出された遺構関係の報告である。この谷地区は当初調査地点として登録されていなかった。しかし，昭和47年度の予備調査の結果，両台地に挟まれた地区にも台地上から発見された遺構と関連する遺構・遺物の存在が判明し，関連遺構として追加されたものである。

発掘調査は，昭和47年度の予備調査を含め，３次にわたり昭和49年５月30日で完了した。本地区の本調査は昭和48・49年度の２年次にわたって分割調査されたものである。谷地区の谷頭にあたる地区を昭和48年11月16日～12月26日，昭和49年２月４日～３月20日まで，谷地区の開口部にあたる地区を昭和49年２月20日～４月11日，谷地区の中央部にあたる地区を昭和49年４月８日～５月30日まで実施した（第４図)。調査は門田地区・辻田地区の調査とも一部並行して実施されたものであるが，ここでは谷地区の調査経過のみを日誌をくりながらたどってみたい。

昭和48年

11月16日　Ｂ・Ｃ区の草刈りを開始する。

11月17日　Ｃ９区に土層の状態を確認するためのトレンチを設定し，発掘を開始する。

11月23日　５層から木器・流木等が多数出土しはじめる。土器もかなり堆積している。

11月30日　５層までの土層図をとる。

12月１日　湧水がはげしく調査が難行する。

12月２日　６層から弥生後期の土器がまるで土器溜のように多数出土し，三又鍬の破片なども発見されたため今日から平面調査に入る。堆積土が２m近くと厚いため，また，１～３層まで遺構・遺物もほとんど検出されないので湿地ブルを入れ，３層までの堆積土を剝ぐ作業を行う。

12月５日　ブルの剝ぎ終った所から平面調査を進めていく。湿地性が強くブルも難行しているようだった。

12月10日　Ｃ９区の北半部が５層上までほぼ掘り上がる。須恵器・土師器・弥生後期土器など

がかなり出土しはじめる。

12月18日　このところＣ８・Ｄ５・６区の実測作業・写真撮影が忙しい。

12月20日　ブルの作業がほぼ終りにかかる。

12月26日　今日で発掘を中止し，冬休みに入る。

昭和49年

２月４日　作業を再開する。

２月10日　Ｂ９・Ｃ９―４・５・９・10区の５層上までほゞ掘り上がり，Ｃ９のほゞ中央部に大溝が存在することがわかる。幅10m以上あるようだ。また，この大溝は北側の台地にのぼることがＣ９―２，Ｂ９―23区の発掘区断面で観察できる。

２月12日　Ｃ９―５・10・15・20・25区にわたって，大溝とは別の東西に走る溝状遺構が検出される。

２月16日　Ｂ９・Ｃ９区の発掘区全体が５層上部までほゞ掘り上がる。

２月18日　今日から５層下部の掘り下げを行う。とりわけＣ９―２・７・12・17区あたりからはおびただしい土器・流木・種子などが発見される。大溝の北側の縁辺りに北側から流れ込んだ状態で堆積している。

２月20日　Ｃ９―12・17区の大溝の北側縁辺りから円形状の竪穴遺構が検出される。竪穴内には多くの小枝が落ち込んでいる。その間からはドングリの実が数個出土する。今日から並行して谷地区の開口部の調査にも入る。

２月22日　Ｃ９―７区から竪臼が発見される。

２月25日　Ｃ９―24区の５層下部から手捏土器多数が一括して出土する。また，Ｃ９―13・18区からは不整形の竪穴状遺構が検出され，竪穴内から脚付槽を思わせる未製品が発見される。

２月28日　大溝の南側の東西に走る溝が掘り上がる。溝内からは糸切り土師器や青磁片が発見され中世の溝であることがわかる。また，並行して行っている開口部の調査では，予備調査で確認されていた南北に走る溝がほゞ露出され，Ｇ10―10区で東側に曲折する事が判る。従って谷地区の大溝と続く可能性が高い。

３月２日　谷頭地区が今日でほぼ掘り上がる。また，Ｃ９―７・12区から発見された多量の土器の露出作業を行う。また，開口部のＩ８～10区にトレンチを設定する。

３月６日　Ｃ９―７・12区から発見された多量の土器・木器等の露出・清掃作業が終り，午後から写真撮影を行う。

３月７日　昨日に続き写真撮影を行う。

３月８日　航空写真をとるための清掃を行う。

３月９日　航空写真をとる。

３月11日　Ｃ９―７・12区から発見された多量の土器・木器等の取り上げ作業を開始する。ま

るで潮干刈りのようである。また開口部のＧ８～10区の発掘も本格化してくる。

３月13日　今日でＣ９―７・12区の土器・木器等の取り上げが終る。整理箱200箱を越したようである。土器をのぞくとＣ９―７・12区から17区で発見されたドングリの実を含む同様の竪穴が２基検出された。ドングリの貯蔵穴のようである。これで同様の竪穴が６基発見されたことになる。また，７層からは弥生前期土器や細石刃核・ナイフ等の先土器時代の遺物も発見される。

３月14日　割付けを開始する。また，昨日，７層から先土器時代の遺物がかなり出土したので，土壌をフルイにかける作業も行う。

３月15日　午前中で割付けが終り，午後から平面実測に入る。

３月19日　午前中で実測が終り，午後からエレベーションをとる。

３月20日　エレベーション・旧地形測量を並行して行い，今日で谷頭地区の作業の全てが終了する。

３月25日　Ｉ９区の東西トレンチから２条の旧河川を思わせる溝状遺構が発見される。遺物は流木のみで時期は不明である。

３月28日　Ｉ８～10区の土層図をとる。今日でＧ８～10区がほぼ掘り上がる。谷頭地区の大溝とつづく可能性をもつ北走する溝はＧ９―２・７区付近で西側へ曲折していることが判る。それはＩ９区で発見された旧河川状遺構に注いでいるようである。また，Ｇ９―６区からはさらに北走する細い溝が発見され，溝内からは前期末の土器数点が出土する。その結果，位置的にも，並行して調査を進めている辻田地区西側斜面裾で発見されたＶ字溝に続く溝であることが判る。

３月29日　Ｇ10区大溝内７層下部から爪形文土器が発見された。従って，爪形文の出土層位と，さらに下部に包含されている可能性があるため一部を掘り下げる。

４月１日　今日から谷中央部（Ｅ８・Ｆ８区）の調査に入る。また，Ｇ８～10区の割り付けを開始する。

４月３日　割付けが終り，平面実測に入る。

４月９日　平面実測が終り，午後からエレベーションに入る。

４月10日　旧地形測量を開始する。中央部の発掘が進む。

４月11日　今日で開口部の実測が完全に終る。

４月19日　谷中央部のＤ８・Ｅ８・Ｆ８区の遺構面までの掘り下げが完了する。谷頭で発見された大溝のつづきが検出される。また，Ｆ８・９区から別の溝状遺構が検出された。

４月22日　セクションベルトを残し，大溝内の掘り下げを行う。まず，５層下部（黒色粘質土層）を剝ぐ。谷頭地区とくらべ全体に土器の量が少ない。相変らず湧水が多く調査が難行する。

4月25日　5層下部がほぼ掘り上がり，大溝の北側縁辺から円形・方形プランの遺構が検出される。

4月26日　その内の一つの半分を掘り下げた結果，谷頭部で発見されたドングリを貯蔵する竪穴と同様のものであることが判る。竪穴内からはドングリはもちろんのこと小枝多数と後期終末か最古式土師器を思わせる高杯の杯部と完形の小型壺が発見された。

5月7日　D9—23区6層中から木製杓子・二又鍬の半欠品が発見される。

5月10日　D9—12区で検出された竪穴内から黒色土器や土師器がかなり発見される。

5月15日　ドングリピットがほゞ掘り上がる。これで総数11基になる。ドングリピットの個別写真撮影を行う。

5月22日　今日でほゞ掘り上がり，全景撮影のための清掃を行う。

5月23日　午前中で清掃が終り，午後全景撮影を行う。

5月24日　午前中，部分撮影が終る。午後から旧地形測量を開始する。

5月25日　旧地形測量が終了する。7層土壌のフルイ作業を今日から行い，細石器や石鏃など多数が検出される。

5月27日　写真撮影の全てが完了する。割付けを開始する。

5月28日　割付けが終った所から平面実測に入る。

5月29日　実測がほゞ終了し，午後からエレベーション作業を実施する。

5月30日　今日で調査が完了する。

なお，谷地区の発掘調査並びに整理関係者は下記のとおりである。

福岡県教育委員会

総　括

教育長	森田　實(昭和47～52年度)	教育長	浦山　太郎(昭和52・53年度)
教育次長	西村　太郎(昭和47～52年度)	教育次長	岩下　光弘(昭和53年度)
文化課長	古川　善久(昭和47年度)	文化課長	森　英俊(昭和48年度)
文化課長	藤井　功(昭和49～53年度)	文化課長補佐	菅　隆(昭和47・48年度)
文化課長補佐	今井　岩男(昭和48年度)	文化課長補佐	平井　元治(昭和49年度)
文化課長補佐	野上　保(昭和50年度)	文化課長補佐	川崎　隆夫(昭和50・51年度)
文化課長補佐	武久　耕作(昭和51～53年度)	文化課長補佐	松岡　史(昭和53年度)

庶　務

庶務係長	姫野　博(昭和47年度)	庶務係長	前田　栄一(昭和47～50年度)
庶務係長	大渕　幸夫(昭和52・53年度)	主　事	小川浩一郎(昭和47年度)
主　事	植田　實(昭和48年度)	主　事	加藤　俊一(昭和49年度)

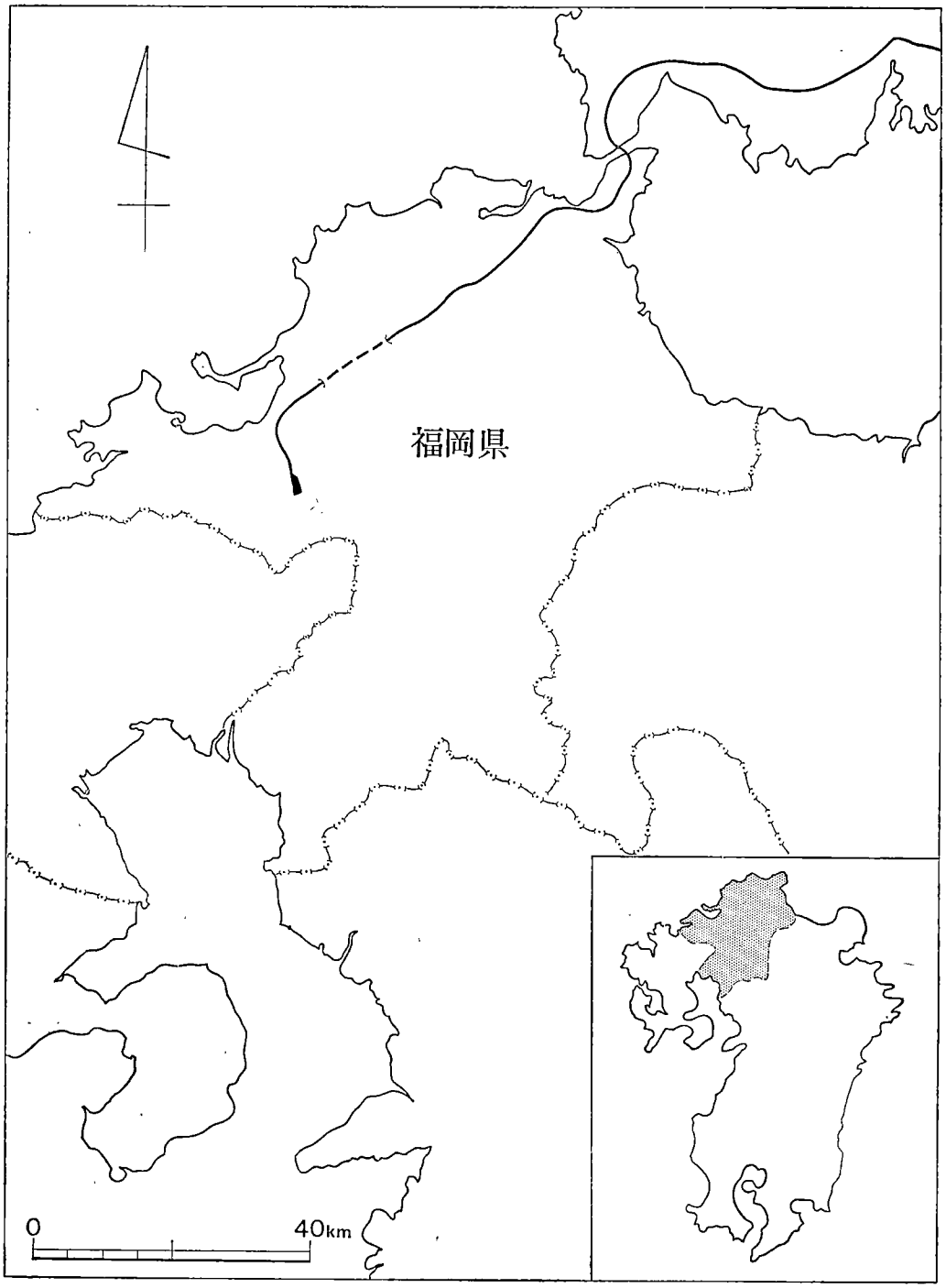
主　事	瀧　龍二(昭和50年度)	主　事	山本　文和(昭和51年度)
主任主事	大神　新(昭和52・53年度)	嘱　託	吉村　源七(昭和46～53年度)

発掘調査

九州大学教授	松本　勗	九州大学助手	林　弘也
大阪市立大学教授	粉川　昭平	宮崎大学助教授	藤原　宏志
広島大学助手	安田　喜憲		
文化課係長	松岡　史	文化課技術主査	鷺久　嗣郎
文化課調査第２係長	栗原　和彦	文化課調査第１係長	宮小路賀宏
文化課主任技師	柳田　康雄	文化課主任技師	井上　裕弘
文化課技師	木下　修	文化課技師	佐々木隆彦
文化課技師	小池　史哲	文化課嘱託	岩瀬　正信
文化課嘱託	宮崎　貴夫		
調査員	櫻井　康治		

調査補助員	肥山　正秀	池辺　元明	渡辺　和子	桑田　和義
高田　一弘	市川　富久	藤瀬　禎博	石田　広美	三津井知廣
丸山　康晴	小田　雅文	森田　徹	織笠　昭	川道　寛
高田　弘信				
整理補助員	山口　譲治	松村　明子	荒武　麗子	栗島　義明
整理作業員	富永　安代	田代チズ子	坂本　君子	笹渕チズ子
大迫　文子	持永ナツ子	穴井　栄子	中村　良技	中村　良子
勝野ユタカ	金堂　仁枝	藤野　和代	八尋恵美子	河鍋美智子
西　フジエ	金堂　融子	江藤千賀子	山下　幸子	植村　典子
勝野　素子	勝野　準子	手嶋　道子	川上ヨシノ	河鍋　洋子
白水千賀子	金堂　早苗			

以上の方々の他にも，日本国有鉄道下関工事事務所，同南福岡工事事務所，地元那珂川町，春日市在住各位の協力を得た。記して謝意を表したい。なお，国鉄関係者は「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第１・２・７・９集に示す通りである。　(井上)

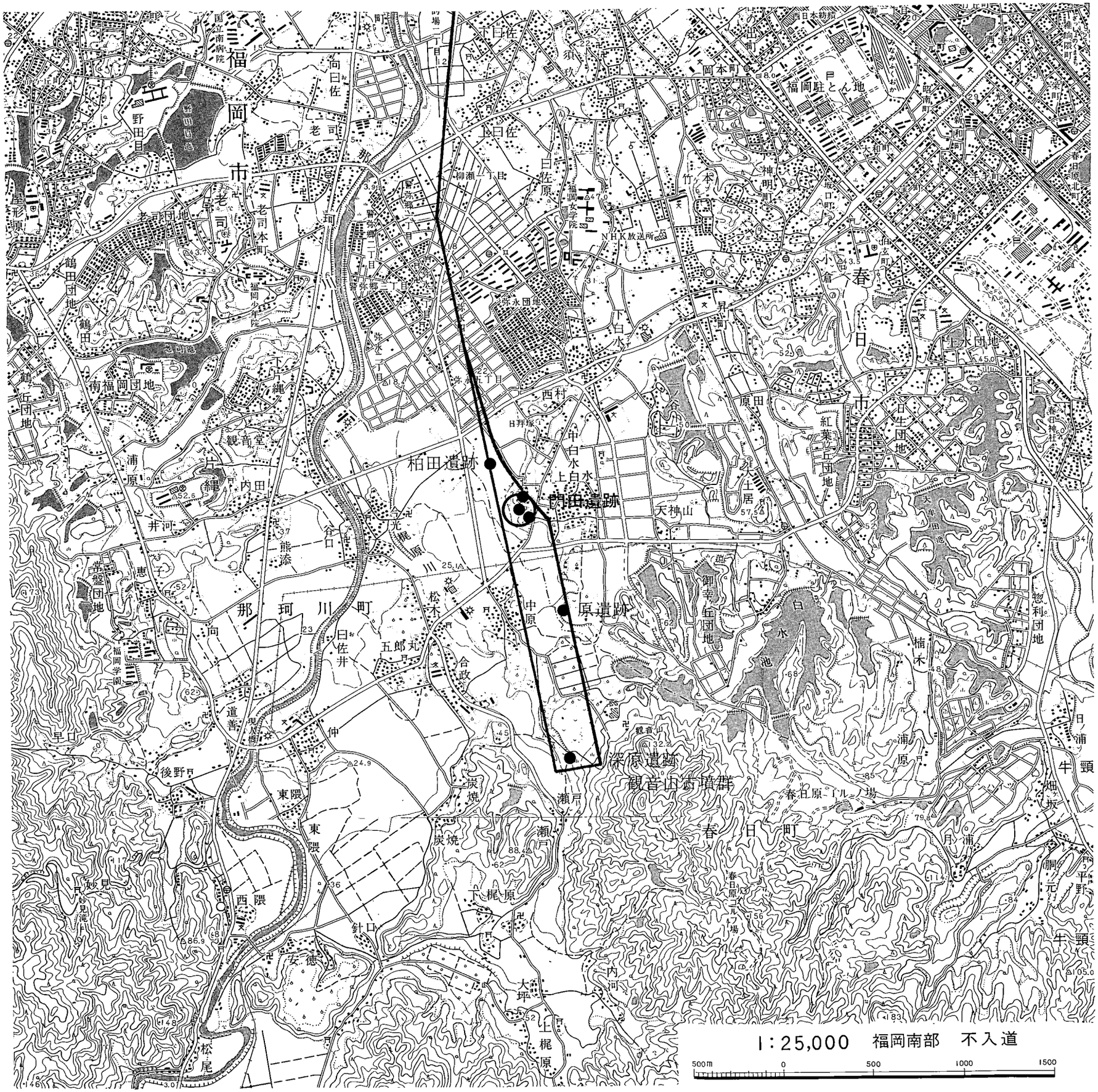


第 1 図　山陽新幹線の路線と博多車輛基地の位置(1/1, 000, 000)

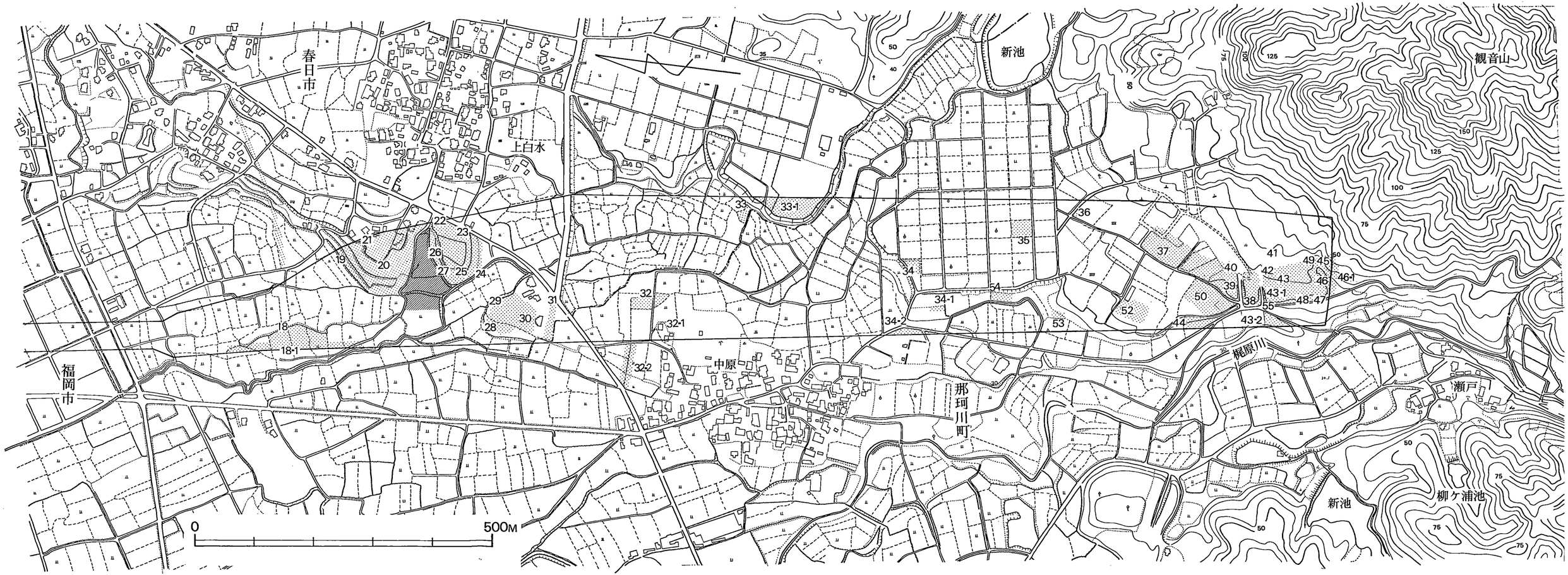
表 1　山陽新幹線関係遺跡一覧表

地点番号	遺跡名	所在地	内容	調査終了面積 46年度	47年度	48年度	49年度	50年度	51年度	52年度	53年度	備考	報告書
				m²	m²	m²	m²	m²	m²	m²	m²		
3	小田山墓地	鞍手郡鞍手町中山	近世墓地										1集
4	下松尾墓地	〃　〃　〃	近世墓地		—								〃
5	京尾遺跡	〃　〃　室木	中世配石遺構		—								〃
6	若宮条里	〃　若宮町	条里遺構		229								〃
6－0		〃　〃　金丸	近世墓地			—						調査前に工事のため改葬	〃
6－1	田尻遺跡	〃　〃　金丸・水原	古墳，歴史時代：住居跡		2,035		3,000						〃
6－2	別当塚	〃　〃　竹原	古墳		146							遺構，遺物なし	〃
6－3	竹原八幡塚	〃　〃　〃	古墳		16			300					
7	杉園遺跡	〃　〃　稲光	土師：散布地									遺構なし	1集
8		粕屋郡久山町山田	条里遺構		100							調査の結果，条里ではなかった	〃
18	柏田遺跡	春日市上白水	先土器～歴史時代：住居跡8軒，円形			790							4集
18－1			遺構，溝状遺構				2,100	1,000				昭和49年度は，別府大学に一部調査委嘱	〃
18－2	辻田遺跡	〃　〃	弥生，古墳時代：住居跡・木器							2,375	1,882		
18－3	井手ノ元遺跡	福岡市南区上曰佐								720			
19～27及び周辺	門田遺跡	春日市上白水	先土器～歴史時代：住居跡，貯蔵穴，甕棺墓，石棺墓，土壙墓，古墳5基		予備調査(4,500)	7,170	9,700	4,570				昭和48年度に門田2号墳の調査を平安博物館に委嘱	1・3・6・7・9集
28～31	下原遺跡	〃　〃	古墳時代：住居跡	2,784									3集
32	油田遺跡	筑紫郡那珂川町中原	古墳時代：散布地		690								〃
32－1	〃	〃　〃　〃	古墳時代：甕棺墓				300						〃
32－2	久保遺跡	〃　〃　〃	縄文，歴史時代：溝状遺構						700				
33		春日市上白水	古墳時代：散布地			197							2集
33－1	原古墳群	〃　〃	円墳3基，周溝墓8基，土壙墓4基			1,725	800	1,510					〃
	原遺跡		縄文時代早期，弥生時代甕棺墓									一部保存	
34		筑紫郡那珂川町中原	弥生時代：散布地		135							遺構・遺物なし	
34－1	鳥ノ巣遺跡	〃　〃　〃	先土器：縄文時代：散布地		267								
34－2						288						別府大学に調査委嘱	
35		〃　〃　〃	中世：散布地			200							
36		〃　〃　〃	近世：道標（かんをん道）			—							
37，39 50，55	井手ノ原遺跡	〃　〃　〃	中世：方形区画遺構，溝状遺構	1,814	1,515	1,500							2集
38，40～43 45～49 49-1-4，51	観音山古墳群 中原支群	〃　〃　〃	古墳31基	707	6,400	220							5集
43－1	深原遺跡	〃　〃　〃	縄文時代：石組炉跡32基，円形竪穴遺構		1,840	2,540						昭和47年度は別府大学に一部調査委嘱	8集
43－2						104							
46－1									1,021				
44		〃　〃　〃	中世：散布地		271								
52		〃　〃　〃	中世：散布地		452								
53		〃　〃　〃	古墳時代：散布地		123							遺構なし	
54		〃　〃　〃	弥生，古墳時代：散布地		150								
54－1		〃　〃　〃	古墳時代：散布地			95							
合計				5,305	14,369	14,829	15,900	7,380	1,721	3,059	1,882		

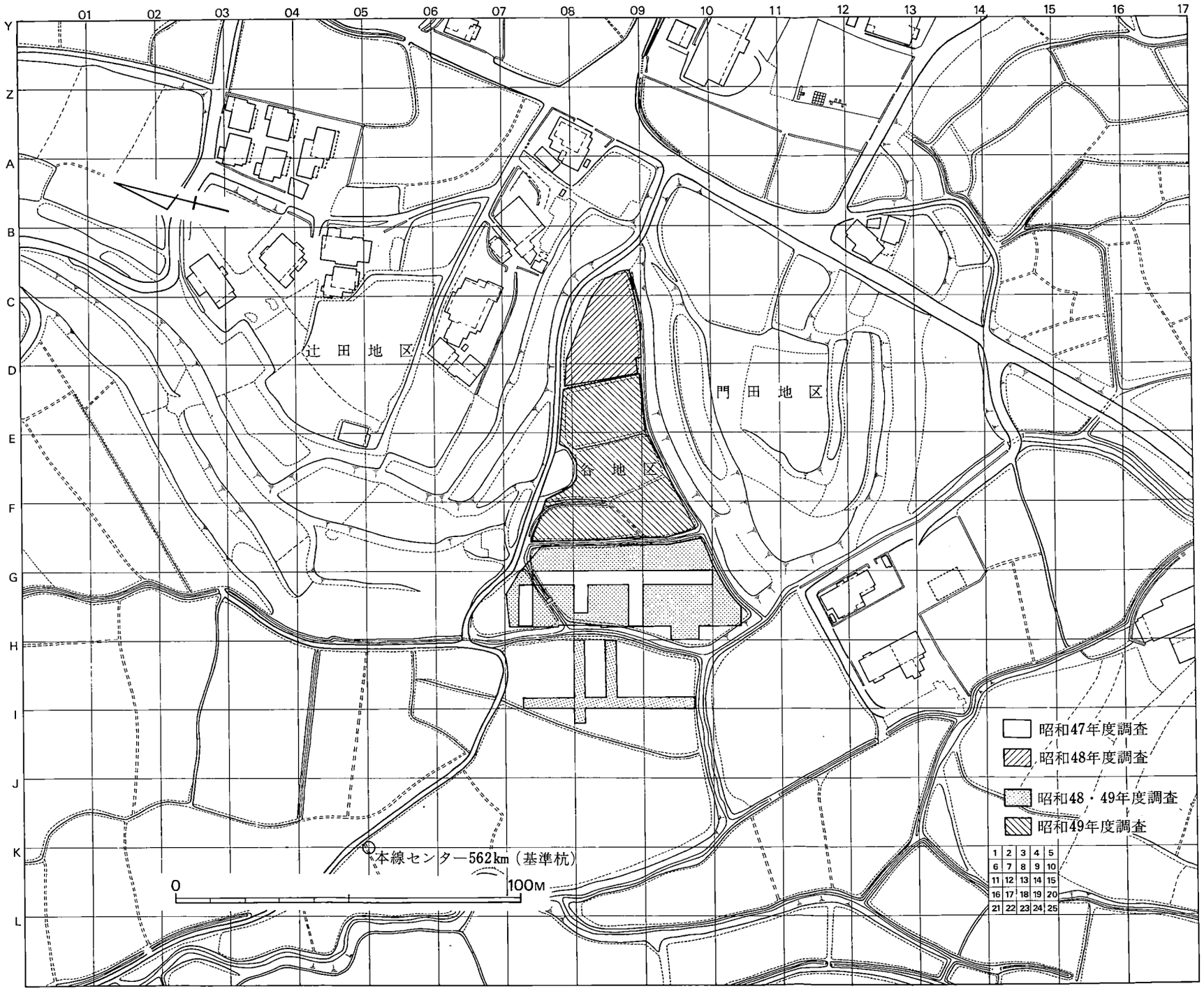
註 1．地点番号1，2は北九州市教育委員会，9～17は福岡市教育委員会が調査を担当した。
2．路線以外の付帯施設にかかわる調査地点は上表に含めてある。
3．面積欄に（－）で示したものは調査面積としてあげないが当該年度に調査したことを示す。



第 2 図　山陽新幹線関係主要遺跡分布図（1／25,000）



第 3 図　山陽新幹線博多総合車輛基地付近地形図及び遺跡位置図（1／5,000）（▨は本報告書掲載遺跡を表わす）



第 4 図　門田遺跡調査地区全図（1／1,500）

Ⅱ 遺跡の概要

(1) 遺構

検出された遺構は弥生・古墳・平安時代にわたる。

弥生時代の遺構は，前期末のV字溝1条，自然排水用水路を思わせる大溝2条，時期は明瞭ではないが旧河川状遺構3条，後期終末のドングリ（イチイガシの実）を貯蔵した竪穴11基が発見された。とりわけ，大溝の北側縁辺りから発見されたドングリを貯蔵した竪穴は貴重な発見となった。この種の発見例はこれまで全て縄文時代に属するもので，今回のこの竪穴は最も新しいものである。

11基のドングリ貯蔵穴群は大きく二群に別れる。谷地区の谷頭に位置するA群（1～6号）と，中央部に位置するB群（7～11号）である。特に残りの良い10号竪穴からは5斗1升1合のイチイガシの実が検出された。

古墳時代の遺構は，G10—10・G11—6・11区から検出された前期の溝状遺構1条で，G10—10区で大溝Ⅰに注いでいる。

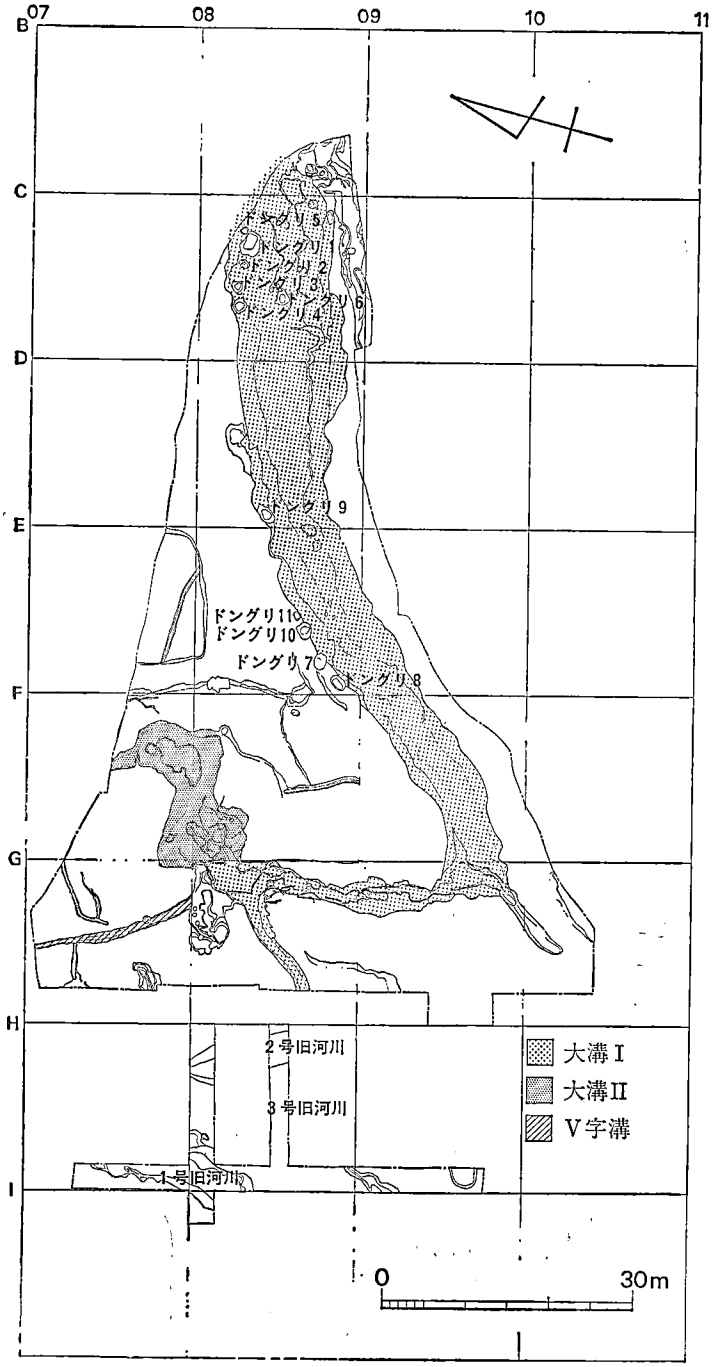
平安時代の遺構は，D9—12区で検出された竪穴状遺構1基である。

(2) 層位と遺物

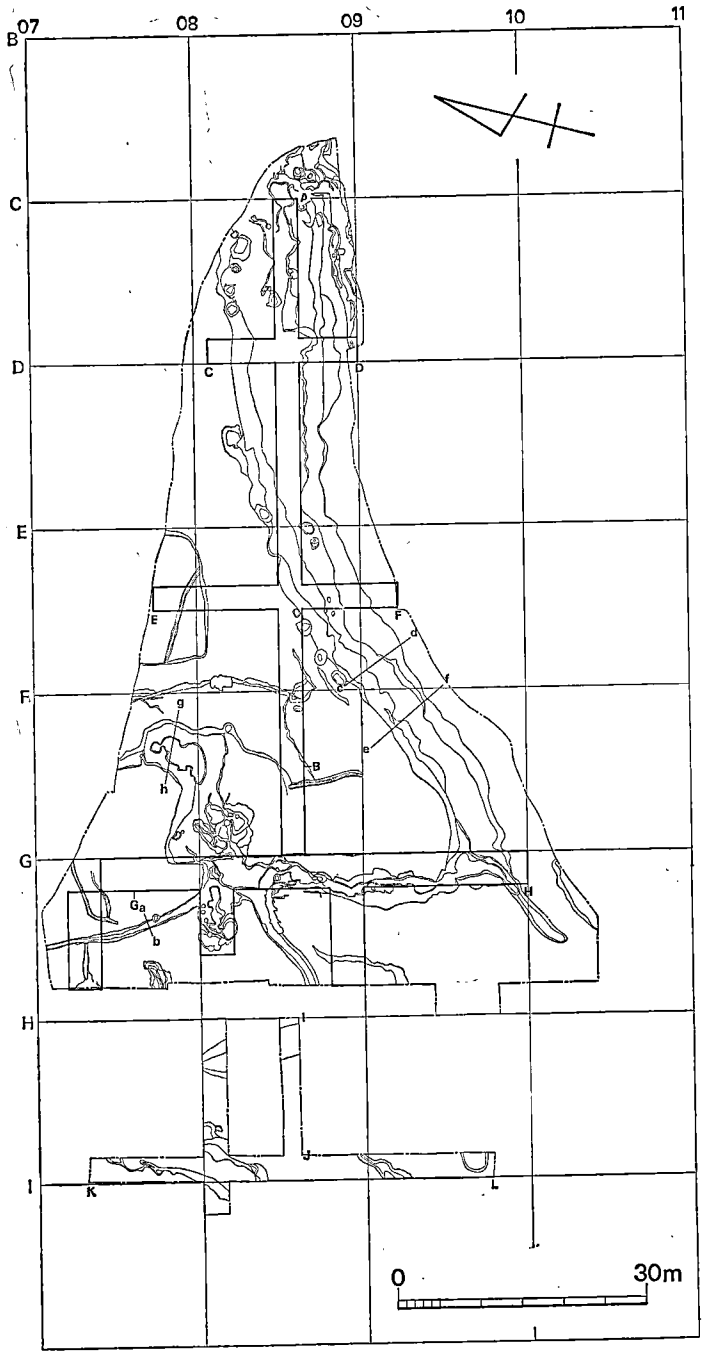
調査前，この谷地区は水田として利用されていた。谷の規模は，谷頭で幅約18m，開口部での幅約70m，奥行（開口部から谷頭まで）約90mを測る扇状をなす狭い支谷である。水田面の標高は谷頭で25.50m，開口部で23.40mで，その差は1.10mを測り，開口部に緩やかに傾斜している。

谷頭には湧水点があり，常に湧水があふれ湿潤な水田をなしている。その水は門田地区西端を巡る水流と合流し，北へ流れている。

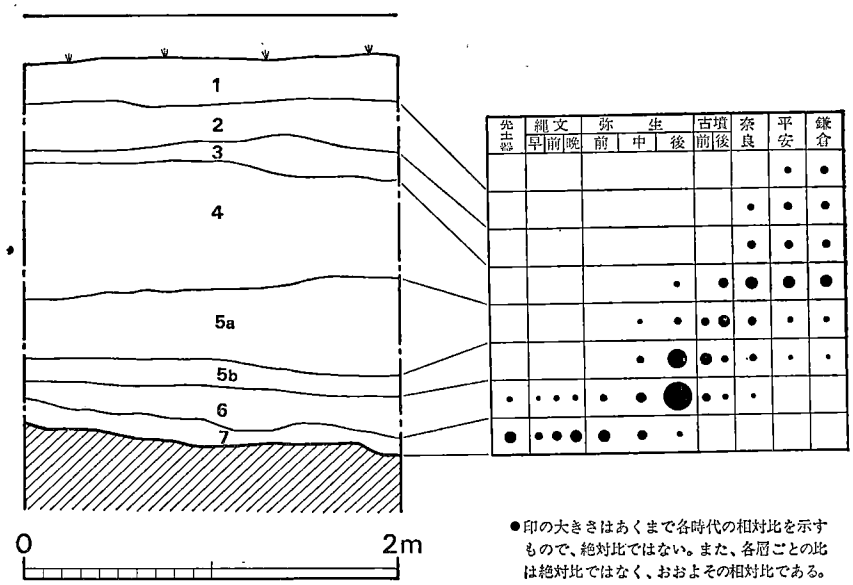
調査は，谷中央部に東西トレンチ，谷頭・中央部・開口部にそれぞれ南北トレンチを設定し，土層状態・遺構の状態の確認を行った（第6図）。土層の状態は開口部のH9に設定したトレンチで旧河川状遺構が検出された地区を除き，若干の違いはあるが，基本として第7図の柱状図に示す堆積状態をなしている。



第 5 図　谷地区遺構配置図 (1/900)



第 6 図　谷地区トレンチ設定図 (1/900)



第７図　土層と遺物の対応関係図

第１層は耕作土層（約20㎝），第２層は鉄分を多く含む黄褐色土層（約10～25㎝），いわゆる床土である。第３層は鉄分・マンガンを含む茶褐色土層(15～35㎝),第４層は灰褐色土層(25～50㎝)，第５層上部層は暗灰色土層（15～55㎝），第５層下部層は灰黒色粘質土層(20～30㎝)，第６層は茶褐色腐植土層（５～20㎝）で，一般にバフン層と呼んでいる。多量の腐蝕した植物遺体を含む層である。第７層は，青灰色砂層（５～40㎝）で，ところにより黄灰色を呈す所もある。第８層は暗灰色砂質土層で，いわゆる地盤をなす。

第１～７層までの堆積状態は地区により異なるが，第１～４層まではほぼ同様の厚さで堆積している。しかし，５層上部～６層までの堆積は全体として谷頭地区が最も厚く，谷開口部に行くに従って薄くなっている。７層は谷頭地区と開口部付近が厚く，中央部は薄い堆積を示している（付図４～６)。

谷地区の中央部を西走する大溝Ｉ内の堆積土は，基本として５層下部層～７層といえる。しかし，５層下部層が堆積した上面でも少なからず自然排水路としての流路をもっていたようである。それはG10区で検出された古墳時代前期溝状遺構に堆積する土層が暗灰色土であり，いわゆる第５層上部になる。従って，５層上部層が堆積するまでは少なからず大溝Ｉが流路としての凹みをもっていることになる。

また，弥生後期終末のドングリを貯蔵した竪穴内の堆積土は，最上層に第５層下部層が堆積し，完全に埋っている。それは５層下部層の下限の時期を決めることになる。

層位と遺物との対応関係は第７図に示す通りであるが，谷地区の土層堆積は純粋な意味での

遺物の序列を示さず，幅をもった遺物を同一層に包含する状態を示している。従って，層位的な遺物の取り扱いは困難といえる。しかし，基本としての土層の時期は遺物の相対比（第7図）をみても明らかのように大枠として把握できる。

第7層に含まれる遺物は，先土器時代の石器類，縄文時代早期の爪形文土器から前期・晩期の土器・石器類，弥生時代前期・中期の土器・石器類が主体をなす。しかし，後期の土器もわずかに含まれている。

第6層は，先土器時代～鎌倉時代までの遺物を含んでしまう。しかし，弥生後期の遺物が圧倒的で他はわずかであり，その主体は後期の土層といえる。

第5層下部に含まれる遺物は，弥生中期～鎌倉時代までのもので，その主体は弥生後期と古墳前期にある。

第5層上部に含まれる遺物は，弥生中期から鎌倉時代までのもので，全体として平均的である。しかし，各時代ごとでの比較をみると古墳時代後期と奈良時代に属すものが多く，古墳時代後期遺物のピークをなす土層といえる。

第4層に含まれる遺物は，弥生後期から鎌倉時代にわたる。遺物量としてはあまり多くないが奈良・平安・鎌倉時代各期のピークをなす層となってしまい時期の限定を困難にしている。

このことは第3～1層に含まれる遺物も同様といえる。しかし，第1・2層には鎌倉時代以降のものがかなり含まれるが，第3層にはほとんどなく，時期の上限が可能な層かもしれない。

（井上）

Ⅲ 先土器・縄文早創期の遺物

(1) 出土状況

谷地区で出土した先土器時代の石器は総数303点に達する。その他に多数の剝片・削片等が出土しているが時期を明瞭に把握出来ないので除いてある。器種・地区・層位別の出土量は表2の通りである。層位別では7層に260点と圧倒的に多く，次いで5層が18点とそれ以外は極端に少ない。地区別ではＦ９区81点，Ｆ10区63点，Ｄ９区37点，Ｅ９区35点の出土量を示し，遺構内としては大溝Ⅰ内に203点，大溝Ⅱ内に80点，包含層20点の出土を見る。土器としては爪形文土器が2個体出土した。しかし，第Ⅱ章に述べている様に出土した遺物はすべて谷への流れ込みであり，原位置を示してはいない。谷地区で最も古い遺構である大溝ⅠとＶ字構は弥生時代前期に形成されており，この段階での門田地区・辻田地区の谷を挾む両台地が削平され，本来包含層に存したこれら遺物が混入したものと思われる。

(2) 出土石器

≪ナイフ形石器（図版12—1，第8図）

38点出土した。F10区に12点，D9区9点で大溝Ⅱ23，包含層に各1の他は，すべて大溝Ⅰ内より出土した。

いずれも縦長の剝片を素材としたものであるがa類～f類に分類できる。

a1類（1・2）　a類は基本的に三辺から構成され，素材の形状から4つに細分できる。長さ4cm以上で幅広と大きいもので，他に比べて部厚な剝片を素材としている。両者とも剝片の打点側を基部とする。剝片の鋭利な一辺を除く，他の二辺にブランティングを施す。2は先端から一条のファシットが見られ，彫器として再利用されたものであろう。両者とも黒曜石製で2は乳白色を呈す。

a2類（3～10）　長さ3～4cmのものである。剝片の打点側をナイフ形石器の先端にする（4～6・8）と，基部側にする2者がある。4は赤褐色を呈すガラス質で，両端が尖鋭である。5は基部が平担で厚い。a1類と同様に鋭い一辺と反対側の側辺すべてと，他一辺にブランティングを施す。

a3類（11～15）　長さが3cmに満たない小型のナイフ形石器である。15以外はいずれも先端方向に剝片の打点部がくる。11は表面基部側に大きく原面を残す。13・15は幅7～9mmと特に細身で，両者とも先端部を欠損する。

a4類（16・17）　三角形に近い形状を呈す剝片を素材とし，やはり二辺にブランティングを施す。17は図よりそりがはげしい。

b類（18）　縦長剝片の一辺と基部周辺のみにブランティングを施したもので，基部は主要剝面側から折りとっている。尖い口嘴状の先端部を有す。

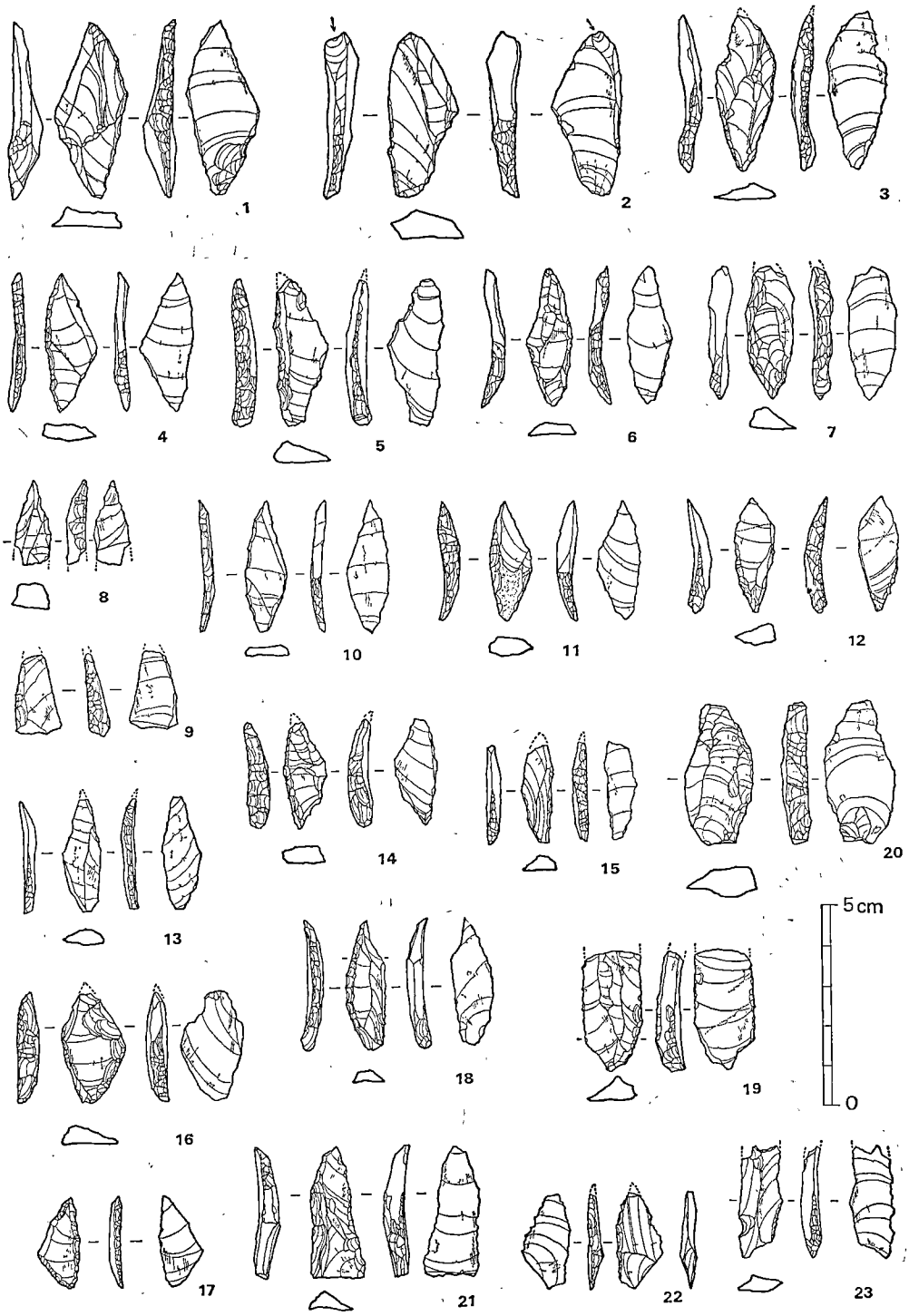
c類（19）　非常によく整った縦長剝片を素材としたナイフ形石器の基部破片。部厚な基部付近のみにブランティングを施す。鋭い両側縁は刃こぼれが顕著である。23もこれに近いものであろう。

d類（20）　縦長剝片の形状をほとんど変化する事なしに，一辺のみにブランティングを施している。茎部は表面からの剝離がみられる。

e類（21）　基部を欠損する資料である。先端部付近の一側辺と，片側は基部から中位までブランティングを施す。

f類（22）　形状は17に類似するが，ブランティングを施した一側辺と刃部に挾まれた辺が，表面からの折断のみのものである。

用いられた石材は7・10・13は流紋岩，18が安山岩でそれ以外は黒曜石製。



第 8 図　ナイフ形石器実測図（3/5）

≪**尖頭状石器**（図版12—1，第9図24～29）

7点出土した。いずれも溝Ⅰ内出土である。

a類（24・27・28）　縦長の剝片を素材とするもの。24は打点を基部とするもので，幅広で平坦な基部は，特に左側辺の調整から舌部を作り出す。一側辺は全辺にブランティングを施す。27は極めて整った幅広の縦長剝片を素材とする。先端・基部とも欠損するが，打面部を先端にしている。一側辺と基部付近にブランティングを施す。あるいは大型のナイフ形石器であろう。28は先端部を欠損するが幅広な縦長の剝片の打面部を基部にしたもので，基部周辺のみに荒い加工を施している。部厚な基部を有すことから本類に含めた。

b類（25・26・29）　横長の剝片を素材とする。25は1.1cmと部厚な剝片の二辺にブランティングを施し，舌状の基部断面を三角形に整形したものである。先端は鋭く尖がる。26は同様で，打瘤部は平坦剝離で除去している。29は特異な形状を呈すが，先端が尖り，基部に対して鋭利な一辺が傾斜している事から本類に含めた。基部端を挾んだ二辺にブランティングを施す。石質は24・25が安山岩で他は黒曜石製。

≪**台形様石器**（図版12—2，第9・10図30～40）

長軸に直交するほぼ平担な刃部に最大幅を有し，舌状に整形した基部に最大厚を持つ石器を一括した。総数20点出土した。形態から撥形を呈すものと，他に分類できる。

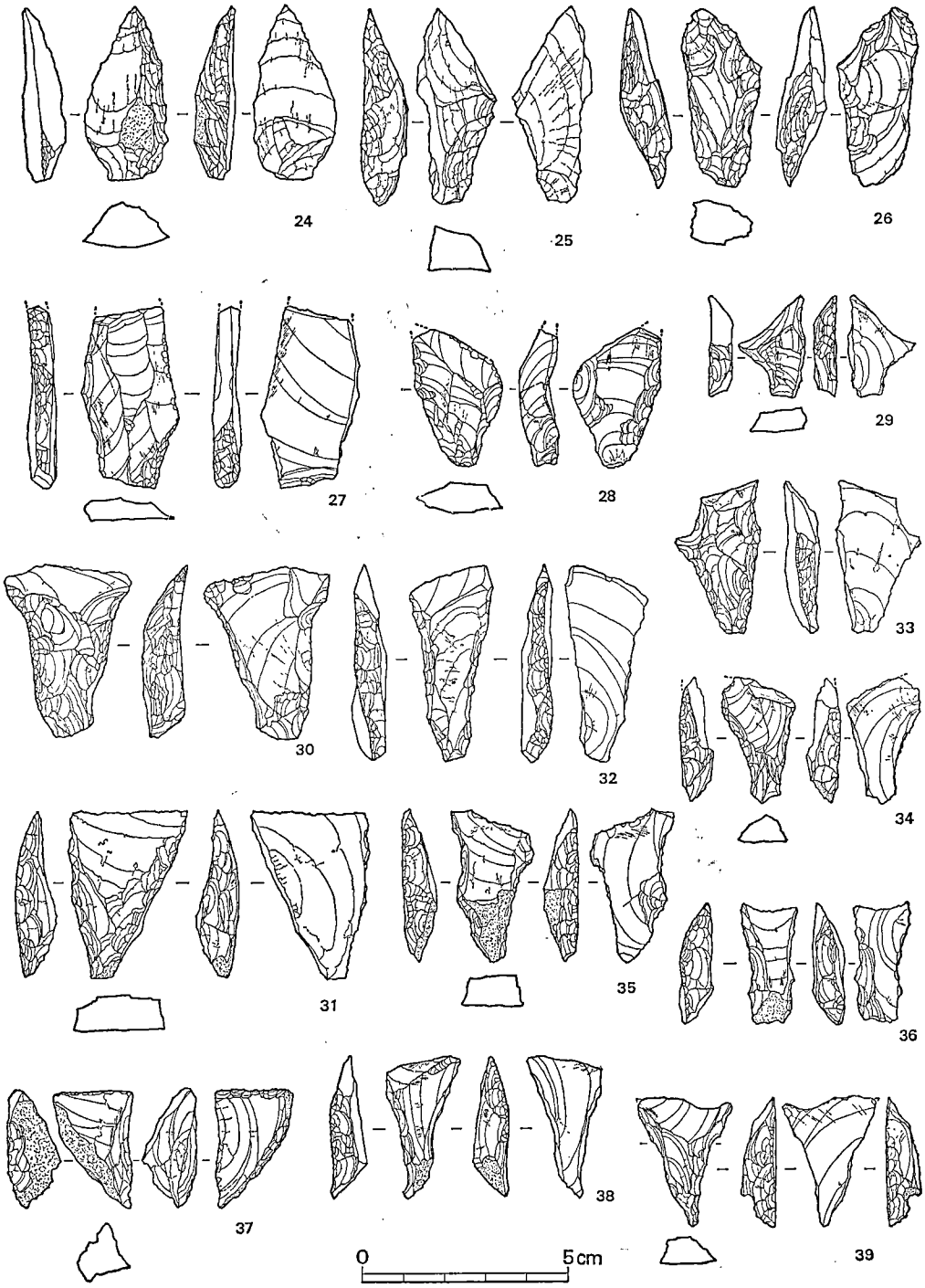
a1類（30～32）　撥形を呈し，長さが4cm以上のもの。30は幅広の剝片の末端部を刃部としたもので，基部は表面側から切断する。両側辺は表面から荒い剝離の後，裏面から階段状に近い加工を加える。31は横長剝片で，左は裏から，右は表面からのブランティングを施す。32は前2者に比べて細身のもので，若干斜刃である。両側辺にブランティングを施す。

a2類（43・45）　中型で43は部厚で幅広な剝片の打面側を刃部としたもので，右辺の加工により舌状の基部を作り出している。左辺は原面をそのまま用いる。45もやはり幅広の剝片を利用し，末端部を刃部とするもの。

b1類（33～36・38～41・44）　いずれも幅広な横長剝片を素材とし（33を除く），細く突出し，厚みのある基部を有し，その基部が「ノ」ないし逆「ノ」字状になるもので，基部が尖るもの（38・39）と，そうでないものに細分できる。いずれも基部を挾む両側辺にブランティングを施し，33を除いて基部に原面が残される共通性を有す。

b2類（37・42・46）　基部が尖り，その断面が三角形を呈すもの。37は横長剝片を用い，左辺は大きく残された原面に4～5回の細かい剝離を加え，右辺は裏面から折（切）断している。長軸に直交する刃部はスクレイパー状の細かい剝離がみられる。42も同形であるが，両側辺はブランティングが施される。刃部には微細な加工がみられる。46は正三角形を呈す。台形石器の形状に極似するが，基部が7mmと高い所から本類に含めた。

b3類（47・48）　片側辺を折断し，そのまま用い，他の辺はブランティングを施す。両者



第 9 図　尖頭状石器・台形様石器実測図（3/5）

とも刃こぼれが著しい。石材は31が流紋岩以外はすべて黒曜石で32・37・43はやや灰色を帯び産地を異にする。

≪**台形石器**（図版12—2，第10図49～64）

基本的に縦長剝片を横方向に用い，主軸に直交する刃部を有する薄手の石器（基本的に厚さ5㎜未満）である。総数16点出土した。

a類（49～53・55・56・59）ほぼ台形状を呈し，刃部を挾む二辺に裏面からのブランティングを施す。50のみは基部にも加工がみられる。台形石器の中でも最もよく整ったものである。

b類（54・57・58・60・61）撥形ないし，基部が尖る形状を呈すもので，61は特に細長く突出し，ドリルの可能性もある。

c類（62）　縦長の剝片で，片辺のみに刃潰し状の加工を施している。

d類（63・64）　不定形な剝片を利用し，二辺に刃潰し状の加工を施し，残された鋭利な縁を刃部としたもの。

表　2　先土器時代石器一覧表

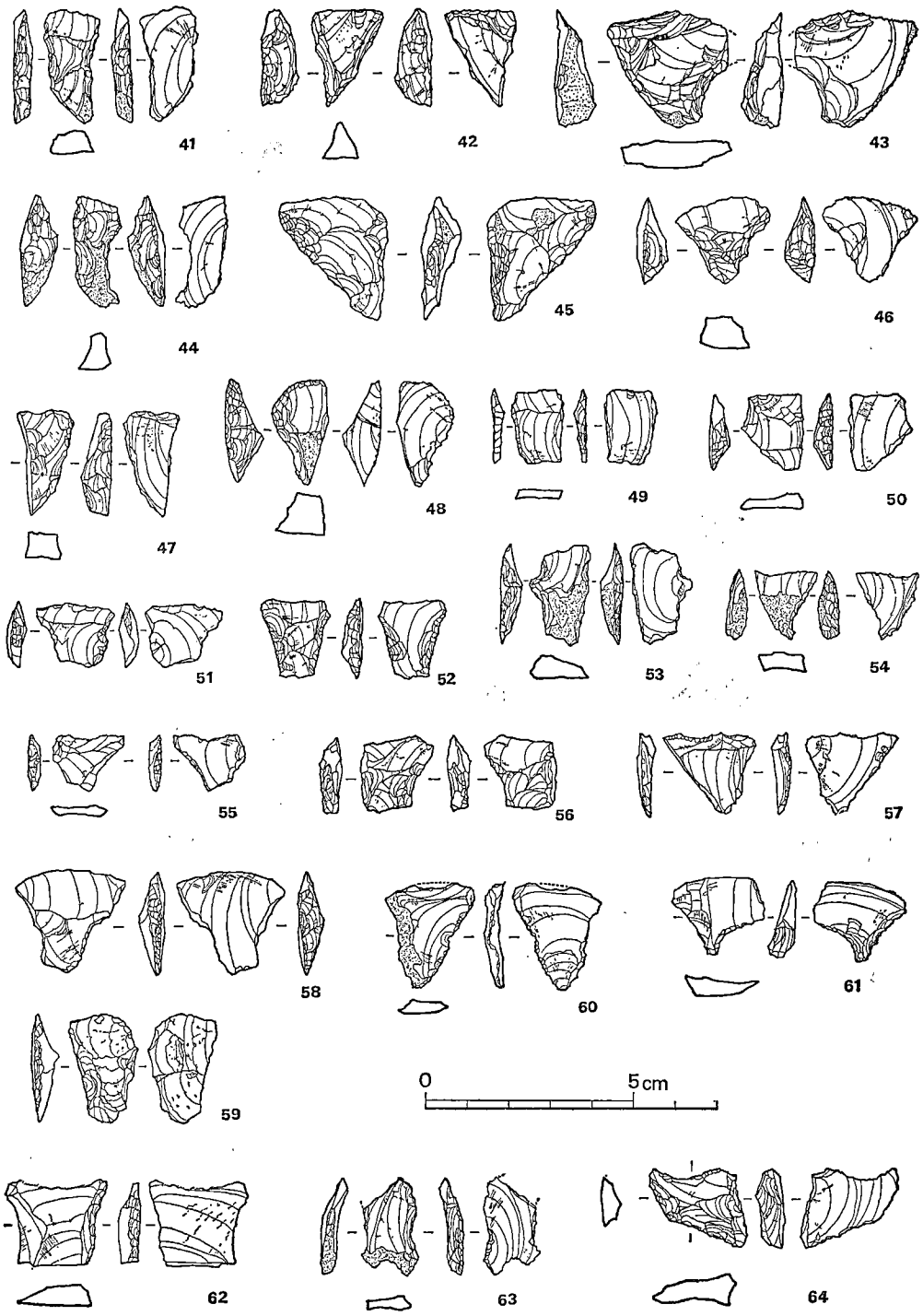
地区＼器種	形ナ石イ器フ	形台様形石・器台	細石刃核	細石刃	彫器	その他	計
B 9	1	2					3
C 9	3	11	3	2	5	4	28
D 9	9	5	3	14	2	4	37
E 9	7	6	13	7		2	35
10	2	1	1	4		1	9
F 8			1			1	2
9	1	1	26	52	1		81
10	12	7	26	13	1	4	63
G 8	1		1	3			5
9	1	1	19	8	1	2	32
10	1	1	3			1	6
11			1				1
H 9							0
その他							1
計	38	36	97	103	10	19	303
大溝 I	36	33	64	46	8	16	202
II	1	1	25	51	1	1	80
包含層	1	2	8	6	1	2	20
7層	35	30	78	98	4	15	260
6層	0	2	4		2	1	9
5層	2	2	9	1	3	1	18
4層			3			1	4
3層				1			1
2層							0
表土	1	2	3	3	1	1	11

石材は62のみが安山岩で他は黒曜石である。特に50は乳白色を呈し，大分県姫島産であろう。

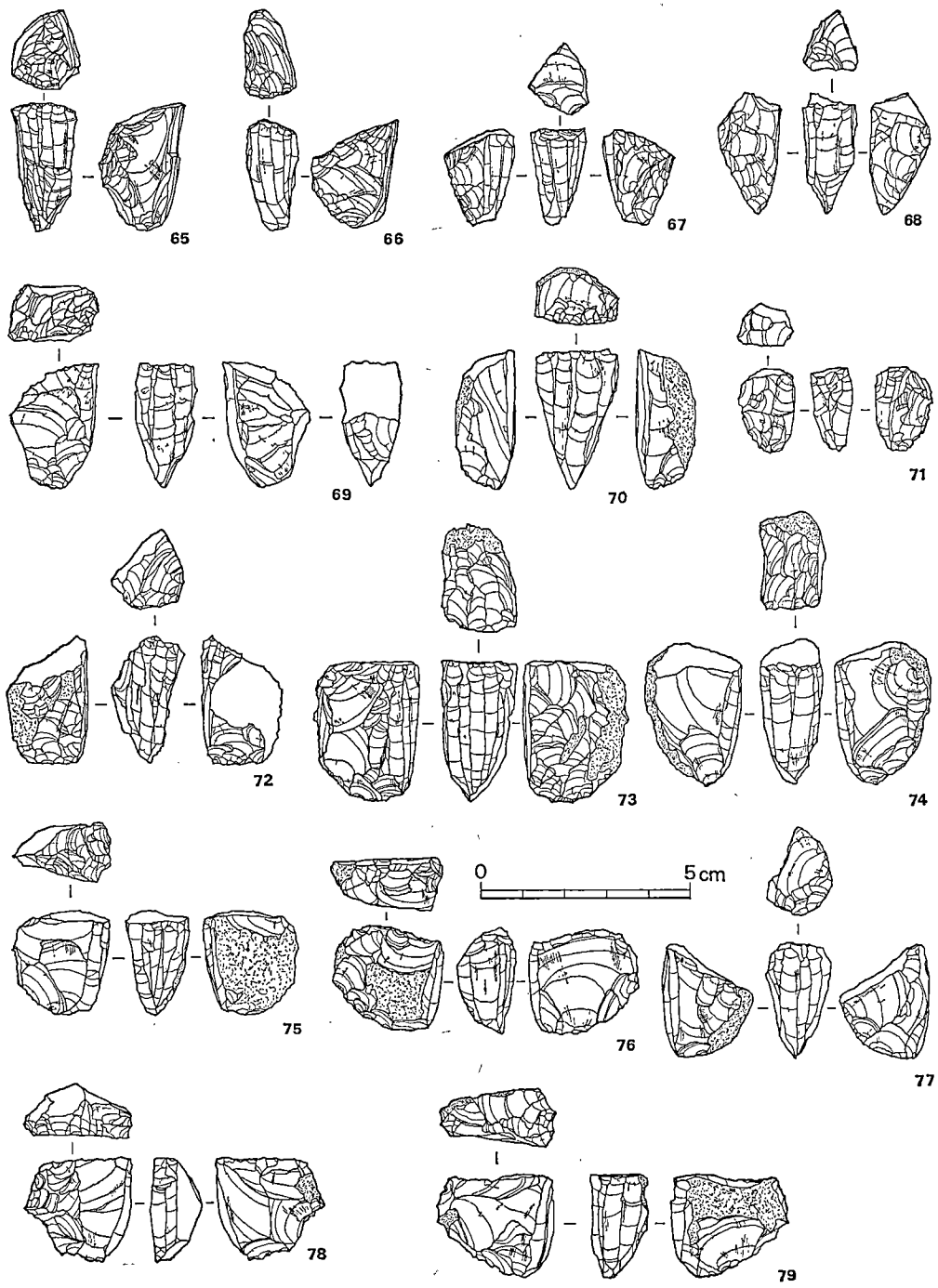
≪**細石刃核**（図版13—1，第11・12図）

総数97点と多量に出土した。大溝Iに64点，IIに25点，その他から8点の出土をみる。いずれも黒曜石製である。

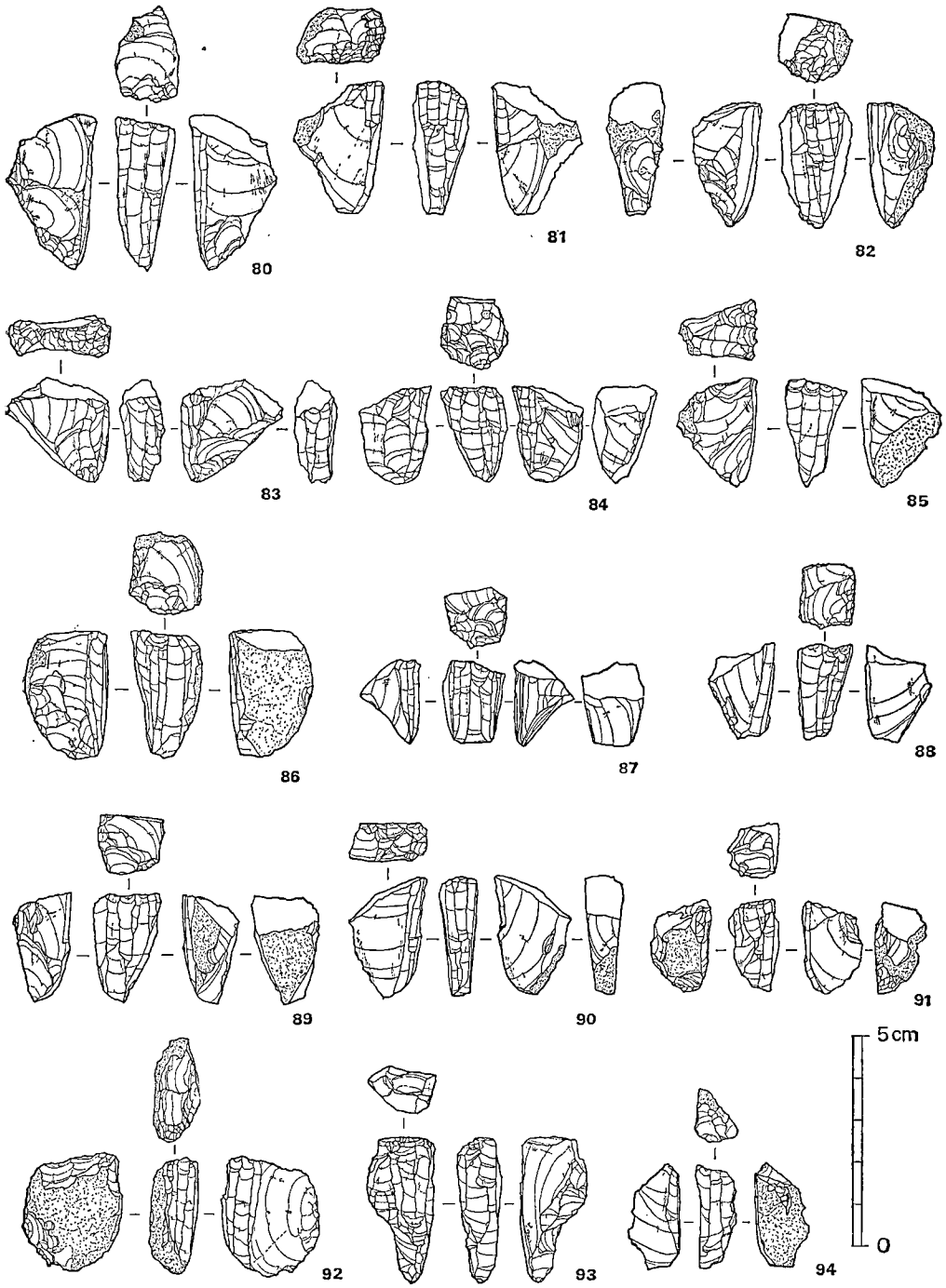
a1類（65～74・80～86・90・103）　いずれも細石刃剝出面と反対側に背縁を持つもので，



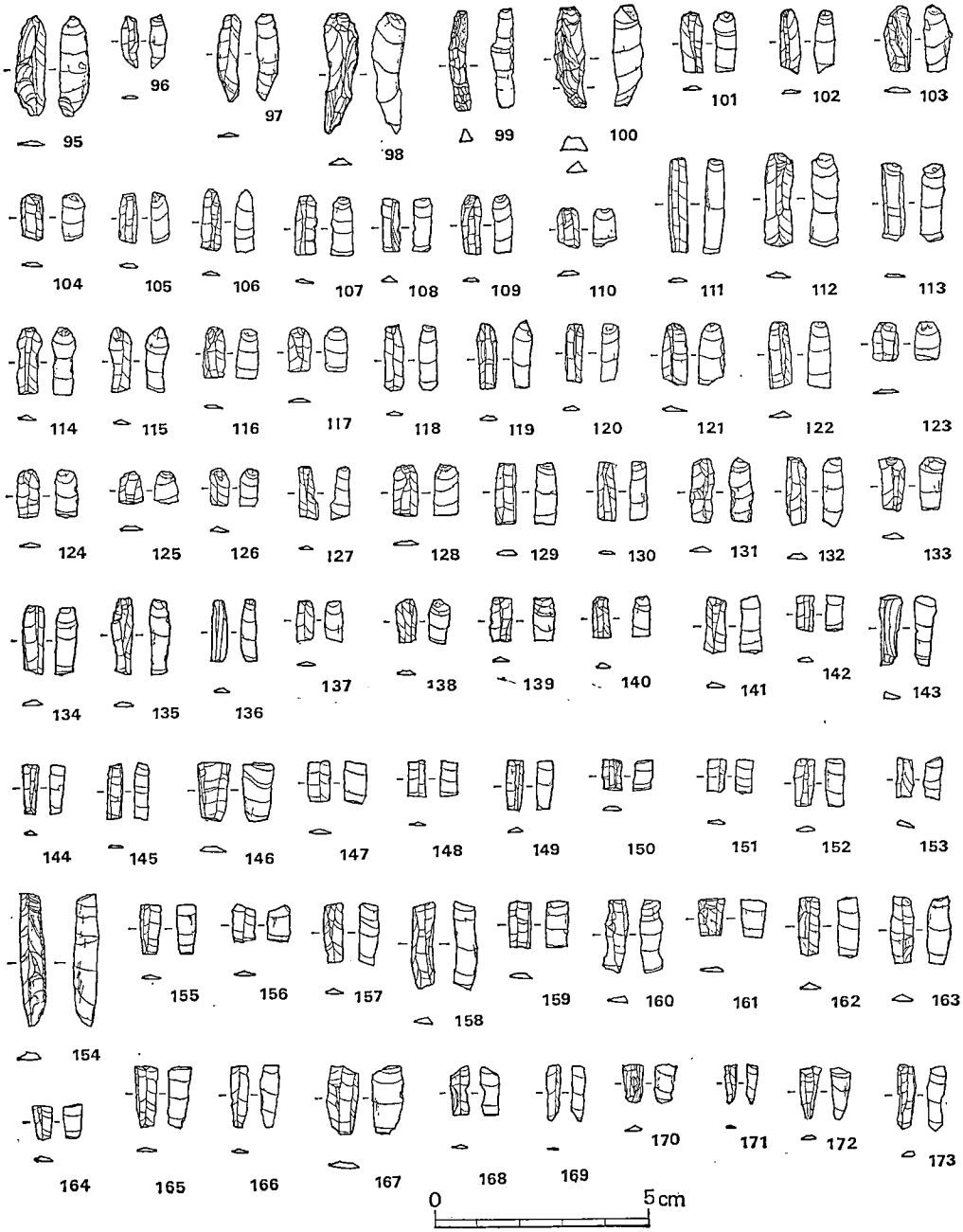
第 10 図　台形様石器・台形石器実測図 (3/5)



第 11 図　細石刃核実測図1 (3/5)



第 12 図　細石刃核実測図 2 (3/5)



第 13 図　細石刃実測図 (3/5)

側縁は背縁方向から調整を加える。いわゆる半舟底形の細石核である。80～86は片側面の下部付近のみに調整を加え，他の縁は主要剥離ないし原面が大きく残る。103は2箇所から細石刃を剥出し，打面調整は，両方とも剥出面側から丁寧に行なわれている。

a 2類（75～79）　細石刃の長さと打面の長さが等しいか，打面の方が長いもので，a 1類と同様な調整を加えている。背縁付近に原面をそのまま残すものが多い。76の左側面は掻器的な調整加工を施している。

b類（87～89）　角錐状の剥片を素材としたもので，背縁を持たない。側面はほとんど剥出されたままの姿であり，全体に小型の一群。

c類（92・94）　原材の表皮近くの剥片に打面を施設し，細石刃を剥出している。この種の石核は5点ほど類例がある。

d類（93）　不定形な剥片を利用し，最終段階で破棄されたもの。

≪細石刃（第13図）

総数103点で，大溝Ⅰから46点，Ⅱで51点，その他から6点出土した。

完形品は95～100の6点のみで，101～140が頭部から中間部，141～168が中間部，169～173が尾部である。99はいわゆる細石刃剥出第1スポールで，98も2ないし3回目に剥出した細石刃である。

≪掻・削器（図版13―2，第14図174～178・186）

174・175は幅広な縦長剥片の一辺に樋状の剥離を加え刃部としたもので掻器。176～178は一辺に細かい加工を加え刃部を形成する削器。177は縦長剥片を素材とし，その末端部に調整を施す。断面は三角形を呈す典型的な縦型掻器で安山岩製。

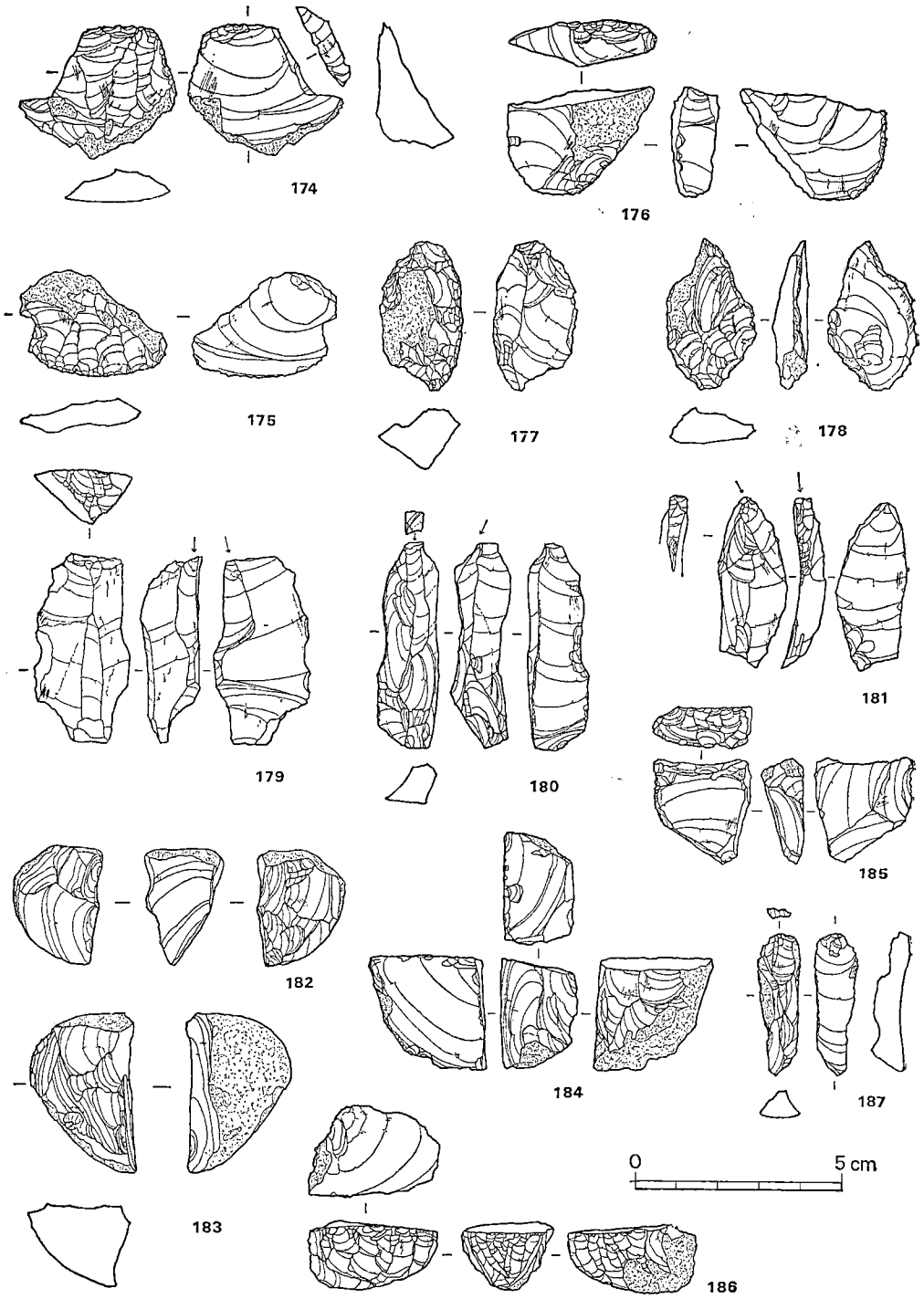
≪彫　器（図版13―2，第14図179～181）

179は厚手の縦長剥片を素材とし，打面部を切断後，主要剥離面側から打面調整を施し，彫器とする。180も縦長剥片の中央部に彫刻刀面を有す。剥片の両縁は刃こぼれの顕痕が残る。

≪石　核（図版13―2，第14図182～186）

いずれも細石核製作の工程を残す資料である。183は割られた面を打面とし，片側面調整を加え，182はその調整が両側面に及んでいる。184はまだ右側面と打面調整が施される前の資料で，185は打面調整が終了し，あとは細石刃を剥出するだけで棄てられたものであろう。

（木下）



第 14 図　削器・彫器・石核実測図 (3/5)

(3) 爪形文土器（巻頭図版，図版14～17，第１・２図）

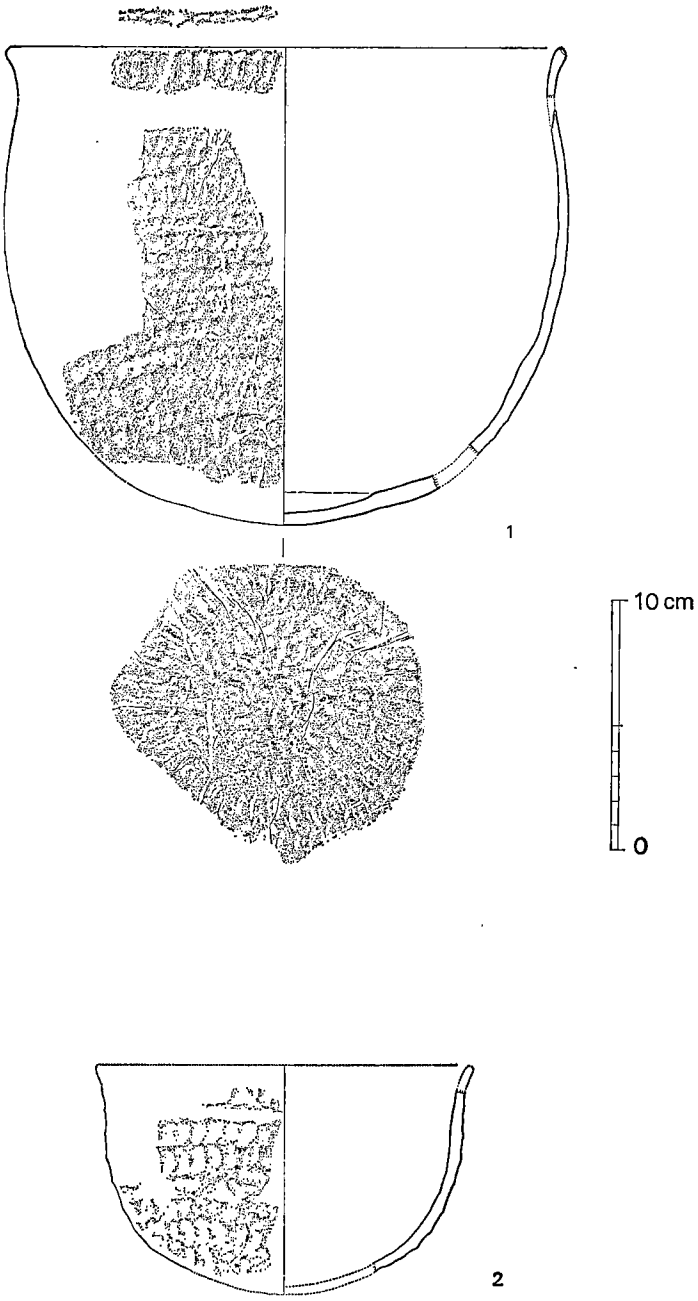
縄文時代草創期の爪形文土器の出土が注意されたのは，昭和47年度の谷地区の予備調査である。谷地区を南北に横断するＧ列の試掘溝のＧ９・10区の壁際７層に口縁部片及び胴部片が検出された（註１）。翌48年度に門田遺跡が全面調査の対象となり，谷地区もＦ・Ｇ８～10区の調査が行なわれた。その結果，Ｆ10—24区の７層最下部から，爪形文土器の胴部片と底部が検出され，前年の調査で出土した土器片と同一個体である事が推測された。また，別個体と思われる薄手の土器も伴出した（註２）。

出土地点はいわゆる大溝Ｉと呼ばれる自然排水路状の溝状遺構が北転する屈曲部付近で，一種の〝澱み〟となった箇所である。土器は，口縁部が西に底部が東側に，また，底を下にして出土した事から，破損し，横だおしの状態で破棄されたものであろう。この大溝Ｉの７層からは，多量のナイフ形石器・細石刃核等の先土器時代の遺物が検出されているが，この爪形文土器付近からは出土しておらず，調査時の観察でも単独出土の感が強かった。

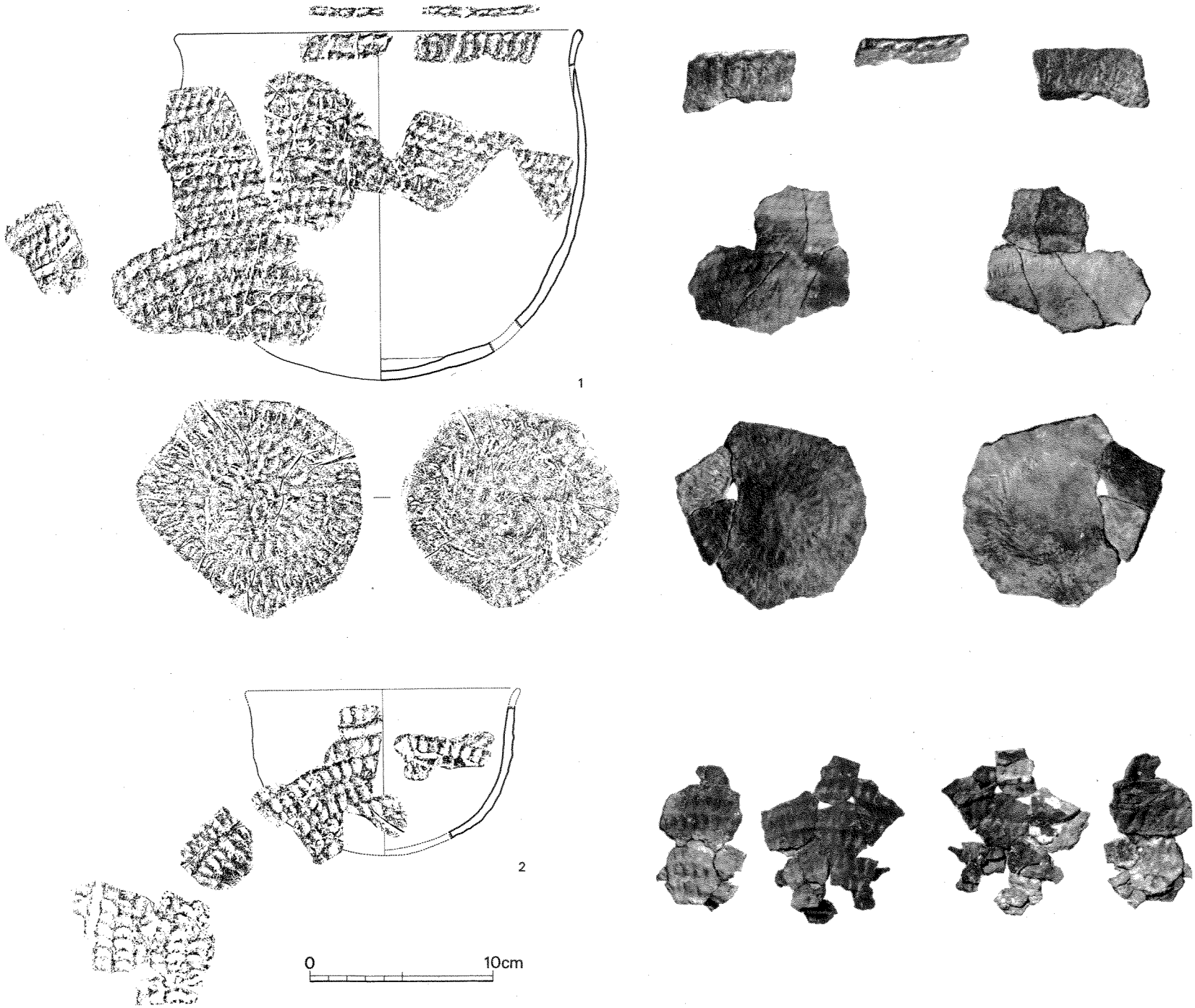
１は５片の口縁部と，胴部の約1/6の破片と底部で，各々は接合しない。大きな胴部破片からそのカーブを復原すると，最大径約22.6cm前後になり，下は内弯度の強さから胴下半であることが判る。また，それに接合する胴部の⅓近く巡る破片は，かるく外反する口縁部に到るカーブとほぼ一致し，ほとんど口縁直下になると推定される。また，径12cm前後とほぼ円形に残存した良好な底部のカーブを総合して復原したものである。

復原された土器は，口径22cm，器高19cm前後を測る深鉢形土器になる。口縁部は軽く外反し，胴部上半で最大径22.6cmを有す。張りの強い胴部は除々に窄まりながら胴下半へ移行するが，胴部上半部に最大径を持ちながら，胴下半はずんぐりとした重みを有しどっしりした安定感を備えている。底部は浅い丸底で，底中心から半径3.5mm程が乳房状とは言えないがやや突出している。後述するが，底部は径７cmの円盤を別に作って接合している。器壁は口唇部が若干肥厚し5.4mm，頸部付近が薄く３～４mm，胴部は５mm，底部は５～６mmを測る。

文様は口縁部以下底部まで全面に爪形文が施文される。特に底部全面に施文されている事は重要な知見であった。口唇部の左下り刻目状の施文は長さ７mm，幅２mm前後で，口唇端部をはみ出さないのが特徴である。この刻目状の文様は口縁内側に強く・深く残され，手前から施文工具をあてたと思われる。胴部の文様とは異質のものでなおかつ，胴部施文が終了した後の施文である。胴部は横帯状に左下り爪形文が連続的に施文される。胴部破片で19段看取され，間隔は非常に密で未施文部はない。また，横帯の爪形文は規則正しく，上下に連続していくものではなく，施文帯のずれがみられる。つまり横帯の間隔が10～６mmと一定していない事や，施文間に残される隆起帯が交差する箇所がみられる。これは，土器を回転させながら施文した事によるのであろう。底部施文は，底を上にした場合，胴部の文様と同一な形態を有している。



第 15 図　爪形文土器実測図 (1/3)



第 16 図　爪形文土器拓影 (1／3)

文様で爪形文と呼んだものにはａ・ｂ２つの種類がある。

ａは器面全体に横帯施文として看取され，幅５～６㎜前後の左下りの文様である。ｂは長さは５～８㎜で幅は0.5㎜と非常に繊細な「ノ」字状を呈す文様で，基本的にａの施文間に残された隆起帯に施される。間隔はａの倍以上空く。その他に，底部外面及び，内面に施文され，その順序はａ種の後から行なわれる。さて，この２つの文様施文具であるが，ｂの若干内湾し左下りの文様は真正の爪に誤りないであろう。次に，ａを良く観察すると幅５～８㎜の凹部は，上下が若干狭く，全体に丸味を帯びている。そして，すべて右側にやや深く左に浅くなる共通性がある。この事から篦状の施文具とは考え難く，繊細な右小指等の指頭を器面に斜めにあて，土器の右から左方向へ押圧して土器を時計と逆方向に回転させて施文する方法であったろう。

調整は外面はナデ，内面の上半はヨコナデ，口縁部付近はタテナデである。別作りの底部と接合面にはしぼり状の痕跡がある。胎土は良く精選された粘土を用い，焼成は良好。特に底部は固く焼きしまり，敲くと金属音を発する。色調は口縁部が黒褐色，胴部が灰褐色，底は鶯色を呈す。

２は胴部破片で，口縁部・底部片は出土しなかった。胴部片は大きく５片に分離されるが，各々は接合しない。器壁は４㎜強と非常に薄く，なおかつ，器肉が２～３枚に薄片化（厚さ１㎜前後）している為，復原は困難をきわめた。

接合された比較的大きな胴部片は，弯曲度からして下は底部に近い破片である事は疑いない。一方，上部についてはまったくの推定復原となるが，胴下半からの弯曲度，胴径から１に比べ小型の土器であり，最も上に位置する破片が若干外反ぎみになる点，口縁部直下であると推測した。復原すると土器は，口径15㎝前後，器高９㎝前後になり，器形は１と同様に口縁部が軽く外反し，〝サラダボウル〟状を呈す浅い鉢形土器である。胴部上半はやや直線的で，中上半から内弯度を強め，そして浅い丸底状の底部を有すものと思われる。

現状では，胴部に横帯のａ種爪形文が８段看取できる。爪形文は若干右上り，左下りで１と同様密に施文され，その間隔は５～11㎜まであるが，10㎜前後が基本となる。この横帯爪形文間は未施文部の隆起帯として，盛り上った様に残り，１より一層明瞭に器面の凹凸が目立ち，一種の文様的効果をあげている。爪形の文様は内面にも観察され，粘土帯接合部分に施されている。胎土には石英・長石・雲母を含み，色調は黒褐色を呈す。器外面には，煤が付着している。

爪形文土器について

得られた２個体の土器のうち，１の土器からその成形作業工程を示す痕跡がみられるので若干記しておきたい（第16図写真挿図）

土器は大きく口縁部片・胴部片・底部片と分けられる。口縁部は小破片で，幅の大小はある

がいずれも長さ2㎝弱で，その下端の表面が斜めに剝落している。胴部でも，破片の接合面の上・下端に斜めの剝落部が観られる。そして，内面の器面のほぼ2～3㎝間隔に凸部があり，それは剝落部の位置に一致する。このことから，厚さ4～6㎜，幅2～3㎝の粘土帯を積みあげて成形したものと思われ，成形は基本的に「粘土紐を用いた粘土帯積み上げ技法」の「B技法」（註3）ないし，隆起線文系土器についての佐々木洋治氏の研究による「b式接合法」に該当しよう（註4）。そして，上部に積み上げる粘土帯は内側へ粘りつけているようだ。

一方，底部は前述したように，径7㎝前後の円盤を別に作り胴下半と貼り付けている。この接合部は，内面で段がつき，斜めのしぼり痕（第16図c）がみられ，その上部にb種の爪形文を施す。この，内面b種の爪形文は胴部の接合面である（第16図b）にもみられる。

九州地方の爪形文土器を概観してみよう。現在まで長崎県福井洞穴の調査以来，泉福寺洞穴，上場遺跡等8ヶ所の遺跡が知られている。

長崎県佐世保市泉福寺洞穴は昨年まで9次にわたる調査が行なわれ，隆起線文より古い豆粒文土器の検出や，豆粒文土器から押型文土器に至る変遷が層位的及び遺物の拡がり（人間行動の軌跡）とともに，綿密に把えられている。爪形文土器も比較的豊富に出土し，その資料を基に第Ⅰ類～第Ⅴ類までに分類されている（註5）。それによると第Ⅰ類は「爪形施文による喰み出し隆線をもつもの」。第Ⅱ類は「刺痕が右→左下がりの傾斜をもち，刺痕が疎なもの」。第Ⅲ類は「刺痕が左→右さがりのもの」。第Ⅳ類は「刺痕に規則性がなく，方向に一定性が認められないもの」。第Ⅴ類は「刺痕が〔ハ〕の字状を呈するもの」とされている。

長崎県北松浦郡吉井町福井洞穴では第2層上半から主体的に出土するとされ，「……。横走する数段の平行する爪形文のため，爪形文列の間が細い帯状に隆起している場合も若干認められる。」とし，また，「……。爪形文の走行は横走するものが多く……」と述べ，口縁部では「……，刻み目の附されたものはかなり出土している。」とされている（註6）。その他に図版で見る限り，爪形文の疎なものもある様である。

鹿児島県上場遺跡では2層下部より，細石刃核・細石刃と共に10数片の爪形文土器が出土している。土器は三段に横走し，各々の爪形文間の間隔が疎なものである（註7）。

宮崎県岩土原遺跡では，口縁直下の貼付隆帯上に爪形文が横走して施文されている（註8）。

一方，門田遺跡谷地区出土の2個体の土器は器形の相異はあるにせよ，施文方法は同一である。連続した横帯の爪形文を，口縁部から底部まで器面全面に施し，未施文部である爪形文間が隆起帯として残り，器面に凹凸を有す土器である。そして，この種の，爪形文未施文部に残される隆起帯を疑似隆起線文と仮称しておきたい。この種の爪形文を前記の4遺跡出土の資料と比較すると，福井洞穴のものに一番類似するように思われる。特に古代史発掘1（P32）誌上の資料（註9）に近いようだ。また，口唇部に刻みが入る点も類似していよう。その他では，泉福寺洞穴第Ⅰ類の爪形施文による喰み出し隆線を持つ土器が，施文具・施文方法の差が

あるが，疑似隆起線文を有す点に近似点がみられるのみである。上場・岩土原遺跡例は門田例とは相異し，特に上場例は泉福寺第Ⅱないし Ⅲ類に類似するのであろう。

他の地方に目を転じれば，愛知県酒呑ジュリンナ遺跡第２次出土の土器（註10，Ｐ７・第４図２）が，施文が縦位になるとされるが，よく類似している。また，新潟県小瀬ケ沢洞穴出土の土器〔佐藤達夫氏の分析で(1)〜(4)のうち(1)・(2)とされるもの（註11)〕にも類似していると思われる。この様に門田の爪形文は九州地方では福井洞穴２層出土例に一番近い関係が窮われ，他地方では酒呑ジュリンナ，小瀬ケ沢に類似しよう。

そうすると門田と泉福寺・上場等の関連はどうであろうか。結論を先に述べると，門田の爪形文が古く，泉福寺（第Ⅰ類を除く），上場例は新しく位置付けられると思われる。九州の草創期の土器は豆粒文→隆起線文→爪形文→押引文と変遷する。重要なのは爪形文以前の土器群は，器面に粘土帯を貼り付ける事を基本とする点である。しかし，爪形文及びそれ以降は，器面に粘土を貼り付ける行為はほとんどと言ってよい程消滅してしまい，それが再登場するのは早期末か前期初頭の手向山式，轟Ｂ式の時期まで下る。その粘土帯貼付の有無は，爪形文土器の中に過渡的な姿として残存しているのである。これが，門田・福井等にみられる爪形文間が作りだす凝似隆起線文であろう。つまり，爪形文土器群は，この凝似隆起線文をもつ土器と，爪形文が疎に施文される爪形文土器に大別され，従って，泉福寺の第Ⅰ類土器は，門田・福井例に近く，他類土器と区別されると考えられる。上場の爪形文は後者に属すのであろう。

この爪形文を境にする貼付文の有無は，基本的に東日本も同様な姿であろう。貼付文である隆帯文・細隆起線文から，篦のけずり出しによる微隆起線文への移行は，器面調整を含めた二次的な文様効果の結晶として生じたものであり，門田の爪形文土器のあり方と類似している。従って，西日本の微隆起線文の欠如は，大した差異を有するものでは無いのでなかろうか。酒呑ジュリンナ遺跡出土の爪形文土器は，特に両者の関連が近い事を窮わせる資料であろう。

九州地方出土の爪形文土器は，福井・泉福寺・上場・岩土原とも細石刃核・細石刃を伴出する共通項を有している。一方，門田の爪形文は南・北を台地に挟まれた狭い谷（水田として利用されていた）の最下底にかつて流路となっていた大溝Ⅰ内に検出された。この同一層位内よりはナイフ形石器・台形・台形様石器・細石刃核等が豊富に出土し，かつて台地上にあった生活面が，弥生時代前期頃の削平により谷内に遺存したと考えている。一方，門田遺跡門田地区に唯一残された包含層の調査により，ナイフ形石器→半舟底タイプの細石刃核を有す２枚の文化層があった事が判明している（註12)。が，谷地区で出土した石器群は，門田地区より複雑な石器組成を示している。しかし，前記４遺跡の調査より爪形文土器が細石刃核・細石刃と伴出する事は確実である。従って門田の爪形文土器は文様構成から福井洞穴２層に最も近似する所から，第11図75〜79の様な舟底タイプの細石刃核と伴出する時期の遺物と考えるのが現時点では妥当性があろう。しかし，門田地区で出土し，唐津周辺に主体的に出土する半舟底タイプ

の細石刃核との共存関係についても，福井洞穴の細石刃核及び伴出土器の全容（爪形文土器は3層からも出土している所から，前後関係がある可能性等）が明らかにされ，かつ，現在まで土器の出土をみないが，唐津地方での良好な遺跡が発見されるまで保留されるべきであろう。

九州地方の縄文草創期の編年は，長崎県泉福寺洞穴の一連の調査により，豆粒文土器→隆起線文土器→爪形文土器→押引文土器→条痕文土器の序列が層位的に確認されている。一方，古くから注目されていた早期の押型文系土器群の編年も，より古式の土器を求めて大分県の川原田洞穴・成仏岩陰・二日市洞穴等調査により着実にその成果をあげ，長崎県岩下洞穴Ⅸ層(註13)，二日市洞穴第9文化層出土（註14）の条痕文土器を目安に一本の糸で結ばれそうな可能性が強い。

門田遺跡谷地区出土の爪形文土器は，幸にもその器形が復原できた。特に浅い丸底を呈す底部の検出は重要であり，その底部まで爪形文が施文される知見を得た。

九州北部にあって，東・西両域に挾まれ，従来，押型文土器以前の土器の検出を見なかった福岡県で，この良好な爪形文土器の資料を得た事は，今後の発生期の土器研究に大きく寄与するものと思われる。

（木下）

註1　井上裕弘編「昭和47年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報」　福岡県教育委員会　1973

2　柳田康雄編「昭和48年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報」　福岡県教育委員会　1975

3　高島忠平「土器の製作と技術」『弥生時代1—古代史発掘』4　講談社　1975

4　佐々木洋治「山形県における縄文草創期文化の研究Ⅰ」『山形県立博物館研究報告』1　1973

5　麻生優・白石浩之「泉福寺洞穴の第七次調査」『考古学ジャーナル』130　ニュー・サイエンス社　1976

6　鎌木義昌・芹沢長介「長崎県福井岩陰—第一次発掘調査の概要」『考古学集刊』3—1　1965

7　池水寛治「鹿児島県出水市上場遺跡」『考古学集刊』3—4　1967

8　鈴木重治「宮崎県岩土原遺跡の調査—土器伴出細石器文化の一例」『石器時代』10　1973

9　芹沢長介編「旧石器時代の生活の知恵」『旧石器時代—古代史発掘』　1

10　大参義一「酒呑ジュリンナ遺跡第2次調査報告書」『名古屋大学文学部研究論集』　1970

11　佐藤達雄「縄文式土器研究の課題」『日本歴史』277　1971　本書では「縄紋草創期前半の編年について—縄文式土器」『日本考古学の現状と課題』吉川弘文館　1974による。

12　木下修「門田遺跡」『日本の旧石器文化』3　雄山閣　1976

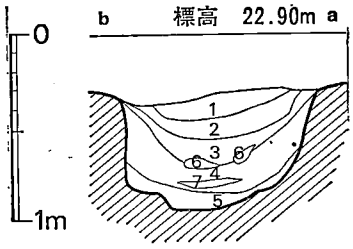
13　麻生優「岩下洞穴の発掘記録」佐世保市教育委員会　1968

14　橘昌信「大分県九重町二日市洞穴の調査（第1次～第3次）」『九重町文化財調査報告』2　1978

Ⅳ 縄文・弥生時代の遺構と遺物

(1) Ⅴ字溝（図版10・18，第5・17図，付図2）

G8区で検出された溝状遺構で，北側の台地（辻田地区）の西側斜面裾を巡るⅤ字溝につらなる溝である。この溝はG9—6区で大溝Ⅰに合流する。大溝ⅠはG10区で東方に屈折し，谷頭でさらに北側に登る傾斜をもち，辻田地区を囲む環濠状をなしている。最も残りのよいG7区で，溝の幅は約2.50m，深さ2.10mを測り，断面はほぼⅤ字形をなす。しかし，谷地区のG8区で検出された溝は，最も広い所で幅約1.30m，深さ約70cmを測り，上面がかなり削平されていることが判る。土層は各所で若干異なるが，G8—14区では，第1層に灰黒色粘質土，第2層に暗茶灰色粘質土，第3層に淡灰黒色粘質土がレンズ状に堆積している。溝の断面はU字状を呈す。遺物は溝底より若干浮いた状態で前期末の土器破片が出土したのみである。すでに辻田地区でも確認されているように，中期前葉の時期にはすでに埋没しⅤ字溝としての機能を失なっている溝である。（井上）



土層名

1．茶褐色土混入灰黒色粘質土(粒子粗)
2．茶褐色土混入灰黒色粘質土(粒子密)
3．灰黒色粘質土(粒子粗)
4．灰黒色粘質土(粒子密)
5．乳灰黒色粘質土
6．黄灰色粘質土
7．砂層

第17図 Ⅴ字溝土層断面図(1/40)

(2) 大溝Ⅰ（図版9～11・19～31，第5・18図，付図2）

谷地区を東西に走る低平な断面U字状を呈す大きな溝状遺構である。C9区からD9・E9・10，F10区と弯曲しながら西走し，G10区で強く屈折し流路を北にとりG9区で大溝Ⅱと合流する。溝はさらに屈折し，流路を西側に変え，後記する旧河川状遺構に注ぐようである。また，この大溝は谷頭でさらに北側の台地（辻田地区）に登ることがC9区北側断面で観察された。

溝の幅は谷頭で約14mと最も広く，西走するに従い幅をせばめF10区では約5.5mと狭くなる。さらに北に屈折したG10区では約3～4mと幅を減じ，旧河川状遺構に注ぐと思われる付近では約1.50mと細くなっている。溝の深さはC9区で約90cm，E9区で約60cm，G10区約35

cmと浅くなり，G９区では再び100cmを越す深さとなる。溝底のレベルは，C９区の谷頭で標高約23.00m，F８区で約22.60m，G９—13区で約21.70mを測り，谷頭から開口部へと傾斜している。

溝内の土層の堆積（第18図）は基本として５層下部層は灰黒色粘質土，第６層は茶褐色腐植土層で，多くの腐蝕した植物遺体を含むいわゆるバフン層と呼称した層である。この土層間には各所に砂を含み多量の流木・種子・木の葉や木器などが包含されていた。第７層は青灰色砂層である。

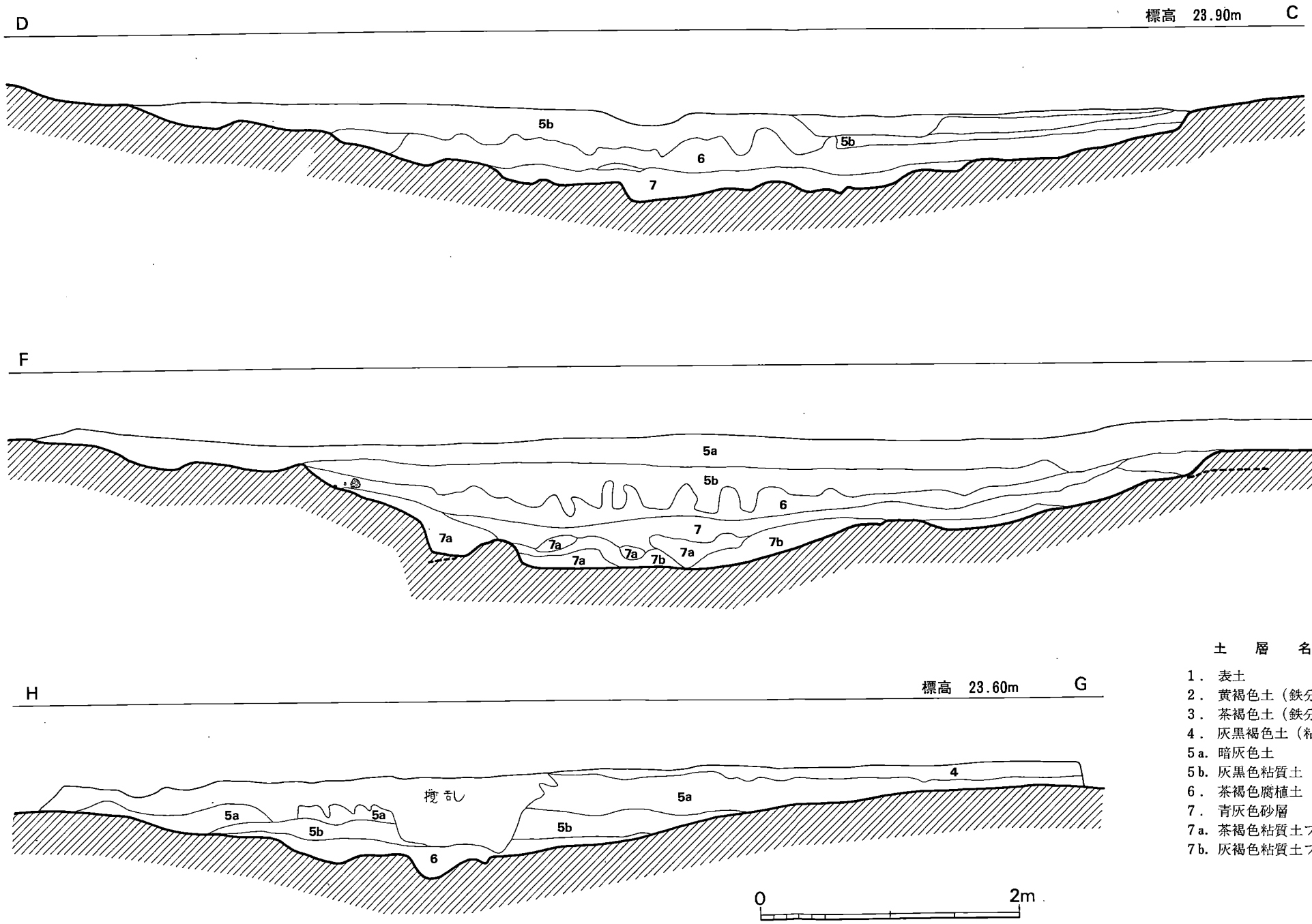
５層下部と７層の堆積は全体として谷頭地区が最も厚く，谷開口部に行くに従って薄くなっている。７層は谷頭地区と開口部付近が厚く，中央部は薄い堆積を示している。水流の差異を示すものであろう。

前記したように谷頭には湧水点があり，少なからず常に水流があったことは調査中にも理解できた。従って溝内の堆積土の反転・再堆積等が何回となく起きたためか各期の遺物の混在がみられる。第７層には先土器時代の多くの石器類，縄文時代早・前・晩期の遺物，弥生時代前期・中期の遺物と，若干ではあるが，後期の遺物を含んでいる。しかし，その主体は弥生前期の遺物である。第６層には先土器時代から鎌倉時代におよぶ各期の遺物を包含する。この層の主体的時期の限定は，後期終末のドングリ貯蔵穴の最上層に５層下部の灰黒色粘質土が堆積していることからも判断できる。しかし，純粋な意味での遺物の層位的序列の把握は困難といえる。第５層下部には弥生中期から鎌倉時代にわたる遺物を包含するが，その主体は弥生後期と古墳前期の遺物である。

以上が溝内の土層と遺物の関係であるが，遺物の70％以上は弥生後期の遺物で，その大半はC９区の北側溝縁辺りから出土したといえる。自然排水路的な性格をもつこの大溝と人間とのかかわりは，両台地に主体的に生活を定着させた弥生前期の時期に始まることは，G８を走るV字溝の掘削，B９区に登る溝状遺構（V字溝と関係する溝と思われる）の掘削等が，自然排水路的な大溝Ⅰを利用するようなかたちでなされている事実からも判る。それはまた，最下層に堆積した弥生前期の多くの遺物からも知ることができよう，しかし，最も主体的にこの大溝に人間がかかわった時期は溝辺りから発見された11基のドングリ貯蔵穴や，多量の弥生後期の遺物から弥生後期の時期といえる。

遺物の大半はC９の谷頭地区で出土したもので，大溝Ⅰの北側溝辺りに厚く堆積していた。その状態は北側台地からの流れ込みないしは排棄を思わせる。その大半が弥生後期の遺物であることは北側台地に存在する後期の住居址群との関係からもうなずけることである。また，後記するドングリ貯蔵穴群が北側溝辺りに形成されている所以も判る。

一方，第７層から検出された多くの先土器・縄文時代の遺物類の出土状態は，溜りのような所から多く出土し，遺物も全体にローリングを受け，流されてきたものであることが判る。と



土　層　名

1．表土
2．黄褐色土（鉄分を含む）
3．茶褐色土（鉄分・マンガンを含む）
4．灰黒褐色土（粘質）
5a．暗灰色土
5b．灰黒色粘質土
6．茶褐色腐植土（木の枝・木の葉・種子等多量に含む）
7．青灰色砂層
7a．茶褐色粘質土ブロック
7b．灰褐色粘質土ブロック

第18図　大溝Ⅰ・Ⅱ土層断面図（1／40）

りわけ，先土器時代の包含層はすでに南側台地のA11・B11区で確認されている。従って，この門田遺跡に主体的に人々が定着した弥生前期の時期に，少なくとも台地全体を開削した可能性は高く，先土器・縄文時代の遺物類はその時に谷に流れ込んだものかもしれない。（井上）

a　出土縄文土器

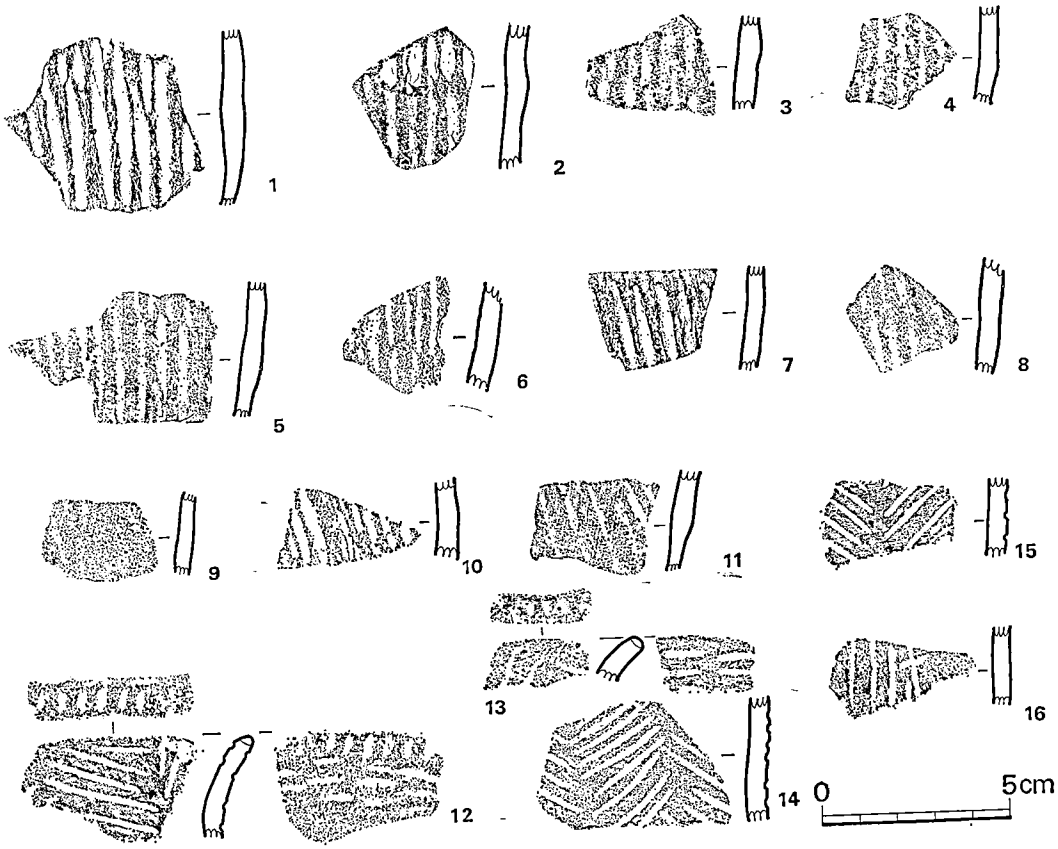
≪櫛目状土器（図版32—1，第19図1～11）

型式不明の土器群で，いずれも胴部破片である。櫛目状の文様はすべて縦方向で，1・2より段状に連続して施文された事が判る。櫛目の幅の大小によりa・b 2つに分類できる。

a類（1～9）　幅が5㎜前後と太いものである。1は最大の破片で3段に分けて施文され1段の長さは上が1.5㎝，下が2㎝を測る。2は，連続する部分が深く施文される。4・6は若干内弯ぎみに施文される。

b類（10・11）　幅が狭いものであるが，施文方法は同一である。

両者とも器壁は5㎜前後と薄く，内面が横方向に調整（ナデ？）される共通性を持っている。



第 19 図　縄文土器実測図1（1/2）

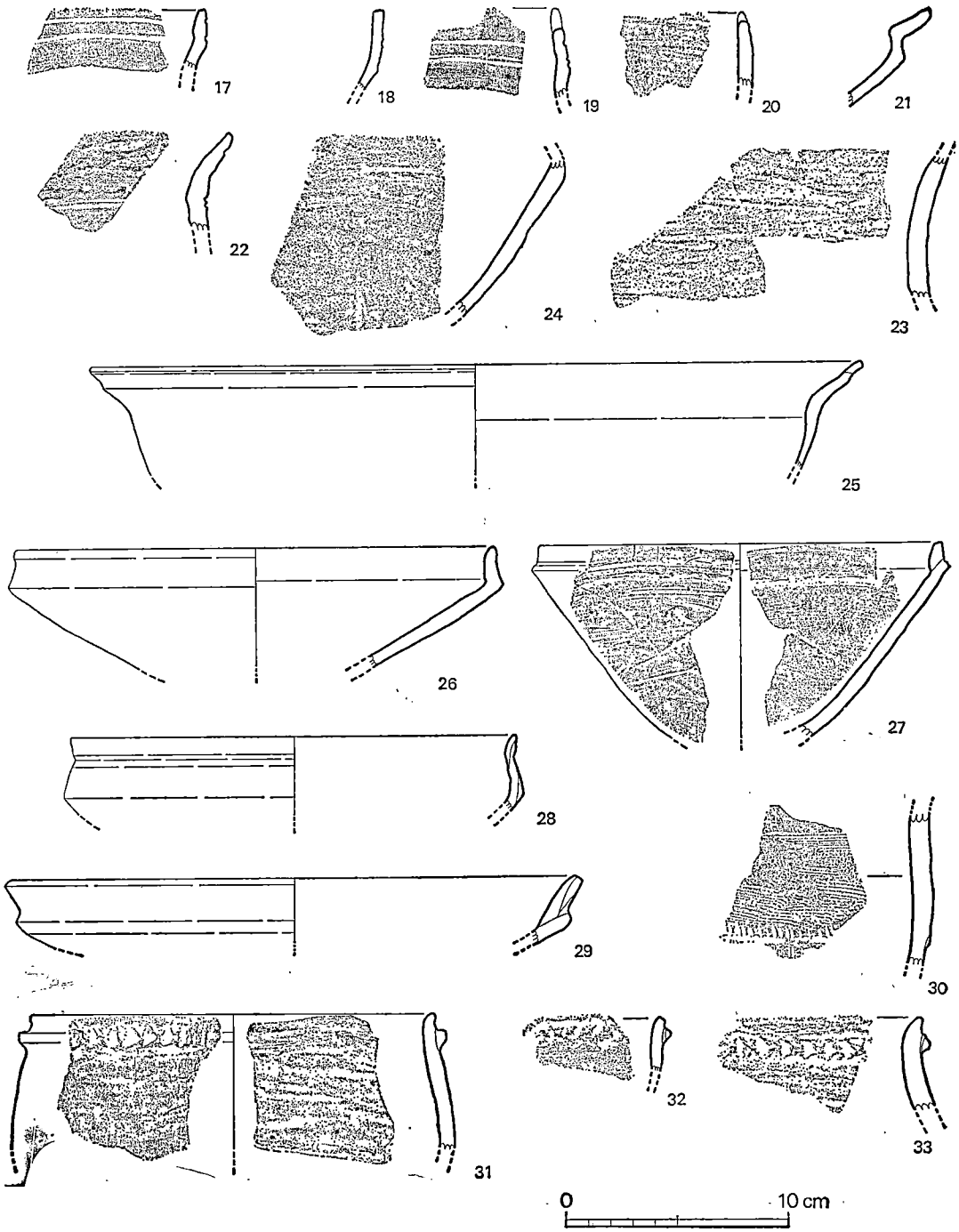
色調は灰褐色・黒褐色を呈し，焼成は非常に良好。現在の所，九州内では出土例を聞かない資料である。あえて類似した土器を求めれば，佐賀県唐津市西唐津海底出土の土器や，盗人岩洞穴出土の櫛目文土器であろうか。文様帯のみをとってみると，新潟県小瀬ケ沢洞穴出土の櫛目文土器に類似している。今後，類例の増加を待ちたい。

≪曽畑式土器（図版32—1，第19図12～16）

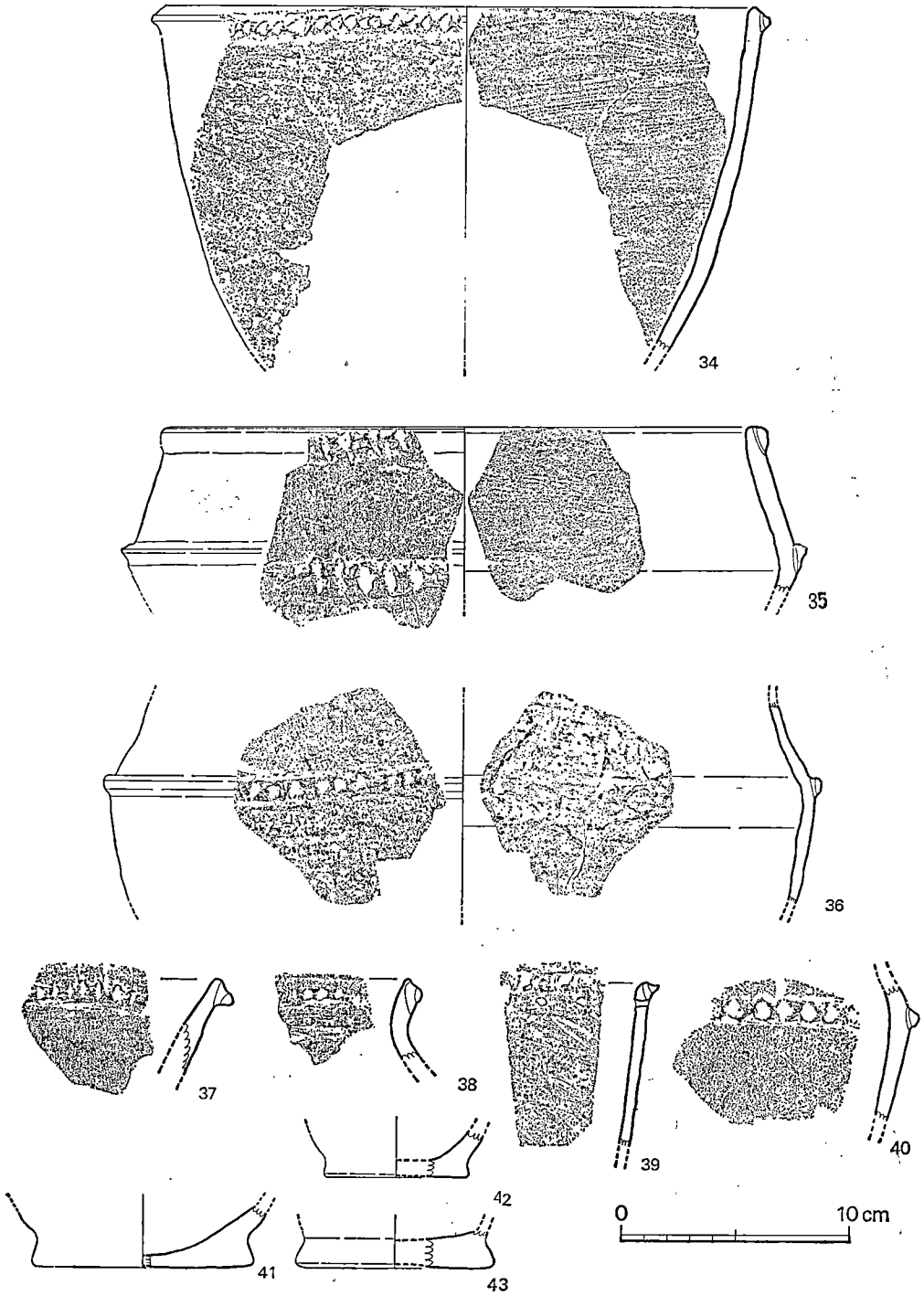
12は外反する口縁部破片で，複線斜行文の組合せで文様を構成する。口唇部にはやや深めの斜めの刻みを施す。内面は口縁部直下のみに，3段の短直線文がみられる。13も口縁部片だが1とは個体を別にする。口唇部の刻み目は口縁部と直交する。14～16は胴部片で，いずれも12と同一個体の可能性が強い。器壁は6㎜前後と薄手で，当地域の曽畑式共通の特長であるが，胎土に滑石を含まない。（木下）

≪晩期の土器（図版32—2・33—1，第20図17～33，第21図34～43）

鉢形土器（17～29）　深鉢形土器と浅鉢形土器に分けられる。17～20・22・23は深鉢形土器の破片であり，21・24～29は浅鉢形土器である。17は外面に2条の平行沈線を施し，内面はナデている。胎土は精選され，細かい砂粒を含んでいる。焼成は良好。色調は外面淡褐色，内面黒褐色を呈する。C9—8区，7層出土。18は口縁部外側に横方向に条痕を施している。内面はナデている。胎土には細かい砂粒を含み，焼成は良。色調は淡灰褐色を呈し，内面はややくすんでいる。C9—3区，7層出土。19は口唇部にリボン状に近い貼付のあるもので，口縁部外側に3条の浅い乱れた平行沈線を施している。内外面共にナデている。胎土には細かい砂粒を含み，焼成は良好。色調は外面淡褐色，内面淡黒褐色。C9—3・4区，7層出土。20は口唇部に低い山形の貼付があり，その頂点をくぼませている。外面には条痕が見られ，内面はナデている。胎土には石英粒、細砂粒を含み，焼成は良い。D9—8区，7層出土。色調はやや黒味がかった灰褐色。21は内外面に横方向にナデており，胎土に石英粒，雲母片などを混入している。焼成は良。色調は淡灰褐色を呈する。C9—7区，7層出土。22は内外面共に粗く横方向に条痕を施している。外面では浅く凹線のようになっている部分もある。胎土には石英粒を含む。焼成は良く，堅い。色調は灰褐色を呈する。C9—23区，7層出土。23は内外面にやや幅広い条痕が施されている。胎土は石英など粗い砂粒を含んでいる。焼成は良く，色調は外面くすんだ褐色，内面灰褐色である。D9—8区，7層出土。24は厳密には浅鉢形土器とは言えないかも知れぬが，一応鉢形土器の範疇に入るものとして説明する。外面はやや粗い条痕，内面にも横方向に条痕を施している。胎土に石英を含む。色調は淡黄褐色を呈し，内面は部分的に黒い。C9—9区，6層出土。25は胴部がやや丸味をもち，口縁部直下で屈曲し，口唇部へと更に外反している。内外面共に横方向に調整されており，非常に細かい条痕が残っている。胎土には石英を含み，焼成は良。色調は外面暗灰褐色，内面明褐色を呈する。復原口径34.6㎝，C9—9区，6層出土。26は精製研磨された浅鉢形土器で，口縁部は胴部から屈折



第 20 図　縄文土器実測図２（1/3）



第 21 図　縄文土器実測図3（1/3）

し，口縁部付近でやや外反する。胎土には細かい砂粒を含み，焼成は極めて良好。色調はやや灰色がかった黒褐色である。復原口径21.4cm。G 9—2区出土。27は口縁部が，胴部から強く内側に屈折して口唇部へ向って直立するが，屈曲部は胴部内面に粘土ヒモを貼付て整えることによって出来ているものである。口縁部内側を観察すると貼付の状態が良くわかる。内外面共に約1.1cmの幅をもつ原体による横方向の調整が施され，細かい条痕が残っている。胎土には細かい砂粒を含み，焼成は良好で堅く緻密である。色調は外面灰褐色，内面黒褐色を呈する。復原口径18cm，E 9—10区，7層出土。28は口縁部が内側に折れ，口唇部へ向って丸味を帯びつつ内傾し，口唇部直下で外反する。内外面共，ごく，ていねいにナデている。胎土には石英を含み，焼成は良。色調は暗茶褐色である。復原口径20cm，G 9—7区，5層下部出土。29は胴部内面に粘土ヒモを貼付けることによって口縁部を作り上げている。貼付ける際には，外側に粘土を補強しており，内外面共にナデている。胎土には石英を含み，焼成は良。色調は淡灰褐色を呈し，外面には黒斑がある。復原口に径26cm，C 9—3，4区，7層出土。17～20は晩期Ⅱ式の終わりごろに属する土器であろう。22～24は晩期初頭から中ば過ぎにかけて位置すると思われる。21・25～29は夜臼式土器に伴う鉢形土器である。

甕形土器（30～43）　30は以下に説明する甕形土器と特徴を異にするものである。外面は縦方向に細かいハケ状のナデを施した後，貝殻条痕を横方向に施している。下方にごくわずかの粘土を貼りつけて，突帯とまでいかないが，高みをつけ，そこに刻目を施している。刻目はヘラ状工具を使ってつけられている。内面はナデている。胎土には細かい石英粒を含み，焼成は良い。色調は外面赤味を帯びた暗灰褐色，内面くすんだ茶褐色を呈する。晩期の所産と思われるが，確かな類例を見つけることができなかった。C 9—23区，7層出土。31～33は刻目突帯が「口縁端よりも下がるもの」（註1）である。31は口唇部がやや外反するもので，口唇部直下に刻目突帯を有し，胴部はなだらかに底部へ移行する。外面は条痕が粗く施され，内面には約1.1cmの幅で横方向に調整されている。刻みはヘラ状工具を突帯に直角に交差させて持ち，突帯を垂直に切り，ヘラ状工具をそのまま右へ倒して付けている。胎土は精選され，細かい砂粒を含んでいる。焼成は良好で堅くしまっている。色調は外面暗褐色，内面黒色を呈する。復原口径18.2cm。D 9—8区，7層出土。32は口唇部直下に突帯を貼付け，ヘラ状工具でごく，小さい刻みを入れている。胎土には石英を含み，焼成は良。色調は黒褐色である。F 9—15区，6層出土。33は貝殻を使って刻みを施している。内外面共に横方向の条痕が施してあり，内面はよりていねいである。胎土には石英粒，雲母片等を含み，焼成は良い。色調は外面淡灰褐色で口唇部は黒い。内面は黒色を呈する。F 9—20区，7層出土。34・37は，刻目突帯が「口縁に接して下向の斜面をもつ」（註1）ような貼付方がされている。34は外面にハケのような一定の幅をもつごく細かい条痕が施してあり，内面にも横方向に条痕を施す。また刻目突帯と胴部上半には煤が多く付着している。刻みはヘラ状工具で突帯を垂直に切り込み，ヘラ状工具を左

に倒して付けている。胎土には石英，細砂粒を含んでおり，焼成は良。色調は外面黒褐色，内面暗褐色を呈する。復原口径26.4cm，G９—２区出土。。37は外面はナデ，内面は細かい条痕を施している。刻目はヘラ状工具で小さくていねいに施されている。胎土には石英，細かい砂粒を含み，焼成は良。色調は外面炎褐色で突帯付近は黒ずんでいる。内面は黒褐色である。C９—２区，７層出土。38は口縁部が胴部から内側へ屈折して，そこから弓なりに外反している。突帯はなく，口唇端部にわずかの粘土を補って丸味を持たせ，そこに浅く刻目を施している。内外面共に横方向にナデられており，特に外面は細い丸味のある工具で仕上げている。胎土には石英を含み，焼成は良く，色調はやや黒っぽい。暗褐色である。35・39は刻目突帯が「口縁と同高」（註１）に位置している。35は口縁部がやや内傾しながら立ち上がり，突帯直下付近でわずかに外反している。口縁部は胴部へ至るときに逆「く」字形に屈折するが，そこにも刻目突帯が貼付けてある。刻みはヘラ状工具を使って施している。外面は横ナデ，内面は横方向にナデており砂粒が右から左へ移動している。胎土は細かい砂粒を含み，焼成は良。色調は外面黒色，内面は暗褐色。復原口径26.4cm D9—８区，７層出土。39は突帯直下に二つの孔が穿たれている。焼成前にあけたものである。外面は約１cmの幅をもつ原体を使って斜めに条痕を施す。煤が付着している。刻みはごく小さく，ヘラ状工具で突帯を切り，左方向にわずかにヘラ状工具を傾けている。刻目を施した後，再びつまんでいる部分がみられる。胎土に石英粒・雲母片を含んでいる。焼成は良く，薄手で堅く緻密である。色調は外面黒褐色，内面淡灰褐色を呈する。G９—６区出土。36，40は胴部破片である。36の口縁部は弓なりに外反するものであろう。刻みはヘラ状工具を使って施している。風化が著しく，器面調整は不明瞭である。胎土には石英，砂粒を含み，焼成は良，やや薄手である。色調は外面明褐色，内面淡褐色を呈する。突帯直下の復原直径は30.0cm。G８—14区出土。40は内外面共ナデている。刻みはヘラ状工具を突帯と直角に交差させて持ち，斜めに切り込み，ヘラ状工具を右に倒して施している。胎土に石英を含み，焼成は良い。色調は外面淡褐色，内面淡黄褐色を呈している。41～43は甕形土器の底部であろう。41は平底で，胎土に石英粒を含み，焼成は良。色調は淡褐色を呈し，内面やや灰色がかっている。復原底径9.6cm，C，D９—２区出土。42は平底である。外面は粘土のつぎ目を指で押さえた後，ヘラ状工具で上から下へナデている。胎土に細かい石英粒を含み，焼成は良。色調は黄味を帯びた淡褐色を呈する。復原底径6.2cm。D９—４区，７層出土。43はやや上げ底気味。胎土に石英を含み焼成は良。色調は外面やや黄味を帯びた淡褐色，内面灰褐色。復原底径8.6cm，D９—８区，７層出土。

以上の甕形土器のうち30を除いては，全て夜臼式土器である。（荒武）

b　出土石器・土製品・青銅製品

谷地区から出土した石器・土製品は，先土器時代から歴史時代に及ぶ。その出土状態は表

表 3　出土石器・土製品一覧表

器種 / 地区	先土器時代石器	尖頭石器状	石鏃	イスパクレー	石斧	石庖丁	石錐	磨石	敲石	砥石	石核	刃状剥片器	石錘	礫器	石製紡錘車	土製紡錘車	石製円盤	その他	小計	合計
B 9	3			1	3	7				1	1				1	1			15	18
C 9	28	2	22	23	55	19		9	7	22	14	4	4		1	15	1	4	202	230
D 9	27		103	6	20	5	2	2	1	9	6	5				5	2	3	169	206
E 9	35	1	73	7	8	2		2	1	5	7				1	1		3	113	148
10	9		10	1							1								12	21
F 8	2			3	3	2		1			1					1		3	14	16
9	81	1	46	11	4	3		2			2		1					2	72	153
10	63		87	10	6		1	1		1	10	1	1	1		2		2	123	186
G 8	5	1	10	6	4	1			1	3	4	4					1	2	37	42
9	32		41	9	10	1	1	1		1	3	5			1				73	105
10	6	1	10	4	5			1			2	2						1	26	32
11	1		1	1															2	3
H 9			1	1	1														3	3
その他	1				1							1							3	4
計	303	7	403	83	121	40	4	21	10	42	51	22	6	1	4	25	4	20	864	1,167
大溝 I	203	5	345	59	97	32	3	18	7	38	43	17	5	1	4	23	3	13	713	916
大溝 II	80	1	40	11	5	2		1	1		1					2		2	66	146
2号河川状遺構					1														1	1
ドングリ貯蔵穴										1(9号)							1(1号)		2	2
包含層	20	1	18	13	18	6	1	2	2	3	7	5	1					5	82	102
7層	260	3	357	45	26	6	3	3	2	6	27	9	1	1	1	6		6	502	762
6層	9	2	21	12	30	14		6	3	14	6	4	1		3	12	2	4	134	143
5層	18	1	12	14	49	14		10		19	13	4	4			7	2	7	159	177
4層	4		2	6	9	6	1	2	3	3	4								34	38
3層	1		1		2				1										3	4
2層					1														1	1
表土	11	1	10	6	4				1		1	5							31	42

の通りで，先土器時代の遺物を除くと864点の多きにのぼる。遺構別出土量は表3の通りで，大溝Ⅰ714，大溝Ⅱ66，2号旧河川状遺構1，ドングリ貯蔵穴2，包含層82点出土した。器種は尖頭状石器・石鏃・石匙・掻器・削器・石斧・石庖丁・石錐・磨石・敲石・凹石・石皿・砥石・石錘・石（土）製紡錘車・石（土）製円盤・磨製利器・石鍋等非常に多岐にわたっている。その出土状態は，前記した様に多くは溝内への流れ込みであるが，一応，遺構内出土の遺物として記述して行く。従って，遺物と記述の対応が複雑になってしまったが，ご寛容願いたい。また，その分類は形態で行なったが，特殊な形態を除いて時期を限定できない遺物も多い。縄文時代では早期・前期・晩期，弥生時代は全時期の土器が出土しており，石器もそれらの各々の時期に伴出するものであろう。

大溝Ⅰから出土した石器は714点である。

≪尖頭状石器（図版35—1，第22図）

大きく3つに分類できる。a類は断面三角形を呈す大型のもの。b1類は幅広のもの。b2類は細身のもの。c類は幅広の剝片の一部を尖頭状に整えたものである。

a類（1）　断面三角形を呈し，長さ14.0cm，最大幅3.35cm，厚さ2.3cm，重さ141gを測る完形品。中央部に稜が通り，両縁から荒い剝離を加える。先端はやや鈍く，基部は簿く仕上げられる。縄文時代早期の古い時期の所産であろうか。玄武岩製でE9—9区，7層上部出土。

b1類（2）　幅広の尖頭器の胴部破片。安山岩製で，弥生時代に類例がある。

b2類（4）　柳葉形を呈す尖頭器で先端，基部を欠損する。包含層出土の5に類似し，押型文土器に伴出した深原遺跡出土の石槍に近い。安山岩製でE9—4区・7層出土。

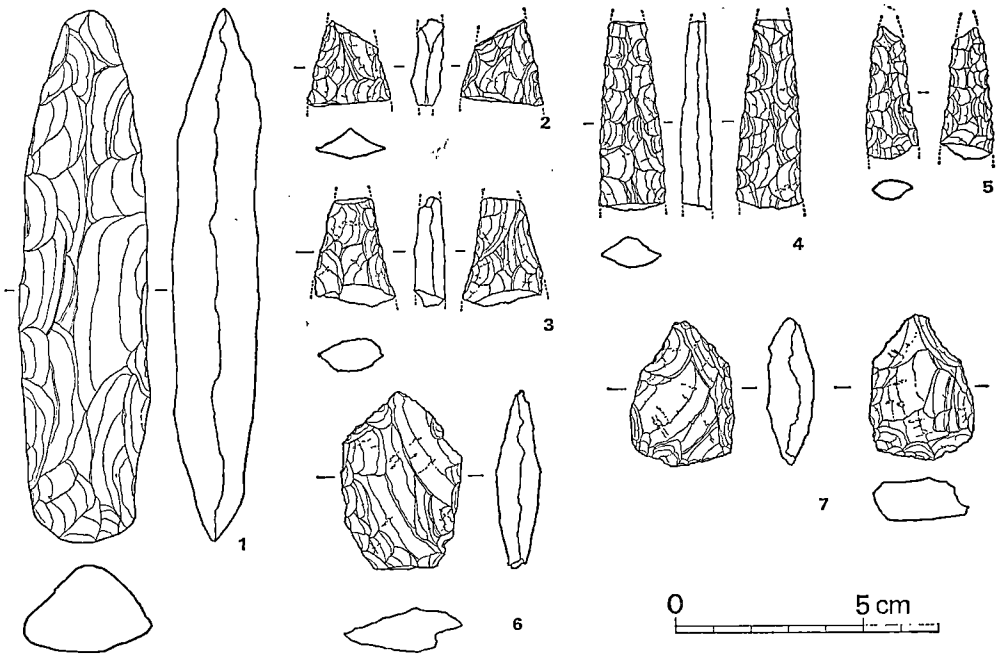
c類（6・7）　両者とも幅広な横長剝片を素材とし，先端を尖らす尖頭状石器で，安山岩製。

≪石　鏃（図版34・35・36—1，第23・24図）

総数403点と最も多い出土量を示す。そのうち344点が出土した。層位的には圧倒的に7層に含まれる。形態から平基式（a類）と凹基式（b類）に分けられ，凹基式は抉りの差から細分される。（表4）なお，石材は黒曜石が215点，安山岩180点と両者で98%をしめ，他に流紋岩・チャート・石英がある。

表　4　石鏃形態一覧表

	A　類	B1	B2	B3	B4	B5	B6	B7	B8	B9	不　明	
大溝Ⅰ	30	60	45	33	38	16	6	9	20	35	52	344
大溝Ⅱ	6	9	3	6	4	1	0	3	3	4	2	41
包含層	2	5	3	3	1	1	0	0	0	2	1	18
計	38	74	51	42	43	18	6	12	23	41	55	403

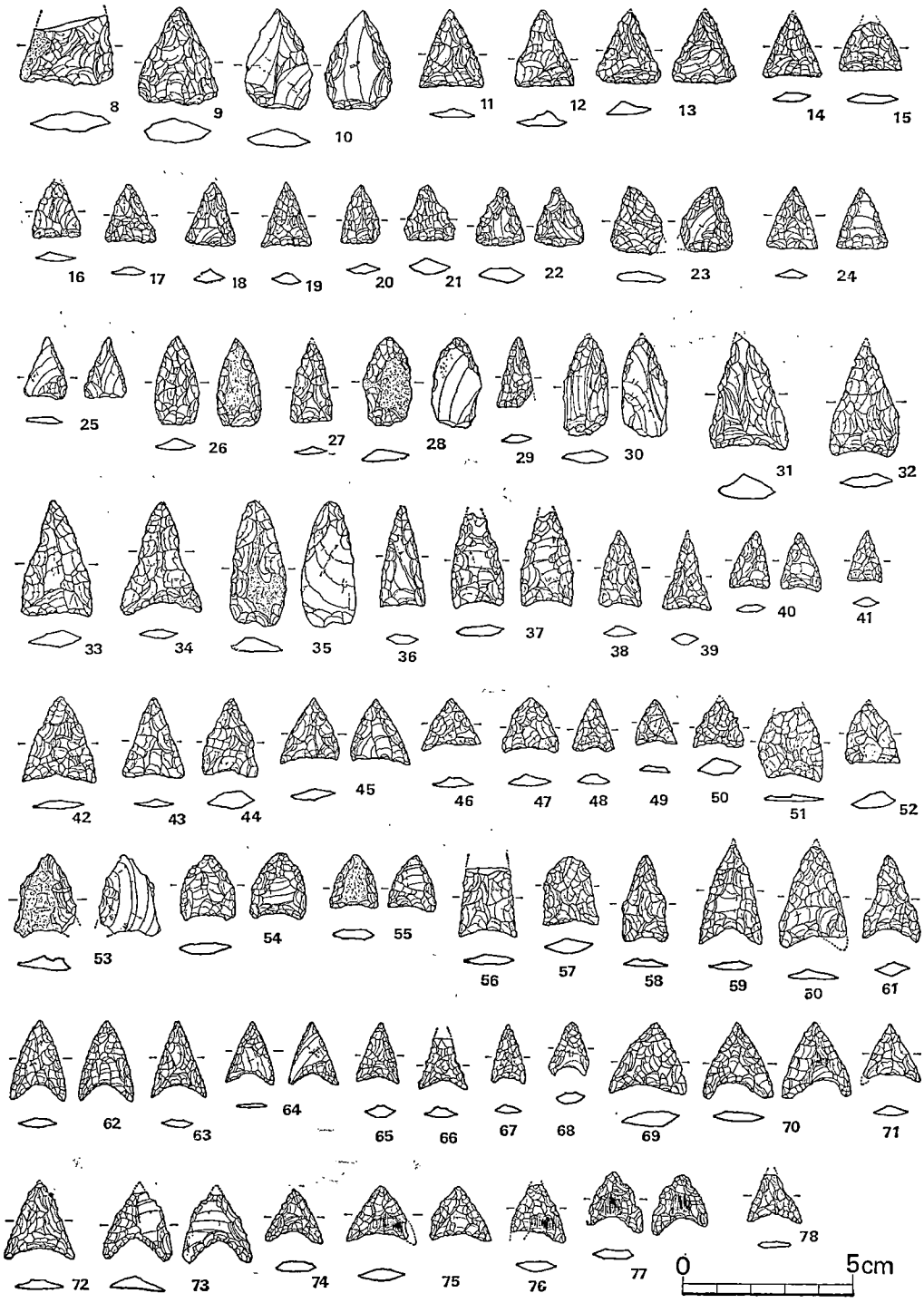


第 22 図　石槍・尖頭状石器実測図（1/2）

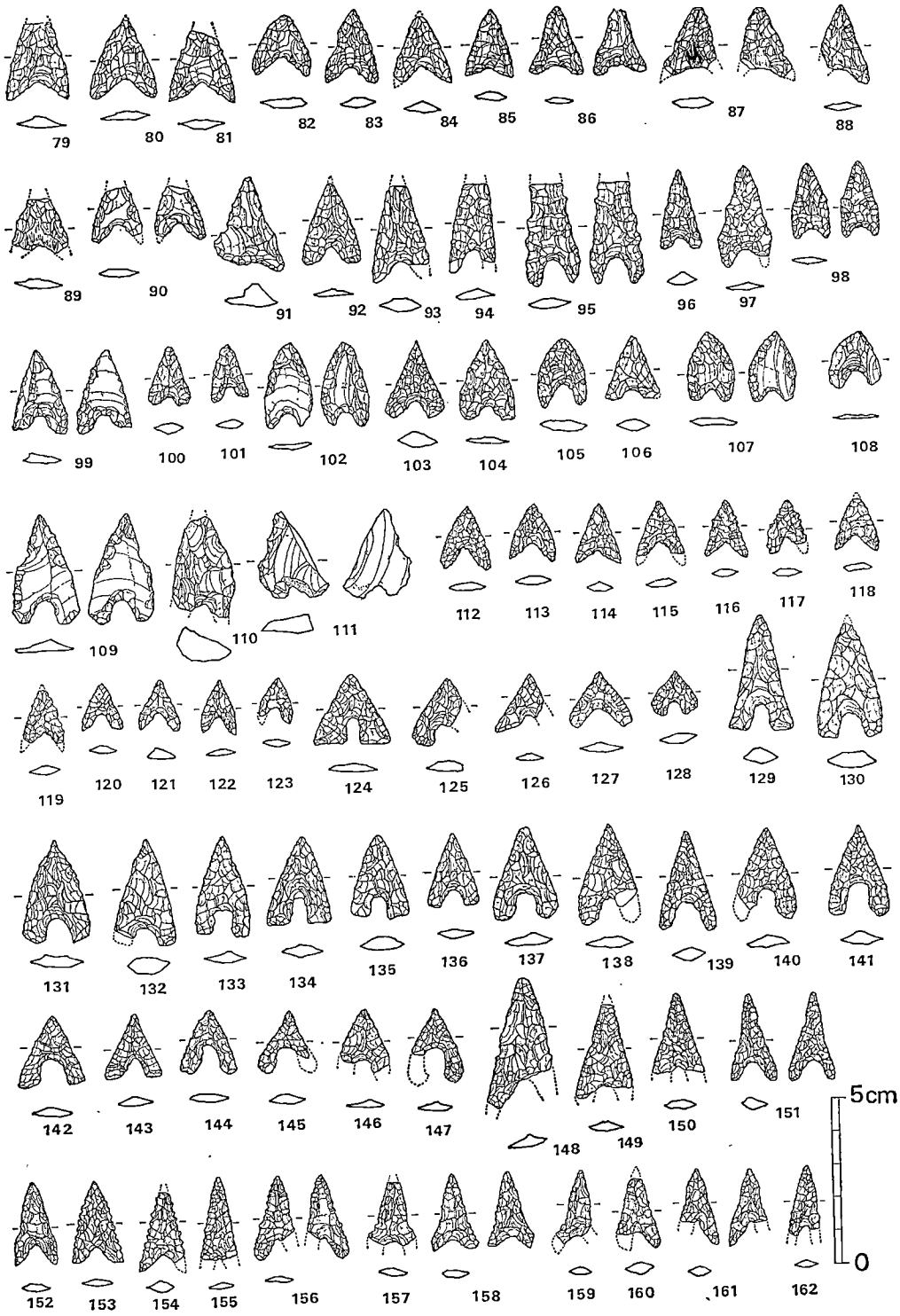
a 類（8～30）　平基無茎式で総数38点のうち32点が出土した。8～10は大型で部厚い。9は完形品で全長2.8cm，幅2.3cm，厚さ0.7cm，重さ2.8gを測る。11・12・14～20・24・25は二等辺三角形を呈す。23～25は主要剥離面を残し，打面は基部方向に持つ。26～29は柳葉形に近く，26・28は原面を残す。石質は8～12・14～16・18・19・24・27が安山岩，17・22・23・25・28～30が黒曜石，26が流紋岩製。

b 1 類（31～58）　基部が浅い孤状を呈するものを一括した。総計74点のうち60点出土した。31～35は全長3cm以上の大型品で，35は縦長の剥片を利用し，周辺に荒い調整を施す。表面には原面が残る。いずれも安山岩製。37～41・56は二等辺三角形を呈し，45・47～50は三角形に近い。51・52・54・55は外弯する側縁部を有す。53は横長の剥片を素材とし，表面の周辺のみに加工を加えている。58は有肩の石鏃で弥生時代の所産であろう。石質は31～33・35・38・40・43・47～49・56・57が安山岩で，36がチャート以外は黒曜石製。44は乳白色を呈す。

b 2 類（59～78）　b 1 類に比べて基部の抉りが深いが，いまだ孤状を呈すものを一括した。51点のうち45点出土した。59～68は二等辺三角形，70～78は正三角形に近い形状を呈す。61は基部近くで段を有す。73は縄文時代後期の剥片鏃と称されるものと同一であろう。70・75・76は半磨製石鏃で，いずれも基部に近い体中央部が磨かれている。59・60・63・66・67・71・72が安山岩製で，それ以外は黒曜石製。78は乳白色を呈す。



第 23 図　石鏃実測図 1（1/2）



第 24 図　石鏃実測図2（1/2）

b 3類（79～91）　基部の抉りが深くなり，脚部を形成しだすもので，42点のうち33点出土した。脚端は86・91を除いて鋭く尖がるのが特長である。87～90は半磨製石鏃で特に90は風化しているが安山岩製である点興味深い。79～81・84・90が安山岩で他は黒曜石製。

b 4類（92～111）　明瞭な脚部を有すものだが，脚は短い。形態的なバラエティーが大きい類である。総数43点のうち38点出土した。95は側縁が鋸歯状をなすもので，特に右側縁は石鋸のそれに類似する。97・98はともに肩部をもつ。99・109は剝片鏃の範疇に入ろう。92～94・102・104・106・108が安山岩製。99が白色の黒曜石である以外は漆黒の黒曜石を用いる。

b 5類（112～123）　小型で先端部，脚部が尖るものを一括した。総数18点のうち17点が出土した。113はその代表例で全長1.7cm，幅1.4cm，厚さ0.3cm，重さ0.5gを測る。116・117・121等鋸歯状を呈すのも少なくない。121が安山岩以外はすべて黒曜石製。

b 6類（124～128）　心臓形を呈し，幅広の脚端が平坦な石鏃で，縄文時代早期から前期に多く出土する。6点出土した。124は大型の完形品で全長2.1cm，幅2.3cm，厚さ0.3cm，重さ1.18gを測る。両脚間は極めて狭い。128は小型で全長1.3cm，幅1.4cmと幅の方が広く，厚さ0.3cm，重さ0.5gを測る。126が安山岩製で他は黒曜石製。

b 7類（129～136）　全長に比べて短く，脚端が平坦なものを一括した。12点のうち9点が出土した。すべて安山岩製で，129は側縁が内弯する。全長3.4cm，幅1.9cm，厚さ0.45cm，重さ2.4gと大型である。131は特に先端が鋭い。縄文時代に属そう。

b 8類（137～147）　いわゆる鍬形鏃と称されるものを一括した。いずれも側縁が外弯し脚部もそれにつれて丸味を帯びている。全体に細かい調整が施されるのが特長である。142は完形品で全長2.1cm，幅1.95cm，厚さ0.25cm，重さ1.3gを測る。137・144が安山岩製で，それ以外は良質の黒曜石を用いる。

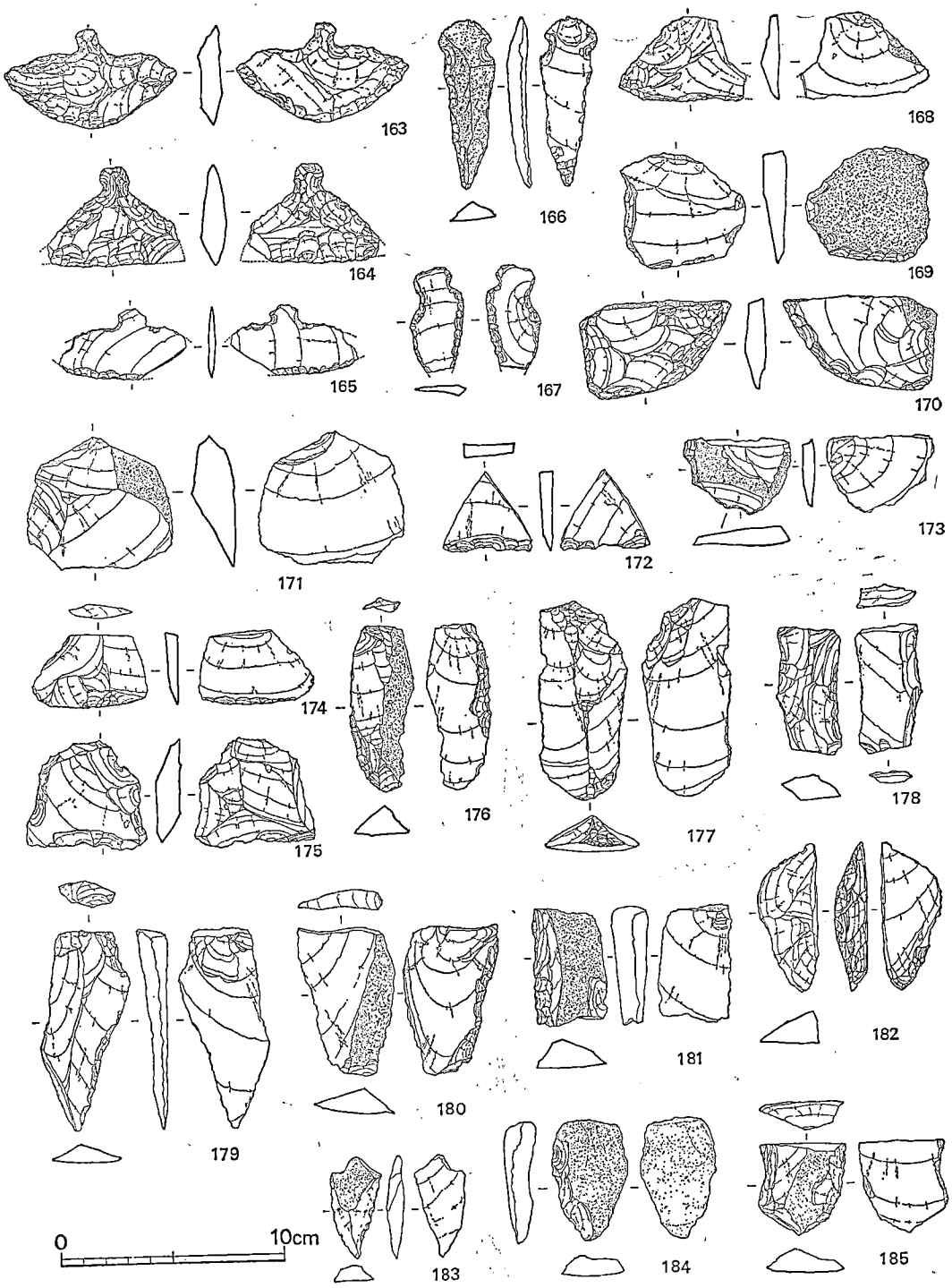
b 9類（148～162）　長身・細身で，鋭い先端部を有するものを一括した。総数41点のうち35点出土した。鋸歯状を呈すものが多く（153～162），153は完形品で，その側縁は石鋸を連想させる。全長2.5cm，幅1.55cm，厚さ0.2cm，重さ0.8gを測る。157～159は脚部がロケット状に広がる。152・153・157～159が安山岩製，それ以外は黒曜石製。

≪石　匙（図版36—第2，25図163～167）

総数5点のうち大溝Ⅰからは4点出土した。

a類（164・165）　横型石匙で，164は厚みのある横長剝片を素材としている。周縁からの剝離は比較的深いが，体中央部まで達していない。〝つまみ部〟にも細かな調整が施される。刃部は直線刃。165は厚さ3mmと扁平な石匙で周縁のみに細かな調整が施される。刃部は若干外弯する。両者とも安山岩製。

b類（166・167）　縦型石匙で，166は非常に良く整った縦長剝片を素材とする。表面は原石の表石で覆われ，周縁のみに調整を施こす。つまみ部は表，裏からの加工で作出し，打瘤は



第 25 図　石匙・削器実測図（1/3）

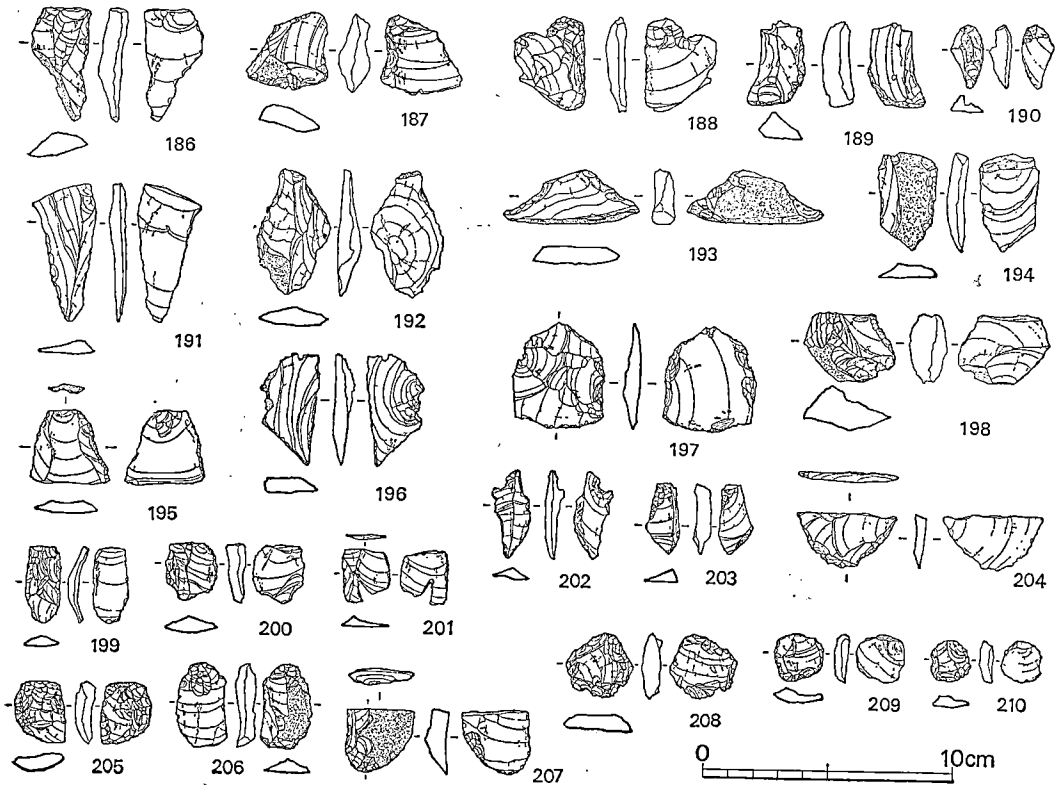
除去される。なお，先端部の裏面にも細かい調整を施す。縄文時代前期以前の所産であろう。C 9—23区，5層出土で，全長7.4cm，最大厚0.8cm，重さ12.9gを測る。167は薄手の横長剥片を素材としたもので，丁度，165の横匙を縦匙にしたものと良く類似する。両者とも安山岩製。

≪削　器（図版36—2・37—1，第25図168～185，第26図186～204）

総数は72点出土した。

a類（168～175）　基本的に幅広な横長剥片の末端部に加工を施し刃部とし，横型削器と呼べるものを一括した。いずれも安山岩製である。刃部の形態から直線刃（168・169・171～175）と外弯刃（170）に分けられる。168は直角に近い加工を施している。170は整美な削器で，扇状を呈す周縁に丁寧な調整を施している。原面の背縁を有すところから一見石庖丁を彷彿させる。C 9—9区，7層出土で，厚さ1cm，重さ36.5gを測る。

b類（176・178～185）　縦長剥片の片側ないし両側縁に加工を施す。定型的な削器で，a類に対して縦型削器と呼べよう。こちらも刃部の形態から直線刃（180・181・183），外湾刃（176・184・185）に分けられる。176・179は整った刃器状の剥片を素材とし，表面に1条の稜が



第 26 図　削器・掻器実測図（1/3）

走るが176は左側縁に裏面・表面から調整を施し，1.3cmと部厚な三角形の断面を有し，179は鋭い両縁に微細な加工をする点異なっている。前者はパティナが進み，あるいは先土器時代の所産の可能性がある。178・180・181・185は縄文時代であろう。

c類（186～194・196～198・202～203）　不定形な剝片の一部に加工を施し，刃部としたものを一括した。196は黒曜石製で横長剝片の二辺に非常に丁寧な加工を施している。191は縦長剝片の折断片を利用し，片縁に刃部を形成する。安山岩製。

d類（195・199～201）　刃器状剝片の両縁に微細な加工を施す石器で，いずれも黒曜石製。195は幅広で寸づまりな剝片を素材とする。平坦な打面は原面である。

≪掻　器（図版37—1，第26図205～209）

a類（205・208・209）　寸づまりで幅広な剝片を素材としたもので，いずれも黒曜石製。208はほぼ全周に加工が施され，ラウンド・スクレイパーに近い。209はサム・スクレイパー。

b類（206）　表皮の残る縦長剝片の先端部付近に裏面から加工を施こし刃部としている。黒曜石製。

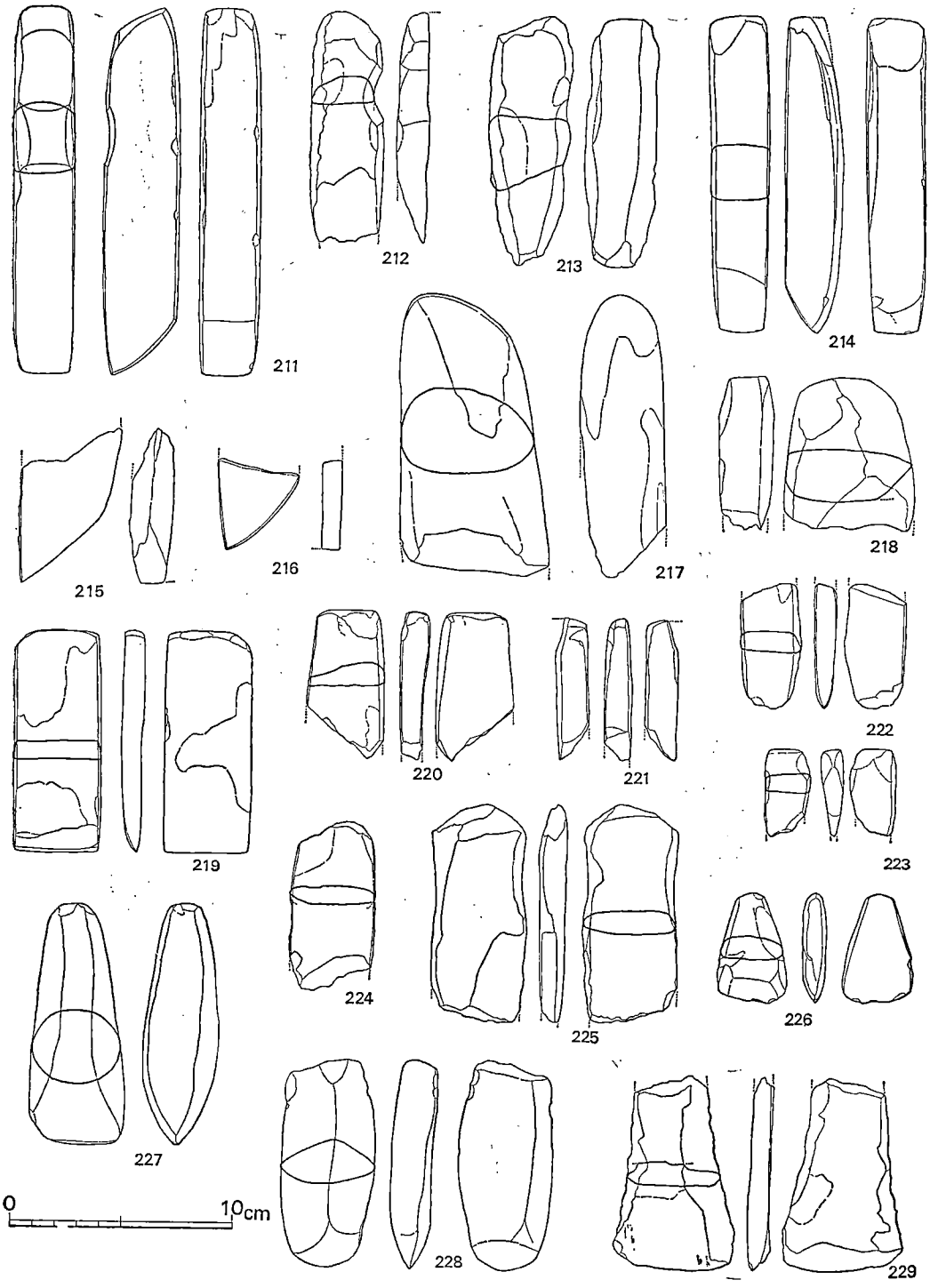
c類（207）　折断された表皮近くの剝片を素材とし，その末端部に刃部を形成する。黒曜石製。

≪磨製石斧（図版37—2・38，第27～29，第30図255～265）

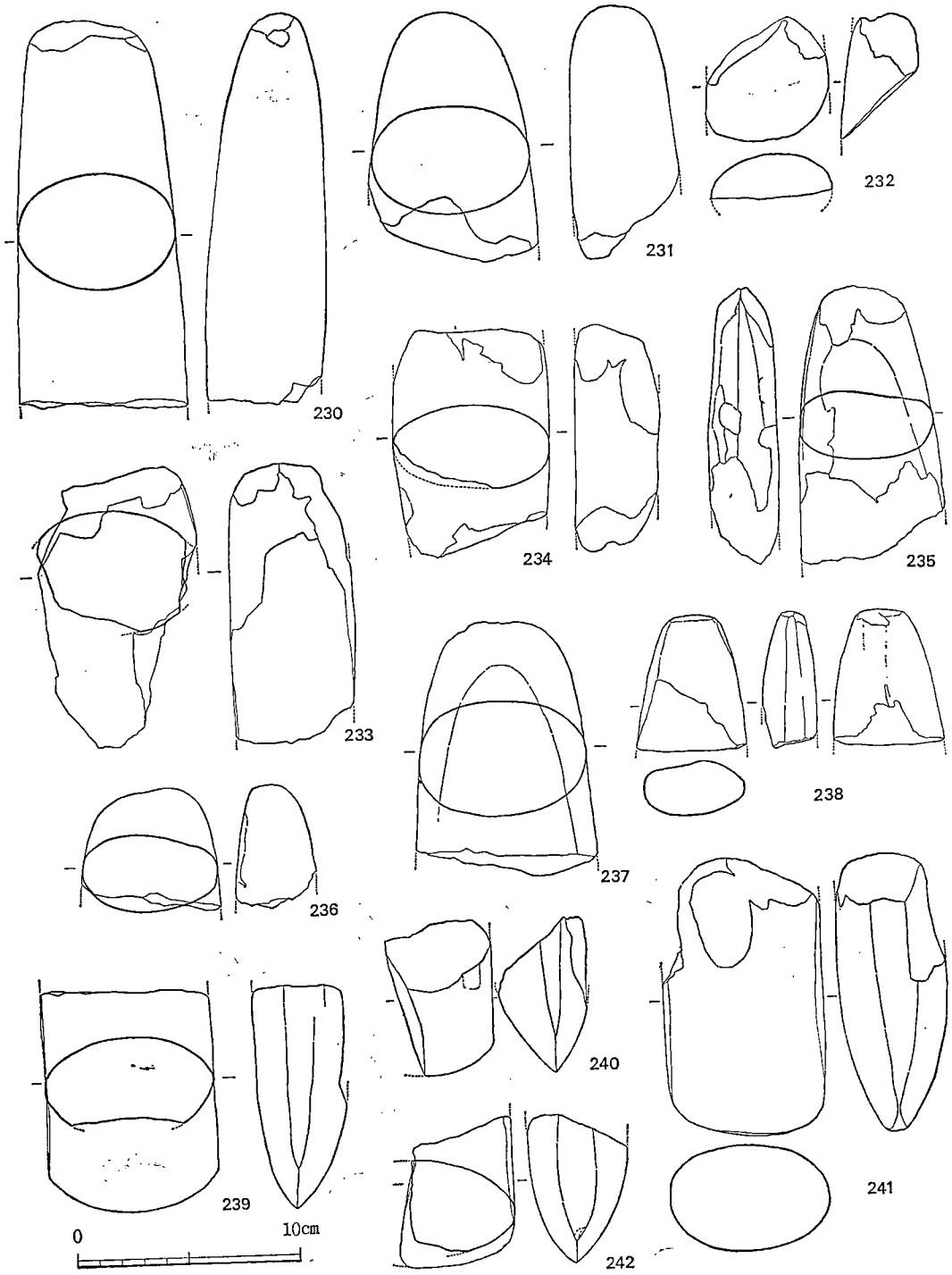
磨製石斧は総数114点のうち91点が出土した。形態はバラエティーに富み，抉入片刃石斧・柱状片刃石斧・扁平片刃石斧・片刃石斧・磨製石斧・蛤刃石斧などの他，その未製品も検出されている。

a類（211～213）　抉入片刃石斧である。211は非常に良く整った一級の完形品。全長16.35cm，幅2.7cm，厚さ3.3cm，重さ320gを測る。頭部から徐々に幅を拡げて尖鋭な刃部にいたる。刃部は外湾しており，その傾斜は約55°を測る。頭部は刃部と同方向に傾き，頭頂部から4.3cm下で幅2.3～2.8cm，深さ0.4cmと浅い抉りを入れる。抉りは両縁からの荒い敲打の後，細かい敲きを加えて整形し，最後に磨きをかけているが，その磨きはあまり丁寧に施されてはいない。E9—3区，6層出土で，どういう事情で破棄されたか興味深い資料でもある。頁岩製だが石質は軟化している。212は頭部と抉部を残す破片で，形態は211と類似する。体部・抉部の磨きは非常に丁寧である。なお，抉部の磨きは横方向，体部は不定方向。良質の蛇文岩製。213は未製品。ほぼ全体を方柱状に整形し，抉部形成の為の剝離が1回ずつ施される。部分的に体部に磨きが行なわれている。石質は砂岩で本来抉入片刃石斧に使用されるものではない。

b1類（214～215）　柱状片刃石斧である。214は頭部の両端を若干欠損するほぼ完形の石斧である。C9—4区，7層出土で，全長14cm，幅2.6cm，厚さ2.4cm，重さ189gを測る。直線的に延びる片縁に対し，反対側は弧状に外弯し，頭部から全長の⅔の所で最大厚を測る。頭部厚は復原すると1.8cm前後である。刃部角は45°と鋭い。全体の研磨は非常に丁寧。灰緑色を呈



第 27 図　石斧実測図1（1/3）



第 28 図　石斧実測図2（1/3）

す頁岩製。215は刃部破片で214に比して幅広。

b 2類（217・218）　未製品である。217は全体の整形後の研磨が施されている。頭部は斜め，218も頭部片で研磨段階のものであるが或いは使用された可能性も否定できない。両者とも頁岩製。

c 1類（219～221）　扁平片刃石斧の大型品で門田遺跡辻田地区で分類した1類より長さが大きい。219は完形品でC 9—8区6層出土，全長9.9cm，幅3.85cm，厚さ1cm，重さ91.5gを測る。やや丸みのある頭部から若干外湾する刃部を有す良品である。刃部は2段に磨かれ，約28°と非常に鋭り，現在でも使用に耐え得る。原材からの剝出時の凹凸が残るが全体に丁寧に研磨されている。220は同型の頭部片であるがあまり良い材料は用いていない。両者とも灰緑色を呈し，石質の節理を上手に利用している。蛇文岩製。221は小破片だが前者と同型であろう。淡灰色の泥岩質頁岩製。弥生時代前期末頃か。

c 2類（223）　c 1類を小型化したもので時期的にも下がり弥生時代中期初頭頃に出土するものが多い。223は刃部を欠損す。平坦な頭部は厚さ8mm前後。

c 3類（224・225）　224・225は短冊状を呈す破片で，225は体部の研磨が終了し，縁部には達していないもの。未製品であろう。

d類（226）　撥形を呈し，きわめて小型の片刃石斧。G 9区5層出土で，全長5cm，幅2.65cm，厚さ1.1cmを測り，19.5gと軽量。全体は研磨され，刃部は刃こぼれが観察される。

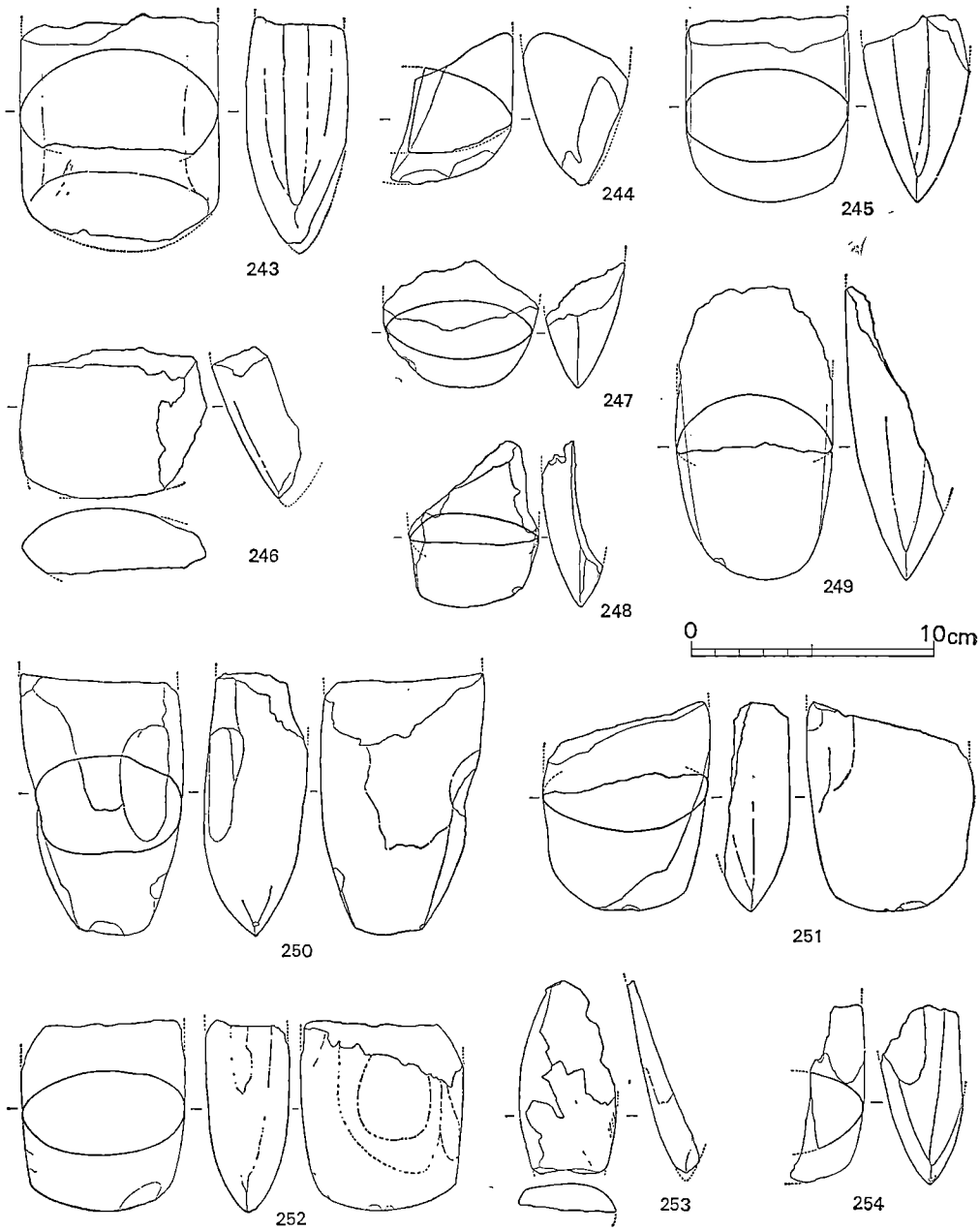
e類（227・238・248・259・291・263）　乳房状石斧で，227は断面が楕円形に近い完形品。頭部がしまるのが特長で全体に細かい敲打の後，体部のみを研磨し，側面はそのまま残す。刃部は鈍い。全長10.8cm，幅4.3cm，厚さ3.35cmで重さ221gを測る。頭部から⅓ほどの両側縁は若干抉れ，緊縛した痕跡と考えられる。硬砂岩製。238は頭部破片で，やや扁平。263は胴部から刃部破片だが扁平である。蛇文岩製。

f 1類（228・264）　蛤刃石斧で短冊型を呈す。転礫を利用したものであろう。

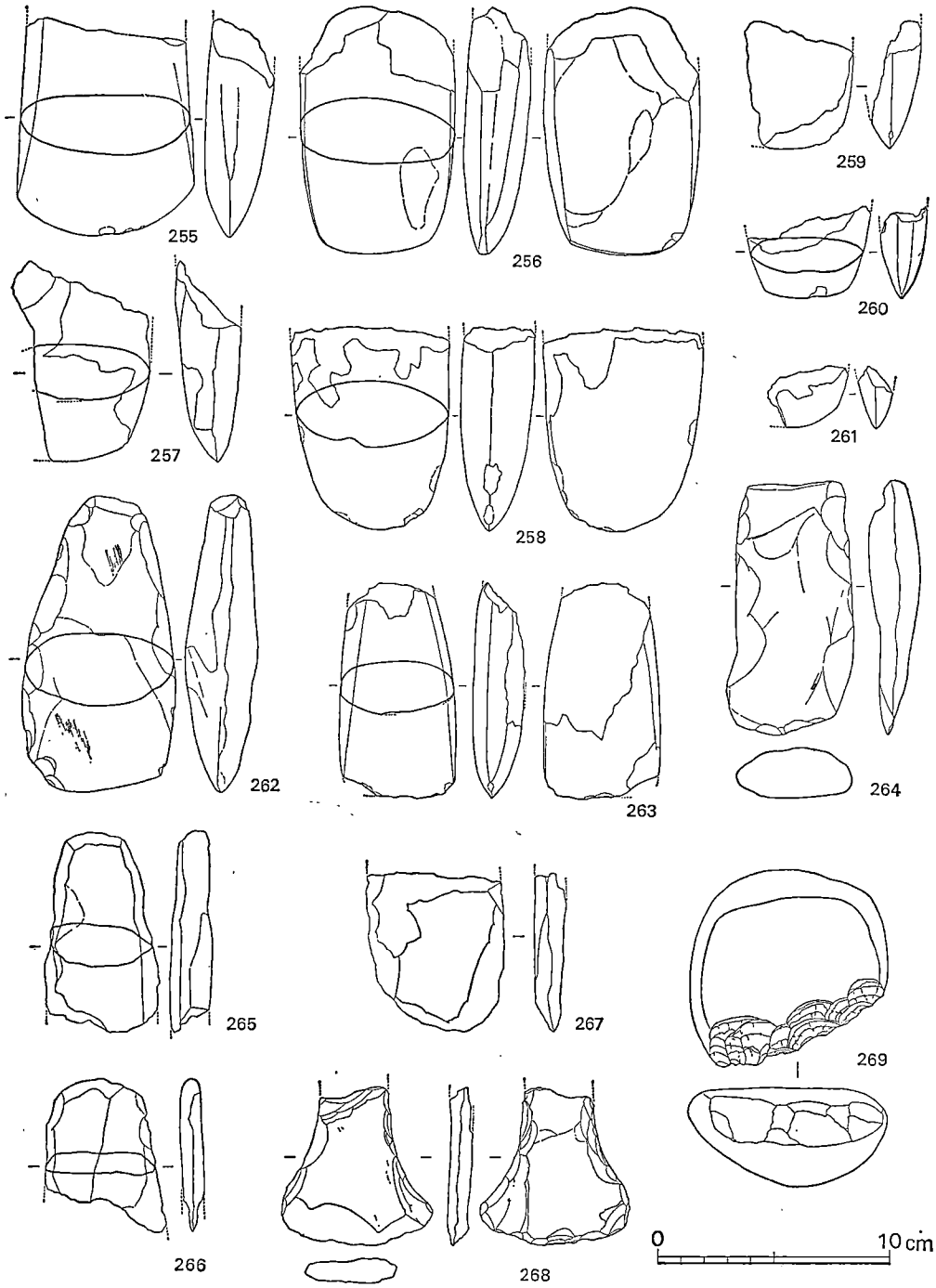
f 2類（249～258）　基本的に体中央部で最大幅と厚さをもつ蛤刃石斧で，249は刃部が鋭く，鋤先状を呈す。刃部角は60°前後で蛇文岩製。255は刃部に最大幅を有す資料で，刃部と側縁に明瞭な稜をもつ。251は稜を持つ点では似ている。両者とも砂岩製。

f 3類（262）　撥形を呈す。刃部端を欠損するが，全長12.7cm，幅6.55cm，厚さ3.1cm，重さ351gを測る。淡灰褐色を呈す玄武岩製。

g類（230～246）　太型蛤刃石斧である。230は刃部を欠損するが，現在長17.2cmを測る大型品で砂岩製。全周に細かな敲打痕が観察される。刃部は239・243のように鋭い刃先から急に膨らみを持つ胴部にいたる。241は刃部が擦れて丸くなっている。石材は，230・237が砂岩の他は玄武岩を用いる。



第 29 図　石斧実測図3（1/3）



第 30 図　石斧実測図4（1/3）

≪刃部磨製石斧（第27図229，第30図265・266）

a類（229・265）　撥形を呈するもので，229は絹雲母片岩製。刃部・頭部を欠損する。厚さ9㎜と扁平。265は刃部を欠損する緑泥片岩製。

≪打製石斧（第30図267・268）

総数6点すべてが出土した。

a類（267）　短冊型を呈す刃部破片で，厚さ1.1㎝を測る。緑泥片岩製。他に4点出土した。

b類（268）　撥形を呈す刃部破片で，刃部幅4.4㎝，厚さ0.6㎝を測る。

≪石庖丁（図版39，第31図）

総数40点が出土した。石斧と同様に5・6層の出土量が28点と70％を占め，石鏃・削器等に比べ時期的に下る事が，ある程度判る。大溝Ⅰよりは32点が出土した。製品と未製品があり，すべて外弯刃である。

a類（270・271）　三角形を呈す石庖丁で2点出土した。270は両端を若干欠損するがほぼ完形品。復原全長12.7㎝，幅（背縁から刃部まで）6㎝，厚さ0.65㎝，重さ75㌘を測る。背縁はほぼ直線で，両端から直線的に刃部に移行し，中央部で丸みを帯びる。紐孔は大きくあけられる。全体の研磨は丁寧で，刃部は刃こぼれが顕著。271は背縁から刃部片で，両者とも硬砂岩製。弥生時代前期に類例が多い。

b類（272～276・278）　両背縁が尖り，背縁と紐孔間が比較的広いもので，7点出土した。いずれも破片である。274が基本的な形態を示すもので，背縁から刃部へのカーブはゆるい。砂岩製。時期は弥生時代前期末から中期末に属そう。

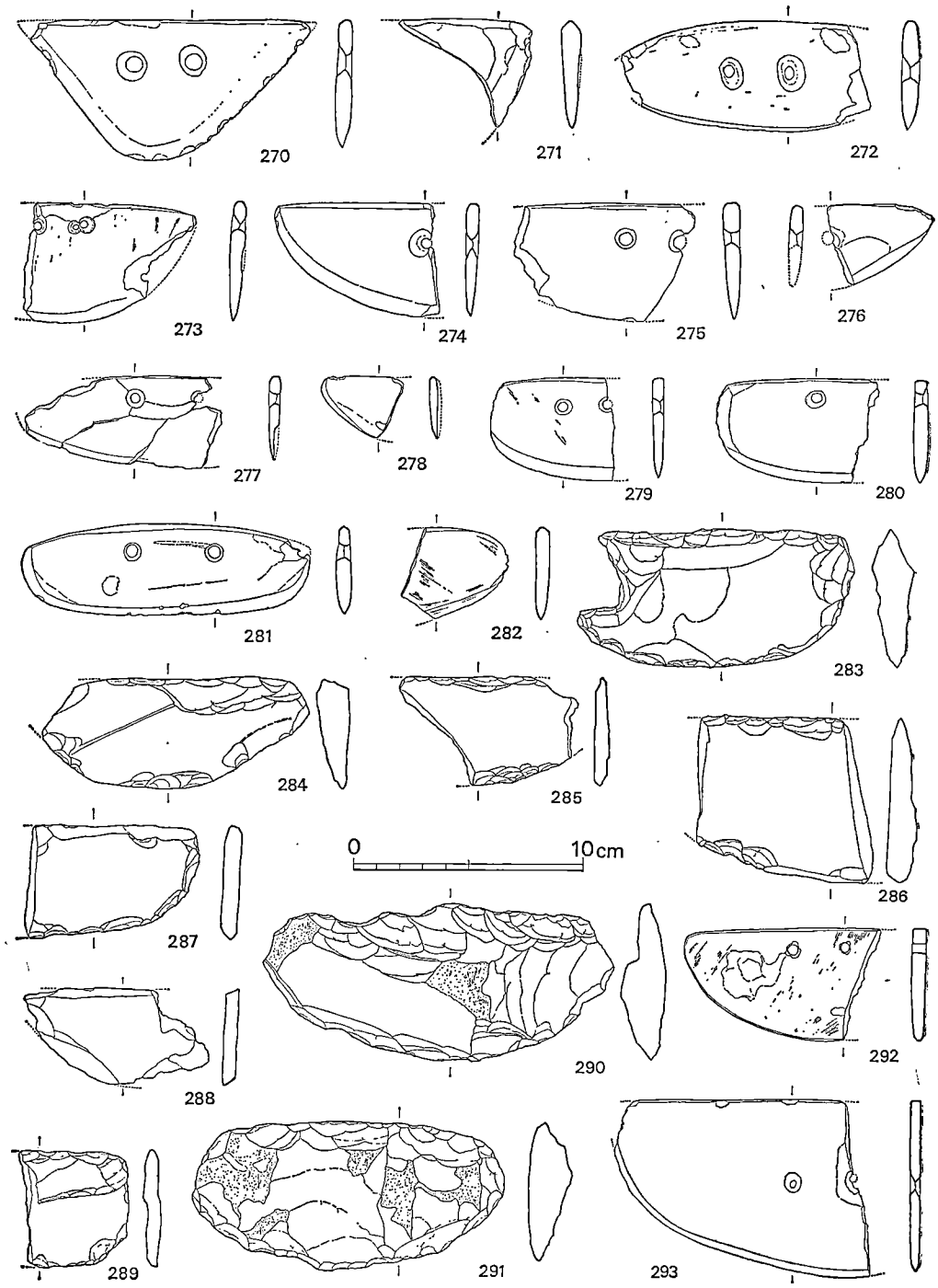
c類（279～282）　ほぼ直線の背縁から刃部に移行する間に側縁を有し，紐孔が背縁によって穿孔されるもので5点出土した。281は輝緑凝灰岩製で，全長12.4㎝，幅3.9㎝，厚さ0.6㎝，重さ52.7㌘を測る。外湾する背縁から外に開きぎみに刃部が形成される。279・280は幅が広いが同型で281より明瞭な側縁を有す。他に1点出土している。いずれも硬砂岩製。このc類の石庖丁は門田遺跡辻田地区の調査結果から弥生時代後期の所産である可能性が強い。

d類（283～293）　未製品を一括した。12点出土し，その痕跡より3つの工程を示す好資料が出土した。

2工程　原材から得られた剝片に対し，縁を打面として交互剝離を施し，背縁と刃部の大まかの形態を整えたもの（283～290）。得られた資料はいずれも，この段階で破損し破棄されたのであろう。

3工程　全体の形が出来あがったものに対し，体部の研磨を開始した段階で破棄された（290・291）。この工程で全体の研磨を施す。

4工程　全体の研磨が終了した後，紐孔を穿いたもの（292・293）。



第 31 図　石庖丁実測図（1/3）

以上の３つの工程の資料であるが，重要なのは，工程４の段階では，いまだ刃部が形成されていない点がある。確かに刃部に対する研磨は終了しているが刃は無い。これは，背縁を上にして持ち刃部を砥石（有溝砥石？）に対して直角にあて磨いたもので，決して刃部形成を意識したものではない。従って工程４の穿孔が完了後，刃部を研ぎだし完成品と成る事が判る。293は穿孔の失敗で破棄され，292は，穿孔後何らかの要因で破損し破棄されたものであろう。

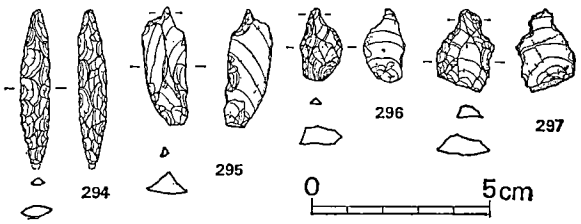
これらの資料から工程２の前に，原材から目的的剝片を剝出する工程（１工程）と，工程４の後に，刃部形成工程（５工程）が存在した事が推測できる。

石材は289が緑泥片岩の他は砂岩質。

≪石　錐（図版40―１，第32図）

総数４点のうち３点出土した。

ａ類（294）　一見細身の尖頭状石器を思わせる。全体に剝離を施し，断面は長円形を呈す。Ｄ９―24区７層出土で，長さ4.3cm，幅0.8cm，厚さ0.3cmを測り重さ1.4gと軽い。縄文時代後期頃に多く出土し，春日市柏田遺跡出土石錐Ⅱａ類に似る。



第 32 図　石錐実測図（1/2）

ｂ類（295・296）　縦長剝片の末端部に抉り込み状の加工を施し，先端部を形成する。295は表面→裏面からの剝離で先端部を作出する。黒曜石製

≪磨　石（図版40―１，第33図298～311）

総数21点出土し，５層に10点と多い点が時期的に気に懸る。大溝Ⅰでは18点出土した。

ａ１類（298～301）　円形に近いもので径が11cm以上と大型品。298は長径13cm，短径10.8cm，厚さ６cm，重量1,402gを測る。下面は平担に近くなるのが特長である。花崗岩製。299は長径11.9cm，短径10.6cm，厚さ５cm，重量1,009gを測り砂岩製。300・301は前者に比べて厚みを増す。

ａ２類（302～306）　ａ１類の小型品で303は径９cm前後で，厚さ4.9cmを測る。298と同じ花崗岩で他は砂岩質。いずれも全周の磨痕が著しい。

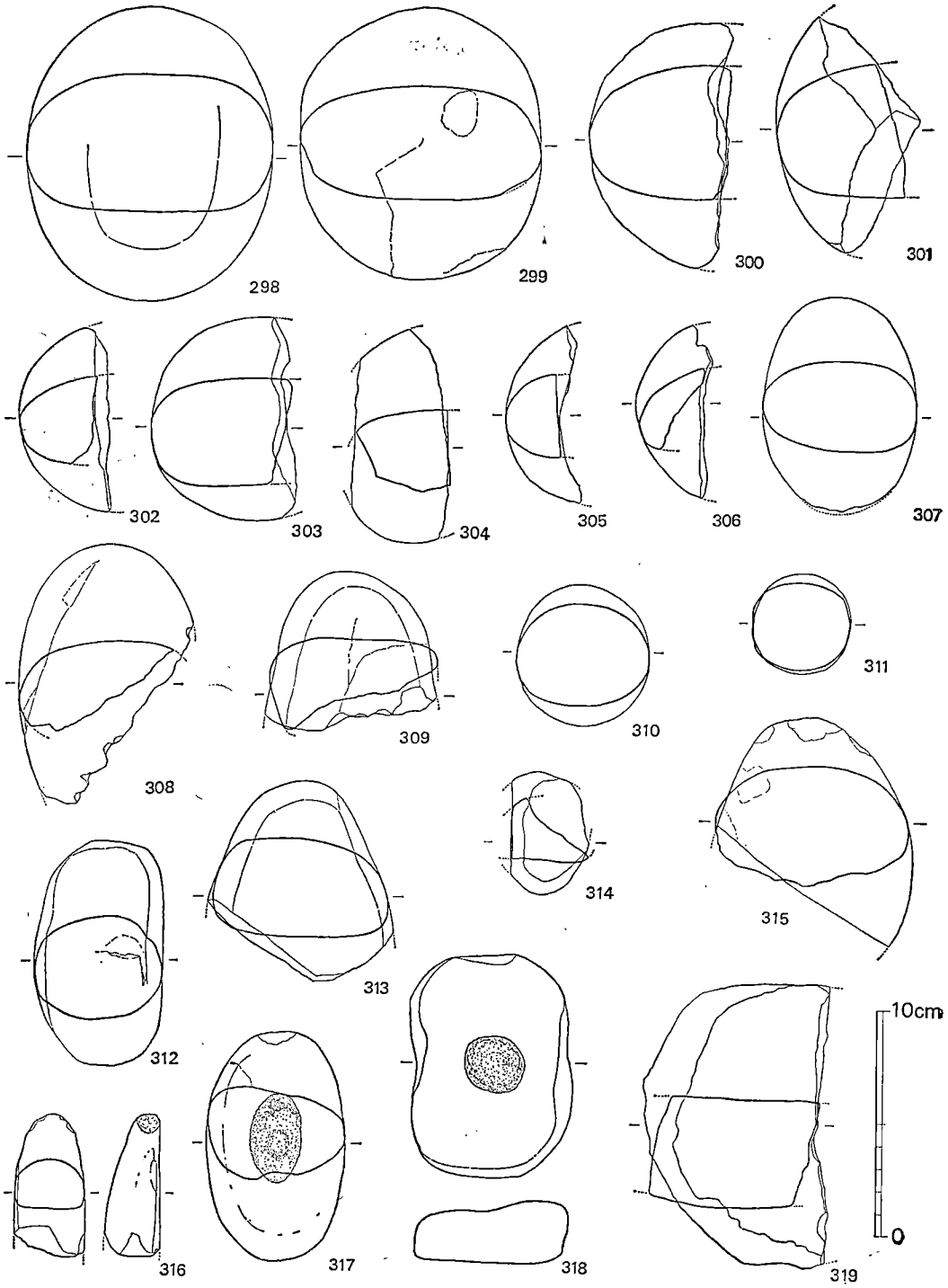
ｂ類（309）　長円形に近い礫を用いる。309の上面中央部はやや凹む。

ｃ類（310・311）　小型で円球状を呈す磨石で２点出土した。310は径６cm前後，厚さ4.5cm，重さ209gを測る。下面が若干平たい。311は径4.3cm，厚さ3.9cmとほぼ正円で，重量90.5gを測る。周縁には敲打痕がみられ，敲石としても用いられたようだ。両者とも硬砂岩製。

≪敲　石（図版40―１，第33図312～316）

ａ１類（312）　磨石のｂ類に似た長円形の礫の短側縁に敲打痕が残る。重さ447g。

ａ２類（315）　末広がりな転礫を用いたもので，幅狭な一端に敲打痕がのこる。硬砂岩製。



第 33 図　磨石・敲石・凹石・石皿状石器実測図（1/3）

砂岩製。

≪凹　石（第33図317・318）

318は凹部で2.3cmとやや薄手で長辺の中央両側に抉りが入るのが特長である。重さ290g。砂岩質。

≪砥　石（図版40—2・41—1，第34・35図）

総数42点と多く出土した。地点ではC9区に圧倒的に多い事が目立ち，層位的には5・6層に多く，石庖丁と同様の出土状態を示す。大溝Iでは38点出土している。

a類（320・322・323）　大型品で部厚い石材を用いる。320は厚さ8.2cmと特に厚く，靴型を呈す。緻密な二面の研砥面を有す。322は舟型を呈し，上・下二面で，下面の方が荒い目を有す。両者とも砂岩製。323は破片で二面を有す。

b類（324～330）　a類より小型だが，厚みのある砥石を一括した。324は砂岩製の荒砥で二面の研砥面を有す。329は中央部に凹部を有し，凹石に転用されたと思われる。いずれも砂岩系の石材を用いる。

c類（331・332・341）　棒状を呈す砥石で331は完形品。331は全長19.5cm，幅4.8cm，厚さ2.9cmを測り，重さ390g。上面の研砥面は斜めに走る。全体に亀裂が入り込む事から，熱変化を受けていると思われる。332は方柱状で，断面は方形を呈す。四面とも使用されている。やはり，亀裂が入る。両者とも粘板岩質の石材を用いる。341は仕上砥で，泥岩製。

d類（333～340）　断面は薄く，板状砥石と呼ばれるものを一括した。336は典型的なものだが上・下両端を欠損している。末端は5mmと非常に薄く，良く使用された事が判る。粘板岩製。335は小破片だが，かなり使用減りしている。砂岩製で中砥。339は幅広な砥石である。砂岩質頁岩。

e類　有孔砥石だが出土していない。

f類（343・345）　研砥面に溝状の凹みが走るもので，有溝砥石である。343は砂岩製。研砥面の中央に上・下方向の溝が走る。345は大型の破片で，幅9.3cm，厚さ2.9cmを測る。一面に斜方向の3本の溝がみられる。砂岩製。この有溝砥石は石庖丁の第3工程の刃部面取り作業に使用される場合が多かったのであろう。なお，345は火を受けた痕跡が残る。

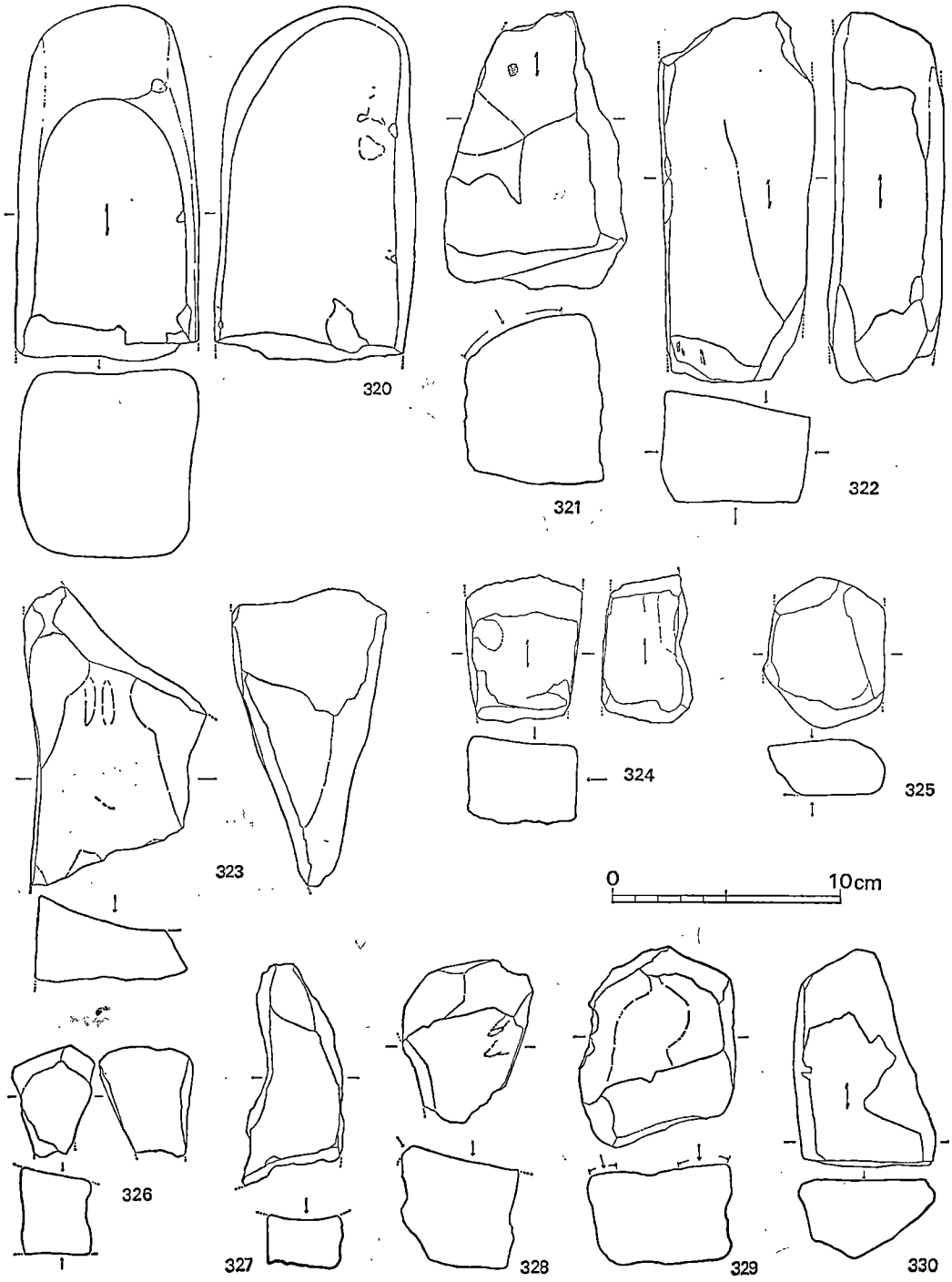
g類（346）　砥石の原材と思われる。砂質頁岩製。

≪石　錘（図版43—2，第36図）

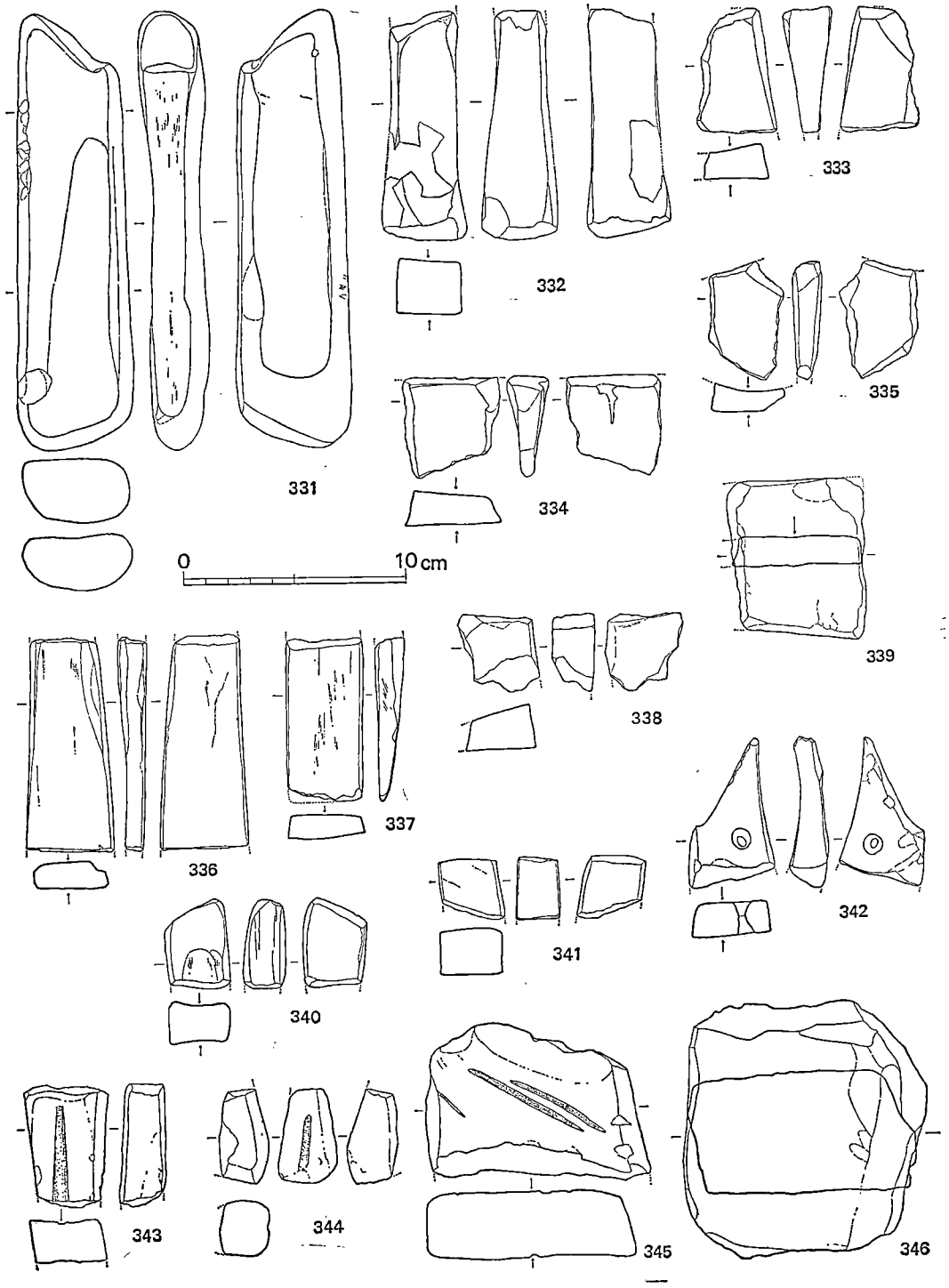
いずれも礫の長軸両端を打ち欠いた礫石錘で，348は70g，350は30g，351は25.6gを測る。形態等柏田遺跡出土の石錘に類似する。

≪紡錘車（図版42—1，第37図）

紡錘車には土製と石製がある。前者は25点，後者は4点の計29点が出土した。6層に15点と最も多く，地区別ではC9区16点と，石庖丁・石斧・砥石と同様な出土の有り方を示す。



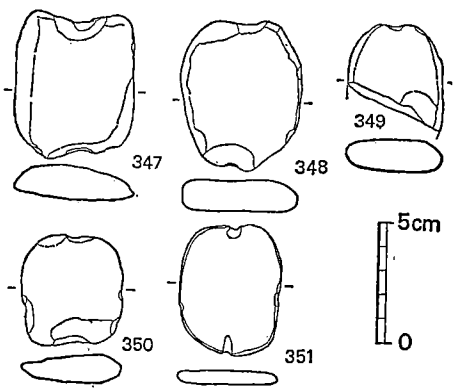
第 34 図　砥石実測図1（1/3）



第 35 図　砥石実測図2（1/3）

a類（352～370）　土製紡錘車で355が最大で径5.2cm，重さ39.5g。370が最小で径2.95cm，重さ12.5g。器面をよく調整しているもの（352・355・356～359・361等）と，砂粒が多く脆弱なもの（353・368等）がある。

b類（371～374）　石製紡錘車で，371は径5.25cm，厚さ0.8cm，重さ32.6gを測る。周縁は幅5～6mmと面取り状に磨く。374は小型で径4.3cm，厚さ0.57cm，重さ19.1gを測る。373は重さ21.5g。いずれも全面とも非常に良く磨かれている。

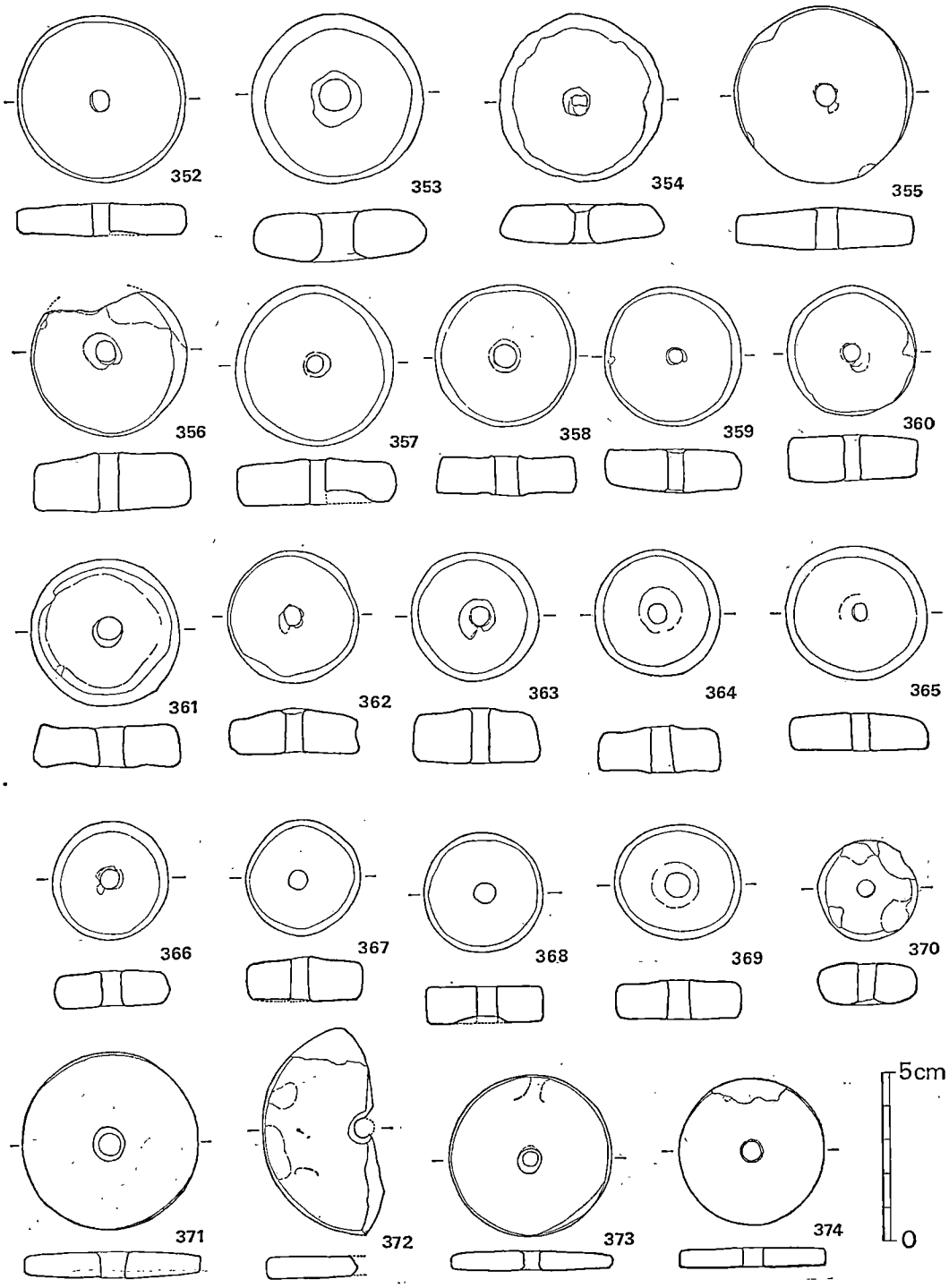


第36図　石錘実測図（1/3）

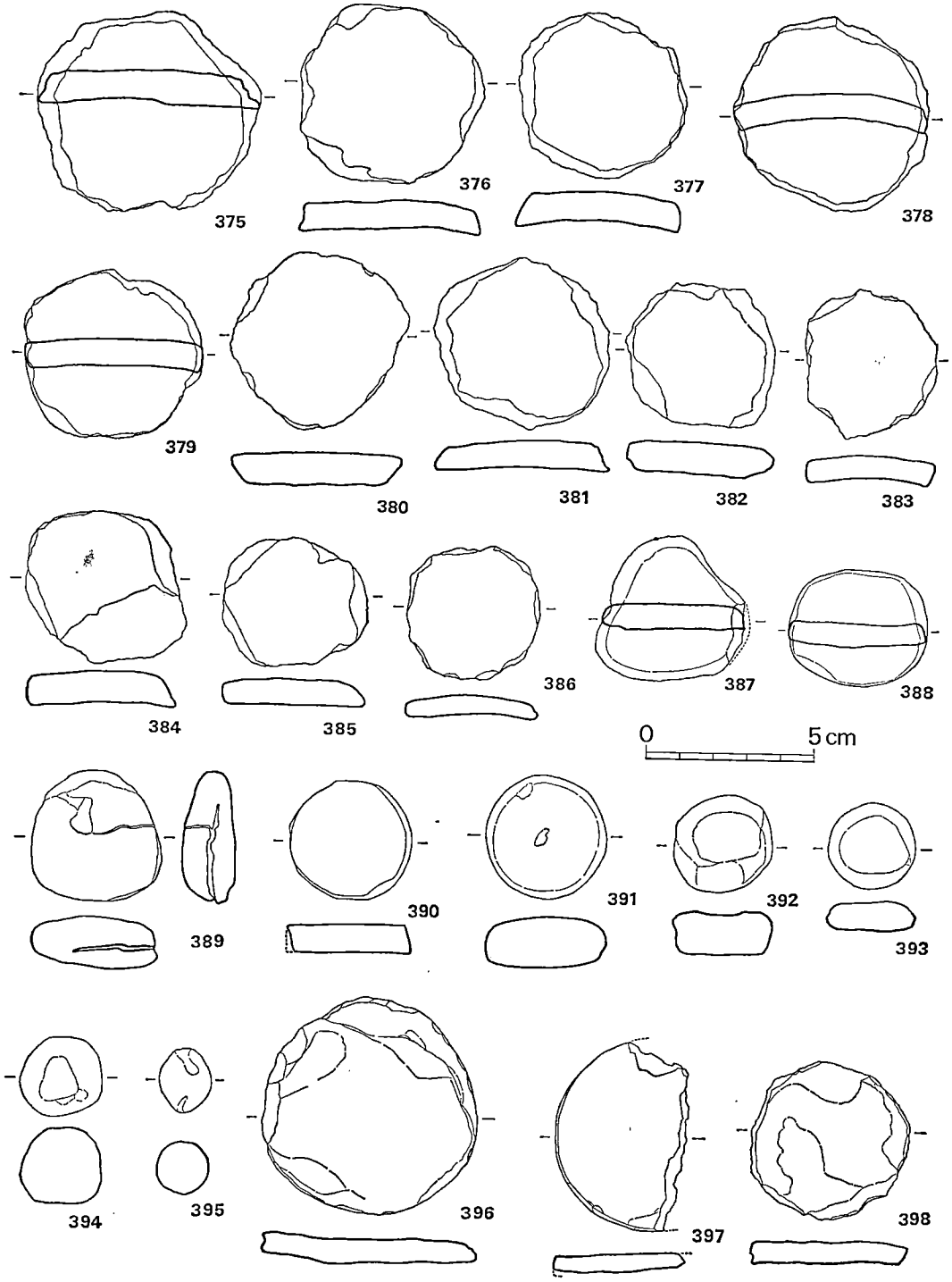
表5　紡錘車一覧表

（単位　cm・g）

	出土地点	層位	径	厚	孔径	重量	色調	備考	台帳No.
352	C9－14	6層	4.95	1.0	0.58	27.0	淡灰色	小礫多い	Bo10
3	F10－2	〃	4.8	1.46	0.84	41.7	暗灰色	石英粒多い	22
4	E9－15	7層	4.8	1.2	0.5	34.0	淡灰色		21
5	D9－23	〃	5.2	1.15	0.6	39.5	淡茶褐色	全面磨き	25
6	D9－24	〃	4.6	1.75	0.52	39.2	黒褐色	一部欠・部厚い	39
7	C9－26	5層下	4.65	1.3	0.5	32.2	淡灰色	〃	28
8	C9－3	〃	3.96	1.35	0.5	23.2	〃		6
9	F10－8	6層	4.1	1.22	0.41	27.3	〃		23
360	F10－2	〃	3.83	1.4	0.52	24.3	淡茶褐色		22
1	不明		4.4	1.2	0.6	26.5	淡灰色		不明
2	C9－4	7層	3.88	1.34	0.5	23	〃		19
3	B9－23	6層	3.77	1.56	0.5	28	〃		52
4	D9－3	〃	3.77	1.4	0.6	24	〃		15
5	C9－12	〃	4.1	1.2	0.42	22	淡茶褐色	石英粒多い	13
6	C9－13	〃	3.46	1.2	0.5	17.3	淡灰色		16
7	C9－19	5層下	3.4	1.33	0.48	17.2	淡赤褐色	器面風化	14
8	C9－23	6層	3.54	1.07	0.58	13.8	灰褐色	〃	8
9	C9－7	7層	3.57	1.23	0.65	16.1	淡灰色		17
370	C9－3	〃	2.95	1.3	0.5	12.5	〃		29
1	C9－19	7層	5.25	0.8	0.6	32.6		石製	51
2	B9－23	6層	6.06	0.64	0.53	24.2		〃　半損	49
3	G9－18	〃	4.8	0.52	0.42	21.5		〃	18
4	D9－13	〃	4.3	0.57	0.6	19.1		〃	26



第 37 図　紡錘車実測図（1/2）



第 38 図　土製円盤・石製円盤・土製品実測図（1/2）

≪土製円盤（第38図375～393）

a類（375～386）　円盤状に土器片を欠いたもので，周縁は欠いたままの姿である。いずれも甕形土器片で，器表に刷毛目が見られる。

b類（387）　周縁を磨いたもの。茶褐色を呈し，焼成は良くない。

c類（398～391）　土器片利用ではなく，粘土から成型して焼成したもの。389は不整円形で赤褐色を呈す。390は周縁が面取りされている。391は紡錘車の穿孔前の姿に酷似する。径3.72cm，厚さ1.53cm，重さ24.6g。

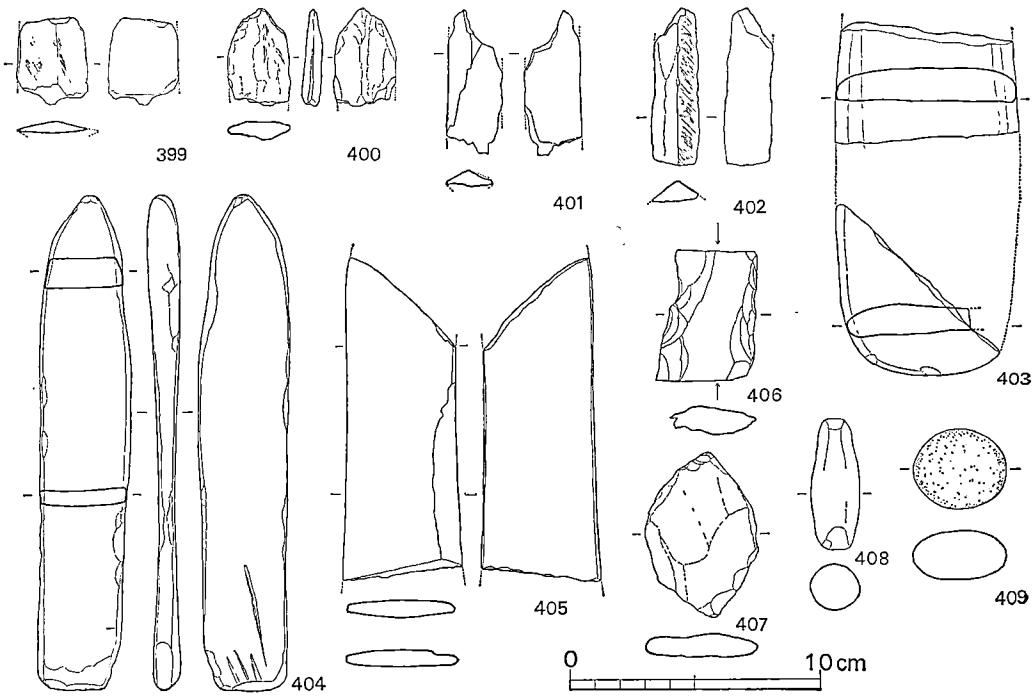
≪石製円盤（第38図396・397）

3点出土した。396は経6.3cm，厚さ0.65cm，重さ46.5gを測る。ほぼ円形に整形された段階で，磨きは行なわれていない。397は表面・側縁の磨きが行なわれている。蛇紋岩製。両者とも紡錘車の未製品であろう。

≪土製品（第38図394・395）

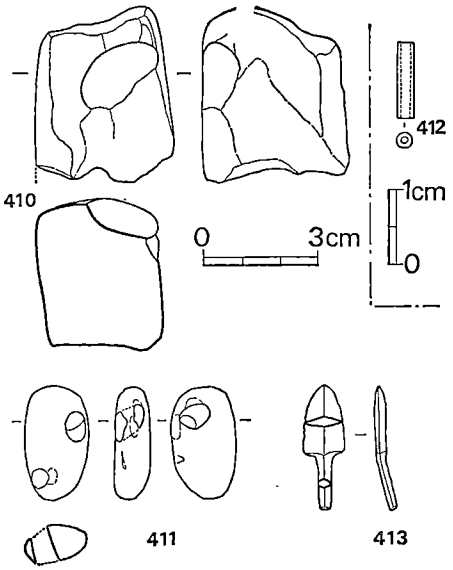
両者とも粘土を捏ねて整形し焼成したもので，394は直方体，395はラクビーボール状を呈し，小型。

≪磨製利器（図版42―2，第39図399～406）



第39図　磨製利器・その他の石器実測図（1/3）

399は磨製石剣の胴部表皮破片で，側縁も欠損する。鈍い鎬が走る。頁岩製。400は先端部に近い未製品片と思われ，右側に研磨が施される。401は磨製石鏃であろうか。包含層出土の402も近い形状を呈す。粘板岩製。403は雲母片岩製で，板状の甲板を呈す。側縁は丁寧に研磨され，特に先端部に意識的に研ぎだしている。表面とした方は，中央部が砥石状に凹んでいる。基部は平坦。全長19.8cm，幅は先端部で2.8cm，最大幅3.7cm，基部幅2.95cm，厚さは先端部に厚く，1.25cm，中央部0.8cm，基部1cmを測り，重量は150g。405は上・下を欠損する。中央部は両端とも緩やかに内弯するが，左側上部は反転して外弯するカーブを有す。また下方は内湾ぎみだが外方へ広がる。表・裏面は丁寧に研磨され，両側縁は純く，部分的に面を呈す。断面は，大略レンズを呈す。形態的には〝戈〟に近いが，鎬に該当するものはない。雲母粘板岩製？。406は上・下両端のみを非常に丁寧に研磨したもので，粘板岩製。403は扁平カマボコ状を呈す断面を有す。全体が荒く磨かれている。



第40図　その他の石器・銅鏃実測図(½・1/1)

≪その他の石器（図版42—2，第39図407～409，第40図411・412）

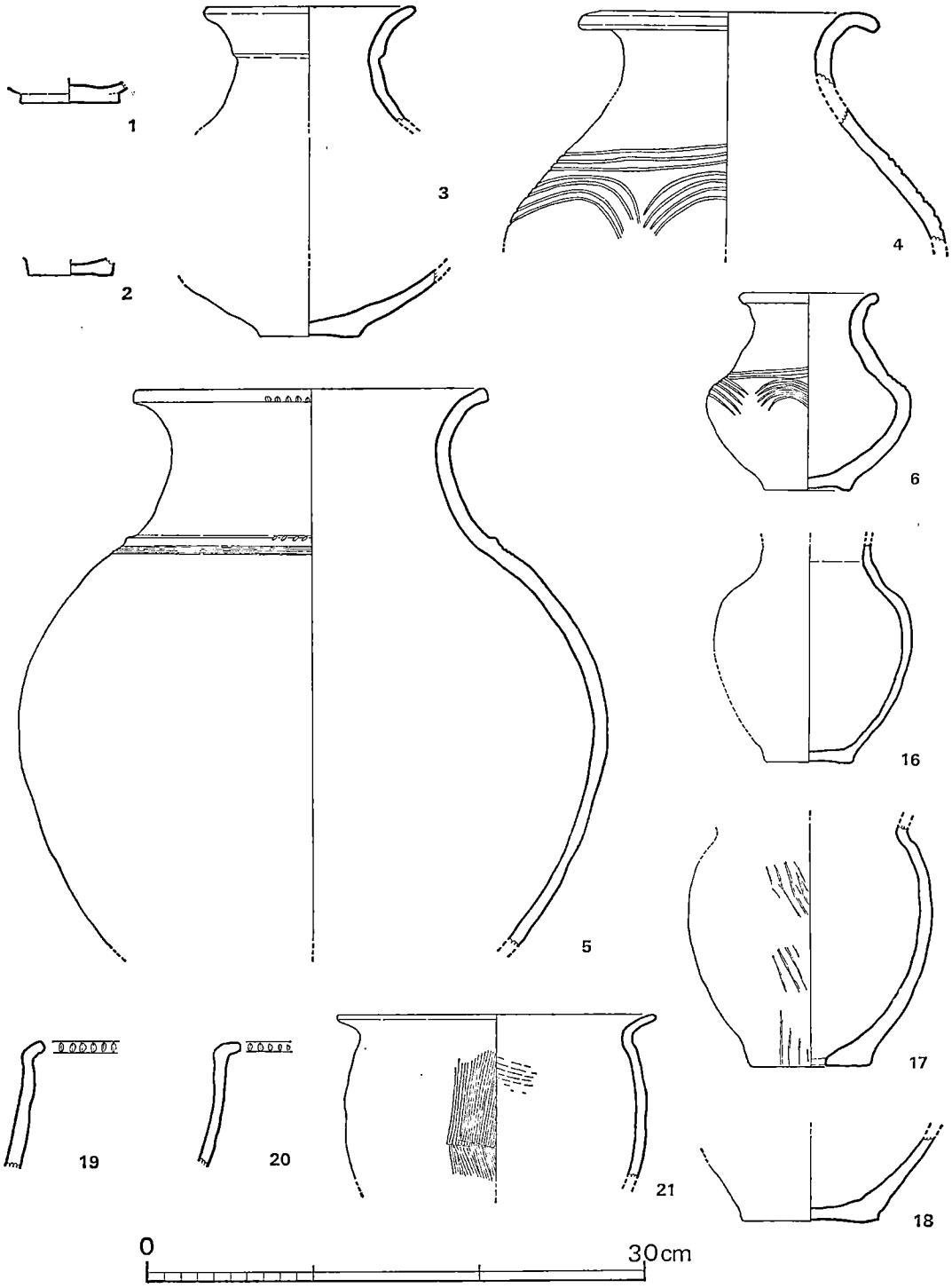
407は両端を荒い剝離で尖らせた石器で片面は自然面で覆われる。408は砂岩製でテトラポット型を呈す。形態的に門田遺跡辻田地区の19号袋状竪穴から出土した石器に類似する。全長5.2cm，頭部の抉れ部1.25cmを測り，穿孔後の研磨に用いた石器であろう。411は有孔石製品で泥岩製。門田遺跡辻田地区6号住居跡より同じ形態のものが出土しているが，こちらの方が一回り大きい。孔は上部に偏在して穿たれる。全長2.9cm，厚さ0.95cm，孔径0.6cm前後で重さ5.5g。412は碧玉製の管玉で完形品。C9—2区，7層出土。全長9.8mm，径3mm，孔径0.9mmときわめて小型。（木下）

≪銅　鏃（図版43—1，第40図413）

基部で折れ曲った資料で，長さ3.3cm，最大幅1.1cm，厚さ0.28cm，茎部の長さ1.4cm，最大幅0.35cm，厚さ0.25cmを測る。鏃身の断面は扁平な菱形を呈し，中央に鎬が走る。茎部の断面は菱形をなす。おそらく弥生後期のものであろう。（井上）

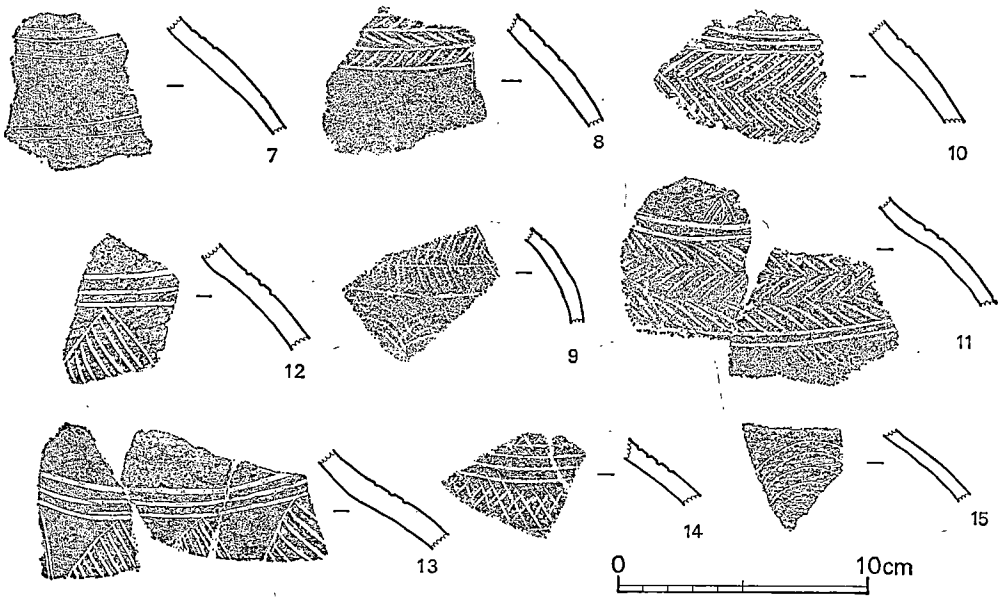
C　出土弥生式土器

≪前期の土器（図版33—2・44，第41・42図）



第 41 図　前期弥生式土器実測図1（1/4）

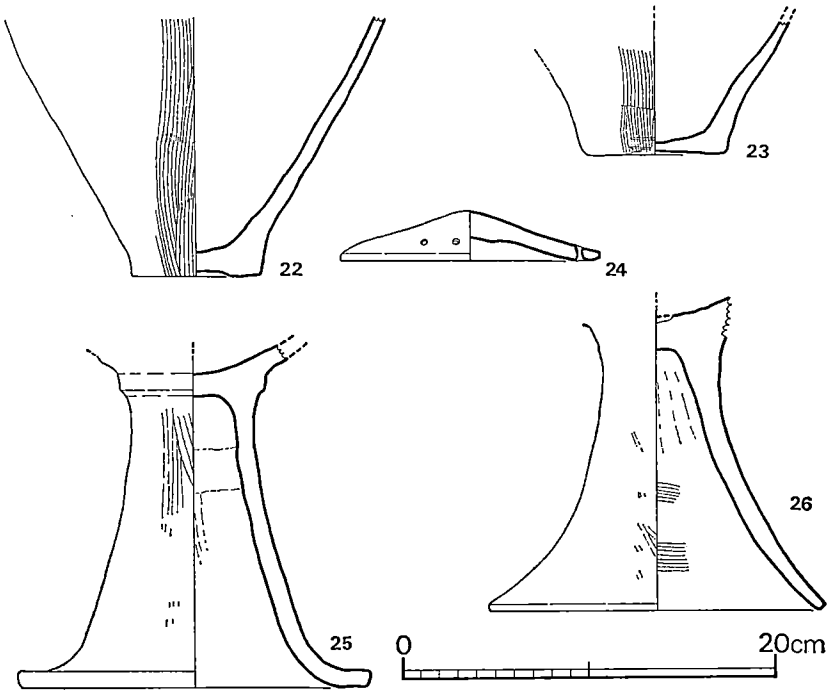
壺形土器（1～18）　1は円盤貼付けの底部で，底径6㎝を測り胴部から底部への屈折は明瞭である。外面ヘラ磨き，内面ナデて仕上げている。胎土には若干の砂粒を含み，焼成は良好である。色調は外面淡黄白色，内面暗灰色と異なる。2も底部資料で，底径5㎝を測る。1と比べ胴部から底部への屈折は緩やかで，若干上げ底気味である。調整は1と同じ。色調は淡茶褐色で胎土・焼成とも良い。3は胴部を欠くが同一個体の資料である。口径12.6㎝を測る有段状口縁の壺で，外面全体と口縁部内面を丁寧なヨコヘラ磨き，内面ナデて仕上げた作りの良い土器である。底部はわずかに凹み気味で，径6㎝を測る。色調は黒褐色を呈し，焼成も良い。4は胴上半部の破片資料で，復原口径17.8㎝を測る。肩部には3条のヘラ描き平行沈線と4条の連弧文を配した壺で，口縁部の外反は強く，垂れ下がり気味である。外面ヘラ磨き，内面ナデて仕上げた土器で，外面橙褐色，内面淡黄褐色を呈す。5は底部を欠く資料で，口径21.4㎝，胴部最大径35.4㎝を測る大型の壺である。球形の胴部にゆるやかに外反する口頸部がつく単口縁の土器で，肩部に1条の貼付け凸帯とその下に浅い3条のヘラ描き沈線をめぐらし，口縁端部下面に刻目を施している。内外ともナデて仕上げている。色調は外面褐色，内面灰褐色を呈し，外面下半に大きな黒斑がみられる。胎土には小砂粒を含む。6は肩の張った胴部に「く」字状にゆるやかに外反する単口縁の口縁部がつく小型壺である。復原口径8.2㎝，器高11.7㎝を測る。底部は凹み底をなす。肩部には2条のヘラ描きによる平行沈線と5条の連弧文を配している。内外ともナデ仕上げの灰黒色を呈す焼成良好の土器である。7～15は肩部付近に文様をもつ壺の破片資料である。大きくヘラ描きによる文様のもの（7・8・10・12・13・14），



第42図　前期弥生式土器実測図2（1/3）

貝殻腹縁による文様のもの（15），両者を組合せた文様のもの（9・11）の3つがある。文様的には平行沈線のみのもの（7），有軸羽状文のもの（8），有軸羽状文と連弧文のもの(9)，平行沈線文と無軸羽状文のもの（10），平行沈線文と無軸羽状文と異型山形文を組合せたもの（11），平行沈線文と異型山形文のもの（12・13），平行沈線文と網目文と山形文を組合せたもの（14），連弧文のみのもの（15）がある。調整は全て外面ヘラ磨き，内面ナデ仕上げである。色調は7・15が茶褐色，14が淡茶褐色，12が淡褐色，13が褐色，8が淡黄褐色，11が淡黄白色を呈し，全体に焼成は良い。16は口縁部を欠く資料で，平底の底部に肩の張った長胴の胴部がつく小形壺である。外面ヘラ磨き，内面ナデて仕上げ，肩部内面に指押え痕を残している。外面は淡黄褐色，内面灰褐色を呈し，胎土・焼成とも良好な土器である。17は口縁部を欠く資料である。球形の胴部に大きめの平底がつく壺で，底部には焼成後の穿孔がみられる。外面調整は粗い刷毛，内面ナデて仕上げた粗雑な作りの土器である。色調は淡黄褐色を呈す。18は平底の底部付近の資料で，底径8㎝を測る。内外ともナデ仕上げで色調は灰褐色を呈す。

甕形土器（19～23）　19・20とも口縁部付近の小破片で，わずかにつまみだした口縁の端部に刻目を施した甕である。外面刷毛，内面ナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。21は口径19㎝を測る胴部上半の資料である。丸味をもった胴部にゆるやかに外反する口縁部がつく甕で外面刷毛，内面ナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は淡黄褐色を呈し，胴



第 43 図　前期弥生式土器実測図3（1/4）

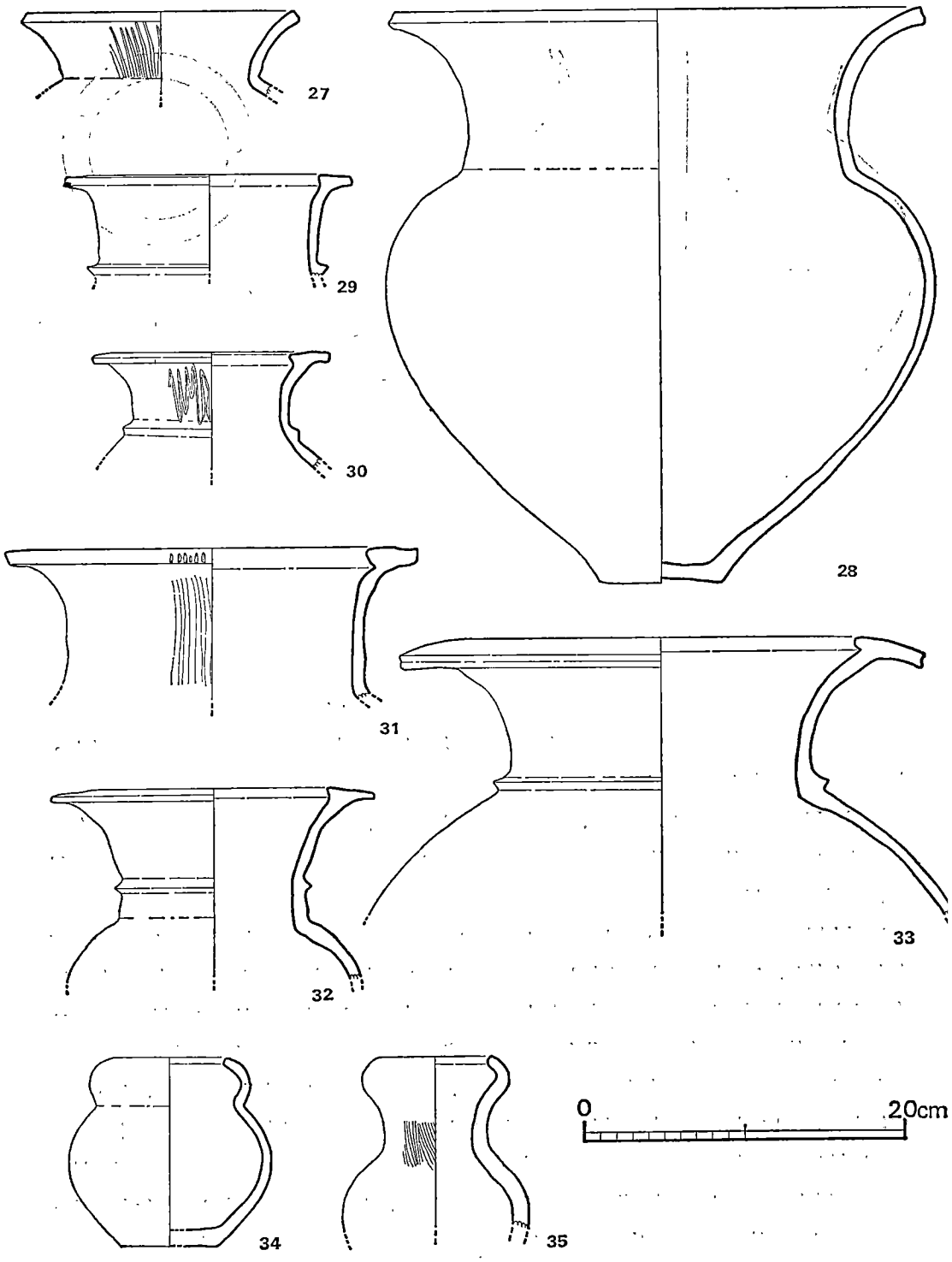
部外面には煤の付着が著しい。胎土・焼成とも良好。22・23とも底部付近の資料で，両者とも凹み気味の平底である。調整は外面刷毛，内面ナデ仕上げで，内底部に指頭痕を残している。色調は22が灰褐色，23が淡褐色を呈す。

蓋形土器（24）　陣笠状を呈し，2個づつ対に紐通し孔がみられる。口径13.8cm，器高2.6cmを測る。内外ともナデて仕上げ，外面にはさらに赤色顔料を塗布している。胎土・焼成とも良い。

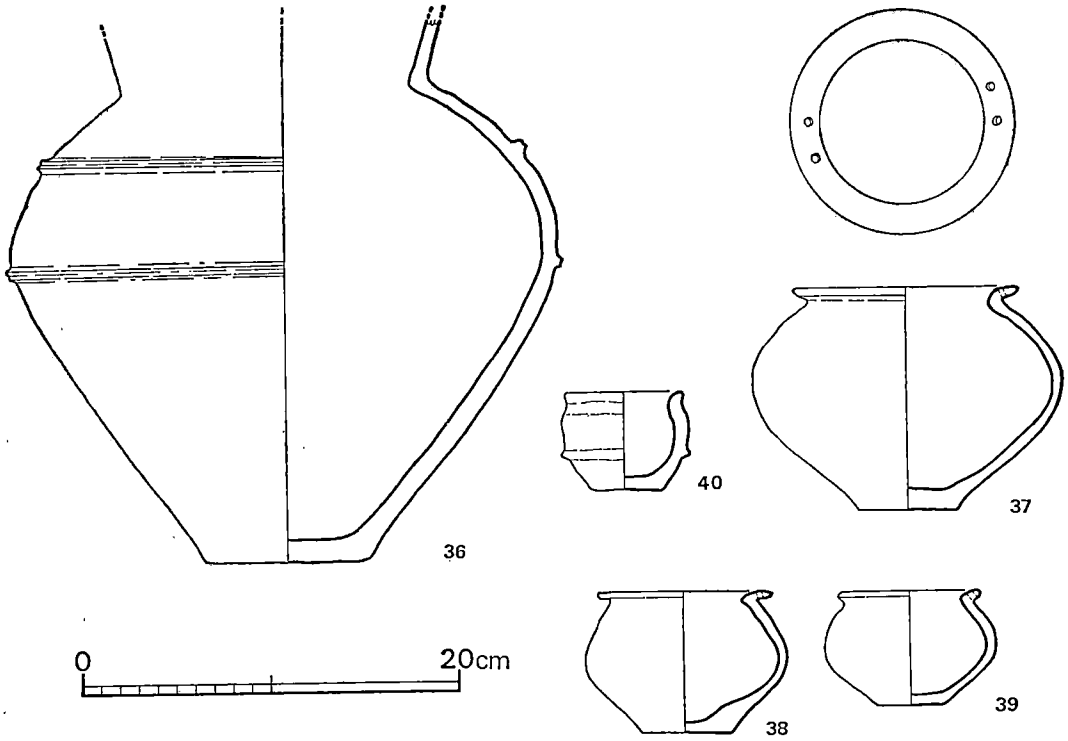
高杯形土器（25・26）　25・26とも脚部の資料である。25は脚部径18.7cm，脚部高16.4cmを測り，杯部と柱状部の境に1条の貼付け凸帯をめぐらす高杯で，裾部の開きが大きく26の脚部が柱状部からラッパ状にそのまま開くのとは異なる。26は脚部径17.7cm，脚部高15cmを測る。調整は25・26とも外面刷毛のあとタテヘラ磨きで，内面は25がナデ，26は刷毛，裾部内外はヨコナデで仕上げている。色調は25が淡黄褐色，26が淡灰褐色を呈す。

≪中期の土器（図版45・46，第44～48図）

壺形土器（27～39）　27は口頸部付近の破片で，肩の張った胴部に大きく外反する口縁部がつく壺である。復原口径17cmを測る。内外ともナデ仕上げで，口頸部外面はさらにタテヘラ磨きで暗文を施している。色調は外面灰色，内面明黄褐色を呈し，胎土・焼成とも良い。28は肩の張った「いちぢく」形の胴部に，外湾しながら大きく外反する単口縁がつく均性のとれた丹塗りの壺である。丹塗りは底部を除く外面全体と口縁部内面に塗布されている。調整は胴部外面ヘラ磨き，内面ナデ，口頸部内外はヨコナデで仕上げている。口頸部外面にはさらにタテヘラによる暗文を施こしている。口径16.2cm，器高34.6cmを測る。胎土にはわずかに小砂粒を含むが，焼成良好。29～33はいわゆる「鋤先」状口縁の壺である。その口縁部にも上面が平坦なもの（29～31）と垂れ下り気味のもの（32・33）がある。調整は口縁部内外と頸部下の凸帯をヨコナデしている他は，ナデて仕上げたものであり，30・31はさらに口頸部外面をタテヘラにより暗文を施している。また，31の口縁部外面に刻目がみられる。色調は29が外面灰褐色，内面赤褐色，31は外面淡黄褐色，内面灰褐色，32は外面淡褐色，内面淡黄褐色，33は外面淡橙褐色，内面淡黄褐色を呈す。30は丹塗り土器で外面から口頸部内面まで塗布がみられる。口径は29が17.8cm，30が14.8cm，31が25.5cm，32が20.1cm，33が33.2cmを測る。また，36は口縁部を欠く資料であるが，32・33のような垂れ下がり気味の「鋤先」状口縁がつく壺と思われ，胴部には2条のM字状をなす「コ」字形凸帯がつく，胴部最大径は上位にあり28.5cmを測る。色調は外面淡灰褐色，内面灰色を呈す。34・35はいわゆる「袋状口縁」の小形壺で，頸部をほとんどもたない34と，短かいながらもある35がある。34は良く研磨された丹塗り土器で胎土・焼成とも良好であるのに対し，35は口縁部内外をヨコナデ，外面刷毛，内面ナデで仕上げた粗雑な作りの壺である。37～39は丹塗りの広口無頸壺で，口縁部上面に2個対の紐通し孔がある。37は口径11.9cm，器高11.8cmと大きく，38は口径9.2cm，器高7.4cm，39は口径7.5cm，器高6.1



第 44 図　中期弥生式土器実測図 1（1/4）

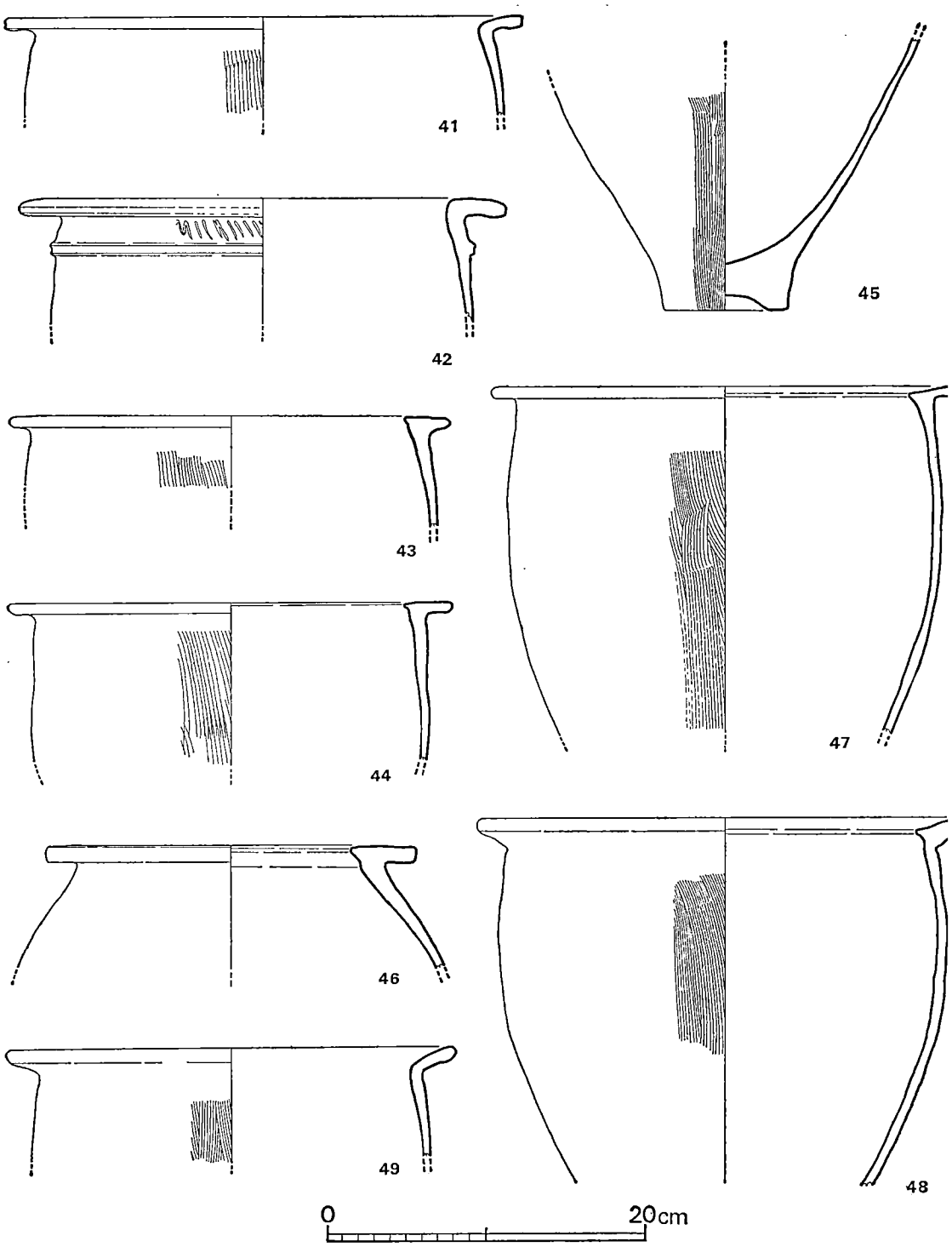


第 45 図　中期弥生式土器実測図2（1/4）

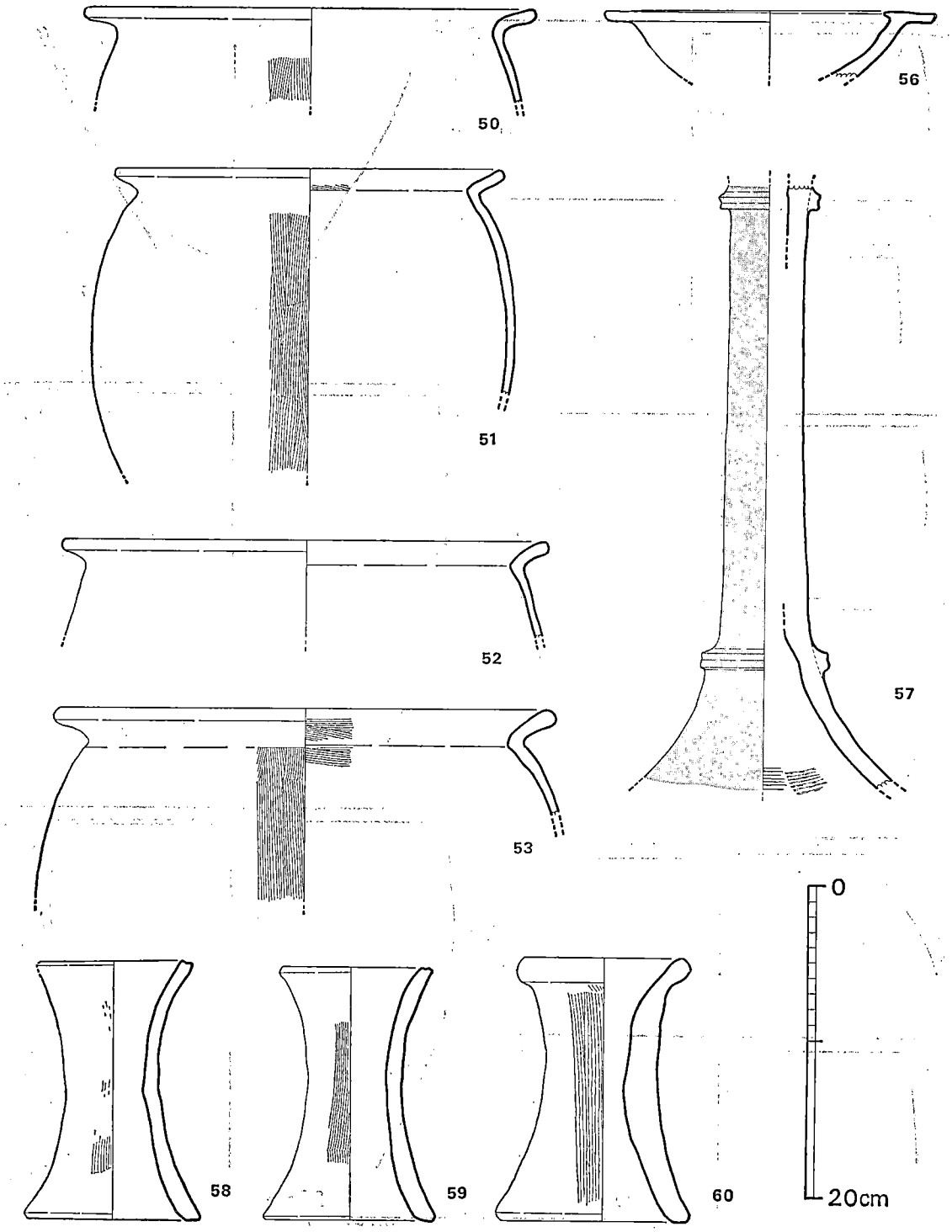
と小さいタイプである。丹塗りにも内外全面に塗布した39と外面のみの37・38がある。胎土・焼成とも良好な作りの良い土器である。

椀形土器（40）　40は口径6.2cm，器高5.1cmの小型椀で，胴部下位に1条の三角凸帯を付している。口縁部内外と凸帯付近をヨコナデ，内外はナデて仕上げている。色調は赤褐色を呈し，外面一部に黒斑を残す。

甕形土器（41～53）　41・42は逆「L」字状口縁の甕である。42は口縁下に1条の「コ」字状凸帯を付し，口縁端部に刻目を施している。また，口縁部内面から外面全体に赤色顔料の塗布がみられ，外面をさらにヘラ磨きで仕上げ，一見暗文風にみられる。41は口縁部内外をヨコナデ，胴部外面刷毛，内面ナデで仕上げた淡茶褐色を呈す甕である。口径は41が32cm，42が30cmを測る。43～48は「T」字状口縁の甕であるが，43・44・46は口縁部上面が平坦，47・48は内傾する「T」字状口縁で若干異なっている。また，43・44は膨らみ気味の胴部がつく甕であるのに対し，46は強く張った球形の胴部がつく甕で，タイプを異にしている。調整は43・44とも口縁部内外をヨコナデ，外面刷毛，内面ナデ仕上げ，46は外面刷毛のあとナデで仕上げている。色調は43が外面赤褐色，内面褐色，44が外面黒褐色，内面灰褐色，46が外面淡赤褐色，内面灰褐色を呈す。口径は43が27.3cm，44が27.6cm，46が22.9cmを測る。47・48の調整は外面刷



第 46 図　中期弥生式土器実測図 3（1/4）

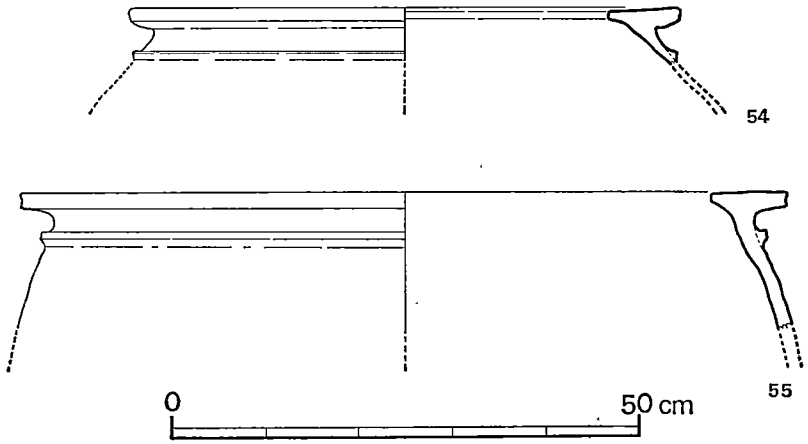


第 47 図　中期弥生式土器実測図 4（1/4）

毛，内面ナデ，口縁部内外ヨコナデで仕上げている。47の口縁部は外への引き出しが若干垂れ気味であるが，48は上方に引き出し気味に仕上げている。色調は47が外面淡褐色，内面明褐色，48は淡灰褐色を呈し，47の外面下半に煤の付着が著しい。口径は47が28.8cm，48が30.2cmを測る。45は胴下半の資料で，底部は底径7.6cmの器肉の厚い凹み底である。調整は外面刷毛，内面ナデ仕上げで，内底部には，指頭圧痕を残す。色調は灰褐色を呈し，底部付近に煤の付着がみられる。49～53はいわゆる「く」字状をなす口縁部をもつ甕で，口頸部内面にわずかに屈折の稜を有す51～53と，稜をもたず緩やかに外反する49・50がある。胴の張りも49を除き，強く膨んだ球形をなすものである。調整は外面刷毛，内面ナデ，口縁部内外をヨコナデで仕上げたもので，51・53のように口縁部内面一部に刷毛を残したものもある。色調は49・50が黄褐色，51が外面淡黄褐色，内面淡黄灰色，52が淡茶褐色，53は外面淡黄白色，内面淡茶褐色を呈す。口径は49が28cm，50が28.4cm，51が24.4cm，52が30.6cm，53が31.5cmを測る。

大形甕形土器（54・55）　54・55とも甕棺として製作された土器である。54は復原口径58.8cmを測る口縁部付近の破片資料である。口縁部はわずかに内傾するがほぼ平坦の「T」字状口縁をなし，頸部のしまりは極めて強いもので，大きく張った胴部がつくタイプである。口縁下には1条の三角凸帯が付されている。口縁部内外はヨコナデ仕上げで，色調は灰褐色を呈す。55は口縁部付近の資料で，口径81.8cmを測る。口縁部は「T」字状をなし，上面は平坦である。頸部のしまりは54ほどではないが強いタイプであろう。口縁下には1条の「コ」字形凸帯を付している。口縁部内外はヨコナデ，胴部内外はナデ仕上げである。口縁端部外面と凸帯端部はヨコナデによる凹みを形成する。色調は淡赤褐色を呈す。

高杯形土器（56・57）　56は「鋤先」状口縁を有す杯部の破片資料で，復原口径20.7cmを測る。器面内外ともナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げた淡灰褐色を呈す土器である。57は脚



第 48 図　中期弥生式土器実測図5（1/8）

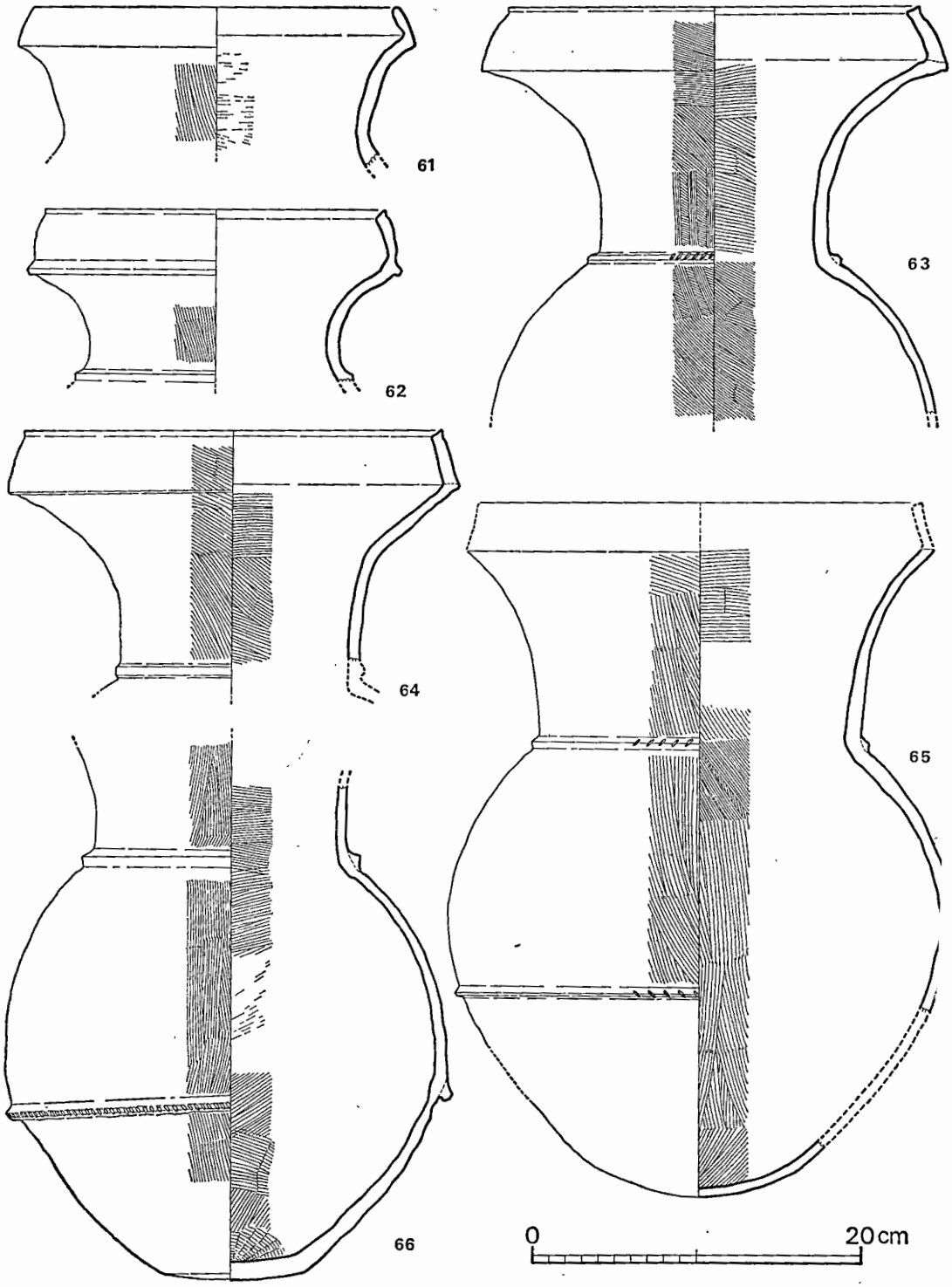
部の資料で，杯部と裾部の一部を欠失している。柱状部が30cmと長く，柱状端部と裾部への移行部に１条のM字状をなす「コ」字形凸帯がつき，裾部の拡がりが大きい大型の高杯の脚部である。器面は風化が著しいが外面各所に丹塗りの痕跡を残し，本来，全面に塗布されていたことがかる。

器　台（58～60）　上・下の開きに大きな差はなく，緩やかな円筒状をなす器台である。58は口径9.6cm，脚部径10.8cm，器高16.3cm，59は口径9.7cm，脚部径10.8cm，器高15.9cm，60は口径10.8cm，脚部径12.2cm，器高16.6cmを測る，調整は口縁部・脚部内外をヨコナデ，外面刷毛，内面ナデて仕上げた器台で，58は内面中位に屈折稜を有す。60は前者と比べ器肉の厚い土器で，58・59の口縁端部にヨコナデによる凹線をもつのに対し，60は肥厚し，タイプを異にしている。

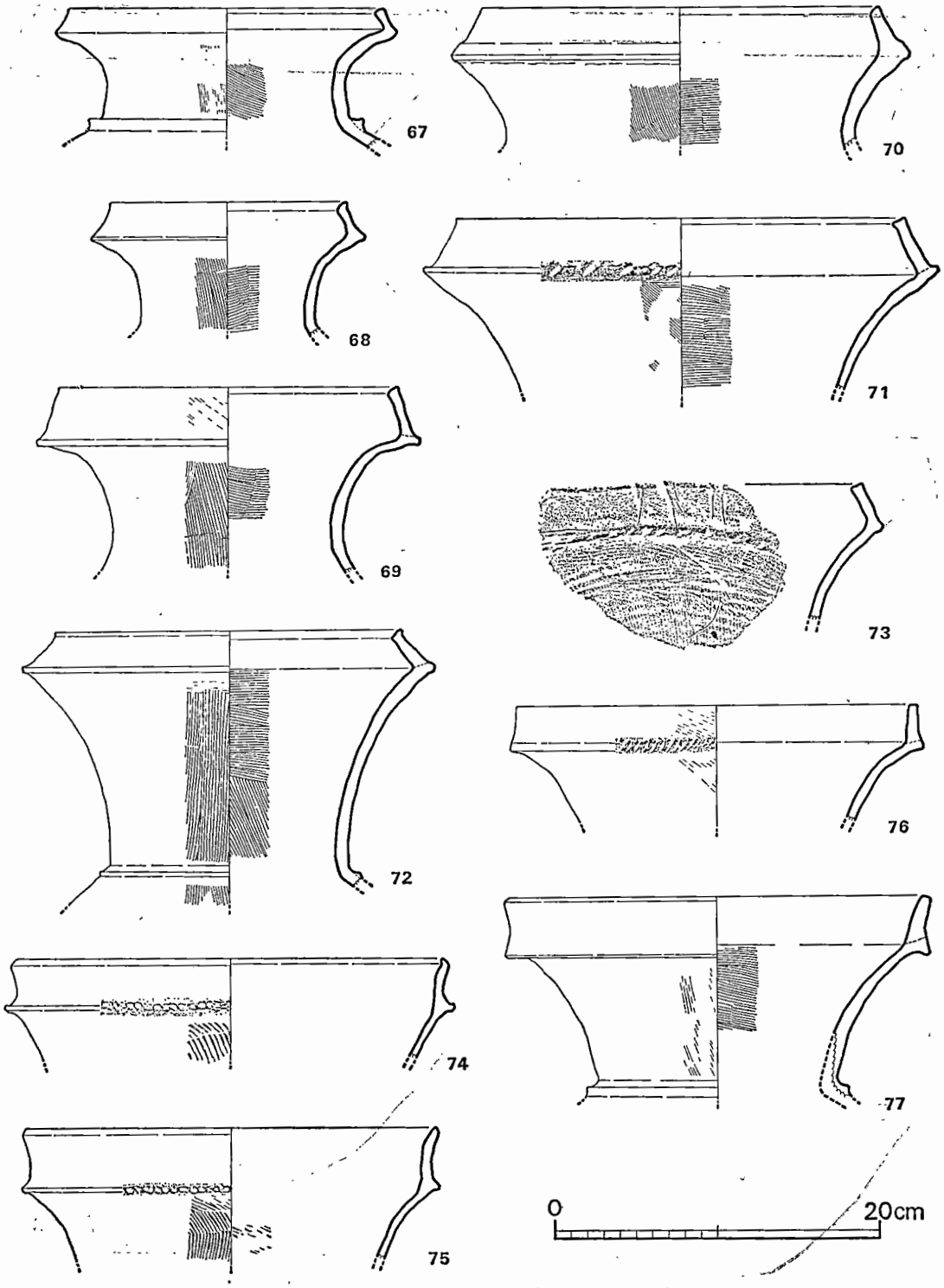
≪後期の土器（図版47～56，第49～68図）

壺形土器（61～64・66～97）　61～64・66～82はいわゆる複合口縁の壺で，大きく口縁部の形状により３種に大別できる。口縁部が「袋状気味」に内傾するもの（61～63），直線的・外湾気味に内傾するもの（64・66～73・78～82），垂直に立ち気味のもの（74～77）がある。61は口縁部の形状がもっとも「袋状」に近いもので，口縁に比べ頸部が極めて短かい。62も口径に比べ頸部が短かいタイプであるが，口縁端部と口縁下のヨコナデによるつまみ上げ，つまみ出しが目立つ壺で，頸部下に１条の三角凸帯を付している。63は球形の胴部に強くしまった頸部と大きく外反した口縁部がつく壺で，前二者と異なる。また頸部下には１条の「コ」字形凸帯がめぐり，端部にクシ状工具による刻目が付されている。調整は61・62が外面刷毛，内面刷毛のあとナデ，口縁部内外はヨコナデ仕上げ，63は内外全体刷毛のあと，口縁部の一部をヨコナデで仕上げている。色調は全て淡黄褐色である。口径は61が22.2cm，62が20.8cm，63が24.8cmを測る。

口縁部が直線的・外湾気味に内傾するタイプ（64・66～73・78～82）にも，口径に比し，頸部の短かいもの(67～70・80)と長いもの(64・66・77～73・78～82)がある。また，口縁部外面に櫛目文を施したもの（78～82）もある。64は長く強くしまった頸部から大きく開く口縁部に続く壺で，63とほゞ同様の器形と思われ，器面内外の調整もほゞ同じといえる。66は口縁部を欠くが，卵形の胴部に長頸の口頸部がつく壺である。頸部下に１条，胴部中央よりやゝ下位に１条の三角凸帯を付し，凸帯端部に刻目を施している。底部はいわゆる「レンズ状」を呈す丸底気味の平底である。調整は内外とも刷毛仕上げで，胴部下半はさらにナデて仕上げている。色調は淡黄白色を呈す。71～73も長頸の口頸部をもつ壺であるが，64と比べ口縁屈折部のヨコナデによる引き出しが顕著な土器である。71のようにその屈折部に刻目を付したものもある。口縁内外をヨコナデ，他は内外とも刷毛調整仕上げであるが，73のように外面全体にタタキのあと軽く刷毛調整した例もある。色調は71・72が淡黄白色，73が淡茶褐色を呈す。口径は71が



第 49 図　後期弥生式土器実測図 1（1/4）



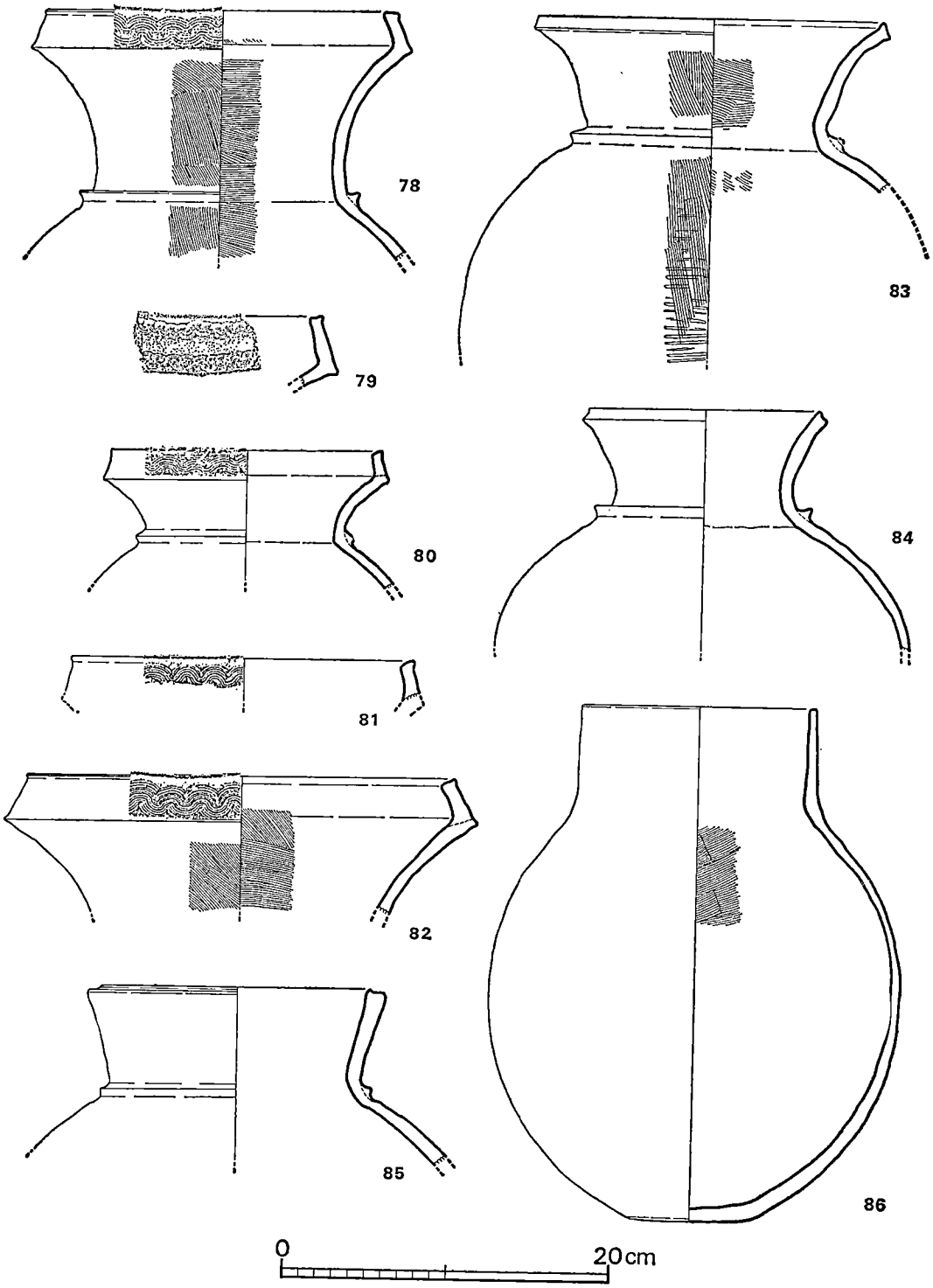
第 50 図　後期弥生式土器実測図 2（1/4）

27.5cm，72が21.1cmを測る。67～70は口径に比べ頸部の短かい壺の口頸部資料である。調整は頸部内外刷毛，口縁部内外はヨコナデで仕上げたものであり，68～70のような口縁屈折部の明瞭なものである。71～73等と同様の特色である。色調は70が淡茶褐色の他は全て淡黄褐色を呈す。口径は67が19cm，68が14.3cm，69が20.5cm，70が24.3cmを測る。78～82は口縁部外面に櫛目波状文を施したものである。このタイプの壺にも頸部が短かい80のようなものと，78・81のように長いものとがある。調整は80が内外をナデて仕上げたものの他は，他と同じである。色調は78が淡黄褐色の他は全て淡黄白色を呈す。口径は，78が21.2cm，80が16.2cm，81が20.8cm，82が26cmを測る。

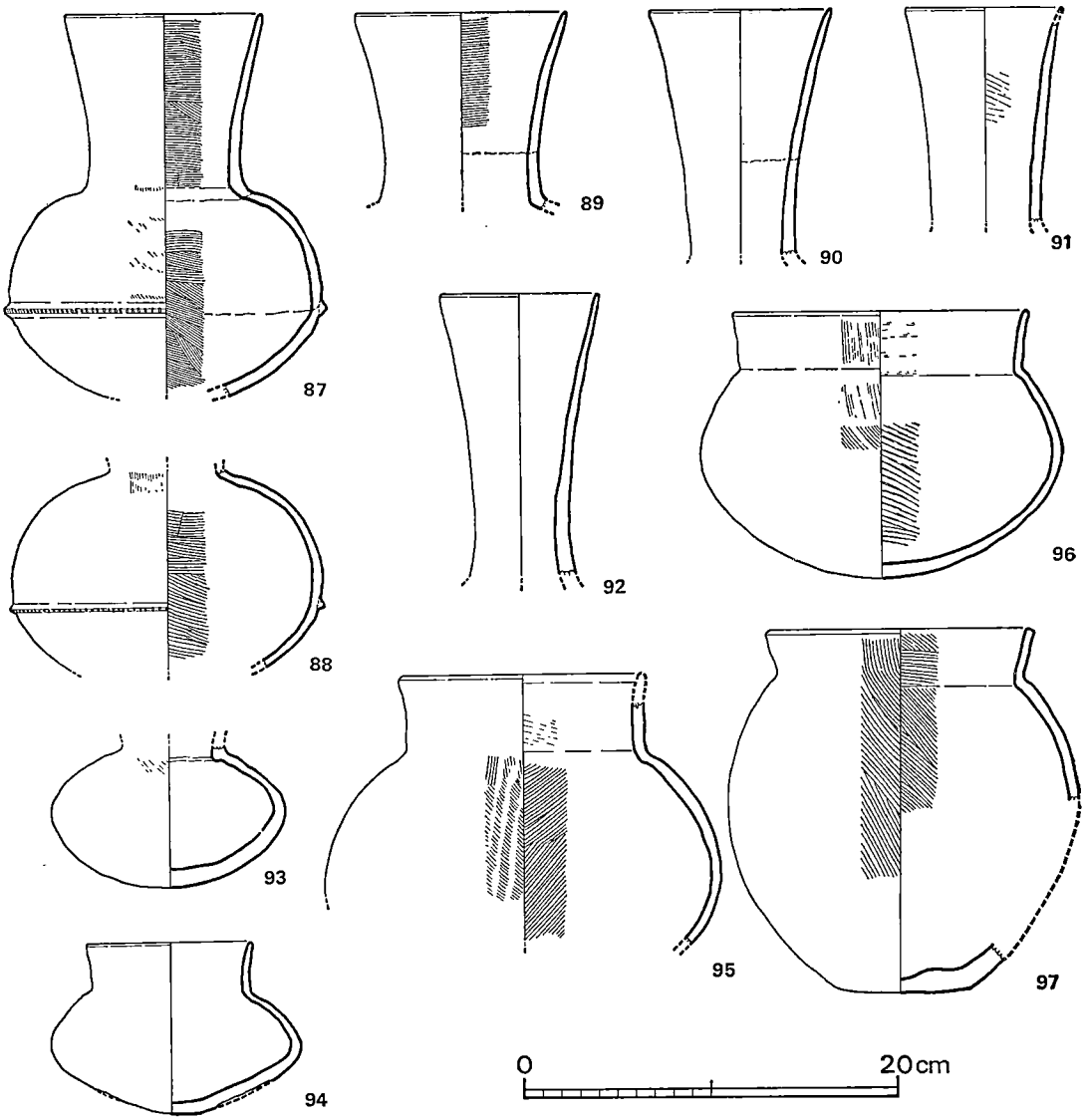
口縁部が垂直に立ち気味のタイプ（74～77）にも，外湾気味に立ち上がるもの（74・75），直線的に立ち上がるもの（76），口縁中位で屈折点をもち上下に開き，下端が垂れ気味になるもの（77）がある。74・75は外湾ぎみに立ち上がる口縁の壺で，口縁屈折部はヨコナデによるつまみ出しが極めて強く，その端部に刻目を施した土器である。頸部外面刷毛，内面刷毛のあとナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。口縁端部はヨコナデにより74はつまみ出し，75は細く仕上げている。色調は両者とも淡黄白色を呈す。口径は74が26cm，75が25.2cmを測る。76は直線的に立ち上がる口縁部をもつ壺で，口縁屈折部に刻目を施している。調整は外面刷毛のあとナデ，内面ナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げた淡茶褐色を呈す土器である。口径24.5cmを測る。77は口縁中位に屈折点をもち上下に開く二重口縁の壺である。調整は頸部外面刷毛のあとタテヘラ磨き，内面刷毛，口縁部内外はヨコナデで仕上げ，淡黄褐色を呈す焼成良好・堅緻な土器である。

84～86はいわゆる「単口縁」の壺である。84は球形の胴部に大きく外反する口縁部がつくもので，端部はヨコナデによりつまみ上げ気味に仕上げている。調整は胴部外面ナデ，内面刷毛のあとナデ，口頸部内外はヨコナデ仕上げである。また，頸部下に1条の三角凸帯を付している。色調は黄褐色を呈し，口径は14cmを測る。85は球形をなすと思われる胴部に器肉の厚い立ち気味の口縁がつく壺で，頸部に1条の三角凸帯を付している。口縁端部にはヨコナデにより凸線をもつが平坦で，端部にいくに従い厚さを増している。調整は胴部外面ナデ，内面刷毛のあとナデ，口縁部内外は刷毛のあとヨコナデで仕上げている。色調は黄褐色を呈す。口径17.8cmを測る。86は口径14.2cm，器高31cmを測るいわゆる直口壺である。卵形の胴部に垂直に立ち上がる長い口頸部がつく壺で，底部は丸底気味の平底である。器体外面は風化が著しく不明であるが，胴部内面は刷毛のあと下半をナデて仕上げ，口頸部はヨコナデで仕上げている。胴部外面下半に大きな黒斑がみられる。色調は淡黄褐色を呈す。

87～92は長頸壺である。扁球形の胴部に立ち気味に外反する長頸の口頸部がつく壺で，87・88のように胴中位よりやや下位に三角凸帯を付し，その端部に刻目を施す。いわゆる長頸壺にも87・89のような若干広口のものと，88・90～92のような細頸のものとがある。調整は胴部外



第 51 図　後期弥生式土器実測図 3（1/4）



第 52 図　後期弥生式土器実測図 4（1/4）

面上半刷毛のあとヨコヘラ磨き，下半はヨコヘラ削り，胴部内面刷毛，口頸部外面は刷毛のあとタテヘラ磨き，内面は刷毛のままのもの，刷毛のあとナデたもの，部分的にナデて仕上げたものなどがある。色調は87・90が淡黄白色，88が淡黄褐色，89・92が淡茶褐色，91が淡黄色を呈す。

93は短頸壺で，ソロバン玉形の胴部に直口する短かい頸部がついた小形の壺である。いわゆる87～92の長頸の壺の口頸部を短かくしたタイプといえる。調整は内面ナデ，外面刷毛のあと

ヘラ磨きで仕上げている。

95は広口の直口壺で，扁球形の胴部に直口する短かい口頸部がつく土器である。復原口径13.2cm胴部最大径21cmを測る。調整は外面刷毛のあとタテヘラ磨き，胴部内面刷毛，口頸部内面刷毛のあとヨコナデ，外面刷毛のあとヨコナデ，そしてさらにタテヘラ磨きで仕上げた作りの良い土器である。色調は外面淡黄褐色，内面淡灰色を呈す。

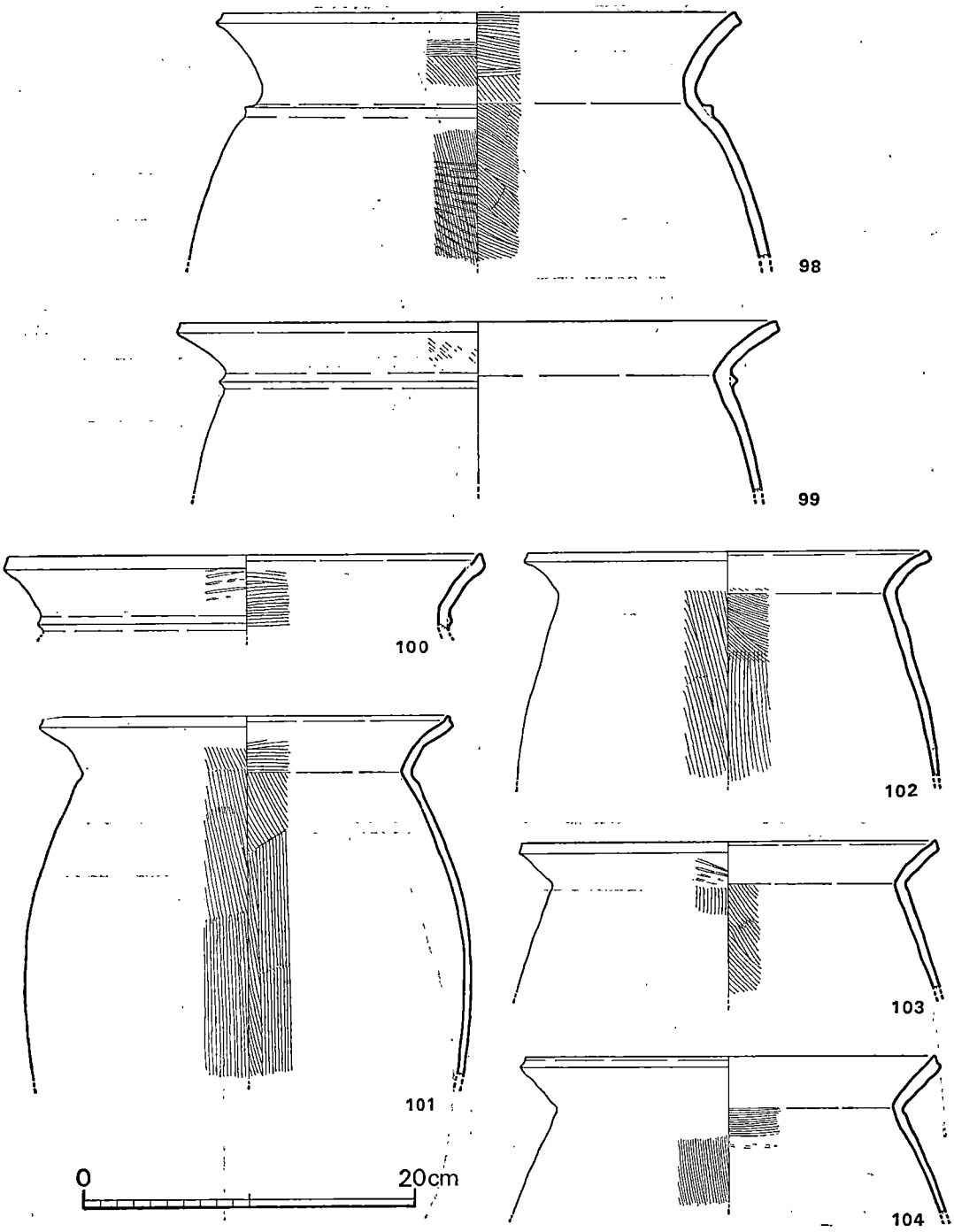
甕形土器（99・102～107・110～116・118～129・131・132）　形態的特色により大きく二大別できる。長卵形の胴部に「く」字状に外反する口縁部がつく甕（99・102～124），球形の胴部に「く」字状に外反する口縁部がつき，胴部最大径に比べ口径が小さく，頸部のしまりが強い甕（125～133）である。前者をⅠタイプ，後者をⅡタイプとすれば，さらに口縁部の特色により両者とも4種に細別できる。ここではそれをa・b・c・dと呼称する。

Ⅰa甕（102～107）は，口縁端部をヨコナデによりつまみ上げ気味に仕上げているもので，端部外面にしばしば凹線状の凹みを形成する。調整は胴部内外とも刷毛，口縁部内外をヨコナデで仕上げている例が一般で，数は少ないが外面にタタキ目を残す例（103）もある。しかし，刷毛調整仕上げのものでもその多くは，その成形段階で98・109のようにタタキを施した後，刷毛調整されているためにわずかに観察できる例もあることから丁寧に刷毛調整されたものではその観察は困難かもしれない。色調は102・104・106が淡茶褐色，103・107が淡黄褐色，105が茶褐色を呈す。102・104・106の外面全体に著しい煤の付着がみられる。口径はその大半が復原実測したものであるが，23.5～28cmでその多くは24～25cm前後のものである。

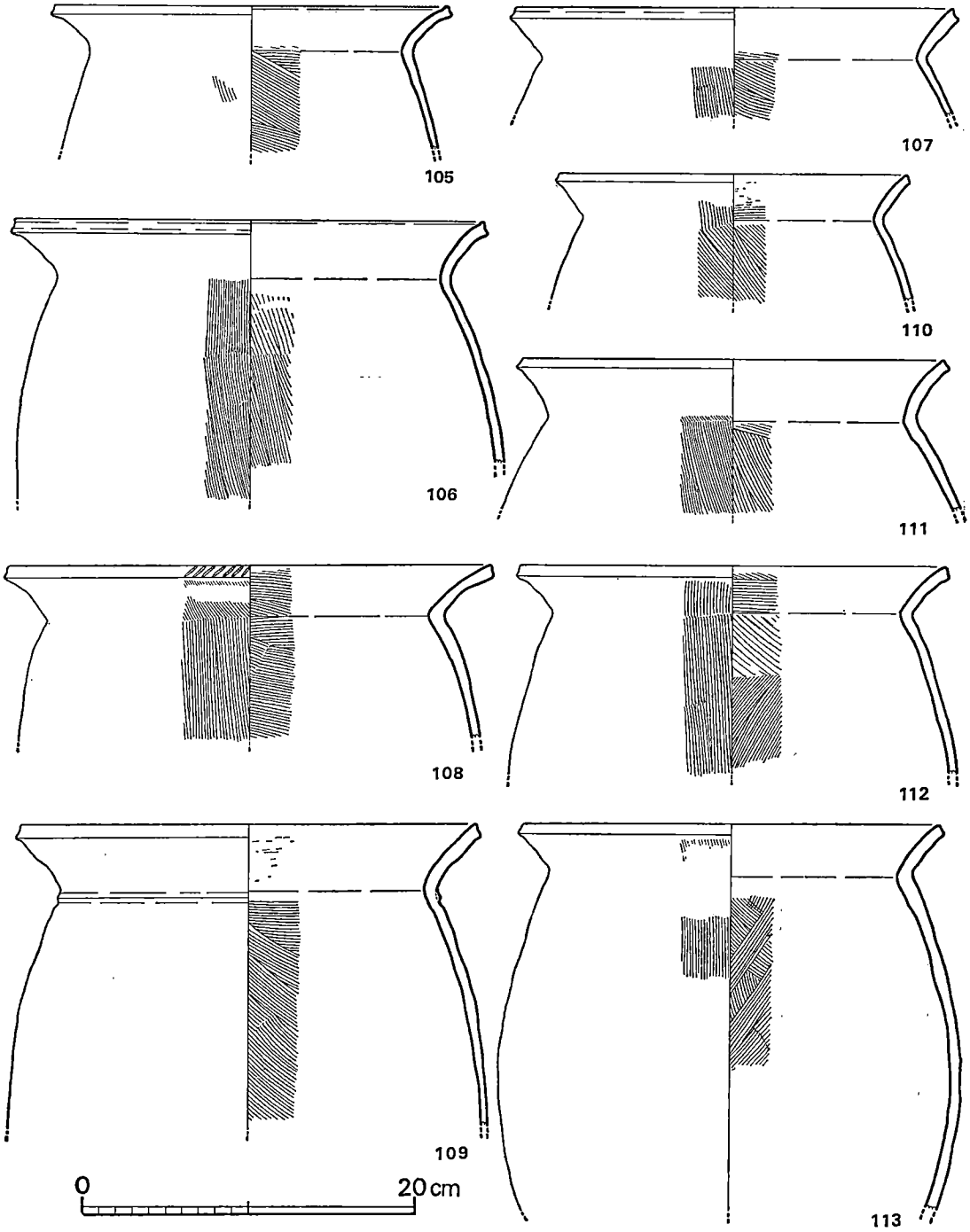
Ⅰb甕（99・110～113）　端部を平坦に仕上げたものである。調整は胴部内外を刷毛，口縁部内外をヨコナデで仕上げていて，基本としてⅠa甕と同様である。このタイプの甕には，99のような口径30cmを越す大型のものもあるが，その大半は25～27cm前後のものである。色調は99が淡黄白色，110が淡茶褐色，111・113が淡黄褐色，112が暗茶褐色を呈す。口径はその大半が復原実測したものであるが，99が35.6cm，110が20.8cm，111が25.1cm，112が25.5cm，113が25cmを測る。

Ⅰc甕（114・115）　口縁端部下面がヨコナデによりつまみだされているタイプで，Ⅰa甕と反対のつまみ出しをもつものである。数としては少ないようである。調整は胴部内外を刷毛，口縁部内外をヨコナデで仕上げている。口径は114が27.2cm，115が24cmを測る。色調は11が淡黄褐色を呈す。116は長胴の甕の胴下半の資料である。調整は外面刷毛のあとナデ，内面刷毛，底部外面刷毛で仕上げている。底部はいわゆる「レンズ」状をなす丸底気味の平底で，底径5.5cmと小さい。この胴部下半の資料は基本としてⅠa～Ⅰc タイプ甕の胴部といえる。色調は淡黄褐色を呈す。

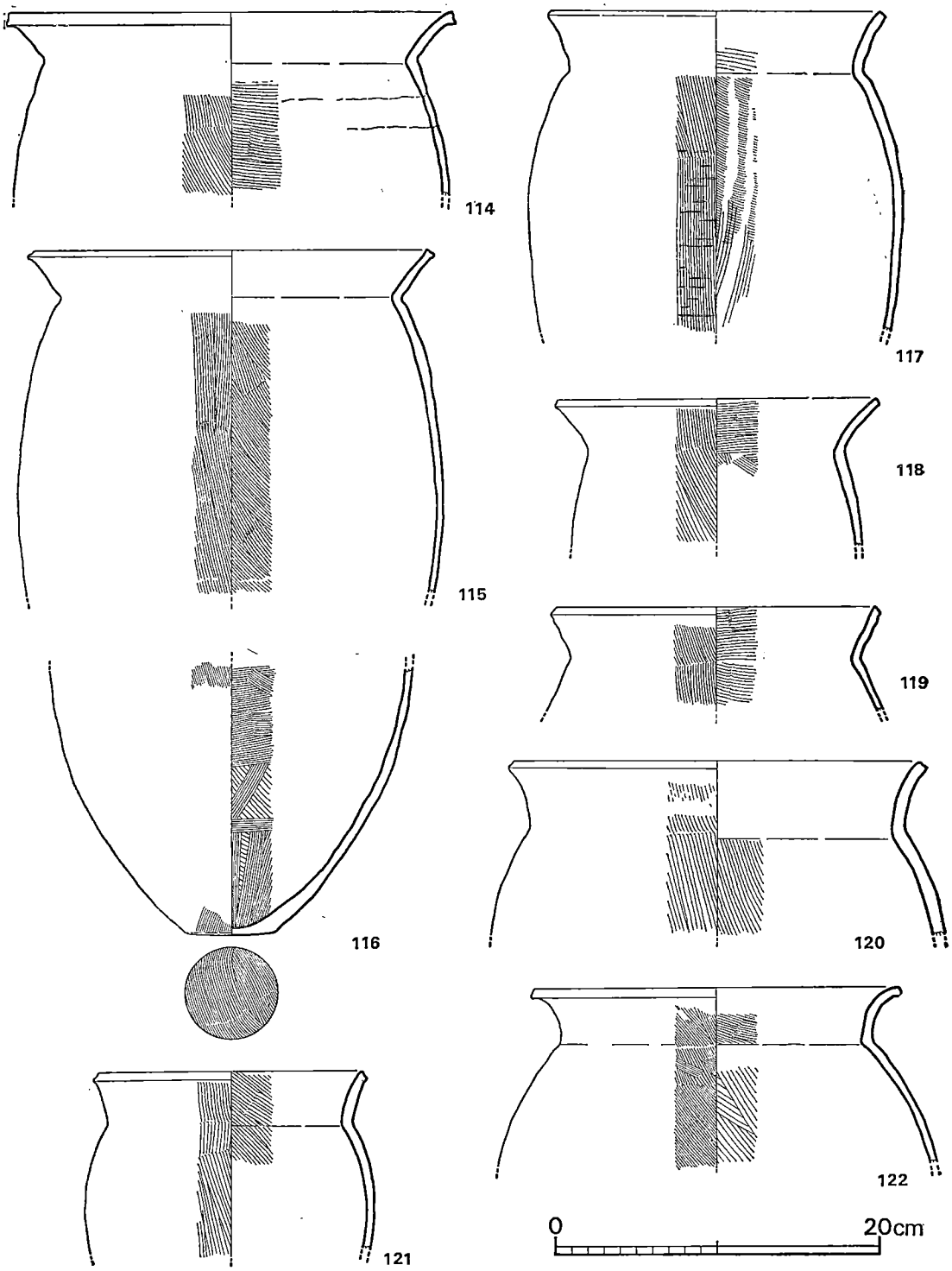
Ⅰd甕（97・118～123）　口縁部が立ち気味の「く」字状をなすタイプであるが，118・122のような若干異なるタイプも一応このタイプに含めておきたい。調整は基本として前タイプと



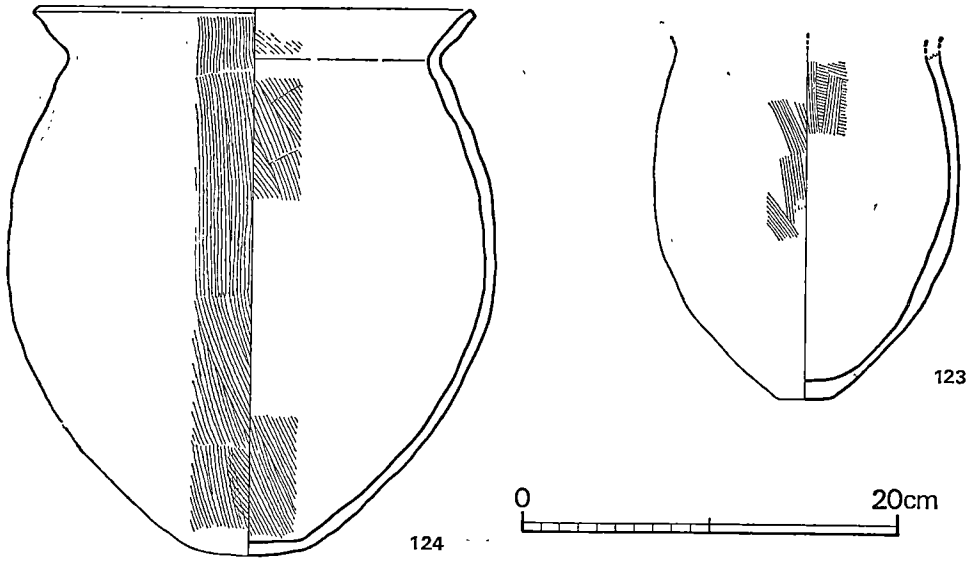
第 53 図　後期弥生式土器実測図 5（1/4）



第 54 図　後期弥生式土器実測図 6（1/4）



第 55 図　後期弥生式土器実測図７（1/4）



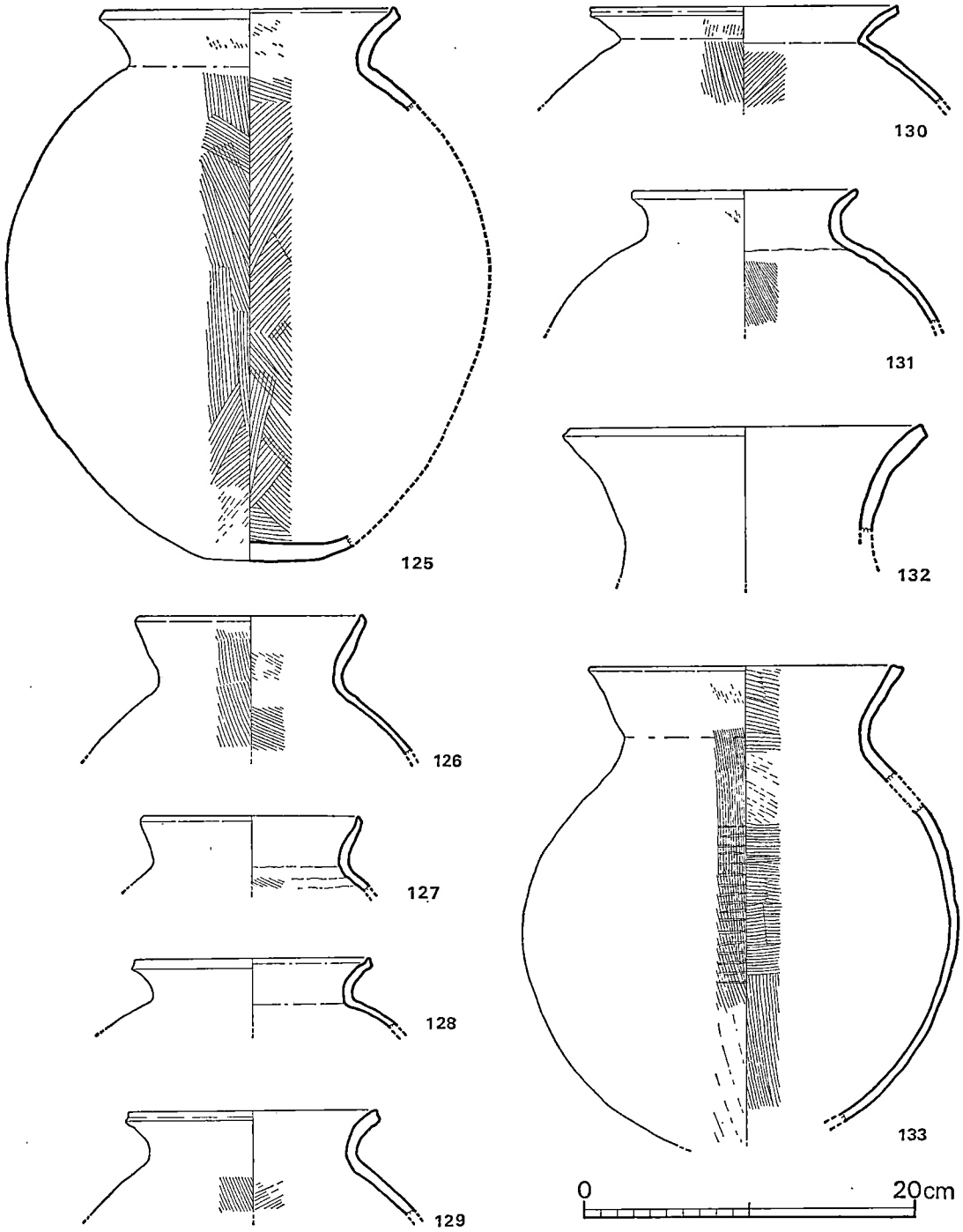
第 56 図　後期弥生式土器実測図 8（1/4）

共通する。97は球形の胴部に立ち気味の口縁部がつき，底部は丸底気味の平底である。調整は外面刷毛のあと胴下半のみをヘラ削りで仕上げ，内面刷毛のあと下半ナデで仕上げている。口径14cm，器高19.3cmを測る。しかし，他はその大半が復原実測であるが，117が20.6cm，118が19.6cm，119が19.5cm，120が25cm，121が16cm，122が23.3cmを測り，全体としてⅠa～c甕タイプより小形である。色調は97・118・119・121・123が淡黄褐色，120が茶褐色，122が淡黄白色を呈し，全体として黄褐色系をなすものが主体を占めている。

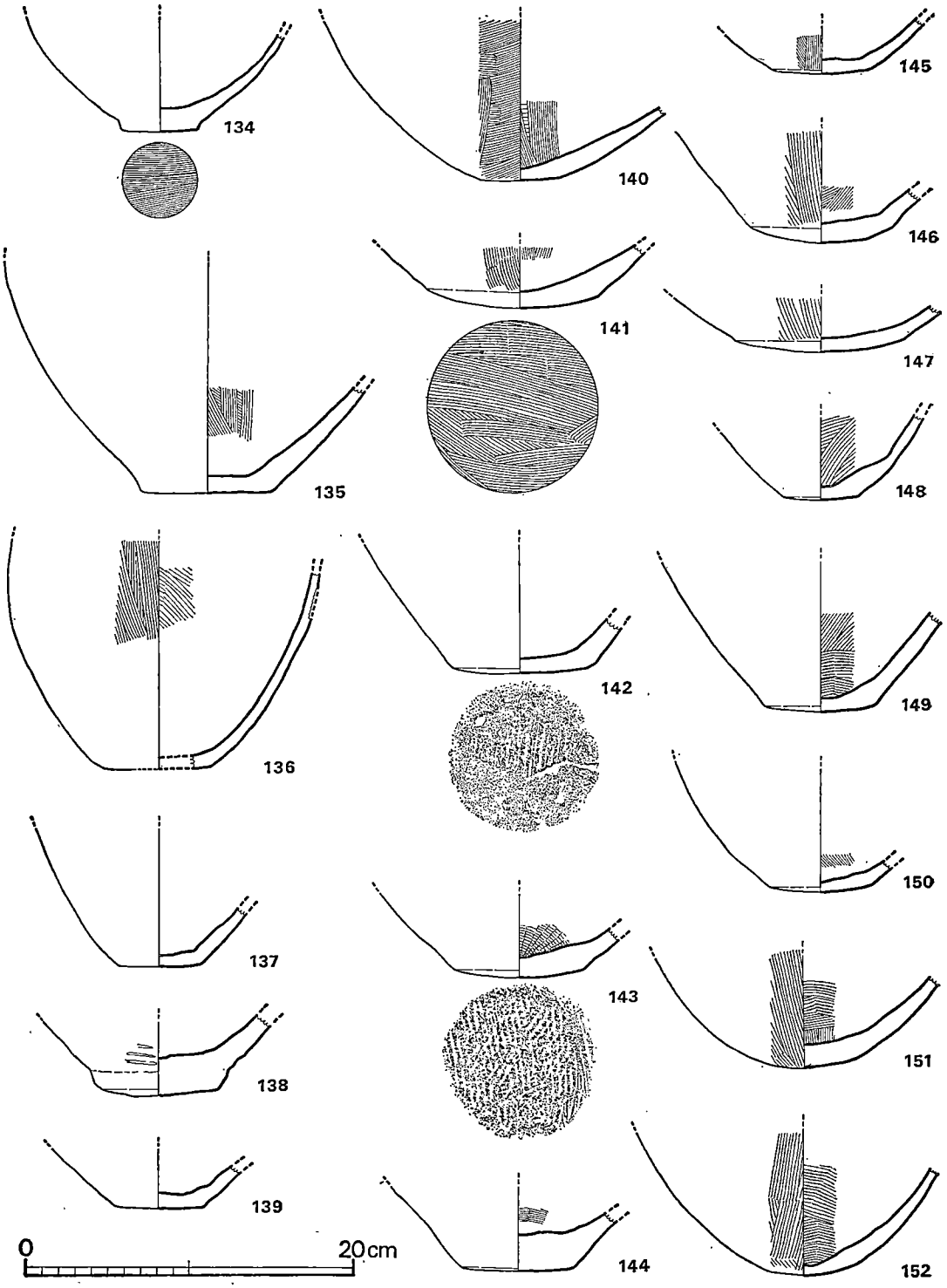
Ⅱa甕（125～128）　125がその典型を示す資料である。球形の胴部に「く」字状に外反する口縁部がつき，胴部最大径に比べ口径が小さく，頸部のしまりが強い甕で底部は丸底気味の平底である。調整は胴部外面刷毛のあと，底部付近をナデ，胴部内面刷毛，口縁部内外を刷毛のあとヨコナデで仕上げている。口縁端部はヨコナデによりつまみ気味に仕上げているのが一つの特色である。125は口径17.4cm，器高33.1cmを測る。他は口頸部付近の破片資料であるが，復原口径は126が13.3cm，127が12.9cm，128が14.2cmと小さい。色調は125が淡黄白色，126が淡褐色，127が淡茶褐色，128が外面淡茶灰色，内面淡黄褐色を呈す。

Ⅱb甕（129）　張りの強い胴部に強く「く」字状に屈折した口縁部がつく甕で，頸部内面に明瞭な稜を作る。調整は外面刷毛，胴部内面刷毛，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。口縁端部外面にはヨコナデによる凹線が形成されている。色調は淡茶褐色を呈し，胎土には多くの雲母を含み他の土器群の胎土と比べ極めて異なっている。復原口径18.3cmを測る。

Ⅱc甕（131）　大溝Ⅱ出土の130がその典型を示す資料で，球形の胴部に立ち気味に外反する短かい口縁部がつく甕である。調整は胴部外面刷毛，内面刷毛のあとナデ，口縁部内外は



第 57 図　後期弥生式土器実測図 9（1/4）



第 58 図　後期弥生式土器実測図10（1/4）

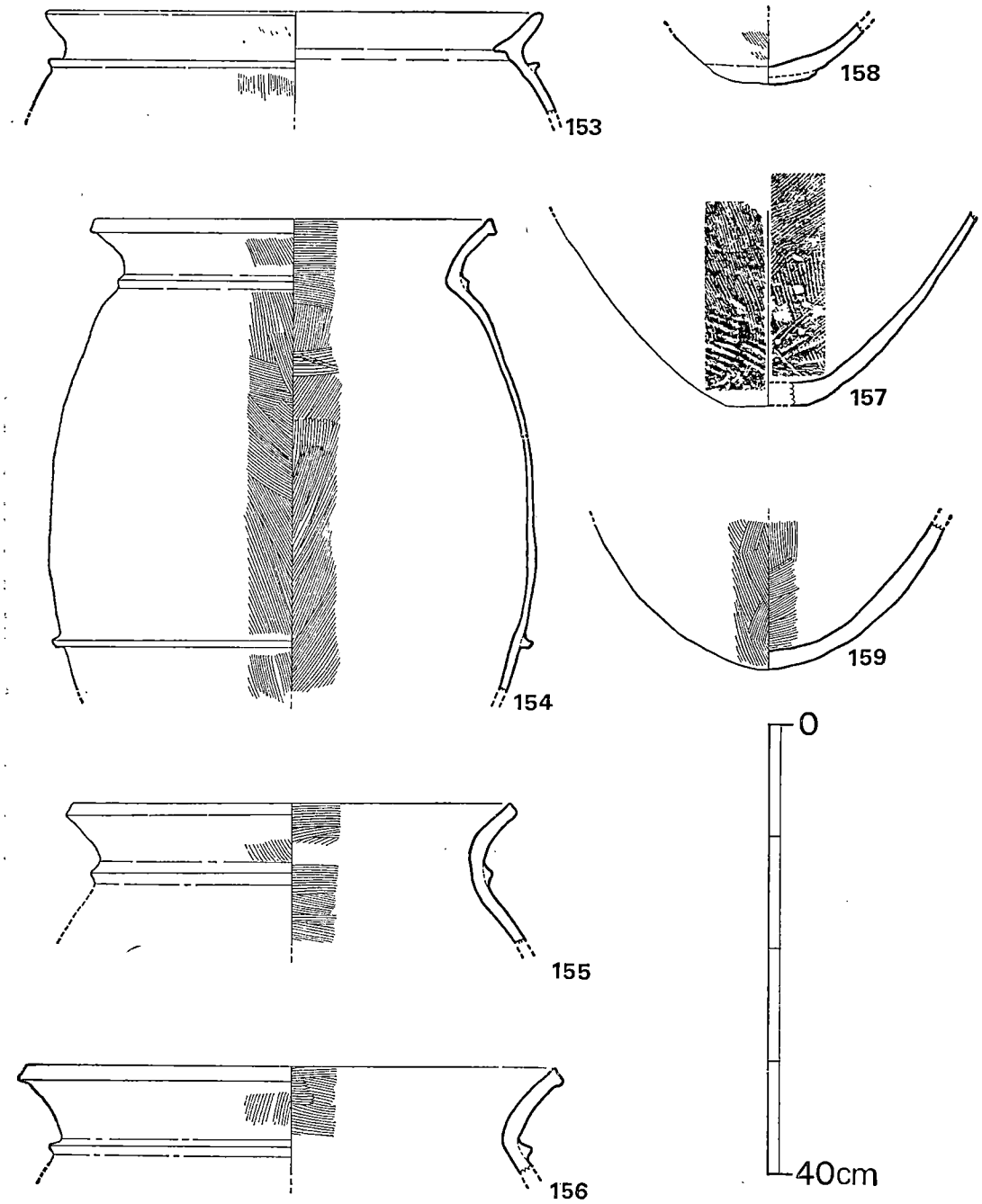
ヨコナデで仕上げている。色調は淡茶褐色を呈す。復原口径15cmを測る。

Ⅱd甕（132）　大溝Ⅱ出土の133が典型資料である。球形の胴部に立ち気味にゆるやかに外反する長目の口頸部を有す甕で端部の仕上げは平坦か，ヨコナデによるわずかの凹みをもつ。底部は丸底気味の平底か丸底と思われる。

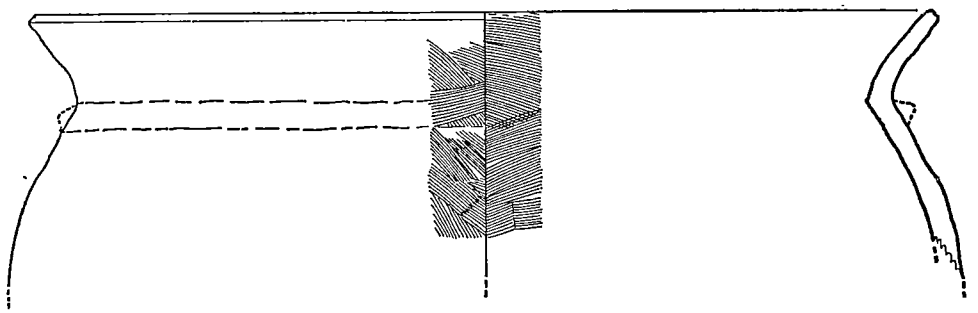
他にタイプとしてはⅠb甕に属すると思われるが，長胴なⅠb甕の胴部と若干異なる例がある。それは124で，口径に比べ胴の長さがⅠb甕よりも小さく，底部もほゞ丸底をなす甕である。口径22.7cm，器高28.7cmを測り，その差は5cmと小さくむしろ典型的な卵形をなす胴部といえよう。色調は淡黄褐色を呈す。

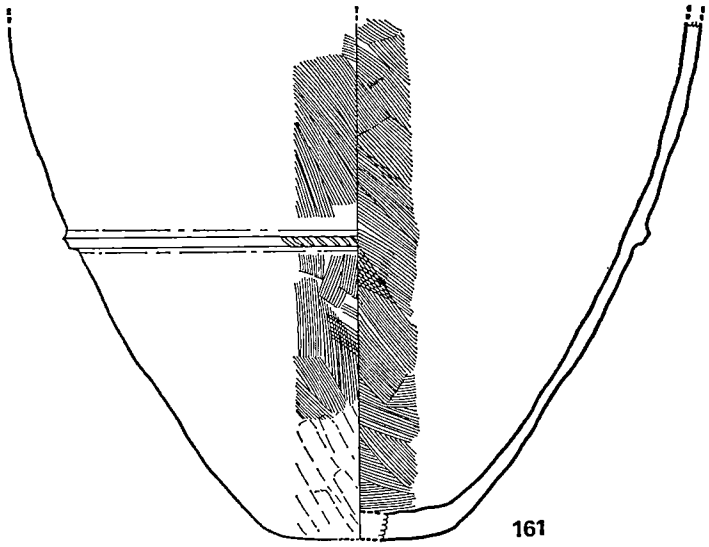
底　部（134・135・137～152）　底部のみの資料で，壺か甕か区別が困難であるため一括して扱う。底部には平底のもの（134・135・137～140），丸底気味の平底でいわゆる「レンズ」状をなすもの（141～150），丸底のもの(151・152）の3種がある。調整手法にも外底部を刷毛で仕上げたもの（134・140・141・144・148・151），ナデで仕上げたもの（135・137～138・145～147・149・152），タタキのままのもの（142・143）の3種がある。色調は134・136～141・144・145～151が淡茶褐色，135・142が茶褐色，143が淡茶灰色，152が外面淡褐色，内面淡褐色で，圧倒的に淡茶褐色を呈すものである。

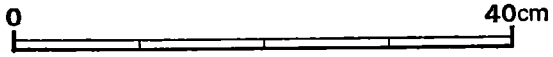
大型甕形土器（153～161）　153が内湾気味の受け口状をなすいわゆる「く」字状口縁の甕で，復原口径42.8cmを測る。口縁下には1条の三角凸帯がめぐり，胴の張りは大きいようである。口縁部内外はヨコナデ，体部内面はナデ，外面刷毛仕上げである。色調は暗赤褐色を呈す。後期初頭の大型甕である。154～157・161はいわゆる「く」字状をなす口縁部をもつ大甕で，159～160・162はこのタイプの底部資料である。154は胴下半を欠く資料で，口径35.2cm，胴部最大径43cmを測る。卵形をなすと思われる胴部に「く」字状に大きく外反する口縁部がつくもので，頸部と胴下位に1条の三角凸帯を付している。内外とも刷毛調整，口縁端部付近内外はヨコナデで仕上げている。色調は淡灰褐色を呈し，胴上半には大きな黒斑がみられる。156・157とも口縁部付近の破片資料で復原口径は156が39.6cm，157が47.9cmを測る。157は通有の「く」字状口縁であるが，156は張り気味の胴部から立ち上り気味に外反する「く」字状口縁である。調整は内外とも刷毛調整，口縁端部内外はさらにヨコナデで仕上げている。161は復原口径73.2cmを測る最も大きい甕で，口縁下には1条の凸帯がめぐっていたようである。調整は154などと同じである。色調は淡褐色を呈す。157～159は底部付近の破片資料で，157は平底。158はいわゆる「レンズ状」をなす丸底気味の平底。159は丸底である。調整は158・159が内外とも刷毛，159は内面刷毛，外面粗いタタキのあと刷毛調整，底部と底部付近はヘラ削りで仕上げている。158の外底部はナデ仕上げである。色調は157が淡灰褐色，158・159が淡褐色を呈す。161は胴下半の破片資料で，現存する部分での胴部最大径は55.4cmを測る。底部は丸味をもった平底で，胴下位には1条の「コ」字状凸帯が付され，その端部には刻目が施され



第 59 図　後期弥生式土器実測図11 (1／6)



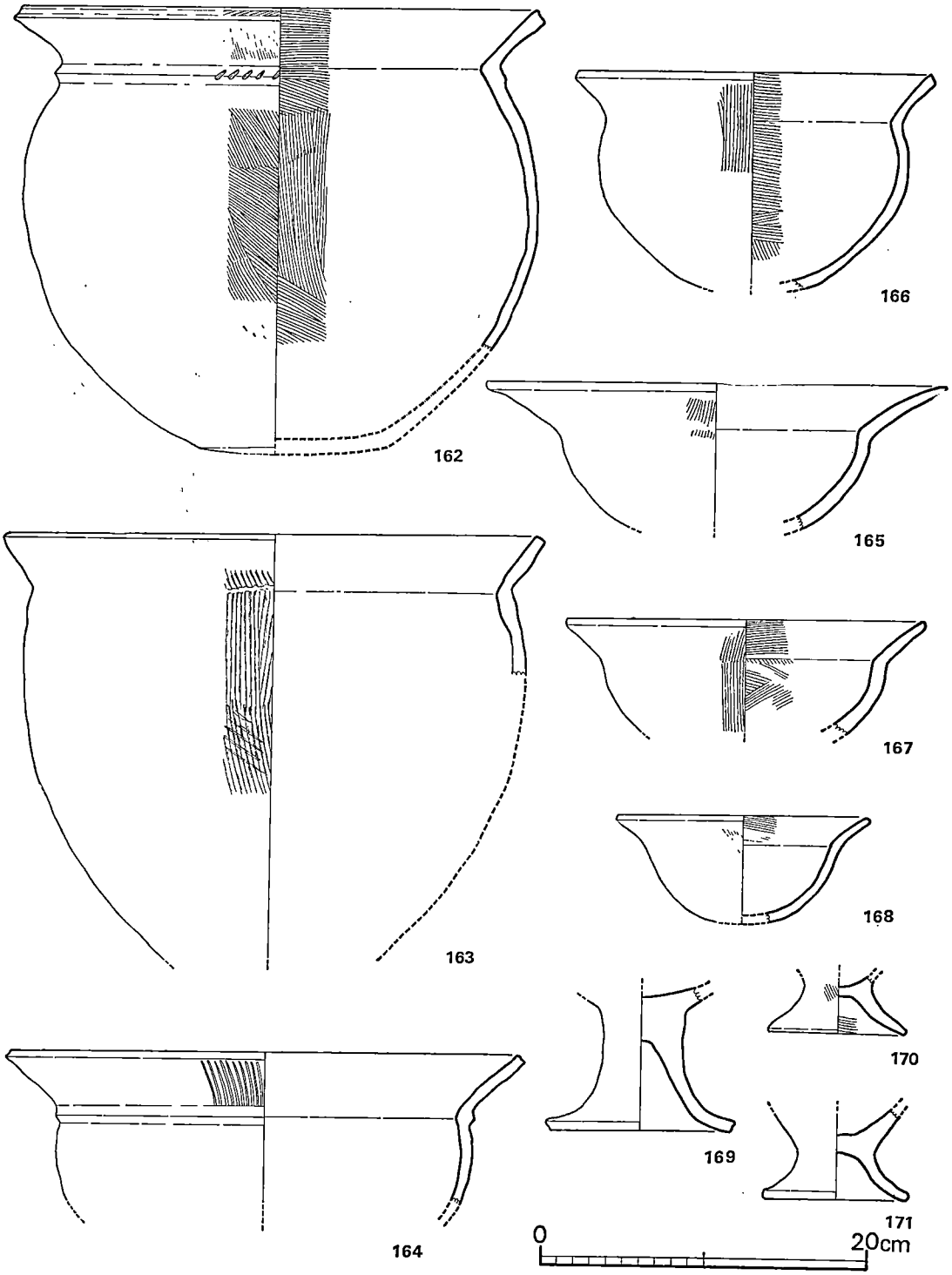




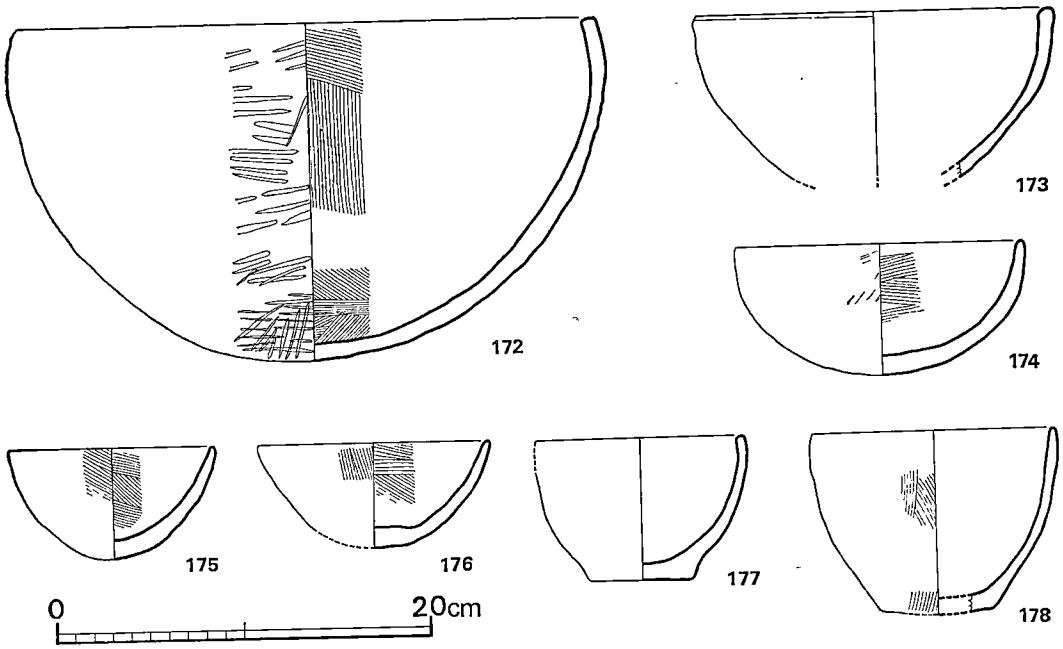
第 60 図　後期弥生式土器実測図12（1/6）

ている。内面刷毛，外面タタキのあと刷毛調整，底部付近はさらにヘラ削りして仕上げている。色調は淡黄褐色を呈す。

鉢形土器（162～178）　大きく二大別できる。「く」字状に開くもの（162～168）と，いわゆる「単口縁」の椀形のもの（172～178）である。前者をⅠタイプ，後者をⅡタイプとすれば，さらに形状・大きさにより3種に細別できる。ここではそれをa・b・cと呼称する。



第 61 図　後期弥生式土器実測図13（1/4）



第 62 図　後期弥生式土器実測図14（1/4）

Ⅰa鉢（162・163）　口径30cmを越す大形品で，口径と胴部径との差が小さく深目の鉢である。162は球形の胴部に大きく外反する「く」字状の口縁部がつく鉢で，頸部に1条の三角凸帯を付している。凸帯端部には刻目が施されている。底部は丸味をもつ平底である。胴部外面刷毛のあと，下半のみナデ仕上げ，内面も刷毛のあと内底部付近のみナデて仕上げている。口縁部内外は刷毛のあと軽くヨコナデしている。色調は淡黄褐色を呈す。復原口径32cm，器高26.7cm胴部最大径31.1cmを測る。163は162に比べ胴の張りの少ない鉢で，胴部最大径を上位にもつ。口径32.7cm，胴部最大径30.3cmを測る。調整は胴部外面刷毛のあと下半はナデ，内面は刷毛のあとナデ，口縁部内外は刷毛のあとヨコナデで仕上げている。色調は淡黄褐色を呈す。

Ⅰb鉢（164・165）　Ⅰa鉢と同様，大型品であるが，口径と胴部径の差が大きくⅠaタイプより浅目の鉢である。復原口径は164が28cmを測る。

Ⅰc鉢（166～168）　Ⅰb鉢の小型品である。調整は166が外面刷毛のあと下半をナデ，内面刷毛のあと内底部付近をナデて仕上げ，167は内外とも刷毛，口縁部内外を軽くヨコナデ，168は内外とも刷毛のあとナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は全て灰褐色を呈す。

Ⅱa鉢（172）　内湾気味に立ち上がる単口縁の鉢で，口径31cmを測る大型品である。底部は丸底。調整は外面粗いタタキのまま，内面刷毛で仕上げている。色調は灰褐色を呈す。

Ⅱb鉢（173～176）　口径11～19cmを測る中小型品である。調整は173が内外ともナデ仕上

げの他は，外面刷毛のあと下半をナデ，内面刷毛のあと内底部付近をナデて仕上げるという共通した手法を用いている。色調は173が灰色，174・175が淡灰褐色，176が灰褐色を呈す。口径は173が19cm，174が15.5cm，175が11cm，176が12.4cmを測る。また，174～176の外面下半に，黒斑がみられる。

Ⅱc鉢（177・178）　口径11～13cmを測る平底の椀形をなす鉢である。調整は177が内外ともナデ，178が外面刷毛のあとナデ，内面ナデて仕上げている。色調は177が褐色，178が灰褐色と異なる。

脚　台（169～171）　脚台にも169のような脚部の高いものと170・171のように低いものがある。直接鉢部と接合する資料がないので明確ではないが，おそれらく，Ⅱb・Ⅱcタイプの鉢につくものであろう。

高杯形土器（179～193）　179～190は杯底部の屈折が明瞭で，杯部が大きく外反するタイプで，大・小2種がある。口径23～26.8cmを測る小型のもの（179・180・190）と31.1～36cmを測る大型のもの（181～184・188）である。調整は基本として，杯底部外面刷毛のあとナデ，内底部はナデのあと暗文風のヘラ磨き，杯部内外面は刷毛のあとヨコナデし，さらに暗文風のヘラ磨きで仕上げている。その暗文風のヘラ磨きは，杯部外面では波状，内面では放射状に施されるものが多い。しかし，179・180・182のように内面でも波状に施されたものもある。全体として作りの良い土器である。色調は179・181が淡黄褐色，180が淡灰褐色，182が淡褐色，183・188が外面淡褐色，内面灰褐色，184が外面灰褐色，内面淡褐色，190が灰褐色を呈す。また，181～184の杯部外面には煤の付着が各所にみられ，杯底部外面が強い二次焼成を受け剝落しているものが多い。脚部のとれた杯部を煮沸用ナベとして再利用した好例であろう。弥生人の生活の知恵を知る興味深い資料である。

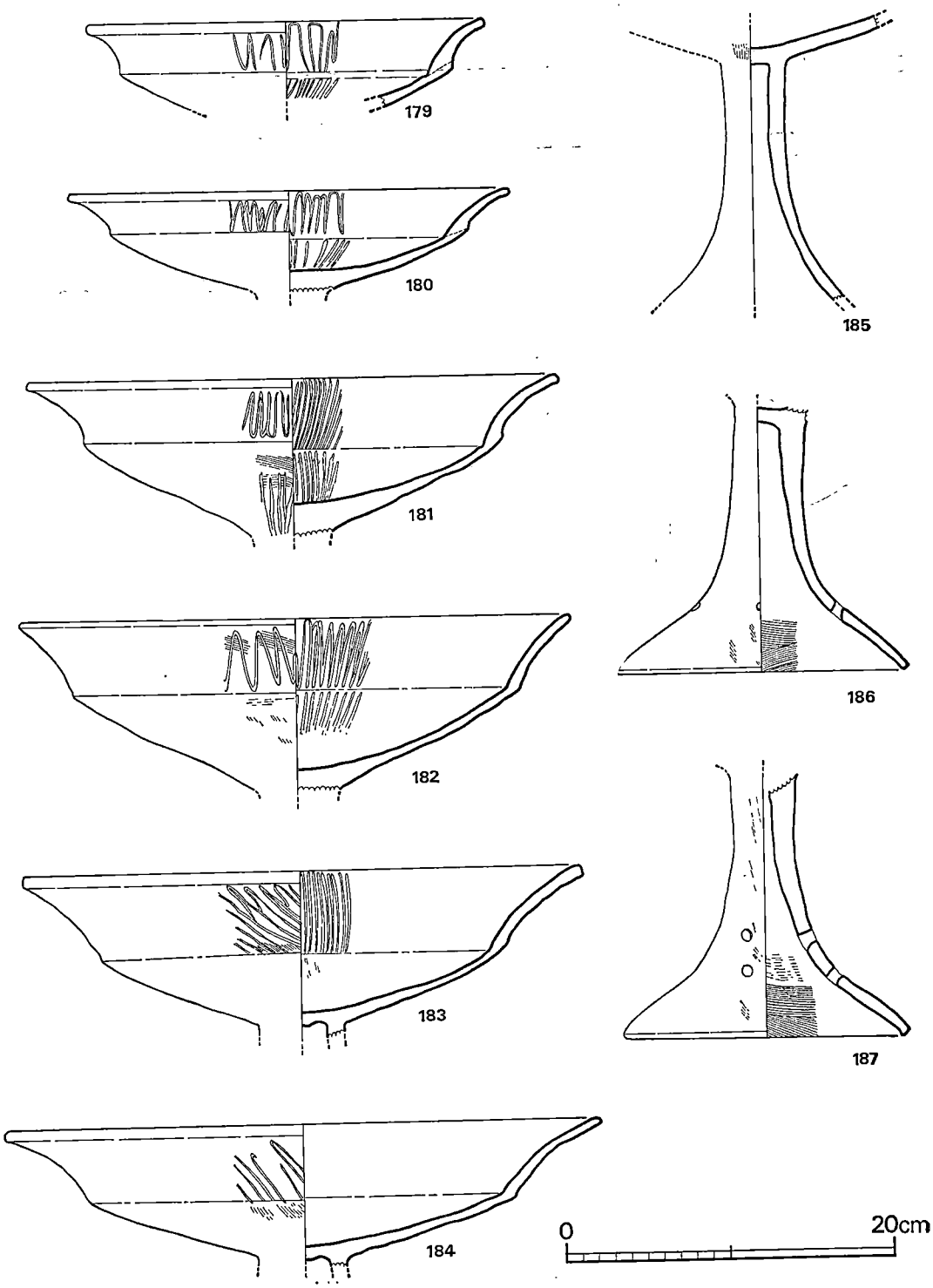
191は復原口径19.7cmを測る浅い杯形の杯部で，内外ともナデて仕上げている。色調は灰褐色である。

192は口径12.2cmを測る小型の鉢形をなす杯部に大きくひろがる低い脚部がつくと思われるものである。むしろ，脚付鉢として扱うべきものかもしれない。

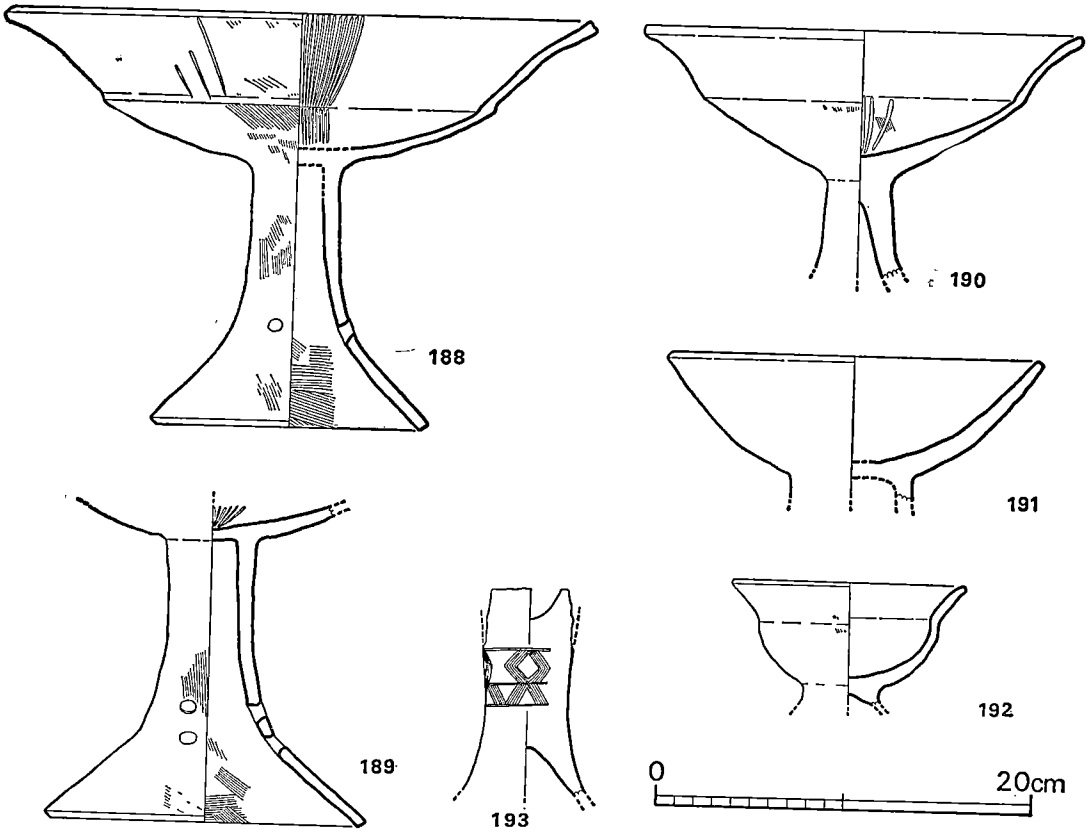
脚　部（185～187・189・193）　脚部にはスマートな柱状部から大きくひろがり，裾部で若干内湾気味になるもの（185～187・189），柱状部が充実のもの（193）がある。186・187の脚部は基本として188にみるように杯底部につくものである。193は柱状部外面に細いヘラ先で菱形・山形の線刻文を施した珍しい例である。193を除く脚部の調整は外面刷毛のあとタテヘラ磨き，柱状部内面ナデ，裾部内面刷毛仕上げのものが多い。色調は193が淡黄褐色の他は全て灰褐色を呈す。

器台形土器（194～209・212・213・215～221）　器台には大きく8種のタイプがある。

器台Ⅰ（194・195）　器受部と脚部のひらきが弱くほぼ等しい円筒状をなすタイプである。



第 63 図　後期弥生式土器実測図15（1/4）

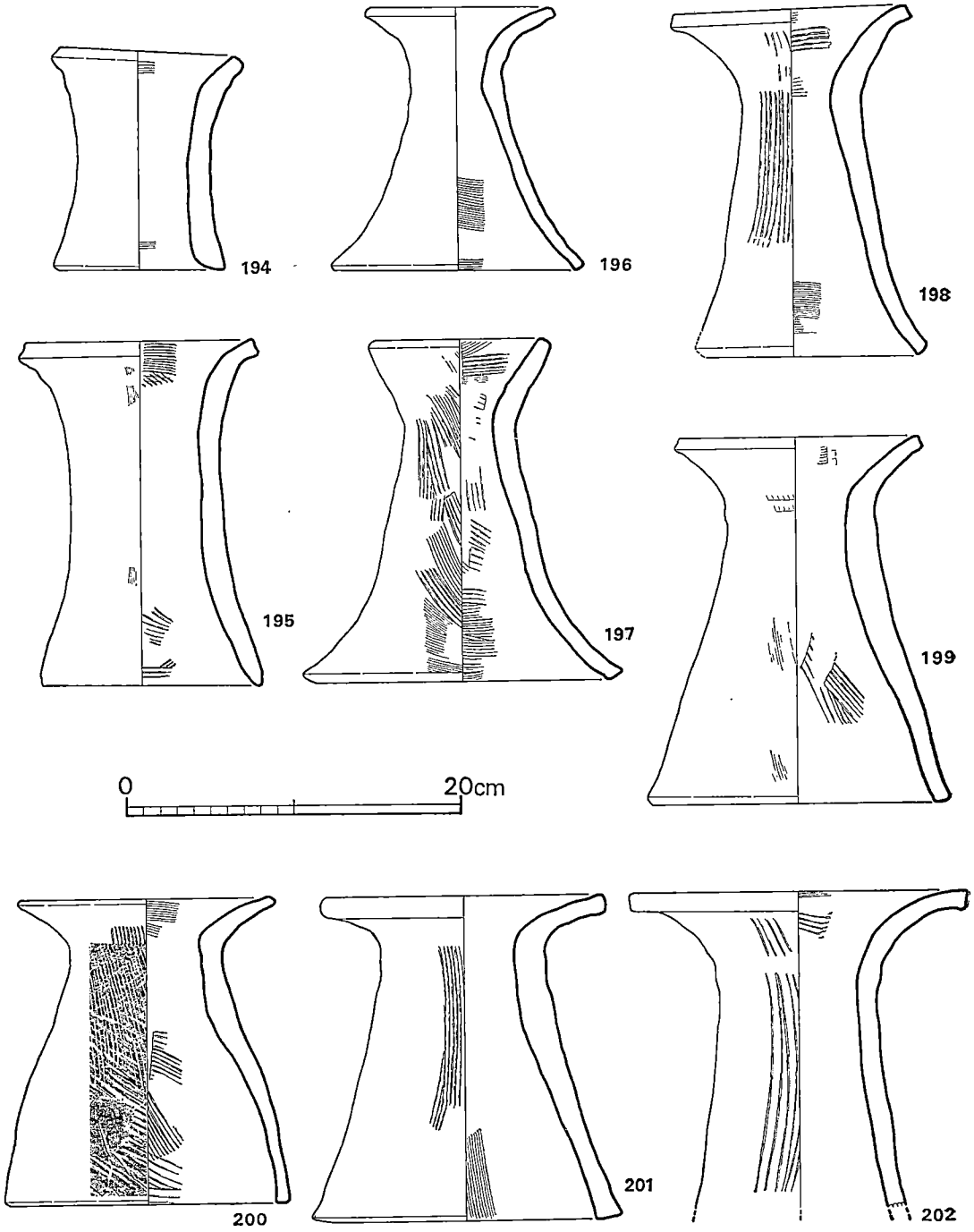


第 64 図　後期弥生式土器実測図16（1/4）

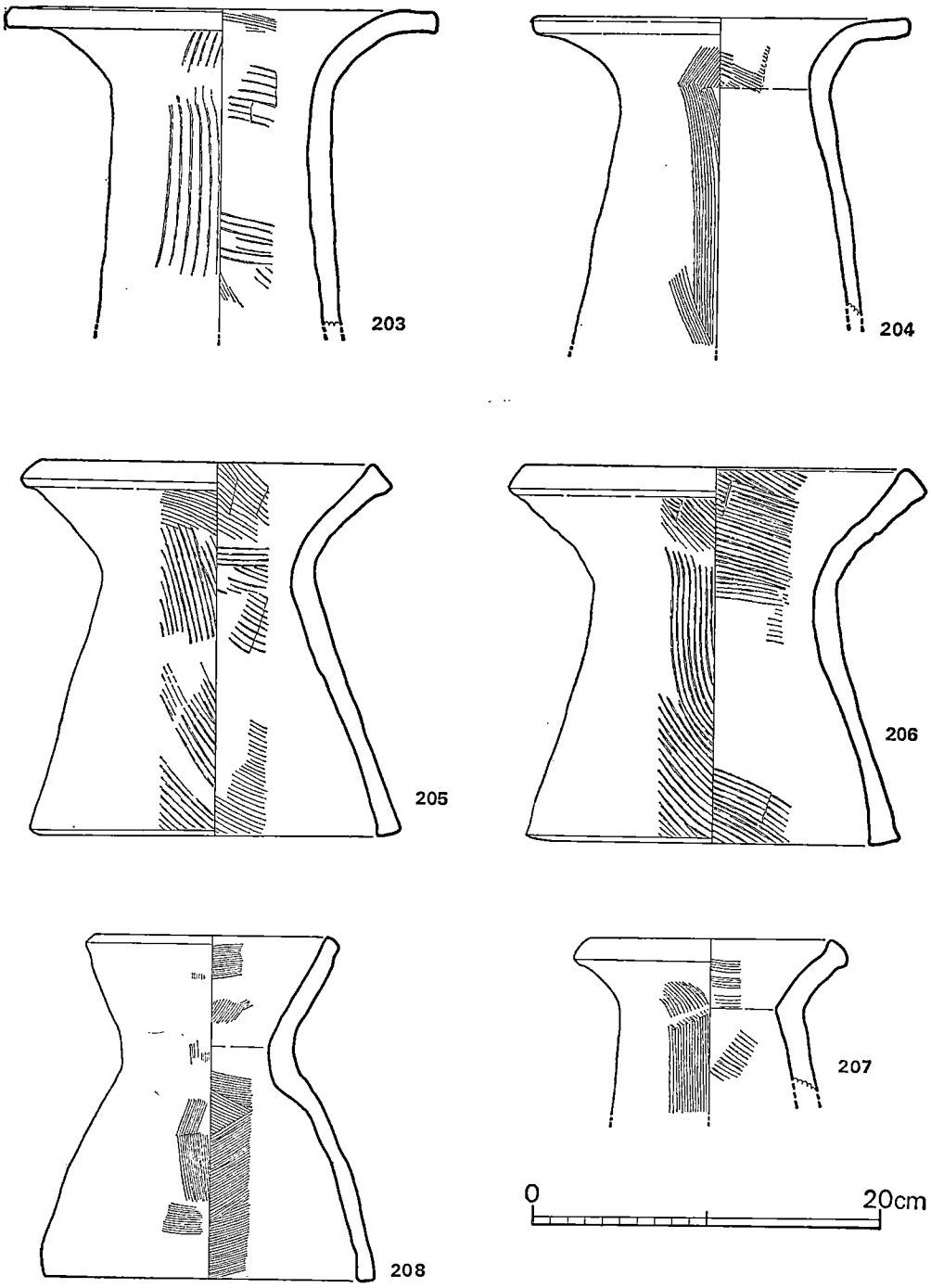
大きさにも大小あり，194が器受部径11.2cm，脚部径10cm，器高13cm，195は器受部径14cm，脚部径13cm，器高20.2cmを測る。調整は両者とも内外面刷毛のあとナデ，口縁部・裾部内外はヨコナデで仕上げている。色調は194が淡褐色，195が灰褐色を呈す。

器台Ⅱ（196～199）　脚部のひろがりが大きいのに対し，器受部が極めて小さく器受部のくびれが高く強いタイプである。このタイプにも裾部のひろがりが極めて大きい196・197と弱い198・199がある。196は器受部径11.1cm，脚部径14.8cm，器高15.5cm，197は器受部径10.6cm，脚部径18.7cm，器高20.1cm，198は器受部径14.1cm，脚部径13.8cm，器高20.4cm，199は器受部径14.7cm，脚部径17.8cm，器高21.5cmを測る。調整は内外とも刷毛のあとナデで仕上げたものが多いが，197のような刷毛調整のままのものもある。色調は196・198が灰褐色，197が外面茶褐色，内面赤褐色，199が外面淡灰褐色，内面明褐色を呈す。

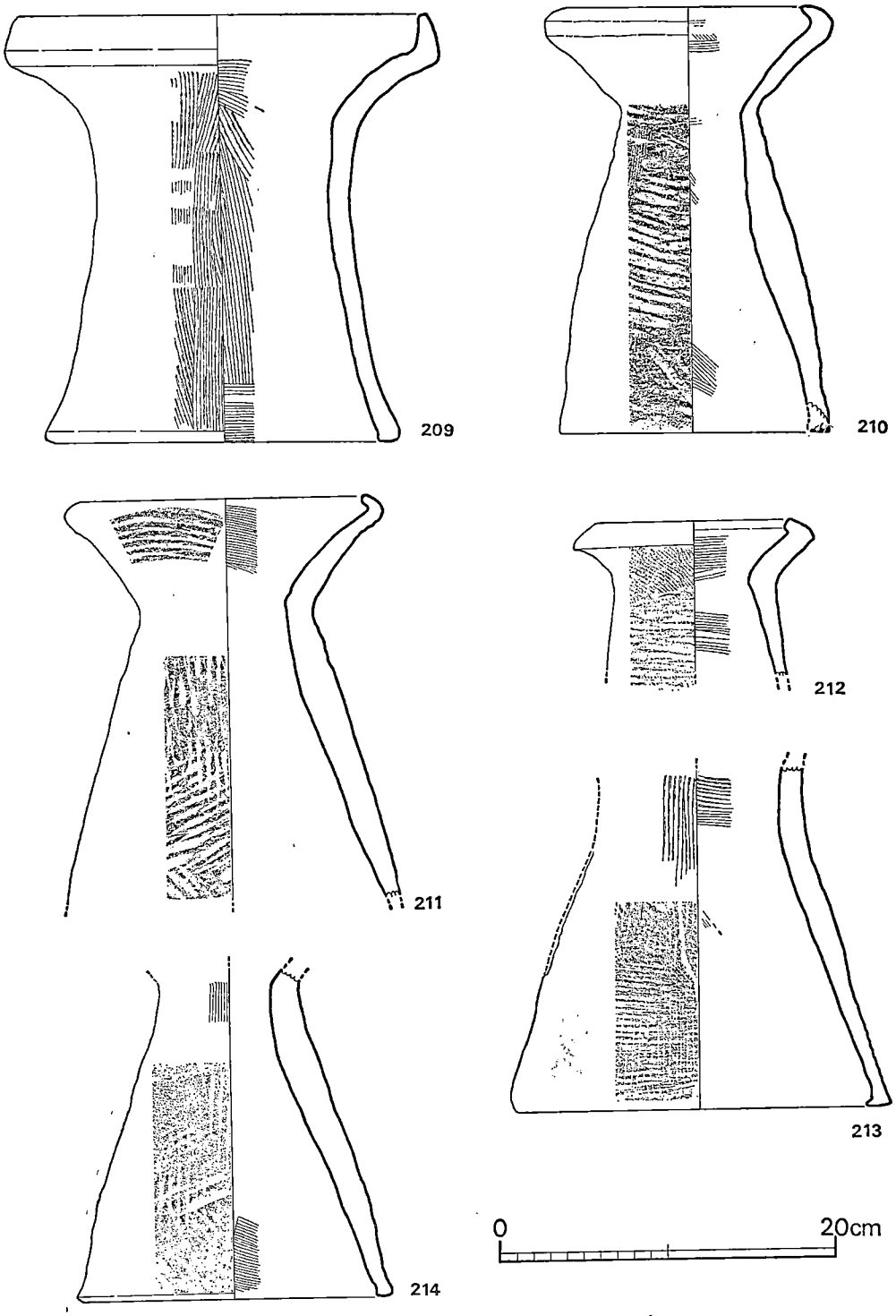
器台Ⅲ（200～204）　器受部の外反が極めて強く，上面に平担な面をもつタイプで，器受部のくびれも高い一群である。このタイプには脚部の広がりが内湾気味に広がる200と，ラッパ状に直線的にひらく 201 がある。調整にも外面粗いタタキのあと粗く刷毛調整したタタキ痕を顕



第 65 図　後期弥生式土器実測図17（1/4）



第 66 図　後期弥生式土器実測図18（1/4）



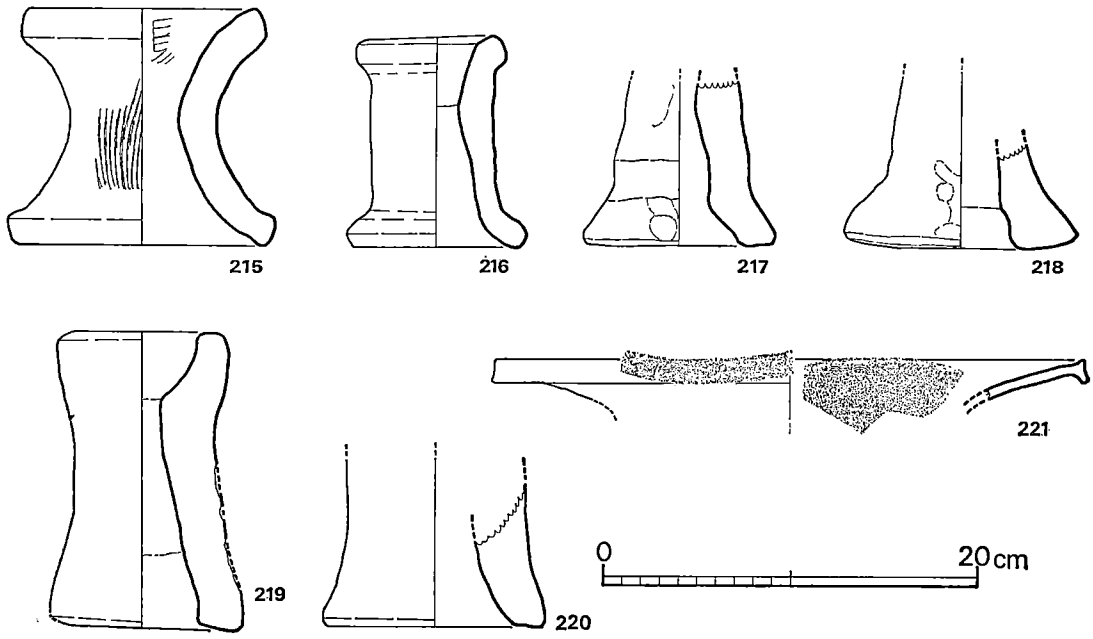
第 67 図　後期弥生式土器実測図19（1/4）

著に残す202と，刷毛調整で仕上げた201～204とがある。大きさにも大小あるが，全体として大きいタイプである。200は器受部径15.1cm，脚部径16.8cm，器高18.1cm，201は器受部径16.8cm，脚部径18.2cm，器高19.4cmを測る。他は脚部を欠くが，器受部径は202が20cm，203が24.3cm，204が12.3cmと極めて大きいタイプである。

器台Ⅳ（205・206）　器受部径と脚部径がほぼ等しく，くびれ部が中位に近い所にある鼓形状を呈すタイプである。205は器受部径20.8cm，脚部径21cm，器高21cm，206は器受部径23.7cm，脚部径21.3cm，器高21.3cmを測る。調整は内外とも粗い刷毛仕上げで，206はさらに内面中央部付近をナデている。上下端部内外はヨコナデにより肥厚ぎみに仕上げている。色調は両者とも灰褐色を呈す。

器台Ⅴ（208）　器受部・脚部とも内湾気味にひらくタイプである。器受部径14.2cm，脚部径18.7cm，器高19.5cmを測る。脚部外面粗いタタキのあと細かい刷毛調整，内面刷毛，器受部内外は刷毛のあとナデて仕上げている。色調は灰褐色を呈す。

器台Ⅵ（209・212）　器受部が袋状を呈すものである。このタイプには器受部が大きく，脚部のひろがりがさほど大きくならないずん胴な209と，大溝Ⅱ出土の210・211のようなくびれ部のしまりが極めて強いものとがある。209は器受部径24cm，脚部径21cm，器高25cmを測る。調整は内外面とも粗い刷毛，上下端部内外をヨコナデで仕上げている。色調は灰褐色を呈す。



第 68 図　後期弥生式土器実測図20（1/4）

器台Ⅶ（215～220）　いわゆる手捏の器肉の厚い小形の一群で，指頭圧痕を顕著に残している。しかし，215のような刷毛調整を加えた作りの良いものもある。

器台Ⅷ（221）　いわゆる近畿地方で一般にみられる櫛目波状文を口縁端部外面と内面に施した大型の鼓形をなすもので，復原口径31cmを測る薄手の作りの良い土器である。また，端部外面には刻目を施した貼付文もみられる。内外とも刷毛目調整で，色調は淡茶褐色を呈す。

他に，器受部を欠く外面粗いタタキを顕著に残す213がある。脚部の形状からしてⅥタイプの210・211と同様の袋状の器受部をもつものであろう。

支脚形土器（222～233）　全て上面が傾斜する沓形状を呈す支脚で，上面中央に1つの円孔があく。また，大きさにも大小あり，大きいもので中央部の器高14cm前後，小さいもので7.4cmである。外面粗いタタキのままのもの，タタキのあとナデているもの，内面はナデて仕上げたものが多いが，222・232・226のような刷毛調整のものもある。しかし，その大半が内面に顕著な指頭圧痕を残している。タタキには横位・斜位のものが多いが，縦位のタタキをもつ224・225や，縦位と斜位のタタキを施した223もあり珍しい例である。上面はタタキのあと丁寧てにナデて仕上げたものが多いが，このようにタタキのままのものもある。また，全体とし器肉の厚い作りの土器で，この土器の用途を示すごとく二次焼成を受けたものが多い。（井上）

d　出土木製品

大溝からは，多量に及ぶ木材が出土したが，加工痕の明瞭な木製品類は少なく，図示しえた資料は22点のみである。出土層位は第6層がほとんどで1点のみ7層，種類として，農具，日常生活用具・その他の用途の明確でない木製品類が含まれる。

≪農具（図版57，第70・71図）

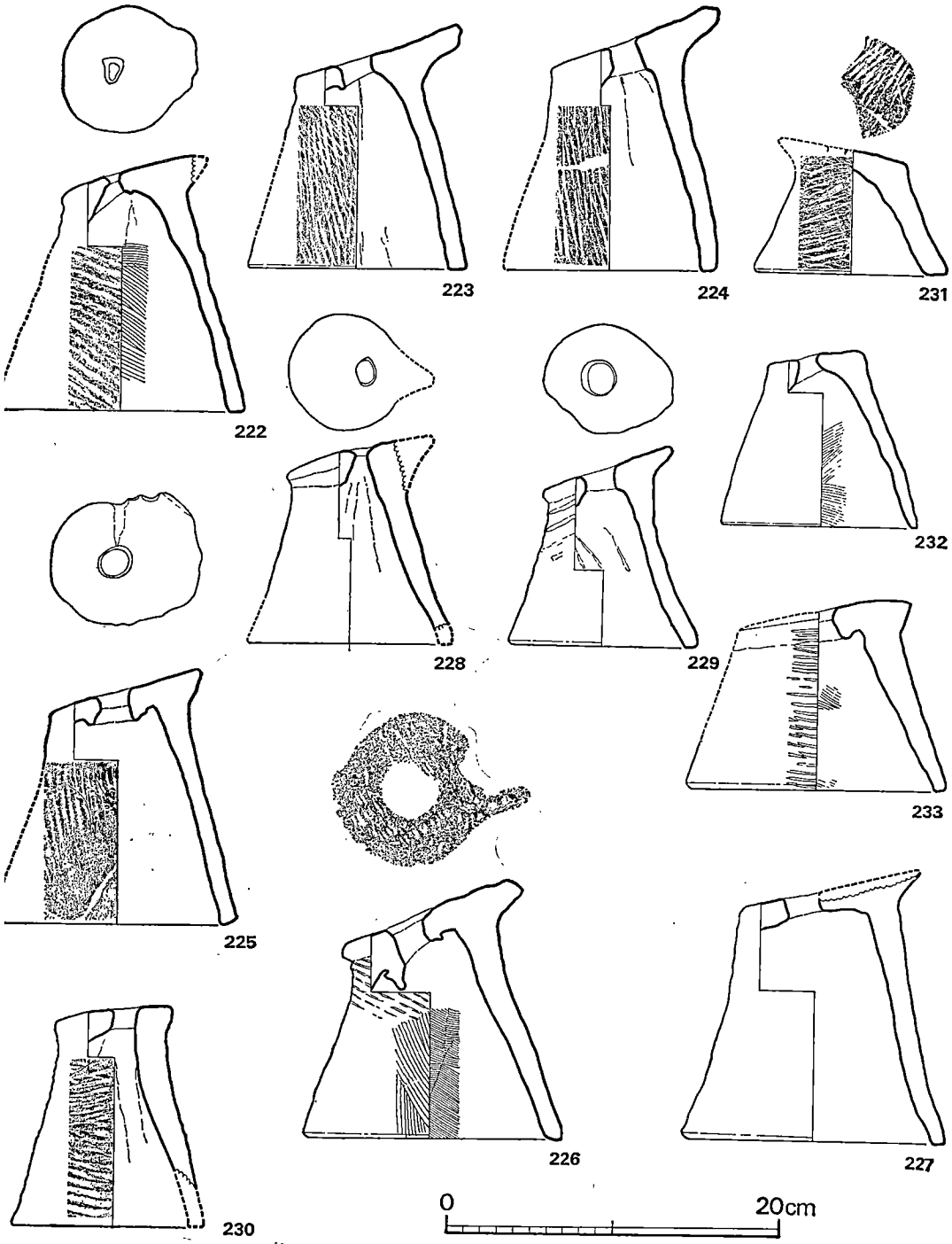
鋤・二又鍬・三又鍬・平鍬等で，全体の形状を知れる資料はない。1はT字形を呈する把手で一木から造り出されている。径約3cmの円形断面を有する握りの部分は，10cm残存し，ほぼ中央で柄に続く。柄は2×3cmの楕円形断面で11cmの長さを残して身側を欠失する。材質はカシ材で把手の形状から鋤の柄に付くものと考える。

3は二又鍬の基部から歯にかけての破片。歯の内側は断面三角形で外側に薄めになっていく。4～7・12～15は三又鍬になる例で，いずれも歯幅は二又鍬に比して狭い。頭部から基部にかけて平坦で舟状の幅広になりながら，刃部に向う。また全体に平坦で舟状の突起などはみられない。

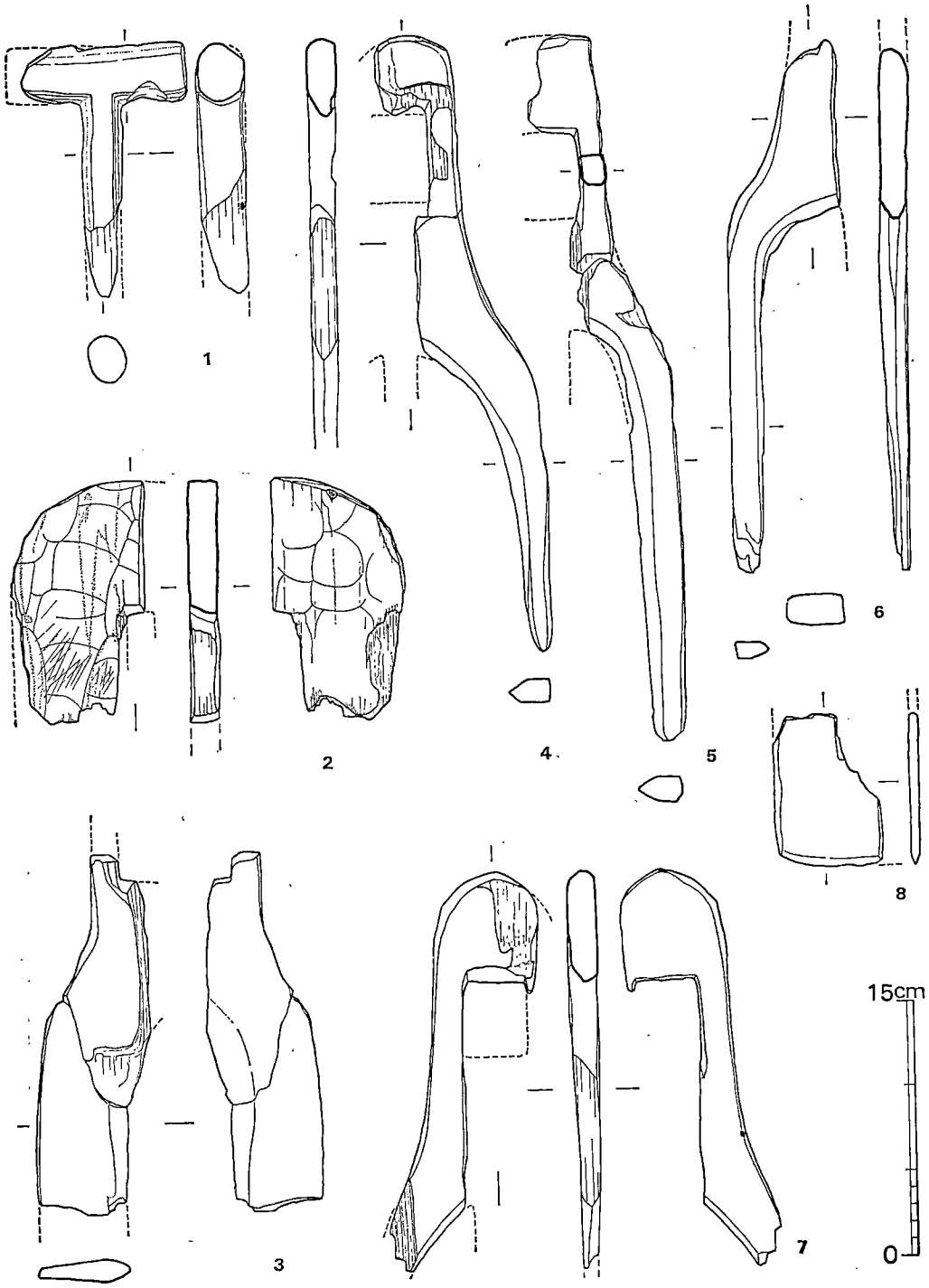
8は，平鍬片であろう。刃部端のみ残存する程度で全体の形状は不明。

10・11は鍬の頭部破片で，二又鍬・三又鍬・平鍬のいずれになるものか明らかではないが，柄孔の角度は両者異なり用途の違いを想定させる。11の柄孔の形状は三又鍬のそれに近い。

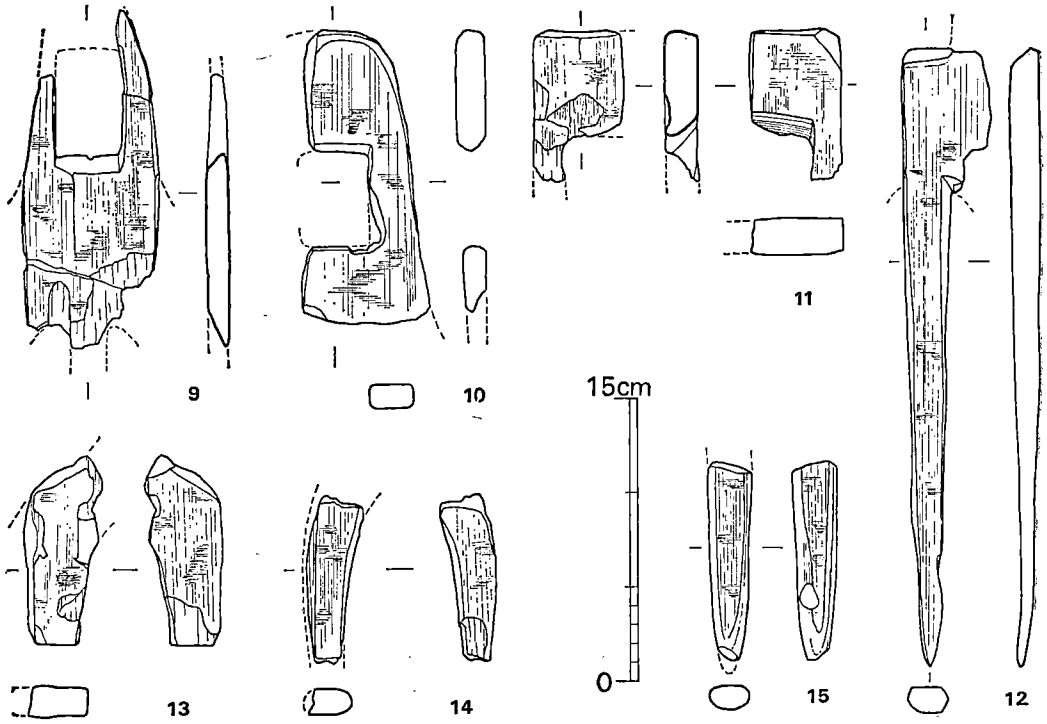
第72図は木製鍬類の計測区分を示し，これによる門田遺跡谷地区出土の鍬類の計測値を表



第 69 図　後期弥生式土器実測図21（1/4）



第 70 図　木製品実測図1（1/4）



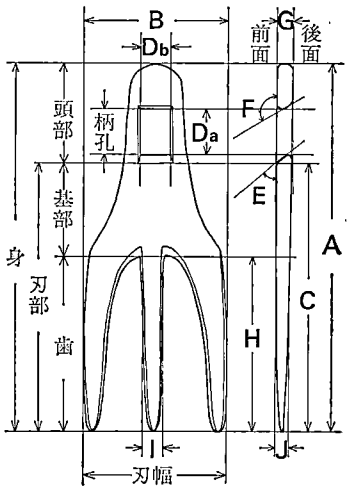
第 71 図　木製品実測図２（1/4）

にまとめた。なお第72図は辻田遺跡（註１）出土の三又鍬を元にして想定したものであるが，二又鍬・平鍬とも基本的に同様に取り扱った。これらの鍬類の材質はいずれもカシ材あるいはそれに近い材である。

≪生活用具（図版58・59—１・２，第73・74—１～３）

臼・杓子等の調理に関わる木製品で，いずれも第６層より出土した。

第73図の臼はＣ９—７区から横転した状態で発見され，半分を欠失するが全体の形状を知り得ることの可能な資料である。丸太材を縦方向に用いたものでかなり変形している。器高の最大値57.2cm，最小値54.8cm，口縁外径最大値56.4cm・最小値45.4cm，くびれ部の径24.0cm，底径41.6cm，底部からくびれ部の高さ最大値18cm，最小値16cmを測る。外面には５～６cm幅の削り込みによる面取りが施され，くびれ部は約1.2cm幅の溝を１条彫りめぐらせて上・下半を区分している。また胴部に高低差はあるにせよ相対する２ヶ所の刳り込みが設けられ，運搬の際の担き口としてお



第72図　木製鍬類の計測区分

表 6　木製鍬類計測表

(単位 cm. 度)

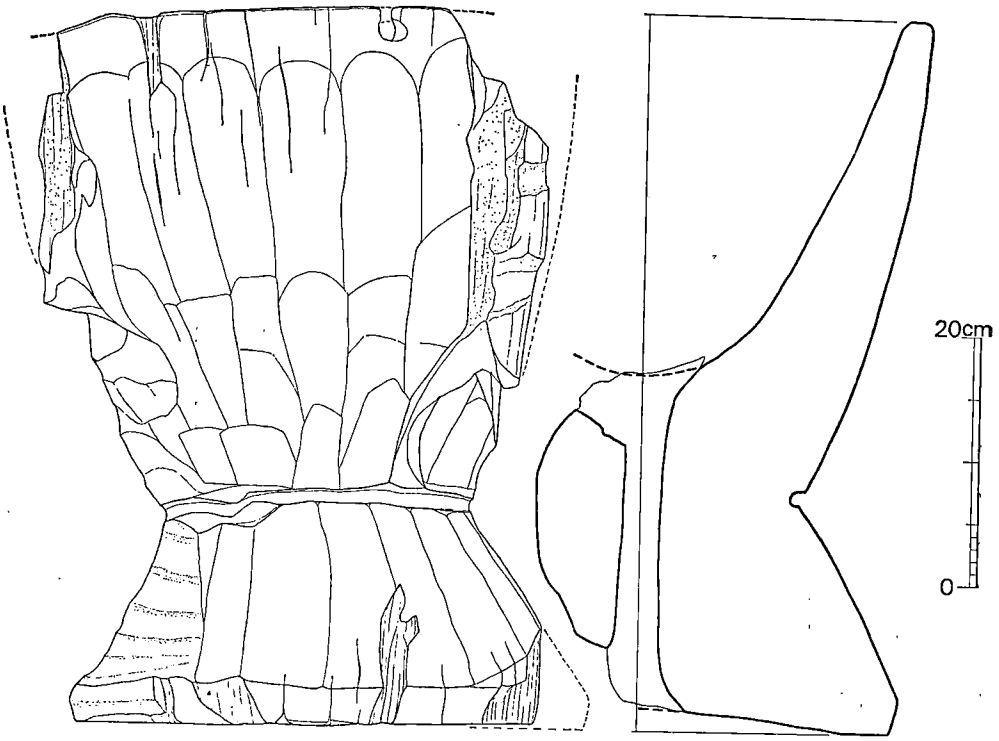
種類	地区	層位	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	残存状況	図面番号
平鍬	C9−23	6	(8.9)	(6.4)	−	−	−	−	−	−	−	0.7	刃部片	8
二又鍬	C9−13	6	(21.2)	(6.7)	(19.2)	−	42°	−	1.6	(9.1)	5.1	1.1	破片	3
〃	D9−12	6	41.2	(8.0)	29.9	6.2×−	46°	142°	1.9	22.3	4.5	1.5	½片	
三又鍬	C9−4	6	36.2	(9.7)	25.6	5.1×−	44°	152°	1.8	17.4	1.9	1.3	⅔片	4
〃	C9−22	6	42.8	(8.3)	30.6	5.9×−	−	131°	2.1	24.4	2.3	1.5	〃	5
〃	C9−24	6	(31.0)	(12.0)	−	−	−	−	1.7	(21.6)	1.8	1.3	破片	6
〃	B9−23	6	(23.5)	(9.2)	(11.1)	4.7×3.8	43°	146°	1.7	(3.7)	−	0.9	頭部片	7
〃	C9−22	6	(17.8)	(7.2)	(9.2)	5.5×3.5	45°	−	1.3	−	−	−	〃	9
〃	C9−22	6	(32.9)	(4.8)	32.5	−	49°	−	1.6	25.3	1.7	1.1	刃部片	12
〃	C9−11	6	(10.0)	(4.2)	−	−	−	−	−	−	3.2	1.7	〃	13
〃	C9−11	6	(8.9)	(3.0)	−	−	−	−	−	−	(2.3)	1.4	〃	14
〃	C9−11	6	(10.4)	(2.4)	−	−	−	−	−	−	2.3	1.3	〃	15
〃	−	−	(16.2)	(4.2)	−	−	−	−	1.5	−	−	−	破片	
〃	−	−	(15.4)	(3.6)	−	−	−	−	1.2	(8.3)	1.8	1.0	〃	
−	C9−14	6	(15.6)	(6.6)	−	5.7×−	−	−	1.5	−	−	−	頭部片	10
−	D9−13	5下	(7.6)	(4.8)	−	−	−	130°	2.0	−	−	−	〃	11
−	C9−22	6	(10.3)	(7.3)	−	−×2.3	−	140°	1.5	−	−	−	〃	

− は計測不可能及び不明、(　) は現存値を示す。　A～J は第72図参照

り，一方は幅11.7cm，奥行4.3cmのしっかりとしたもの，幅8.8cm，奥行1.6cmで低い位置にある。この他，口縁部に直径2cmの孔が通っているが，反対側の口縁部を欠失しているため対応する孔があるか否かは不明。

内面は使用による摩耗の為か調整痕は残存せず，外面との口縁での厚み2.4cm・下部10cm余りの厚みを有し，下方に向って丸味をもちながら窄まる。材の髄が通って腐蝕し易い為であろうか内底面に相当する部分は空胴になっているが，口縁からの深さは約28cmを有す。なお外底面は1.5cm程度浮く上げ底を呈している。材質はクスノキ。

第74図1は，C9—7区から出土した把手付容器で全長12.4cm，現存する幅7.4cmを測る。丸太材の髄を刳り取って造り出しているが，外面を削り調整で仕上げながらも内面に刳りの痕を残す粗い造りである。把手は長さ3cm，高さ5.2cm，厚さ2cmの板状に仕上げ，約0.5cm厚さの器壁で身に接す。身は側面・先端・底共に約1cmの厚みを有す。顔料等の塗布はみられず，器壁の孔は製作当初のものではない。2は，E9—4区から出土した杓子。縦木取りによる刳



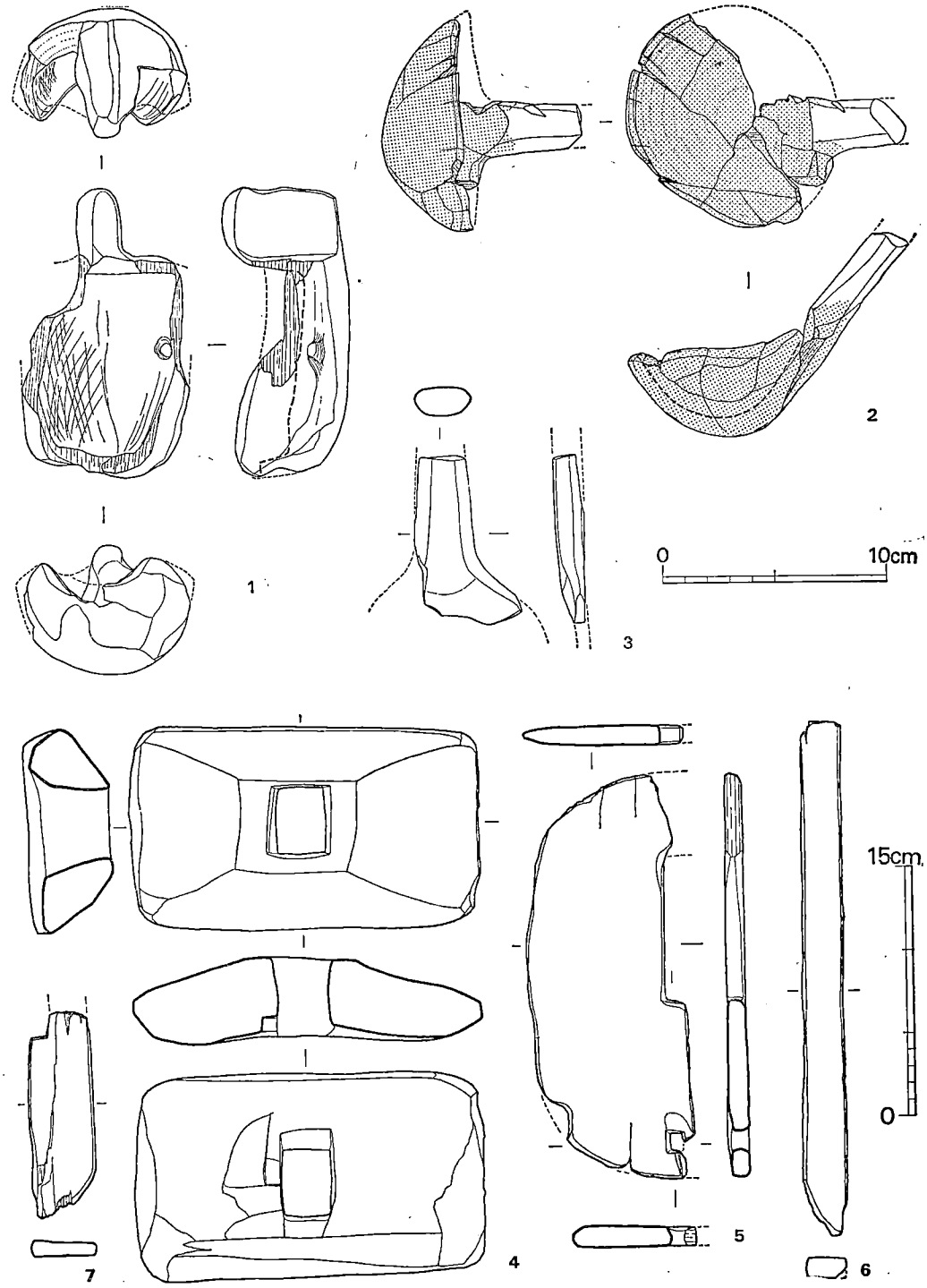
第 73 図　木製品実測図３（1/6）

り物の精製品である。いわゆる汁杓子の形態で，椀形の身に 38° の傾斜をもって棒状の柄がつづき，身の一部と柄の先端を欠失するが現存長12.7cmを測る。柄は短径1.6cm，長径2.1cmのカマボコ形に近い楕円形断面を呈し，身は深さ 3.8cm で平面形での長径10cmをしているが，柄と身の長径方向は40° 程度斜めに接している。これは材の髄を避けたことに起因するのであろうか。身の内外面共黒色の漆が塗布され，柄には一部に付着する程度で塗布されていない。

３は，扁平な杓子の基部破片でＤ９—３区出土。いわゆる飯杓子の形態を有しているが，身は15×10cm程度の大形であろう。柄と身はやや反って接する。

≪有孔板状製品（図版57—２，59—３・４・６，第70図２，第74図４・５・７）

板材に加工し更に方形に孔を穿った製品である。第70図２は当初農具として分類していたが，形状及び材が他の農具にみられない資料であることからむしろ柄等の組み合わせに関わる部材として考えるべきであろう。大半を欠失するため全体の形状は明らかでないが，現存長14.2cm，現存幅6.9cm厚さ1.8cmを測る板状製品で角は丸く削り落している。表裏共削り調整の痕を明瞭に残し３～４cm単位に連続する。孔は，角の一部が残される程度で規模は不明。Ｅ９—20区の第６層出土。ヒノキ属であろう。



第 74 図　木製品実測図4（1/3・1/4）

第74図４は，Ｃ９—17区第６層出土。長さ21.7㎝，幅12.5㎝，厚さ5.3㎝を測り，片面を梯形四方体に整形し，中央部には3.9×2.8㎝の長方形の孔を材の長軸に直交した方向に穿っており，裏面で6.4㎝×3.1㎝に広がる。なお裏面は孔の部分を中心とした凹みになる。材質はスギであろう。５は，Ｄ９—４区第６層出土の板材で，長さ24.1㎝，現存幅4.5㎝，厚さ1.3㎝を測る。角を丸く削り落としていることからみて全体の形状は円板状が想定できる。中央部のやや片側寄りに一辺８㎝の方形の孔と，反対側の縁辺寄りに1.0×0.9㎝の方形の孔を設けられたことが知り得る。材質はカシ材であろう。７は現存長12.3㎝，幅3.9㎝，厚さ１㎝を測る板材で角形の切り込みが残る。また端部は丸味を帯びて削られている。Ｃ９—10区第７層出土。

≪その他の板状製品（図版59—５，第74図６）

軟質の板材で幅2.7㎝，厚さ1.2㎝を測る整えられた柱状に近い板で現存長30.5㎝。Ｃ９—４区第６層出土。

なおこれらの木製品類の時期はその大半が第６層より出土しており，一方第６層出土土器の時期は弥生時代後期末であることからこの時期を考えておきたい。また門田遺跡の辻田地区を挟んで立地する辻田遺跡で大溝から，はるかに凌駕する多量の木製品類が出土している（註２）ことを付け加えておかなければならない。（小池）

(3) 大溝Ⅱ（図版25—２，第５図，付図２）

Ｆ８・９区にわたり検出された「Ｌ」字状に蛇行する大溝である。谷中央部を流れる大溝Ⅰと同様の断面低平な「U」字状をなす溝状遺構で，Ｇ９区で大溝Ⅰと合流する。大溝はＦ８—８区からＦ９区へと南走し，Ｆ８—９・10，Ｆ９—10区付近で溜りを形成する。そこで溝は大きく屈曲し，西側に流路をとり大溝Ⅰに合流している。また，大溝Ⅰと合流する付近のＦ８—25，Ｆ９—21区にも広い溜りを形成している。溝の幅はＦ８—８区では1.20ｍと狭いが，Ｆ８—９・10，Ｆ９—10区の溜り部では約８ｍと幅を広げる。しかし，Ｆ８—15，Ｆ９—11区では4.30ｍと狭くなる。だが，再び大溝Ⅰに合流する付近では幅12ｍと最大に広がり溜りを形成する。溝の深さもＦ８—８区の狭い所５㎝，Ｆ８—９・10，Ｆ９—10区の溜り部で約70㎝，大溝Ⅰに合流する付近の溜り部では40㎝と深くなる。土層の堆積状態は二つの溜り部では異なり，Ｆ８—９・10，Ｆ９—10区の溜り部の土層は５層上部から６層までの３層で，７層の砂層の堆積はみられない。しかし，大溝Ⅰに合流する付近の溜り部では７層の砂層まで堆積している。遺物は両溜り部に堆積していて，Ｆ８—９・10，Ｆ９—10区の溜り部からは５層下部層に集中して弥生後期を中心とした土器群が堆積していた。しかし，古墳前期・後期の土器も少なからず混在していて，その状態は大溝Ⅰと共通している。

また，大溝Ⅰと合流する付近の溜り部からは後期の土器は少なく，むしろ，７層の砂層から

多くの先土器時代の石器，縄文・弥生時代の石器類が流されてきて溜ったような状態で出土した。この大溝も大溝Ｉとほぼ同様の時期に活用されたものといえよう。　（井上）

a　出土石器・土製品

≪尖頭状石器（第22図３）

ｂ１類に属す。幅2.4㎝，厚さ８㎜を測る尖頭石器の胴部片である。基部の方向に広がり，先端はかなり細身になろう。安山岩製。

≪石　鏃（第23図21・30・42・75，第24図85・105・107・111・119・141・148・161）

40点出土した。

ａ類（21・30）　６点出土した。21は先端部が鈍い。30は不定形な剝片の先端近くに細かい加工を施し鏃に仕上げている。黒曜石製。

ｂ１類（42）　42は若干外湾する側縁を持ち，やや荒い剝離で全体を整形する。黒曜石製。他に８点出土した。

ｂ２類（69）　浅い茎部の抉りをもつ正三角形に近い石鏃で黒曜石製。他に２点出土した。

ｂ３類（85）　透明度の深い良質な黒曜石を素材としている。完形品で側縁は鋸歯状を呈す。全長２㎝，幅1.45㎝，厚さ2.5㎜，重さ0.5ｇを測る。他に５点出土した。

ｂ４類（105・107・111）　105～107は外湾する側縁を有す。107は横長の剝片を素材とし，主要剝離面側は周縁に丁寧な調整を施す。111は横長の剝片の打面側を折断したもので，他縁と基部に荒い調整を加えている。いずれも黒曜石製。

ｂ５類（119）　先端・両脚端部を欠損する。鋸歯状の側縁を有す。黒曜石製。

ｂ７類（134）　完形品で全長2.6㎝，幅1.9㎝，厚さ0.4㎝，重さ1.5ｇを測り，安山岩製。他に２点出土した。

ｂ８類（141）　ｂ８類では最もその特長を示す完形品，全長2.7㎝，幅1.8㎝，厚さ0.42㎝，重さ1.3ｇを測る。きわめて丁寧な加工を全体に施している。黒曜石製。他に２点出土した。

ｂ９類（148・161）　148は先端部・脚部を欠損するが，復原全長５㎝前後の大型品。体部の剝離は荒い。161は先端部近くで急に尖り，脚部は広がる形状を呈す。片脚を欠損する。両者とも安山岩製。

≪削　器（第25図182，第26図198・199）

ｂ類（182）　幅広な縦長剝片を素材とする。半月状の剝片の一端に外湾の刃部を形成する。また，一方では背縁には複剝離が全体にみられ，これを打面と考えて，舟底形細石刃核の母核と考えられない事も無く，どちらかと言えば，その可能性が強い。

ｄ類（199）　上半部を欠損した剝片の両側辺の一部に微細な加工を施している。黒曜石製。

≪磨製石斧（第27図216，第29図243・253）

b 1類（216）　柱状片刃石斧の刃部小破片で泥岩質頁岩製。

e類（253）　乳棒状石斧の刃部から胴部破片。頁岩質砂岩。

g類（243）　g類で最も幅広の太型蛤刃石斧であるが刃部，胴部を欠損する。幅8㎝，残存長9.2㎝を測る。玄武岩製。

≪刃部磨製石斧（第30図266）

b類（266）　厚さ1㎝と扁平な石斧の頭部片。緑泥片岩製。

≪礫　器（第30図269）

河原石の転礫の一端から数回にわたって打撃を加え刃部を形成した，いわゆるチョッパーである。深原遺跡の例から縄文時代早期頃に伴出するものであろう。硬砂岩製で，F 9—16区7層で，重量は352g。

≪石庖丁（第31図287）

2点出土し，1点は小破片で分類不明。287はd類で2工程の資料である。背縁・刃部整形の剝離が施される。

≪磨　石（第33図307）

b類で，花崗岩製の長円礫の体部を中心に磨痕が観察される。

≪石皿状石製品（第33図319）

F 9—6区7層出土で，厚さ4.8㎝と部厚い大型の花崗岩製で，上面は平坦で擦れた痕跡がある。石皿に近い用途が考えられる。

≪土製円盤（第38図388・393）

b類（388）　打ち欠いた土器片の周縁を丁寧に磨いたもので，淡灰色を呈す。

c類（393）　小型で径2.58㎝，厚さ0.92㎝，重さ5.8gと軽量。淡灰色を呈し，軟質。（木下）

b　出土弥生式土器

≪後期の土器（第49・51～55・57・58・67・68図）

壺形土器（65・83・94・96）　65は口縁部を欠く資料であるが，大溝Ⅰ出土の64と同様，直線的に内傾する口縁部がつくタイプである。倒卵形の胴部にゆるやかに外反する口頸部がつく壺で，胴中位よりやや下位に1条，頸部下に1条の三角凸帯を付し，端部に刻目を施こしている。底部は丸底である。内外とも刷毛調整で，胴部外面下半はさらにナデて仕上げている淡黄褐色を呈す土器である。83はいわゆる「単口縁」の壺で，大溝Ⅰ出土の84と同じタイプである。球形の胴部に大きく外反する口縁部がつくもので，端部はヨコナデによりつまみ上げ気味に仕上げている。調整は胴部外面タタキのあと刷毛，内面刷毛のあとナデ，頸部内外は刷毛，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。口径は20.9㎝，色調は淡黄褐色を呈す。94は短頸の小型直

口壺で，胴部はソロバン玉形を呈し，底部は尖り気味の丸底である。内面ナデ，外面刷毛のあとヘラ磨きで仕上げている。色調は淡黄白色を呈す。口径8.8cm，器高9.2cmを測る。95はいわゆる広口の直口壺である。扁球形の胴部に直口する短い口頸部がつく，丸底の壺である。口径15.6cm，器高14.6cm，胴部最大径19cmを測り，口径に比べ器高が低い鉢形土器に近いタイプである。調整は外面刷毛のあと，胴部下半はナデ仕上げ，内面は刷毛のあと内底部をナデ，口縁部内外をヨコナデ調整している。

甕形土器（98・100・101・108・109・117・130・133）　100・101はいわゆる長胴の胴部に「く」字状に外反する口縁部がつく甕で，口縁端部をヨコナデによりつまみ上げ気味に仕上げたⅠａタイプの甕である。口径100が28cm，101が24.7cmを測る。98は口径30.6cmを測る大きいもので，頸部下に１条の三角凸帯を付している。胴部外面タタキのあと刷毛，内面刷毛，口縁部内外は刷毛調整で，端部内外はさらにヨコナデして仕上げている。108は口径28.4cmを測る甕で，口縁端部外面に櫛状工具により刻目を施している。内外とも刷毛調整で，口縁端部内外は，さらに軽くヨコナデしている。109は口径27.1cmを測り，頸部下に１条の低い三角凸帯を付している。調整は胴部外面タタキのあと刷毛，内面刷毛，口縁部内外は刷毛のあと丁寧にヨコナデして仕上げている。98・108・109はいわゆるⅠｂタイプの甕である。117は立ち気味の「く」字状口縁の甕で，Ⅰｄタイプ甕である。口径20.6cmを測る。色調は淡茶褐色を呈す。130は球形の胴部に立ち気味に外反する短い口縁がつく甕で，胴部径に比べ口径が極めて小さいタイプである。Ⅱｃ甕のタイプの典型である。復原口径13.6cmを測る。胴部外面刷毛のあとナデ，内面刷毛，口縁部内外は刷毛のあとヨコナデ仕上げである。133は球形の胴部に立ち気味にゆるやかに外反する長目の口頸部をもつタイプで，Ⅱａ甕タイプの典型である。胴部外面粗いタタキのあと刷毛調整，下半はさらにヘラ削りで仕上げている，内面は刷毛，口縁部内外は刷毛のあとヨコナデしている。口径18.7cmを測る。

底　部（136）　胴下半の資料で，平底である。外面刷毛調整のあと底部付近をヘラ削り，内面は刷毛のあと内底部付近をナデて仕上げている。外面には煤の付着がみられる。

器台形土器（211・212・215）　211・212とも器受部口縁が袋状をなし，くびれ部のしまりが強いタイプである。いわゆる器台Ⅵタイプの典型資料である。215も同様の脚部であろう。外面には粗いタタキを顕著に残している器台で，全体として器肉が厚い。212の脚部中位で2.5cmと厚い。

(4)　旧河川状遺構（図版60，第５図，付図２）

Ｈ８・９区，Ｉ８・９区のトレンチ調査で確認されたもので３条ある。ほぼ南北の走る１号，南東から北西に走る２号，方向・川幅等は不明であるが１・２号の間にあり，最も古く広

い河川状遺構である３号の３条であるが，トレンチ調査のためその規模・走行方向等不明の点が多い。

河川状遺構内の土層の堆積状態は，砂層・腐植土層・粘土層の互層でレンズ状に堆積している（付図　）。２号河川状遺構内の土層の堆積は，１・３号に比べ土層も薄く短期間に形成された河川のようである。しかし，３号河川状遺構内の堆積土は厚く，何層もの互層状態を示していて長期間にわたって流路をもっていたことが判る。１号河川状遺構の幅はＨ８—25・Ｈ９—25区で５ｍ，深さ約1.2ｍを測る。２号河川状遺構の幅はＨ９区の北側トレンチ南壁断面でみると4.5ｍ，深さ約2.4ｍのＵ字状をなしている。しかし，北壁側では幅２ｍと狭くなってしまう。また，３号河川状遺構については全掘していないため，その規模は不明であるが，土層のレンズ状の堆積状態から推測すると幅20ｍを越す大きな河川であったようである。出土遺物としては，２号河川状遺構内から検出された弥生時代の太形蛤刃石斧片１個の他は多量の流木・植物種子等で，土器の出土はみられなかった。現在門田遺跡の南側を舌状の台地に沿って小さな河川が流れている。その小河川はH10区あたりで大きく蛇行し，流路を東に変え柏田遺跡の西側を流れている。今回検出された３条の旧河川状遺構は大きく蛇行するH10区の北側のＨ８・９区で検出されたものであり，この小河川がかって北に流れる流路をもっていた可能性が高い。その時期はかならずしも明確ではないが，２号旧河川状遺構から出土した弥生時代の太形蛤刃石斧片や，大溝ＩがＧ９区で大きく屈曲し流路を東に変えていること等を考え合わせると，少なくとも大溝Ｉが活動していた弥生時代の時期に形成された旧河川遺構であった可能性が高いといえよう。（井上）

出土遺物

石　器（第28図240）　玄武岩製の太型蛤刃石斧で，磨製石斧ｇ類に分類される。刃部破片で当類石斧特有のカーブを有す。２号河川状遺構内出土。（木下）

(5)　ドングリ貯蔵穴

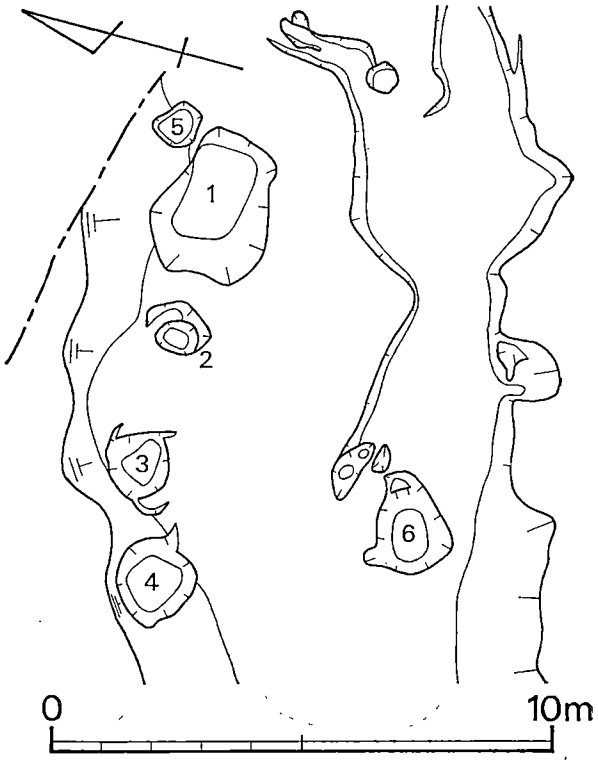
a　A群ドングリ貯蔵穴（第75図）

≪１号竪穴（図版61—１，第76図１）

Ｃ９—７区から検出された竪穴である。上面プランは西側が広い不整長方形をなすが，底面は隅丸長方形を呈し，平坦である。東西2.90ｍ，狭い東側で1.60ｍ，広い西側で2.90ｍ，深さ33cmを測る竪穴である。竪穴底面からは，ドングリ（イチイガシ）の実はもちろんのこと，加工木材・小枝等とともに弥生後期終末の長頸壺・直口壺・高杯・器台等が出土した。また，この上面からは木製竪臼が出土している。

出土遺物

壺形土器（図版74，第77図 1～3） 1・2は広口の直口壺で，球形の胴部に短い直口する口縁部がつく土器である。底部は欠失していて明らかではないが1の胴下半の形状からして丸底をなすものと思われる。調整は235が外面刷毛，内面刷毛のあと下半をナデ調整，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。2は内外とも刷毛調整で口縁部内外はヨコナデ仕上げである。両者とも外面全体に煤の付着が著しい。色調は1が淡褐色，2が淡茶褐色を呈す。口径は1が12.6cm，2が12.2cmを測る。3は口縁部を欠く資料であるが，いわゆる長頸壺と思われる。ソロバン玉状の胴部に立ち気味の口頸部がつくもので，底部は丸底気味の平底である。胴部最大径15.8cmを測る。外面刷毛のあと下半をナデ，内面刷毛のあとナデて仕上げている。底部外面は刷毛調整。色調は淡茶褐色で，胴中位に黒斑を残している。



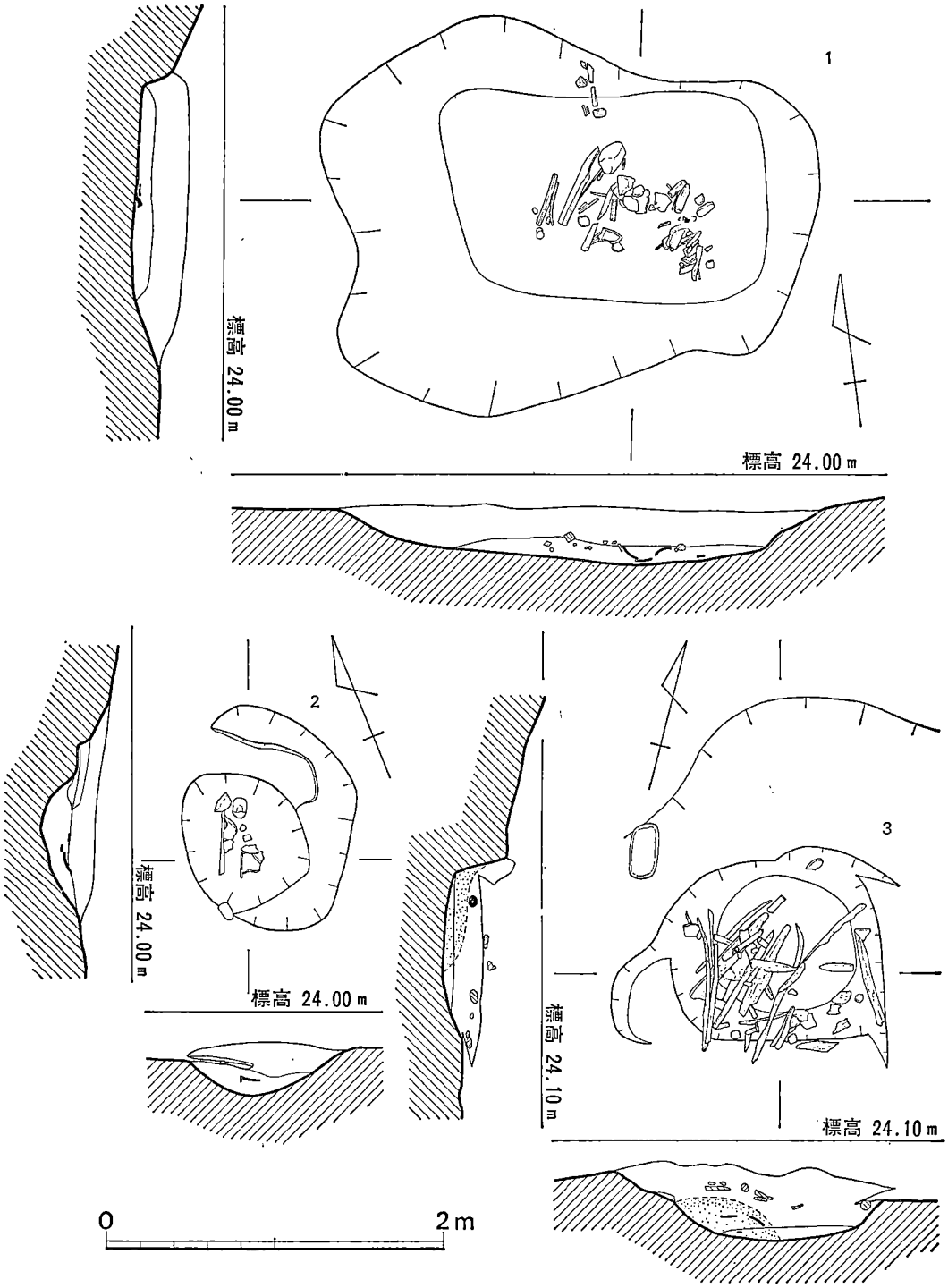
第 75 図　A群ドングリ貯蔵穴遺構配置図（1/150）

高杯形土器（図版74，第77図4） 柱状部が短かく充実で，裾部で大きくラッパ状にひらく脚部の資料である。復原脚部径15.2cmを測る。内外面刷毛，脚部天井ナデて仕上げ，裾部内外はさらにヨコナデしている。色調は淡褐色を呈す。

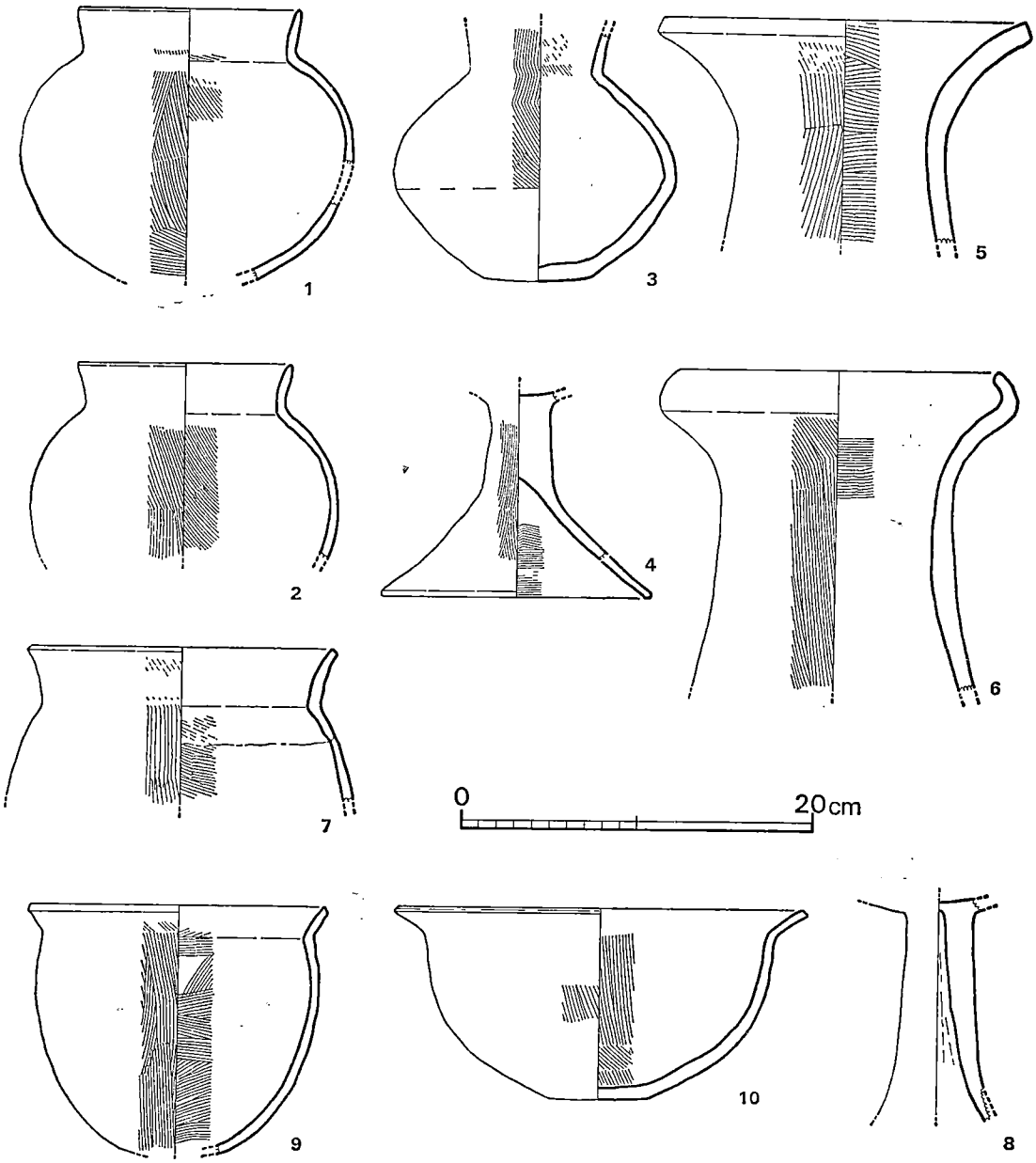
器台形土器（第77図5・6） 脚部を欠く破片資料である。5は器受部のくびれが高く，大きく外反するタイプで，いわゆる器台Ⅲタイプにあたる。内外とも刷毛調整で，口縁部内外はさらにヨコナデで仕上げている。6は器受部口縁が袋状をなすもので，器台Ⅵタイプである。調整は外面刷毛，内面刷毛のあと中央部をヘラ削り，下半はナデ仕上げである。復原口径5が20.3cm，6が18cmを測る。色調は5・6とも茶褐色を呈す。（井上）

石　器（第85図1） 1はほぼ円形で扁平な礫で，全体に磨痕がみられる。径3.9cm，厚さ0.9cm，重さ5.2g。（木下）

木製品（図版75—1，第79図1） 貯蔵穴内から出土した木製品類のうち図示しえた資料は1点のみである。現存する長さ37.3cm，幅5.5cm，厚さ5cmを測る角材で，木取りは割り材に



第 76 図　1～3号ドングリ貯蔵穴実測図（1/40）



第 77 図　ドングリ貯蔵穴出土土器実測図1（1/4）

よる。4面のうち1面に削り調整の痕が残るが，あとの3面はそれほど顕著ではない。また両端部にも顕著な調整の痕はみうけられない。但し図示した右側の面は節のほぼ中央を割った面である。用途については不明である。図示しなかった木材のうち2点の樹種同定を実施している。（小池）

≪**2号竪穴**（図版61—2，第76図2）

1号竪穴の西側から検出された竪穴で，1号に比べ小さい竪穴である。東西1m×南北1.25m，深さ30cmを測り，北側に幅約20cmのテラスをもつ楕円形プランの竪穴である。底面は鍋底状を呈す。竪穴内からは若干浮いた状態で加工木材・後期終末の甕破片・河原石等が出土した。わずかではあるがイチイガシの実が底面付近から検出された。

≪**3号竪穴**（図版62・63—1，第76図3）

2号竪穴の西側に位置する竪穴で，西側に4号竪穴が接している。1・2・4号竪穴と同様，大溝Iの北側縁辺りの緩斜面に形成されているためか，南側の当初の掘り込みは確認できない。しかし，底面のプランが円形をなすことから考え，円形か楕円形を呈した竪穴と思われる。現存する竪穴の規模は，東西1.62m×南北1.15m，深さ40cmを測る。竪穴内には上面に小枝が一見組まれたような状態で置かれ，その下からイチイガシの実が多量に検出された。遺物は後期終末の甕と高杯の脚部のみである。なお，上面から検出された小枝はクスノキ，クリ属，その他不明の広葉樹と同定されている。詳細はⅦ—3を参照されたい。

出土遺物（図版74，第77図7～8）

甕形土器（7）　7は復原口径17.4cmを測る立ち気味の「く」字状口縁をもち，いわゆるIdタイプ甕である。内外とも刷毛調整で，口縁部内外はさらにヨコナデして仕上げている。色調は淡黄褐色を呈し，口縁部付近に煤の付着がみられる。

高杯形土器（8）　柱状部が長くスマートな脚部で，内面ナデ，外面タテヘラ磨きで仕上げた暗茶褐色を呈す土器である。大溝I出土の杯底部の屈折が明瞭で，杯部が大きく外反するタイプの脚部であろう。

≪**4号竪穴**（図版63，第78図4）

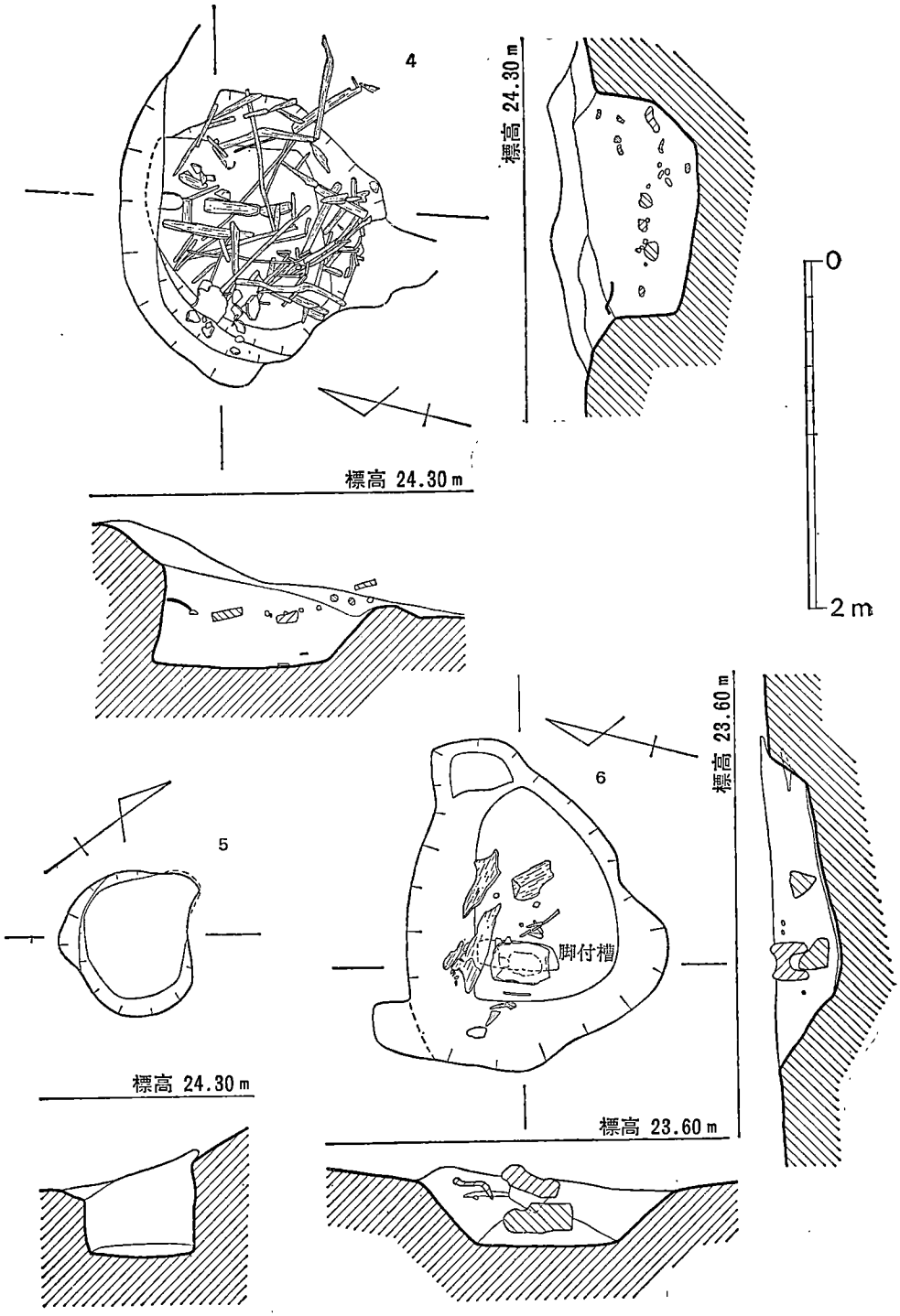
3号竪穴の西側に隣接して検出された竪穴である。3号と同様，溝縁辺りに形成されているためか，南側の上面プランは消失している。しかし，竪穴の平面プランは良好な北側のプランからして楕円形を呈していたものと思われる。現存する竪穴の規模は，東西約1.75m×南北1.55m，深さは，北側で約80cm，南側で約40cmを測る。

竪穴内上層からは雑然とはしているが一見，井桁状に組まれた小枝が陥没したような状態で検出された。また，底面付近からは若干ではあるがイチイガシの実が出土している。遺物は後期終末の甕・鉢破片がある。

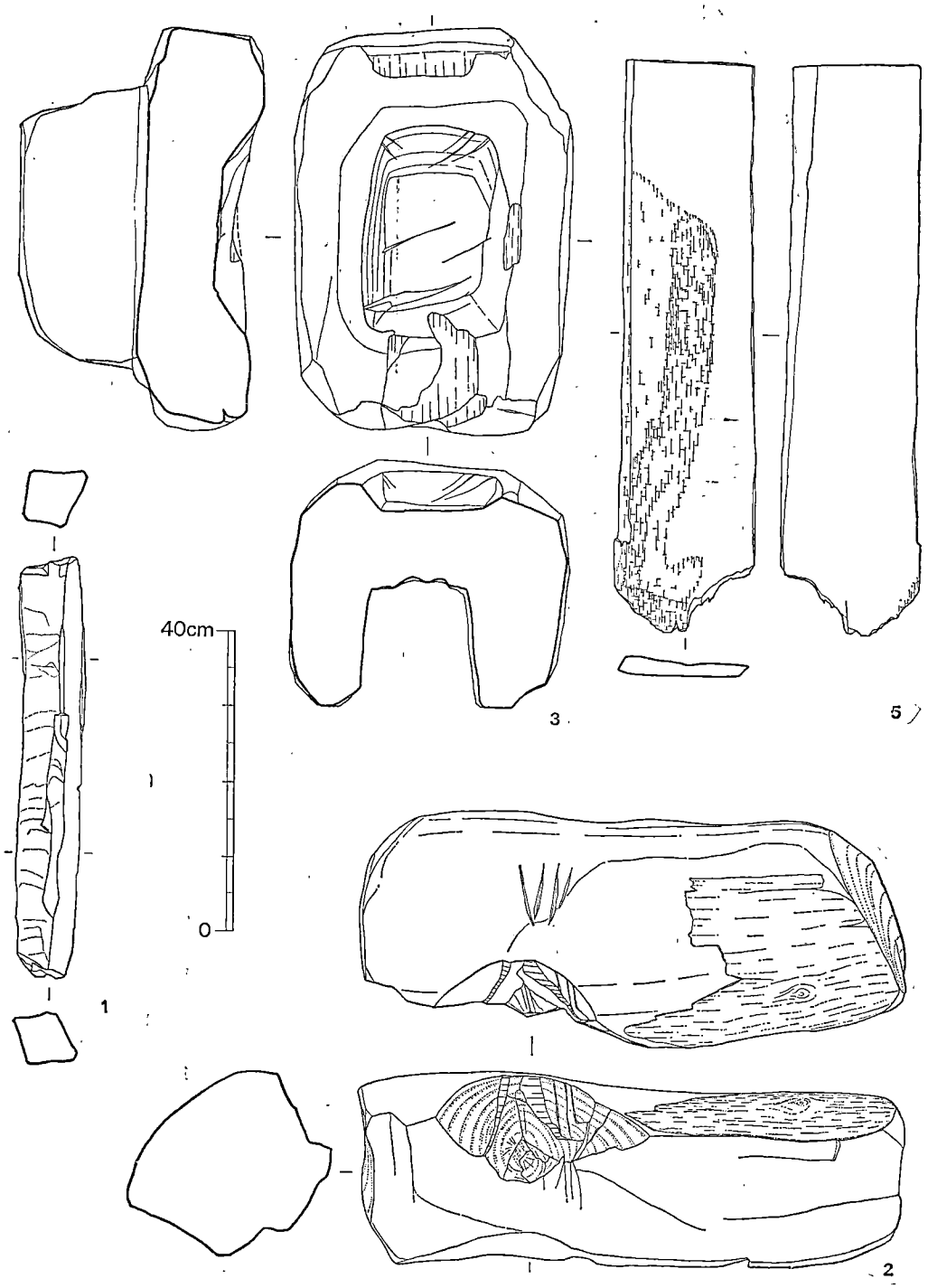
出土遺物（第77図9・10）

甕形土器（9）　球形の胴部に広口の「く」字状口縁がつく復原口径16.9cmを測る小形甕である。内外とも刷毛調整，口縁部内外はさらにヨコナデで仕上げている。色調は黄褐色を呈し，胴上半には大きな黒斑がみられる。

鉢形土器（10）　「く」字状に大きく外反する口縁部をもつ鉢で，底部は丸みをもった平底



第 78 図　4～6号ドングリ貯蔵穴実測図（1/40）



第 79 図　ドングリ貯蔵穴出土木製品実測図（1/6）

である。復原口径23cm，器高10.8cm，底径5.5cmを測る。内外とも刷毛調整で，外面下半はさらにナデて仕上げ，口縁部内外もヨコナデしている。色調は淡黄褐色を呈す。

≪**5号竪穴**（第78図15）

1号竪穴の東側に近接して検出されたもので最も小さい竪穴である。東西85cm×南北65cm，深さ北壁で約50cm，南壁で約30cmを測る不整楕円形を呈す竪穴である。竪穴内からは底付近から木の葉とイチイガシの実が混在して検出されたが，3・4号竪穴にみられるような小枝の集積はみられない。

≪**6号竪穴**（図版64，第78図6）

C 9—13・18区に位置し，大溝Ⅰの底面に掘り込まれた竪穴である。この竪穴は他の全てが大溝Ⅰの北側縁辺りに形成されているのとは明らかに場所を異にしている。東西約1.80m×南北約1.50m，深さは西側で約37cm，東側で約25cmを測る不整楕円形を呈す竪穴である。

竪穴内からは底よりわずかに浮いた状態で木製の脚付槽未製品や加工材・未加工材等が出土した。また，底付近からはイチイガシの実・ツバキの実等数個が検出された。樹種同定の結果，脚付槽はクリ属，未加工材はチシャノキ属という同定を得ている。（井上）

出土遺物

木製品（図版75—2・3，第79図2・3）　加工の痕の明瞭な木製品が2点あり残存状況も良好である。2は丸太材をほぼ1/4に縦割りした材で端部は一気に削り落とされている。また節の部分を取り除くために数次にわたる剝ぎ取り作業を行った痕跡は明瞭に残るが一方で樹皮が被ったまゝであり，加工中途の資料と言えよう。長さ48.3cm，幅20cm，厚さ16cmを測る。材質はチシャノキ属。3は台付の槽で直径30cm程度の丸太材を素材として，芯部を除去することによって断面「コ」字形に造り出した製品である。全体の長さ35.5cm，幅24.5cm，高さ21.5cmを測るが，両脚部は身部に比して短かく，おおむね上部で25cm，下部で20cmの長さと，11cmの高さを測る。外側は削り調整で整形しているが内側は雑であり，天床部に至っては凹凸が激しい。身部は厚さ10cm程度を有すが上面のほぼ中央に上縁19×13cm，下面10×8cm，深さ3cmの不整方形の刳りを施して槽としている。身の外庭部は削り調整で整っているが，内庭部は刳り込みの痕が顕著に残っており，やや雑な造りである。材質はクリ属で，クリの耐久性を活用し，芯を刳り取ることによる脚の造形，運搬に適した身部の張り出しを設ける等の技術の伺える資料と云える。（小池）

b　B群ドングリ貯蔵穴（第80図）

≪**7号竪穴**（図版65～67・68—1，第81図）

E 9—19・24区にわたって検出された平面楕円形を呈す竪穴で，大溝Ⅰの北側肩部に位置する。竪穴の規模は東西1.80m×南北1.40m，深さ約1.55cmを測り，底面径は東西約85.5cm×南

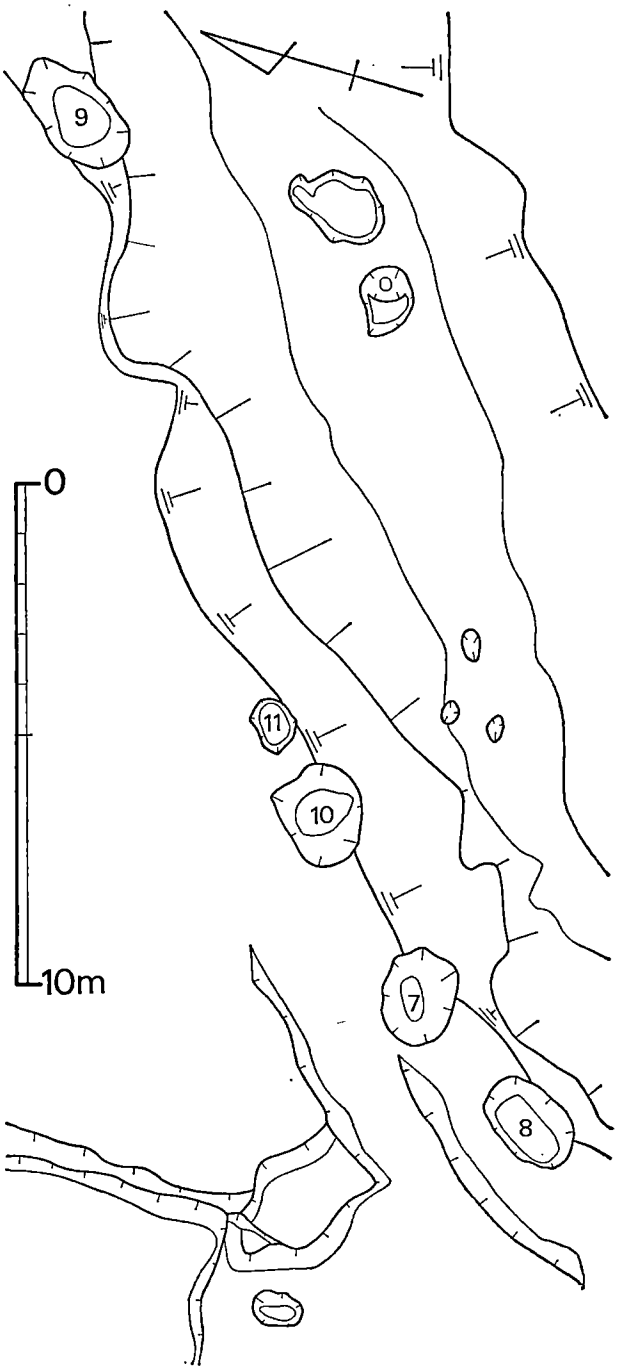
北約40cmと狭くなる。

竪穴内の土層の堆積状態は，下半か水平堆積であるのに対し，上半はレンズ状に堆積している。最上層には，黒色粘質土層が堆積し，竪穴は埋没している。この黒色粘質土層は大溝Ⅰの最上層に堆積する第5層下部と同一の土層で，大溝Ⅰの埋没時期と一致している。竪穴内最下層には灰褐色砂層があり，その上層にはイチイガシの実を多量に含む暗灰色粘質砂層が堆積している。その上層には木葉を多く含む暗灰茶褐色の腐植土が5～8cmの厚さで水平に堆積している。

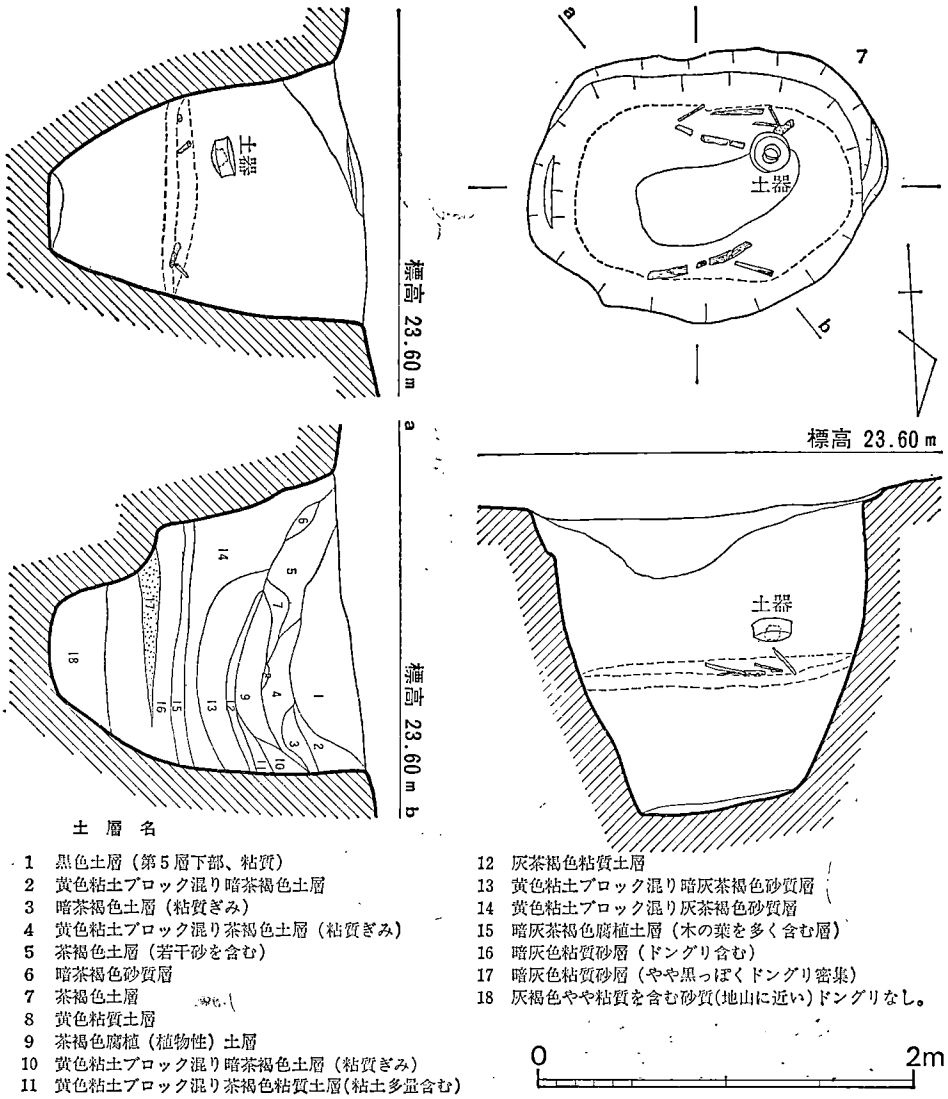
さらにその上からは小枝数本と後期終末の高杯の杯部に完形の小形壺が入れ子になった状態で出土した。また，底面付近の壁面には藁か草を思わせるものを敷いたらしく，全面に付着して検出された。なお，出土したイチイガシの実は，水洗撰別の結果，6升4合あった。また，小枝の樹種はシイノキ属と同定されている。

出土遺物（図版74，第83図11～13）

壺形土器（11）　口径8.8cm，器高8cmを測る小形壺である。扁球形の胴部に立ち気味に外反する長目の口縁部がつく壺で，底部は尖り気味の丸底である。内外ともナ



第 80 図　B群ドングリ貯蔵穴遺構配置図（1/150）



第 81 図　7号ドングリ貯蔵穴実測図（1/40）

デ，口縁部内外はヨコナデし，口縁端部を肥厚気味に丸く仕上げている。色調は淡茶褐色を呈す焼成良好な土器である。

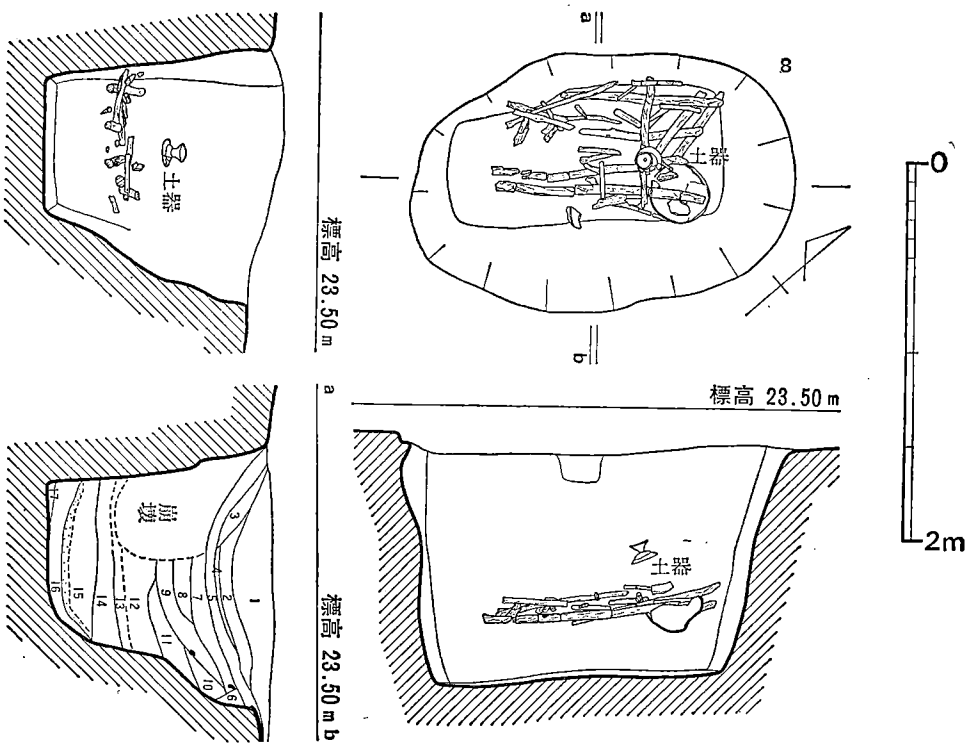
高杯形土器（12）　杯底部の屈折が明瞭で，杯部の立ち上がりが垂直気味の鉢形をなす杯部である。口縁端部はヨコナデによりつまみ出し気味に仕上げている。口径21.8*cm*，杯部器高10.7*cm*を測る。外面刷毛のあと杯底部はさらにナデ，内面刷毛のあとナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は外面淡黄褐色，内面茶褐色を呈し，杯部には煤の付着がみられる。胎土・焼成とも良好。

≪**8号竪穴**（図版68—2・69，第82図）

7号竪穴の西南に位置する。東西1.35m×南北2.50m，深さ1.20mを測る平面楕円形を呈す竪穴である。

竪穴内からは，底面より約30cm浮いて貯蔵穴の上部を覆っていたと思われる枝を井桁状に組んだ遺構が検出された。その下には木の葉を多く含む腐植土が約5cmの厚さで水平に堆積し検出された。貯蔵されたカシの実は総量4升8合である。

出土遺物（図版74，第83図13・14）



土 層 名

1 黒色土層（第5層下部・粘質）
2 暗灰褐色粘質土層
3 黄色・緑色粘土粒を含む暗灰褐色粘質土層
4 暗灰色粘質土層
5 腐植物を含む茶灰（暗）色粘質土層
6 灰色砂質土層
7 炭化物を含む灰茶褐色粘質土層
8 腐植物を含む茶色粘質土層
9 淡灰茶褐色粘質土層
10 淡青灰色砂層
11 黄色粘土粒を若干含む灰茶褐色粘質土層
12 黄色・緑色粘土ブロック混暗灰色砂質土層
13 木の葉を含む腐植土層
14 灰褐色微砂粒子（茶褐色若干）
15 灰褐色砂質土（ドングリを含む）
16 灰褐色砂質土（ドングリを含まない）
17 灰褐色砂質土（黄色若干）

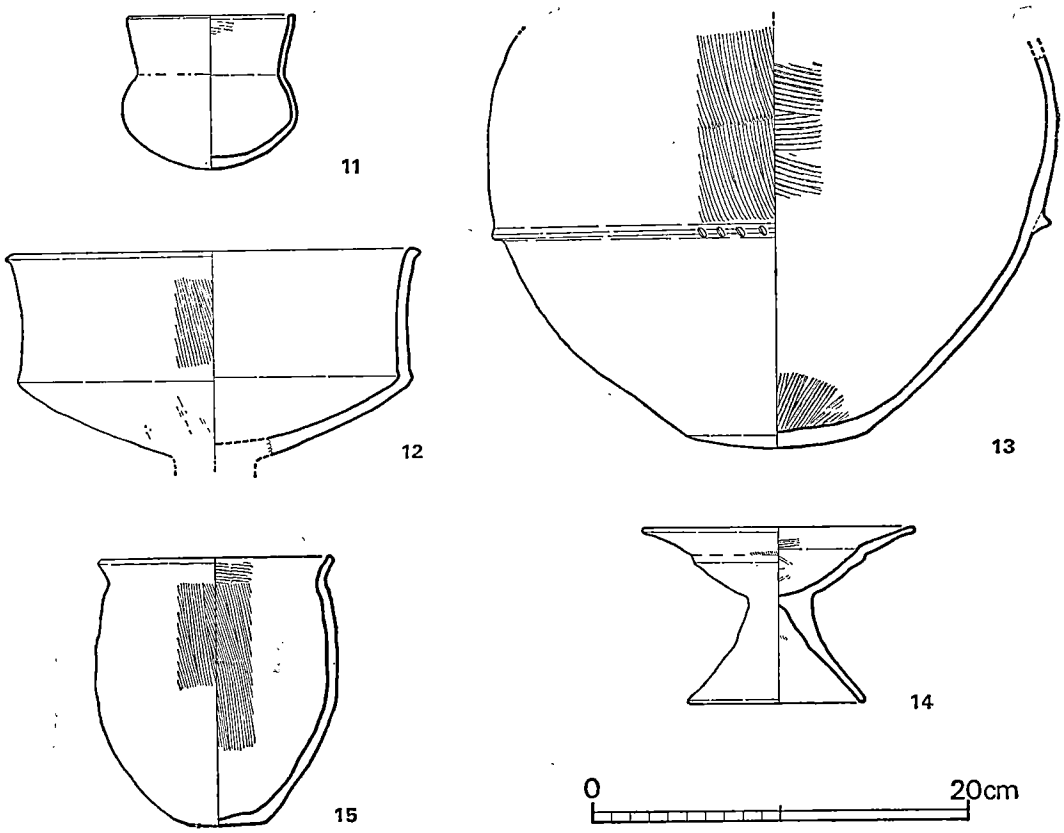
第 82 図　8号ドングリ貯蔵穴実測図（1/40）

壺形土器（13）　口頸部を欠く胴部資料である。いわゆる「レンズ」状をなす丸底気味の平底の底部に球形の胴部がつくもので，胴下半には1条の三角凸帯が付され，端部に刻目が施されている。外面刷毛調整，下半はさらにナデ，外底部は刷毛調整，内面刷毛のあとさらに内底部を除く下半付近をナデて仕上げている。色調は淡黄褐色を呈し，外面下半に黒斑を残している。

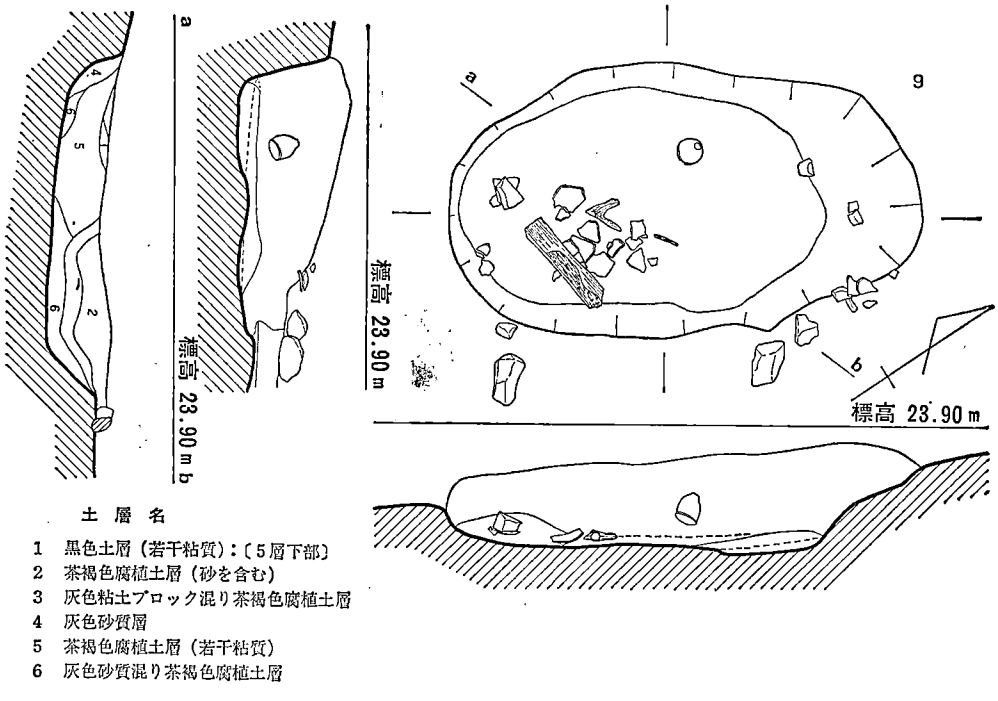
高杯形土器（14）　口径14.3cm，器高9.2cm，脚部径9.4cmを測る小形の高杯である。杯底部の屈折は明瞭で，杯部の外反が大きい浅鉢形をなす杯部に，柱状部がほとんどないラッパ状の脚部がつく高杯である。杯部内外は刷毛のあとナデ，口縁部内外はヨコナデ，脚部内面刷毛のあとナデ，外面上半ナデ，下半はヘラ削り，裾部内外はヨコナデで仕上げている。色調は淡黄褐色を呈す。

≪9号竪穴（図版70，第84図）

この竪穴はD9—22・23区から検出されたものでB群のうち最も東端に位置する竪穴である。この竪穴も他と同様に溝辺りに形成されたものである。竪穴の規模は，東西1.45m×南北

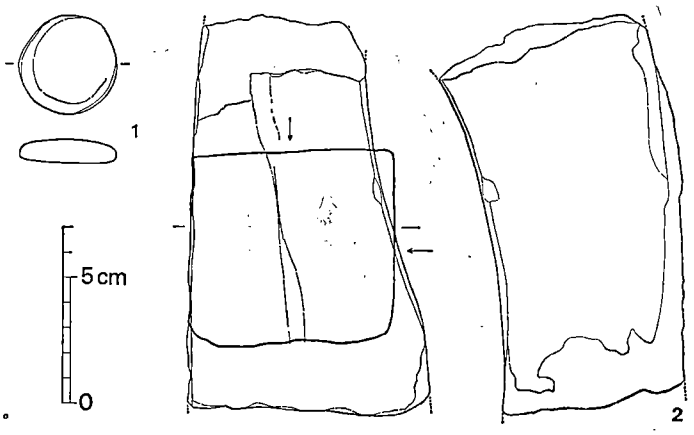


第 83 図　ドングリ貯蔵穴出土土器実測図2（1/4）



第 84 図　9号ドングリ貯蔵穴実測図（1/40）

2.55m，深さ西側で約50cmを測り，平面長楕円形を呈す竪穴である。竪穴内からはほぼ底面に接して大形甕形土器片（「く」字状口縁で，頸部に刻目を施した「コ」字状の凹帯が付されている甕），火を受けた加工板材，砥石1個，イチイガシの実少量が検出された。また，底面より約12cm浮いた状態で，完形小形甕が出土した。



第 85 図　ドングリ貯蔵穴出土石器実測図（1/3）

出土遺物（図版74・75，第83図15，第85図２）

甕形土器（第83図15）　口径12.4cm，器高14cmを測る「く」字状口縁の小形甕で，底部は丸底気味の平底をなす。内外とも刷毛調整，胴下半内外はさらにナデて，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は淡茶褐色を呈し，胴上半には著しい煤の付着がみられる。　（井上）

石　器（第85図２）　大型の砥石で欠損品。残存長15.6cm，厚さ7.6cmを測り，２面の研砥面を有す。砂岩製で面は緻密。砥石のａ類に分類される。　（木下）

木製品（図版75―４，第79図５）　出土した木材のうち加工された資料として板材１点が含まれる。長さ50.3cm，幅12cm，厚さ1.7cmを測るが，片面の半分から端部に及ぶ焼け焦げがあり，本来の全長はこの数値を上まるであろう。材質はスギ。　（小池）

≪10号竪穴（図版71・72，第86図10）

７号竪穴の北側から検出された不整円形の竪穴である。竪穴の規模は東西1.88m×南北1.70m，深さ北側で95cm，南側で75cmを測る。

竪穴内からは竪穴上面を覆っていたと思われる井桁状に組んだ木組が陥没した状態で検出された。この木組も８号竪穴例にみられるほど整然と井桁状に組まれたものでなく雑然と組まれたものである。この竪穴では，８号例にみるような木組の下の木の葉等の腐植土層はみられず，ドングリを全く含まない青灰色粘質土層（厚さ８cm）が水平に堆積していた。その下からは多量のカシの実がつまった状態で検出された。総量５斗１升１合で，最も多量に検出された竪穴である。土器・石器等の遺物は何等出土しなかった。このカシの実は全てイチイガシと同定された。また，木組の枝はスダジイと鑑定されている。詳細はⅧ―２・３を参照されたい。

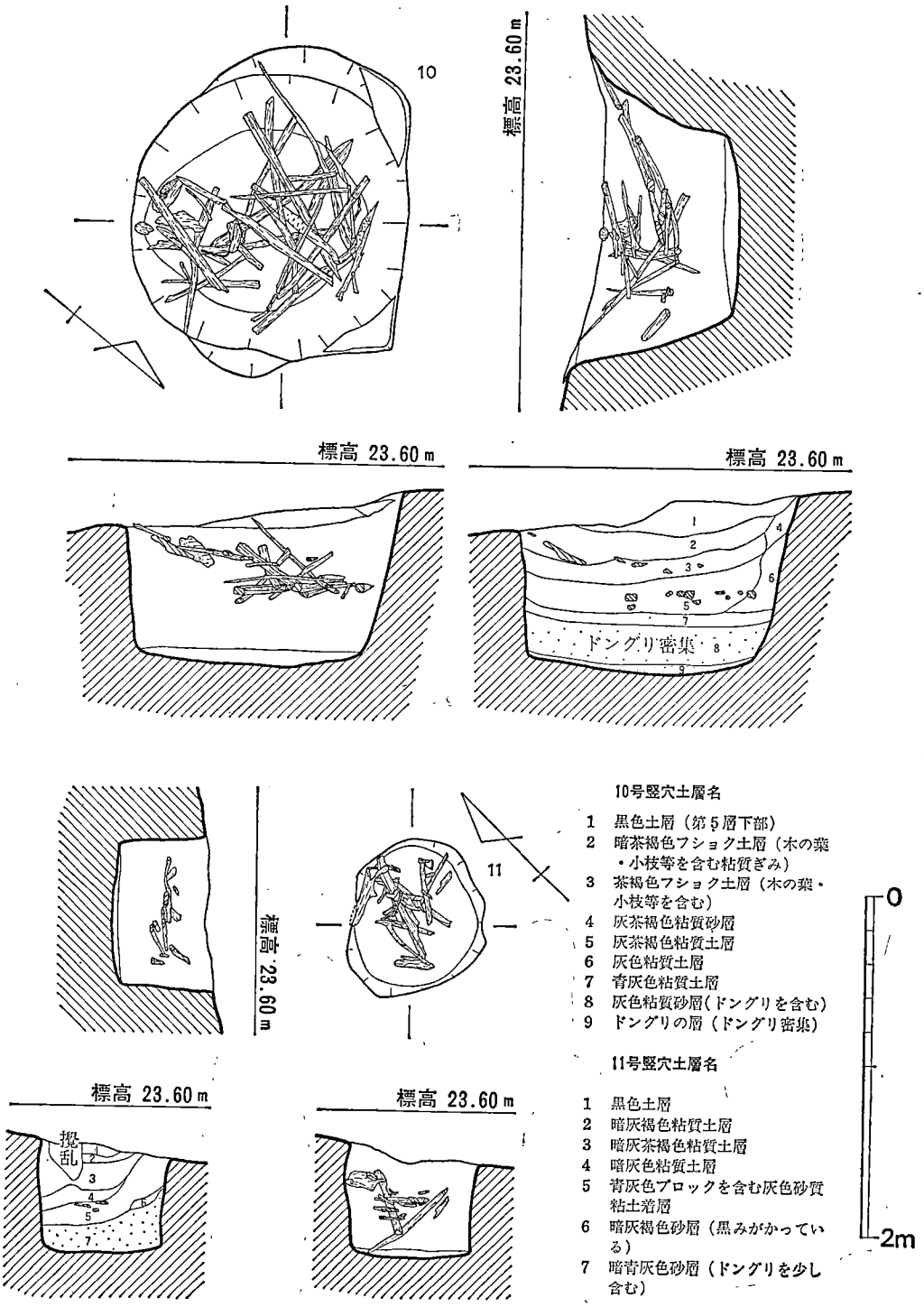
≪11号竪穴（図版73，第86図11）

10号竪穴の北側に近接して検出された小形の不整楕円形を呈す竪穴である。竪穴の規模は東西92cm×南北85cm，深さ北側で65cm，南側で55cmを測る。

竪穴内からは10号竪穴と同様，上部を覆っていたと思われる木組が陥没したような状態で検出された。イチイガシの実は底面付近から少量出土したのみである。遺物としては後期の土器破片数点が出土した。　（井上）

木製品　加工の痕のある木材は含まれておらず，枝等で占められる。

ドングリ貯蔵穴内で，１・６・９号に加工された材及び製品が含まれていたが，10・11号に代表される如く，イチイガシの実が多量につまった状況の貯蔵穴は，種子の貯蔵を目的とした構築物が，活用された状態のまま（廃棄されずに）遺されていたことを示し，木製品の含まれる可能性は少ないと云えよう。一方，木材を加工する工程において，生木をそのまゝ利用すると乾燥と共に変形し，急激な乾燥をしてもうまくゆかないため，徐々に湿気を除くことが多い。６号出土の製作中途資料が，このような目的をもって含まれていたと考えることもできるが，余りにも水分の多い貯蔵穴での存在はこの観点をもっても納得のいかないものである。（小池）



第 86 図　10・11号ドングリ貯蔵穴実測図（1/40）

(6) 包含層出土の石器

≪尖頭状石器（第22図５）

先端部・基部を欠損する資料でｂ２類である。大溝Ⅰ出土の４に比べて，細かな調整が施されている。安山岩製。

≪石　鏃（第23図13・34・36・46・77，第24図82・123・160）

ａ類（13）　横長に近い剝片を用いたもので打面は先端部近くに持つ。安山岩製。

ｂ１類（34・36・46）　５点出土し，34は三縁が内弯する特長を有し薄手で安山岩製。完形品で全長3.2㎝，基部幅2.3㎝，厚さ３㎜，重さ1.6㌘を測る。36は整美で全長３㎝，幅1.35㎝，厚さ３㎜を測る。チャート製。46は安山岩製で正三角形に近い。

ｂ２類（77）　３点出土した。77は表裏とも磨いた半磨製石鏃で，片脚が短かい。黒曜石製。

ｂ３類（82）　先端部を欠損するが，全体に薄手に仕上げられている。安山岩製で他に２点出土した。

ｂ４類・ｂ５類　図示しなかったが，１点のみ出土した。

ｂ９類（160）　石英製の石鏃で，先端部及び片溝を欠脚する。

≪石　匙（第　図163）

ａ類で安山岩製や横型石匙の完成品。1.3㎝と部厚な横長剝片を素材とする。7.6㎝と大きめな半月形を呈する外弯刃に比して，幅9.5㎜と非常に小さなつまみを有す。弥生時代前期頃であろうか。Ｇ10区４層出土で，重さ29.8㌘を測る。

≪削　器（第25図169，第26図186・189）

ａ類（169）　169は角礫の表皮近くの剝片を素材とし，裏面からの調整を施し，直線刃とする。

ｃ類（186・189）　186は部厚な縦長剝片の一辺に若干加工を施している。189は不定形な剝片を一部に刃部を形成する。両者とも黒曜石製で186は先土器時代の可能性がある。

≪掻　器（第26図210）

径1.5㎝前後と小型でほぼ円形を呈す。すづまりの剝片で打痕が残る。その末端部に直角に近い刃部を形成する。サム・スクレイパーで黒曜石製。大溝Ⅱ出土の209に類似する。

≪磨製石斧（第27～30図222～244・246・247・252・260）

ｃ２類（222）　頭部と刃部の一部を欠損する。泥岩に近い頁岩製。

ｅ類（260）　蛇紋岩製の扁平な乳房状石斧の刃部破片。

ｆ２類（247・252）　247は刃部のカーブが強い蛤刃石斧で，蛇紋岩製。252の刃部は鈍い。

ｇ類（233・244・246）　233は頭部破片で火を受けた痕跡がある。244・246とも刃部近くの

破片で，いずれも玄武岩製。

≪石庖丁（第31図272・277・288）

b類（272・277）　272は背縁が弧状を呈すもいで，紐孔は中央やや上部にある。全体のプロポーションはc類に近い様だが，紐孔の位置が低く，時期的に古くなりそうだ。輝緑凝灰岩製。277は背縁と刃部の接点が尖るもので，紐孔は硬い工具を使用している。孔間に失敗した穿孔痕がのこる。頁岩製。

d類（288）　工程2の資料である。硬砂岩製。

≪石　錐（第32図297）

1点のみで，寸づまりの剝片の末端部に加工を施したものでb類である。

≪磨　石（第33図308）

b類に分類される。約1/3を欠損するもので，体部の研磨はあまり顕著でない。敲石としても使用されている。花崗岩製。他に小破片が1点出土している。

≪敲　石（第33図313）

a 2類で，一端に敲打痕がある。

≪凹　石（第33図317）

比較的部厚い長円形の両面に凹みがある。長径10.2cm，短径6.1cm，厚さは凹部で4.5cm，重さ318gを測り，砂岩製。

≪砥　石（第34・35図321・327・337・342・344）

a類（321）　部厚な砥石片で，1面のみ研砥面が残る。

b類（327）　非常に良く使用された中砥で断面はU字状を呈す。赤味を帯びた砂岩を使用。

d類（337）　板状の砥石で，大溝Ⅰ出土の336に類似する。

e類（342）　唯一の有孔砥石で，C9－2区4層出土。孔径0.8cmで，かなり使用減りしており，手持ち用砥石として有効性が高かったのであろう。凝灰質の石材を用いる。

f類（344）　有溝砥石の小破片である。花崗質砂岩製。

≪石　錘（第36図347）

磨製石斧の胴部破片を再利用したもので，長軸方向の両端を打ち欠いた礫石錘である。重さ71gを測る。

≪土製円盤（第38図392）

c類に属す。径約3.1cm，厚さ1.4cm，重さ14.4g。

≪石製円盤（第38図398）

ほぼ円形に整形されたもので，径4.7cm，厚さ0.7cmを測る。

≪その他の石器（第39図402・409，第40図410）

402は粘板岩製で，断面が三角形を呈す。右辺は斜方向からの削りが顕著。409は小型で

平な円礫で，投弾ないし，磨石としての使用が考えられる。他に同種のものが1点出土している。410は3.9cm前後の方錐体を呈す破片で砂岩製，残存状態からして，上・右は旧状の大きさであろう。中央上部寄りに半月状（欠損の為）の凹みがあり，両端の長さ2.35cm。深さ8mm。この凹みの上・左面幅8～9mmの面を有す。また，この面と凹みのみが暗灰色を呈し，他の部分（上・左側面）と異なり，熱変化を受けた事を物語っている。従って，石材，形状・熱変化から「鋳型」である可能性が強い。（木下）

註1　福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集板付遺跡の分類を参考にした。

2　山陽新幹線博多車輛基地の付帯施設の一つとして，県道付替予定地を昭和53年1月から5月に調査。小池史哲「辻田遺跡の発掘調査」ふるさとの自然と歴史86。1978。

なお辻田遺跡の報告は『山陽新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告』第12集に所収する。

3　註2に同じ

Ⅵ　古墳時代の遺構と遺物

(1)　溝状遺構（図版76—上，付図2）

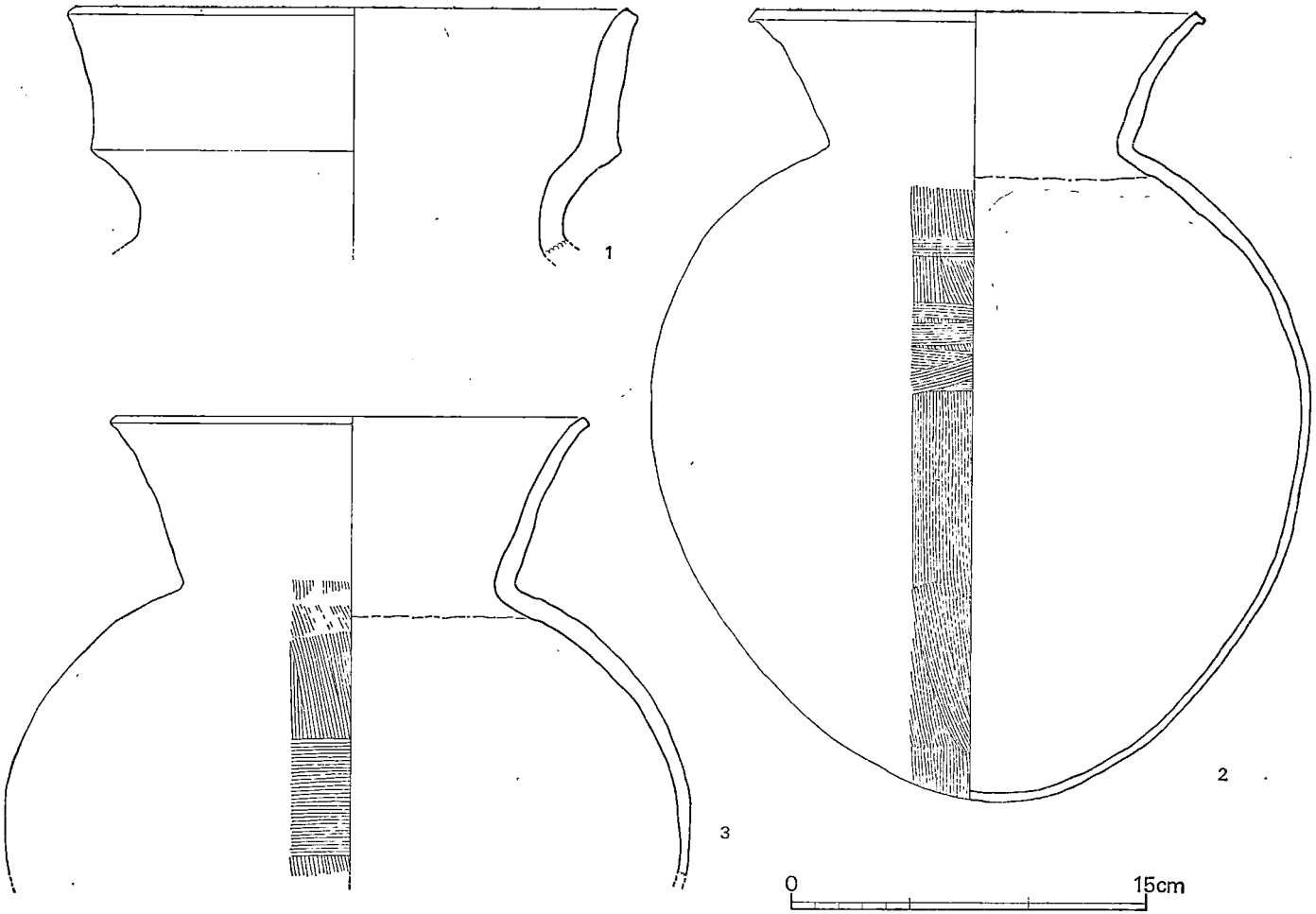
G10—10・15，G11—6・11区にわたって検出された溝で，G11—10区で一段落ち大溝Ⅰに注いでいる。上面が削平されているためか，23cmと浅く断面低平な「U」字状をなす。底面のレベルはG11—11区で標高22.68m，G10—10区で22.56mと大溝Ⅰに向ってわずかに傾斜している。底面溝内の堆積土は暗灰色土であり，いわゆる5層上部層に対応する。このことは大溝Ⅰが少なからず古墳時代前期まで流路としての機能をもっていたことを示すものであろう。

溝内からは古墳時代前期の高杯片数点が出土したのみである。

(2)　包含層出土の遺物

≪土師器（図版77・78・97—1，第87～90図）

壺形土器（1～3）　1はいわゆる二重口縁の壺の口頸部資料である。口縁部の屈折は明瞭で，立ち上りは垂直で端部付近でわずかに外反する口縁部である。頸部は立ち気味に外傾する短い頸部である。内外ともヨコナデで仕上げた淡黄褐色を呈す土器で，口径24を測る。2・3は倒卵形の胴部に緩やかに外反する長目の口頸部がつく「単口縁」の丸底の壺である。



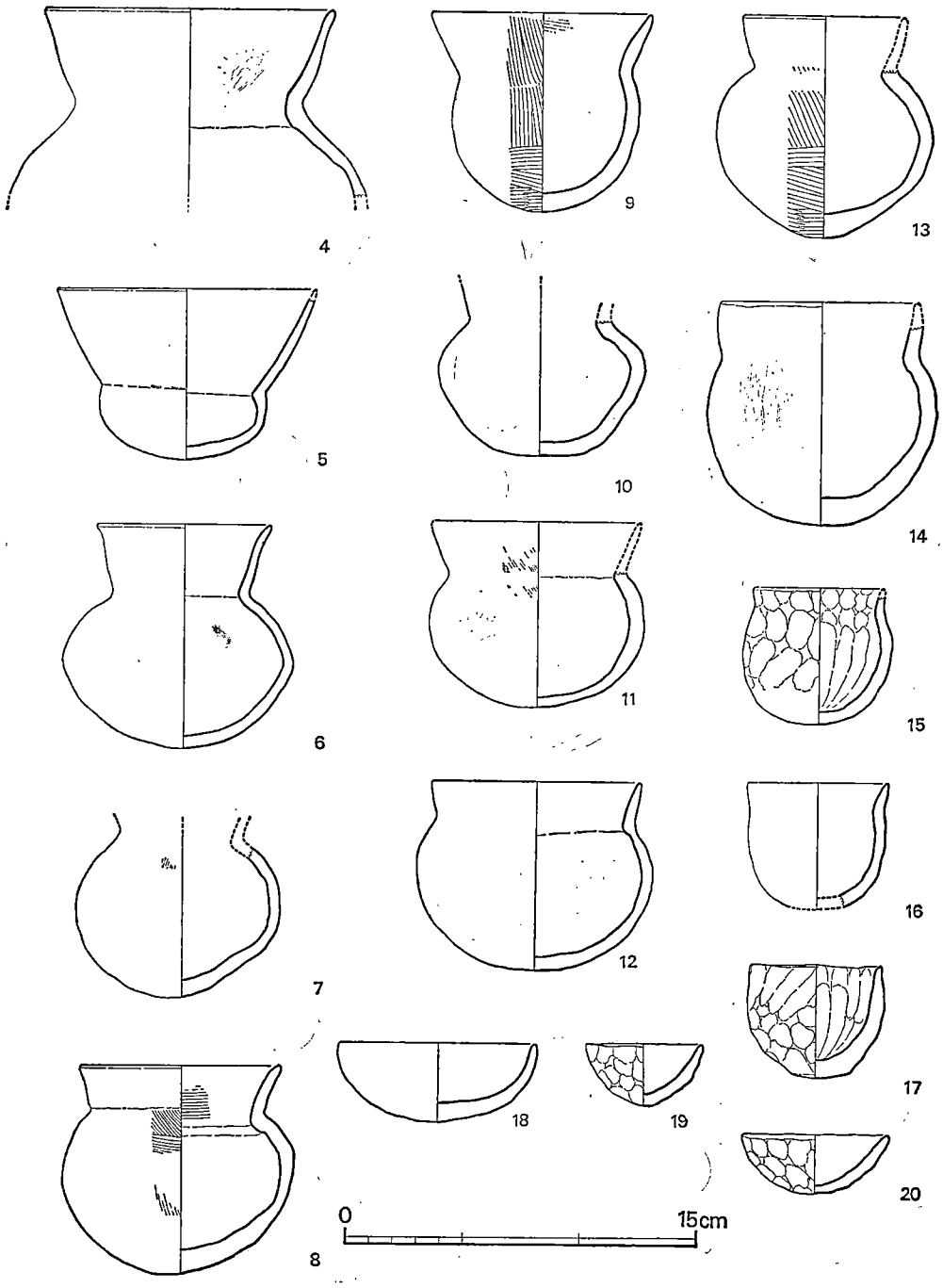
第 87 図　土師器実測図1（1/3）

2は口径19cm，器高33.3cmを測るほゞ完形の資料で，胴部外面は縦位→横位→縦位の刷毛を使い、内面は頸部よりやや下位の所からヘラ削りし器壁を薄く仕上げている。口頸部内外はヨコナデで仕上げ，口縁端部を外方につまみ出している。色調は淡黄白色を呈し，胎土・焼成とも良好・堅緻な土器である。胴部外面に煤の付着がみられる。3は復原口径20cmを測る胴上半の破片資料である。調整は2と同じであるが，口縁端部のつまみ出しはない。また2と比べ，全体に器肉の厚い土器である。色調は外面淡黄白色，内面淡灰色を呈す。胎土・焼成とも良好・堅緻。

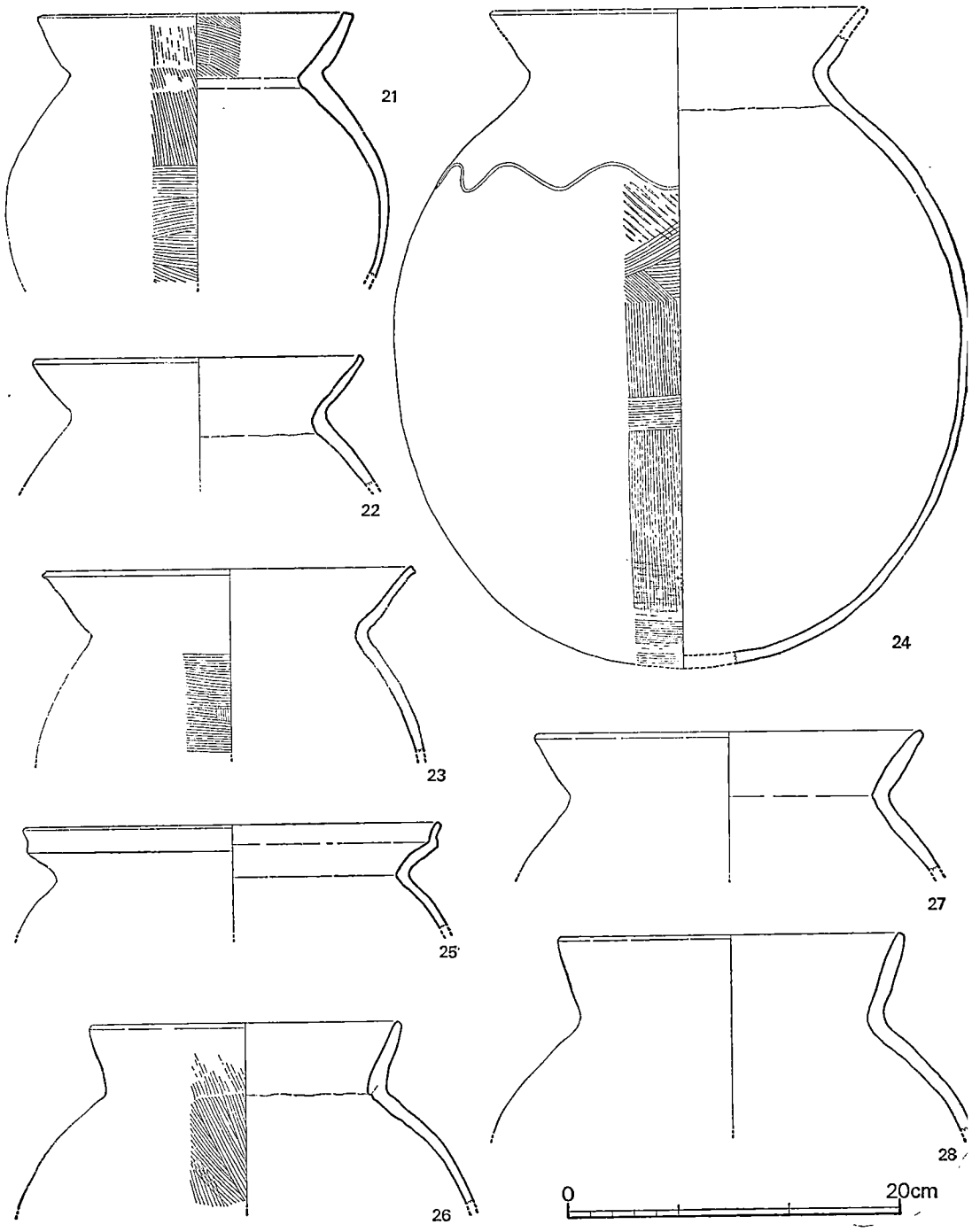
小型壺形土器（4～14）　4は胴上半の破片資料で，肩の張った胴部に内湾気味に外傾し，端部付近でわずかに外反する小型壺である。胴部内面ヘラ削り，外面ナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は淡黄褐色を呈す。復原口径12.2cmを測る。5は一般に坩と呼ばれる小型丸底の壺で，口径に比べ胴部の小さいタイプである。扁球形の胴部に内湾気味に大きく外反する口縁部がつく土器で，口径10.9cm，器高7.1cm，胴部最大径7cmを測る。外面細かい刷毛調整のあと，口縁～胴上半を丁寧にヨコヘラ磨きし，胴下半はヘラ削りのままである。胴部内面はナデ，口縁部内面はヨコナデ仕上げの作りの良い土器である。色調は淡黄褐色を呈す。6・7は扁球形の胴部に長目の外反する口縁部がつく小型丸底壺である。調整は6が胴部外面上半ナデ，下半ヘラ削りのあとナデ，胴部内面ナデ上げ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。7は胴部外面上半刷毛のあとナデ，下半はヘラ削りのままで，胴部内面はナデ上げ仕上げである。色調は6・7とも淡茶褐色を呈す。6は口径7.3cm，器高9.4cmを測る。8～12は球形の胴部に緩やかに外反する短い口縁部がつくタイプである。調整には外面刷毛仕上げのもの（9）の他は全て刷毛のあとナデて仕上げている。しかし，10のように下半をヘラ削りしているものもある。胴部内面は10がヘラ削りの他は全てナデ上げ仕上げで，口縁部内外は刷毛のあとヨコナデしている。13・14は球形の胴部に内湾気味に立つ口縁部がつく小型丸底の壺である。調整は13が胴部外面刷毛，内面ナデ上げ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。14は胴部外面上半ナデ，下半ヘラ削り，内面ナデ上げ，口縁部内外はヨコナデ仕上げである。色調は13が淡黄白色，14が淡茶灰色を呈す。

手捏土器（15～20）　15～17は椀形を呈すもので，18～20は杯形を呈す手捏土器である。内外に顕著な指頭圧痕を残すもの（15・17），外面に残し，さらにナデて平滑にしているもの（19・20），内外ともさらにナデて平滑に仕上げているもの（16・18）がある。色調は15・17が淡黄褐色，16・18が淡黄白色，19・20が淡茶褐色を呈す。

甕形土器（21～28）　24を除き全て胴部上半の破片資料である。甕には内湾気味に外反する口縁部をもつもの（21），内湾気味に外反する口縁部の端部をつまみ上げ気味に仕上げたもの（22），内湾気味に外反し，端部付近でさらに緩やかに外反する口縁部をもつもの（23），いわゆる二重口縁のもの（25），立ち気味に直線的に外反し，端部を丸くおさめているもの（26～



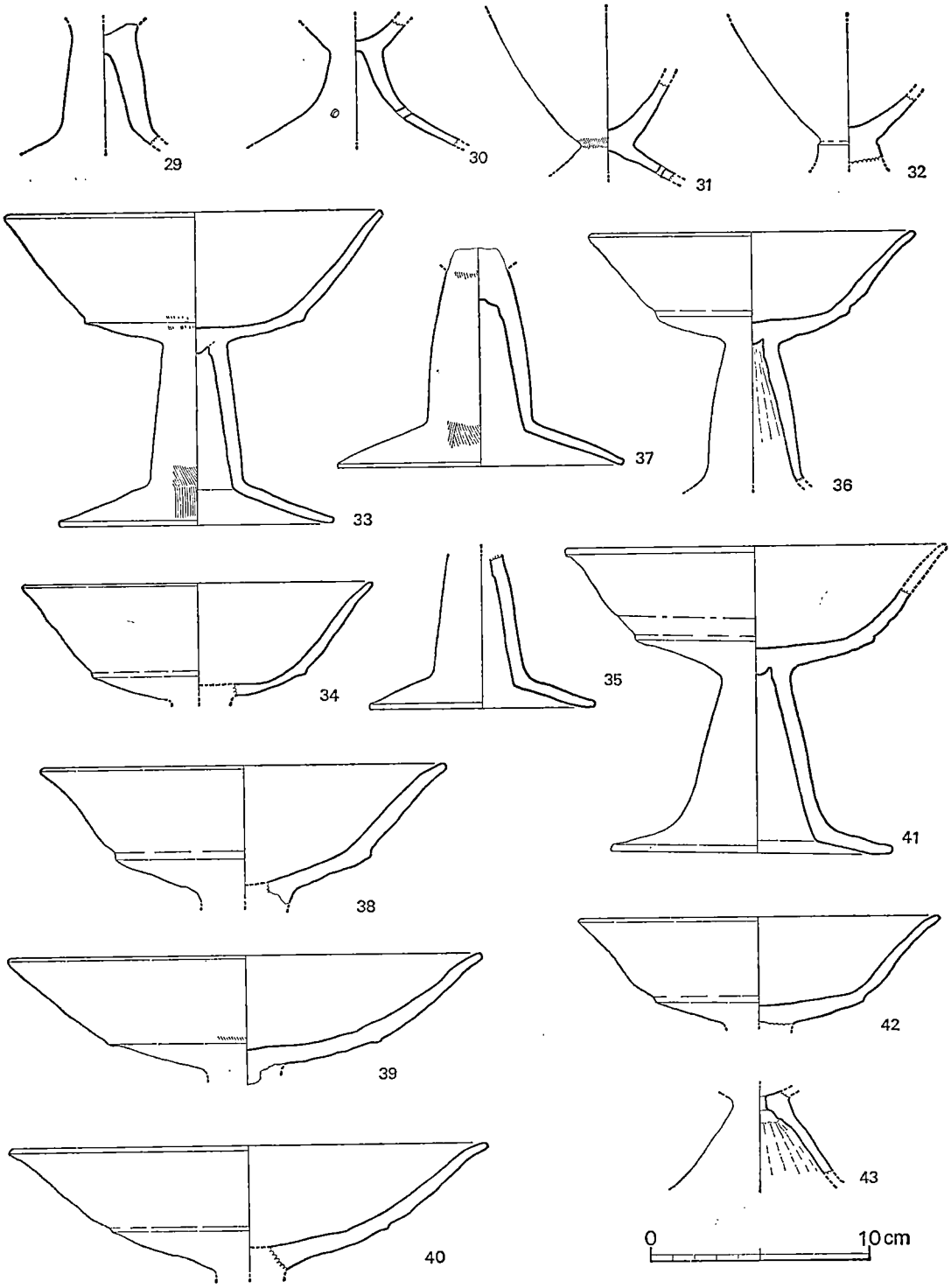
第 88 図　土師器実測図2（1/3）



第 89 図　土師器実測図3（1/3）

28）がある。調整は21が胴部外面縦位→横位の刷毛，内面ヘラ削り，口縁部内外刷毛のあとヨコナデで仕上げている。23は胴部外面横位の刷毛調整，内面ヘラ削り，口縁部内外はヨコナデ仕上げである。26は胴部外面縦位の刷毛調整，内面ヘラ削り，口縁部内外はヨコナデ仕上げ。22・25・27・28は胴部外面ナデ，内面ヘラ削り，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は21・22・25・26が淡黄白色，23・27・28が淡茶褐色を呈す。口径は21が14.1cm，22が14.8cm，23が16.7cm，25が18.8cm，26が14cm，27が17.5cm，28が15.6cmを測る。24は胴部の資料で，底部の一部と口縁部を欠いている。胴部最大径をほぼ中位にもつ球形を呈する胴部で，肩部に1条のヘラ描き波状文を巡らしている。胴部外面は凹面の幅約2mmのタタキのあと，細かい斜位—縦位—横位—縦位の刷毛調整で仕上げている。内面は頸部よりやゝ下位の所からヘラ削りし，器壁を薄くし口縁部内外と肩部にかけてヨコナデで仕上げている。胎土・焼成とも良好・堅緻な土器である。

高杯形土器（29～42）　杯部・脚部の形状から6分類できる。柱状部が短かく脚部がラッパ状に大きく開くもの（29・30），柱状部といえるものが殆んどなくラッパ状に大きく開くもの（31・32），杯底部の屈折が明瞭で，口縁部が外上方に大きく外反する杯部に，スマートな柱状部から裾部でラッパ状に開く脚部がつくもの（33・35），柱状部がエンタシス状を呈すもの（36・37），柱状部がわずかにエンタシス気味ではあるがよりスマートな形状を呈すもの（41），杯底部の屈折があまり明瞭ではなく杯部が口径に比べ浅いもの（39・40）がある。29・30とも脚台部の資料である。29は内外ナデ仕上げ，30は脚部内面ナデ，外面細かい刷毛のあと丁寧なヘラ磨きで仕上げている。30の脚部に3つの円孔がある。色調は両者とも淡黄白色を呈す。31・32は口縁部と裾部の大半を欠失する資料である。31は外面細かい刷毛のあとヘラ磨き，杯部内面ヘラ磨き，脚部内面ヘラ削りで仕上げている。32は外面刷毛のあとヘラ磨き，杯部内面ヘラ磨きで仕上げている。31・32とも胎土・焼成とも良好・堅緻な作りの良い土器である。色調は31が淡黄褐色，32が暗茶褐色を呈す。33は口径17.2cm，器高14.1cm，脚部径12.5cmを測る完形資料である。杯底部内外ナデ，杯部内外ヨコナデ，脚部内面ヨコヘラ削り，裾部内面ヨコナデ，外面刷毛のあと柱状部をナデて仕上げている。色調は淡黄白色を呈す。34は復原口径16cmを測る杯部の資料である。杯底部の屈折明瞭で，口縁部が外上方に大きく外反する杯部の特色からおそらく，33のような脚部がつくものと思われる。35はスマートな柱状部をもつ脚部の資料で，脚部径13.3cmを測る。柱状部内面ヨコヘラ削り，外面ナデ，裾部内外はヨコナデ仕上げである。色調は黄褐色を呈す。36は裾部を欠く資料で，杯底部の屈折が明瞭な杯部にエンタシス状を呈す脚部がつく高杯である。口径14.8cmを測る。杯底部外面ヘラ削り，内面ナデ，杯部内外ヨコナデ，脚部内面ナデ，外面刷毛のあとタテヘラ磨きで仕上げている。色調は淡黄色を呈す。37はエンタシス状を呈す脚部の資料で，脚部径13cmを測る。柱状部内面ヨコヘラ削り，脚部外面刷毛のあと柱状部をナデ，裾部内外はヨコナデで仕上げている。色調は淡黄



第 90 図　土師器実測図4（1/3）

白色を呈す。38は脚部を欠く資料で，口径18.4cmを測る。杯底部内外ナデ，杯部内外ヨコナデ仕上げ。色調は淡茶褐色を呈す。杯底部外面に煤の付着がみられる。39・40とも杯部の資料で，口径39が21.5cm，40が21.6cmとほゞ同形のものである。口径に比べ杯部の深さが浅いタイプで，杯底部の屈折もあまり明瞭でない。杯底部内外ナデ，杯部内外ヨコナデで仕上げている。39の杯部外面には細かい刷毛調整の痕跡を残している。色調は39・40とも淡黄色を呈す。41は柱状部がエンタシス気味ではあるがよりスマートな形状を呈す脚部がつく高杯のほゞ完形の資料である。復原口径17.3cm，器高13.9cm，脚部径12.8cmを測る。杯底部外面ヘラ削り，内面ナデ，杯部内外ヨコナデ，柱状部内面ヨコヘラ削り，外面ナデ，裾部内外ヨコナデで仕上げている。色調は淡黄白色を呈す。42は杯部の資料で，口径16.4cmを測る。杯底部外面ヘラ削りのあとナデ，内面ナデ，杯部内外はヨコナデで仕上げている。杯部外面には著しい煤の付着がみられる。色調は淡茶褐色を呈す。

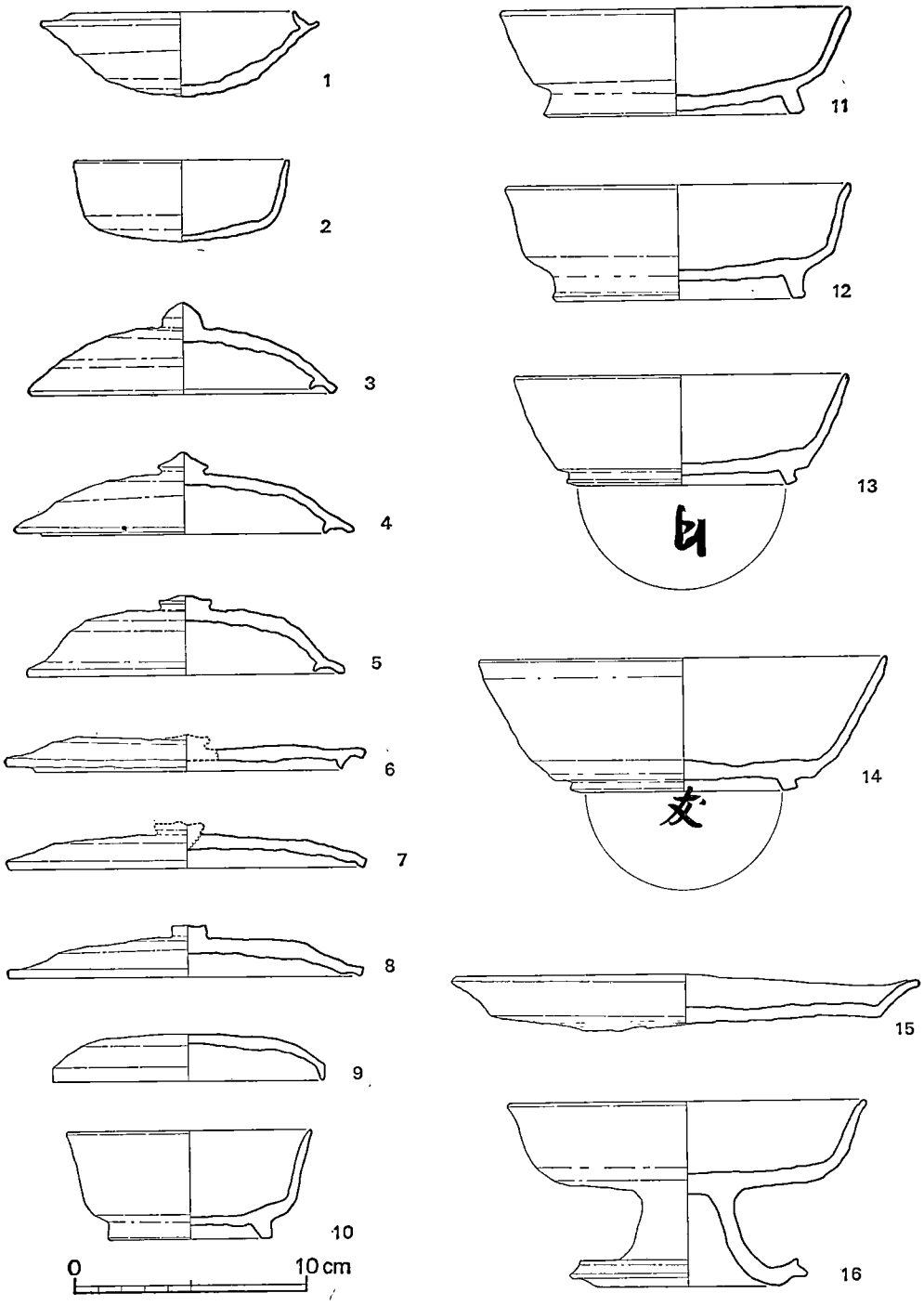
器台形土器（43）　小型の器台で，裾部と器受部を欠く脚部の資料である。器受部内面中央には1つの円孔がある。脚部内面ヘラ削り，外面ヨコナデで仕上げている。色調は淡黄白色を呈す。

≪須恵器（図版79—2，第91・92図）

杯　身（1・2）　1は蓋受けの返りをもつもので，立ち上りは低く内傾する。口径9.6cm，器高3.5cmを測る。底部内外ナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げた暗灰色を呈す土器である。2は蓋受けをもたないタイプである。平坦気味の底部から緩やかに立ち上がり，底部と体部の境が不明瞭なもので，復原口径9.2cm，器高3.4cmを測る。外底部回転ヘラ削り，内面ナデ，口縁部内外はヨコナデ仕上げである。色調は暗灰色を呈す。

杯　蓋（3～9）　大きくつまみをもつもの（3～8）と，もたないもの（9）に分れる。また，つまみをもつものにも，身受けの返りをもつもの（3～6），返りのないもの（7・8），小形でつまみをもたないもの（9）がある。

3は乳頭状のつまみを有するもので，丸味をもった天井部からなだらかな口縁端部に移行する。身受けの返りは低く小さい。最大径13.2cm，器高2.8cmを測る。天井部外面回転ヘラ削り，内面ナデ，口縁部内外はロクロヨコナデ仕上げ。4は低平な宝珠形のつまみを有し，天井部は平坦である。身受けの返りも低く小さい。天井部外面回転ヘラ削り，内面ナデ，口縁部内外はロクロヨコナデ仕上げである。最大径14.5cm，器高2.5cmを測る。5は先端のつぶれた低平な宝珠形のつまみを有す。最大径13.6cm，器高2.8cmを測る。天井部外面は回転ヘラ削りで仕上げ，平坦な面をなしている。6は最大径15.4cm，器高1.5cmを測り，天井部外面は平担で扁平な蓋である。低平な宝珠形のつまみがつくものであろう。天井部外面回転ヘラ削りで，内面ナデ，口縁部内外はロクロヨコナデ仕上げである。7・8はいわゆる身受けの返りをもたず，端部がほぼ直角に折れ曲るものである。天井部外面は回転ヘラ削りされ，平坦面をもっている。



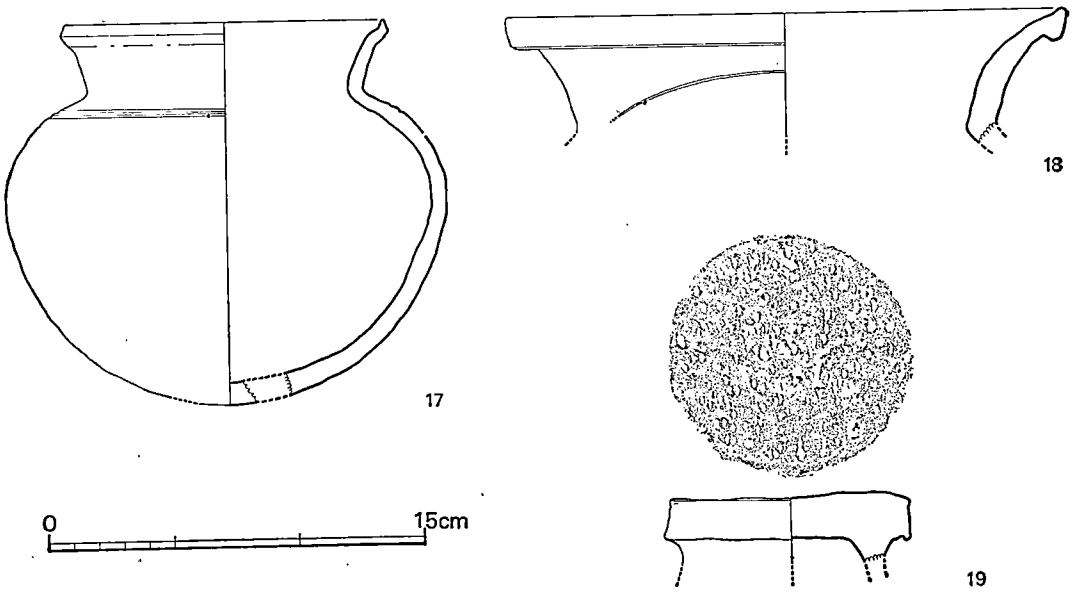
第 91 図　須恵器実測図1（1/3）

7はつまみを欠失するが，8は小さい低平な宝珠形をなす。口径7が15.3cm，8が15.2cm，器高7が1.4cm，8が1.6cmを測る。色調は7が暗灰色，8が淡灰色である。9は口径11.6cm，器高2cmを測るつまみをもたない低平な小形の蓋である。天井部外面回転ヘラ削り，内面ナデ，口縁部内外はロクロヨコナデで仕上げている。

高台付椀（10～14）　底部と体部の境が不明瞭な杯部に，外方にふんばる高い高台が付くもの（11・12），底部と体部の境が明瞭で体部が口縁部にむけて直線的に外上方に立ち上がり，付高台は低く，畳付は外方にはねるもの（13・14），口径10.6cmと小さいが，器高4cmと深い杯部に，少し高目で外方にふんばる高台を有すもの（10）がある。11・12とも内底部が不定方向ナデの他はロクロヨコナデで仕上げている。口径11が15cm，12が14.8cm，器高は11が4.5cm，12が4.8cmを測る。13は口径14.3cm，器高4.7cmを測り，底部外面には墨書文字がみられる。14は口径17.5cm，器高6.6cmを測り，13よりひとまわり大きい椀である。また底部外面には「友」の墨書文字が記されている。13・14とも杯底部内外不定方向ナデの他はロクロヨコナデ仕上げである。色調は13が暗灰色，14が灰色を呈す。14は内外ともロクロヨコナデ仕上げで，底部と体部の境はさほど明瞭でない。

盤（15）　ゆがみの強い土器であるが，口径約20cm，器高約2.3cmを測る浅いものである。底部は粗い回転ヘラ削りで平坦に仕上げられ，内底部ナデ，口縁部内外ヨコナデで仕上げている。色調は暗灰色を呈す。

高　杯（16）　口径15.4cm，器高7.8cm，脚部径10.2cmを測る。杯底部と口縁部の境が不明



第92図　須恵器実測図2（1/3）

瞭な杯部に，柱状部が短かく，裾部で大きくひろがり，端部ではね上がる脚部がつくものである。杯底部外面ヘラ削り，内面ナデ，口縁部内外はロクロヨコナデ，脚部内面ナデ，脚部外面から裾部内面にかけてロクロヨコナデで仕上げている。色調は暗灰色を呈す。

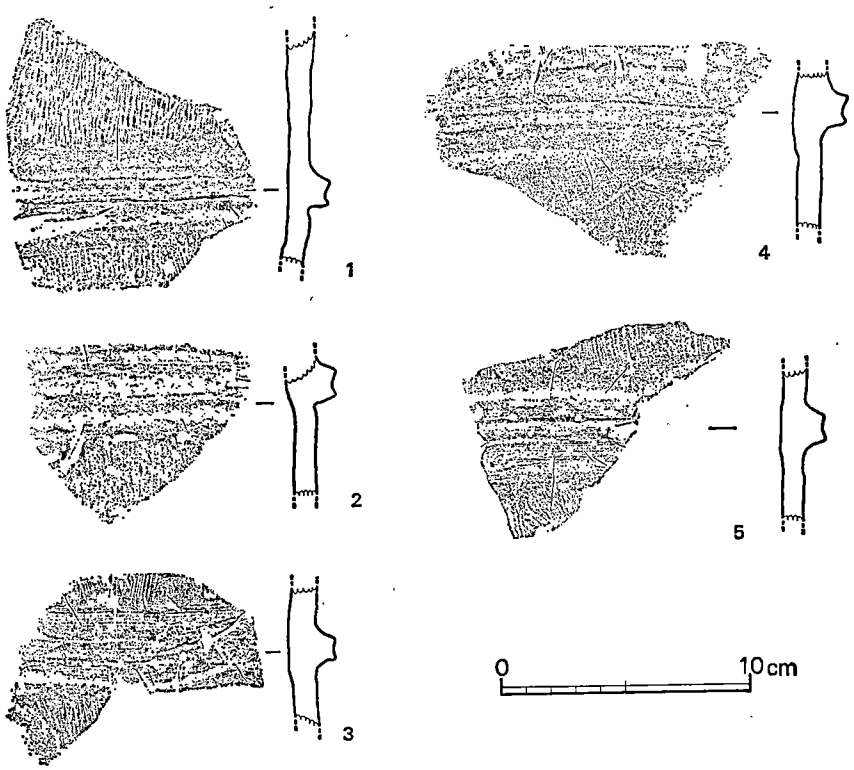
壺（17）　肩の張った球形の胴部に，立ち気味に外傾し，端部付近でさらに外反する短い口縁部がつく小形の壺で，口縁端部をつまみ上げて仕上げている。胴部内面ナデ，外面上半ナデ，下半ヘラ削り，口縁部内外はヨコナデ仕上げである。色調は淡灰色を呈す。口径12.7*cm*，器高15.2*cm*，胴部最大径17.4*cm*を測る。

甕（18）　口頸部の破片資料で，復原口径22.2*cm*を測る。頸部は外傾気味の短いもので，口縁部は垂れさがり気味の単口縁である。頸部外面に1条のヘラ記号がある。内外ともにロクロヨコナデ仕上げである。

焼　台（19）　脚部を欠く台部の資料で，上面はほぼ平坦で，おろし面のような刺突が施されている。台部径9.5*cm*を測る。色調は淡灰色を呈す。

≪埴　輪（第93図）

全て円筒埴輪片である。凸帯は断面「M」字状を呈し，外面縦位・斜位の刷毛調整で，凸帯

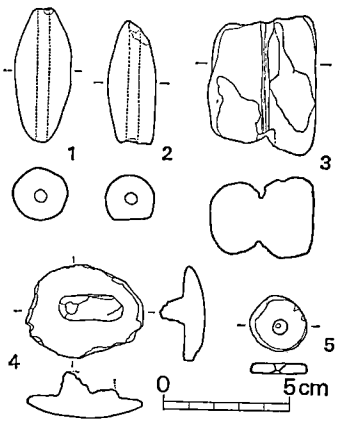


第 93 図　埴輪実測図（1/3）

部はヨコナデしている。内面は3が横位の刷毛の他は斜位の刷毛仕上げである。色調は1～3が黄白色，4・5が淡黄褐色を呈す。おそらくこの埴輪は南側台地にある門田2号墳の埴輪と関連する資料であろう。　　（井上）

≪石器・土製品（第94図）

1・2は管状土錘で，1は全長5.3cm，胴部径2.25cm。重さ26.4g。1は赤褐色，2は暗灰褐色を呈す。3は滑石製の石錘。4は滑石製の模造鏡で凹レンズ状の鏡面と鈕部を形成するが後辺のキズが著しい。長径4.6cm，短径3.6cmを測る。5は有孔石製品で，よく祭祉遺物として出土する。径約2.2cm，厚さ0.42cmで，孔は両側から斜めに穿つが杜撰である。重さ3.4g。　　（木下）



第94図　土製品・石製品実測図(1/3)

Ⅵ　歴史時代の遺構と遺物

(1)　溝状遺構（図版19，付図2）

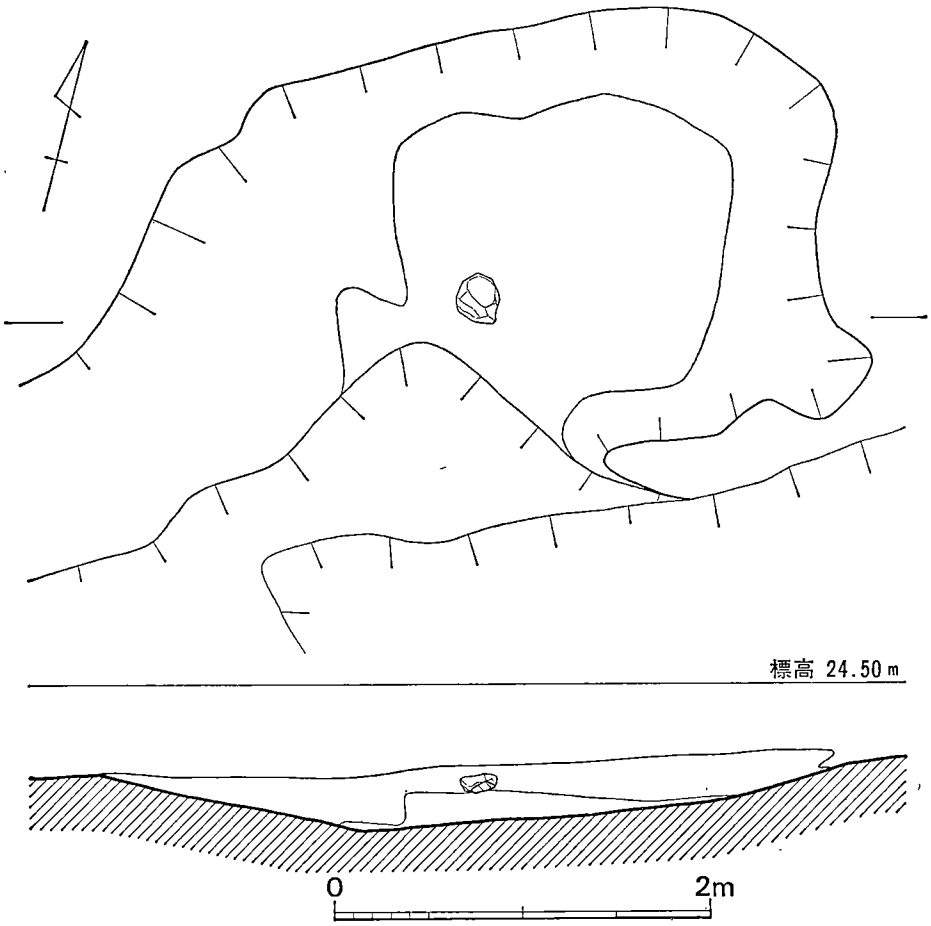
谷頭地区のB9～C9—5・10・15・20・25区にわたって検出された溝であるが，未調査区を多く残すためその全貌は知りえない。溝幅が判るのは谷頭のみで，約7mと広い。両台地からの水落ち部であると同時に，湧水点であるためか，浸蝕され流路が蛇行し，みだれている。しかし，C9—15区では深さは約70cmを測るしっかりしたV字溝をなしている。C9—10区北側肩部には花崗岩の割石の集積がみられる。

出土遺物は，糸切り底の土師器杯・皿片と数点の青磁片のみである。

(2)　竪穴状遺構（図版76—下，第95図）

D9—12区で検出された竪穴状遺構である。西南側のプランは調査のミスで確認できず堀り下げてしまったために不明であるが，一部北西隅が残存しているところから考え，東西約3.30m×南北約2.25m，深さ39cmを測る平面隅丸方形を呈す竪穴であったと思われる。

竪穴内からは底面よりわずかに浮いた状態で土師器杯・椀，黒色土器椀，瓦器椀等が一括し



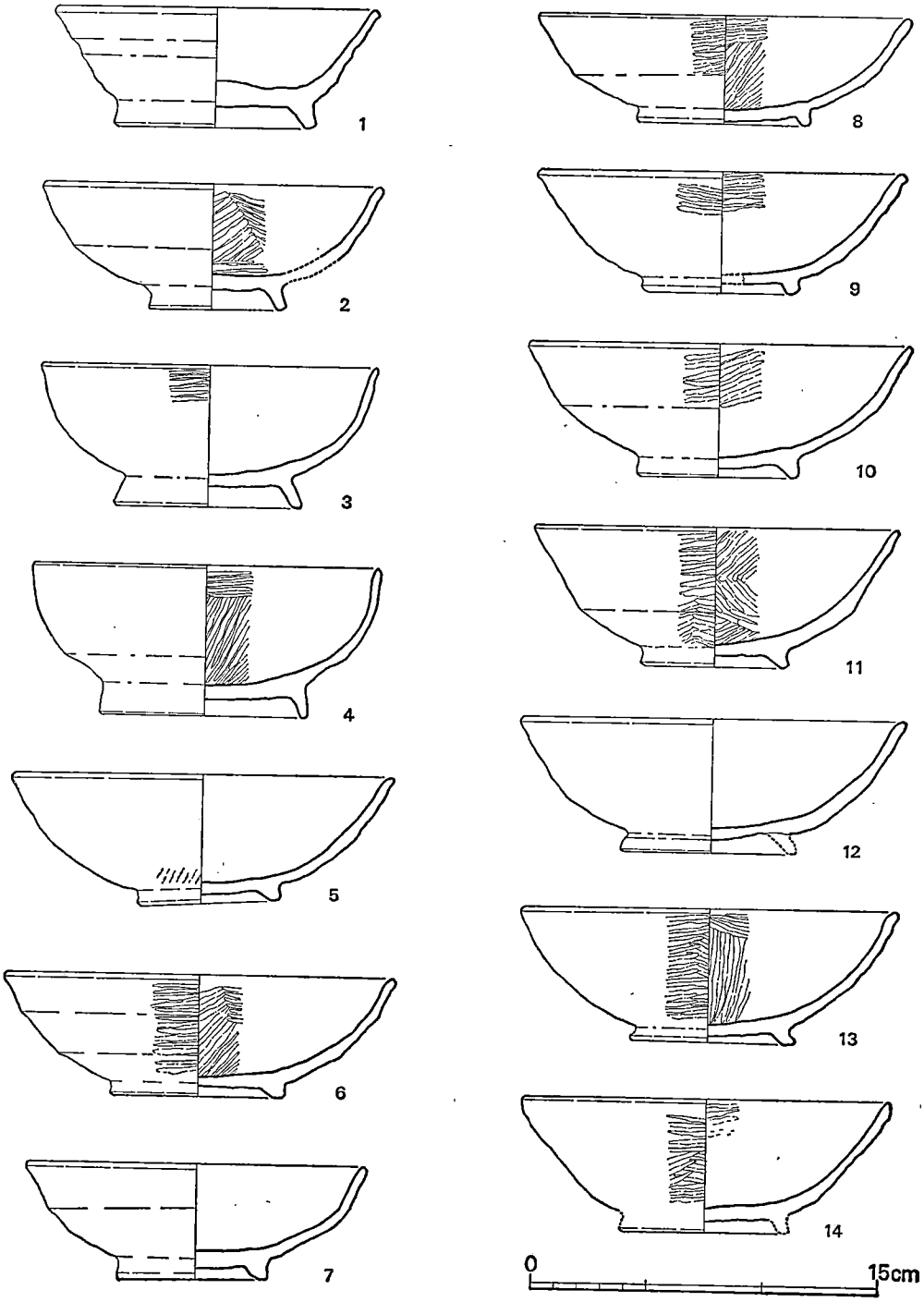
第 95 図　竪穴状遺構実測図（1/40）

て多数出土した。

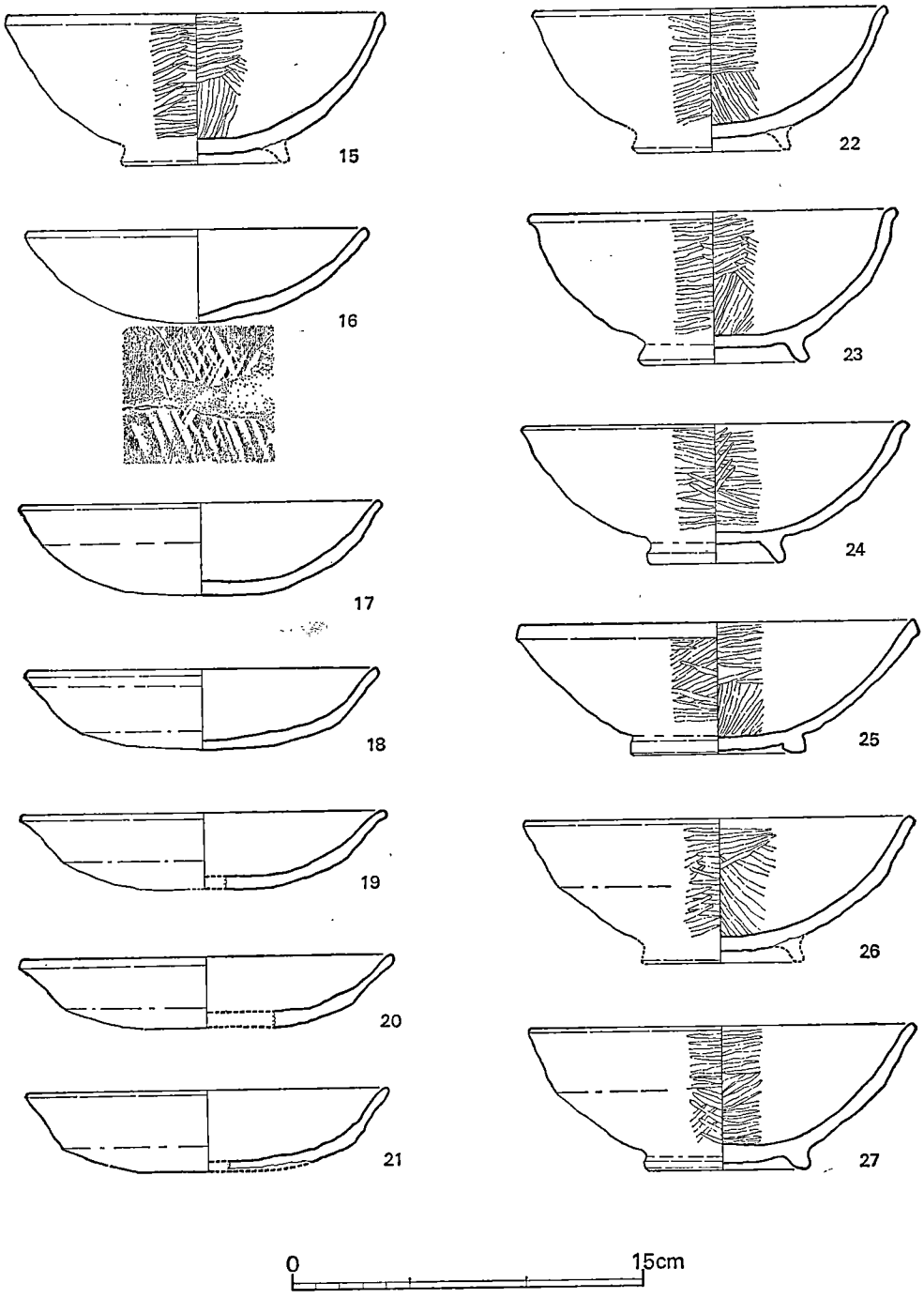
出土遺物（図版80・81，第96・97図，表７）

土師器椀（１・５～15）　椀には二つのタイプがある。高台が高く，底部から直線的に外方にひらく体部がつくもの（１），高台は低く，底部から丸味をもって外反する体部がつくもの（５～15）で，しばしば体部中位に屈折点をもつものが多い。口径は１が14*cm*，５～15は14.7～16.6*cm*で，16*cm*前後のものが一般である（表７）。調整には内外ともナデて仕上げたもの（５・７・12），内外ともナデたあとヘラ磨きで仕上げたもの（６・８～11・13～15）がある。また，外底部に板状圧痕を残すもの（５・７・８），体部外面下半に顕著な指頭圧痕を残すもの（５・12）がある。

土師器杯（16～21）　いわゆる丸底の杯である。口縁部付近でゆるやかに外反するものが多



第 96 図　竪穴状遺構出土土器実測図1（1/3）



第 97 図　竪穴状遺構出土土器実測図２（1/3）

表 7　土器計測表

（単位 cm）

No.	口径	器高	高台径	切り離し	板状圧痕	No.	口径	器高	高台径	切り離し	板状圧痕
土師器椀						土師器杯					
1	(14)	5.2	8.7	不明		18	15	3.4		ヘラ	
5	16.5	5.6	6.2	〃	○	19	15.6	(3.3)		ヘラ	○
6	(16.8)	5.3	7.5	〃		20	16	(3.1)		ヘラ	○
7	14.7	5	6.5	〃	○	21	15.5	(3.5)		ヘラ	
8	16.1	4.7	7.5	〃	○	黒色土器椀					
9	(15.9)	(5.2)	(6.8)	〃		2	14.7	5.3	5.9	不明	
10	(16.5)	5.7	(7)	〃		3	(14.5)	6.1	8.1	〃	○
11	(15.7)	6	(6.4)	〃		4	(15)	6.5	9	〃	
12	(16.6)	5.8	7.5	〃		22	15.2	—	—	〃	○
13	16.3	5.8	7.1	〃		23	15.7	6.5	7.3	〃	
14	(15.9)	—	—	〃	○	24	(16.5)	5.9	5.9	〃	
15	16.2	—	—	〃		25	17.1	5.6	7.5	〃	
土師器杯						瓦器椀					
16	14.7	4		〃	○	26	16.6	—	—	〃	
17	15.5	3.9		ヘラ		27	16.5	6.1	7.1	〃	

いが，16のように丸底の底部からそのまゝ立ち上がる特異なものもある。体部内外ナデ，口縁部内外ヨコナデで仕上げている。外底部に板状圧痕を残すもの（16・19・20）が多く，底部の切り離しはその大半がヘラ切り離しである。また，16～19の体部下半には著しい指頭圧痕がみられる。口径14.7～16cmで，15.5cm前後のものが多い。器高は3.1～4cmである。

黒色土器椀（2～4・22～25）　内黒のもの（2・3），内外とも黒色を呈すもの（4・22～25）がある。その大半は土師器椀と器形を共通するものであるが，2～4のような高台が高く，体部の丸味が強い別タイプのものもある。口径は14.5～17.1cm，器高5.3～6.5cmを測る。調整は内外とも丁寧なヘラ磨きで仕上げていて，外底部に板状圧痕を残すもの（3・22）もある。22～25は土師器杯，土師器椀と基本として共通する技法上のもので，いわゆる土師器椀に炭素を吸着させたものといえるタイプである。

瓦器椀（26・27）　26・27とも体部中位に屈折点をもつもので，器形は土師器椀・黒色土器椀と共通する。内外ともヘラ磨きで仕上げたもので，26の体部外面下半には土師器杯などにみられる手法上と同一といえよう。

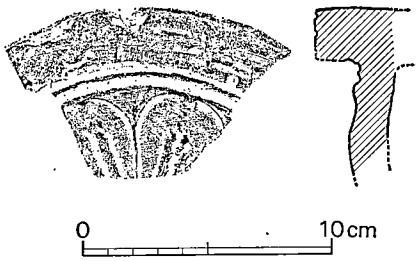
以上の土器群は基本として竪穴内出土の一括土器であるが，土師器椀（1）・黒色土師器椀

（2～4）のようなタイプを異にする古い様相をもつものがある。しかし，他の大半の土師器・黒色土器・瓦器は形態・手法上でも共通するものである。これら土器群と共通する資料が大宰府第38次調査ＳＤ860溝から多量に出土している。この土器群についてはすでに前川威洋氏（註1），横田賢次郎・森田勉氏（註2）等の研究がある。前川威洋氏の編年によれば五条Ⅱ－３Ｃ・Ⅱ－３Ｄと分類されているもので，年代としてはⅡ－３Ｃが11世紀後半～12世紀初頭，Ⅱ－３Ｄが12世紀初頭～12世紀前半と比定されている。一方，横田，森田両氏の編年によれば12世紀初頭～中頃を中心とし，若干その前後する時期も含むとされているものである。

(3) 包含層出土の遺物

≪瓦（図版82，第98～100図）

軒丸瓦（第98図）　重弁八葉軒丸瓦の破片資料である。周縁に三重圏文を飾り，その中に八葉の重弁，逆三角形の間弁を配している。蓮弁は先端部が反転し，弁形は大きく丸い形の整ったものである。色調は淡黄白色を呈す。胎土は精良で，焼成は普通。

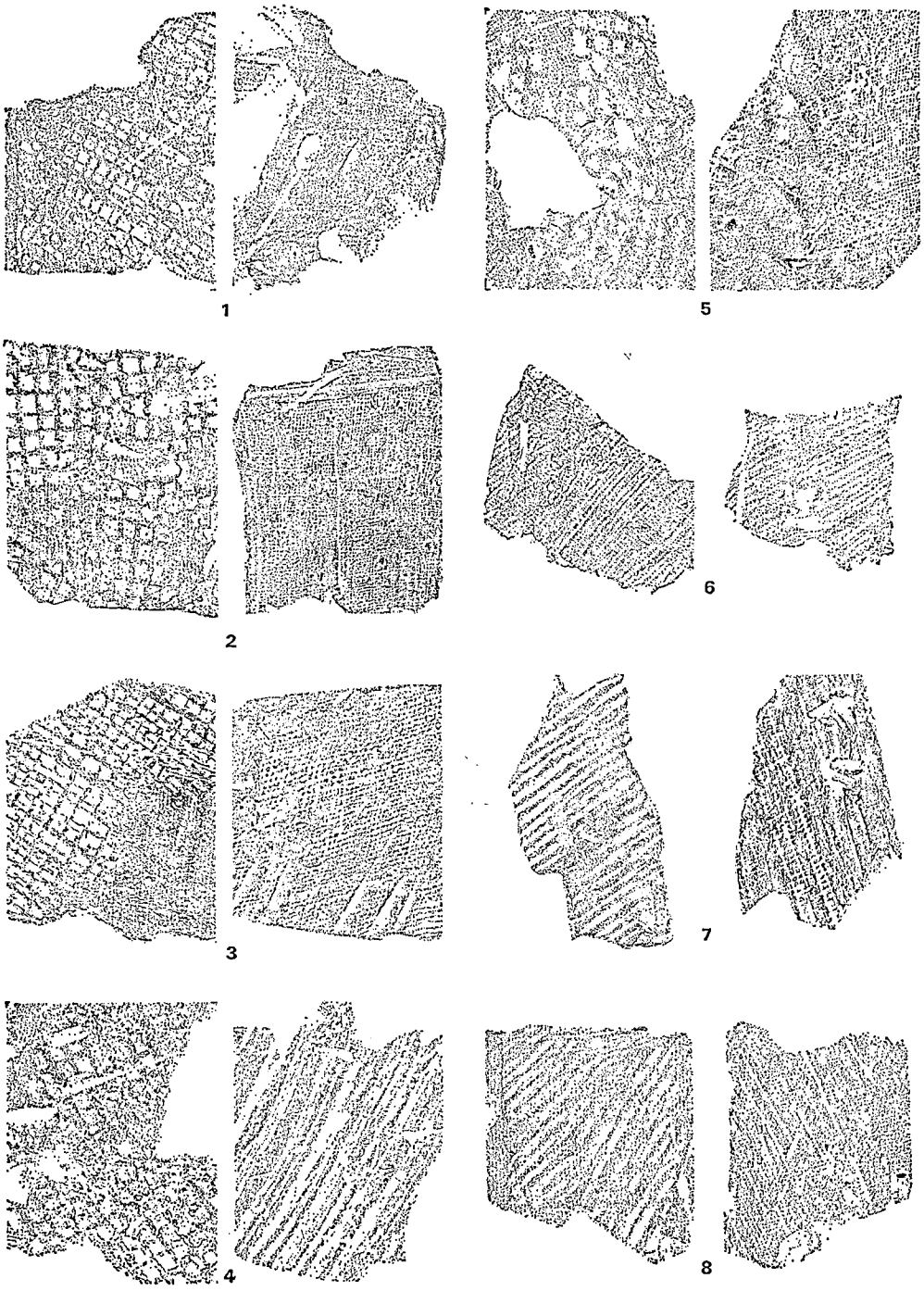


第 98 図　軒丸瓦実測図（1/3）

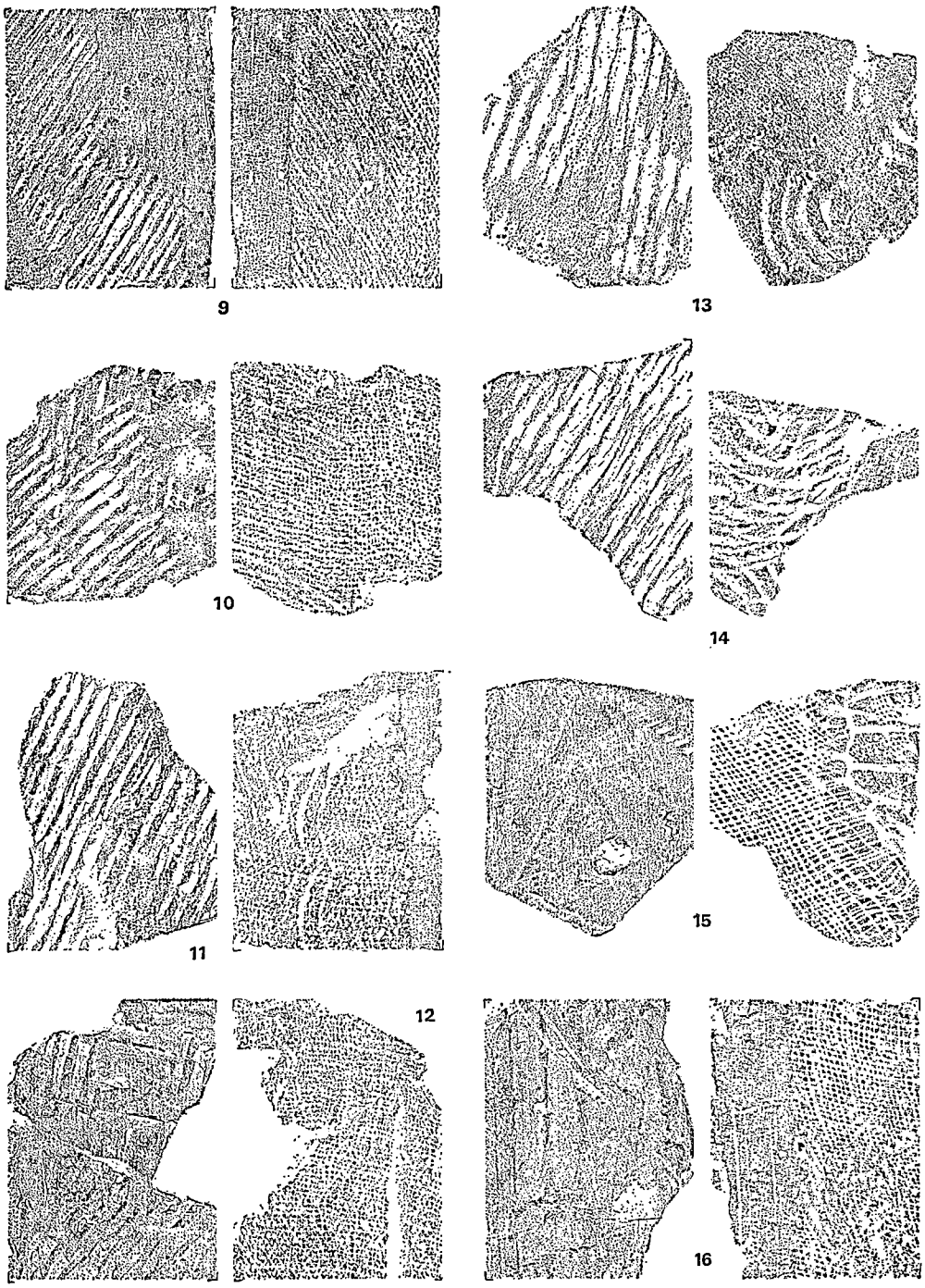
丸瓦・平瓦（図版82，第99・100図）　全て破片資料であるため，大きさ・模骨の規模等は不明である。叩文様は大きく格子目文・平行線文の二つで，他にすり消しているものがある。格子目文４種，平行線文６種に細分できる。

格子目文（1～5）　1は凸面が３×３㎜の正方形格子目文，凹面は細かい布目である。色調は灰色で硬質。平瓦。2は凸面が４×４㎜の正方形格子目文，凹面は細かい布目である。焼成は須恵質。丸瓦。3は凸面が４×4.5㎜の長方形格子目文，凹面は２と比べ若干粗い布目で，糸切り痕を残す。色調は灰色を呈し，硬質。平瓦。4は凸面が４×５㎜の長方形格子目文，凹面は細かい布目である。糸切り痕が明瞭である。色調は淡灰色を呈し焼成は軟質。平瓦。5は凸面が４×５㎜の長方形格子目文，凹面は細かい布目である。色調は淡灰色で軟質。丸瓦。

平行線文（6～14）　6は幅１㎜の細い平行線文，凹面は細かい布目で，糸切痕が明瞭である。焼成は須恵質。丸瓦。7は凸面が幅２㎜の平行線文，凹面は粗い布目である。色調は暗褐色で須恵質。丸瓦。8は凸面が幅２㎜の平行線文，凹面は細かい布目で，糸切痕を顕著に残している。9・10は凸面が幅2.5㎜の平行線文，凹面は粗い布目で，9には明瞭な糸切痕を残している。色調は淡灰色で，硬質である。丸瓦。11は凸面が幅３㎜の平行線文，凹面は粗い布目のあと，青海波文の叩きがみられる。色調は淡灰色を呈し，焼成は硬質。平瓦。12は凸面が幅3.5㎜の平行線文，凹面は粗い布目である。色調は淡灰色で硬質。丸瓦。13・14は凸面が幅４



第 99 図　丸瓦・平瓦拓影 1（1/2）



第100図　丸瓦・平瓦拓影2（1/2）

mm弱の粗い平行線文，凹面は細かい布目のあと，青海波文の叩きを施している。色調は淡黄白色を呈し，焼成は軟質。平瓦。

他に，凸面の叩文がすり消されているもの（15・16）がある。15の凹面は粗い布目で，また，布をとじ合せた痕跡を明瞭に残している。色調は淡黄褐色で軟質である

≪陶　器（図版83—1，第101図1・6）

緑釉高台付腕（1）　破片資料で，復原口径14.6cm，器高5cm，高台径7.7cmを測る。杯部は内湾気味に大きく外反し，口縁端部はわずかにつまみ出し気味に仕上げている。高台は低く外方にはね上げ気味で，畳付はヨコナデによる鋭い凹みをもつ。釉色は淡黄緑色で全面に施されている。胎土は乳白色を呈す。

湯　釜（6）　胴部の破片資料である。ソロバン玉状の胴中位には幅1.4cmの鍔がめぐっている。外面上半刷毛，下半ナデ，鍔部ヨコナデ，内面ナデて仕上げている。外面下半には煤が著しく付着している。色調は外面淡黄褐色，内面淡褐色を呈し，胎土・焼成とも良好，堅緻な土器である。

≪土師器（図版83—1，第101図2～4）

杯（2～4）　全て破片資料である。2は復原口径15.6cm，器高3cmを測る丸底の杯で，内面ナデ，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。底部の切り離しはヘラ切りである。色調は淡灰色を呈す。3は復原口径14cm，器高4cmを測る丸底の杯で，内面ナデ，口縁部内外はヨコナデ仕上げである。底部の切り離しはヘラ切りである。色調は外面淡黄褐色，内面淡黄白色を呈す。4は復原口径12.9cm，器高4.1cm，底径7.8cmを測る。口径に比べ底径の小さい杯である。内底部ナデ，体部内外ヨコナデ仕上げで，底部の切り離し手法はヘラ切りである。色調は淡灰色を呈す。

≪土師質土器（第101図5）

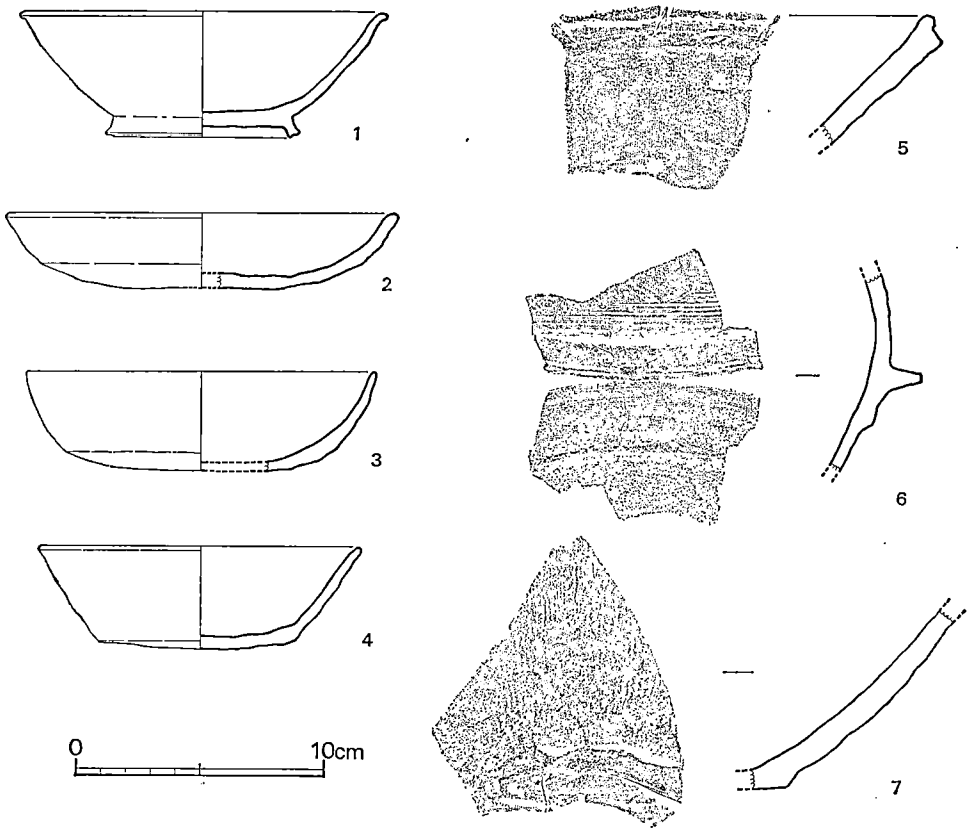
いわゆる土鍋の破片資料で，口縁部が肥厚気味に仕上げられ，端部をヨコナデによりつまみ上げている。調整は外面風化が著しく不明であるが，内面は粗いヨコ刷毛である。色調は淡黄白色を呈す。

≪瓦質土器（第101図7）

土鍋の胴下半の破片資料である。底部は平底で，調整は胴部内外とも粗い刷毛仕上げで，外底部はヘラ削りのままである。外面黒灰色，内面淡黒灰色を呈す。

≪磁　器（図版83—2，第102図）

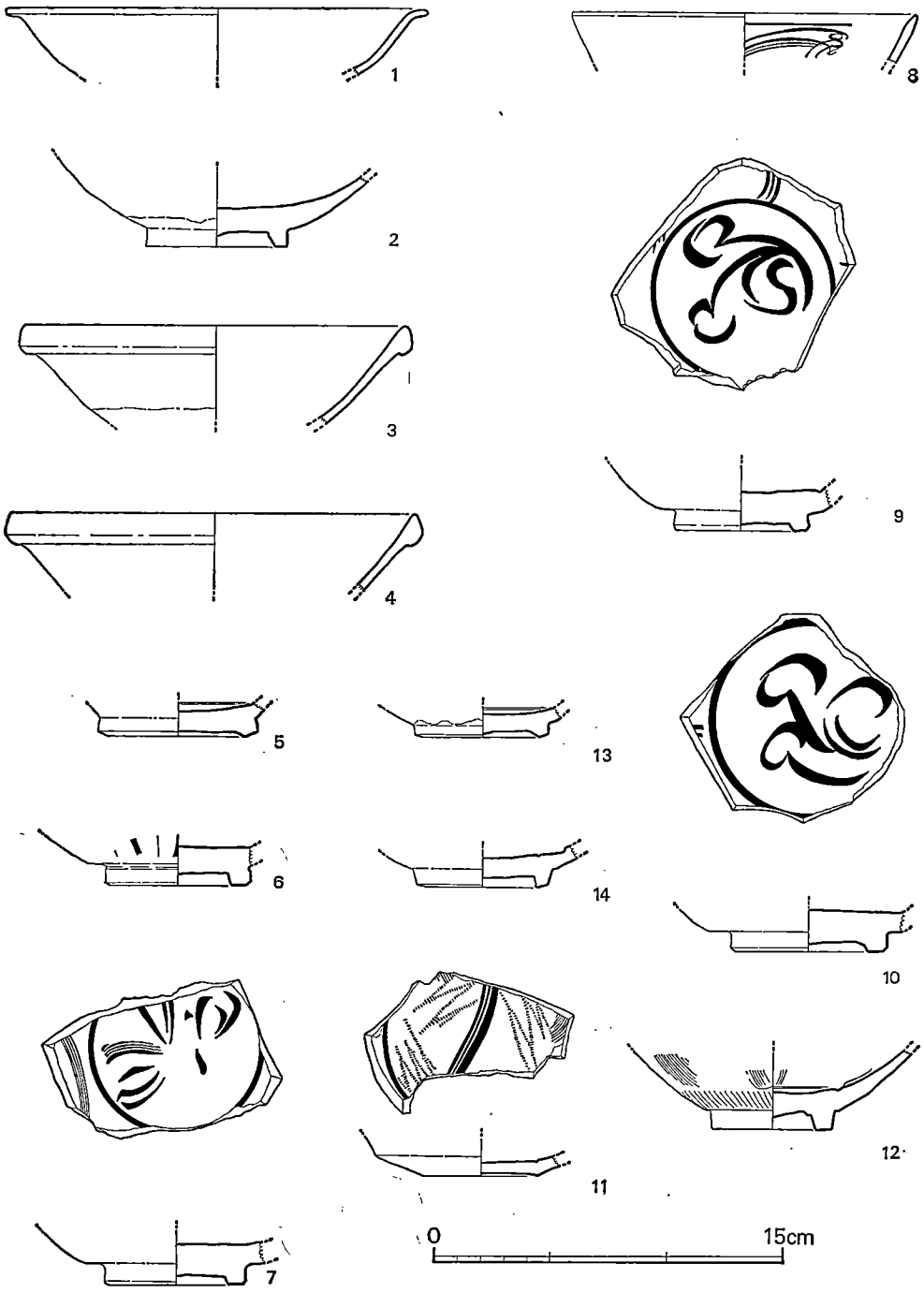
白　磁（1～5）　全て椀の破片資料である。1は復原口径17.9cmを測る椀，体部は内湾気味に大きく外反し，口縁部付近でさらに開くタイプで，端部は丸く仕上げている。釉は内外に施され，乳白色を呈す。2は胴下半の資料で，高台径6cmを測る。高台は外面を直に，内面を斜めに削り出したものである。釉は内面全体と外面底部付近を除く全面に施され，釉色は黄白色を



第101図　陶器・土師器・土師質土器・瓦質土器実測図（1/3）

呈す。また，器面全体に著しい貫入がみられる。おそらく口縁部に小さい玉縁をもつタイプであろう。3・4は体部上半の破片資料で，いわゆる玉縁の口縁部をもつタイプである。3は復原口径16.2cmを測り，釉は体部下半を除く内外に施され乳白色を呈す。釉厚は0.6mmと厚い。4は復原口径17.2cmを測る。釉色は淡黄白色で内外に施されている。胎土は乳灰色を呈す。5は高台部の資料で，高台は低く厚いもので，内面の削り出しが極めて浅いものである。高台径6.8cmを測る。釉色は淡黄白色で，内面のみ施釉されている。この高台はいわゆる玉縁の口縁部をもつ3・4のようなタイプにつく高台である。

青　磁（6～14）　全て破片資料である。大きく龍泉窯系のもの（6～10）と同安窯系のもの(11・12)に分れる。6は外面体部に鎬蓮弁文を有すもので，高台は器肉が厚く低い。畳付は平坦である。釉は高台部内面を除く内外に施され，うぐいす色を呈す。高台径6.1cmを測る。7・8ともヘラおよび櫛状のもので草花文を施しているタイプである。7は高台部付近の資料で，内底に「こ」字状をなす花文，体部内面に櫛歯文を施している。底部は肉厚で，高台は断面四角で低い。畳付は平坦である。釉は高台部内面を除く内外に施され，うぐいす色を呈す。



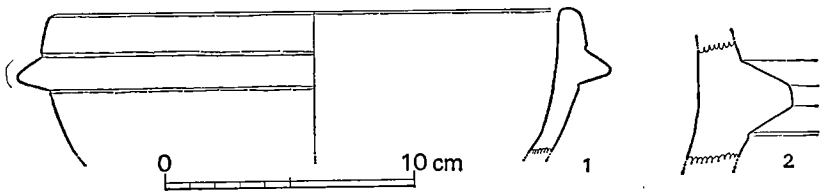
第102図　磁器実測図（1/3）

8は復原口径14.6cmを測る口縁部付近の破片資料である。体部内面にはツル草様文が描かれている。釉は内外に施され，淡緑色を呈す。9・10は内底部にいわゆる「キノコ状」といわれる片彫りのヘラ描文を3個配し，体部内面を2～3本のヘラ描き沈線文で5分割したタイプである。見込みには1条の圏線がめぐる。高台は7と同様低く，断面四角で，底部の器肉が厚いものである。釉はうぐいす色を呈し，高台部内面を除く内外に施されている。11・12はいわゆる同安窯系の青磁で，11は皿，12は椀の破片資料である。11は体部中位で屈曲し，外反するタイプの皿で，内底には片彫のヘラ描き文と櫛歯による雷光文を描いている。底部は凹み底である。釉は全面に施された後，底部の釉はかきとられたものである。釉色は淡いうぐいす色を呈す。12は体部下半の破片資料で，復原高台径5.1cmを測る。高台は断面台形をなす厚いもので，体部は内湾気味に立ち上がる。体部内外面には細かい櫛歯文が施され，見込みには1条の圏線がめぐる。釉は体部下半を除く内外に施され，淡いうぐいす色を呈す。

他に高台部のみの資料（13・14）がある。13は高台径5.7cm，14は5.6cmを測る。13の見込みには1条の圏線がめぐり，14の見込みには釉のかきとりがみられる。釉色は13が淡緑色，14が淡いうぐいす色を呈す。（井上）

≪石　鍋（第103図）

1・2とも滑石製石鍋片である。1は口縁部付近の破片で，復原口径21cmを測る。口縁下1.5cmで三角形の鍔が巡る。器壁は1cm内外。2は台形状の部厚い鍔部の破片で，器壁は1.6～2cmと厚い。胴径33.4cm前後に復原できる。（木下）

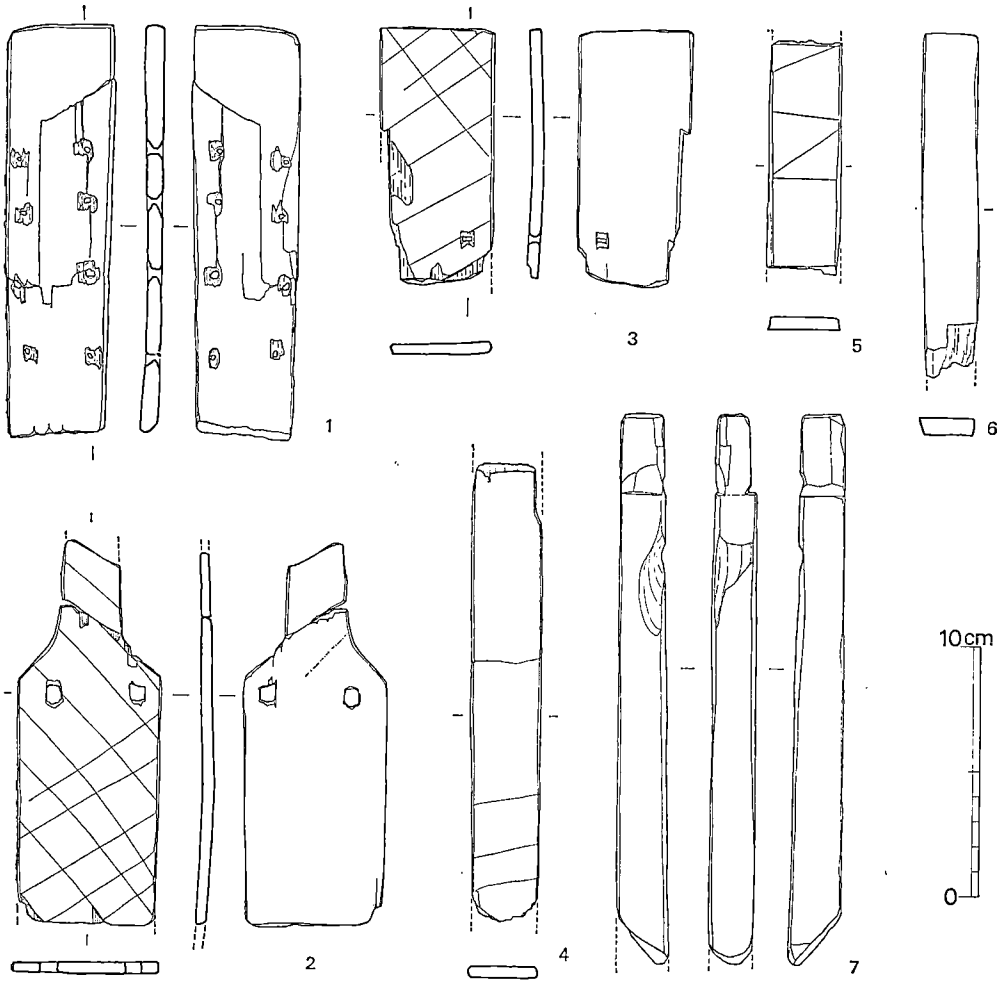


第103図　石鍋実測図（1/3）

≪木製品（図版84，第104図）

C9区の大溝上層に相当する第5層下部出土の木製品類を一括した。板材が多く，孔を穿った例，刀子先等による切り傷を刻んだ例，枘を成した例等がある。

1はC9－2・3区出土の板材で2列に各4ヶ所小孔を穿った資料である。長さ16.4cm，幅4.3cm，厚さ0.8cmを有し，長軸方向に粗雑な穿孔が2～3cm間隔に並ぶ。孔の大きさは径2～4mmである。材質はヒノキ属であろう。用途は不明だが，2列の孔の配置から材の中央に幅2cm以下の別の材を添えて緊縛したもの，あるいは，木目に直交する方向に2列の別の材を緊縛したものなどが考えられる。



第104図　木製品実測図（1/3）

2～5は，曲物の側板と考えている。薄く良精な板材に刃先の傷とみられる細い線を刻み，材を曲げ易くしている。

2は，厚さ5㎜，幅5.8㎝で，現存長15.2㎝を有し，一端は羽子板の掘りの如き曲線を曲く。刻線は1～2㎝間隔で木目に対し斜行し，幅広な部分では格子目になる。もう一方の面では，幅広な側の折損面が，刻線の部分での折損を示しており，木目に直交する刻線が用いられたことがわかる。また幅広な部分での幅狭な部分に近い側に，木目に直交して対応する1辺5～6㎜四方の2孔が穿たれている。この形状から側板が一周して重なる部分での接合施設の役割を果した孔と考えられる。材質はヒノキ属であろう。3は，2と同様の刻線を有するが，細い孔が1孔あるのみで，むしろ，底板との接合する孔と考えたい。厚さ4.5㎜，幅4.6㎝で現存長10.3

cm。C９—13区出土。ヒノキ属。４・５はそれぞれC９—８区・C９—３区出土の資料である。木目に対して斜行あるいは直交する刻線は交差せず，片面のみという点で前述の資料とは種類を異にする。また幅が３cm以下と狭く，材質もヒノキ属でなくスギであろう。

６はC９—３区出土のヒノキ属とみられる板材で，７mmの厚みを有し，現存長13.8cm，幅2.3cmを測る。表裏面とも整えられた形状を有す。

７は，現存長21.8cmで1.8cm角の柱状を呈すが，折損部側ではやや太くなる。端部から３cmの位置に３面からの欠き込みがあり，枘を形成する。枘穴を有した板材等と接合させる目的を有したものであろう。C９—13区出土。（小池）

註１　前川威洋「御笠川南条坊遺跡(4)」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』８(下)　福岡県教育委員会　1978

２　横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』４　1978

Ⅶ　自然科学系の調査

(1)　門田遺跡谷地区花粉分析結果

1.　試　料

花粉分析を行なった試料は，洪積台地を切って流れる小支谷の谷底（図版８）に堆積した堆積物である。試料の採取地点とトレンチの断面については第105図を参照されたい。試料は下位より

試料No. ７（第７層）

灰褐色の砂礫層，最大粒径15mm，一般に３mm前後の亜角礫からなる。

試料No. ６（第６層）

暗褐色泥炭質粘土層，細砂・大型植物遺体を含む。

試料No. ５（第５層下部）

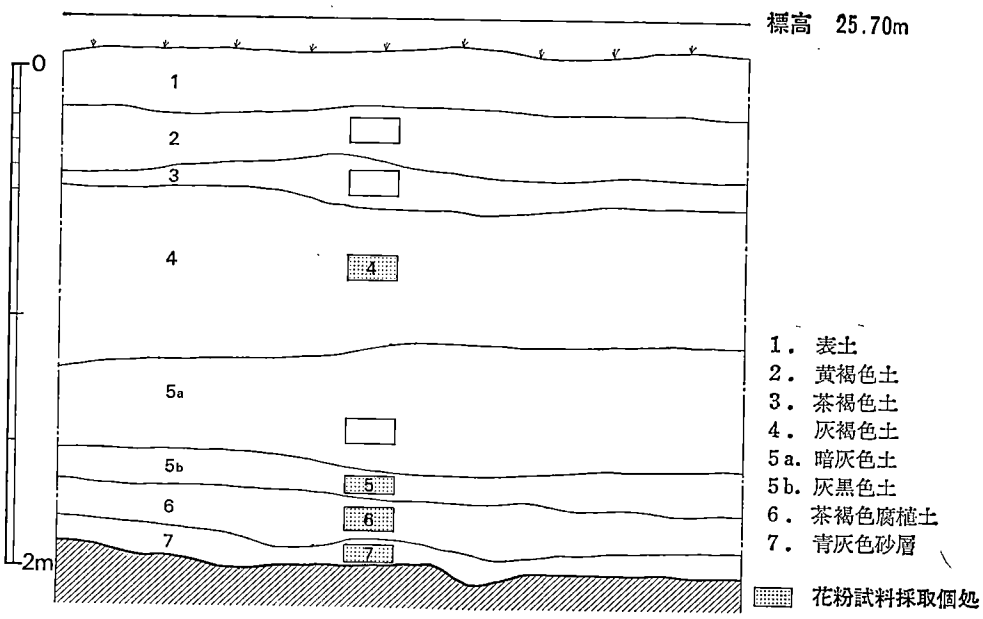
黒色有機質粘土層，細砂を混える。弥生時代後期遺物包含層。

試料No. ４（第４層）

暗褐色有機質粘土層，シルト分の含有大である。

2.　分析方法

花粉分析の方法は，KOH処理—水洗—$Zncl_2$ 処理—水洗—アセトリシス処理—水洗—マウントの順に行なった。検鏡に際しては木本花粉（Ap）を200個以上同定することに努めた。



第 105 図　花粉分析試料採取位置図（1/30）

また各プレパラートにつき30枚ずつの写真撮影を行ない，特色ある花粉については単体標本を作成した。

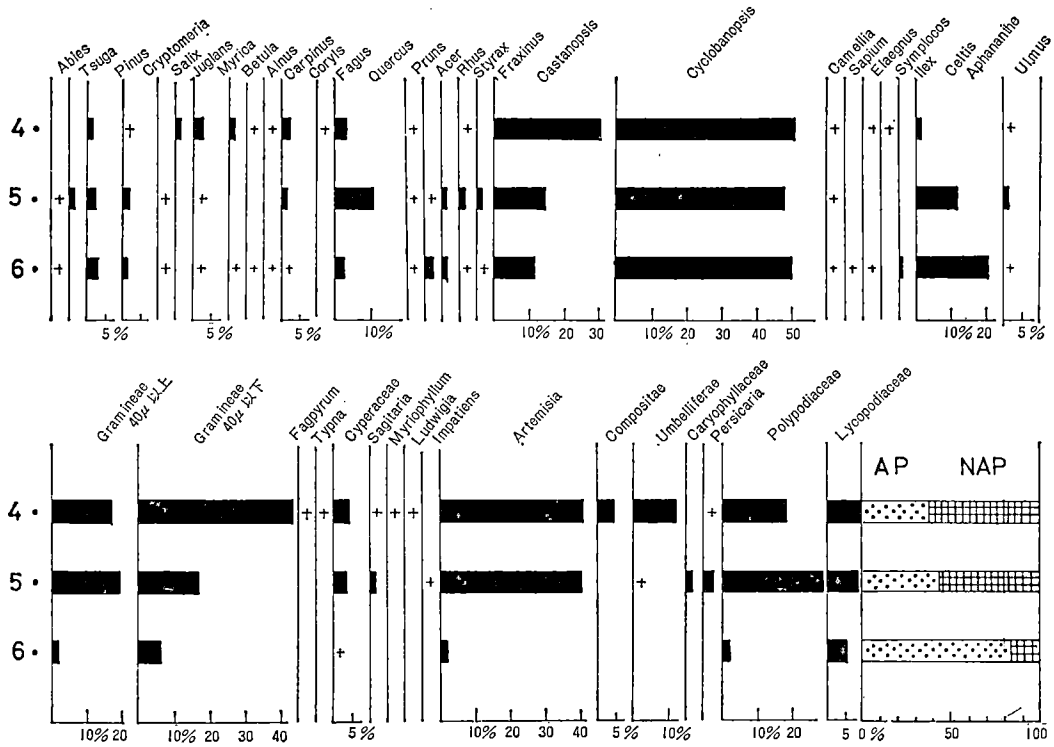
3. 分析結果

分析結果は表８と第106図の花粉ダイアグラムに示す如くである。第106図の花粉ダイアグラムの出現率は木本花粉に対する割合で示してある。なお，試料 No. 7 の灰褐色砂礫層からは，花粉はほとんど検出できなかった。

4. 考　察

原植生の復原

第６層の一般にバフン層と呼ばれている暗褐色泥炭質粘土層においては，木本花粉では常緑カシ属（*Cycalalnopsis*）が50％の値を示し，つづいてエノキ属(*Celtis*)又はムクノキ属（*Aphanthe*)の花粉が20％の高い出現率を示す。またシイ属(*Castanopsis*)も11％の比較的高い値を示す。一方，草本花粉・胞子（NAP）の出現率は非常に低く，それは∑APと∑NAPの出現比率の図(第106図参照)にも明白に示されている。こうした第６層の示す花粉フローラは，明らかにこの門田遺跡周辺に顕著な人類の居住が行なわれる以前の原植生を示している。最も高い出現率を示す常緑カシ属（*Cyclobalanopsis*）の母樹は，植物遺体の分析（粉川）においてイチイガシの球果が多数検出されていることから，イチイガシと考えられる。また20％の高い出現率を



第106図　谷地区花粉ダイアグラム

示したエノキ属（*Celtis*）とムクノキ属（*Aphananthe*）の花粉を光学顕微鏡下で区別するのはむずかしいが，植物遺体ではムクノキの種子が検出されていることから，その母樹はムクノキと考えられる。またシイノキ属（*Castanopsis*）では少数ながらツブラジイの遺体が検出されている。イチイガシは比較的土壌が安定し，かつ水分条件に恵まれた所に生育する。この門田遺跡周辺の洪積台地の環境はイチイガシの生育には適している。また植物遺体ではクスが検出されている。九州ではイチイガシ林の高木層にクスを伴なう場合が多いことから考えても，この洪積台地には当時イチイガシ林が生育していたとみてよいであろう。一方，ムクノキはイチイガシに比してより低湿かつ土壌条件の安定した所に生育する。このことから，小支谷の谷底近くの水分条件のよい所にはムクノキの大木が生育していたものと考えられる。シイノキ属は一般にイチイガシやムクノキに比して，より土壌の浅い地形環境の比較的不安定な斜面に生育する。したがって，このシイノキ属の森林はイチイガシやムクノ木の森林よりはやや遺跡から離れて，山地斜面や丘陵に生育していたものと考えられる。このことは，遺跡から発見された貯蔵穴（ドングリpit）の中から，イチイガシが大量に検出されたのに対し，このシイノキ属の球果は少なかったことも，こうした遺跡周辺の植生を物語るものと考えられる。

表 8　門田遺跡谷地区堆積物花粉分析表

属・科名	第4層		第5層(下部)		第6層		植物遺体（粉川）との対応
A　P（木本花粉）	個	%	個	%	個	%	
マツ属（*Pinus*）	3	1.3	3	1.7	9	3.0	
モミ属（*Abies*）			1	0.6	1	0.3	
ツガ属（*Tsuga*）			2	1.1			
スギ属（*Cryptomeria*）	2	0.9	3	1.7	3	1.0	
ヒノキ属（*Chamaecyparis*）?			1	0.6	1	0.3	
ヤナギ属（*Salix*）			1	0.6	1	0.3	
クルミ属（*Juglans*）	3	1.3					
ヤマモモ属（*Myrica*）	6	2.6	1	0.6	1	0.3	
カバノキ属（*Betula*）	4	1.8			1	0.3	
ハンノキ属（*Alnus*）	1	0.4			1	0.3	
クマシデ属（*Carpinus*）	2	0.9			2	0.6	
ハシバミ属（*Corylus*）	5	2.2	2	1.1	2	0.6	
クリ属（*Castanea*）	4	1.8					
シイノキ属（*Castanopsis*）	67	29.3	26	14.6	35	11.5	ツブラジイ（溝内褐色土層他）
ブナ属（*Fagus*）	1	0.4					
ナラ属（*Quercus*）	3	1.3	19	10.7	7	2.3	
カシ属（*Cyclobalanopsis*）	118	51.5	85	47.8	154	50.5	イチイガシ（5層・6層他）（多数）
エノキ属（*Celtis*）＋ムクノキ属（*Aphananthe*）	3	1.3	22	12.4	63	20.7	ムクノキ（5層・6層）
ニレ属（*Ulmus*）	1	0.4	2	1.1	1	0.3	
クワ科（Moraceae）	1	0.4					
カエデ属（*Acer*）			1	0.6	8	2.6	
ウルシ属（*Rhus*）			2	1.1	5	1.5	
ツバキ属（*Camellia*）	1	0.4	1	0.6	1	0.3	ヤブツバキ
エゴノキ属（*Styrax*）	1	0.4	1	1.1	1	0.3	エゴノキ（4層・5層・6層他）（多数）
トネリコ属（*Fraxinus*）			3	1.7	1	0.3	
シラキ属（*Sapium*）					1	0.3	

グミ属 (*Elaegnus*)	1	0.4			1	0.3	
ハイノキ属 (*Symplocos*)	1	0.4					
モチノキ属 (*Ilex*)					3	1.0	
ミカン科 (Rutaceae)			1	0.6			
サクラ属 (*Prunus*)	1	0.4	1	0.6	2	0.6	スモモ・モモ(多数)、サクラの類
A P (Total)	229	(99.8)	178	(100.9)	305	(99.5)	
N A P (草本花粉・胞子)							
イネ科 (Gramineae)(40μ以上)	39	17.0	35	19.7	7	2.3	
イネ科 (Gramineae)(40μ以下)	100	43.7	30	16.9	17	5.6	
ガマ属 (*Typha*)	1	0.4					
カヤツリグサ科 (Cyperaceae)	10	4.4	6	3.4	1	0.3	
フサモ属 (*Myriophyllum*)	2	0.9					
オモグカ属 (*Sagittaria*)			2	1.1			
ヨモギ属 (*Artemisia*)	94	41.0	71	39.9	6	2.0	
キク科 (Compositae)	11	4.8					
セリ科 (Umbelliferae)	28	12.2	1	0.6			
タデ属 (*Persicaria*)	1	0.4	5	2.8	1	0.3	
ソバ属 (*Fagopyrum*)	1	0.4					
ナデシコ科 (Caryophyllaceae)			2	1.1			
ミズユキノシタ属 (*Ludwigia*)	1	0.4					
ツリフネソウ属 (*Impatiens*)			1	0.6			
キンポウゲ属 (*Ranunculus*)	2	0.9	2	1.1			
ユリ科 (Lilliaceae)			1	0.6			
ゼンマイ属 (*Osmunda*)			3	1.7			
ウラボシ科 (Polypodiaceae)	42	18.3	52	29.2	6	2.0	
ヒカゲノカズラ科 (Lycopodiaceae)	22	9.6	16	9.0	18	5.9	
シソ科 (Labiatae)					1	0.3	
N A P (Total)	353		227		57		
A P − N A P	582		405		362		
ΣAP／ΣNAP・(%)	39／61		44／56		84／16		

農耕の開始

第5層の黒色有機質粘土層の分析結果においては，木本花粉（ＡＰ）で前時代に20％の高い出現率を示したムクノキ属（*Aqhananthe*）が12％に減少する。一方，草本花粉・胞子においては顕著な変化が現われる。すなわち，40μ以上の栽培種と考えられるイネ科（Gramineae）やヨモギ属（*Artemisia*），ウラボシ科（Polypodiaceae）が急増する。こうした全体の花粉・胞子の構成における草本花粉・胞子（ＮＡＰ）の増加は第106図の∑ＡＰと∑ＮＡＰの出現比率からも明らかである。この第5層における花粉フローラは，明らかに人類の植生に対するImpactの跡を示している。40μ以上のイネ科（Gramineae）の急増は，弥生時代の人々によって周辺で稲作農業が開始されたことを示し，ヨモギ属（*Artemisia*），タデ属(*Persicaria*)，ウラボシ科（Polypodiaceae）などの急増は，こうした農耕活動を伴なう人類の活動によって，この谷地区周辺に草本類・羊歯類の生育する荒地が形成されたことを示している。木本花粉（ＡＰ）においてムクノキ属（*Aphananthe*）の花粉が減少した。このことは，人類の活動によってムクノキが伐採されたことを示す。

人類の森林破壊

第5層においては，人類の農耕活動と人類のImpactによる荒地の形成がみられた。こうした傾向は第4層においても引き続いて認められる。草本花粉では40μ以上のイネ科(Garmineae)と共に40μ以下の野生種と考えられるイネ科（Gramineae）が急増する。またヨモギ属（*Artemisia*），キク科（Copmositae），セリ科（Umbelliterae），ウラボシ科(Polypediaceae)なども高い出現率を示す。これに対し，木本花粉では前時代以来減少傾向を続けてきたムクノキ属（*Aphananthe*）がわずか1％の出現率を示すにすぎなくなる。このことは，人類の森林伐採によってムクノキの森林が伐採されたことを示す。一方，木本花粉では，他の常緑カシ属（*Cyclobalanopsis*）あるいはシイノキ属（*Castanopsis*）などはこの時代に入っても減少傾向を示さない。シイノキ属（*Castanopsis*)はむしろ増加する。この事実は，この時代の人類の森林破壊の範囲を示す上できわめて興味深い。すなわち，すでに述べた如く，ムクノキは水分に恵まれた谷底周辺の土壌の厚い所に生育した。弥生時代の人々がまず最初に居住の場・生産の場を求めたのは，まさにこうした所であったろう。したがってこの地域において弥生時代人の森林破壊の影響を最も早く敏感にこうむったのは，このムクノ木の森林であったことが考えられる。これに対し，イチイガシは洪積台地に，シイノキ属はさらに土壌条件の不安定な山地斜面などに生育する。したがって，第4層に入っても，これらの花粉が減少しないてのは，弥生時代人の顕著な森林破壊の影響が，山地斜面や洪積台地に生育するイチイガシ林やシイノキ林にまでは及ばなかったことを示すとみられる。この時代の顕著な森林破壊は主に洪積台地をきざむ谷底周辺のムクノキ林に対して行なわれた。こうした弥生時代以降の人類の森林破壊によるエノキ属（*Celtis*），ムクノキ属（*Aphananthe*）の消滅は，大阪府古池遺跡の事例（安田

1974）においても明白に示されている。第4層においてシイノキ属（*Castanopsis*）の花粉が増加するのは，ムクノキ属（*Aphananthe*）の花粉が減少したため，木本花粉の中でシイノキ属（*Castanopsis*）が占める比率がみかけ上相対的に増加した結果である。実際には木本花粉の出現個数は減少し森林破壊は継続している。それは∑ＡＰと∑ＮＡＰの出現比率に明白に示されている。

（安田喜憲）

参考文献　安田喜憲（1974）　日本列島における晩永期以降の植生変遷と人類の居住，第四紀研究，Vol.　13—3

(2)　春日市大字上白水門田遺跡谷地区出土の種子類

門田遺跡からは多数の果実や種子類が出土している。発掘調査を担当された福岡県教育委員会の小池史哲氏らが採集・水洗された多数の試料の中から四分の一ばかりをお預りし，検討した。他は現場事務所内で同定した。今回は前者（実験室にもち帰つたもの）についてのみ記するが，他も大同小異である。標本は，多くは1～2㎜目のふるいを用いて選別されたもので，水漬けにして保存され，良好な状況にあつた。

これら植物遺体の時期は，ドングリ貯蔵穴・溝内6層が弥生後期終末，5層は後期終末から古墳時代前期の遺物を包含しているものである。

①Ｃ９，ドングリ3号ピット内，740319，イチイガシの堅果32個（うち1個は殻斗をつけている）。

③Ｃ９，ドングリ3号ピット内，740318。ハクウンボクの内果皮1個。

⑪Ｃ９—3，第5層，731208，ヤマモモの核1個。保存がよく肉質の鼻の著点もよくのこつている。

⑮Ｃ９—3，第5層，731208。モモの核1個。先端が尖つている。

⑳Ｃ９—7，第5層下部，731218。センダンの内果皮1個。

㉔Ｃ９—8，第5層下部，731211。スモモの内果皮4個と半孔にわれたもの1個。

㉘Ｃ９—8，第6層，740212。ヤブツバキの果皮片か

㉙Ｃ９—8，第6層，740212。コブシの種子3個

㉛Ｃ９—4，第6層。ヤブツバキ，動物に食害された未熟果3個。後述する。

㊷Ｃ９—17，第5層下部，740208。スモモ，完全なもの1個，破片1個。

㊾Ｃ９—17・18，第6層，731217，モモの核，小さく丸いもので，150個ある。うち5個が動物（リス・ネズミなどのけつ歯類）によつてかじられている。かじられた部位は，先端部が1例（これは珍しい），側面キール側が3例，側面キールのない側が1例であつた。この他にスモモの核の不完全なものが1個混入していた。

㊼D９—３，第５層下部，740216，よくわからないものが，ドングリ類の果皮片か

㊽D９—13，第５層下部，740430，イヌガヤの種子２個

㉒D８—18，第４層，740316，よくわからないが，いわゆる木の瘤らしい。果実でない。

㉔C９—１—５，G10—１—５，茶褐色土層，720919，ヤブツバキの未熟果の⅓程の部分。

㉚G９—１—５，G10—１—５，溝内茶褐色土層，720919，アカガシ？とみえるドングリの堅果約40個。岡本素治氏にくわしく検討して頂いている。殻斗は５個。材片１個。

㉛G９—１—５，G10—１—５，溝内茶褐色土層，720919，ツブラジイの堅果10個。標本が乾燥し保存状態がよくない。

㉔G９—１—５，G10—１—５，溝内茶褐色土層，720919，クロキの種子１個。

㉔G９—８，第６層，740315，ミミヅバイの種子１個。

㉚G10—６，第６層，740314，これはよくわからないが，木炭片に加えて，ブドウ類の巻ひげとみえる断片，ドングリ類かとみえる種皮断片が夫々１個づつある。

㉙G10—７，第６層下部，740315，エゴノキの内果皮21個。ハクウンボクの内果皮２個（うち１個は双生のものの片われで，一方が平面になつている。

㉒ドングリ６号ピット内，7312，ヤブツバキの果皮４個，幼果１個。

㉓ドングリ７号ピット内，740508，マルミノヤマゴボウの種子１個。

㉖ドングリ７号ピット内，740508，ヤマビワの種子１個。

㉗ドングリの７号ピット740508，ムクノキの種子２個

㉘ドングリ７号ピット内，740508，この標本は乾き上っていた為，わかりにくいがエゴノキ１個，ムクノキの破片２個，ムクロジ？の幼果２個，ドングリ類の果皮３片，幼果１個などが認められた。

㉓ドングリ７号ピット内，740508，エビヅルの種子２個。

㉔ドングリ８号ピット内，740509，イチイガシ（殻斗つき）13個。

㉗ドングリ８号ピット内，740509，サクラの類の種子１個。

㉘ドングリ８号ピット内，740509，クスノキの種子10個。

㉙ドングリ８号ピット内，740509，モモの核１個，非常に丸く小さい。先端を欠いている。

㉚ドングリ11号ピット内，740515，アカガシ？とみえる堅果２個。イチイガシ20個，殻斗２個。このピットの最上部には，樹皮がある。

㉒C９—６，ドングリ５号ピット内，740313，イチイガシ　（若い果２個）。マルミノヤマゴボウ（種子１個）。アカメガシワ（種子10個）。カラスザンショウ（種子２個）。サンショウ（種子１個）。エビヅル（種子８個）。ノブドウ（種子１個）。エゴノキ（種子306個。うち２個は双生のもの）。クサギ（種子２個）。

㉔ドングリ７号ピット，壁面，740508，これはイネ科植物の根らしい。後世のものかもしれ

ない。

この他，通し番号のついていない標本が3つあり。ここでは㋐，㋑，㋒としておく。

㋐ドングリ7号ピット，覆土内，740508，（6升4合の一部），浮石粒が3個程混入しているが，すべてがよく肥大したイチイガシであると思われる。

㋑ドングリ8号ピット（4升8合の一部），全部よく肥大した大形のイチイガシである。目下岡本素治氏にくわしく検討して頂いている。

㋒ドングリ10号ピット（1斗3升の一部），ほとんど全部よく肥大した大形のイチイガシで，殻斗も少数混じえている。

㉛C 9—4第6層のヤブツバキの幼果3個について。

これは直径2㎜程度の不規則球状のもので，かじりとられたようなきず痕と数本のかなり深い裂け目とがあり，表面には噴火孔状あるいはあばた状のいぼが散在しており，奇怪な相貌を呈している。一見虫瘿（昆虫等の寄生によって，植物の一部が肥大し奇異なかたちをとったもの）ではないかと思われたが，横断面をつくってみると，ヤブツバキの未熟果である事が判明した。ツバキ属は，子房が多くは3室である。この標本は果梗も保存されておらず，ツバキ属としては，非常に奇妙な状況である。普通ではこの程度の未熟の状態で落果する事は考えられない。これは動物（恐らくリス？）によって食害されたものと考えられる。そして未熟の状態で落果し乾燥すると，大きな裂け目が生ずるものと思われる。紀淡海峡の友ヶ島において，放し飼いされたタイワンリスに食害されたヤブツバキの未熟果を1974年の4月16日に多数捨ったがその状況は，本遺跡出土のものによく似ている。ただ表面のいぼ状のものは何かよくわからない。この孔は深さ3㎜程果皮中に穿孔している。あるいは昆虫などの食害によるものであろうか。

以上をまとめてみると，出土した種類は次のようである。裸子植物は，イヌガヤ（*Cephalotoxus drupacea* S. etZ.）だけである。被子植物の単子葉類のたしかなものは見当らなかった。双子葉類には以下のものがある。イチイガシ(*Quercus gilva* BLUME)・アカガシ？(*Quercus acuta* THUNB.)・ツブラジイ(*castaeopsis cuspidata* SCHOTTKY)・ムクノキ（*Aphananthe aspera* PLANCH.）・ヤマモモ（*Myrica rubra* S. etZ.）・マルミノヤマゴボウ（*Prytolacca japonica* MAK.）・コブシ（*Maggnolia kabus* DC.）・クスノキ（*Cinnamomum camphora* SIEB.）・ヤマビワ(*Meliosma rigida* S. etZ)・アカメガシワ（*Mallotus japonicus* MUELL. ARG.）・サクラ属（*Prunus* sp.）・スモモ(*Prunus ralicina* LINDL.)・モモ(*Prunus persica* BATSCH.)・カラスザンショウ（*Fagara ailanthoides* S. etZ.）・サンショウ（*Fanthoxylum piperitum* DC.）・ムクロジ？（*Sapindus mukurossi* GAERTN.）・ヤブツバキ（*Camellia japonica* L.）・センダン（*Melia aqedarach* L.）・エビヅル（*ViTis thunbergii* S. etZ.）・ノブドウ(*Ampelopsis brerupedunculata* TRAUTV.)・クロキ(*Symplocos lucida* S. etZ.)

ミミヅバイ（*Symplocos glauca* KOIDZ.）・ハクウンボク（Styrax obassia S.etZ.）・エゴノキ（*Styrax japonica* S.etZ.）・クサギ（*Clerodendran trichotomum* THUNB.）。以上26種類で，やゝ種類数がすくなく，微細な草本の種子が選別の時もれたのではないかとも思える。以上のうちで，イチイガシ・アカガシ？・ツブラジイ・ヤマモモ・クスノキ・ヤマビワ・ヤブツバキ・クロキ・ミミズバイは常緑の照葉樹で，他の落葉樹も，その多くは西南日本暖帯に普通のものである。イチイガシ・アカガシ？・ツブラシイ・ムクノキ・ヤマモモ・スモモ・モモなどは食用としていたものに違いない。特に注目される興味ある事実は，イチイガシの産出状況である。イチイガシの試料をみると，①C９ドングリ３号ピット内・ⓐドングリ７号ピット内・ⓑ及び⑭ドングリ８号ピット内・ⓒドングリ10号ピット内・⑳ドングリ⑪号ピット内と，すべてピット（貯蔵穴）内より出土している。一方その他のドングリ類をみると，アカガシ？は，㊵G９—１—５，G10—１—５，溝内，茶褐色土層より40個が出てをり，ピット内からも出てはいるがごくわずかである（例えば⑳11号ピットよりは２個）。ツブラジイは㊶G９—１—５，G10—１—５，溝内，茶褐色土層より出てをり，ピットよりは見当らない。こうしてみると弥生人は，イチイガシを選択して採集しピットに貯蔵しておった事は，明らかである。しかもこの試料のイチイガシはまれにみる肥大した大形のものであった。イチイガシがドングリ類の中ではアクが少く，生食も出来る事を考えると，これは納得出来る事実である（渡辺誠：縄紋時代の植物食，P.53)。弥生人の生活の一端をしる事ができた。

なお，参考迄に，遺跡近傍の上白水の八幡宮の社叢の樹種を記録しておく。1977年の10月21日に小池史哲氏の御好意によって調査できた。イチイガシ・シイノキ（スダジイ？）・クロガネモチの３種がやゝ個体数が多い。この他，イヌマキ・スギ・ヒノキ・ムクノキ・タブノキ・クスノキ・ヤブニッケイ・サクラ・ウメ・ヒサカキ・モッコク・コバンモチ・カキ・エゴノキがある。蔓性木本には，オゝイタビ・キヅタ・テイカカズラがあった。これらの樹種は・弥生時代のこの近傍の自然林の構成を何らかの程度反映しているのであり，従ってまた，出土種子類とも若干類似しているのである。

図版説明（図版87）

1　㊹モモの核。先端部がケツ歯類にかじられた珍らしい例。（×１）

2　同上を上よりみた状況。

3　㊹モモの核。キール側をかじられた例。（×１）　4　同上を側面よりみた状況。

5　㊹モモの核。キールのない側をかじられた例。（×１）

6　同上を側面よりみた状況。

7　㊹モモの核。やゝ大きく球状のもの。これが普通の形である。（×１）

8　同上を，キール側よりみた状況。

9　㊹モモの核。やゝ小形のもの。（×１）　10　同上をキール側よりみた状況。

11　㊹モモの核。やゝ細長いもの。（×１）　12　同上をキール側よりみた状況。

13　モモの核。縦断面。（×１）

14　ミミヅバイの種子。先端部の一部が欠損している。（×1.5）

15　㊽クロキの種子。上面よりみた状況。（×1.5）　6　同上を側面よりみた状況。

17　同上を，下面よりみた状況。三宝になっている。

18　クスノキの種子。（×1.5）　19　イチイガシ。（×１）

20　ヤブツバキのリス？に食害され落果した未熟果。太い亀裂がある。（×１）

21　同上縦断面。未熟の種子がみえる。

22　ヤブツバキのリス？に食害され落果した未熟果。下面。（×１）　23　同上の上面。

24　同上の側面。　25同上の横断面。果皮の構造，三宝である事などより同定した。

26　友ケ島にて捨ったタイワンリスに食害され落果したヤブツバキの未熟果の一例。太い亀裂が走っている。20・22・23・24との比較の為かかげた。（×１）

27　同上の側面。　28　同上の上面。　（粉川昭平）

(3)　門田遺跡谷地区出土の木材片の樹種名について

門田遺跡からは，木製品や加工木材のほかにも相当多量に出土した木材片があったが，これら木材の樹種名がすべて同定できるならば，当時の植物の生態がある程度理解され得たであろうけれども，残念ながら髄を含む小枝の類が多く，筆者らの専攻する木材組織学の点からは同定できないものが可なりあった。

湯納遺跡出土材と同様に，クスノキ，シイノキ，カシなどの暖帯広葉樹やクリなどの材も多量に出土しているが，ヒノキ或はヒノキ属，イヌガヤ，アスナロ，スギ，モミ属などの針葉樹材が出土していることは，当時には九州地方にもこれら針葉樹の天然林があったことが想像され，とくにアスナロの存在は生態的に面白い。ただ，弥生後期にこれらの針葉樹林がどの様に伐採，搬出，加工されたものか多くの疑問が生ずる。もちろん，これらは大径材であっただろうと想像されるし，鉄製木工具の発達によるところが多くあるだろう。

出土材中，同定可能であろうと思われるものを選び出し，何回も失敗を繰りかえしながら調査した結果は表９の通りである。なお，参考として顕微鏡写真を示す（図版88～96）。この写真はうまく薄切片がとれたものについての低倍率写真であるが，同定に際しては高倍率でしか特徴がつかめないものが多いので，中には高倍率では観察不能のものもあり，また細胞壁の劣化のため観察不可能のものもあった。

なお，表９中第６層とあるのは，弥生時代終～古墳時代始，第５層は，古墳時代～中世までの遺物を含む

表 9　谷地区出土材一覧表

図版番号	資料表示記号		樹種名 和名	樹種名 学名	整理番号
1	F 9－21　5層下部	平　鍬	アカガシ	Cyclobalanopsis acuta	1
2	C 9－22　6層		シラカシ	Cyclobalanopsis myrsinaefolia	2
3	D 9－3　6層	又　鍬	アラカシ	Cyclobalanopsis glauca	3
4	C 9－24　6層	又　鍬	クリ	Castanea crenata	4
	C 9－7　6層		〃	〃	23
	ドングリ　8号竪穴		〃	〃	25
5	ドングリ　3号竪穴		クスノキ	Cinnamomum camphora	8
	C 9－7　6層	竪　臼	〃	〃	29
6	B 9－2・3　6層	加工板材	イスノキ	Distylium racemosum	9
7	C 9－22　6層	杭	チシヤノキ属	Ehretia spp.	10
	ドングリ　6号竪穴	未加工材	〃	〃	30
8	ドングリ　10号竪穴	A・B	スダジイ	Castanopsis cuspidata var. Sieboldii	18
9	ドングリ　3号竪穴	B	クリ属	Castanea spp.	16B
10	ドングリ　7号竪穴		シイノキ属	Castanopsis spp.	14
	〃		〃	〃	19
11	ドングリ　3号竪穴		クリ属	Castanea spp.	20
12	ドングリ　8号竪穴		クスノキ科	Lauraceae	22
13	ドングリ　6号竪穴	脚付槽	クリ属	Castanea spp.	28
14	ドングリ　4号竪穴	枝	不明	環孔材（広葉樹）	11
			〃	環孔材（広葉樹）	17
15	ドングリ　8号竪穴	A・B	〃	散孔材（広葉樹）	12
16	ドングリ　1号竪穴	A	〃	〃	13A
17	ドングリ　10号竪穴		〃	〃	15
18	ドングリ　3号竪穴	A	〃	〃	16A
19	〃		〃	〃	26
21	E 9－3・4　6層	加工板材	ヒノキ属	Chamaecyparis spp.	5
22	C 9－3　5層下部	〃	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa	6
23	C 9－13　5層下部	曲　物	ヒノキ属	Chamaecyparis spp.	7
24	ドングリ　1号竪穴	B	モミ属	Abies spp.	13B
25	C 9－2　6層		イヌガヤ	Cephalotaxus Harringtonia	21
26	C 9－16　6層		アスナロ	Thujopsis delabrata	24
27	ドングリ　9号竪穴		スギ	Cryptomeria japonica	27

弥生時代終りから古墳時代始めにかけて，平鍬，又鍬が，アラカシ，シラカシ，アカガシ，クリなどの堅い材質のものを使用したことは，既に農耕文化の発展にともない経験から得られた知識が，当時既に確立していたものと思われる。

また，同時代の脚付槽がクリであることは，クリの腐れ難い性質を利用したものと考えられるが，臼がクスノキであることは，日本書紀の舟材とおなじく，大材をくりぬくというおなじ考え方に，もとづくものであろうか？。古墳時代に曲物としてヒノキが使用されていることは，ヒノキを割り材として使用するという知識とともに，ヒノキの材質についても既に熟知されていたと考えられる。

顕微鏡用プレパラートの作製にあたっては西村澄子さん，池辺信子さんのお世話になった。感謝いたします。

（松本昺・林弘也）

第107図　木製竪臼出土状態

Ⅷ おわりに

門田遺跡の調査は，予備調査も含め４年次にわたる長い調査であった。その結果は，先土器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・さらには歴史時代（奈良～鎌倉・江戸）にわたり連綿として形成された濃密な大複合遺跡であることが判った。その多くの成果は，すでに５分冊（山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第１・３・６・７・９集）にわたって報告してきた。今回の谷地区の報告は本遺跡の最終報告にあたるものである。

谷地区の調査は，当初弥生時代の水田遺構の存在を確認する目的で実施された。だが，その結果はすでに記したごとく自然排水路的な性格をもつ大溝や，辻田地区からつづくＶ字構，ドングリ貯蔵穴等の生活関係遺構が発見されただけで，生産関係の遺構は存在しなかった。

しかし，舌状につきでた両台地に挟まれた狭長な谷地区の調査は，両台地上に形成された集落遺構とのかかわりの中で欠くことのできない成果を生み出したといえる。とりわけ，湿潤な環境の中で保存されてきた多くの植物遺存体やドングリを貯蔵した竪穴の発見は，当時の生活環境を復原する上でも，また，食生活の一端を知る上でも重要な調査であった。量的にはさほど多くはないが，平鍬・又鍬・竪臼・脚付槽・杓子等の木製生産用具・再生産用具・生活用具の発見も貴重である。

さらに，先土器・縄文・弥生時代の多量の遺物は，単に遺構から分離した資料として資料的価値を低く考えがちであった我々を否定するものが多かった。流れこんだ状態で多量に検出された先土器時代の遺物の発見が一つの手がかりとなり，Ａ11・Ｂ11地区で残存したその包含層を確認できたこともその一つである。

また，資料的にもまだ極めて少ない爪形文土器２個体分が発見されたことは貴重であった。特に，底部が発見され全体の器形がほぼ判ったことは初めてであり重要な資料といえる。

弥生時代遺物で興味深い点は，中期後半の甕棺（第48図）である。この甕棺は丁寧に打ち欠いた口縁部付近の資料で，全く胴部を欠失するものである。これは甕棺埋葬によくみられる口縁打ち欠きの行為に関連する資料であろう。両台地には同時期の甕棺墓地が形成されている。埋葬時の合せ甕する段階での打ち欠き行為が墓地で行われ，打ち欠かれた口縁部を谷地区に廃棄した結果を示す好例であろう。しかし，この資料が直接つながる甕棺墓は両台地では検出されていないが，両墓地ともかなり上面が削平されていることを考えると，この資料に接合する甕棺が存在していた可能性は高いといえよう。

また，未製品・半未製品・製品の製作工程を知りうる石庖丁の発見も，本遺跡で石庖丁が生産されていたことを示す好例である。この石庖丁は形態的特徴から中期に属するタイプで，この時期には，すでに著名な立岩遺跡で大量に輝緑凝灰岩製石庖丁を生産し，各地に広範に供給していたことは良く知られている事実である。しかし，本遺跡で出土した石庖丁は総数79点あり，そのうち立岩遺跡製石庖丁（輝緑凝灰岩製）は3点と極めて少ない。この結果は，本遺跡で石庖丁生産が行われていたことを反証するものであろう。だが，おそらく，未製品・製品の量から考え，その生産は集落内自給を満たす程度の小規模な生産であったと思われる。

後期終末の土器に興味深い資料がある。第51図78～82の壺と，第68図221の器台である。いわゆる櫛目波状文で飾った土器群は，東九州・瀬戸内・畿内を結ぶ文化交流の関係の中から化成された東九州的土器である。胎土は他の土器とさほど変らないが，色調を明らかに異にする土器で，淡青灰色ともいえる色をしている。おそらく移入された土器といえるだろう。この時期の東九州との交流関係を知る好資料である。

また，第63図180～184の脚部を欠損する高杯についてであるが，杯部外面に著しい煤の付着と二次焼成を強く受けた痕跡を顕著に残す例である。これは脚部のとれた杯部を煮沸具（鍋）として再利用していることを示すもので，弥生人の生活の知恵が窺われる。使い捨ての現代人にとって学ぶべきことである。

この他にも多くの興味深い問題はあるが，充分な検討を経ていないので将来にゆずりたい。

次に，大溝Ⅰの北側縁辺りから発見された弥生時代終末のドングリを貯蔵した竪穴について若干触れておきたい。これまでドングリを貯蔵した竪穴はその全てが縄文時代に属するもので，今回の発見は最も新しい事例といえる貴重なものである。

ドングリ貯蔵穴について

検出された貯蔵穴は11基で，大きくA・Bの二群に分れる。谷頭地区の1～6号，谷中央部の7～11号の一群である。出土土器からみてほぼ同時期の弥生後期終末といえるもので，近接してはいるが竪穴間での切り合い関係もなく，さほど時間を経ることなく形成された短期間の遺構のようである。

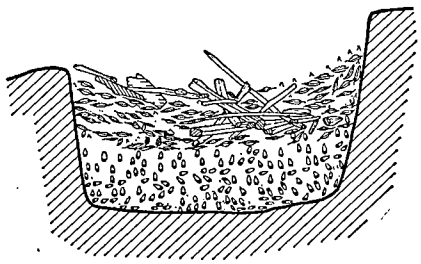
竪穴の構造については，A群のものが全体に浅く，B群のものが深いという違いはあるが，A群の遺構が削平された可能性もあり一概に比較することは困難であろう。残りの良いA群の竪穴をみると，その規模にも大小がある。11号のような長径92cm×短径85cm，深さ約60cmの小型のものと，8号のような長径2.50m×短径1.35m，深さ1.20mを測る大型のものがある。平面形には円形のもの，楕円形ないしは長方形を呈するものがあるが，全体として楕円形が多い。

貯蔵の形態については残りの良い8号例と10号例をみてみたい。

5斗1升1合と多量のイチイガシが貯蔵されていた10号例は(第86図10)は，下層にイチイガシがつまった層があり，その上に木の葉を敷きつめた層，そしてその上に雑然と縦横に組んだ

木組がのっている。その木組は中央部が落ちこんだような状態で，本来的には竪穴の上面に覆われていた施設であることが判る。

8号例（第82図）は，10号例と異なり，底面にはイチイガシを全く含まない灰褐色砂質層が約8cm堆積して，イチイガシはその上から検出された。10号例が底面からつまっていた状態と異つている。このような例は7号例にも同様にいえる。その上は木の葉の層→井桁状に組んだ木組が覆っている。その井桁状の木組は，10号例の雑然としたものと比べ，竪穴内に整然と組まれたものである。10号例が竪穴の上面に組まれたのとは若干様相を異にしているようである。しかし，基本的にはイチイガシ→木の葉・木組の貯端形態は変らない（第108図）。



第108図　ドングリ貯蔵穴断面模式図

蓋の施設と思われる木組の木材には，樹種名の判るものでクリ，クリ属，スダジイ・シイノキ属・クスノキ・クスノキ科・チシャノキ属・モミ属等とさまざまであり，周辺にある手頃な材を切ってきて使用しているのであろう。しかしその中にイチイガシの材が全く使用されていないことは，また，大溝Ⅰ内の流木等の同定をしていただいた中にもイチイガシの材が発見されないことは，少なくともイチイガシの森林が門田遺跡の近隣にはなく，周辺の山から採集してきたことを物語るものかもしれない。その意味ではに逆に，蓋材として使用された木々がこの門田遺跡近隣に繁茂していたことになる。しかし，大溝内6層の花粉分析の結果では約50％の高い出現率をカシ属が示しているので一概にはいえないことだろう。また，谷地区には多くの木々が繁茂していたようで，かなりの大木になると思われる根が大溝の縁辺りから発見されている。同定は得ていないが，Ⅶ—1章で安田氏も指摘されているように低湿な水分の多い土壌の安定した所に生育するというムクノキであった可能性は高い。

イチイガシ→木の葉→木組の蓋の貯蔵法（第108図）は，縄文時代の佐賀県西有田町坂の下遺跡（註1）や，山口県平生町岩田遺跡（註2）等の例と共通している。いわゆる塊状貯蔵法（註3）等と呼ばれているものである。しかし，岡山県山陽町南方前池遺跡（註4）例のように木の実と木の葉を交互につめる交互貯蔵法（註5）等といわれる例はみられない。

また，残りのよい8号・10号例では，岩田遺跡例などにみられる木組の上に石を置き蓋をおさえていたといわれる石は検出されなかった。だが，1号・2号・7号例の竪穴内から検出された河原石がそれにあたるものかもしれない。その意味では縄文時代以来，その貯蔵方法は何等変ってないのである。調査時にも明らかであったように谷頭には湧水点があり，常に水分の豊富な水漬けの状態で生貯蔵されていた事実も共通する点である。

貯蔵されていた木の実については，Ⅶ—2章で粉川氏が指摘されているごとく純粋な意味で

表 10　ドングリ貯蔵穴出土の種子・木材一覧表

種子の（　）内は個数を示す。

No.	イチイガシ	その他の種子	蓋として使用された木材	出土木器
1	若干		モミ属・散孔材（広葉樹）	
2.	若干			
3	593 個	ハクウンボク(1)	クスノキ・クリ属散孔材(広葉樹)	
4	若干		環孔材(広葉樹)	
5	幼果(2)	マルミノヤマゴボウ(1)・カラスザンショウ(2)・ノブドウ(11)・クサギ(2)・アカメガシワ(10)・サンショウ(1)・エビヅル(8)・エゴノキ(306)		
6	若干	ヤブツバキ(4)	チシヤノキ属	クリ属（脚付槽）
7	6升4合	ムクノキ(2)・エゴノキ(1)・エビヅル(2)・ムクロジ？幼果(2)・マルミノヤマゴボウ(1)・ヤマビワ(1)イネ科植物の根？	シイノキ属	
8	4升8合	サクラの類(1)・クスノキ(10)・モモ(1)	散孔材(広葉樹)・クスノキ科・クリ	
9	若干			スギ(板材)
10	5斗1升1合		散孔材(広葉樹)・スダジイ	
11	20 個	アカガシ？(2)・樹皮		

※イチイガシの項で、若干と記したものは同定を受けたものでなく調査時の知見である。

イチイガシを貯蔵した施設であることは明らかで，そのイチイガシはまれにみる肥大した大型のものであるといわれている。他にも多くの種類の種子も検出されているがその量はわずかである。

イチイガシは野生堅果類の中ではアクが少なく，生食も出来るといわれているものである。コナラ・ミズナラ・クヌギ・アラカシ・アカガシ等の野生堅果類はアク抜きをしなければ食べられないとされているもので，弥生人がイチイガシ類を意識的に選んだ理由がわかる。これら野生堅果類の調理方法については，渡辺誠氏の一連のすぐれた研究がある（註6）。それによれば，民俗例などに多くみられるジザイ餅などといってダンゴ状にまるめて，味噌汁などに入れてスイトン風にして食べたり，薄くして焼いたり，キナコ・豆の粉・砂糖等をつけて食べたり，また，米の粉とまぜて作るなど多くの民俗事例を提示され論究されている。おそらく，弥生人も大差ない食べ方をしていたと考えても大過なかろう。

しかし，この事実をもって縄文人と同様に，単に弥生人の食生活の一端が明らかになったとするには多くの問題を残すものと思われる。本遺跡は弥生時代前期以来，ほぼ連続して集落が形成されていることはすでに報告してきた通りである。だが，ドングリ貯蔵穴の形成された時期は，弥生後期終末という極めて限られた短時期のものである。その前後の時期にはこの様な貯蔵穴は存在しないからである。従ってこれを弥生時代一般の食生活を反映したもやと考えるには多くの困難があろう。むしろ，特殊な情況下におかれた事態を想定する必要を感じるのである。

その評価は，いわゆる我々がバフン層と呼称した後期終末の層と考える木の葉・木の実・流木等が多量に検出された腐植土層（6層）の形成された意味にかかわる問題である。この層は明らかに竪穴内の堆積土にみられない土層であり，竪穴形成時の前段階の層をなすものであることは事実である。この多量の流木・木の葉・幼果を含む多くの植物遺存体の存在は，急激な一時期的堆積を物語るようである。

このバフン層の形成原因を，台風等の天災が急激にこの地域一帯を襲い，多くの木々が折れたり，倒れたりしてこの谷地区に多量に流れ込んだと考えたらどうであろうか。従って，収穫をひかえた稲作が壊滅的な打撃を受け，大凶荒をこの地域一帯にもたらしてしまった。その時期が，後期終末のある時期，ドングリ貯蔵穴が形成される直前の時期と考えるのである。この稲作の凶荒は，弥生人の生活を大きく脅かすこととなり，そういった飢饉の状況の中で，ドングリ貯蔵穴が形成されたものであろう。いわゆる救慌食として弥生人の生活を維持してきたものと思われる。初期稲作段階の弥生時代においては，このような天災による凶荒が，その規模には大小あろうが何回となく襲った可能性がある。従って，縄文時代以来の伝統的な，ほぼ同様の貯蔵方法が後期終末の時期にとらわれたとしても納得できるものかもしれない。しかし，このドングリ貯蔵穴もこの時期をもって廃絶してしまうのである。

谷地区にみられるバフン層の形成は，近接する辻田遺跡の谷部にもみられる（註7）。多くの木々・種子・木器等が流された状態で堆積している。その時期も後期終末である。また，このような状況は春日市大字小倉・大谷遺跡（註8）の谷部，ヲビラヲ遺跡（註9）の谷部でもみられる。やはり，後期終末の時期である。とりわけヲビラヲ遺跡では幼果のついた大木が倒れた状態で発見されていることは，この時期に襲った台風等の天災がかなり大規模であったことを物語っているようである。

後期終末のある時期に，この地域一帯を台風等の天災が襲ったことを提唱したいのである。このような仮説には，まだ多くの問題が残されているが，今後の調査に期待すると同時に，自然科学者との連繋の中で明らかにしていかなければならないと思う。（井上）

註1　大国弘編「坂の下遺跡の研究」「佐賀県立博物館調査研究書」2　1975
2　潮見浩他「岩田遺跡」　山口県平生町教育委員会　1974
3　堀越正行「小竪穴考(2)」『史館』6　1976
4　南方前池遺跡調査団「岡山県山陽町南方前池遺跡」「私たちの考古学」7　1969
5　註3に同じ
6　渡辺誠「縄文時代のドングリ」「古代文化」25—4　1973,「ドングリのアク抜き—野生堅果類利用技術伝承に関する事例研究1」『平安博物館紀要』5　1974,『縄文時代の植物食』雄山閣　1975
7　井上裕弘・木下修・小池史哲他「辻田遺跡の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』12　福岡県教育委員会　1979
8　春日市教育委員会丸山康晴氏の御教示による。
9　註8に同じ

図　　版

1　伐採後の門田遺跡全景航空写真(西から)　1973.9

2　谷地区全景航空写真(東から)

図版 2

上　谷地区の予備調査
全景（昭和47年度）

下　谷　開部で検出された
大溝Ⅰ（昭和47年度）

1　G9区の大溝Ⅰ内流木出土状況1（予備調査）

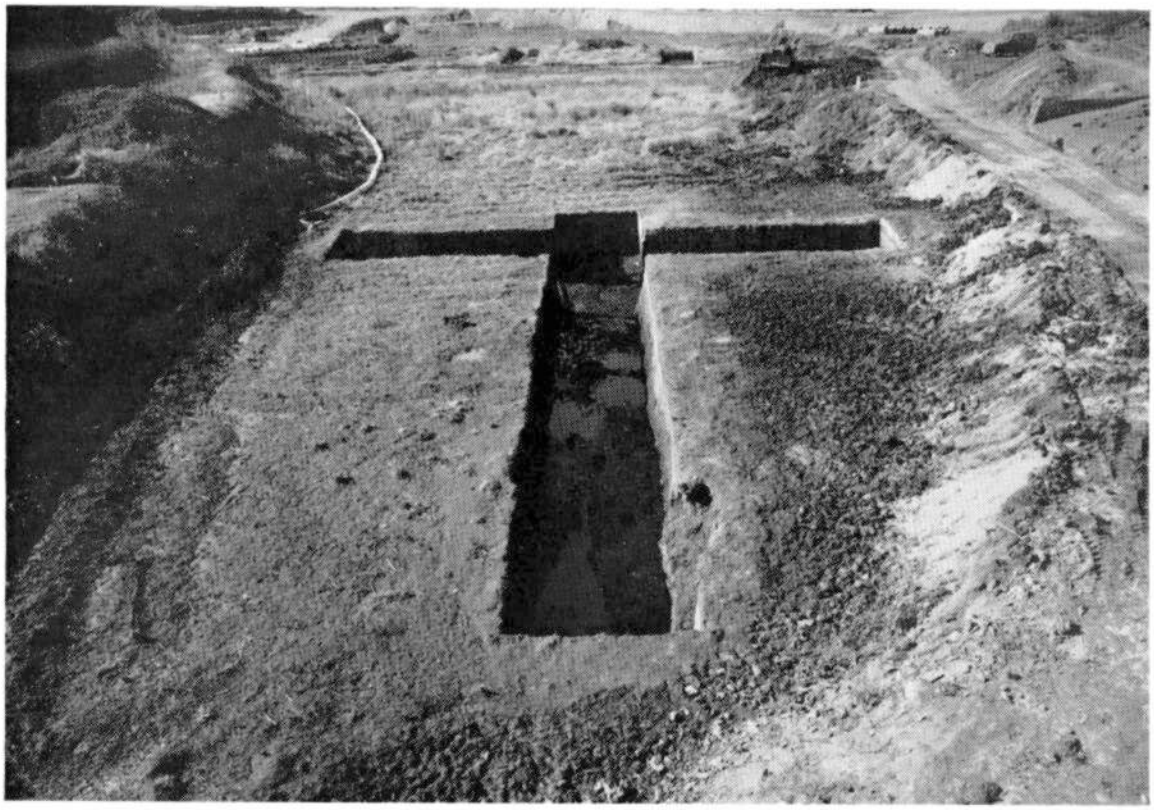
2　G9区の大溝Ⅰ内流木出土状況2（予備調査）

1　G9区の大溝Ⅰ内流木出土状況3（予備調査）

2　夜臼式土器出土状態

1　G9 区東西トレンチ全景(予備調査)

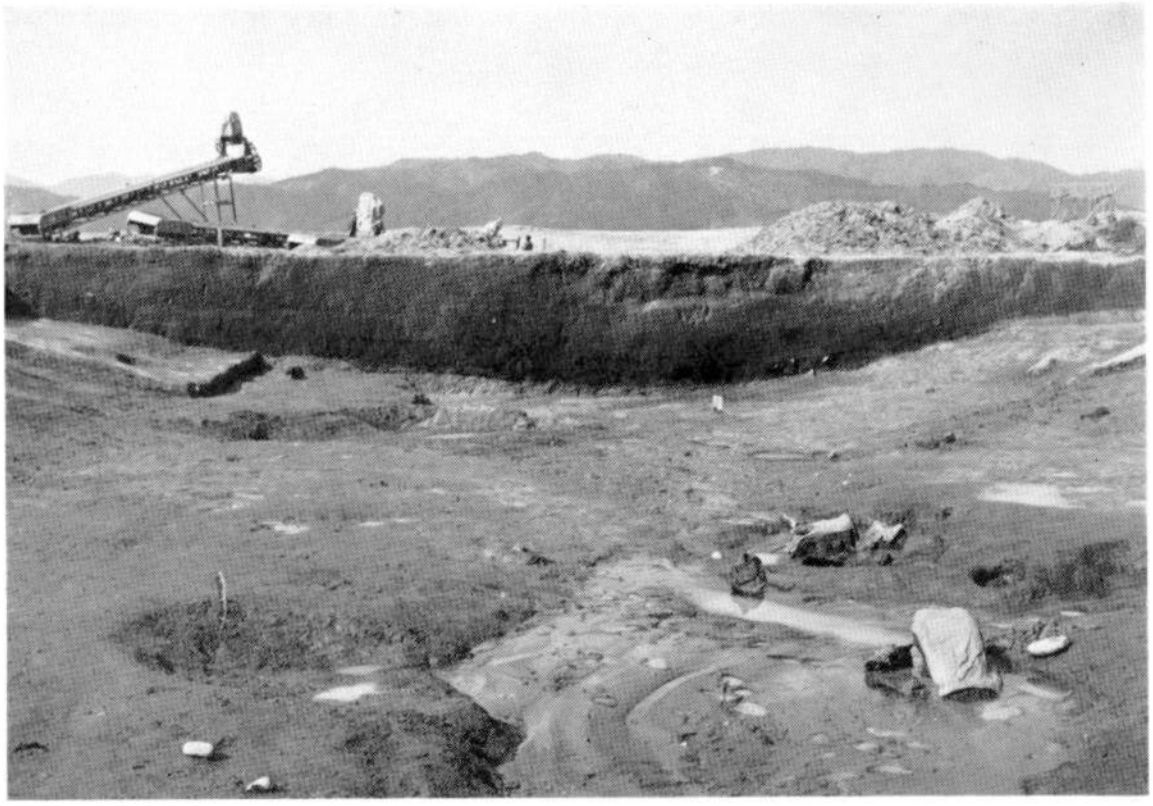
2　G10区で屈曲する大溝 I (予備調査)



1　谷頭地区トレンチ全景(東から)

2　谷中央部・開口部トレンチ全景(西から)

図版 8



1　D9区西壁土層断面全景

2　D9区西壁土層断面近景

1　谷頭調査地区全景（南から）

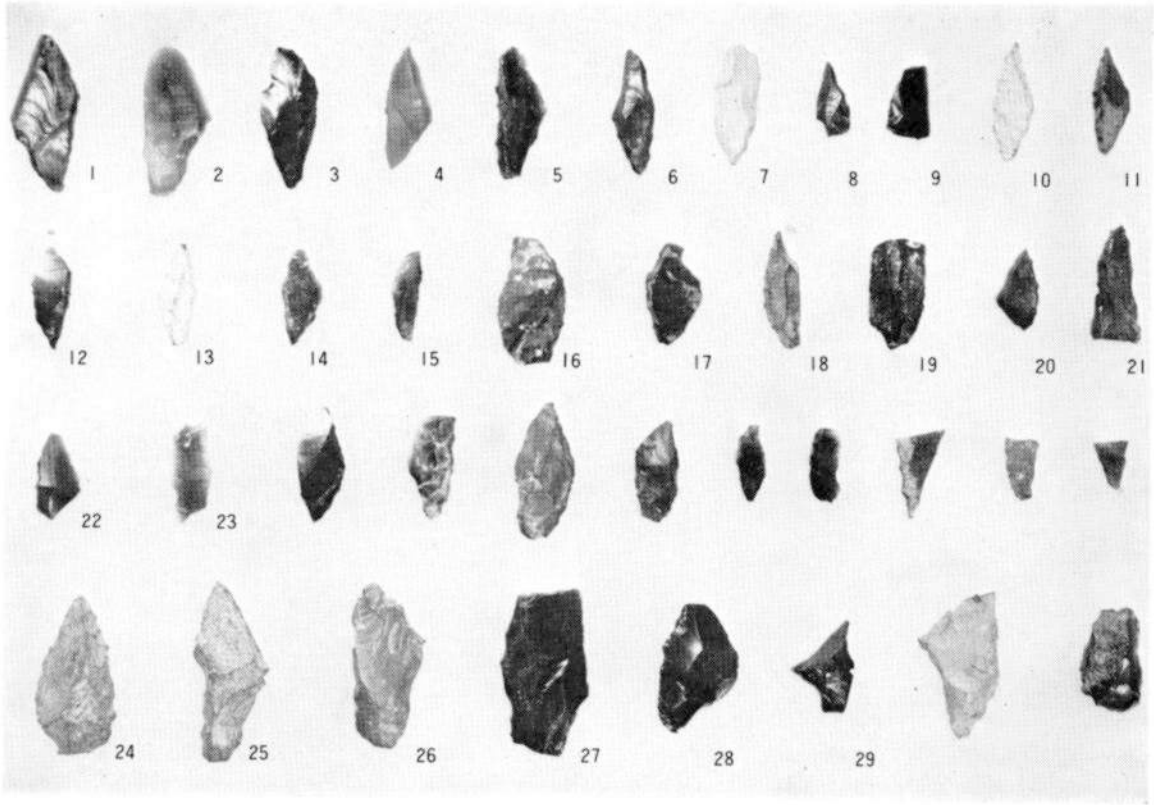
2　谷頭調査地区全景（西から）

1　谷開口部調査地区全景(南から)

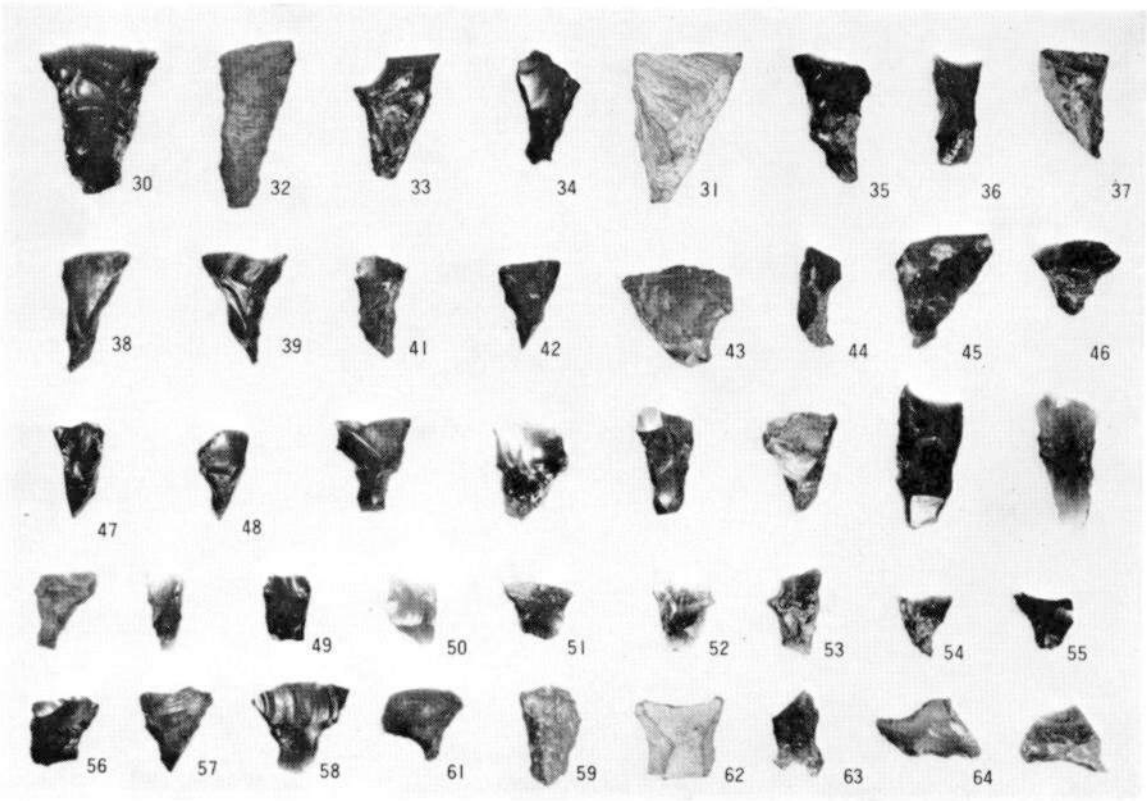
2　谷開口部調査地区全景(北から)

1　谷中央部調査地区全景(西から)

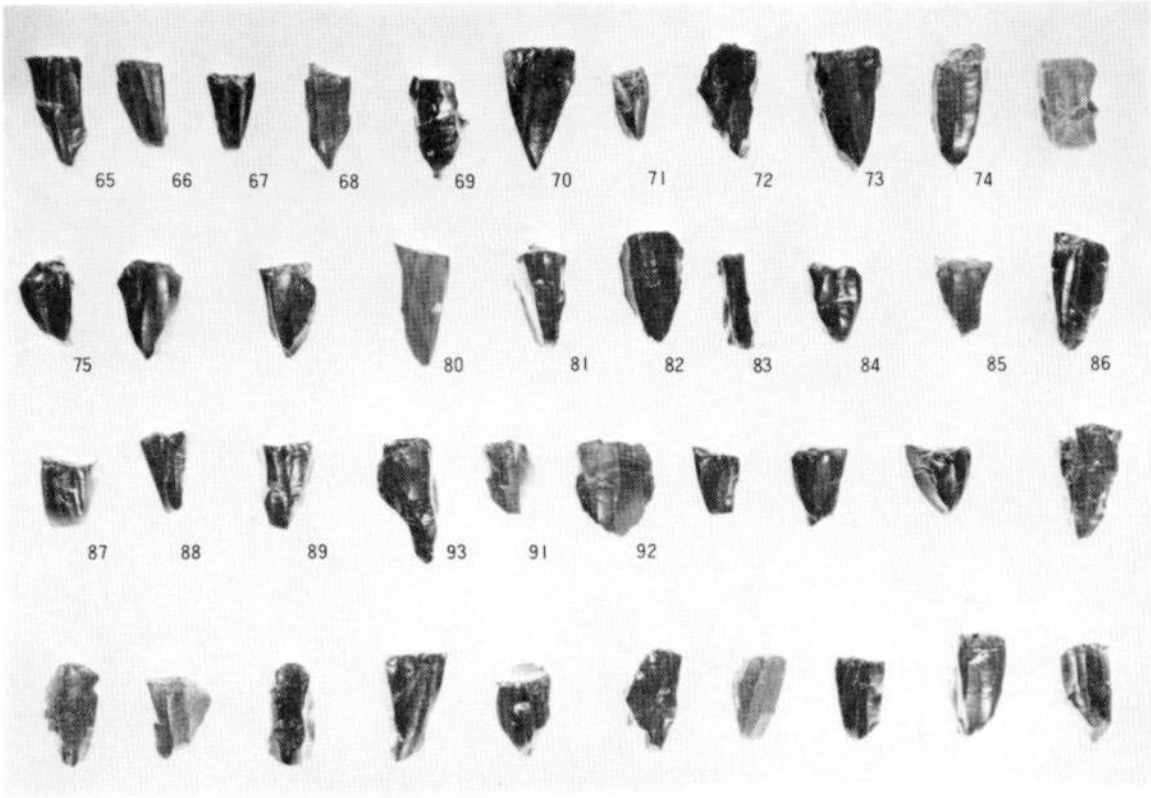
2　谷中央部で検出された大溝Ⅰ(東から)



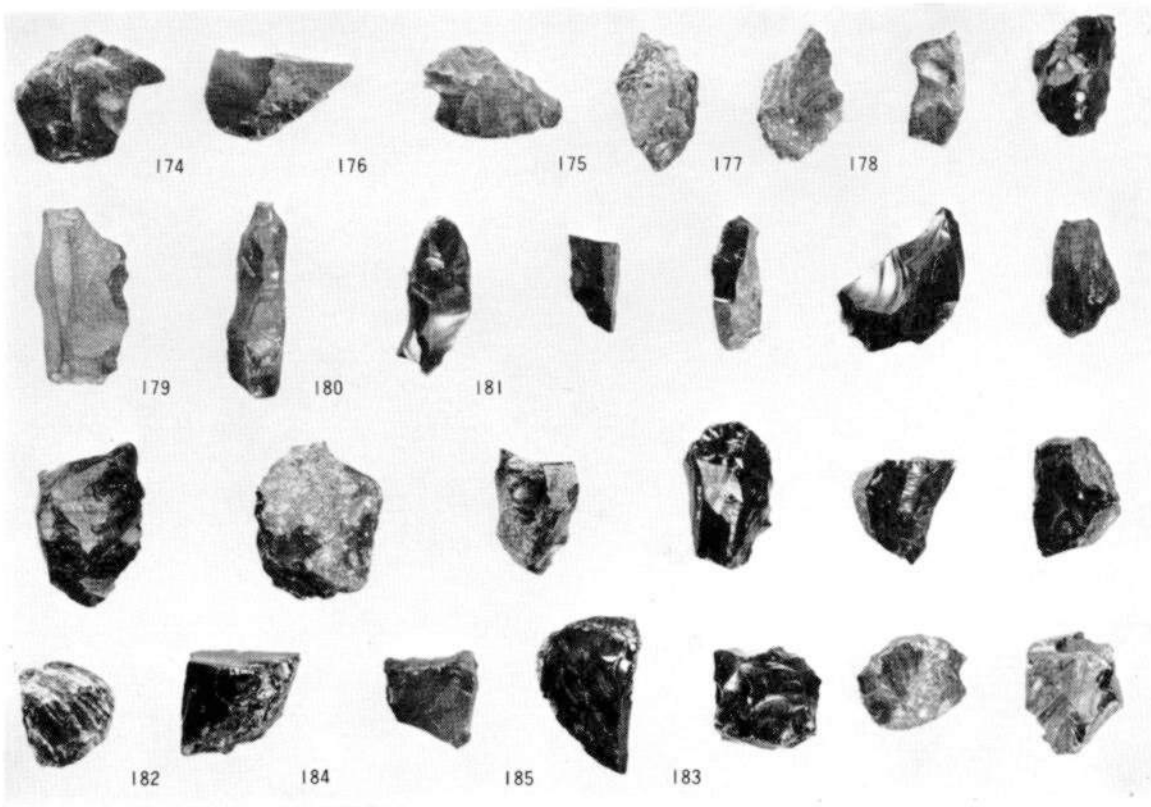
1　出土ナイフ形石器・尖頭状石器(½)



2　出土台形様石器・台形石器(½)

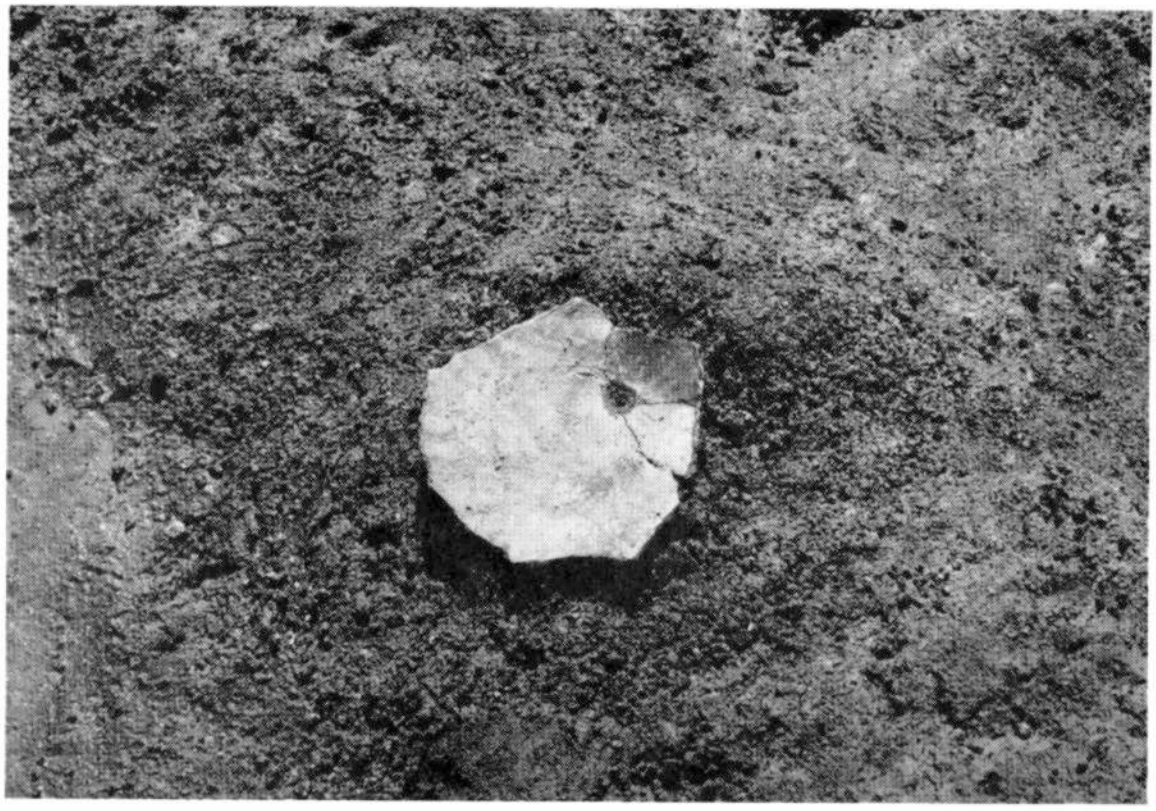


1　出土細石刃核(½)



2　出土掻器・彫器・石核(½)

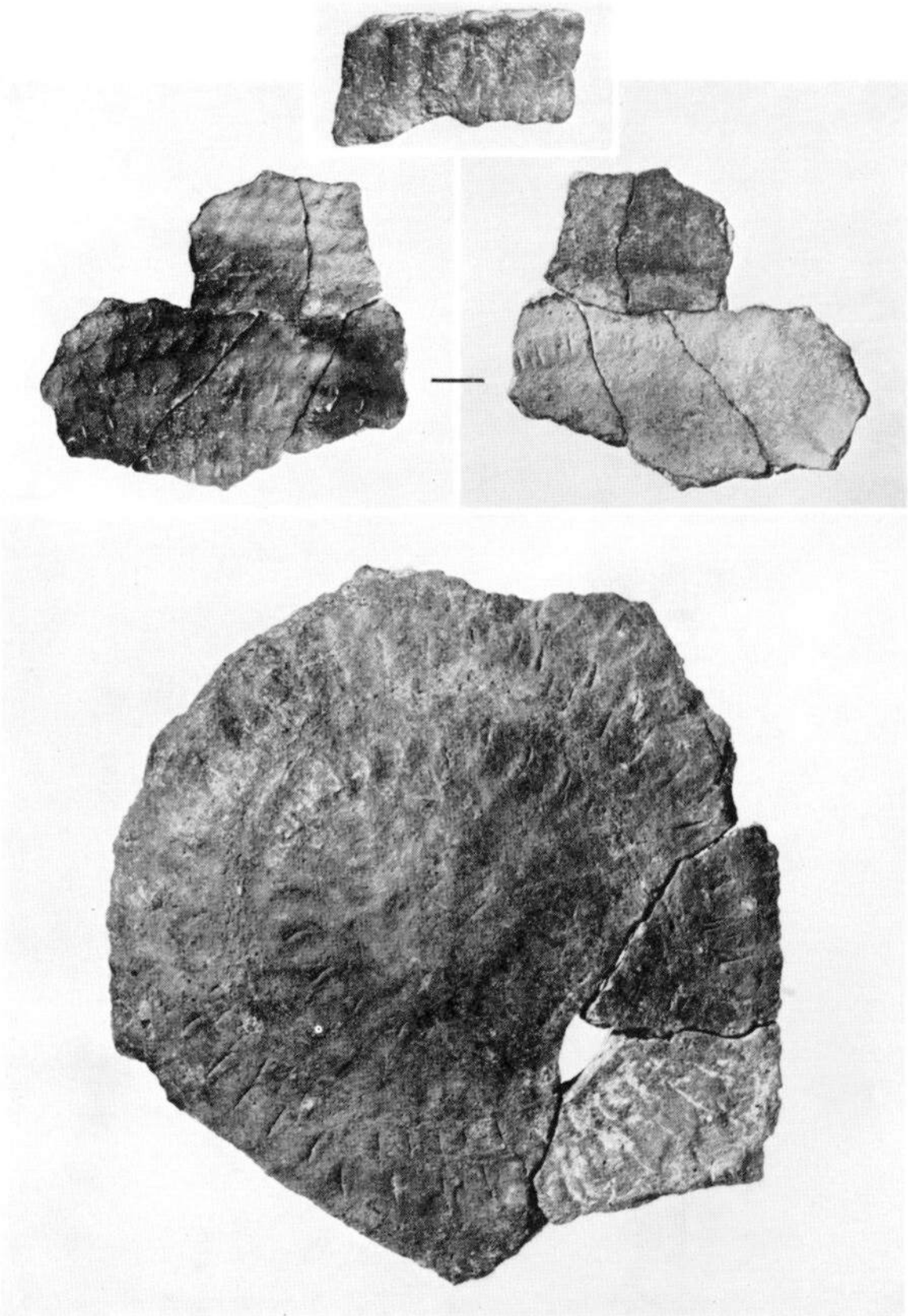
1　爪形文土器出土状態



2　爪形文土器底部出土状態

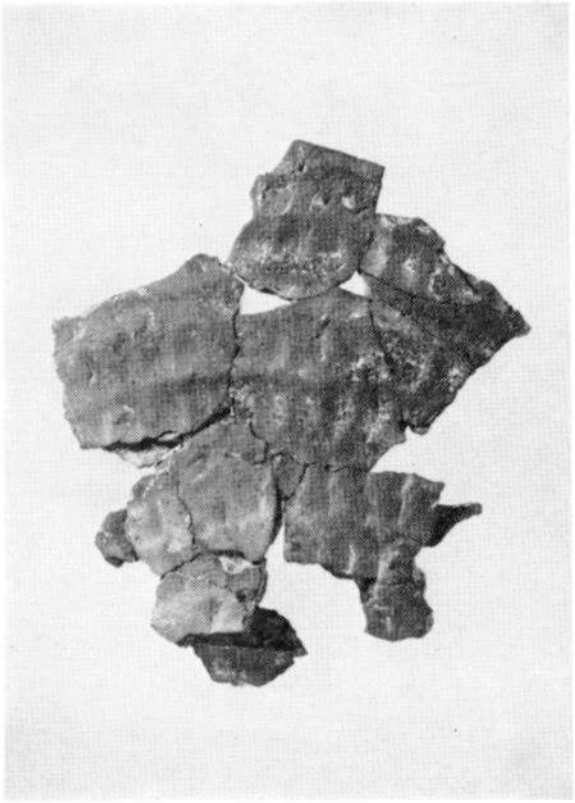
1 爪 形 文 土 器

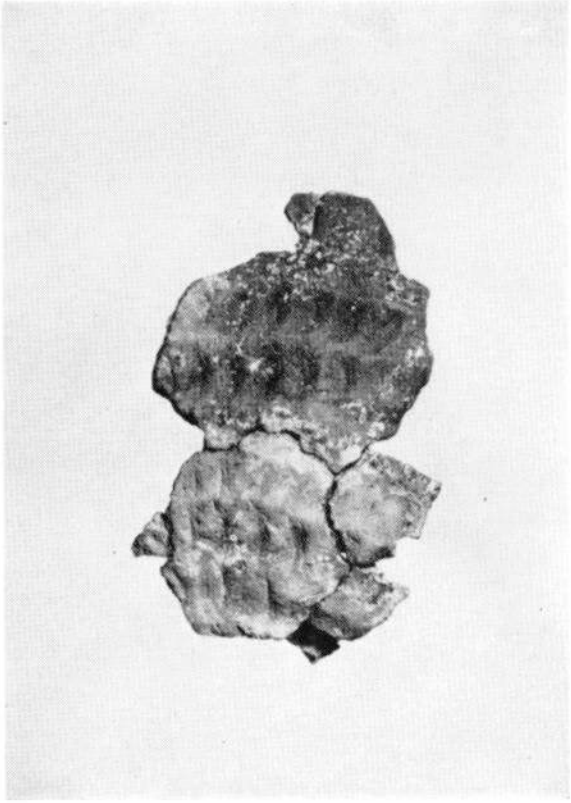
2 爪形文土器1(½)



爪形文土器 1．口縁部・胴部(½)，底部(⅓)

1　爪形文土器 2（½）

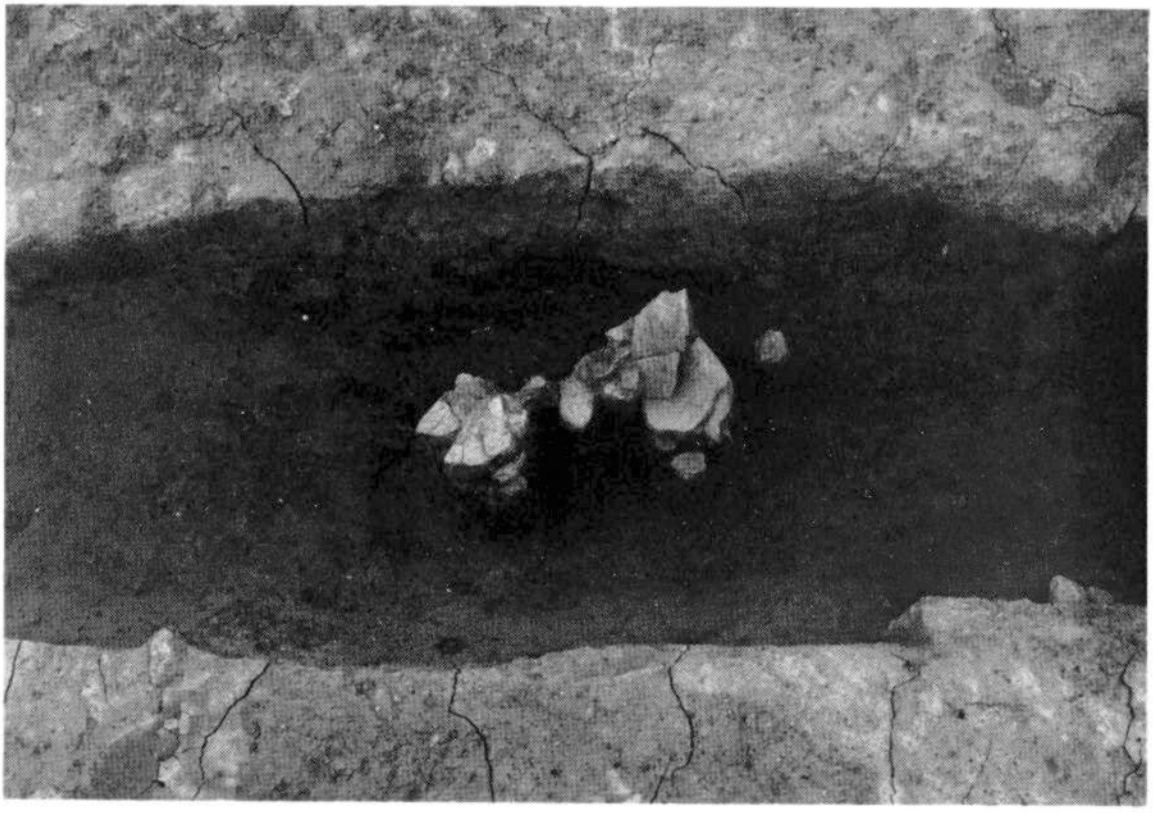




2　爪形文土器 2　胴部

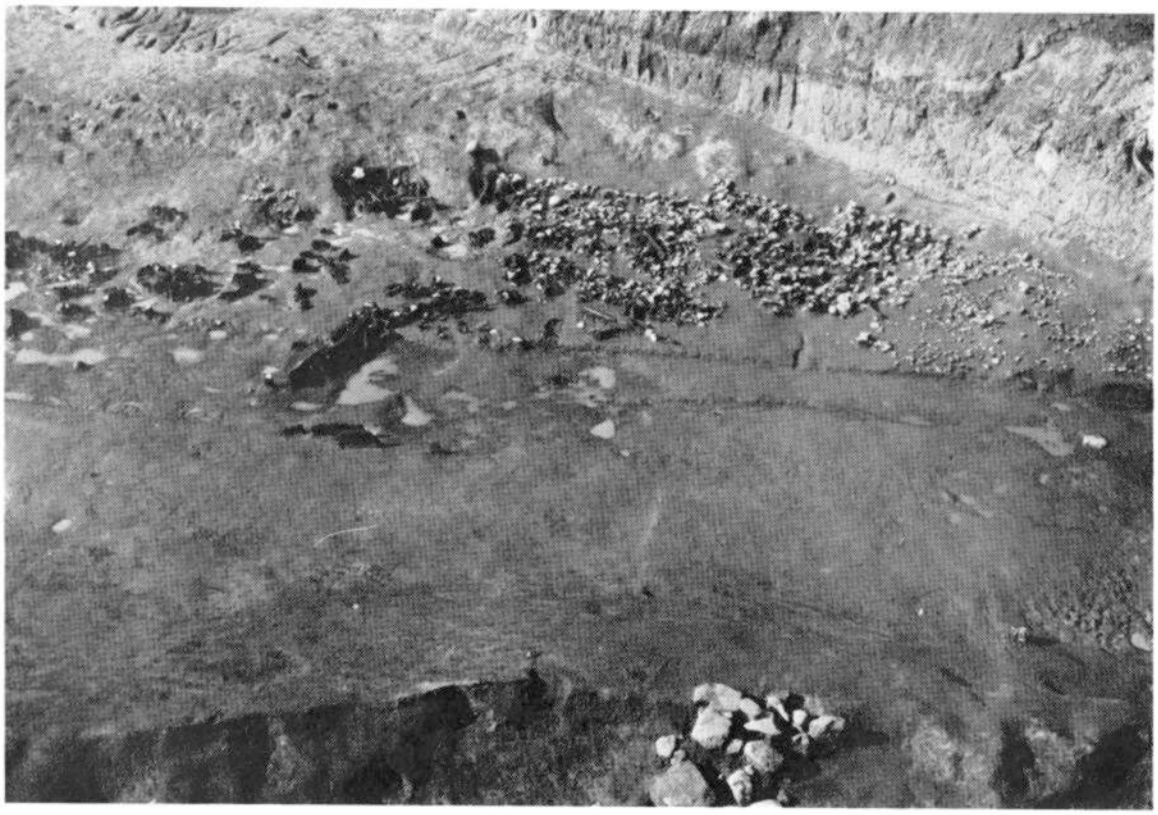
上　V字溝全景(北から)

下　V字溝内土器出土状態



1　谷頭調査地区航空写真(南から)

2　谷頭調査地区航空写真(東から)



1　谷頭地区の大溝Ⅰ内土器・流木出土状況

2　谷頭地区大溝Ⅰ内土器集積状態1

1　谷頭地区大溝Ⅰ内土器集積状態2

2　谷頭地区大溝Ⅰ内土器集積状態3

1　谷頭地区大溝Ⅰ内土器・流木出土状態

2　谷頭地区大溝Ⅰ内土器・木器・流木出土状態

1　谷中央部調査区全景(東から)

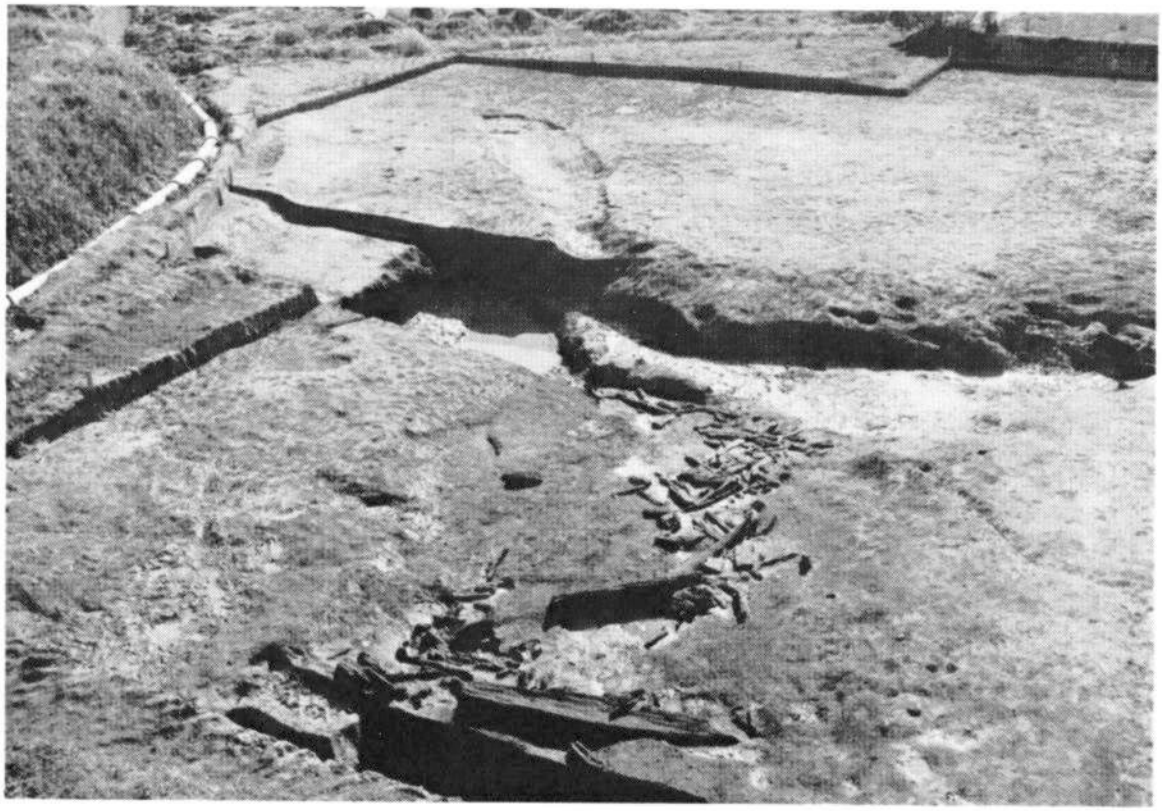
2　谷中央部で検出された大溝1

1　谷中央部大溝Ⅰ内土器出土状態 1

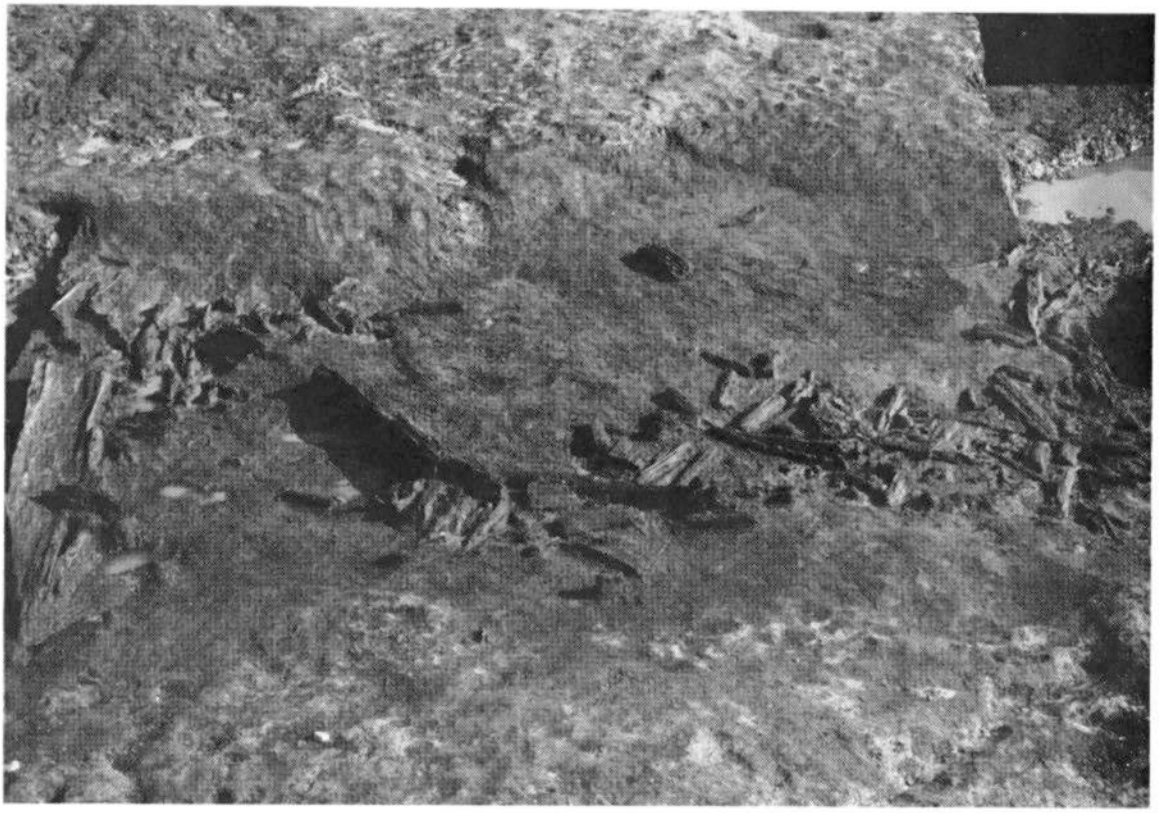
2　谷中央部大溝Ⅰ内土器出土状態 2

1　谷中央部大溝Ⅰ内土器出土状態3

2　谷中央部で検出された大溝Ⅱと土器出土状態



1　谷開口部(G10区)大溝Ⅰと流木出土状態



2　大溝Ⅰ内流木出土状態

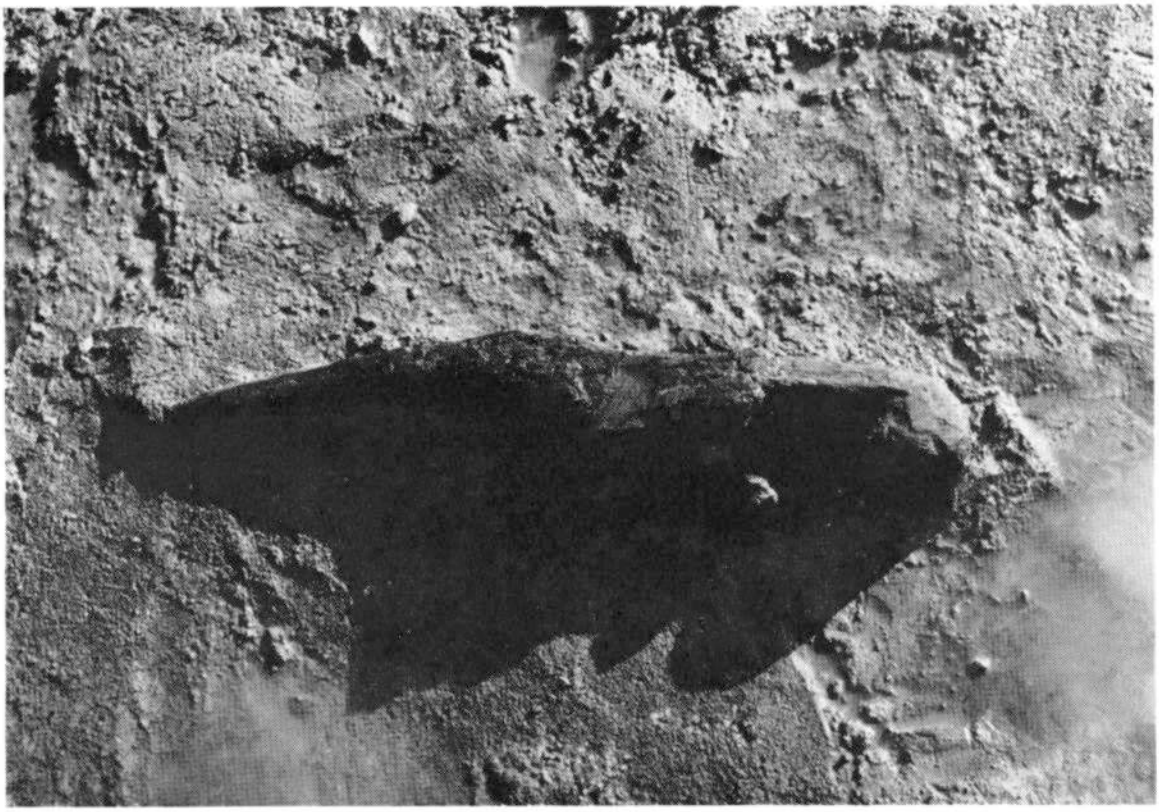
1　大溝Ⅰ内木器〔平鍬？〕出土状態1

2　大溝Ⅰ内木器〔平鍬？〕出土状態2

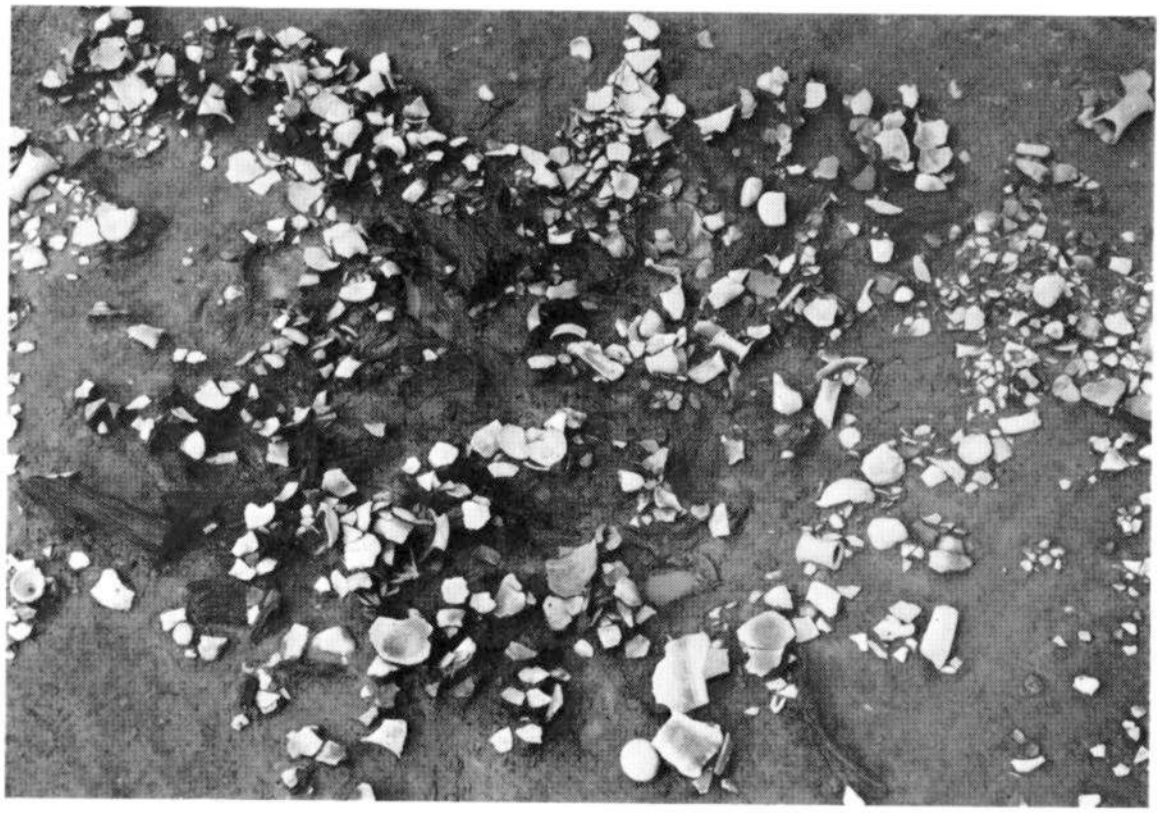
1　大溝Ⅰ内木器(三又鍬)出土状態3

2　大溝Ⅰ内木器(二又鍬)出土状態4

1　大溝Ⅰ内木器(二又鍬)出土状態5



2　大溝Ⅰ内木器(三又鍬)出土状態6

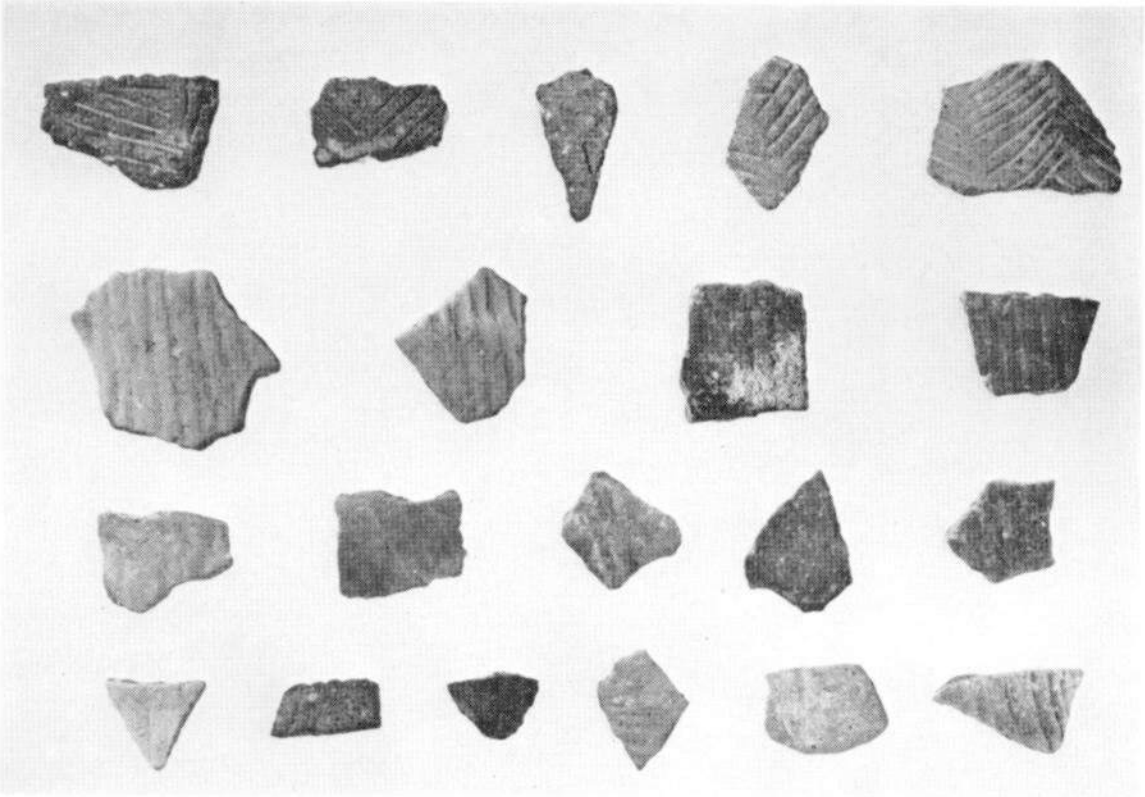


1　大溝Ⅰ内出土の竪臼と土器集積状態

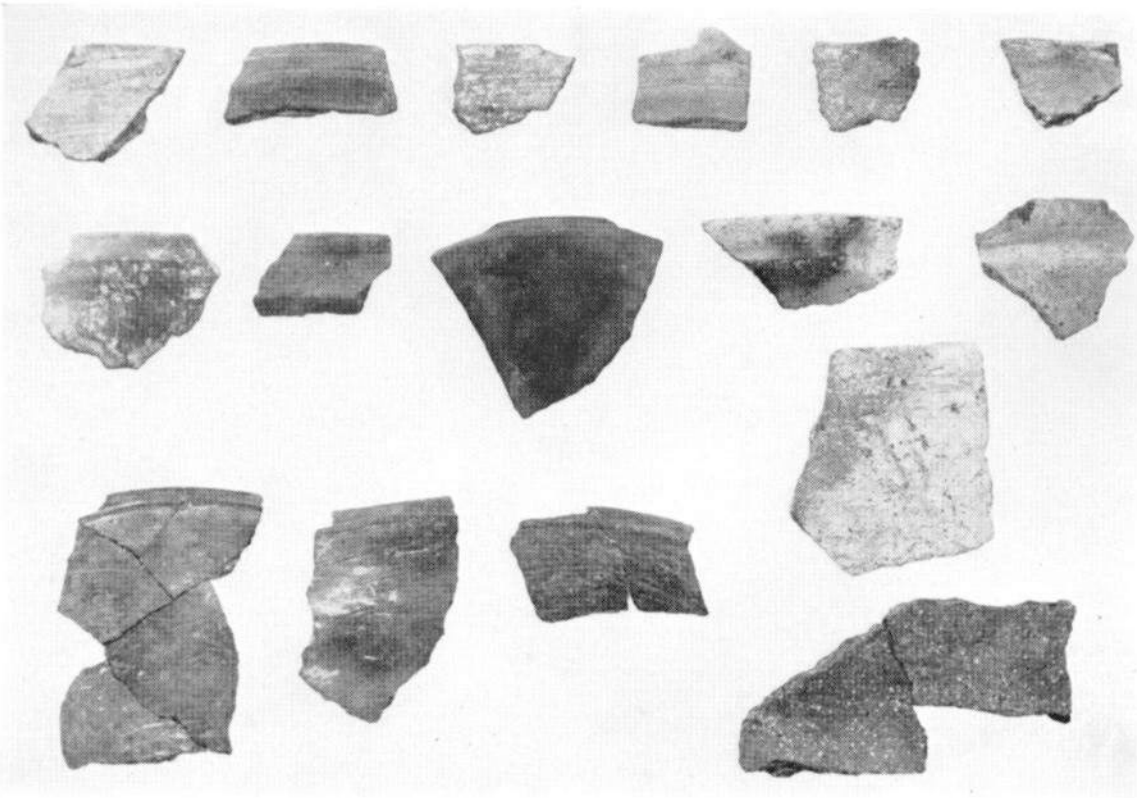
2　大溝Ⅰ内木器(竪臼)出土状態7

1　大溝Ⅰ内木器(玉杓子)出土状態8

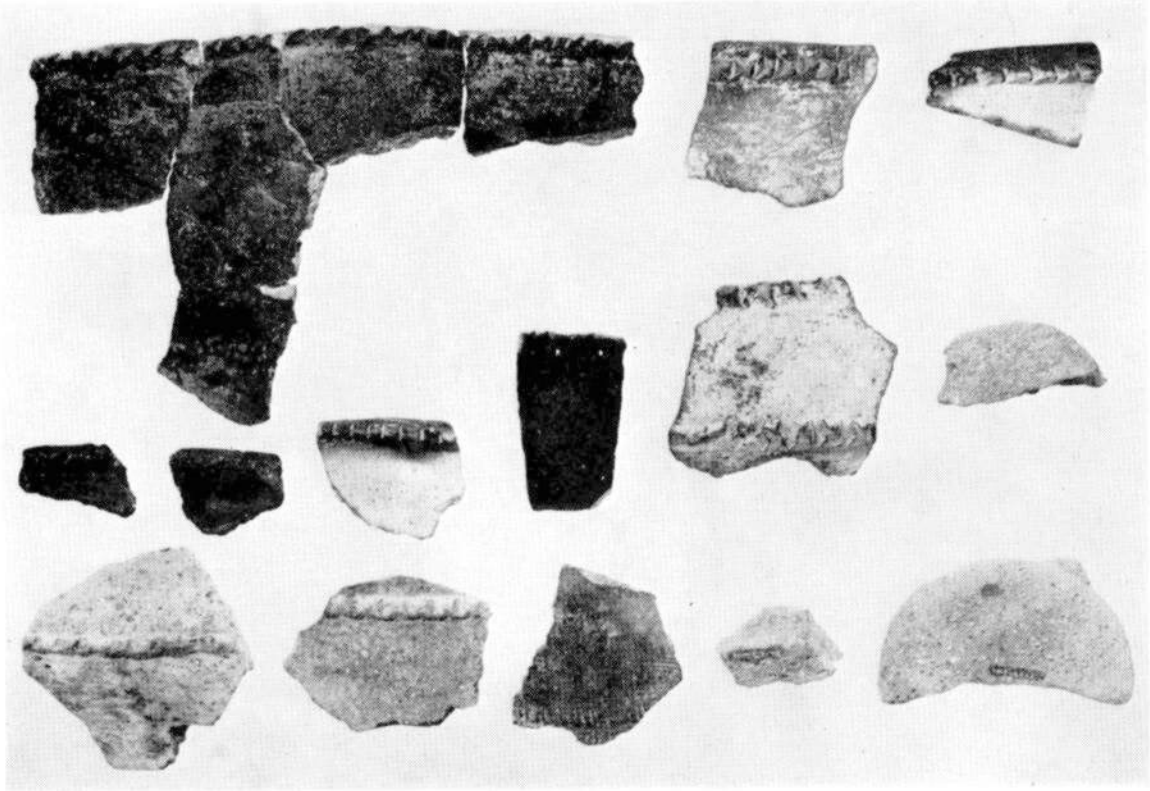
2　大溝Ⅰ内木器(有孔板状製品)出土状態9



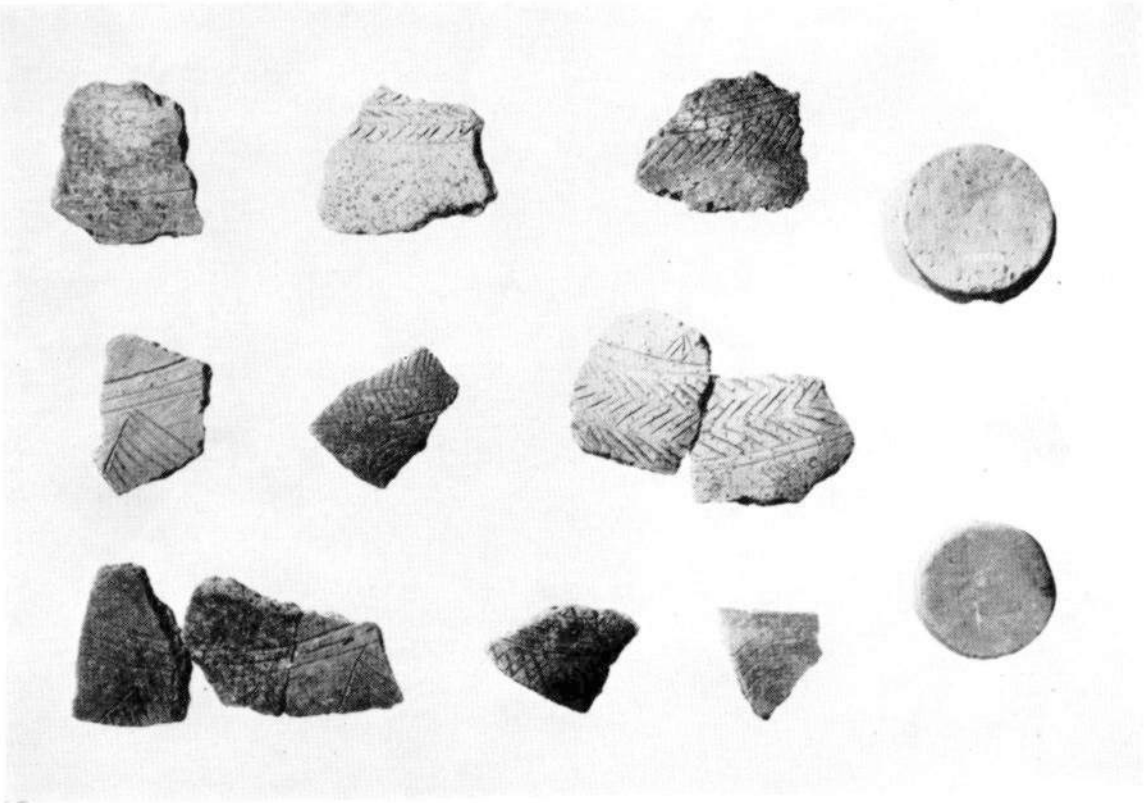
1　櫛目状土器・曽畑式土器



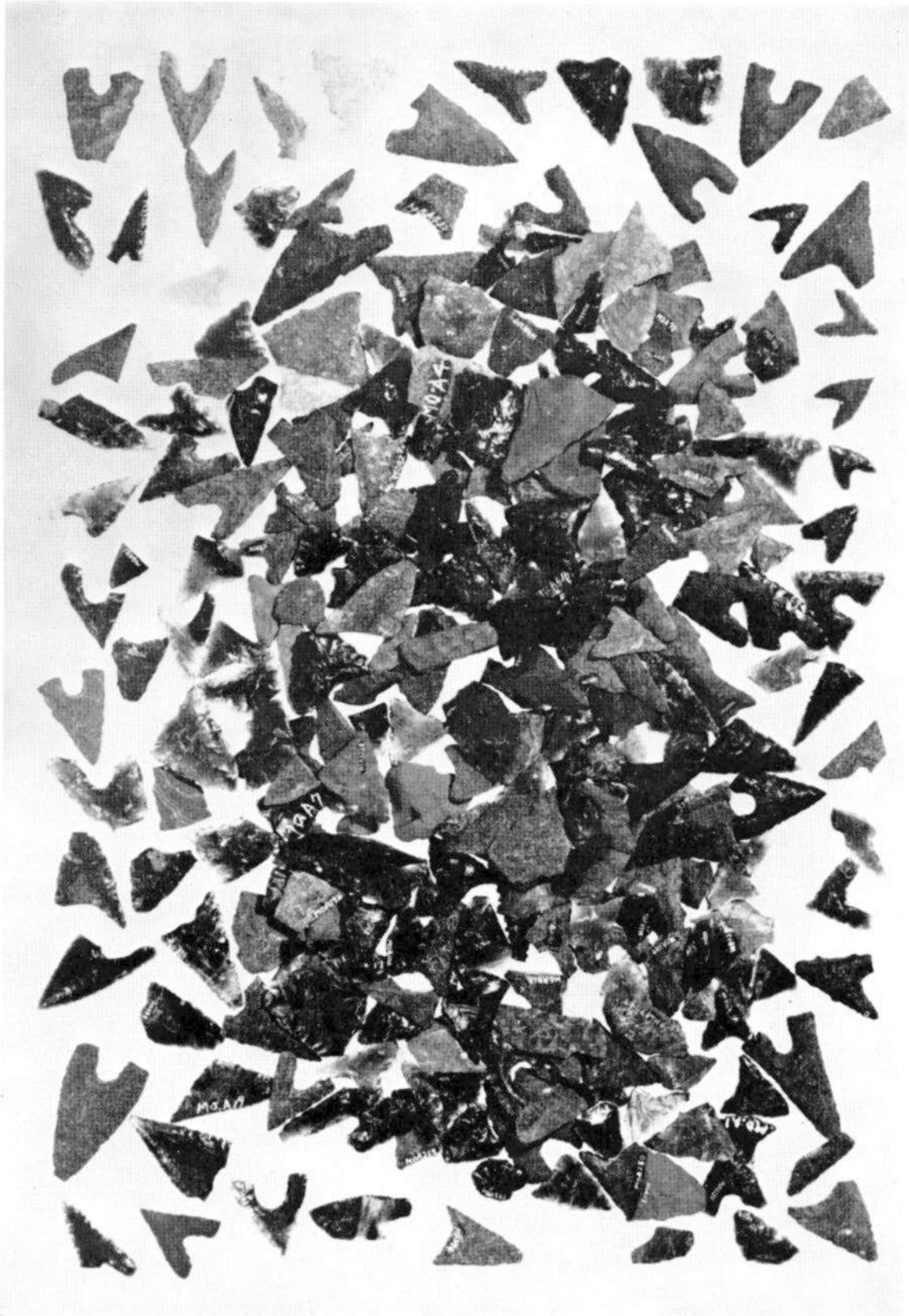
2　縄文晩期土器



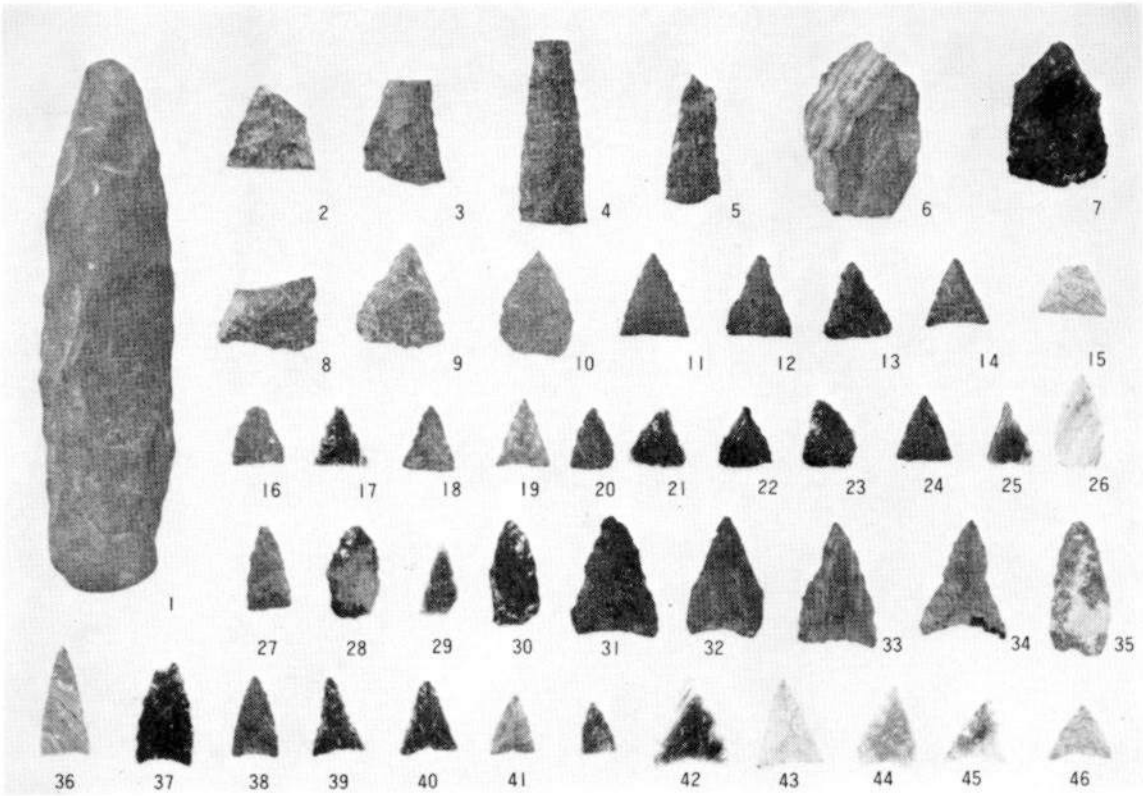
1　縄文晩期土器



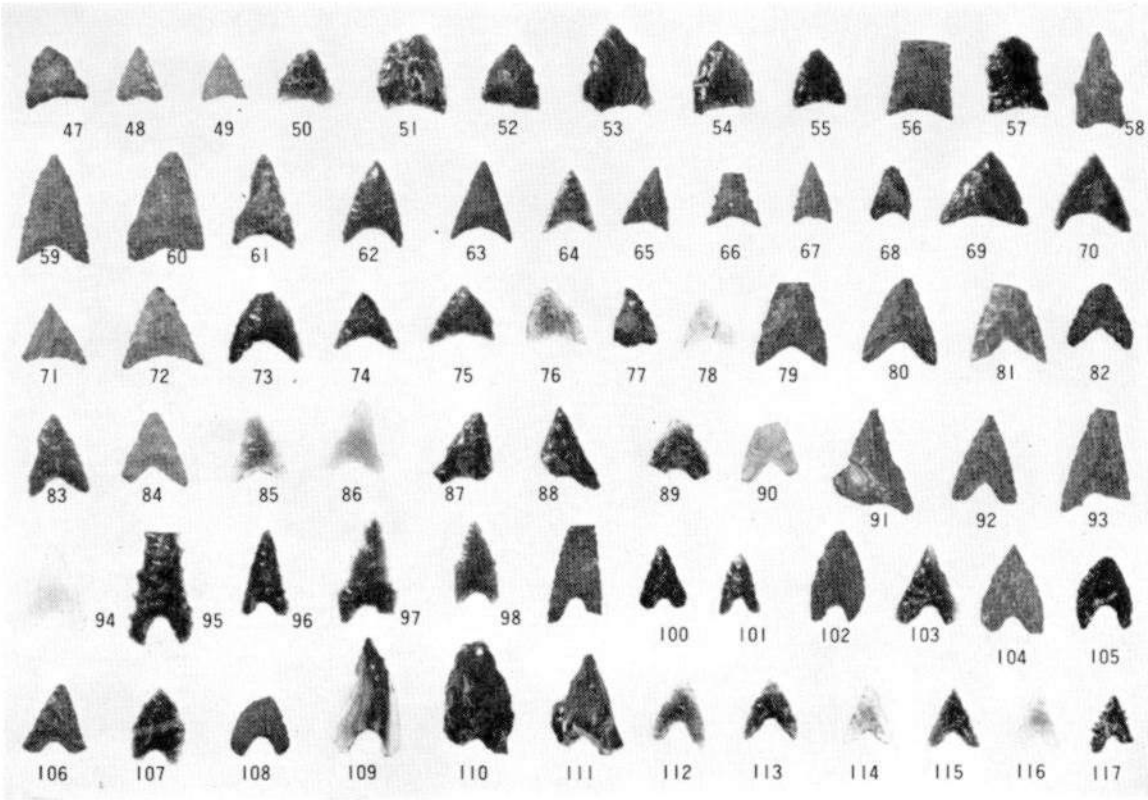
2　弥生前期土器



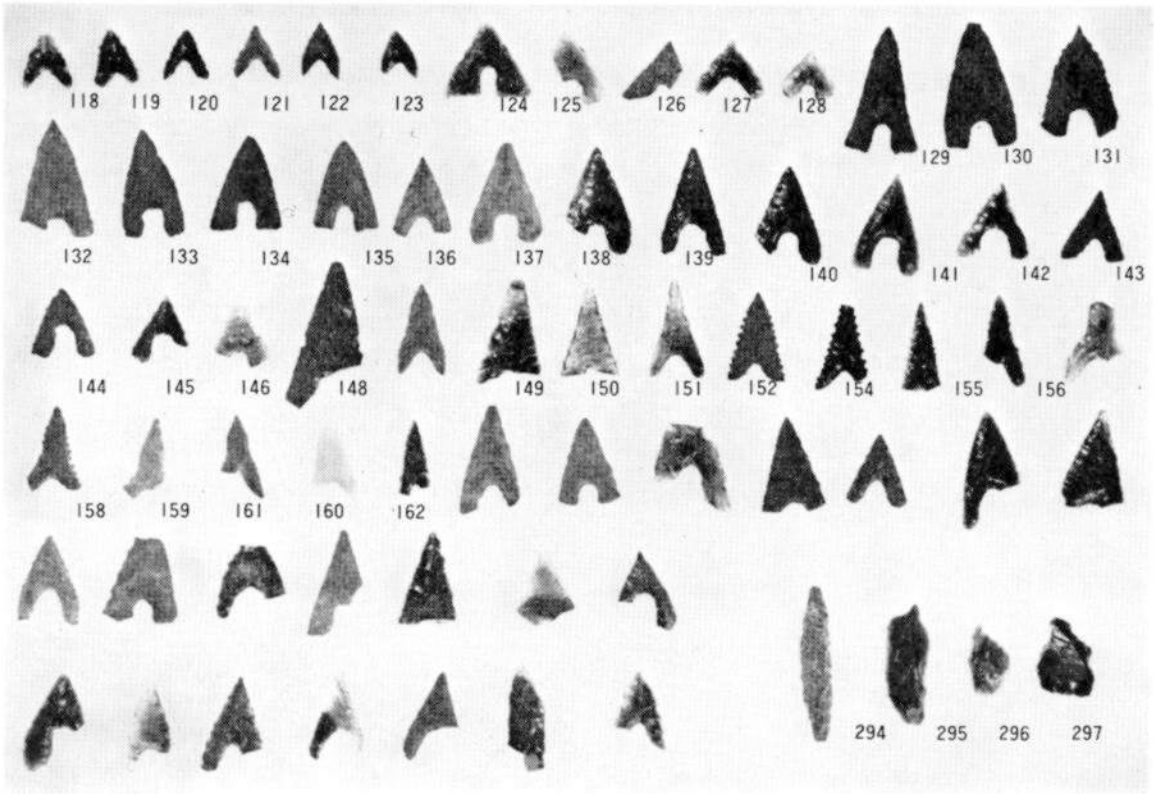
出土石鏃



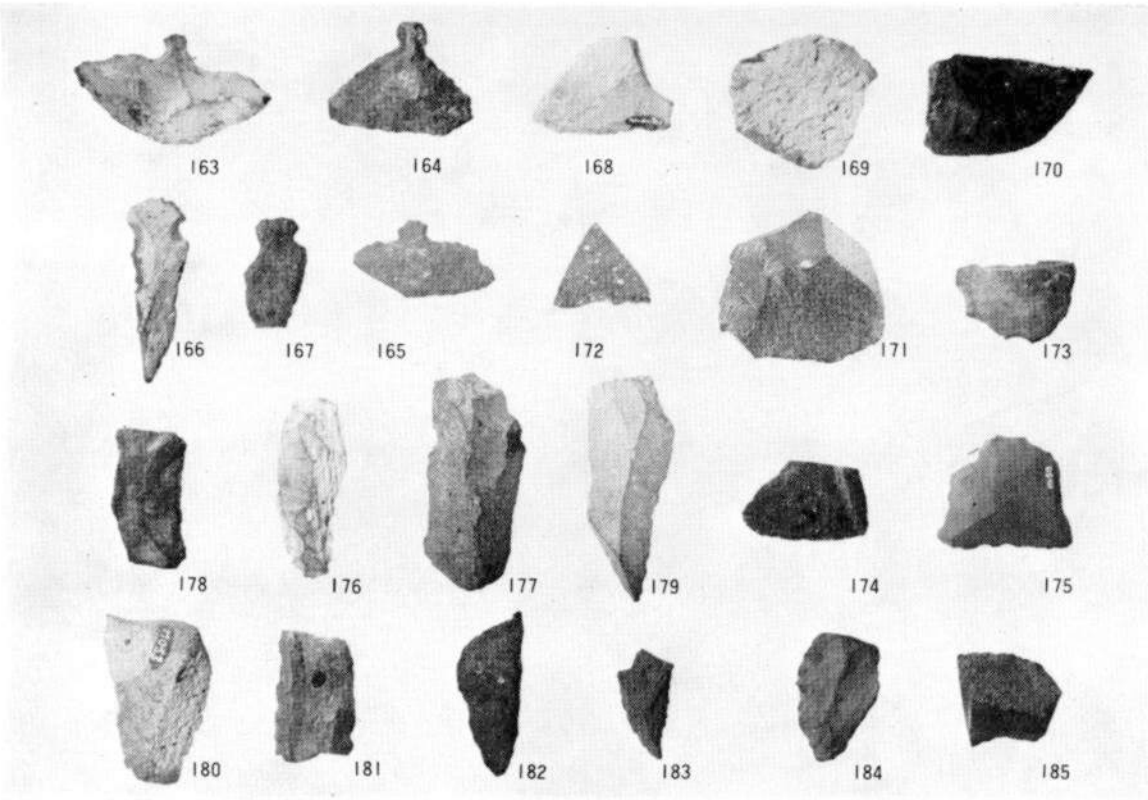
1　出土尖頭状石器・石鏃（½）



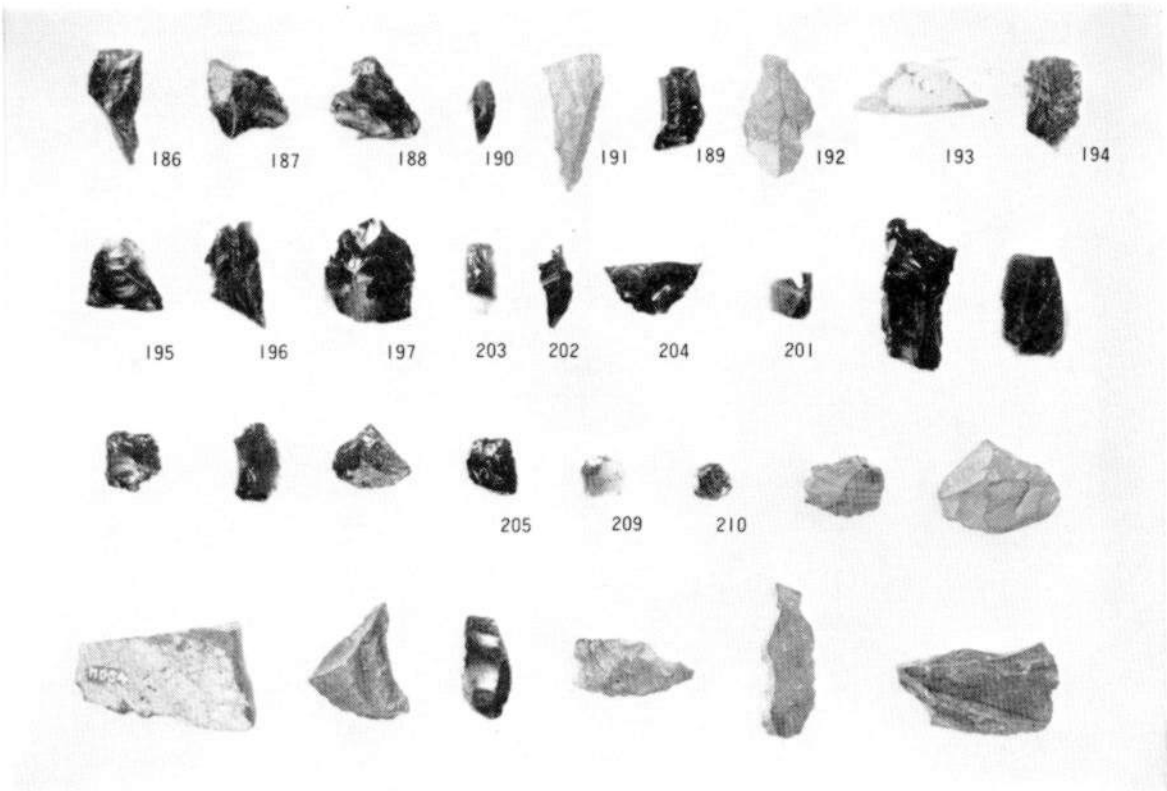
2　出土石鏃（½）



1　出土石鏃(½)

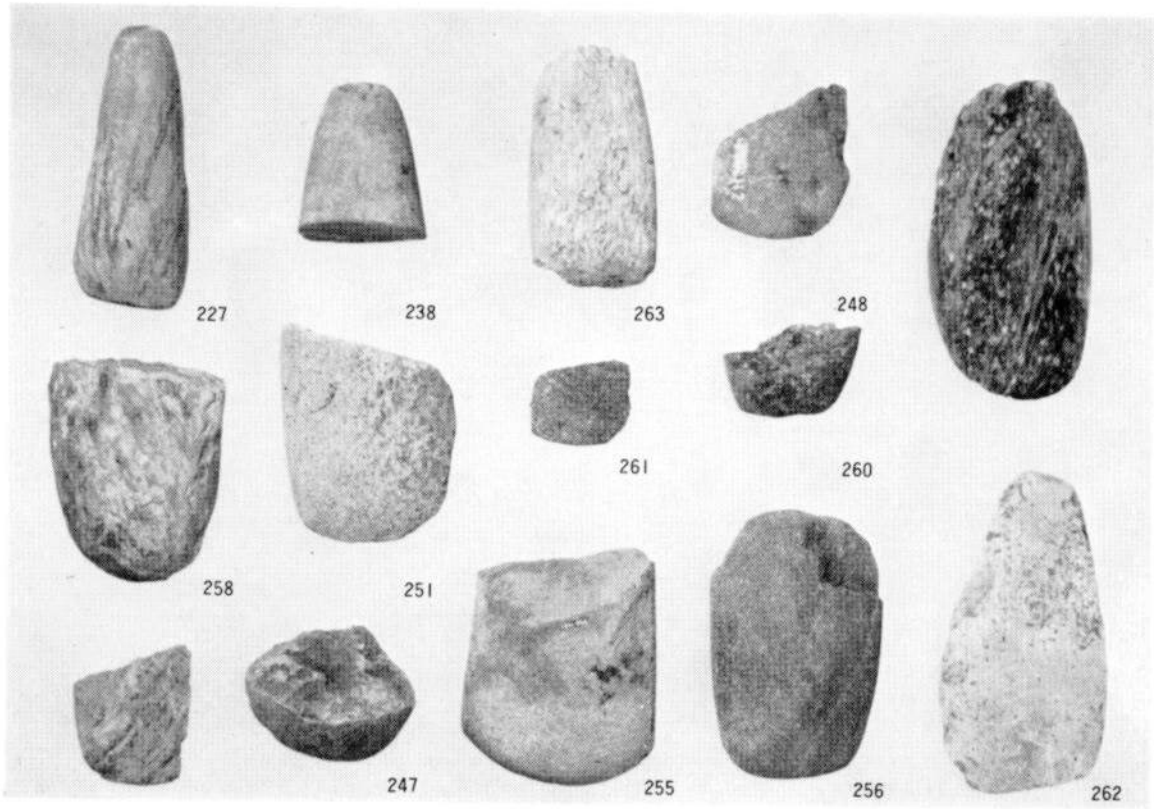


2　出土石匙・削器(½)

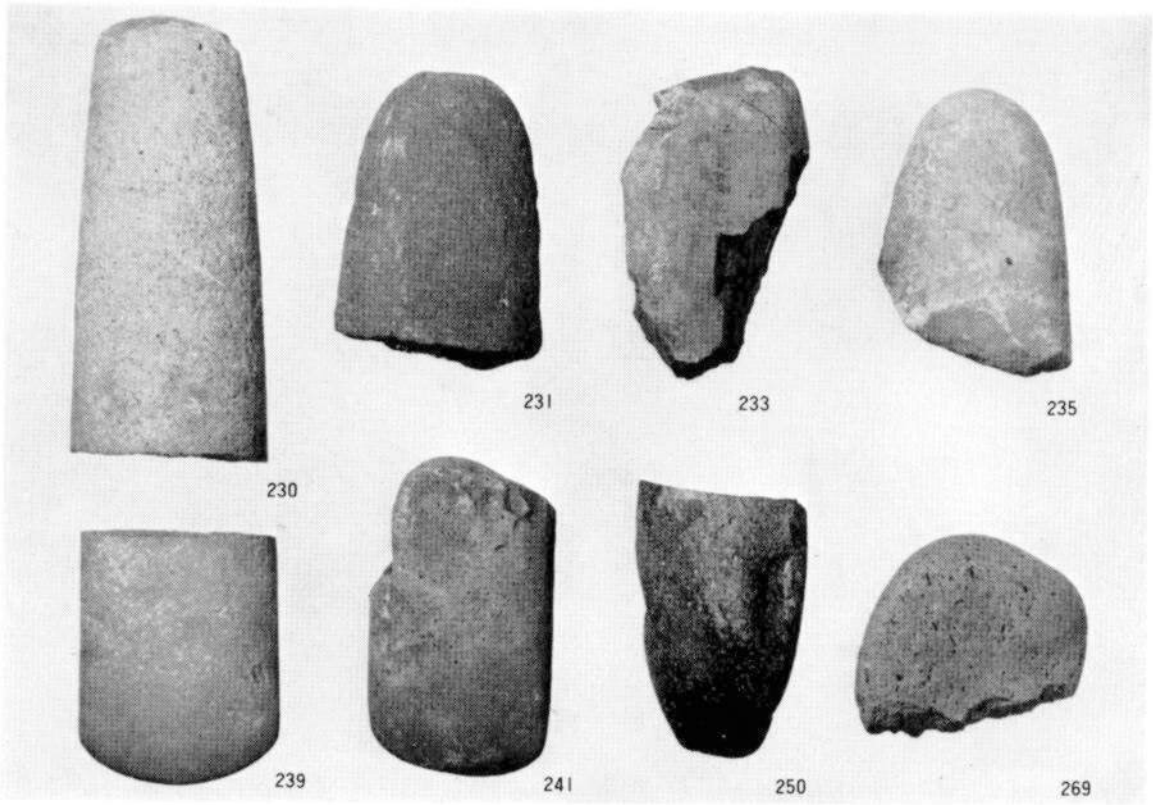


1　出土削器・掻器(½)

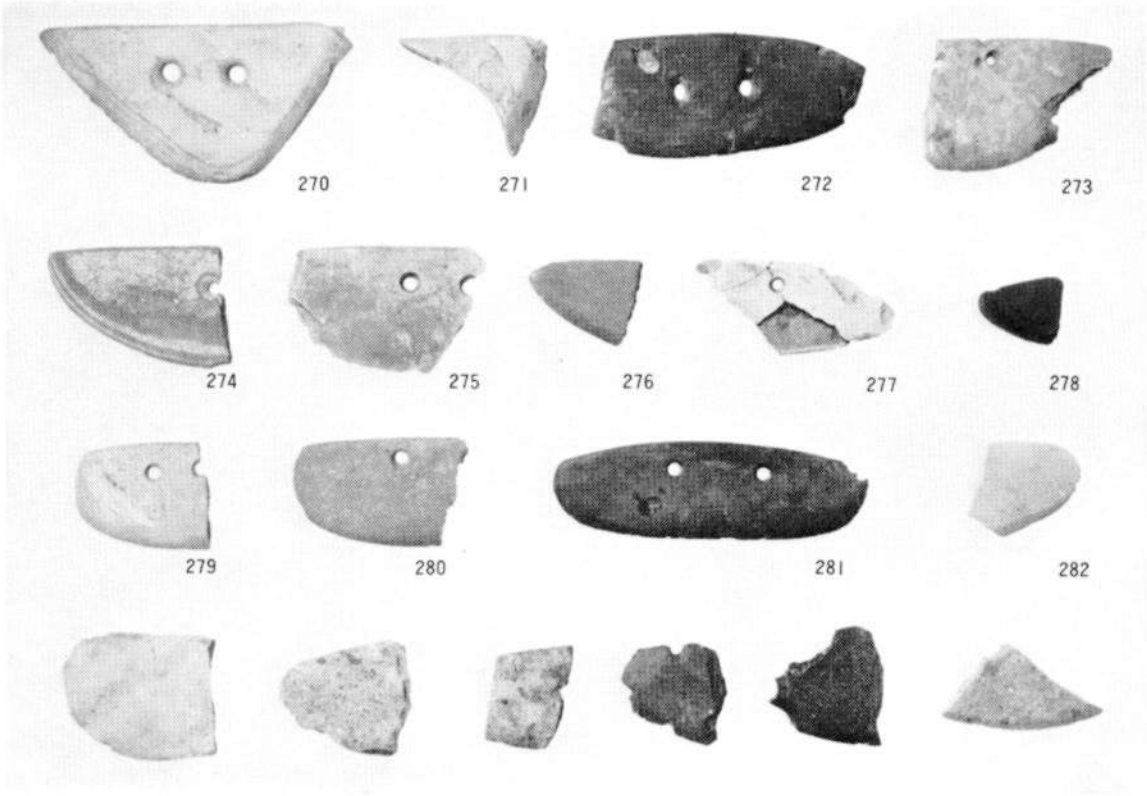
2　出土石斧1(⅓)



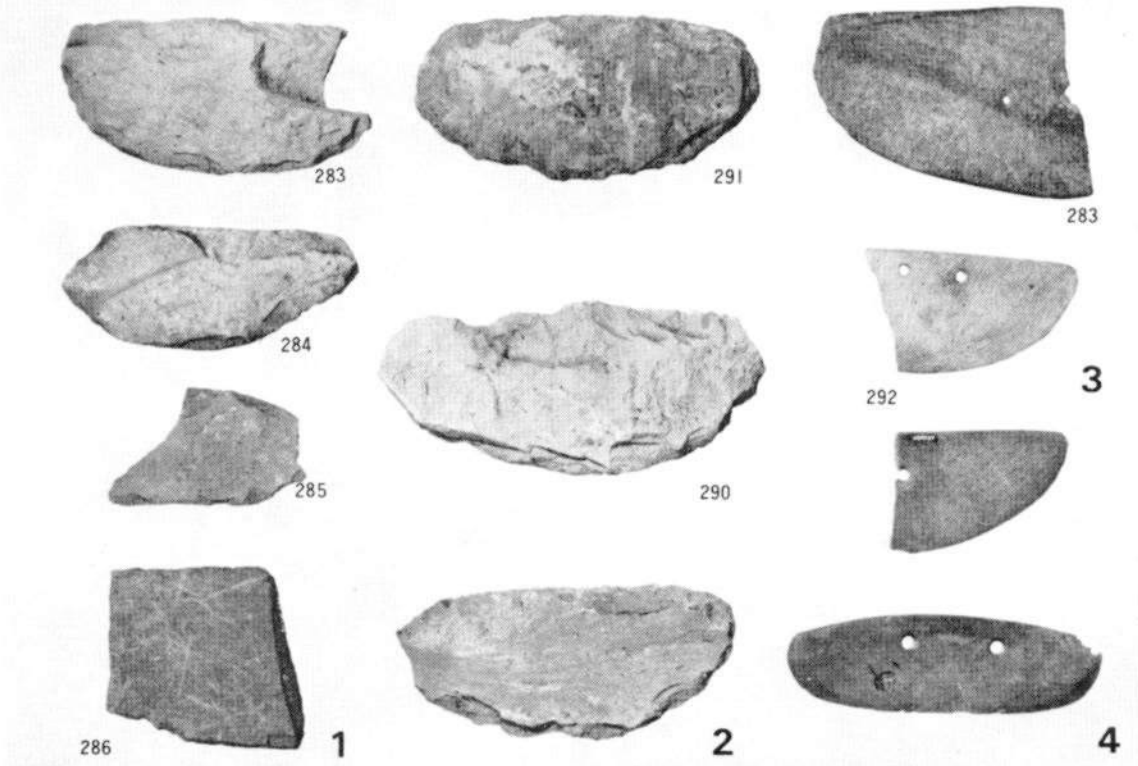
1　出土石斧 2（⅓）



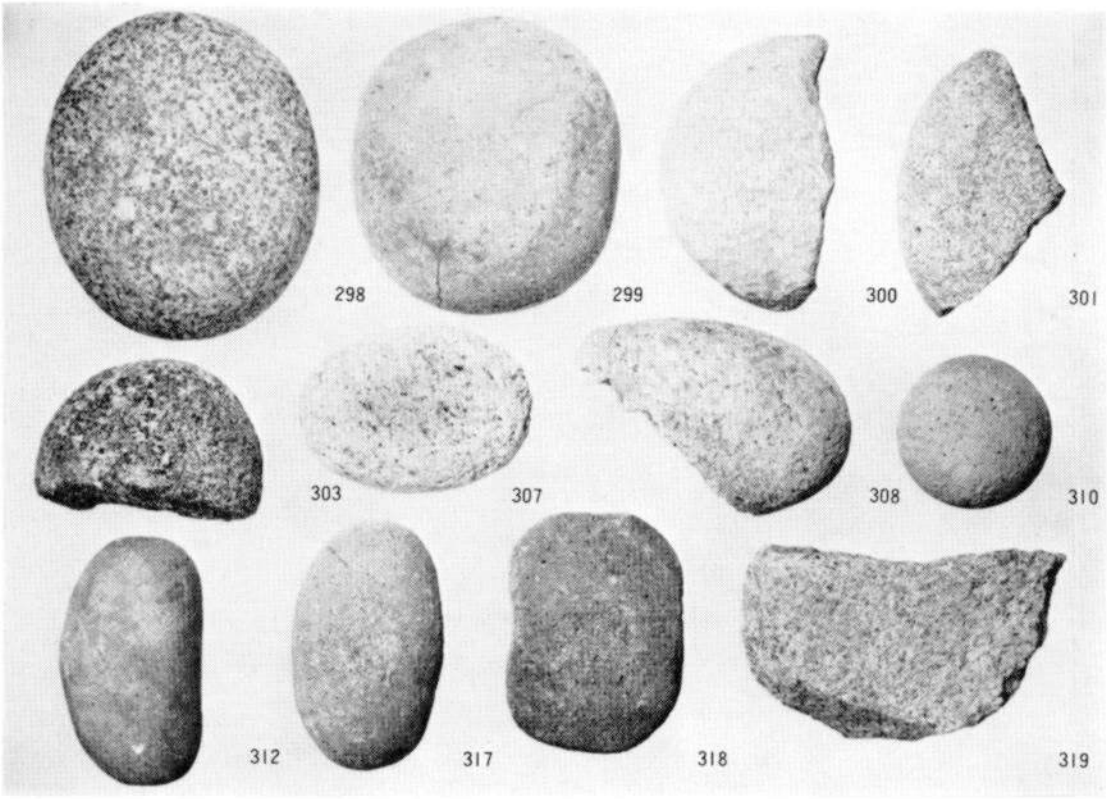
2　出土石斧 3（⅓）



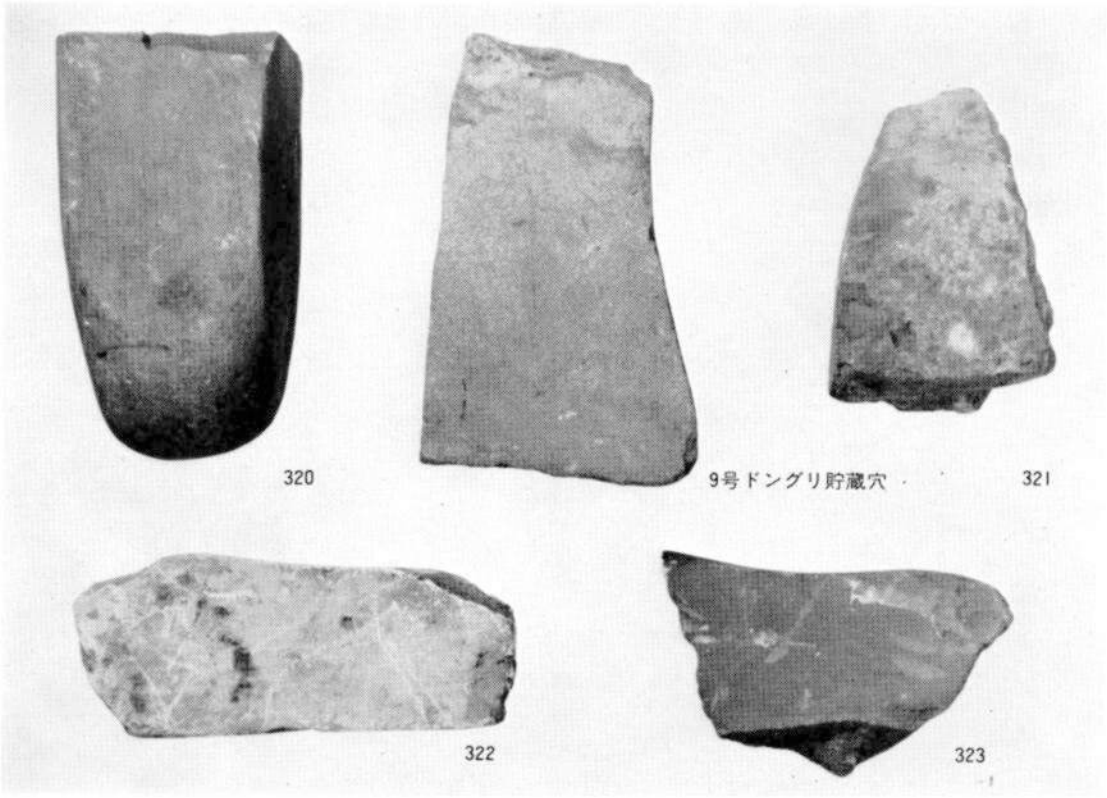
1　出土石庖丁(⅓)



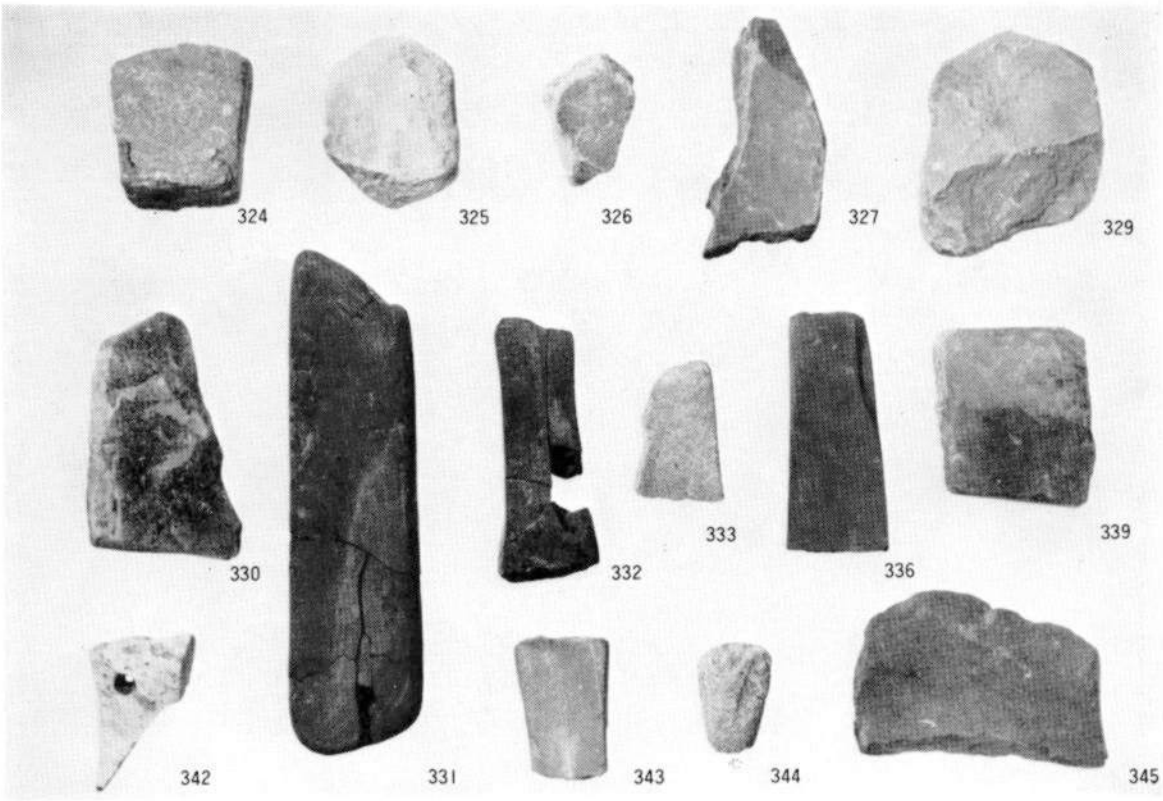
2　石庖丁製作工程 1 ～ 4



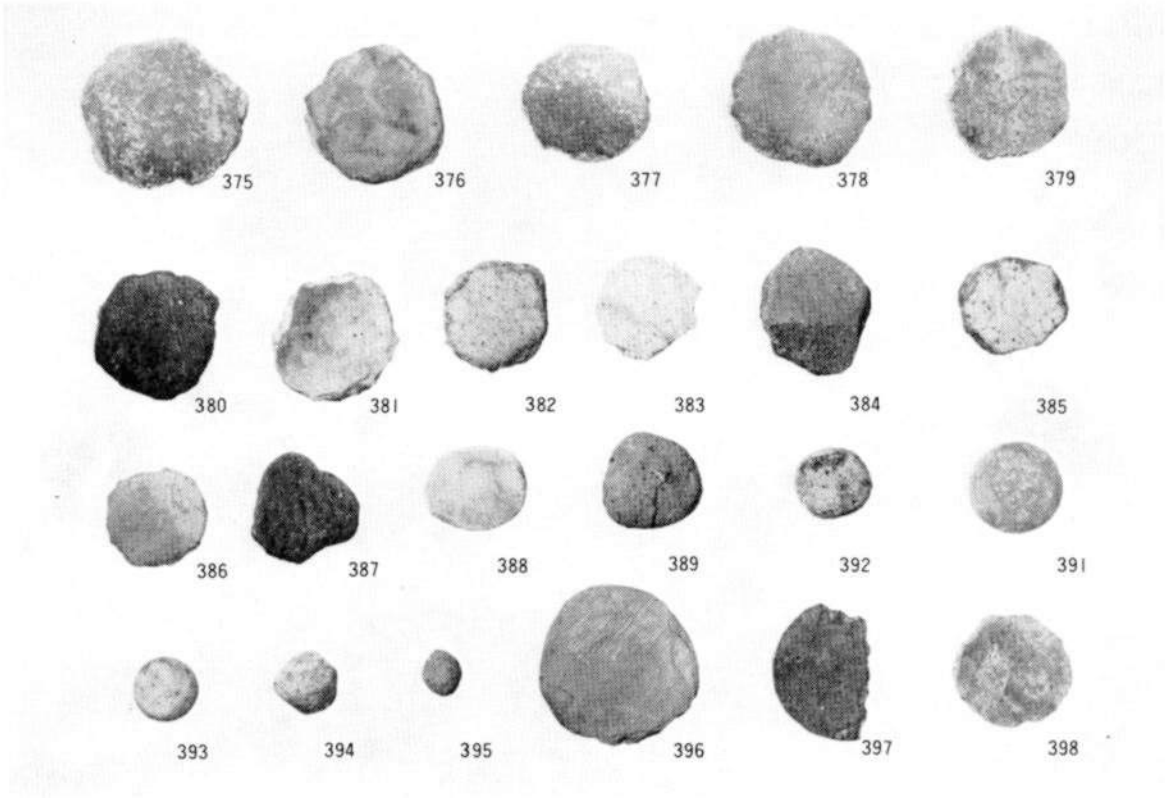
1　出土磨石・敲石・凹石・石皿状石製品(⅓)



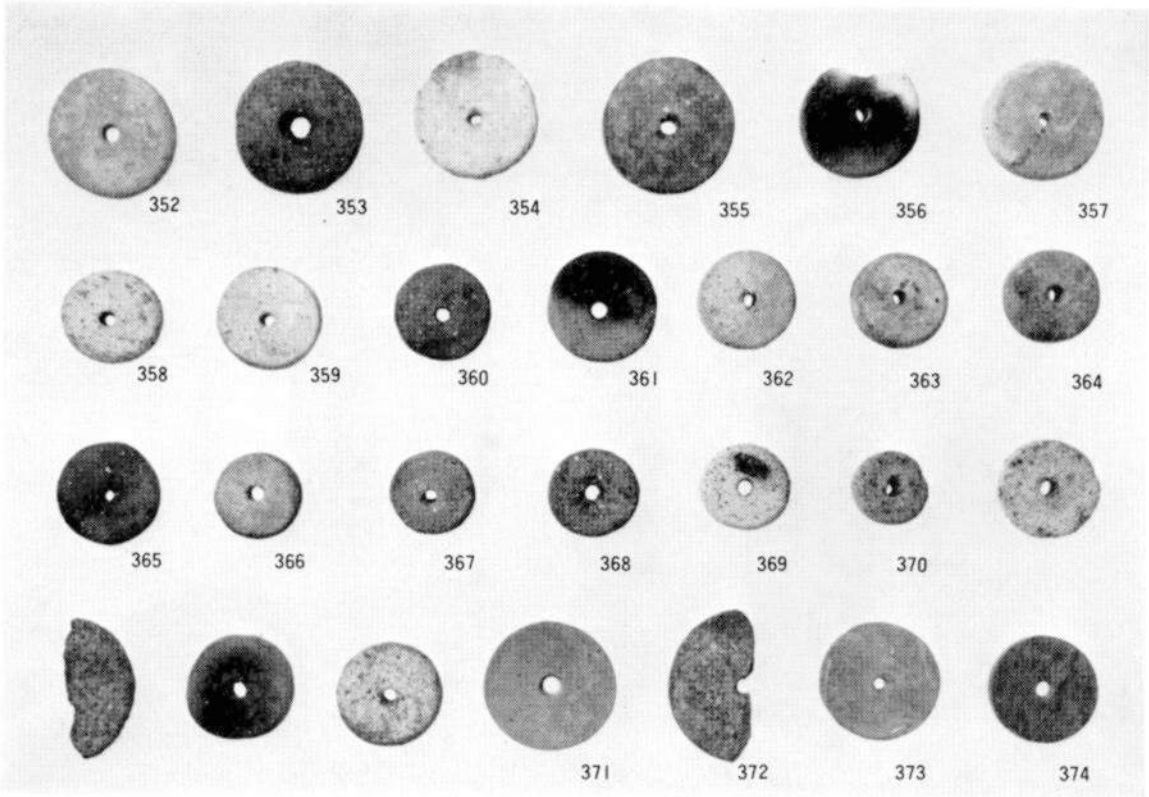
2　出土砥石1(⅓)



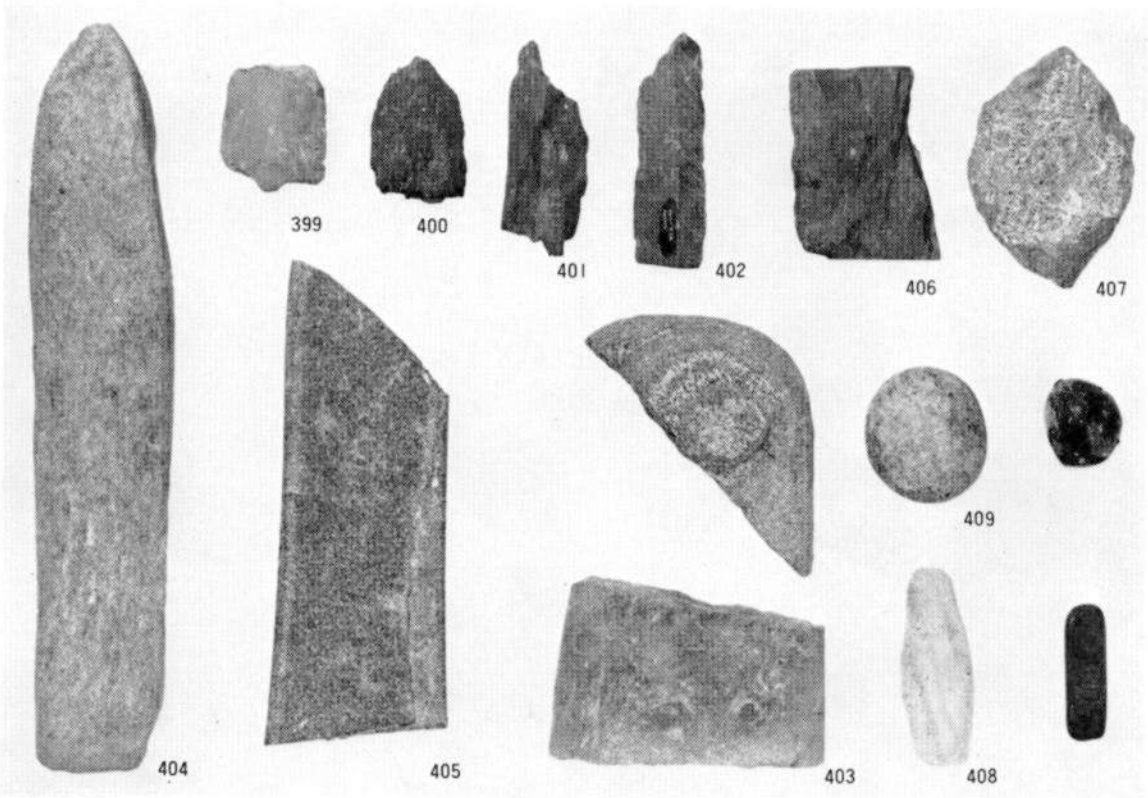
1　出土砥石 2 (⅓)



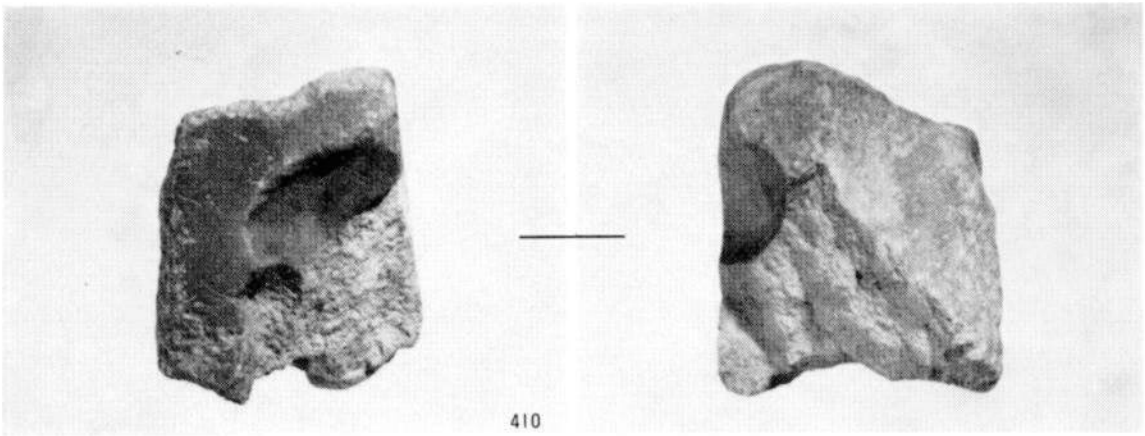
2　出土土製品・石製品(½)

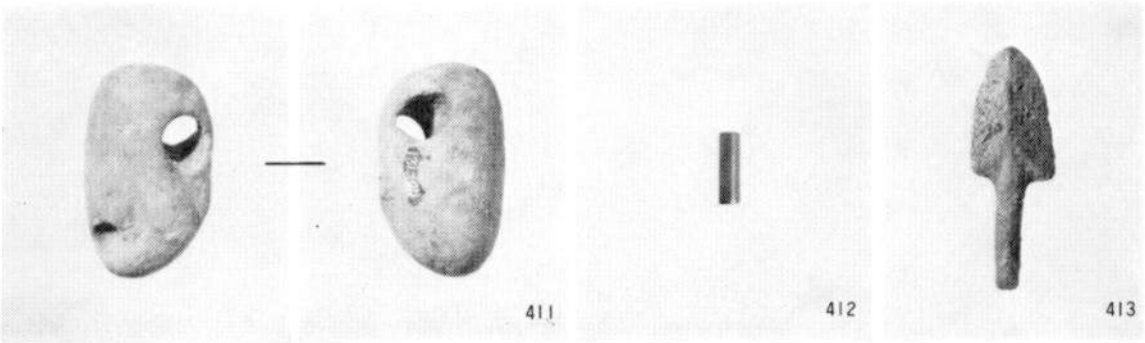


1　出土紡錘車(½)

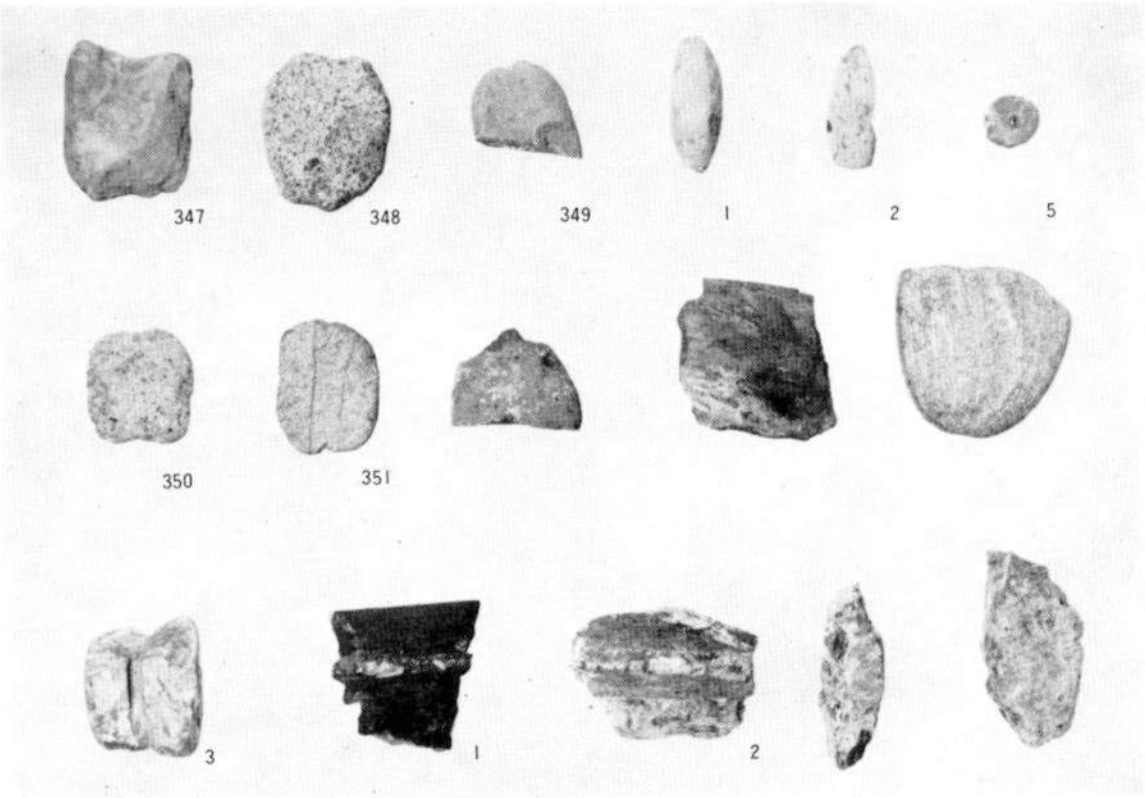


2　出土磨製利器・ほか(½)



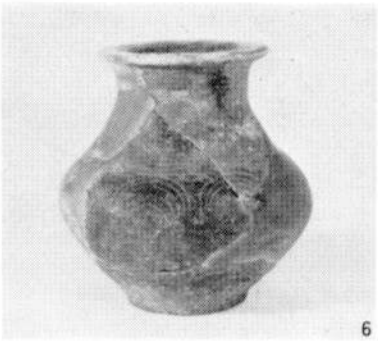


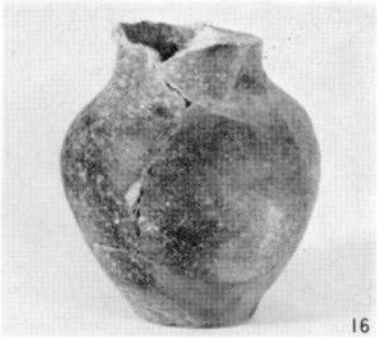
1　出土鋳型・有孔石製品・管玉・銅鏃



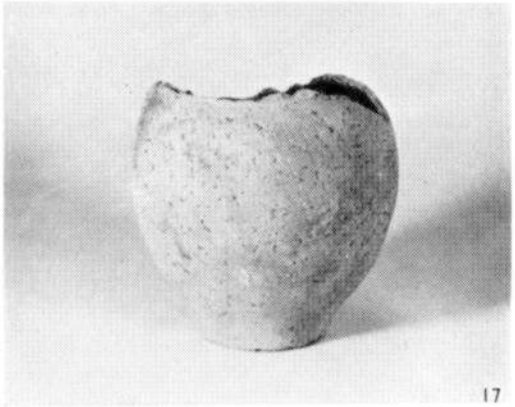
2　出土石錘・土錘・ほか(½)

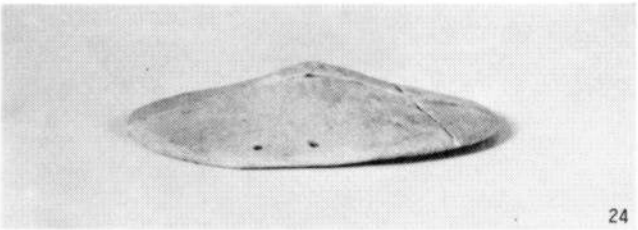
3


6


16

5


17

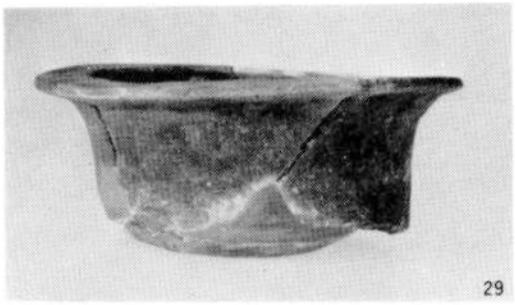

24

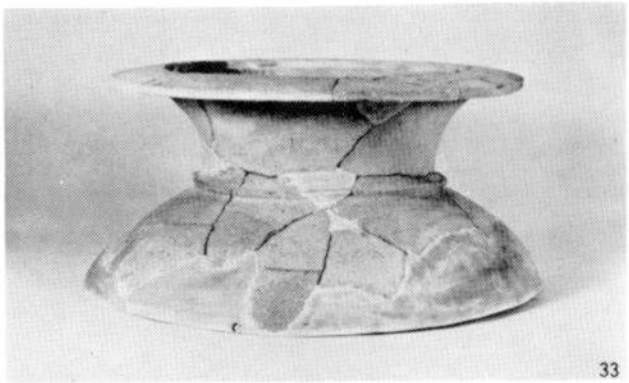
21

25

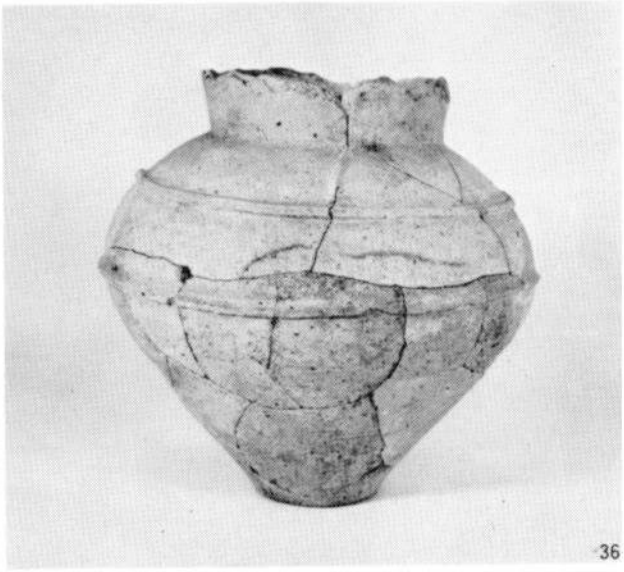
26

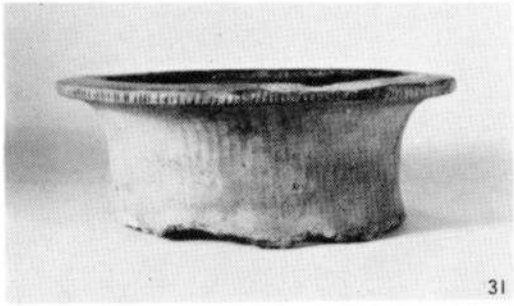
弥生前期土器


29


33

30


36


31

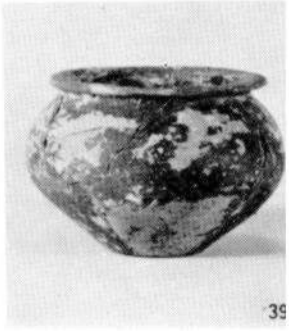
32

34

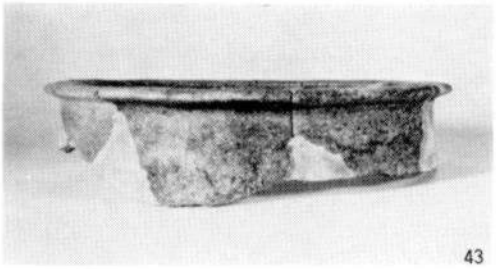
35

37

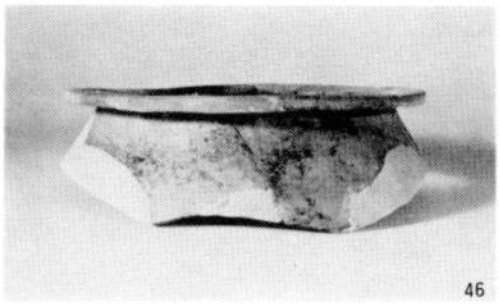
38


39

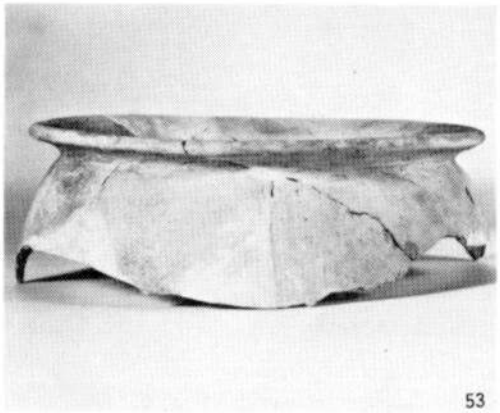
弥生中期土器 1


43

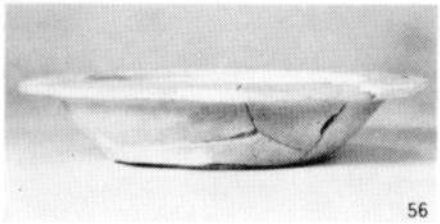
44

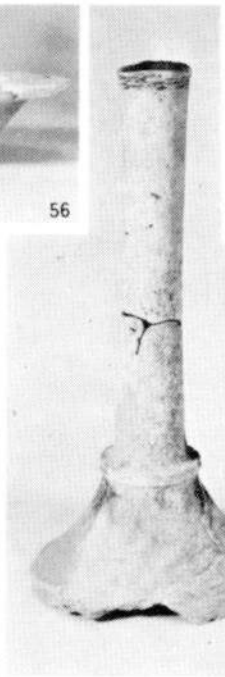

46

47


53

51


56


57

58

59

弥生中期土器 2

62

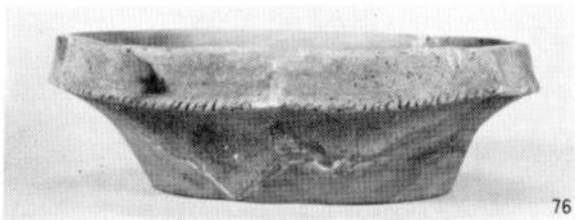
64

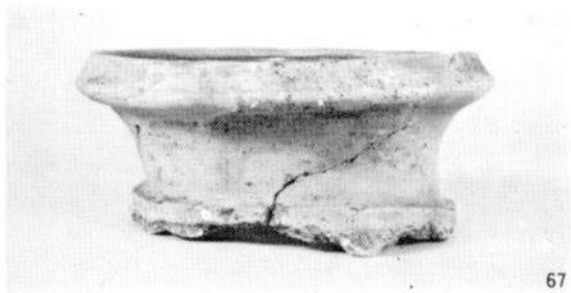
63

65

66

72

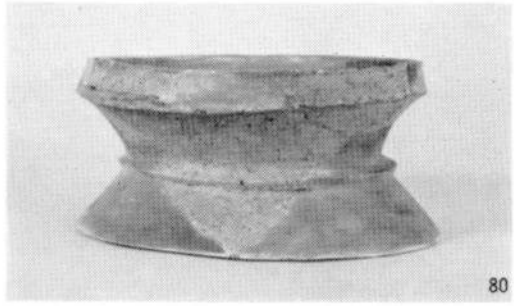

76


67

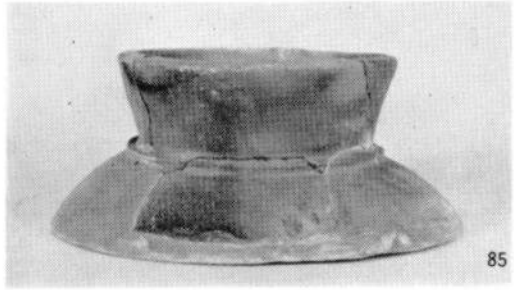
弥生後期土器 1

69

77


80

84


85

78

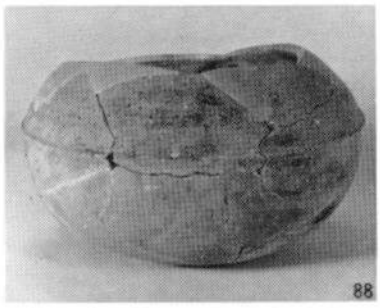
83

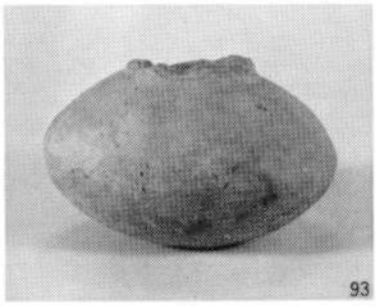
86

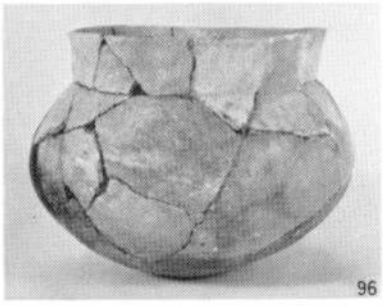
弥生後期土器 2

87

91

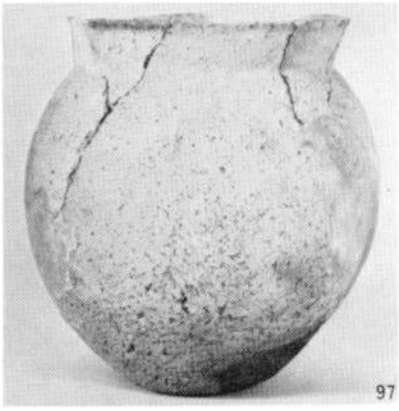

88

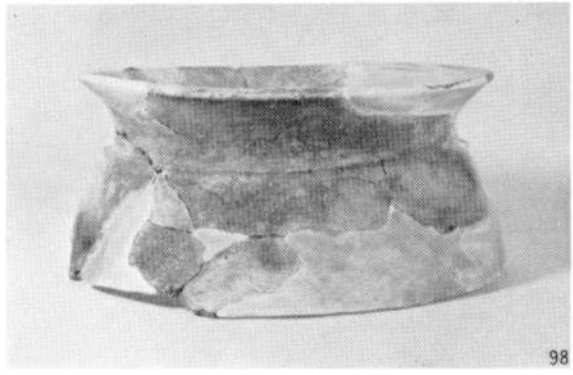

93

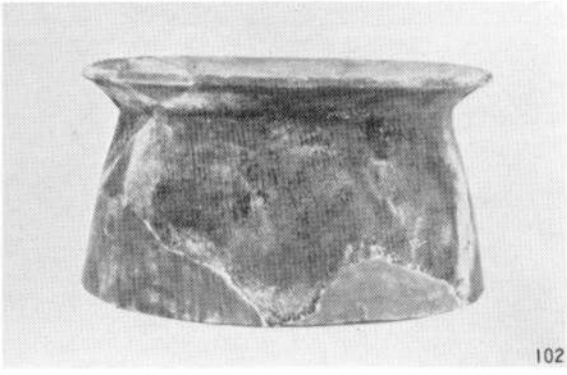

96

95

94

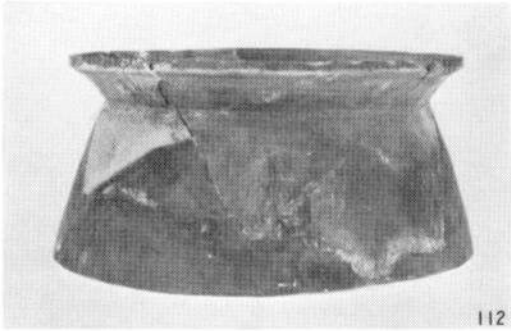

97


98


102

弥生後期土器 3

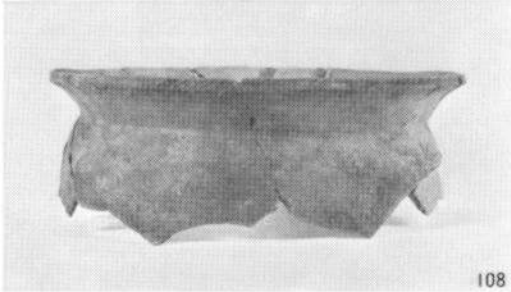
101


112

115

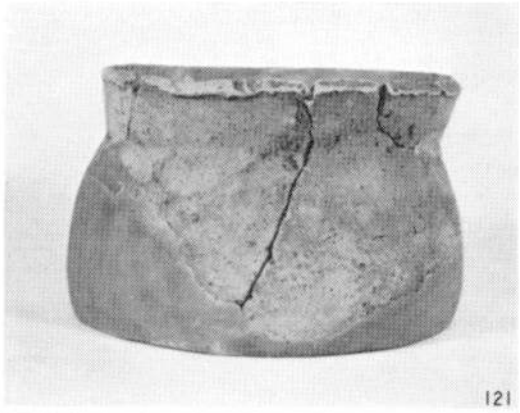
117

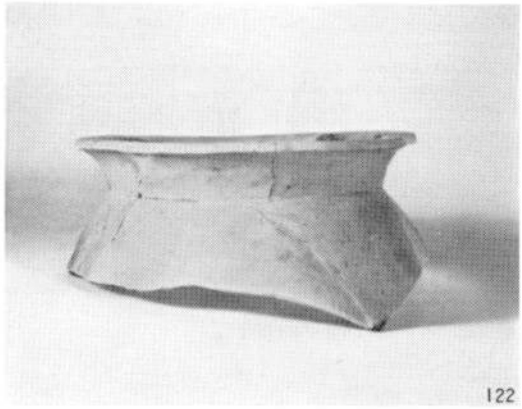
106


108

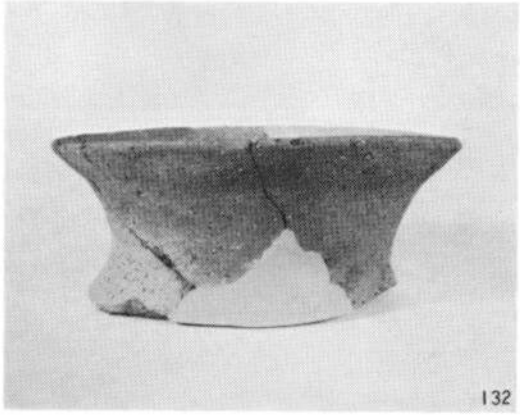
112

113


121

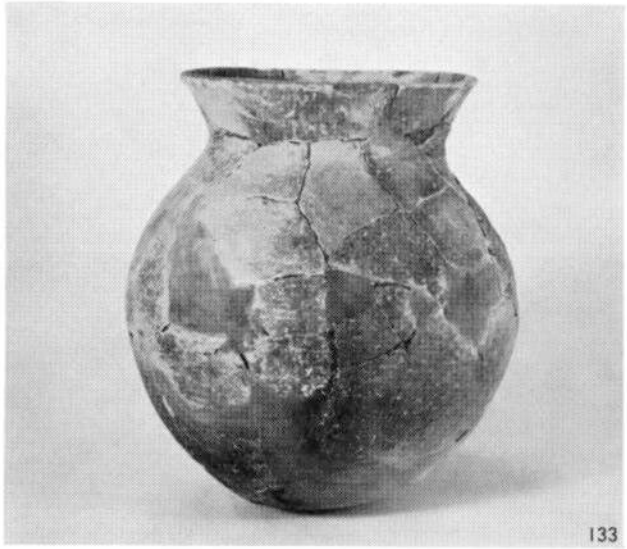

122

131


132

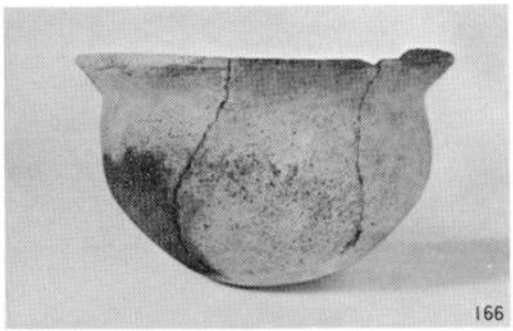
124

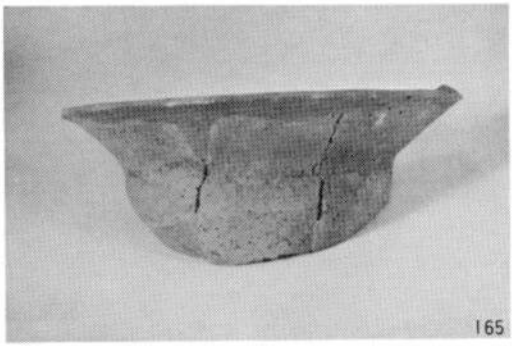
125


133

弥生後期土器 5

162


166

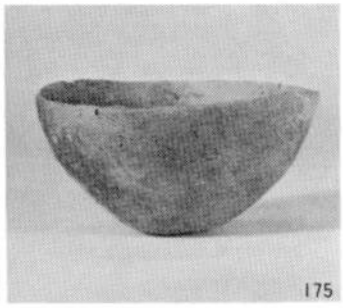

165

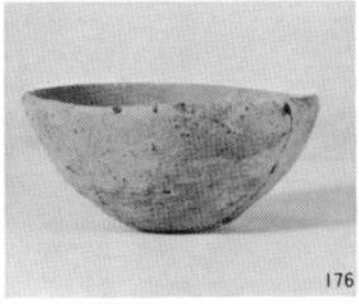
163

167

168

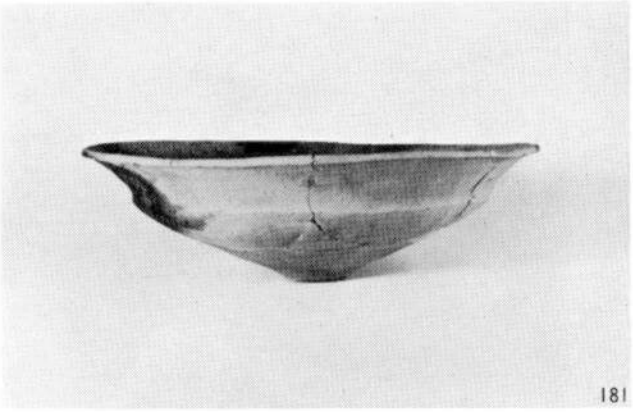
173


175


176

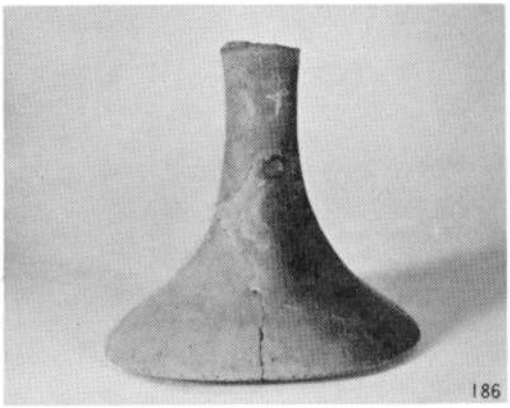
178

弥生後期土器 6

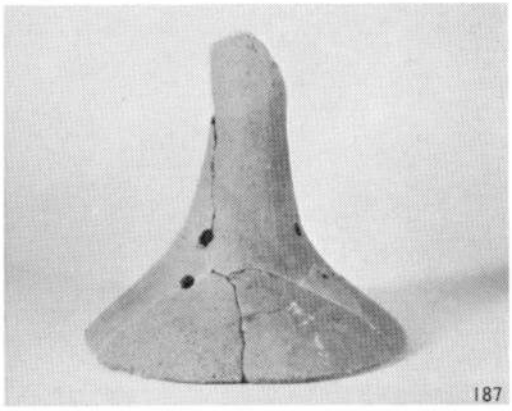

181

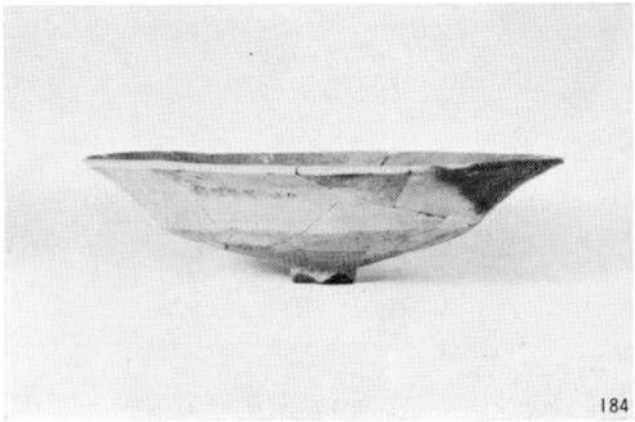
185

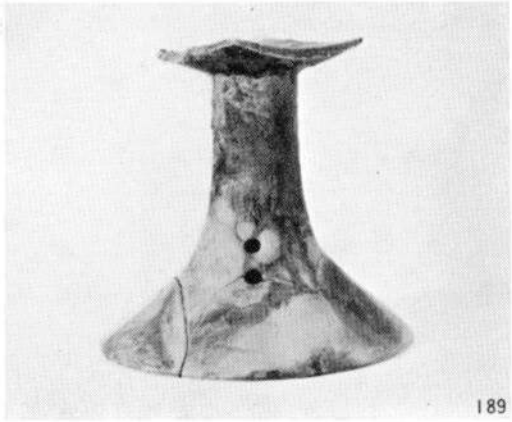
182


186

183


187

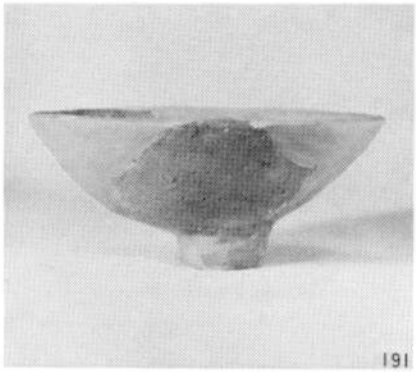

184


189

弥生後期土器 7

188

190


191

193

192

194

196

198

195

197

199

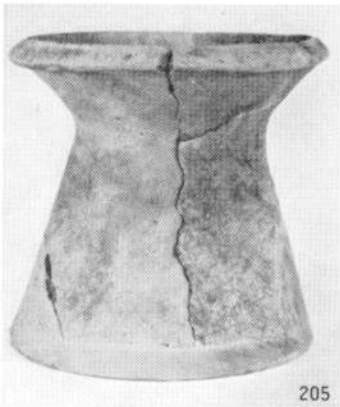
200

201

202

203

204

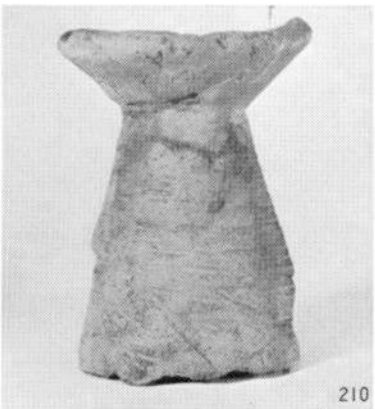

205

206

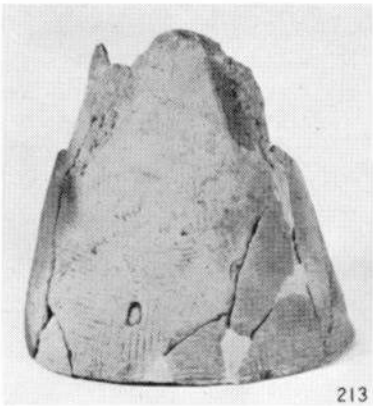
208

207

209


210

211


213

214

215

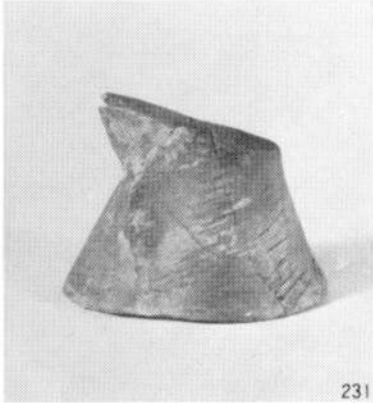
222

227

224

225

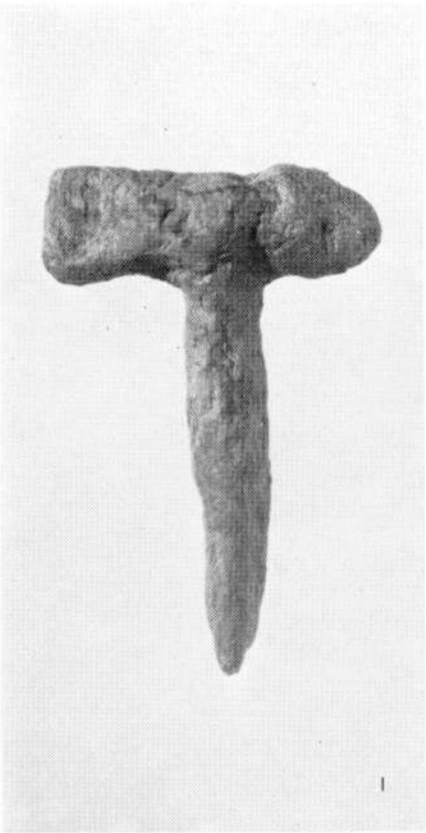
223

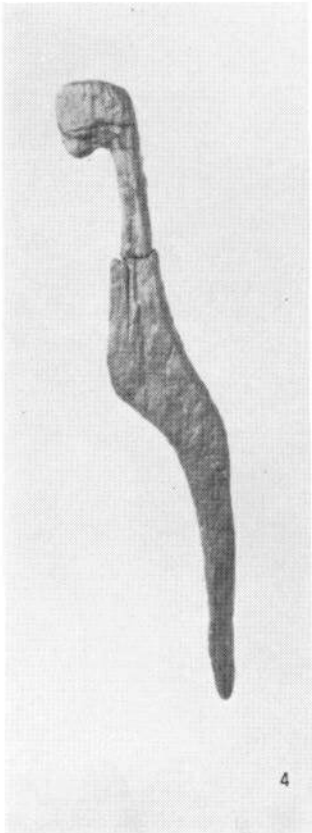

231

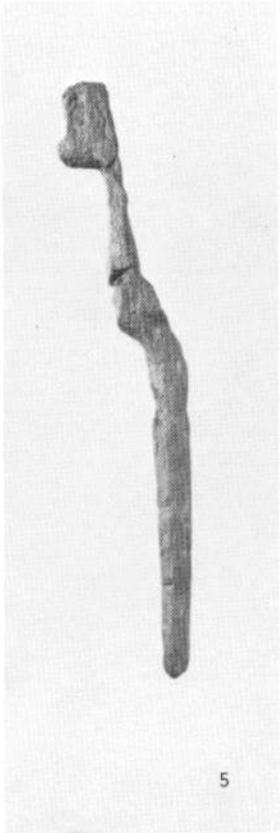
230

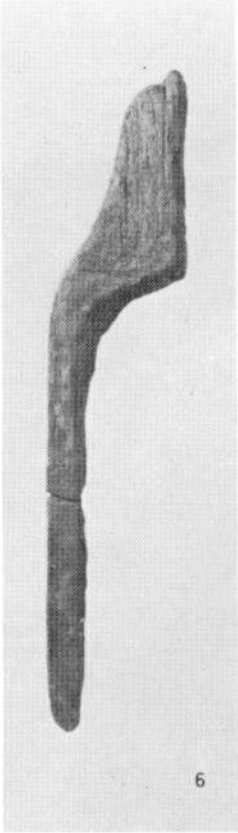
226

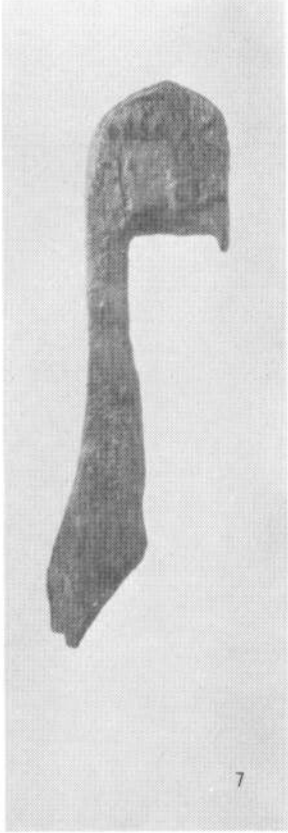
229



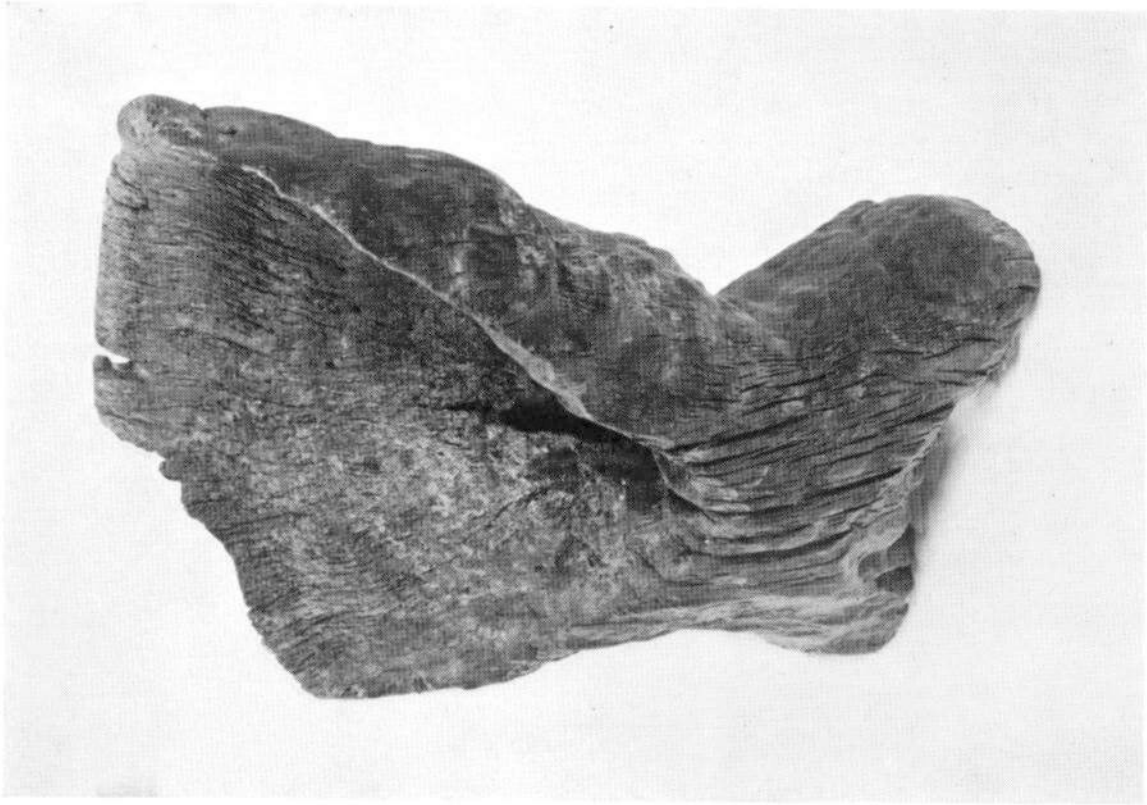


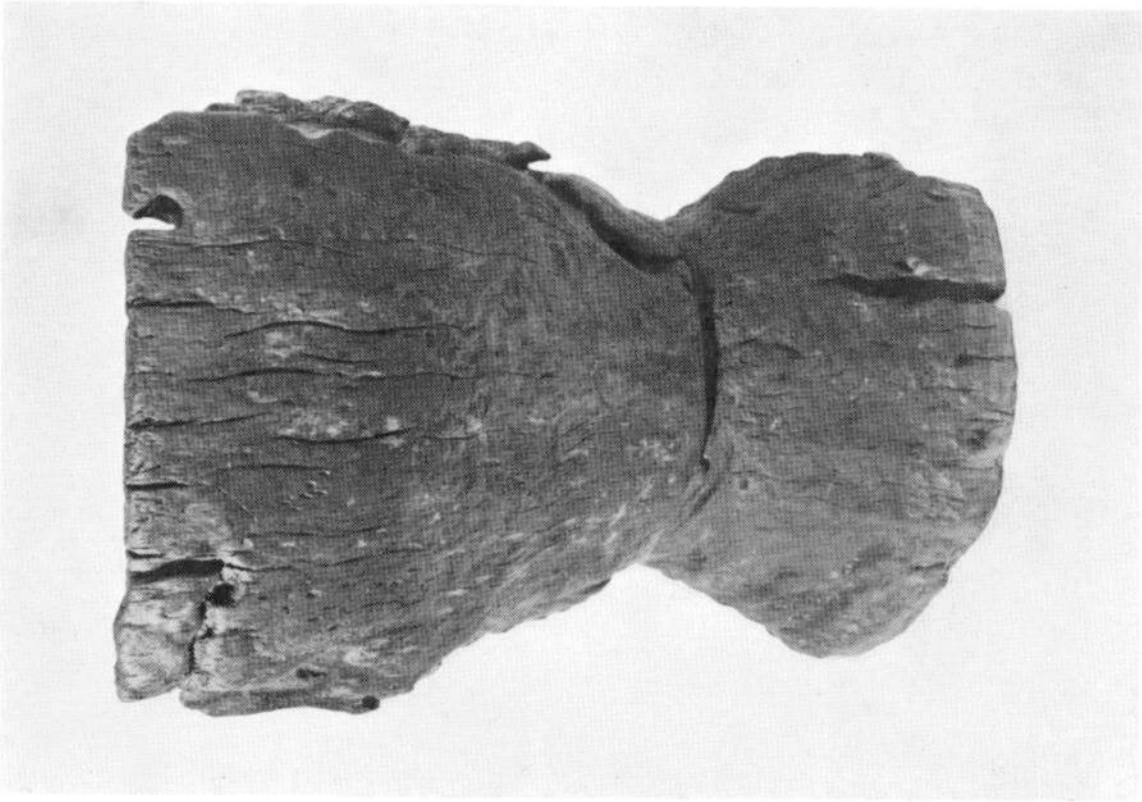




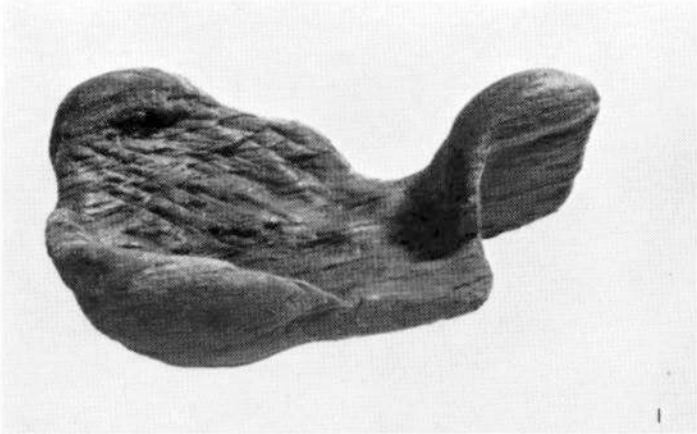


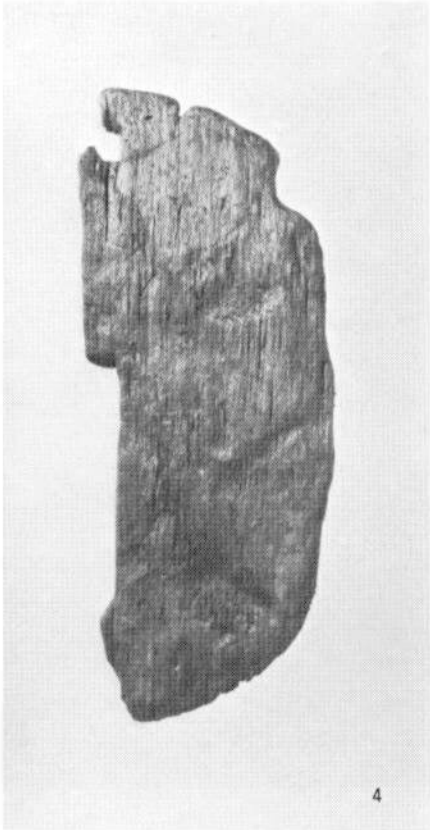
出土木製品 1

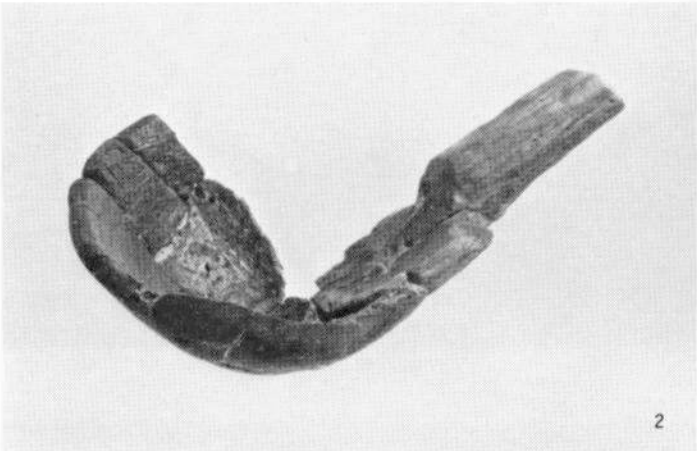


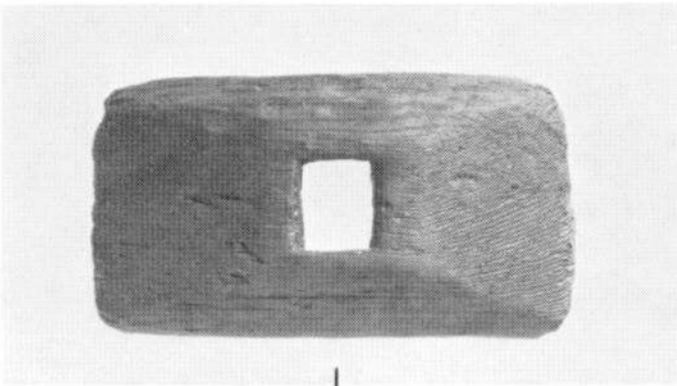


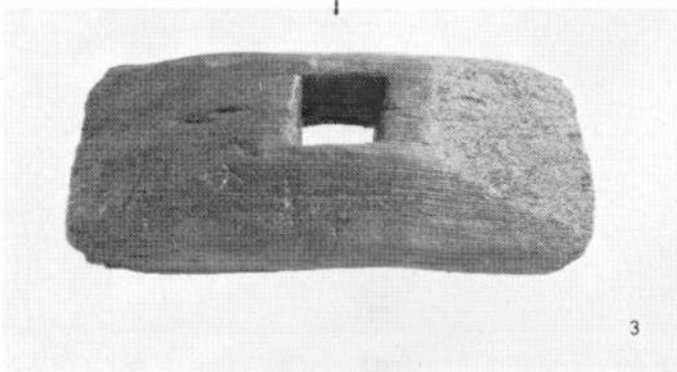
出土木製品 2

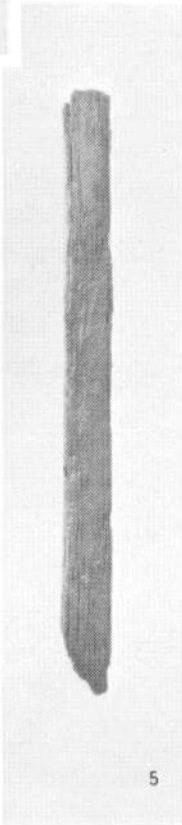


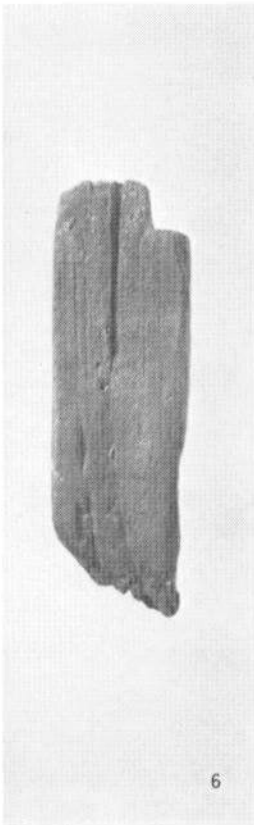




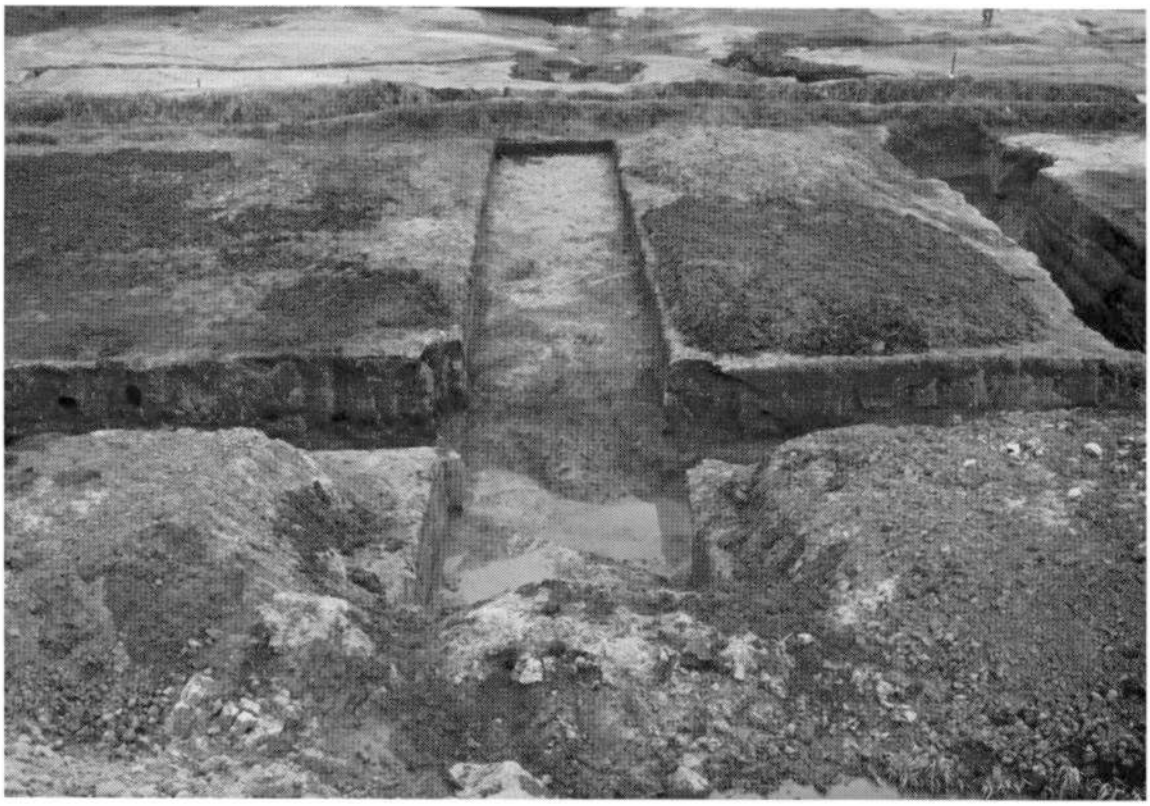








出土木製品 3



1　1号旧河川状遺構

2　3号旧河川状遺構土層断面(南壁)

1　1号ドングリ貯蔵穴

2　2号ドングリ貯蔵穴

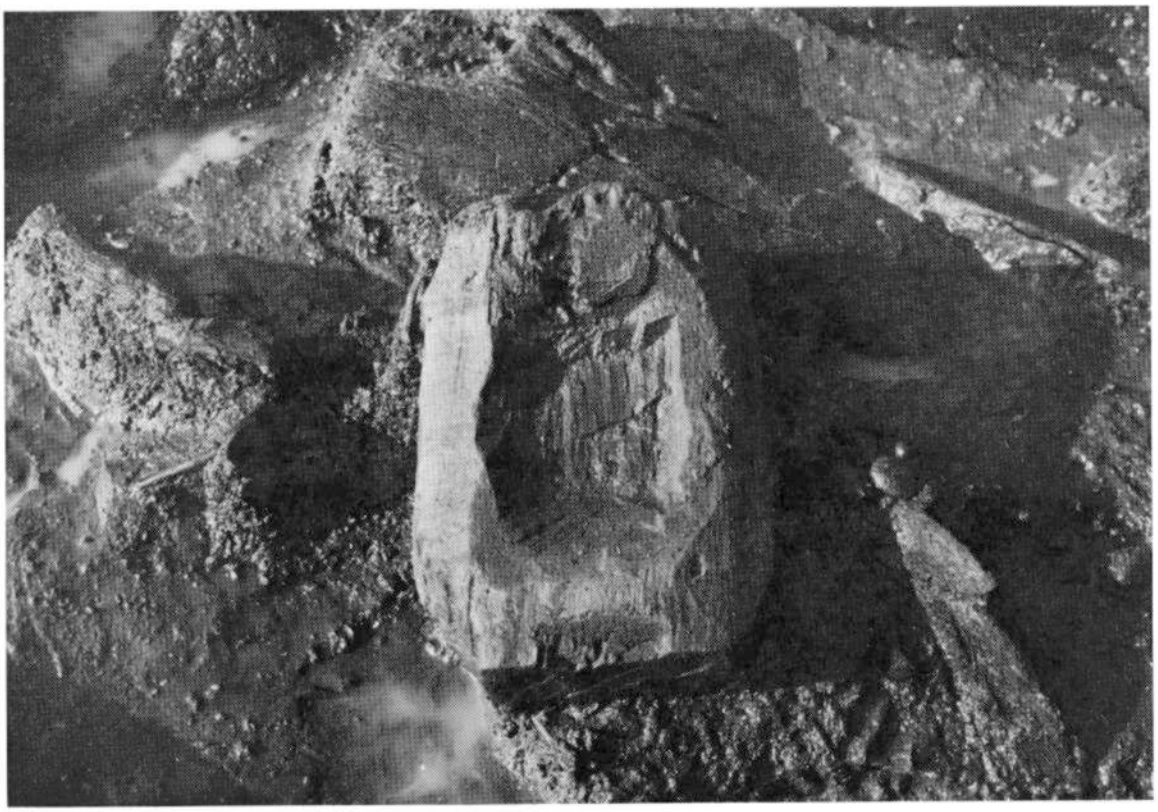
1　3号ドングリ貯蔵穴

2　3号ドングリ貯蔵穴内イチイガシ出土状態

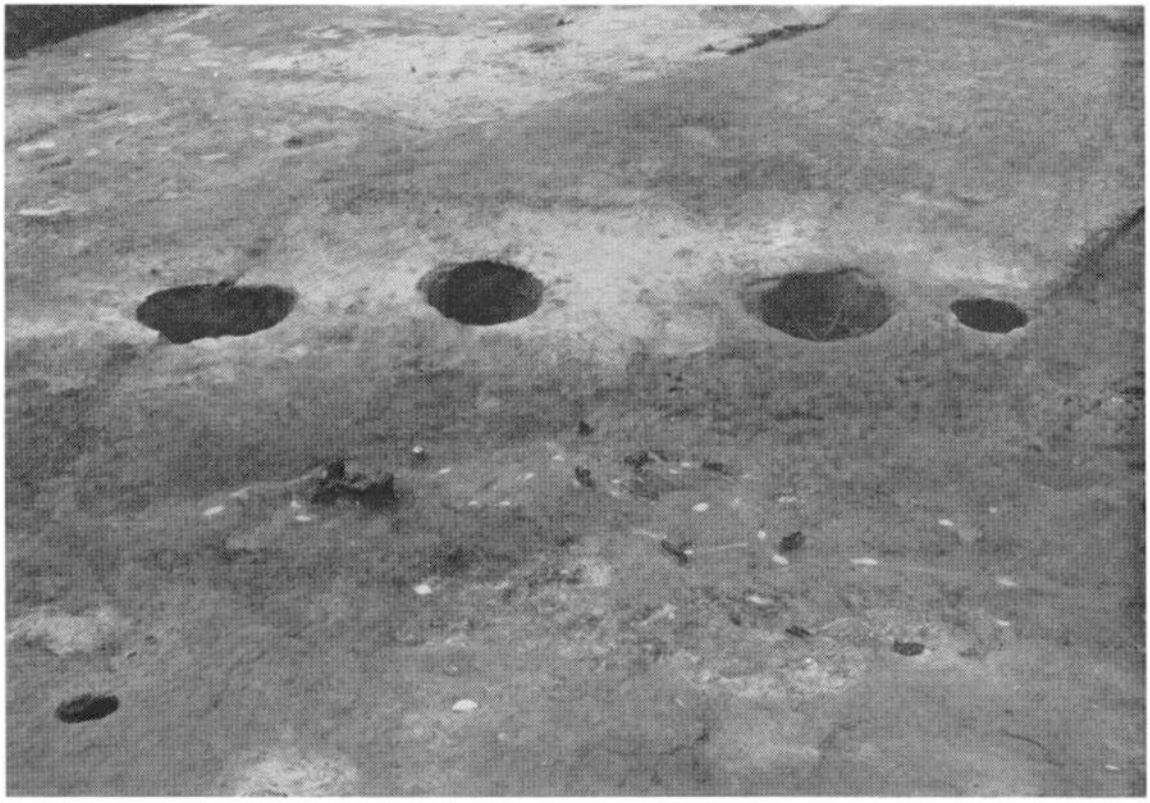
1　3・4号ドングリ貯蔵穴

2　4号ドングリ貯蔵穴

1　6号ドングリ貯蔵穴

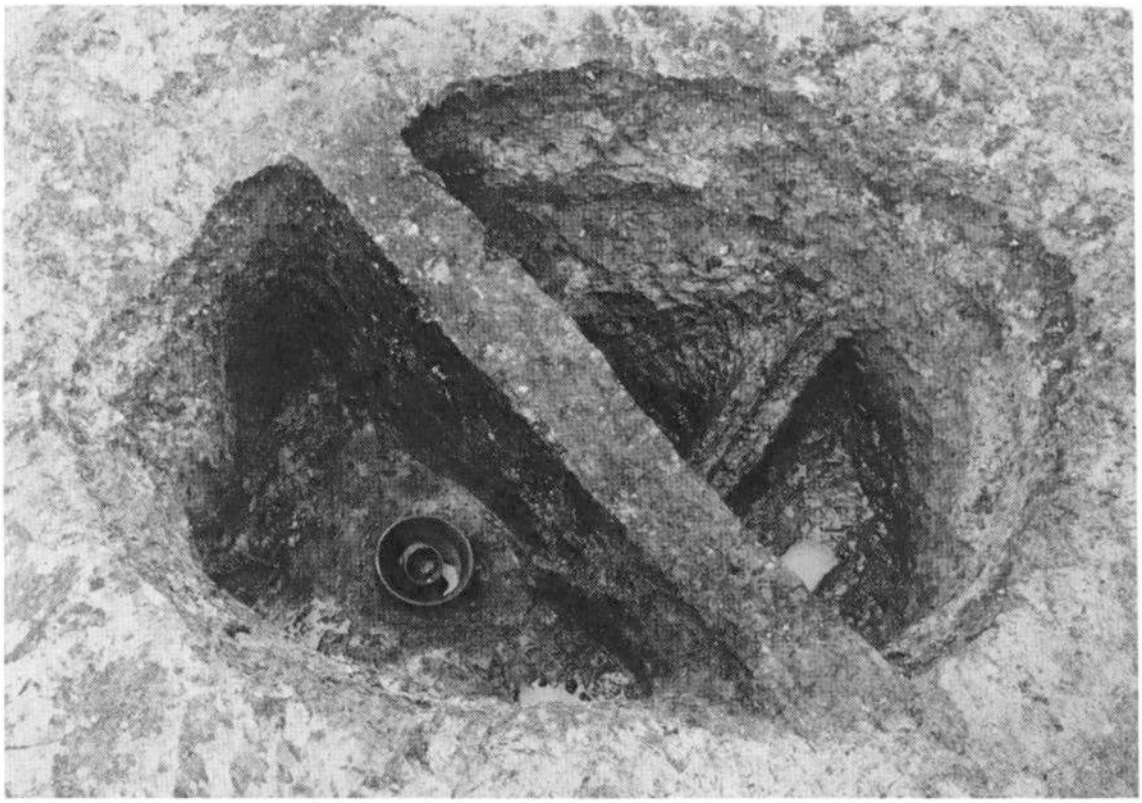


2　6号ドングリ貯蔵穴内脚付槽(未製品)出土状態

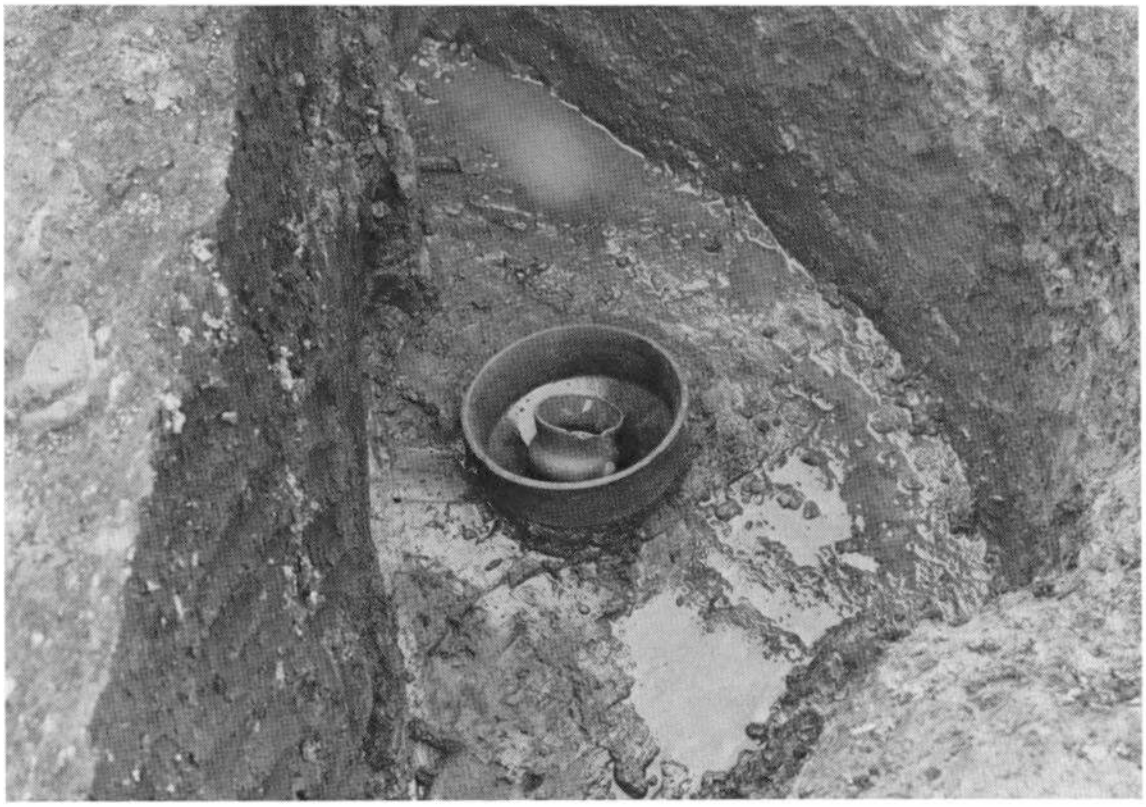


1　8・7・10・11号ドングリ貯蔵穴群

2　8・7号ドングリ貯蔵穴

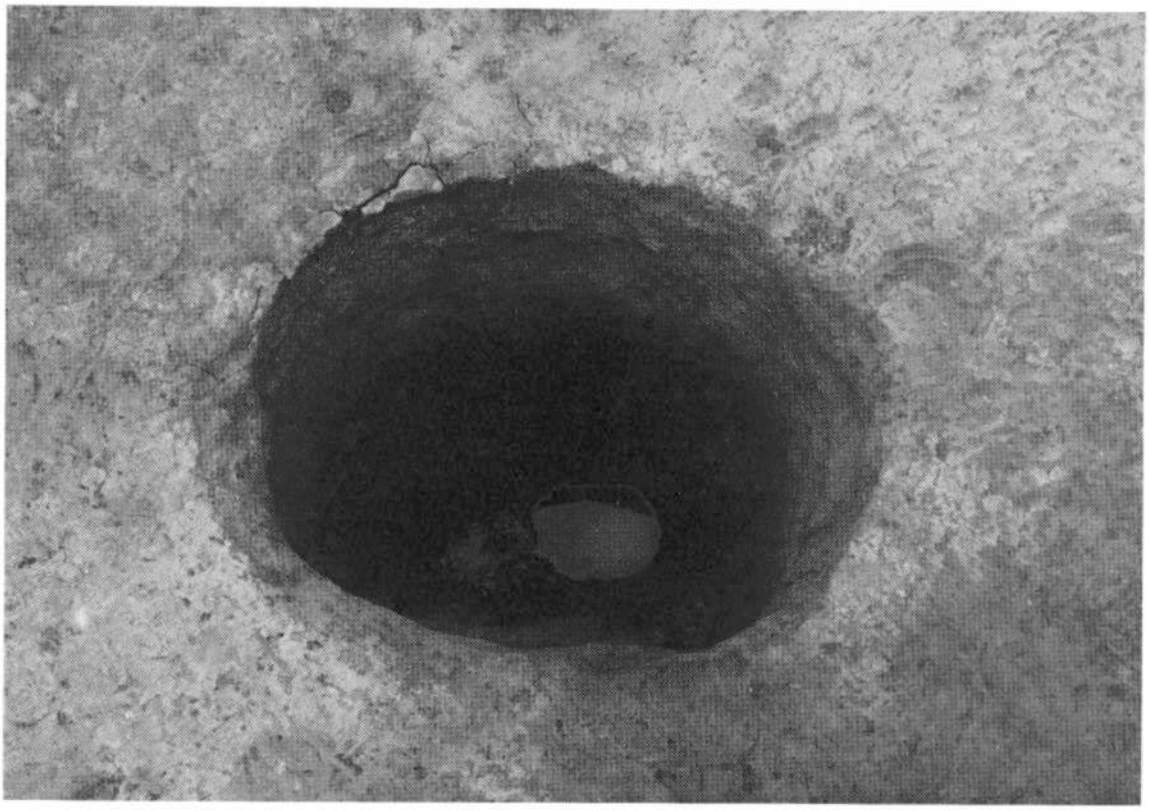


1　7号ドングリ貯蔵穴



2　7号ドングリ貯蔵穴内土器出土状態

1　7号ドングリ貯蔵穴全景



2　完掘後の7号ドングリ貯蔵穴

1　7号ドングリ貯蔵穴壁面に付着した植物繊維

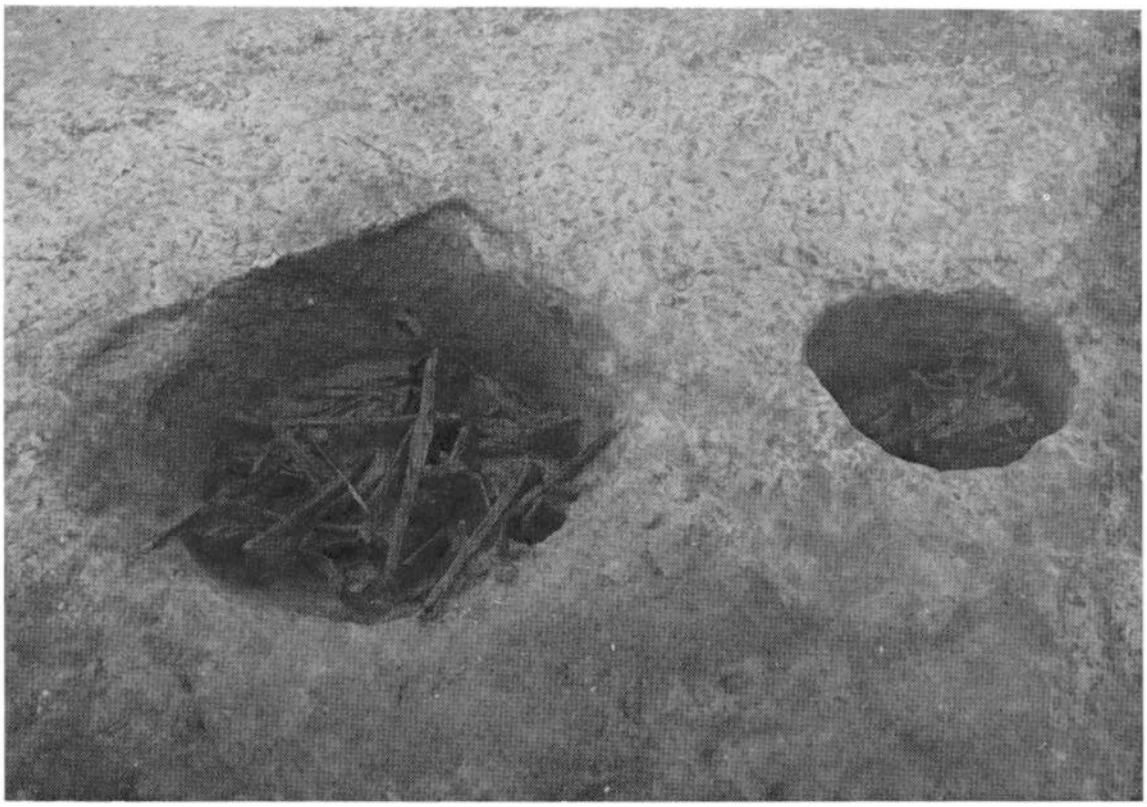
2　8号ドリンク貯蔵穴内堆積土と土器出土状態

1　8号ドングリ貯蔵穴

2　完掘後の8号ドングリ貯蔵穴

1　9号ドングリ貯蔵穴

2　完掘後の9号ドングリ貯蔵穴



1　10・11号ドングリ貯蔵穴

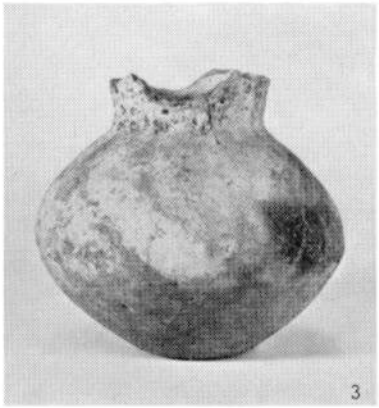
2　10号ドングリ貯蔵穴

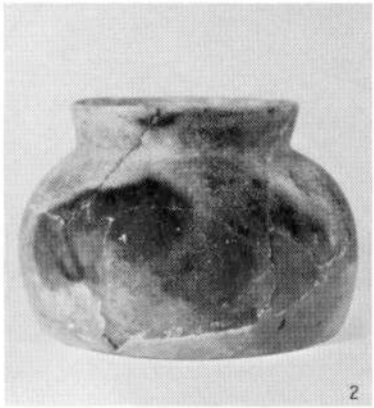
1　10号ドングリ貯蔵穴内イチイガシ出土状態

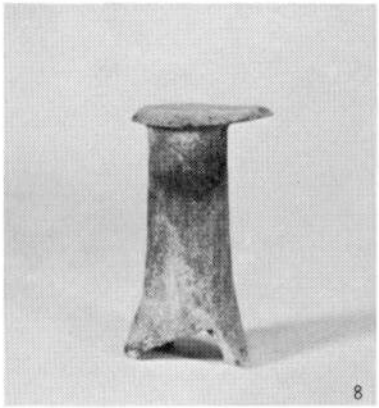
2　完掘後の10号ドングリ貯蔵穴

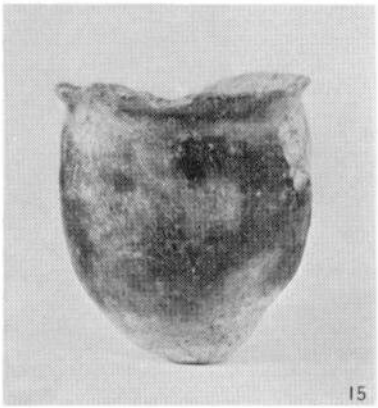
1　11号ドングリ貯蔵穴

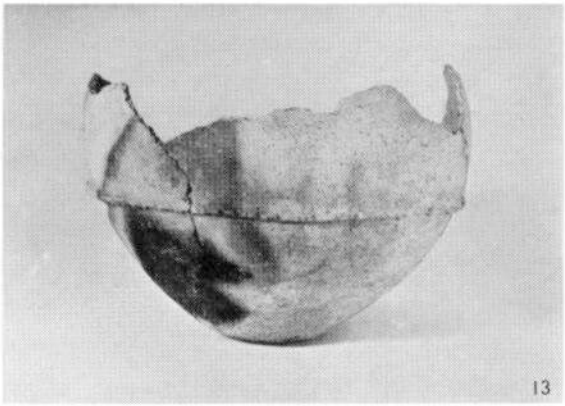
2　完掘後の11号ドングリ貯蔵穴

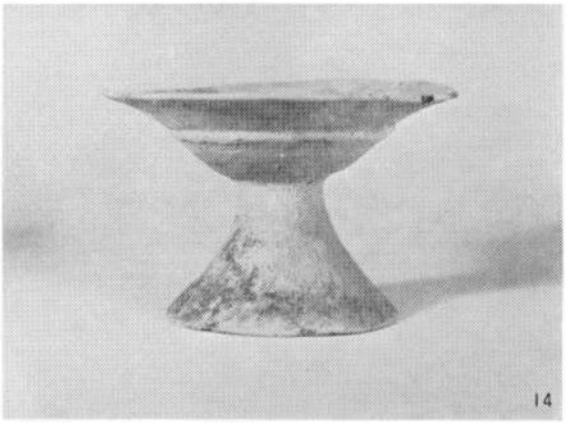




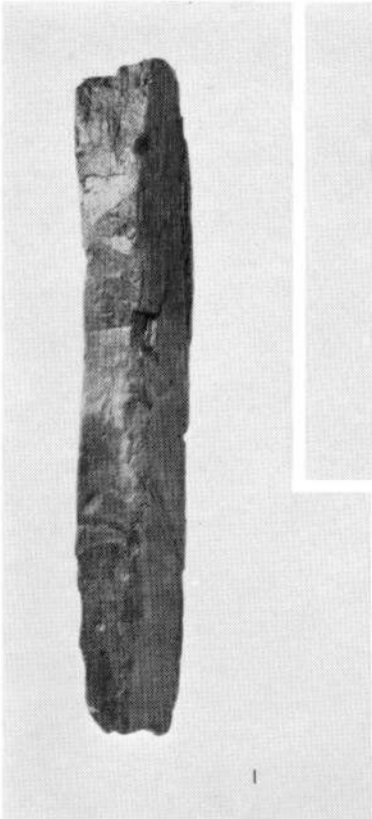


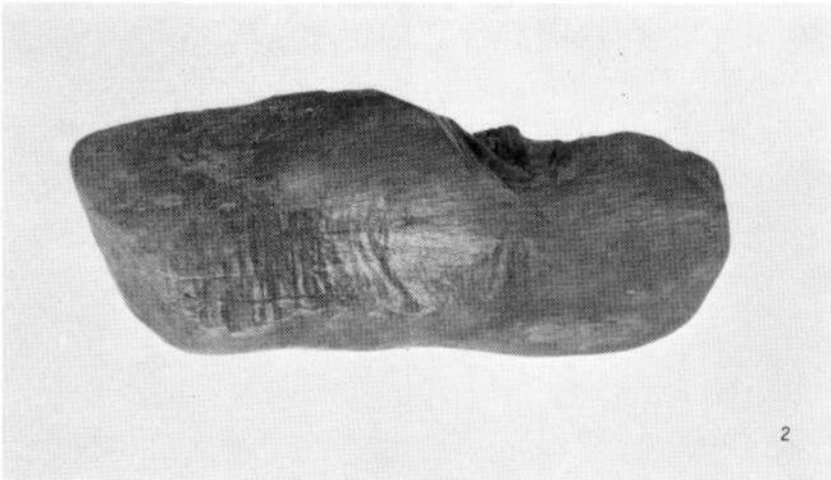


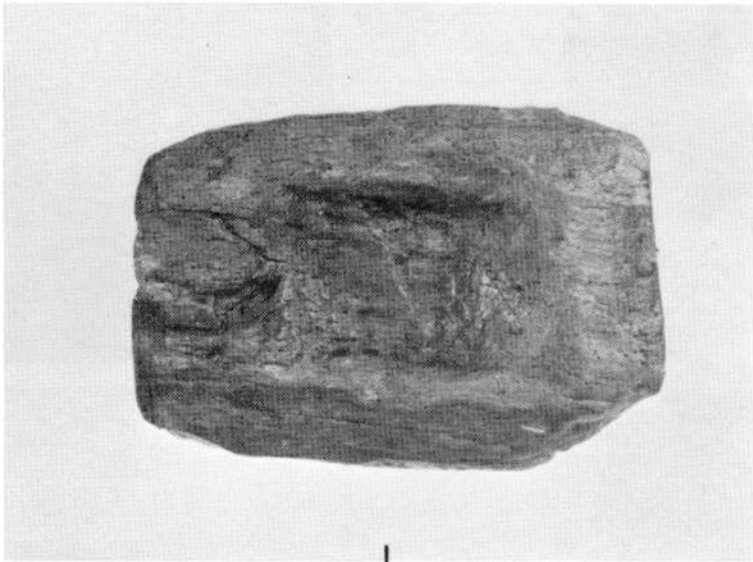


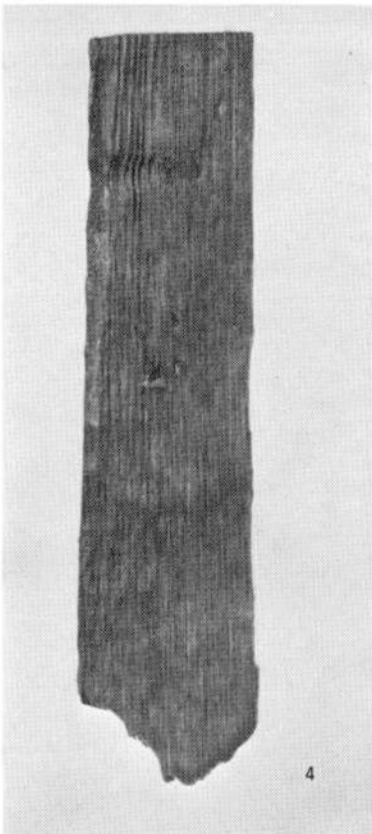


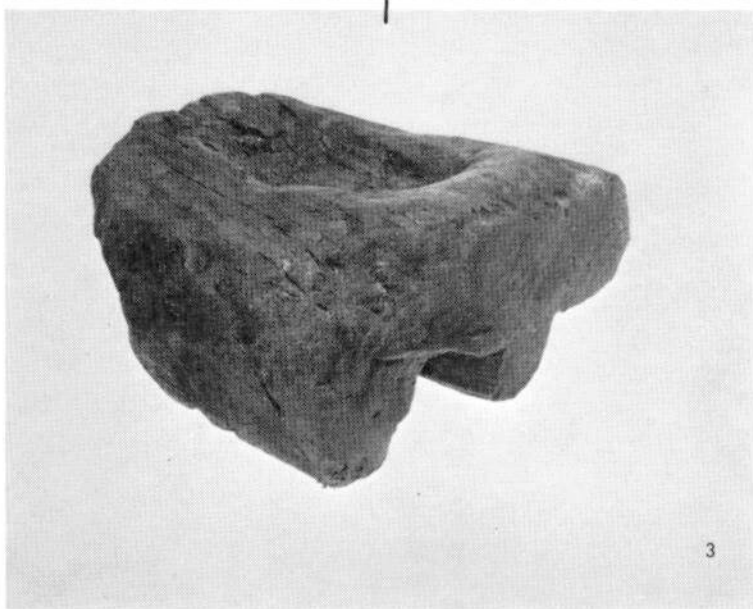
ドングリ貯蔵穴出土土器







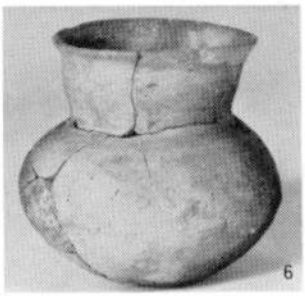


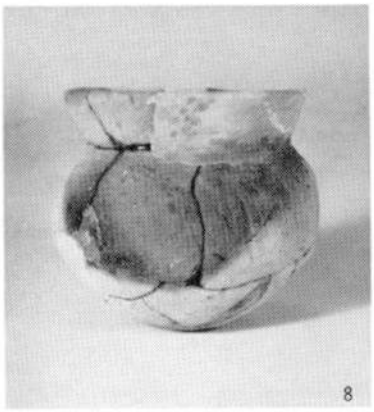


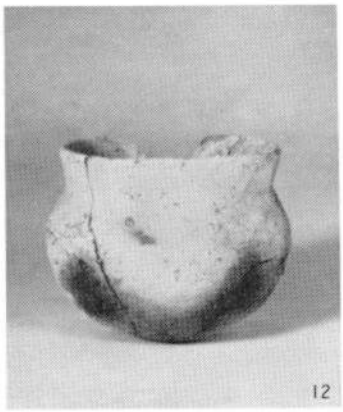
ドングリ貯蔵穴出土木製品

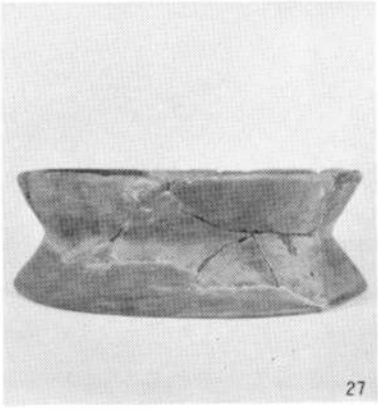
上　古墳時代の溝状遺構

下　平安時代の竪穴状遺構

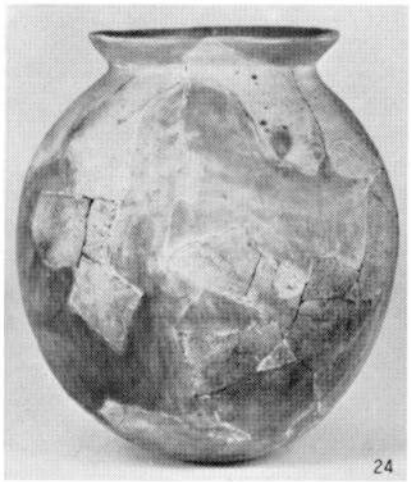


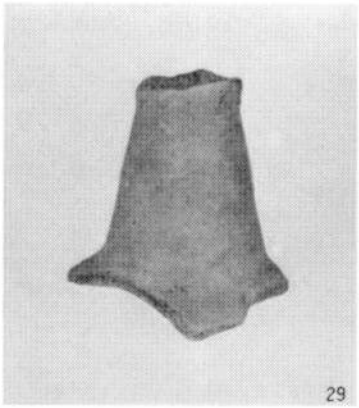




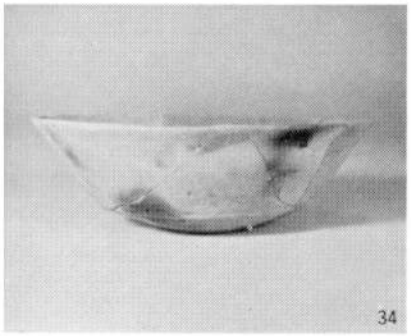


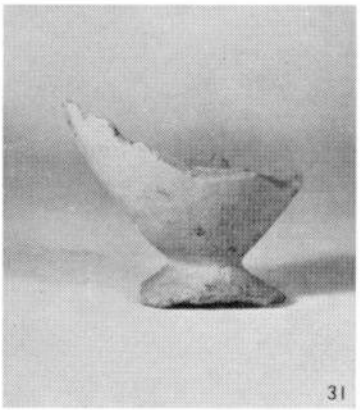
包含層出土土師器 1


24

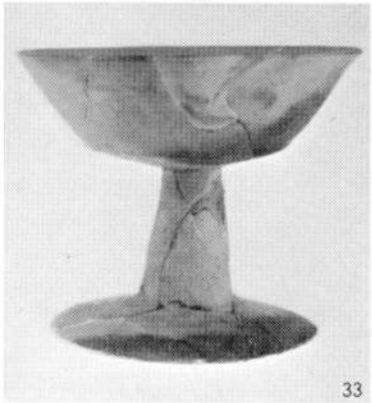

29

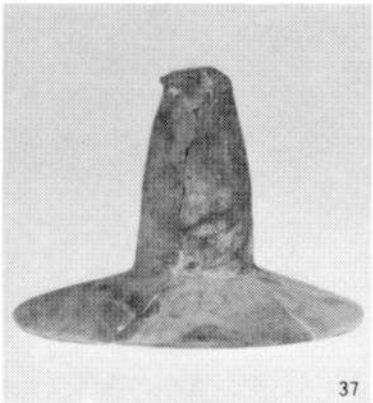
30

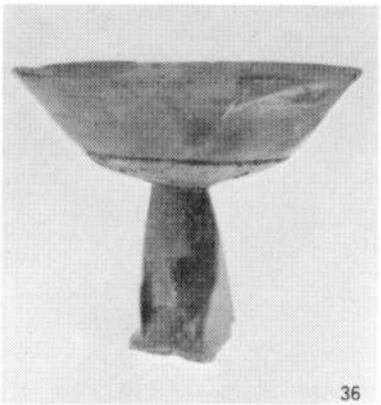

34

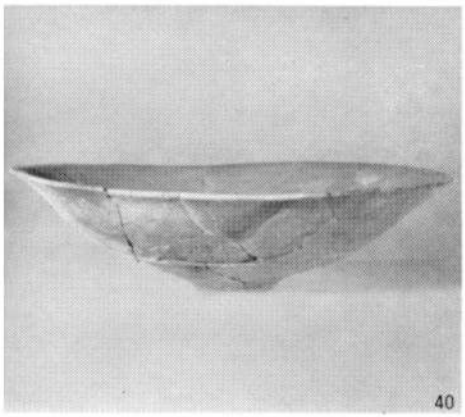

31

32


33

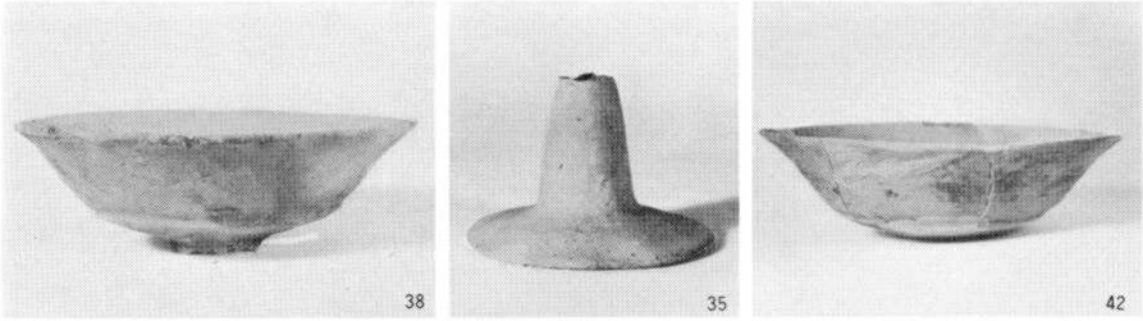

37


36

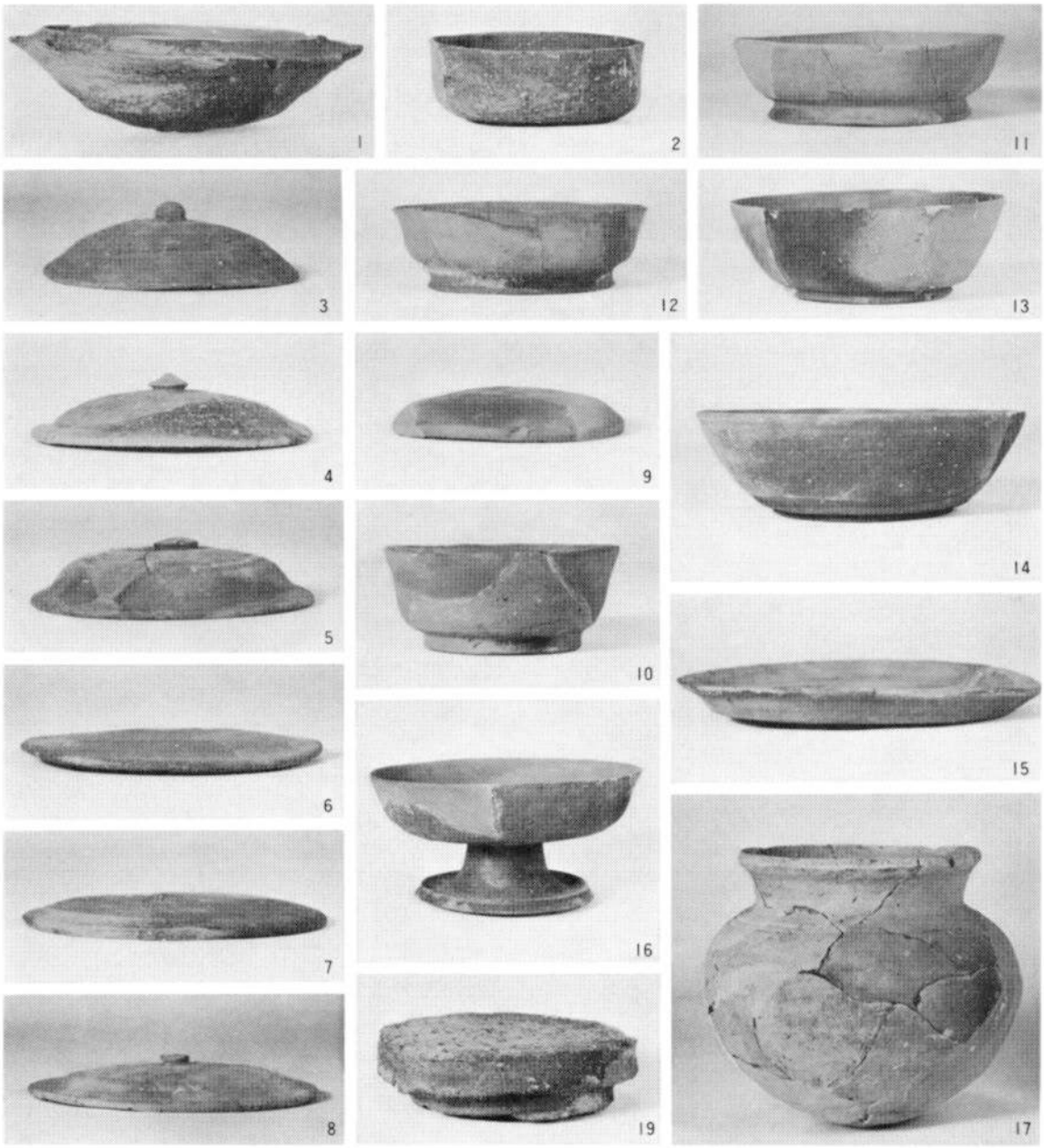

40

41

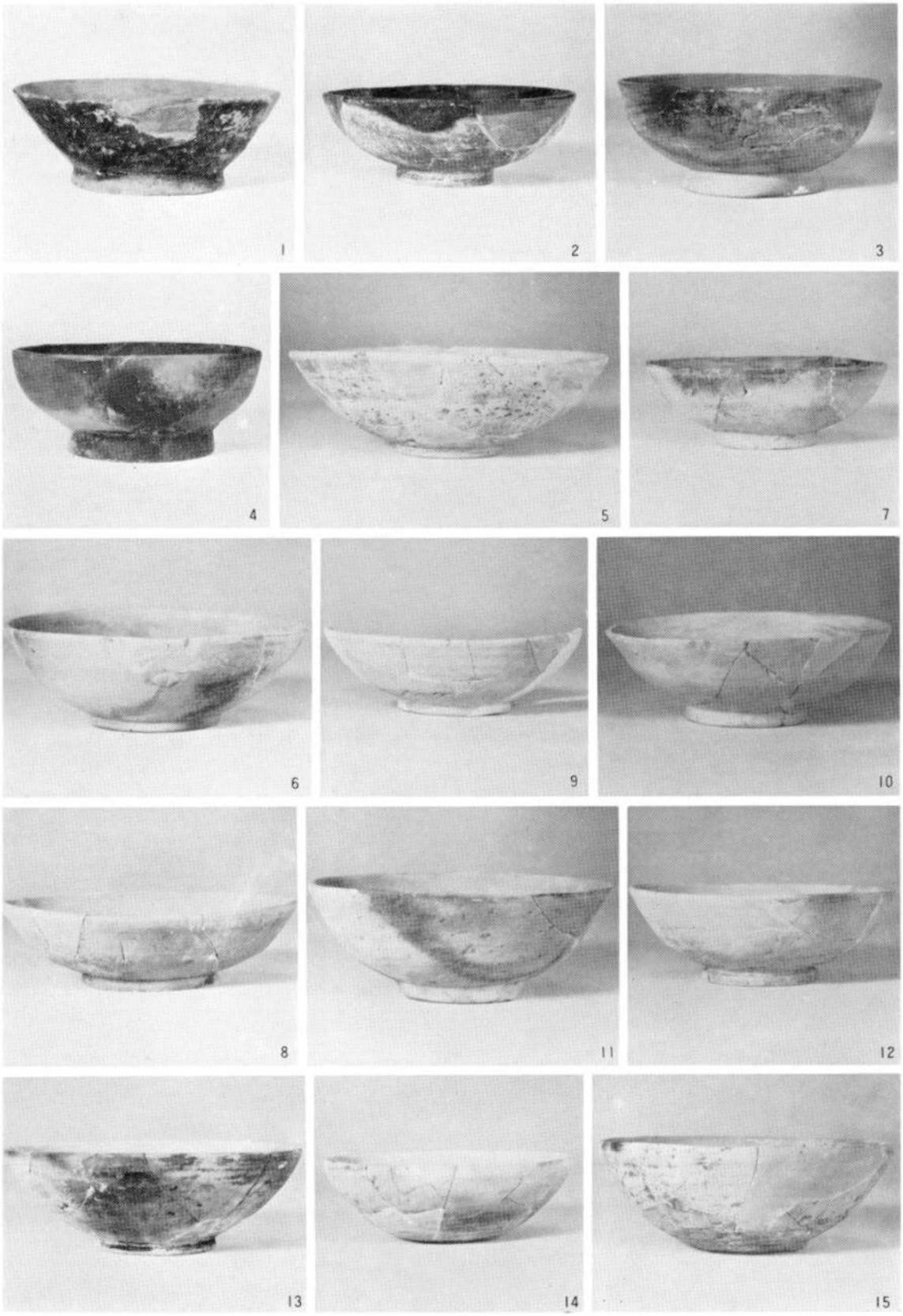
43



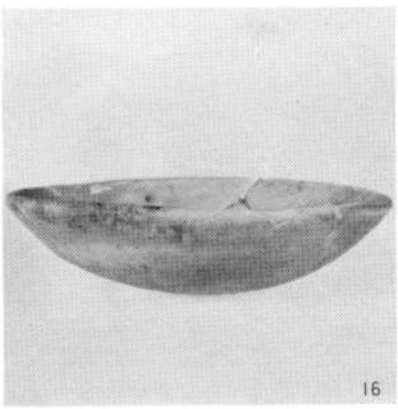
1　包含層出土土師器 3

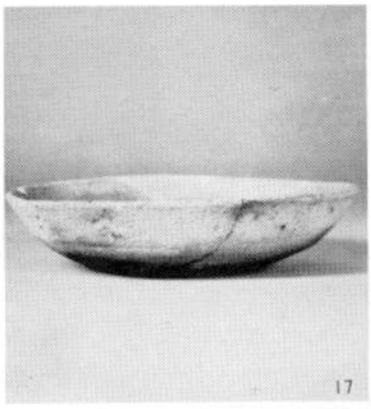


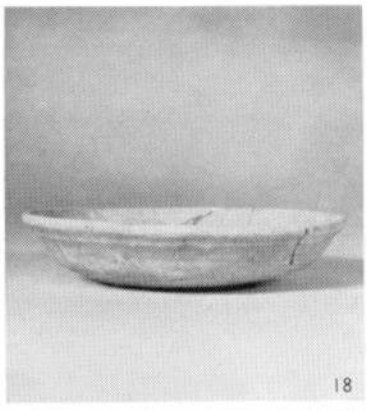
2　包含層出土須恵器



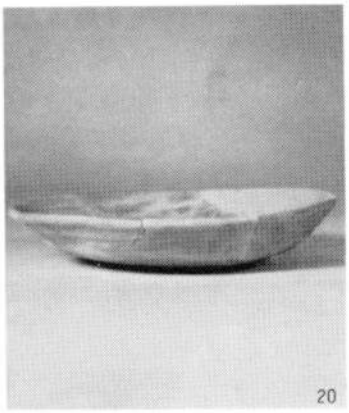
竪穴状遺構出土土器 1

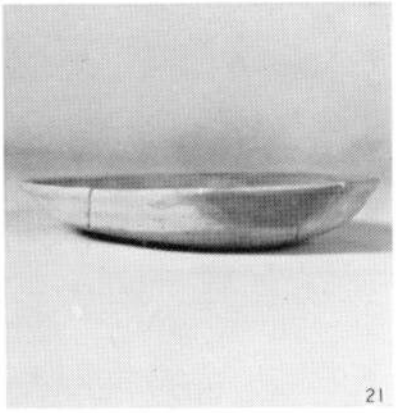

16


17


18

19


20

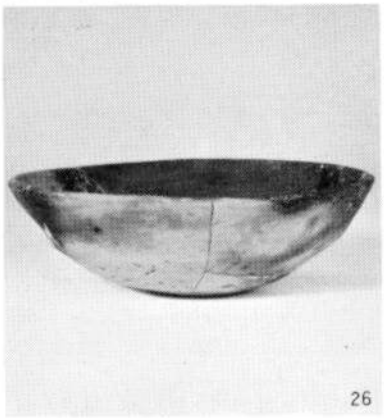

21

22

23

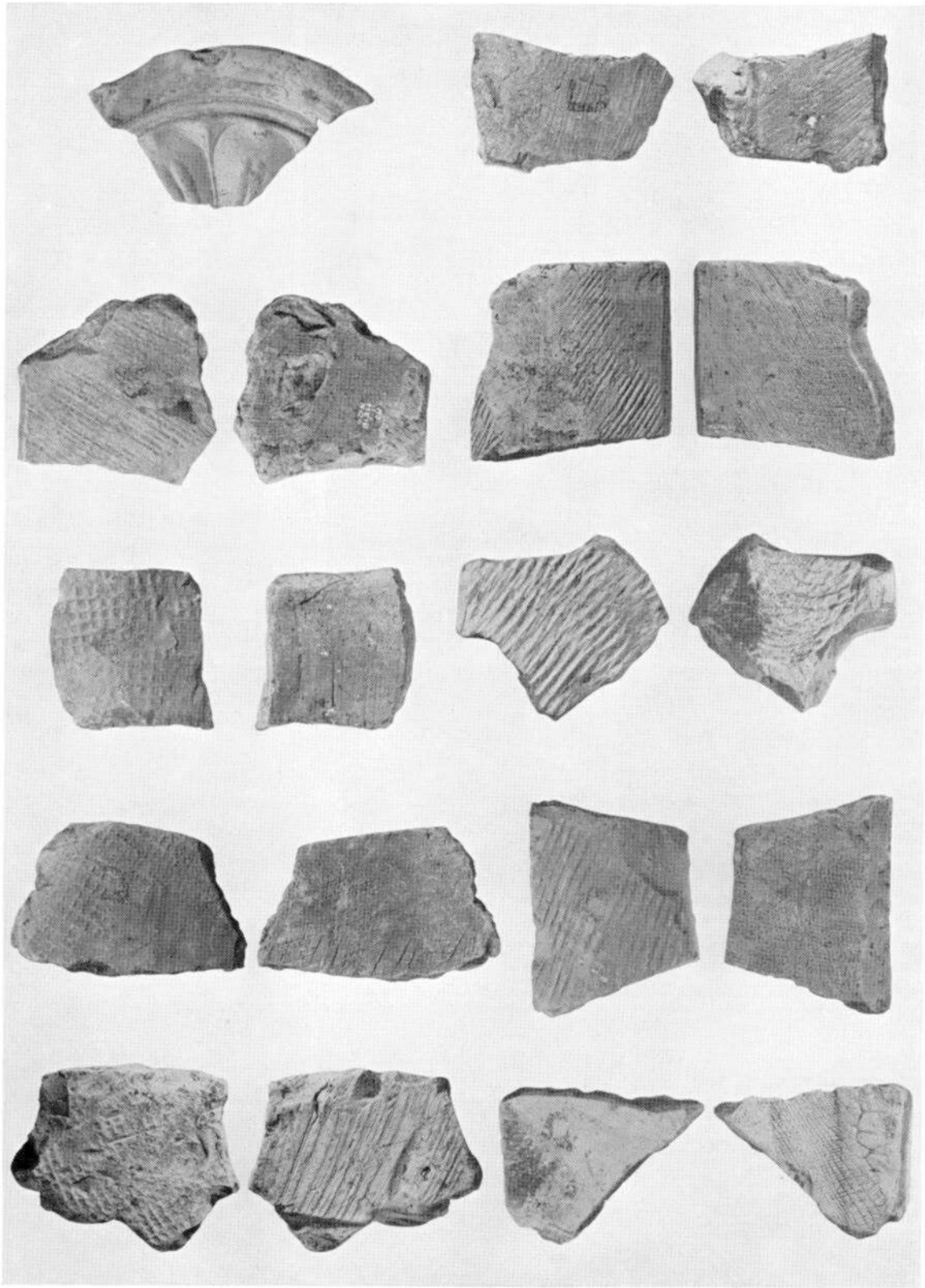
25

24

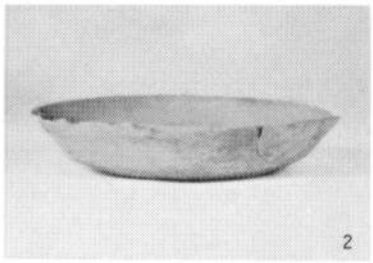

26

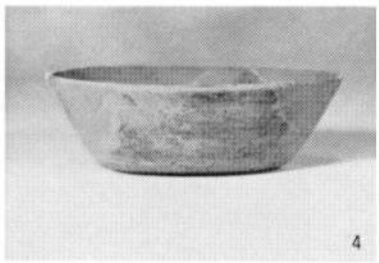
27

竪穴状遺構出土土器 2

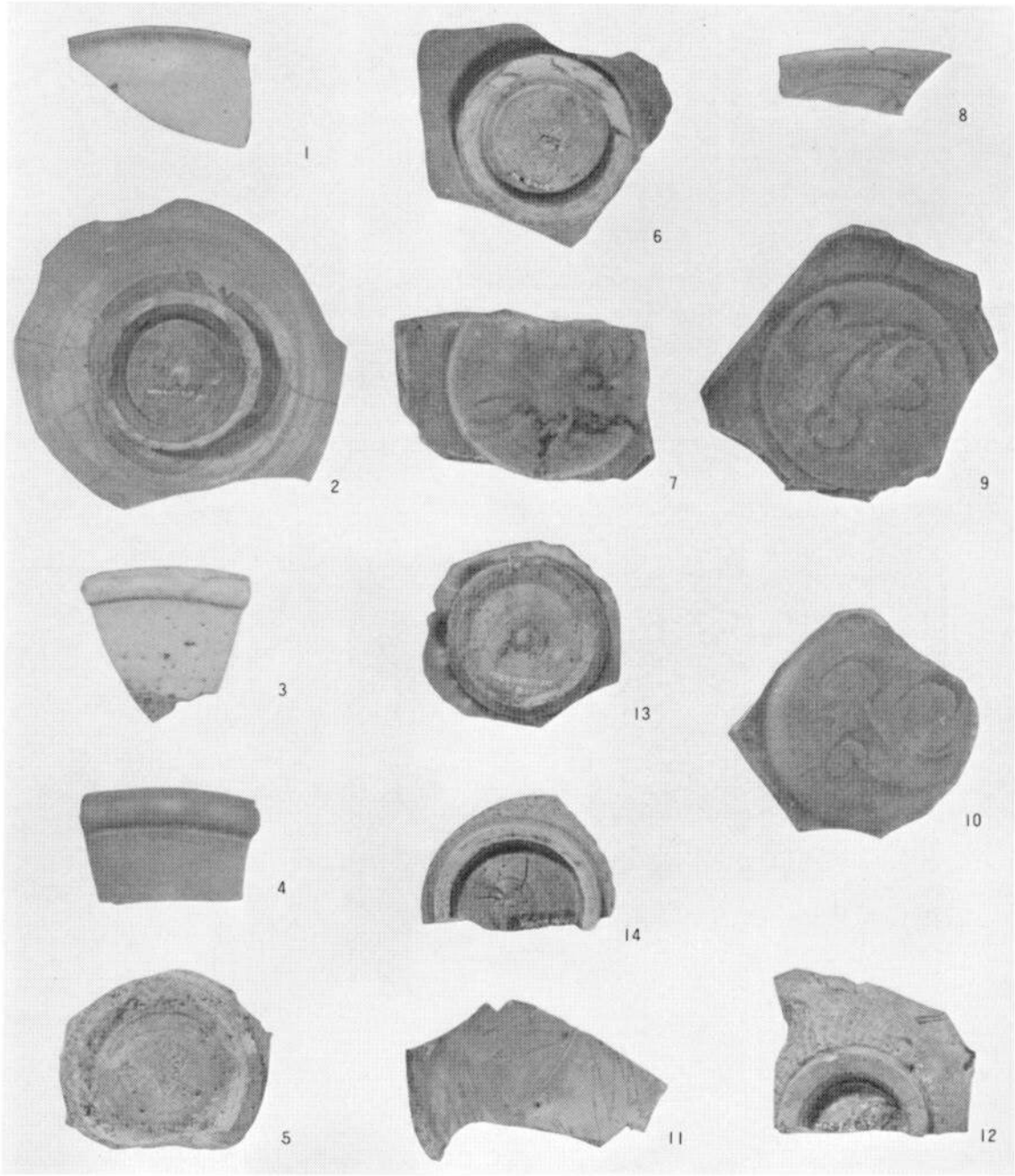


包含層出土瓦

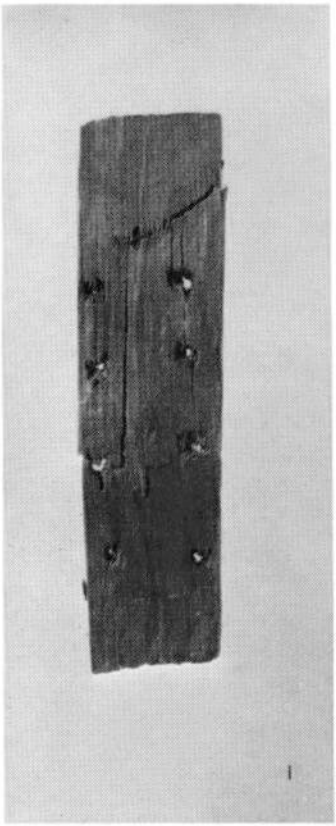


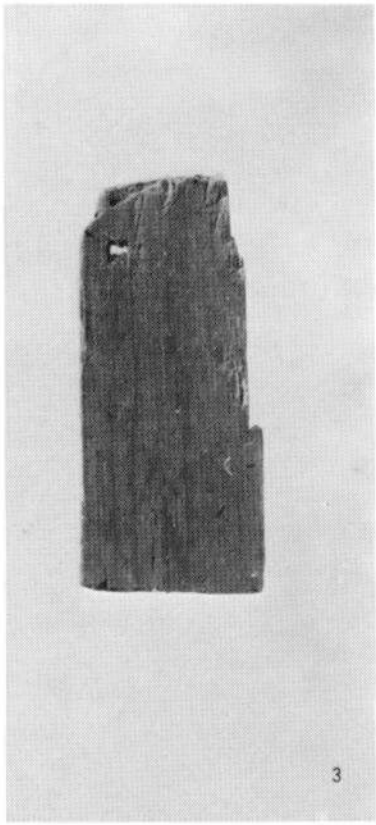


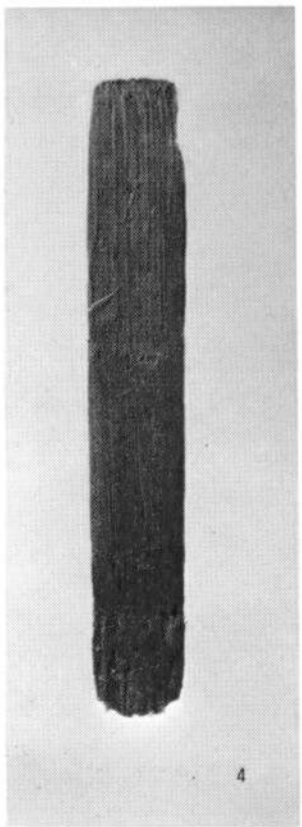
1　包含層出土陶器・土師器

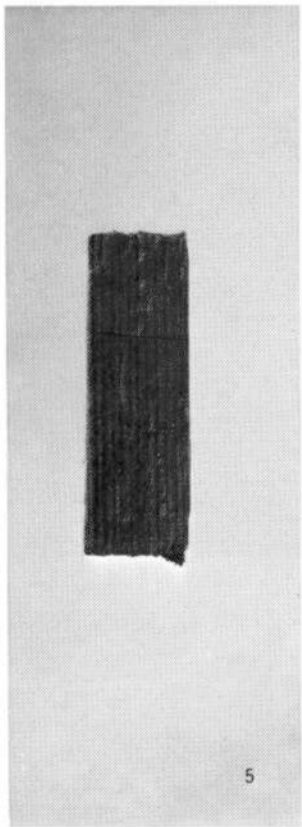


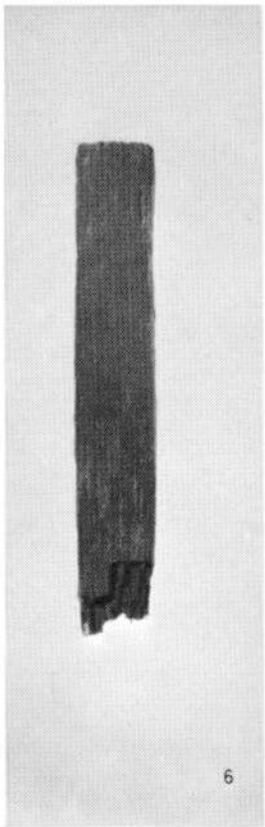
2　包含層出土磁器

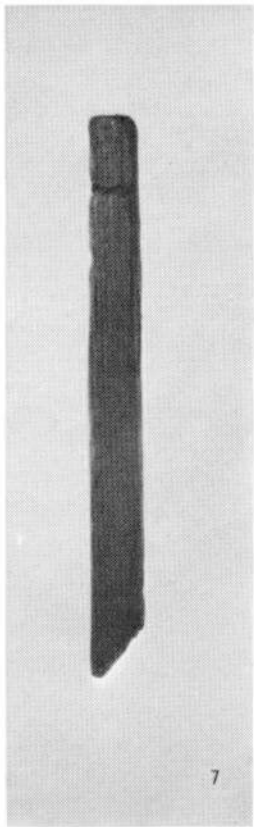




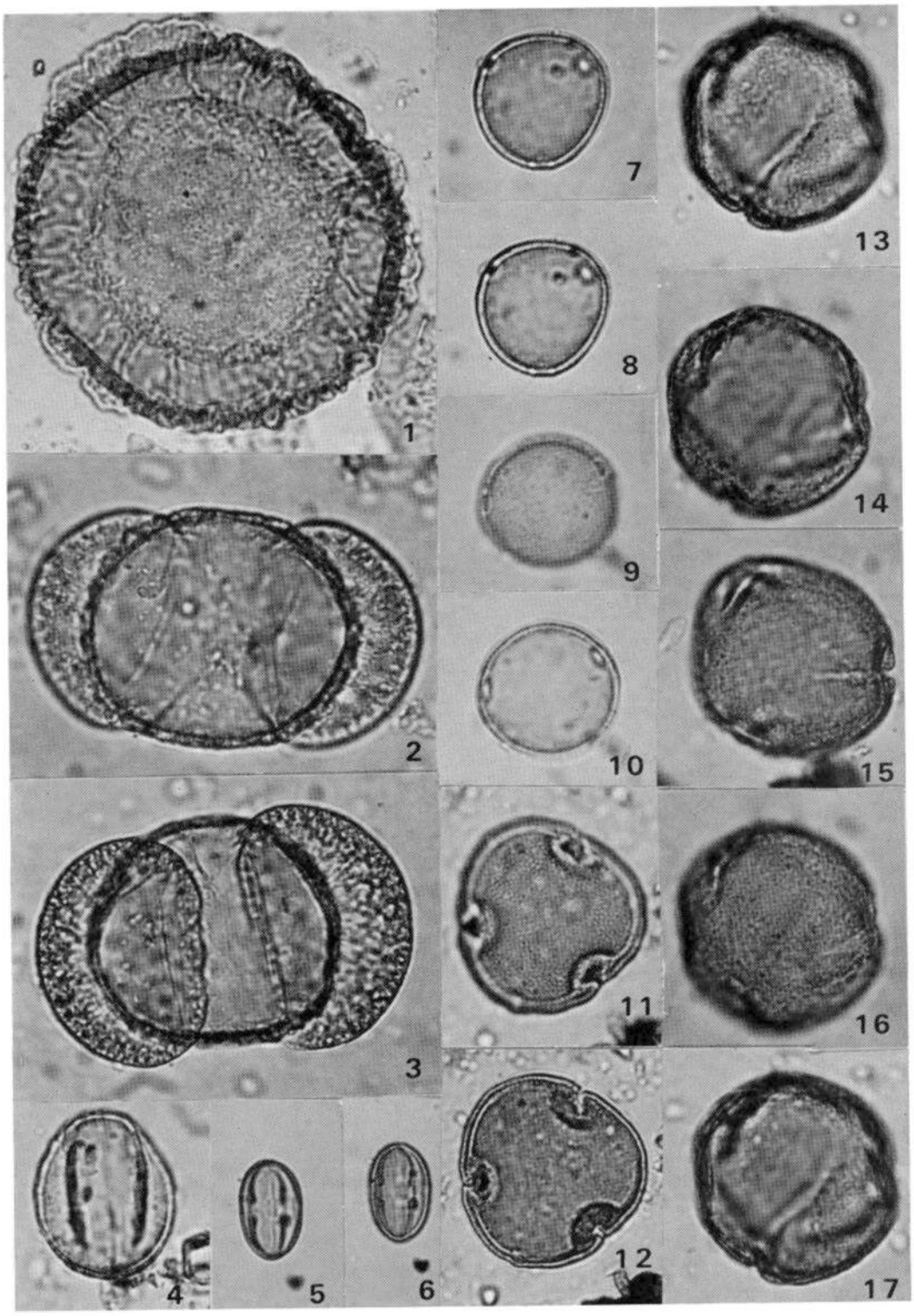








包含層出土木製品



1．*Tsuga*(ツガ属)×700

2～3．*Pinus*(マツ属)×700

4．*Quercus*(コナラ属)×700

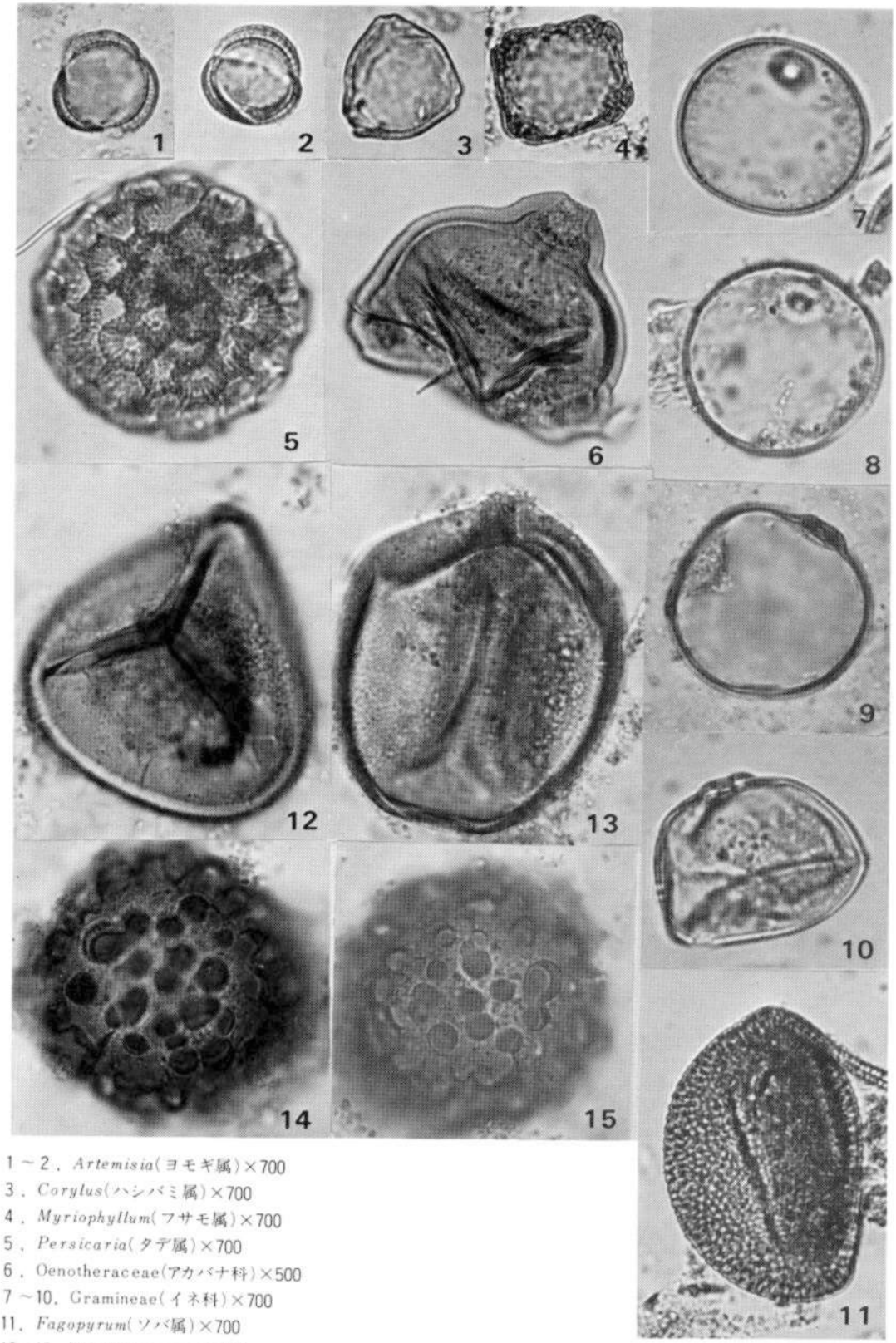
5～6．*Castanopsis*(シイノキ属)×700

7～10．*Celtis*(エノキ属)又は*Aphananthe*（ムクノキ属）×700

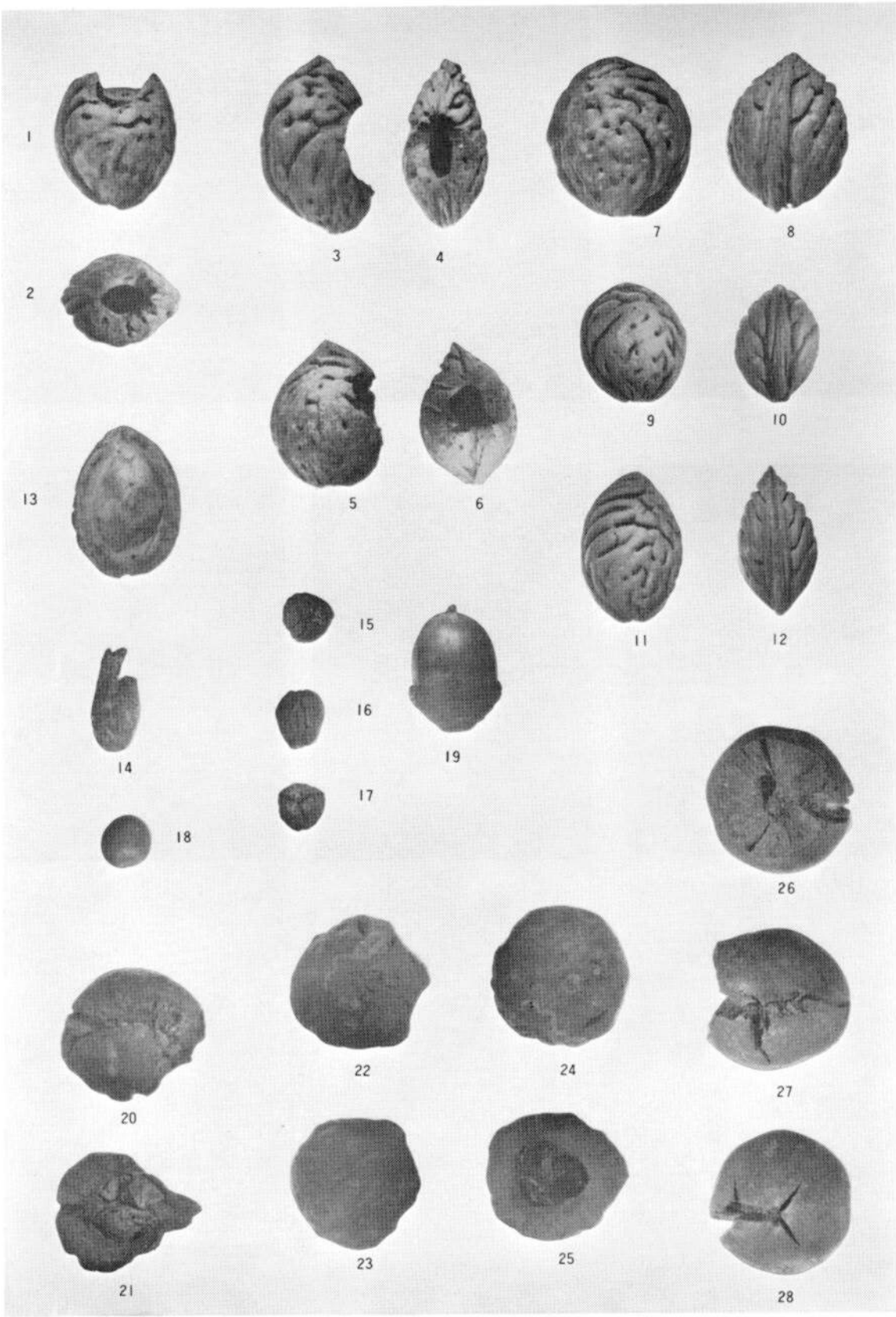
11～12．*Tilia*(シナノキ属)×700

13～17．*Fagus*(ブナ属)×700

谷地区の花粉顕微鏡写真 1



1～2．*Artemisia*(ヨモギ属)×700
3．*Corylus*(ハシバミ属)×700
4．*Myriophyllum*(フサモ属)×700
5．*Persicaria*(タデ属)×700
6．Oenotheraceae(アカバナ科)×500
7～10．Gramineae(イネ科)×700
11．*Fagopyrum*(ソバ属)×700
12～13．Unknown Spore×700
14～15．Unknown Spore×700



谷地区出土種子

A

（横 断 面）

B

（半径断面）

C

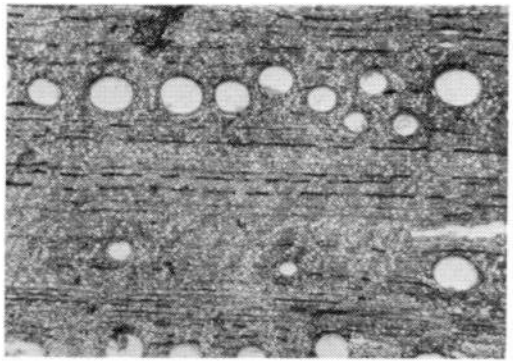
（接線断面）

倍率は10A ・10B ×39

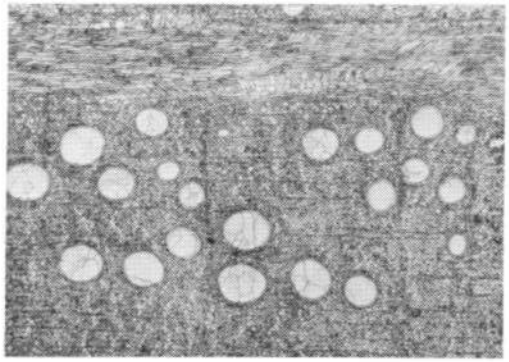
10C ・26A ×33

他は全て ×31

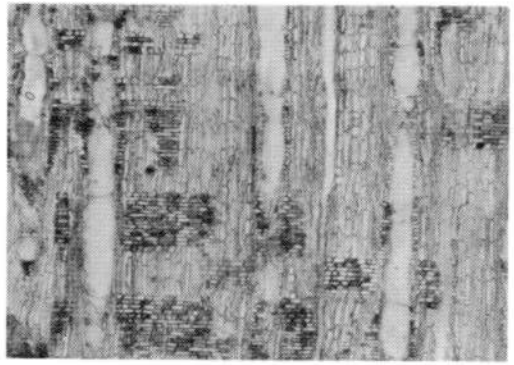
1 A



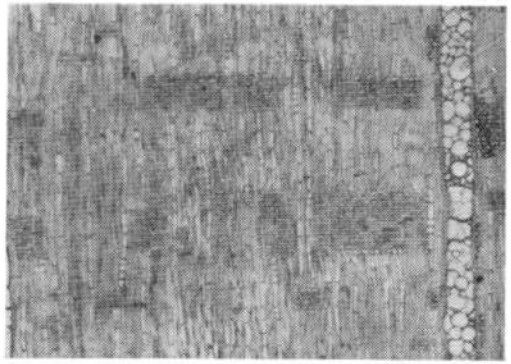
2 A



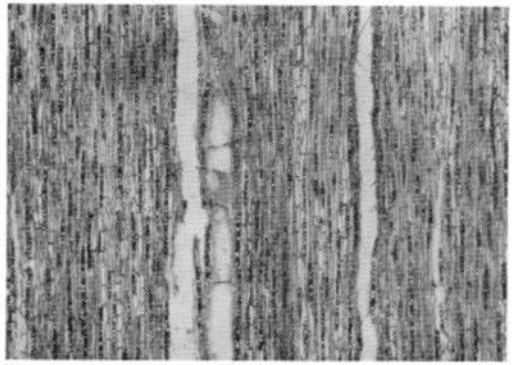
1 B



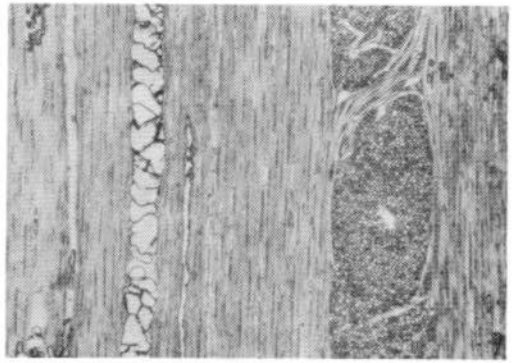
2 B



1 C

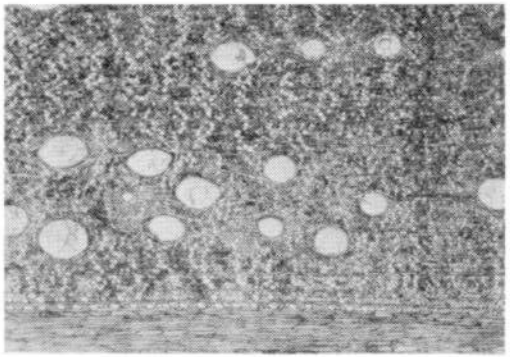


2 C

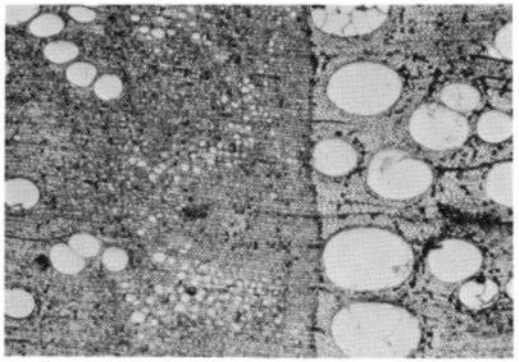


谷地区出土木材顕微鏡写真 1

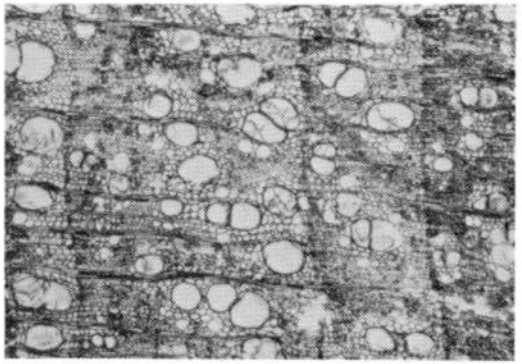
3 A



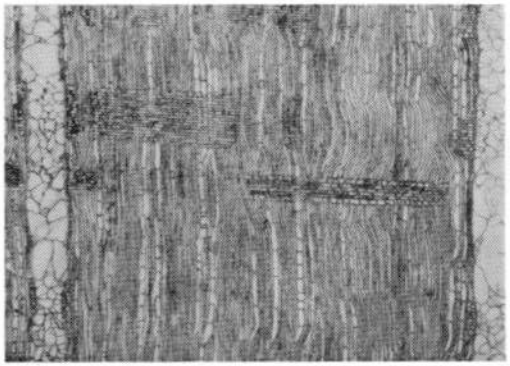
4 A



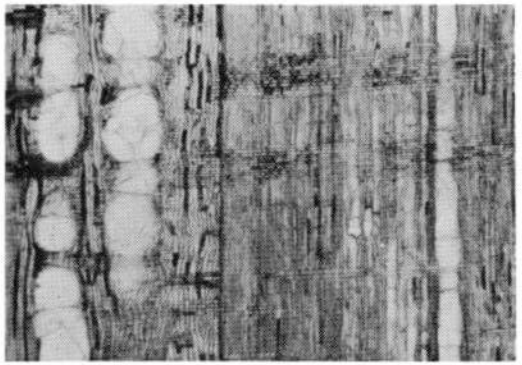
5 A



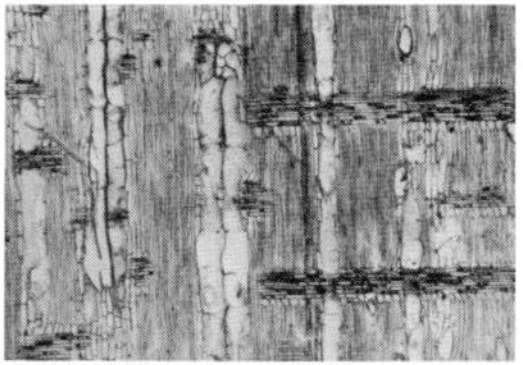
3 B



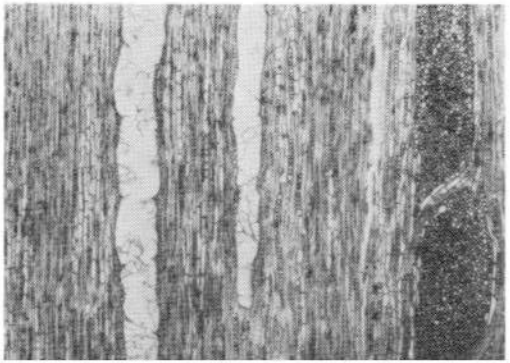
4 B



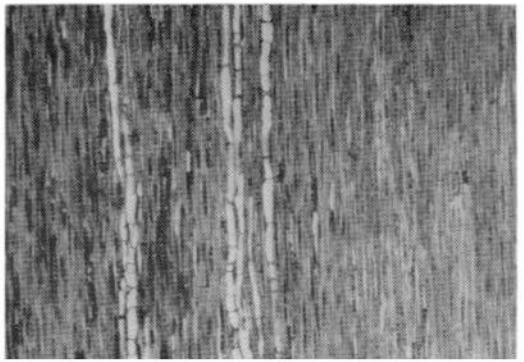
5 B



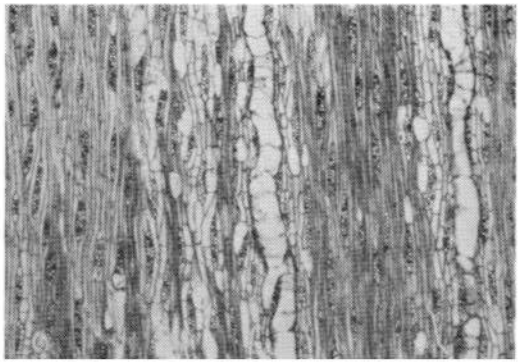
3 C

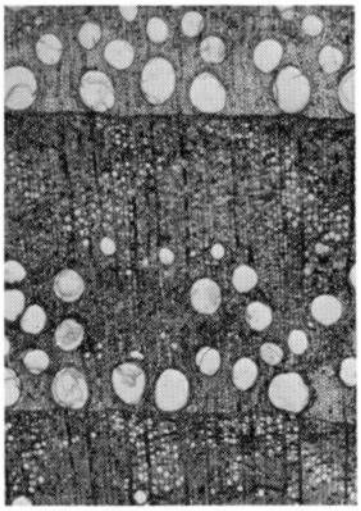


4 C

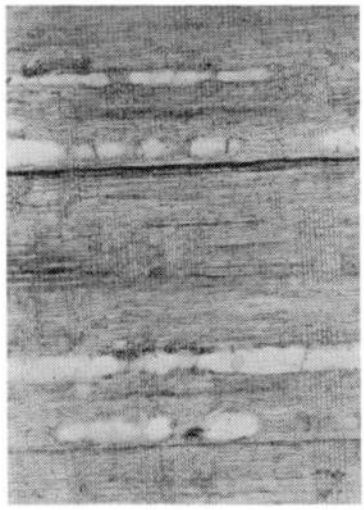


5 C

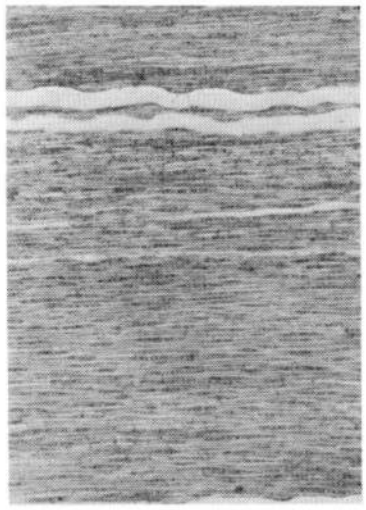




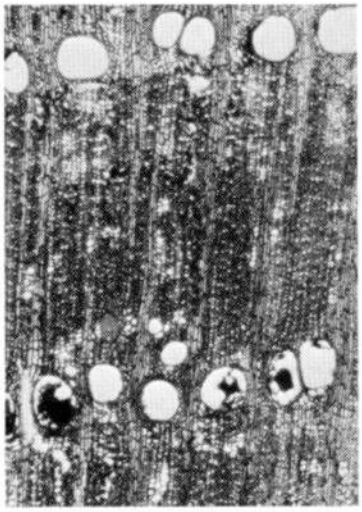
8 A



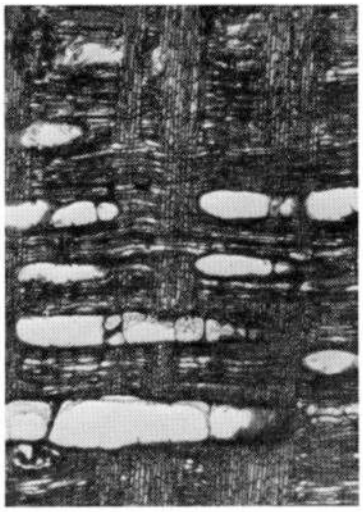
8 B



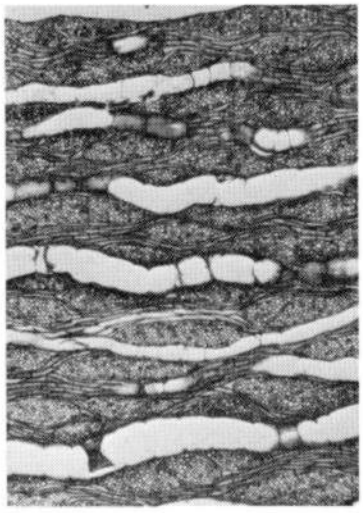
8 C



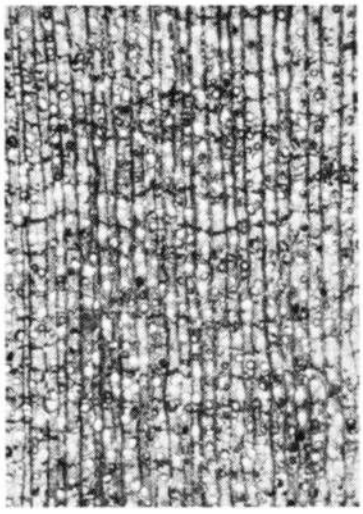
7 A



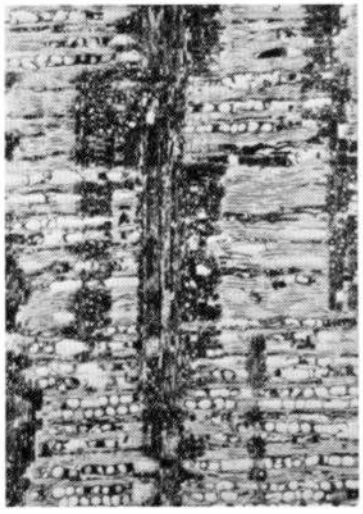
7 B



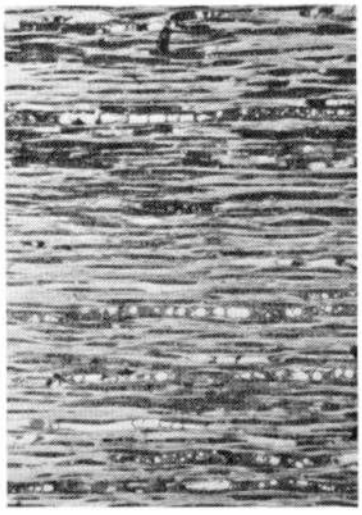
7 C



6 A

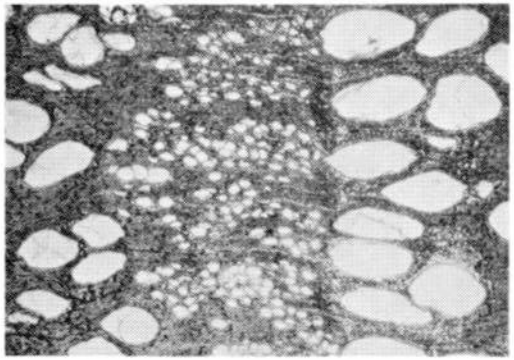


6 B

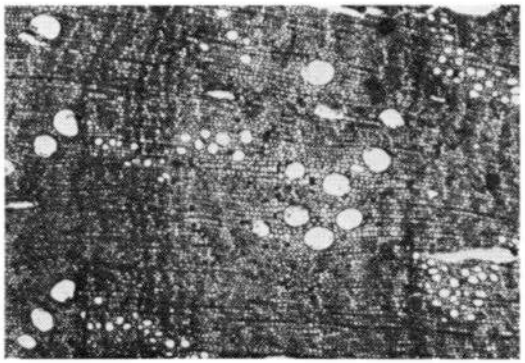


6 C

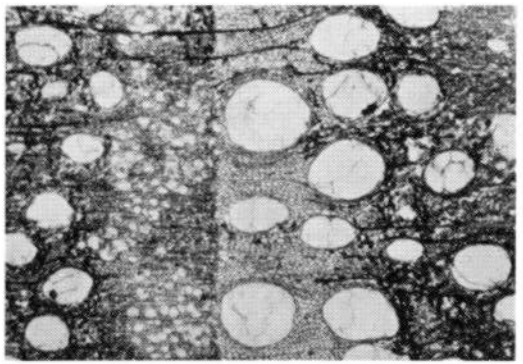
9 A



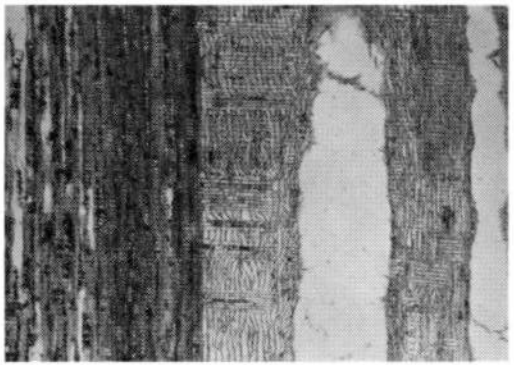
10A



11A

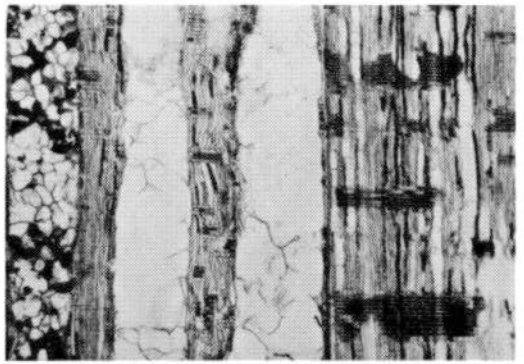


9 B

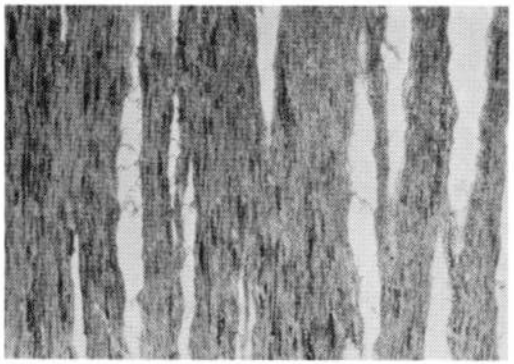


10B

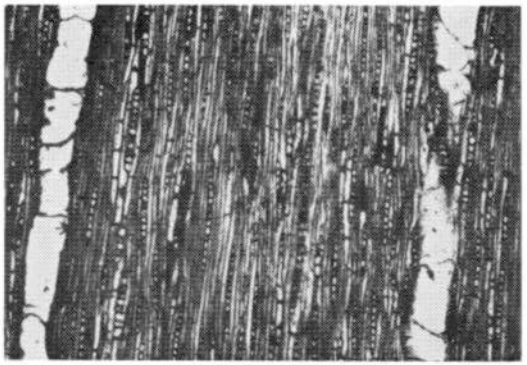
11B



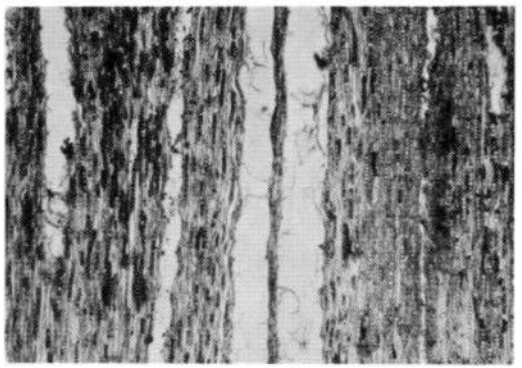
9 C

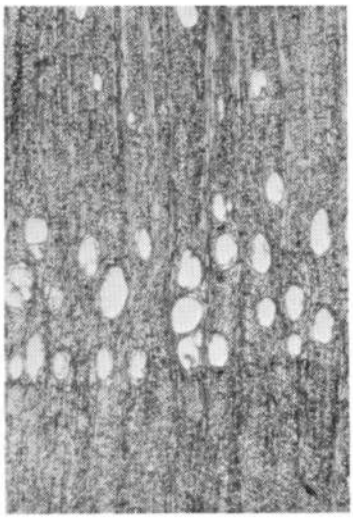


10C

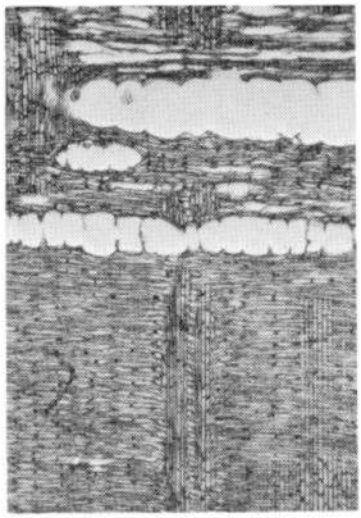


11C

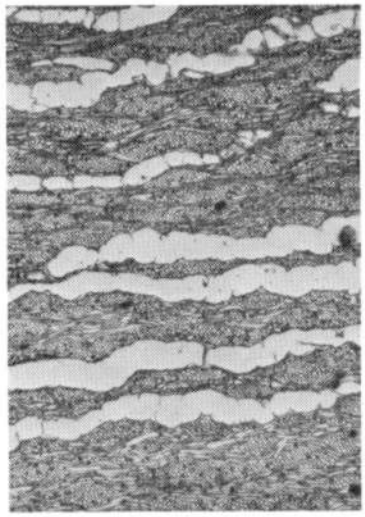




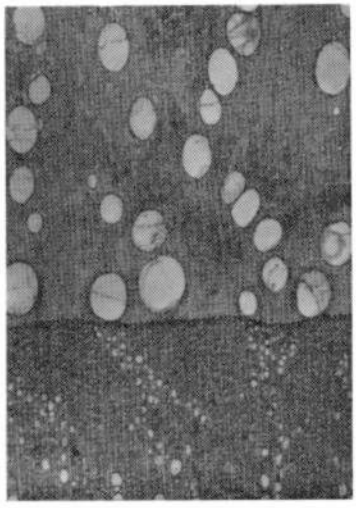
14A



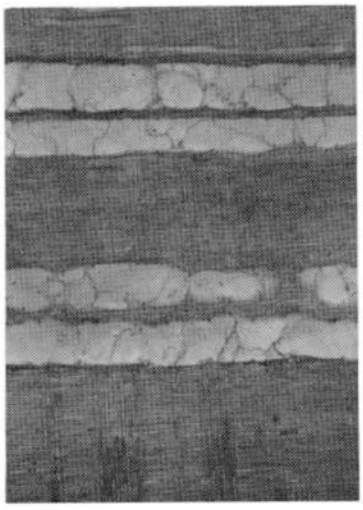
14B



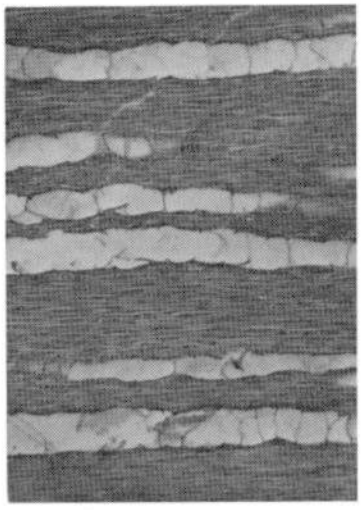
14C



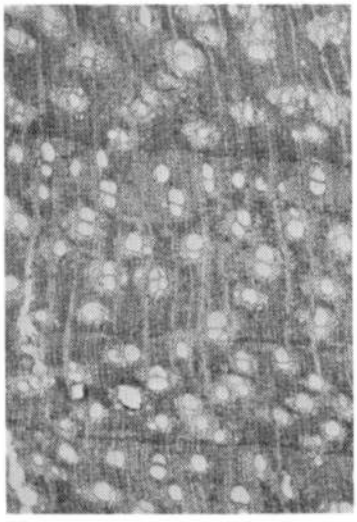
13A



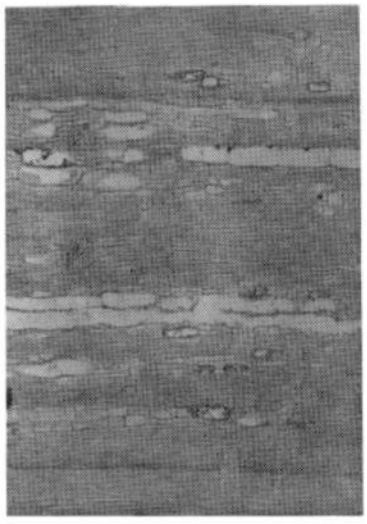
13B



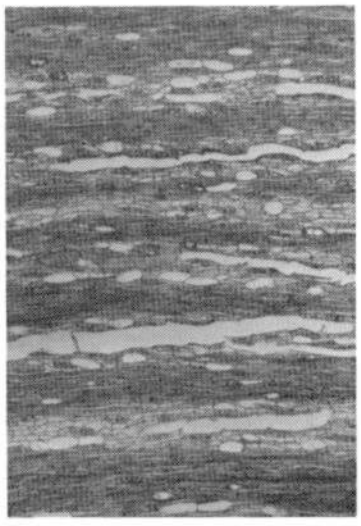
13C



12A

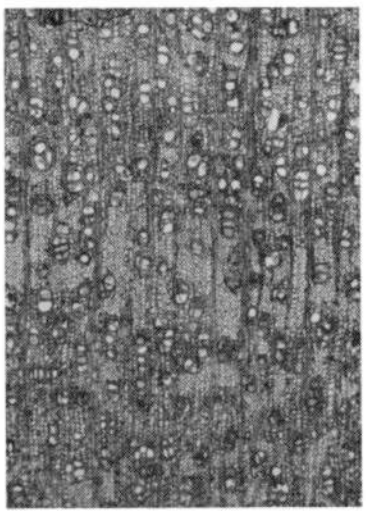


12B

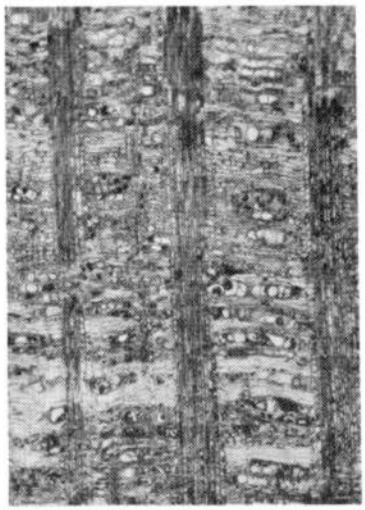


12C

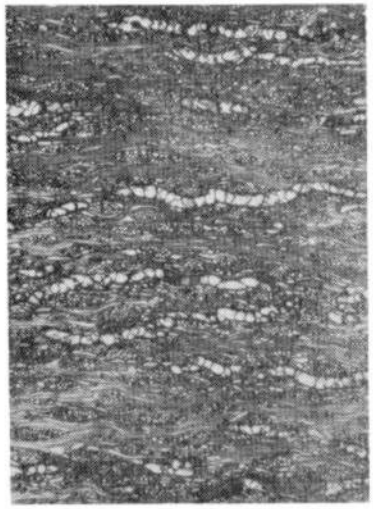
谷地区出土木材顕微鏡写真 5



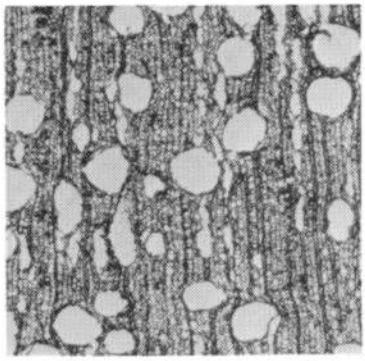
17A



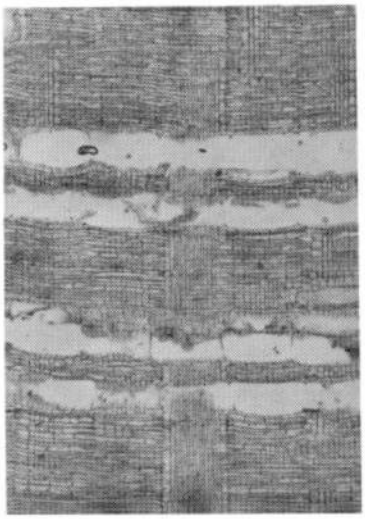
17B



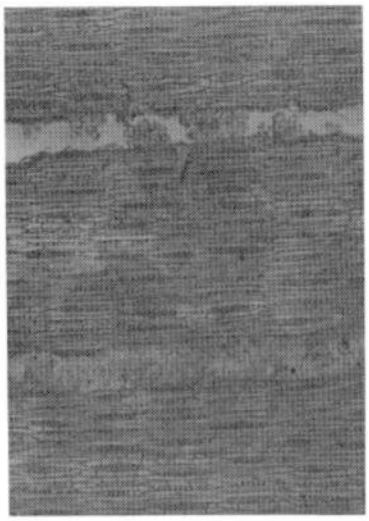
17C



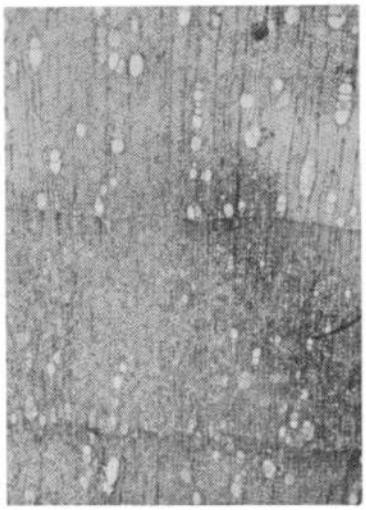
16A



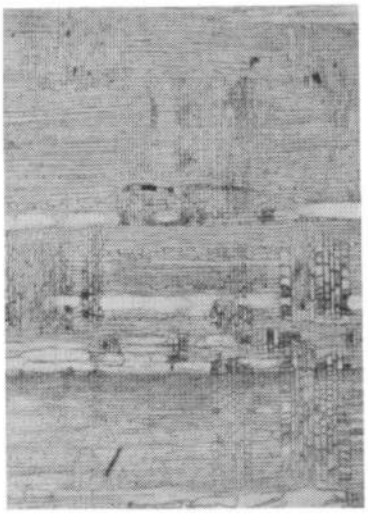
16B



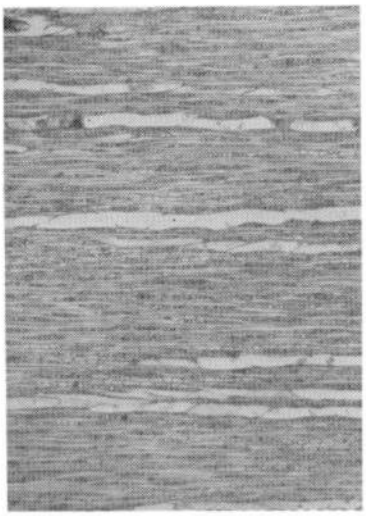
16C



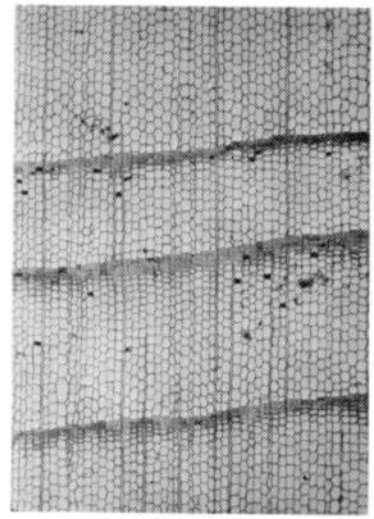
15A



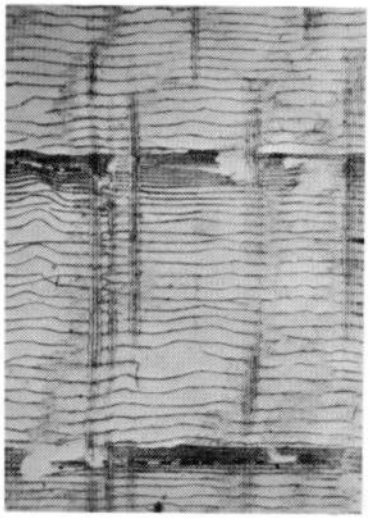
15B



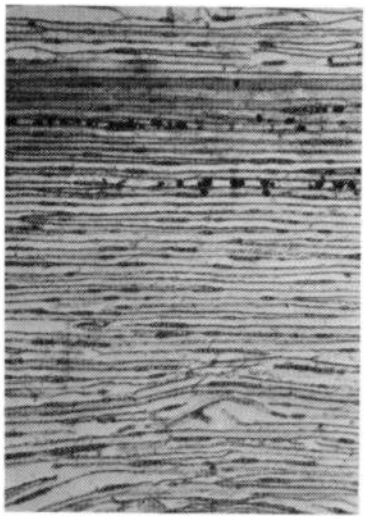
15C



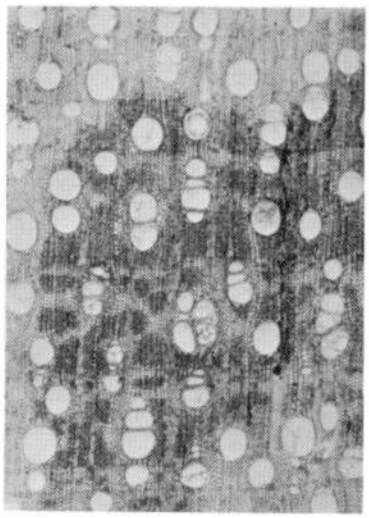
21A



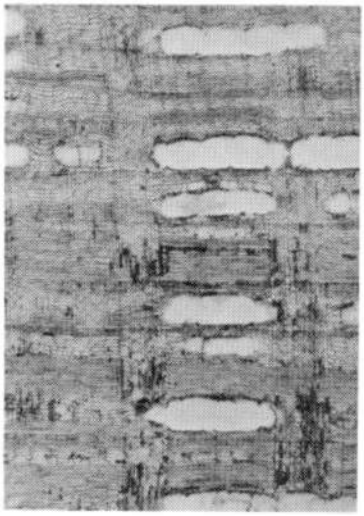
21B



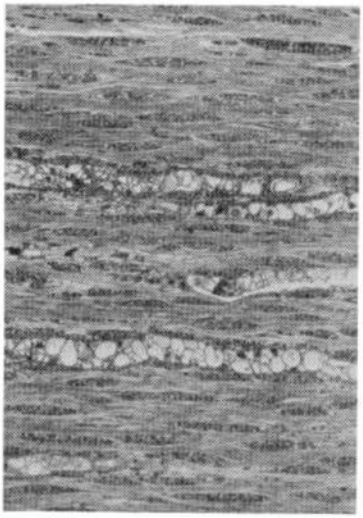
21C



19A

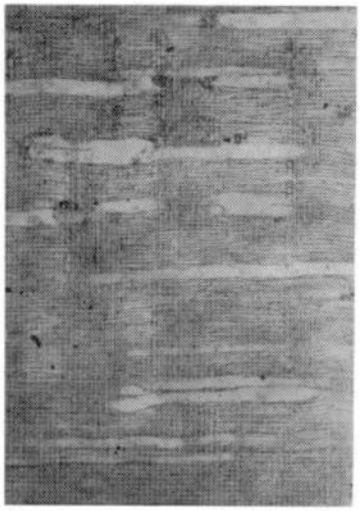


19B

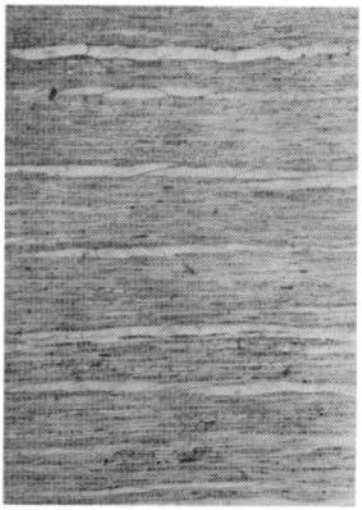


19C

18A



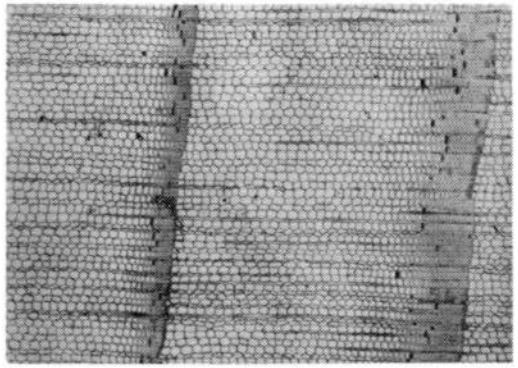
18B



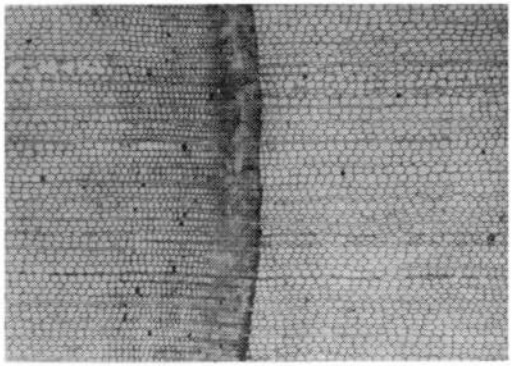
18C

谷地区出土木材顕微鏡写真 7

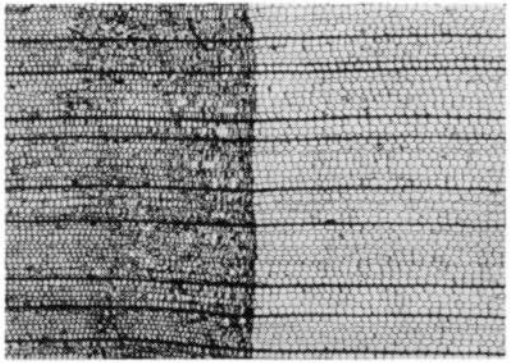
22A



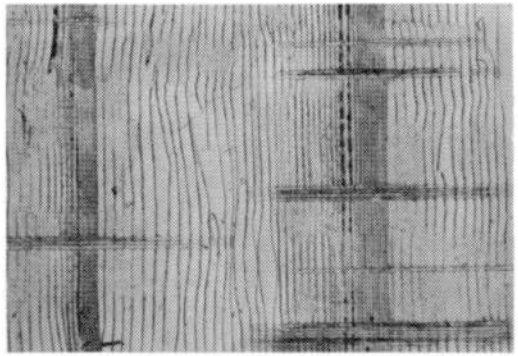
23A



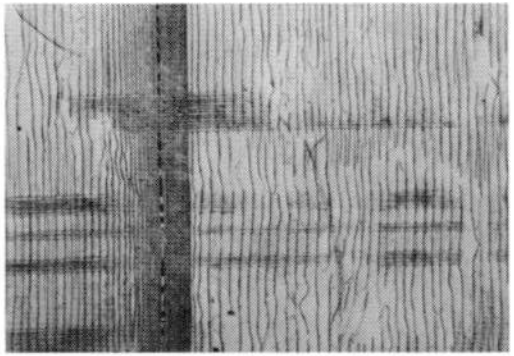
24A



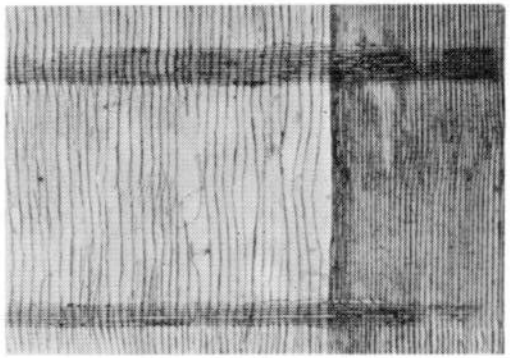
22B



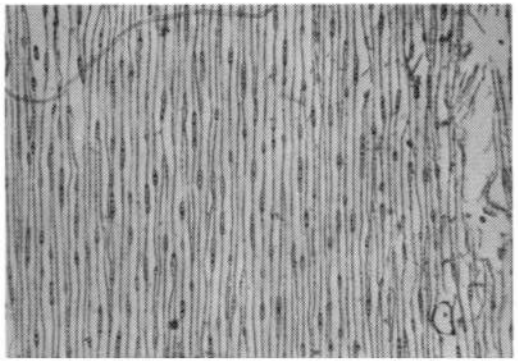
23B



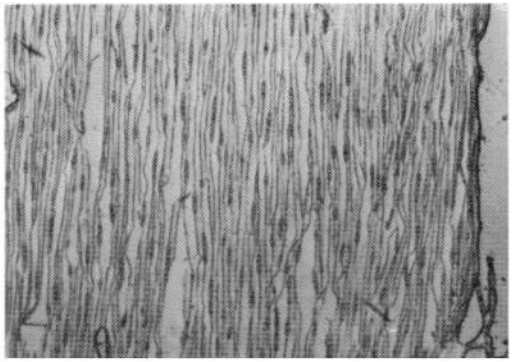
24B



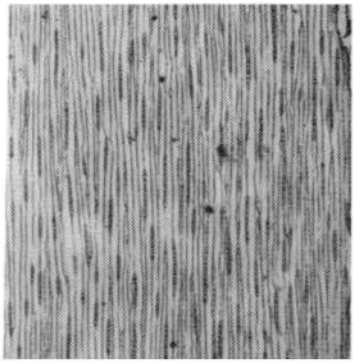
22C

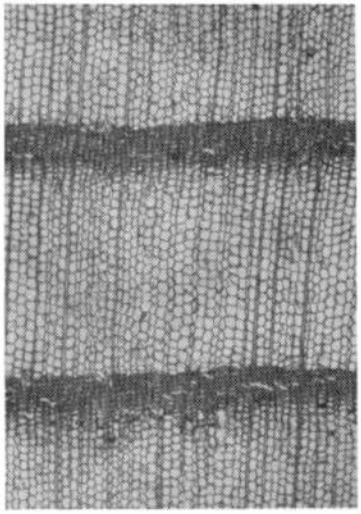


23C

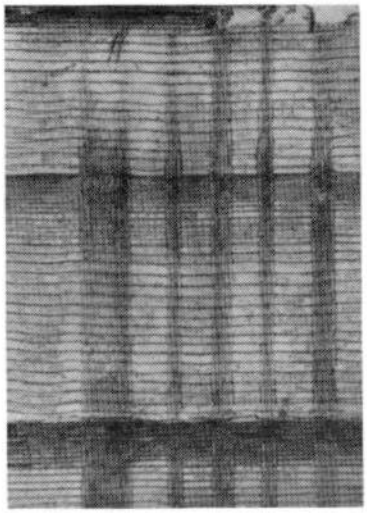


24C

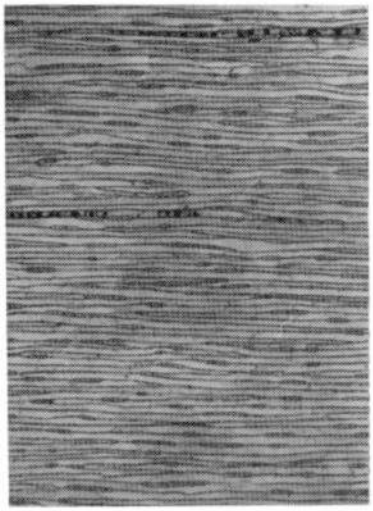




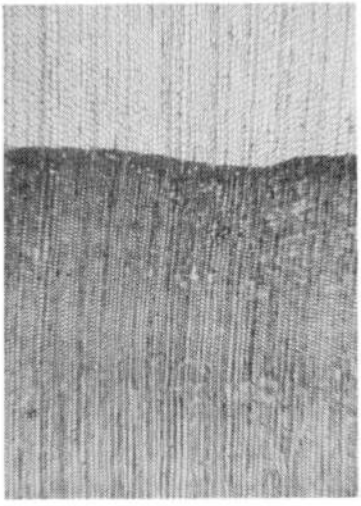
27A



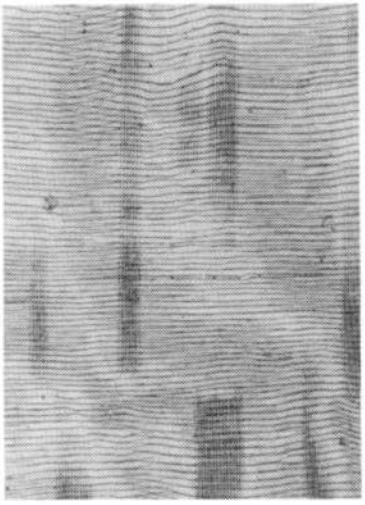
27B



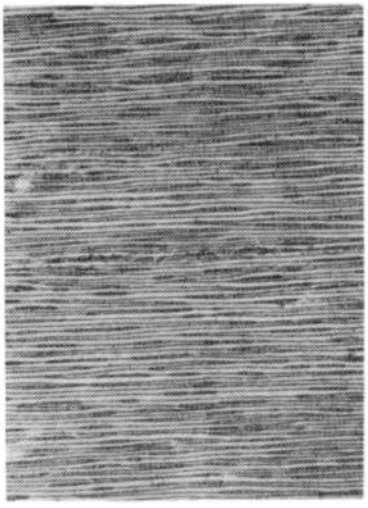
27C



26A

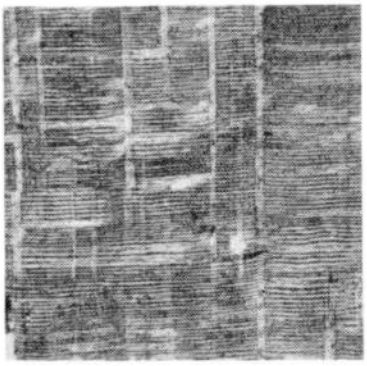


26B

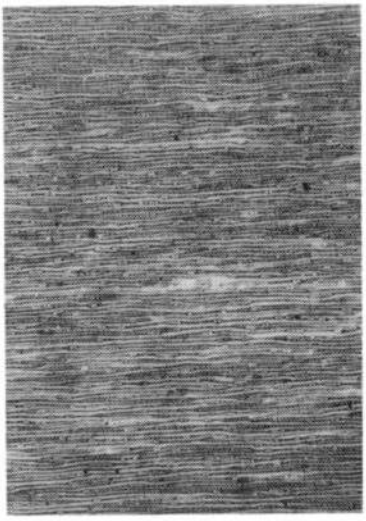


26C

25A



25B



25C

谷地区出土木材顕微鏡写真 9

山陽新幹線関係
埋蔵文化財調査報告

第 11 集

昭和54年3月31日

発　行　福岡県教育委員会
福岡市中央区西中洲6-29

印　刷　凸版印刷株式会社
福岡市中央区渡辺通2丁目1—82

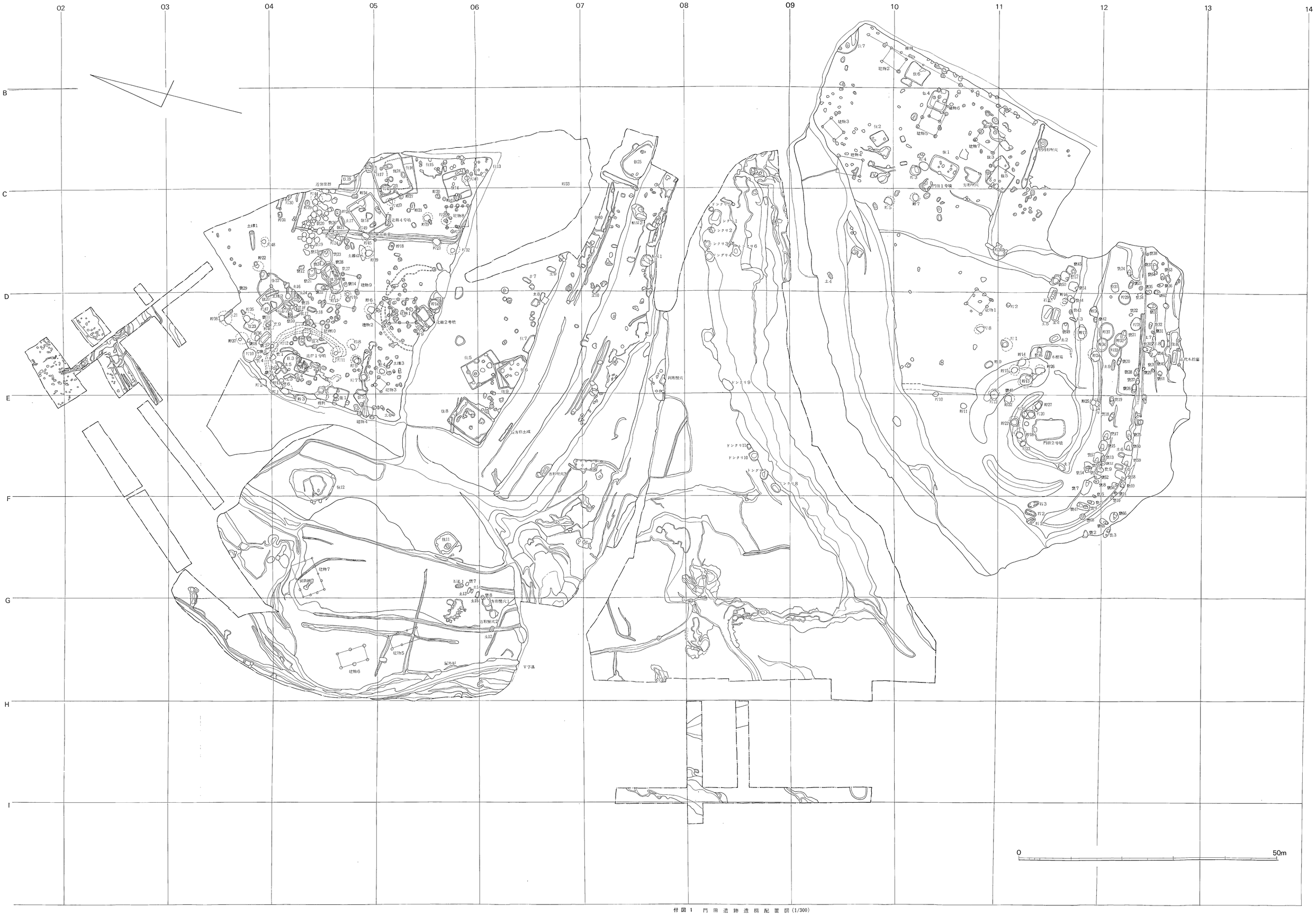
山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告

第 11 集

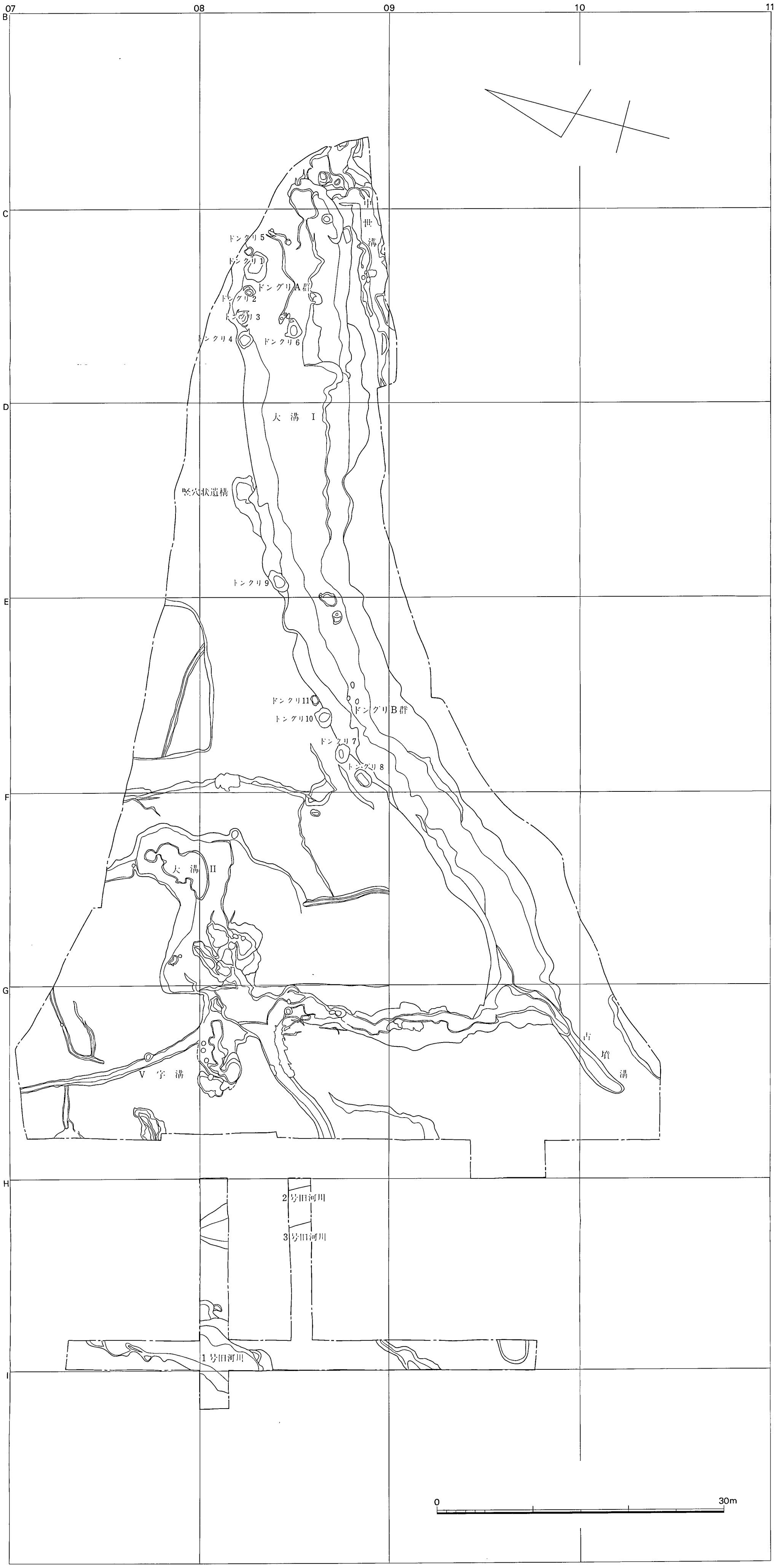
付　　図

1 9 7 9

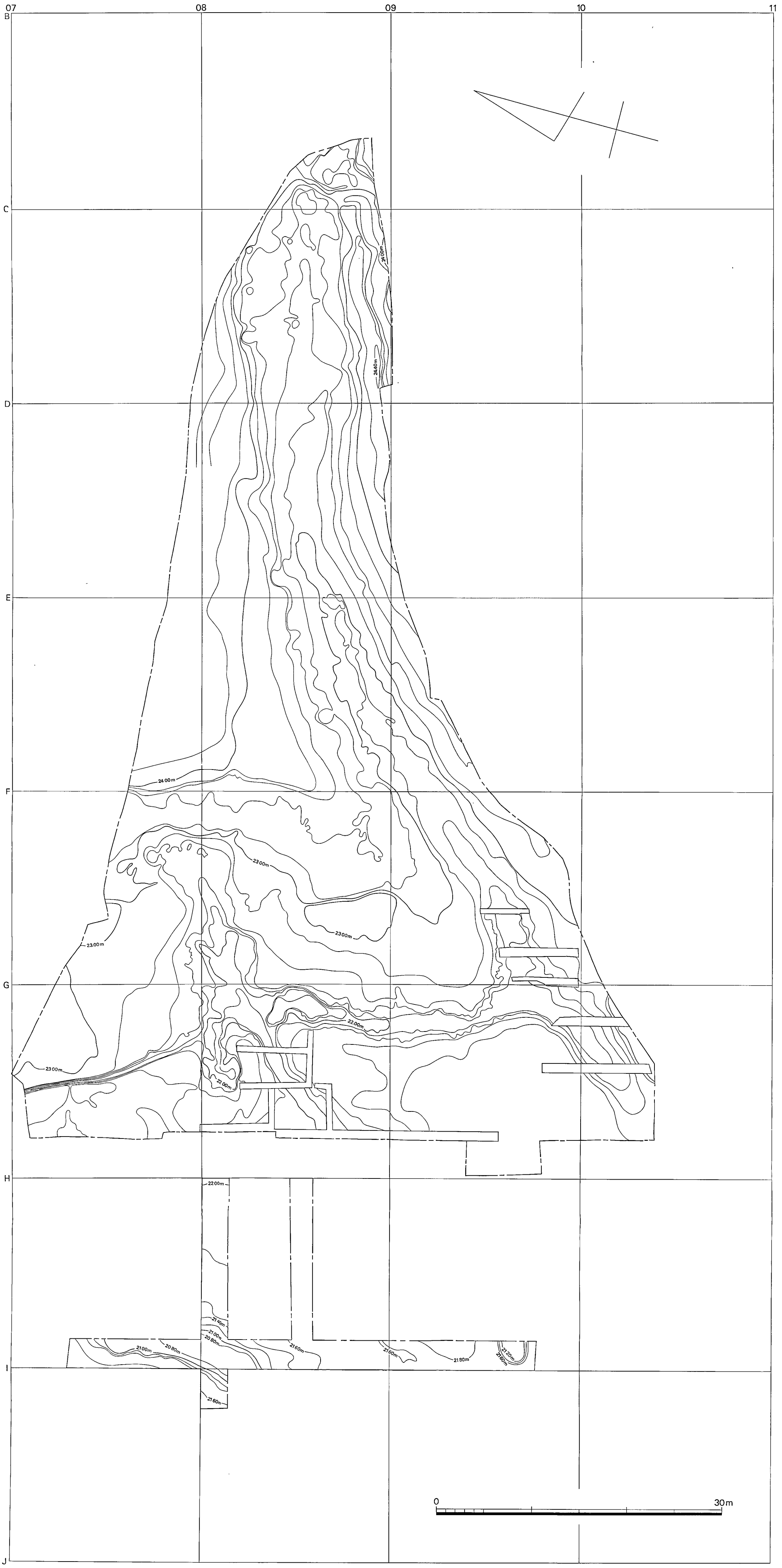
福 岡 県 教 育 委 員 会



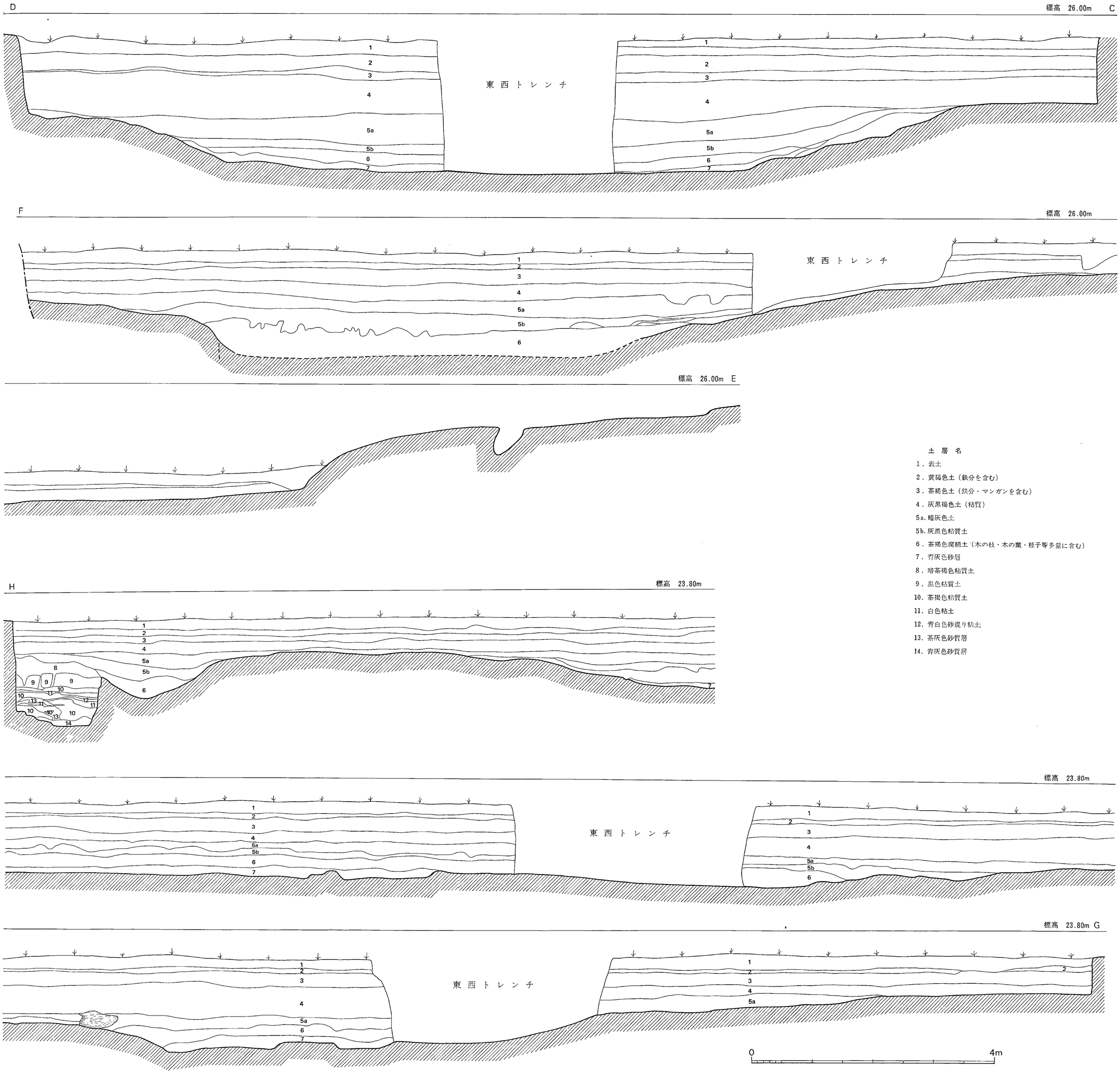
付図1　門田遺跡遺構配置図(1/300)



付図 2　門田遺跡谷地区遺構配置図（1／300）



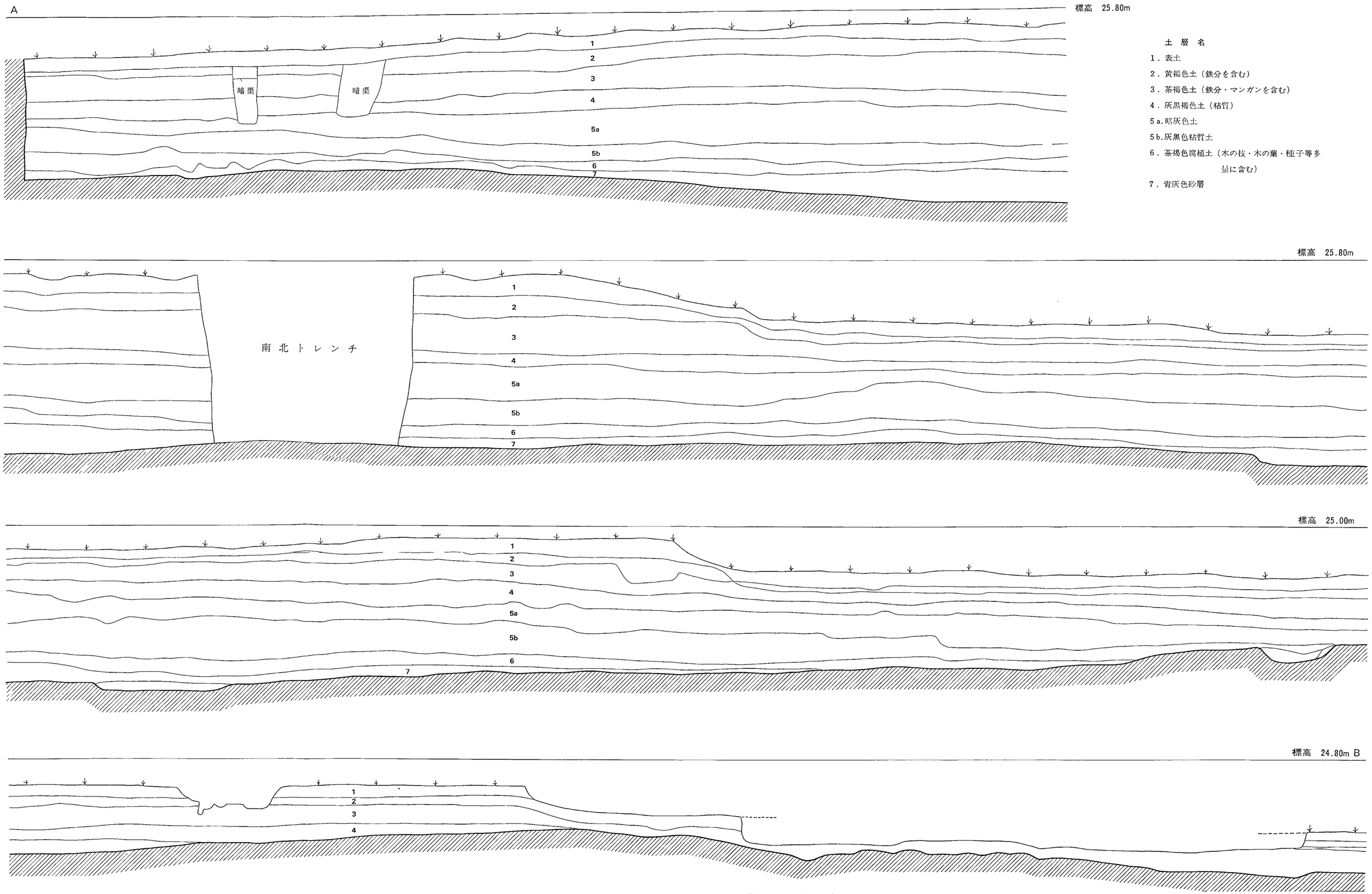
付図 3　門田遺跡谷地区旧地形図 (1/300)



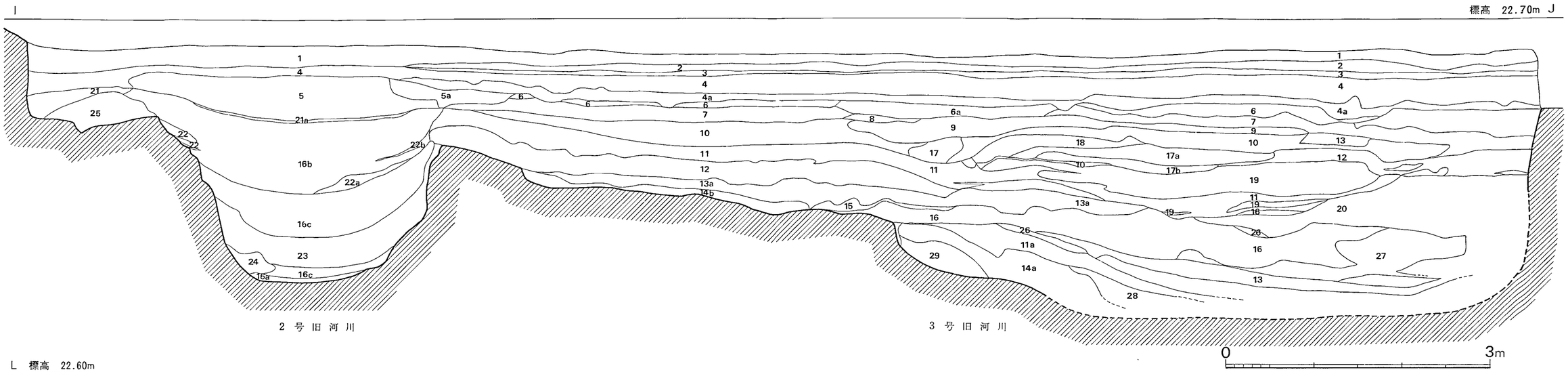
土層名

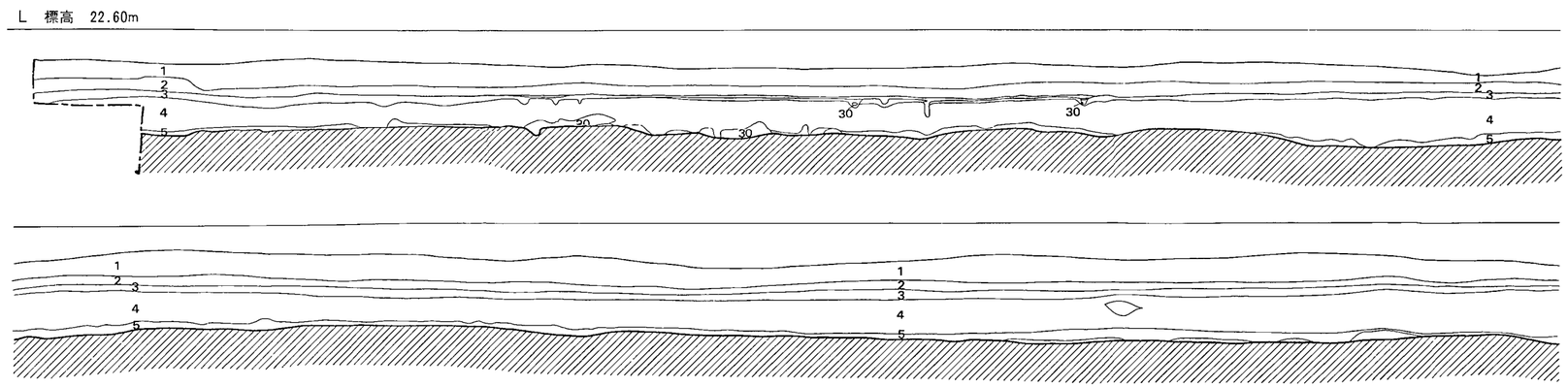
1．表土
2．黄褐色土（鉄分を含む）
3．茶褐色土（鉄分・マンガンを含む）
4．灰黒褐色土（粘質）
5a．暗灰色土
5b．灰黒色粘質土
6．茶褐色腐植土（木の枝・木の葉・種子等多量に含む）
7．青灰色砂層
8．暗茶褐色粘質土
9．黒色粘質土
10．茶褐色粘質土
11．白色粘土
12．青白色砂混り粘土
13．茶灰色砂質層
14．青灰色砂質層

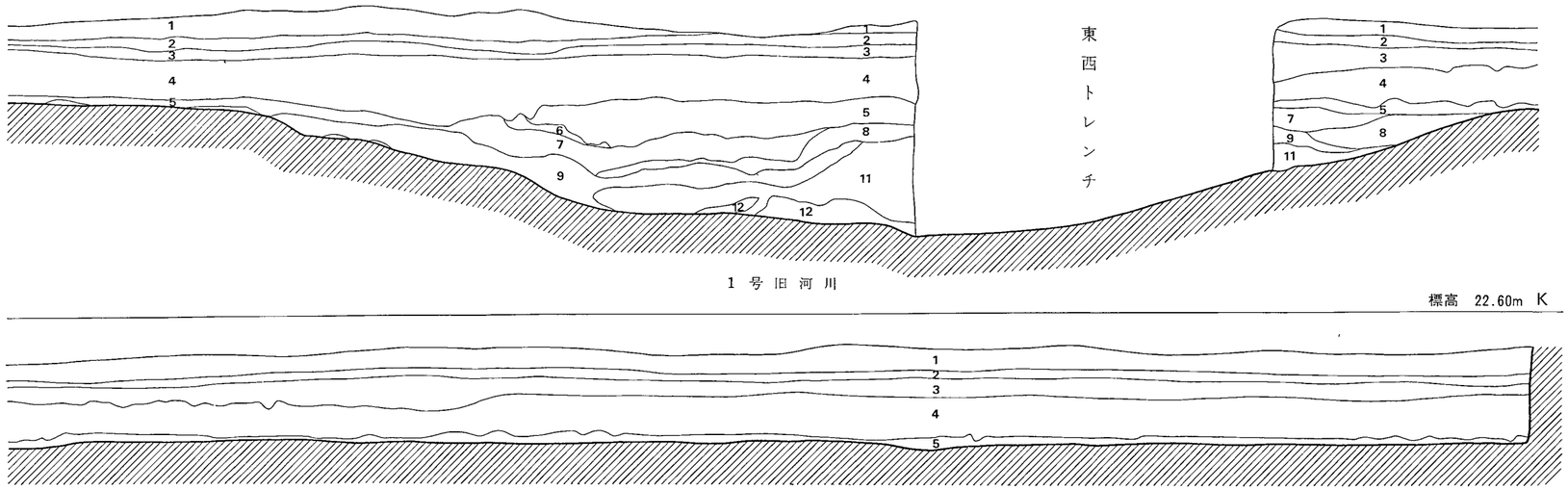
付図4　C9，E8～10，G8～10南北トレンチ西壁土層断面図（1／40）



付図5　C9区～F9区東西トレンチ土層断面図（1／40）







土 層 名

1．耕作土
2．茶褐色土（ジャリ・マンガン含む）
3．黄褐色土（鉄分を多量含む）
4．茶褐色土（鉄分・マンガン含む）
4a．暗茶褐色土（鉄分・マンガン含む）
} 漸移的
5．灰茶褐色砂
5a．灰茶褐色砂（植物の腐植物を含む）
6．灰青色粘質砂（粒子細かい）
6a．灰青色粘質砂（ジャリをかなり含む）
7．黒色粘質土
8．暗灰茶褐色土
9．灰色砂
10．黄茶褐色粘質土
11．暗茶褐色粘質土（植物性の腐植物を多量に含む＝バフン層）
11a．暗茶褐色粘質土（植物腐植土）
12．青灰色粘質土
12a．青灰色粘質土ブロック
13．茶褐色粘質土（植物性腐植土）
13a．茶褐色粘質土（植物の腐植物をかなり含む）
14．暗灰色砂
14a．暗灰色砂（木の根を含む）
14b．暗灰色砂（ジャリを多量に含む）
15．暗茶褐色土（植物性の腐植物を多量含む）
16．灰白色砂（ジャリ）
16a．灰白色砂（ジャリ・黒色粘質土・鉄分）
16b．灰白色砂（粒子が大きい）
16c．灰白色砂（細粒子）
17．茶褐色砂（ジャリ）
17a．茶褐色砂（ジャリ・灰青色粘土塊をかなり含む）
17b．茶褐色砂（ジャリの粒子か細かい）
18．暗茶褐色砂（ジャリ）
19．灰褐色砂
20．暗茶褐色腐植土
21．暗灰色粘質土
21a．暗灰色粘質土（砂まじり）
22．黒色土
22a．黒色土（砂まじり）
22b．黒色土（腐植土）
23．黒色粘質腐植土（植物性の腐植土・木を含む）
24．灰白色粘質土
25．灰白色土
26．灰青色粘質土
27．暗灰色粘質腐植土
28．暗灰青色砂
29．黄色粘土まじり黒色砂
30．砂

付図 6　H 9 区東西トレンチ南壁，H 10 区南北トレンチ西壁土層断面図（1／40）